ギリギリ爆発　－血液型マニュアル男のヤンキー伝記－

餓龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギリギリ爆発　－血液型マニュアル男のヤンキー伝記－

【Ｎコード】
Ｎ９９２０Ｉ

【作者名】
餓龍

【あらすじ】
「床屋と人の命、どっちが大事だと思ってんの？　バカ！！」

オレは強引にユイに献血に連れて行かれた。
それがオレの運命を変える出来事だったとは、その時は思いもしなかった・・・・・。

第1話　A型で何が悪い

毎日が憂鬱だ。

なぜかって？

だって、オレの親友のテルが東京に引っ越してしまったもんで、ゴタゴタに巻き込まれそうな予感がビンビンだからだ。

テルはオレの通う『私立　武蔵高等学校』の同じクラスの生徒だった。

喧嘩が強いヤンキーで、女にモテる男だった。

チャラチャラとベルトにチェーンやら何やら付けていて、髪はいつもワックスでクールにキメたセミロング。

軽い茶髪が入っていて、眉毛はキリッと細かった。

硬派で特定の彼女を作らなかったので、テルは沢山の女から告白されていた。

目が獣のように鋭かったが、笑うと垂れ目になる所なんかが女にモテる要因だったようだ。

テルが中学時代、学校を仕切っていたワルだったなんて知らず、オレは入学して間もなく、些細な事でテルと喧嘩をした。

その時、互角に渡り合ったあと、なぜか友情が芽生え、オレたちはつるむようになったってワケだ。

特に強くもなく弱くもなく、いたって普通だと思っていたオレだったが、テルとつるむようになってからは妙に強くなった気がした。

オレとテルの2人は、入学して1ヶ月ほどで1年を占めた。

高学年のヤンキーとは、テルが上手く付き合っていたので、オレは何の不自由もなく毎日を有意義に過ごしていた。

オレに逆らう奴は誰一人としていない、とても平和な毎日だったんだ。

しか～～～し!!

その時は突然やって来た。

1年の終業式、テルの口から思わぬ一言が・・・・・

「オレ、学校辞めてミュージシャンになっからよ・・・」

「マジ？　はっはっは。オマエ、ベースしか弾けなかっただろぉ～？」

「バカ。ベースが弾けりゃ～、何でも弾けんだよ。オレは一流の歌手を目指すって決めたんだよ！！」

「どんな歌、唄うんだよ」

「愛の唄だよ！！」

「オマエがか？　似合わねぇ～なぁ～～。ははは・・・」

「オレは自分の夢を追い掛けて生きるんだ。歌手は、子供の頃からの夢だったからな・・・」

「お、親には言ったのかよ？！」

「ああ。昨日、親父と殴り合いをしたよ・・・」

「だから顔を腫らしてたのかよ。・・・で、親は？」

「オマエがやりたきゃやれってよ。半ば諦め気味に言われたよ。学校は今日、辞めた。さっそく明日、東京に行くつもりだ。親戚のおばちゃんの家に住み込んで、バイトしながらミュージシャンを目指すぜ！！」

「マ、マジかよ・・・・・」

マジだった。

次の日テルは、荷物をまとめてオレの家に来た。

春休み初日の朝、グ～グ～寝ていると、突然オレの耳に聞きなれた声が入ってきた。

「じゃ、オレ、行くからよ・・・」

「・・・ってめ、何勝手に人の家に上がりこんでんだよっ!!」

「オマエの母ちゃんにはちゃんと許可もらったって・・・」

「そういう問題かよ。・・・ったく、ビビッたなぁ～～～」

「コレ、オマエにやるよ・・・」

テルは自分の荷物から、整髪料に黒い皮ジャン、エロ本などを出してオレにくれた。

「ホントに行くんだな・・・」

「ああ。楽しい一年間だったぜ、アリガトな、ジオン・・・」

「テル・・・・・」

「2年になっても、ウチのクラスがナメられねぇ～よぉ～に、オマエがちゃんと守るんだぞ。頑張れよ!!」

「分かってるって・・・」

「じゃ～な・・・」

「ああ・・・・・」

テルは背中を向けながら手を振ると、ベースを背中に背負って部屋を出て行った。

さすがO型だ。

羨ましい行動力だ。

A型のオレには、とてもあれほどの行動力はない。

春休みはダラダラと過ごした。

思えばテルとしかつるんでなかったもんで、オレには休みに遊ぶような友達はいなかった。

2年になってもクラスは変わらない。

でも、クラスの連中は、みんなオレに気を使うヤツらばかりで、テルのように何でも気軽に話せる仲間は1人もいない。

彼女でもいれば春休みも楽しいんだろうが、恋人を作るなんて、奥手なオレにはとてもムリだ。

出掛けるにしても、今まではテルと一緒だったから恐いモンはなかったが、一人になるとそうはいかない。

今までテルのお陰で強くいれたって事に、つくづく思い知らされた。

オレは、1人では何も出来ない、臆病な男だったんだ・・・・・。

買い物に、駅前にも行けないなんて・・・・・。

学校にも行きたくない。

今までテルを恐れて大人しくしていた他のクラスの猛者たちが、ここぞとばかりに動き出すはずだ。

まず、オレが狙われる。

オレのクラスは潰され、テルに変わって新たな政権が誕生するだろう。

憂鬱だ。

せっかくの春休みだってのに、憂鬱だ。

登校日の事を考えると急に気持ち悪くなり、その度にゲェ～ゲェ～した。

初日は出来るだけ目立たないように、いつものトンガリ頭をやめ、前髪を下ろしていったらどうだろうか？

そうだ！！

いっそ開き直って、シャバ憎として生きていこう。

そうと決まれば、このツンツンヘアーもやめて、いっそ真ん中ワケのサラサラヘアーにしようかな。

床屋に行こう！！

オレは支度をして久方ぶりに外に出た。

間もなく、何者かに声を掛けられた。

「ジオン！！」

ビクッ

オレは睨みつけるように後ろを振り向いた。

「何よ、恐い顔で睨まないでよ！！」

「何だよ、ユイかよ・・・」

オレに声を掛けてきたのは幼馴染みの白鳥ユイだ。

何の因果か幼稚園からずっと同じクラス。

声はハスキーなのだが、背は低めで目がクリッと二重まぶたで髪が長く、何気にカワイイ女だ。

ただ、典型的なB型の為、こいつは扱いにくい。

・・・と、言うより、こいつには敵わない。

表面的には大人しくておしとやかに見えなくもないが、オレには凶悪な魔獣のような態度でいつも噛み付いてくる。

なんでオレにだけそんなにおっかないのだろうか？

学校の制服以外のユイの私服を見るのは久しぶりだ。

黒い小さな革ジャンはパンクファッション好きのユイのお気に入りアイテムだ。

黒いミニスカートは、ヒップにパニエでボリュームがついている。

黒いタイツにゴツめのエンジニアブーツ。

苗字は白鳥で育ちのいいルックスのくせに、外見はクールなヤンキー気取りか?!

しっかし、パンクスタイルが妙に似合いやがるゼ。

ユイのくせに。

何か悔しいな・・・。

「テル君学校辞めたんだってね」

「ああ。東京に行ったよ。ミュージシャン目指すんだってよ・・・」

「テル君らしいね。そうそう、所でアンタさ、これからどこ行くつもりだったの？」

「床屋・・・」

「あっそ。その前に、ちょっとだけ付き合いなさいよ！！」

「どこにだよ？」

「献血！！」

「はあ？」

・・・ったく、B型の行動は読めない。

何を考えてんだ、コイツは・・・。

「何でまた？」

「献血は大事なのよ？！　私たちの血が、誰かの役に立つの！！

私の親戚のコが、この間救急車で運ばれた時、血が不足してて困っ

たって話しを聞いてね、それから私の家族はみんな献血に行ったの。
私は今から行く所。アンタも暇なら来なさいよ！！」

「いや、オレは床屋に・・・」

「床屋と人の命、どっちが大事だと思ってんの？　バカ！！」

オレは強引にユイに献血に連れて行かれた。

それがオレの運命を変える出来事だったとは、その時は思いもしなかった・・・・・。

第2話　たまには根性見せますか

人はこんなに簡単に変われるモンだとは思わなかった。

今まで16年間生きてきて、こんなに清々しい日は初めてだ。

世の中のみんなに言って回りたいくらいだ。

オレは今日から新たなオレだ！

オレは生まれ変わったんだ！！

オレは、今日からオレ様だぁぁぁ～～～！！！

ユイに強引に連れられて、オレは駅前のとあるビルに入った。

献血ルームに入ると、40代後半の看護婦さんのようなおばさんにユイは連れていかれた。

「はあ～～～っ・・・」

ベンチでオレは、大きな溜め息をついた。

何で献血なんかしなきゃいけねぇ～～んだよ。

親にもらった大事な血を、何で抜かなきゃなんねぇ～～んだよ。

そもそも人間の体は自然治癒能力ってモンが働いていて、怪我しても再生するんだ。

例えば擦りむいても肌は元通りに戻るし、骨折しても骨はくっ付く。

事故なんかで指がちぎれてしまっても、空気に触れないように脇腹とかに手を入れとけば、トカゲの尻尾みたいに再生するって話だ。

風邪を引けば熱を出したり眠気を誘ったりして体は治癒へ向かうし、病気だって何だって、病院の先生も薬も人の自然治癒への手助けでしかない。

そんな偉大な人間の体に入っている血液ってモンを、ボランティアっつう単純な理由で抜いてしまっていいモンなのだろうか？

「亀鶴さん」

オレは看護婦さんのような人に呼ばれた。

献血なんて生まれてはじめての経験だ。

メッチャ緊張する。

オレはベッドに横になると、左腕を引っ張られた。

「緊張しなくていいですからね」

ぐわあああ！！

お見通しか？！

看護婦のようなおばさんの胸には、ネームが付いている。

『松本トメ子』。

トメ子はオレの額の汗をタオルで拭った。

くっそ～～～、なんてこった！！

大の男が献血ごときで冷や汗をかいちまうとは・・・・・。

「あら？　何これ？！」

トメ子はオレの左腕の根性焼きを見て、目を丸くしている。

１つや２つなら目立つものでもないが、さすがに１０コ以上の根性焼きは目立つ。

中学の時にやったヤツで、入れてから２年以上は経つが、両腕には

今でもクッキリと火傷の跡が残っていた。

根性焼きを入れた理由は・・・

色々あるが、思い出したくもない苦い経験が根底にあるのは間違いない。

今は思い出したくない。

それに、コレにはオレなりに正当な理由があり、人から何と言われようが関係ない。

「これは相当な火傷よ！　一体どうしたの？」

「まあ・・・。タバコの火を・・・」

「・・・押し付けただけでこんなにならないはずよ？！」

「まあ、１本吸い続けて根性焼きぃ～みたいな・・・」

「タバコの火って、吸ってる時の温度は７００度よ？！　馬っ鹿ねぇ～～～」

トメ子は呆れながらオレの左腕に注射を刺した。

「痛っ！！」

「痛くないっ！！」

何の合図もなく突然針を刺されたので、声を出してしまったオレに対し、トメ子は冷たく言い放つ。

みるみるオレの左腕に刺さった注射針から、大事な大事な真っ赤な血が抜かれていった。

あうぅ～～～！！

これから４００ｍｌも抜かれるのかぁ・・・・・。

「うふふ。やってるわネ」

「あっれぇ～？　ユイ、もう終わったの？」

「アタシ２５０ｍｌだモン」

「へ？　オ、オレ、４００ｍｌだけど・・・」

「あはは。風呂上り、倒れないように気をつけてねぇ～」

な、何笑ってやがる！！

他人事だと思って・・・。

オレも２５０ｍｌにしとけば良かった・・・・・。

「アンタ、血液型何型だっけ？」

「Ａだけど。ユイはＢだよな」

「アタシの家族はみんなＢよ。お父さんもお母さんも姉貴も・・・」

献血を終えるとオレたちは、飲み放題の自販機の前のベンチに腰掛け、しばらくジッとしていた。

ジュースが無料で飲めるのは嬉しいが、さんざんな日だったのは確かだ。

今度出掛ける時は、ユイに見つからないようにスクーターで出掛けよう・・・・。

「ハイ、コレ献血カードよ。またヨロシクね」

松本トメ子は笑顔でオレたちにカードを手渡した。

２度と来るかっ！！

「アレ？　アンタＯ型？　さっきＡとか言ってなかった？！」

「はあ？　何言って・・・・・・って、うおおお？！！」

マジかョ・・・?!

何でこのカードにO型って書いてあるんだ?

名前は合ってる。

オレだ。

「あのぉ〜、コレ、間違ってますけどぉ〜」

オレはトメ子を呼び止めて、献血カードの記入ミスを指摘した。

「え?　それはないはずよ。あなたはO型ですよ」

トメ子は馬鹿げた事を言っている。

そんなはずはない。

オレは間違いなくA型だ。

「嘘ですって!!　オレはA型ですって!!」

オレが強い口調でトメ子の過失を非難すると、トメ子は「先生〜」と叫びながら血相を変えて走っていった。

すぐに奥の部屋から３０代ほどの男の院長が登場した。

「亀鶴さん、君は間違いなくＯ型ですよ」

真顔の院長が、またしても馬鹿げた事を・・・・・。

オレが・・・

Ｏ型?!

オレは気が遠のくような不思議な感覚をおぼえた。

目の前が真っ白になる。

最初に頭に浮かんだのは、両親の顔だった。

今までオレのホントの両親だと思っていたのに・・・。

第3話　オレの心人知らず

「アンタ、今まで間違って憶えてたの？」

「親父はＢ型、母ちゃんはＡ型、妹はＡＢ型。オレはＡ型のはず・・・」

「確かにＢとＡの子供でＯっておかしいね・・・」

「母子手帳にＡ型って書いてあった。母ちゃんもオレが小さい頃からオレはＡ型だって言ってたし、今までだって血液型占いとか全部Ａを見てた・・・・・」

「アンタが血液型マニアってのはアタシも知ってたわ。小学校の頃とか血液型の本とか見て、誰と誰が相性が良いとか、そんな事やってたもんね」

「信じらんねーよ・・・・・」

「気の毒に・・・。アタシもアンタの気持ち、察するわ。気を落とさないで。これからは、たまに相談に乗ってあげたりするからさ。例えアンタが拾われてきた子でも、親は親なんだから。生みの親じゃなくても、アンタを今まで育ててくれた親が本当の親なんだと思う・・・」

「・・・・やっぱ、橋の下に捨てられてたのかな?オレ」

「そんなの関係ないって。過ぎた過去より大事なのは未来よ。アンタ、男なんだから、しっかりしなきゃダメよ。そんな事くらいで気を落とさないっ！！」

・・・・いや、ユイには他人事だから、そんな事くらいに思うだろうけど、オレには一大事だって！

今まで自分の親だと思ってた人たちが、実は他人だったんだぞ？！

・・・まてよ。

親父とはよく似てる、顔が似てるとか声が似てるとか言われてたから、アイツが実の親なのは間違いないよな。

・・・って事は、母ちゃんか？

あの母ちゃんが実の親じゃないってのか？！

・・・でも、腹を痛めてオレを産んだとか何だとかよく言ってたよな。

あれは嘘か？

あの2人はオレをだましてたのか？！

・・・・そういえば、親父と似てる似てる言ってたのって、田舎のばあちゃんだったっけ。

もしかすると、オレや両親を気遣って、そんな事を言ってたのかもな。

俗に、一緒に何年も生活をしてると、顔も性格も似てくるって言うしな。

親父も母ちゃんも、ずっとオレをだましてたとしたら、一体どんな気持ちだったんだろうか。

いつか、こんな風にバレる日がくる事は覚悟していたはずだ。

オレも子供じゃないから、産みの親より育ての親が真の親なんだって事くらい分かっている。

さっきは、今まで自分の親だと思ってた人たちが、実は他人だったんだぞ?!・・・なんて思ったけど、今まで育ててくれた人たちを他人なんて呼ぶ事が、どんなにおこがましい事かなんて事くらい、こんな低レベルなオレでも知ってる。

・・・でも、整理が出来ないんだ、頭の中で!

いきなりすぎるんだよ!!

・・・どっちにしろ、早く家に帰って真相を確かめねば!!

「じゃーな」

「ジオン!　もう少し休んでないとダメよっ!」

「うるせー。それどころじゃねぇーんだよっ！！」

オレは忠告を無視してその場を飛び出した。

家に着くまで頭の中は真っ白だった。

小学校の低学年の頃、たまたま本屋で見かけた血液型の本にハマったのがキッカケで、それからオレは、人を血液型で判断するようになった。

A型とB型、O型とAB型、４つに分類される性格は、非常に面白く興味深かった。

そんな血液型マニュアルにどっぷり浸かってしまったオレは、次第にクラスのみんなから、血液型マニアとさえ言われるようになった。

クラス全員の血液型のみならず、TVの芸能人やスポーツ選手など、有名人たちの血液型も把握した。

もちろん自分はA型だと思っていたので、A型の特徴や性格は全て把握してきた。

人に聞かれた時も、必ずA型と答えていたし、占いを見る時もA型しか見なかった。

オレは自分で几帳面で真面目で繊細なA型だと思っていたのに・・・。

実は単純で大雑把なO型だったなんて！

有り得ねぇ～～～～～！！

「ただいまぁ～」

「おかえり～」

妹のシノブが台所で料理をしていた。

「オレの母子手帳どこだ？」

「知らないよ、そんなの。お母さんが帰ってきたら聞いてみれば？」

「一刻を争うんだよ。オレはここの子じゃねぇ～んだ！！」

「何バカな事言ってんのよ」

「血が繋がってねぇ～んだ。オレはO型なんだよ」

「あれ？　Aじゃないの？」

「今、献血してきて判明したんだ。オレはA型じゃなく、間違いなくO型だ！！」

「うそぉ～？　だって、今までそんな事聞いた事なかったよ」

「隠してたんだ。オレが取り乱すと思って気を遣ってたんだよ！！」

「そんな・・・。信じらんない・・・」

「オレだって信じらんねぇ～よ！！」

第4話　ネガを吹っ飛ばせ

オレは両親が仕事から帰ってくるまで、ずっと布団の中にもぐって考え込んでいた。

嘘だろ？

有り得ねぇ～！

オレが親父や母ちゃんの子じゃねぇ～ってか？

オレはO型だってか？！

ちきしょ～、頭が割れそうだ！！

やがて両親も帰ってきて、食卓の時間が訪れた。

「お兄ちゃん、ゴハンだよ」

「今行くよ・・・」

茶の間に着くと、母親がテーブルに母子手帳を置いて座っていた。

「話はシノブから聞いたよ、ジオン。何があったかは知らないけど、アンタは私たちの子に間違いないのは確かよ！！」

母ちゃん、慰めのつもりか？

ホラ、見てみろって。

母子手帳にはキチンとA型って書いてある。

手書きで。

「手書き～？　コレって誰、書いたの？」

「私よ」

「ちゃ、ちゃんと調べてもらったの？」

「ううん。実はね、私がA型だったから、アンタもてっきりA型かと思って私が勝手に書いてただけだったの・・・」

マジ？

母ちゃんが自分の想像で勝手に書き込んだってか？

それをオレは今まで鵜呑みにしてただけ？

「オマエ、原付の免許取った時、市役所で戸籍謄本取ったろ？　アレにちゃんと書いてあったはずだぞ、長男って。養子なら養子って書いてあるはずだろ」

親父がもっともな事を言っている。

「お兄ちゃん、私、調べたんだけど、A型とB型からはちゃんとO型生まれるから！！」

な、何ィ～～～？！

マジかぁ～～～～？！

「しっかりしてよお兄ちゃん。血液型マニアなんだから、それくらい覚えておけばぁ～」

「あ、あうち・・・」

「・・・と、言うワケだ。くだらない話はそのくらいにして、ゴハンだ、ゴハン」

親父がオレの大問題をあっさりと締めくくった。

「いただきま～す」

みんな夕食を食べ始めた。

オレは間違いなく両親の子供。

血液型はＡ型じゃなくて・・・Ｏ型。

・・・そうか、オレ、Ｏ型か。

親父がＢ、母ちゃんがＡ、妹がＡＢ・・・オレがＯ。

なんて家族だ！！

夕食を終え部屋に戻り、オレは一息ついた。

そうか、オレはＯ型か。

今まで何だったんだ？！

１０年以上、Ａ型だと思い込んでたのに、バカじゃねぇ～の？　オレ。

オレは几帳面でも繊細でも悩みやすい性格でもなく、単純で大雑把で大胆な性格だったとは・・・。

ずっとテルがうらやましかった。

アイツの行動力、性格、Ｏ型っていいなぁ～って思ってた。

・・・けど、オレもアイツと同じＯ型だったなんて。

生まれ変わった気分だ。

何か、今までのネガな世界が急にポジな世界に変わった気がする。

献血のお陰か？

古い血を抜いて、新しくできた血がめぐっているからか？

もう今までのオレじゃないんだ！

些細なことで憂鬱な気分にならなくても、クヨクヨと将来を悲観的に考えなくてもいいんだ！

明るい未来は、オレ様の手の中にあるっ！！

オレは、血液型が実はＡ型ではなく、Ｏ型だったという単純な事で、大きく自分の世界が変わった気がした。

それは言うまでもなく、オレの人生を大きく左右した出来事だったに違いない。

些細なことで憂鬱な気分になることも、クヨクヨと将来を悲観的に考えることも、Ａ型だからとか、Ｏ型だからとか関係なく、実際は誰にでもある事だ。

だが、そんな人間にとって必要のないネガティブな気持ちを、自分の心次第で吹っ飛ばす事が出来るんだって事をオレは学んだ気がした。

人は変われるんだ！！

第5話　押してダメなら引いてみろ

登校日前日、オレはある事件をきっかけに、超大物と呼ばれるあの男と知り合った。

しかし、この時点ではその男が、あんな有名人だとは思いもしなかった。

午前中、いつものように行きつけの本屋へ原チャリで出掛けた時の事である。

家から数キロ走った田舎道の側溝に、黒い車がハマっていた。

左後部座席側のタイヤが側溝にハマり、抜け出せなくなっているようだ。

大方ハンドル操作を誤って落ちてしまったのだろう。

気付かないフリして通り過ぎようとしたが、運転手がオレを見つけるやいなや、外に出て両手を広げ、通せんぼをした。

サングラスをした丸刈りの体格のいいオッサンだ。

「あんちゃん、いい所に止まった。ちょっとばかし手伝ってくれや」

いや、アンタが止めたんだろ?!・・・と言いたかったが、強面のオッサンの顔を見るとそんな事はとても言えなかった。

黒いシャツに黒いスラックス、金のネックレスとブレスレッドにグラサン・・・。

ヤクザ?

こいつは逃げるワケにはいかねぇ〜か・・・。

「はあ、まぁ、いいっすけど。この辺、人通り少ないっすからね・・・」

オレはしょうがなく原チャリを降りると、オッサンの言う通り車を押してやる事にした。

「いいか〜? 発進すっから力いっぱい押してくれや〜!」

「いいっすよ〜。どうぞ〜!!」

ブルン ブルルン キュルルルル

ガタン

タイヤは空回りを続けている。

「はぁ、はぁ。つ、疲れたっす。やっぱ、オレ一人の力じゃダメみたいっす・・・」

「くっそぉ～、今、ケータイ止められてて使えねぇ～んだよ。仲間も呼べねぇ～し。どうすっかな・・・」

「オレもケータイ、今、持ってないっす。ほんじゃ、この辺で・・・」

「オイ、待てよ。もうちっと手伝ってくれや」

「オレも忙しいんすよ」

「急がねぇ～と警察来ちまう。オレ、不免許なんだよ」

不免許？

無免許運転の事か？

・・・それにしても、この人、相当なワルだ。

「誰の車なんすか？」

「兄貴の車、黙って乗ってきちまったんだよ。早めに帰んねぇ～と・・・」

その時、オレの頭に浮かんだ兄貴のイメージは、まさにどっかのヤクザの組長だった。

「そりゃ～大変っす！！」

このオッサン殺されるよ、このままじゃ。

しっかし、ど～すっかな?!

前に進まないんだろ?

押してもダメなら引いてみろってよく言うよな・・・。

「あの～、一度バックしてみて下さいよ」

「何ィ～?!　バックだとぉ～?」

「いや、試しにやってみてもいいんじゃないかと・・・」

「わ、分かった。やってみるわ」

オッサンは車に乗り込むと、ギアをバックにチェンジしてアクセルを踏んだ。

ブルン　ブルルン

ギャルルルルル

ガガガガガッ

ストン

すると、あっけなく車は脱出できた。

・・・ただ、抜ける時にそこの電柱に車が接触していたような気がしたのは、やっぱり気のせいだろうか？

「すっげぇ～！　あんちゃん、マジすげぇ～よ！！」

オッサンはよっぽど嬉しかったのか、車から飛び出すと、オレに向かって飛んできた。

バチン

「痛ってぇ～」

オッサンはサングラスを外すと、ニコニコしながらオレの肩を、すっごい力で叩いた。

顔に似合わずつぶらな瞳が印象的だ。

「じゃ、オレはこれで・・・」

「名前は？　高校生だろ？　どこの人？」

「名乗るほどでも・・・」

オレはその場を早く立ち去りたく、急いで原チャリに跨った。

「またなぁ～」

オッサンは運転席の窓から顔を出すと、オレに大きく手を振った。

ブルン

ブロロロロロ

排気ガスを沢山出した黒い車は、そのまま直進した。

同じ方向なので、オレの原チャリもしばらくオッサンの車の後ろを走る。

しばらくすると、黒い車のハザードランプが少しだけ点滅し、オッサンは左に曲がっていった。

その時、車の左後部座席のドアがボロボロになっているのが視界に入ったが、オレは見て見ぬフリをしたのは言うまでもない。

第6話　一般的にB型はシャイ

いよいよもって、私立武蔵高等学校2年の始業式当日。

茶色のブレザーの胸の部分に縫い付けられた高校のシンボルマーク、鷲のマークをオレは、1年の時、妹のシノブに刺繍をほどこさせ、孔雀の形に作り直させている。

そんな、オレ特製胸章は、あまりの自然な作りの為、今まで誰も気付いていない。

つまり、自然なオレ様流のオシャレってワケだ。

髪型は今までのツンツンヘアーを進化させ、より見栄えと長持ち度に磨きをかけた。

オレのイメージでは、ピストンズのミド&メンシーのミドヘアーってトコロだ。

ベルトには5000円のシルバーのバックル。

シルバーアイテムが個人的に好きではあるが、学校にはリングは付けては行かない。

万が一、喧嘩になった時、自分の手を傷めたくないのと、相手の顔に怪我をさせたくないからだ。

オレは環境ならぬ、不良にも優しい男。

靴下にもこだわりを持っていて、その日の気分によって色を変えている。

今日は青。

多少緊張気味のオレのブルーな気分も、今日の天気のように青く晴れ渡ってほしいという願いも込めている。

さて、容姿も整ったことだし、さっそく出発だ。

オレの住んでる街は石田町といって、県内では一番人口の多い町だ。

だからこそ不良の数も、他の町と比べると圧倒的に多い。

中でもオレの通う武蔵高校は、不良学生が多い事で有名だ。

町の大人たちからすこぶる評判が悪いのは、駅のホームの地べたに座り込んでいる電車通の女子たちや、下校時の不良たちが、そこら辺のコンビニなどでたむろっている姿を見てなのだろうと思われる。

「おはよっ」

ユイだ。

ユイとは、たま〜にこうして登校時間が一緒になる。

女子の制服は、他の高校より比較的目立つ。
規制はないが、流行なのか、みんなミニスカートだ。
茶色のベストに白いブラウス、スカートはイエローとブルーのチェック柄。
ソックスが自由なのはウチの高校だけなので、個性が出る。
そこが他の高校と比べて女子の制服が際立つ要因と思われる。
ユイはいつものようにブラックニーソでクールに決めている。

「よっ」

「またアンタと同じクラスなんて、最っ悪・・・」

「悪かったな。オレが決めたワケじゃねぇ〜んだ。諦めろ」

「幼稚園、小学校、中学校、そんで高校まで、ず〜っと同じクラスなんて、超ありえない！！」

「それはオレのセリフだっつーの！」

「ところでアンタさ、あの後どうなったの？」

あの後？

献血の件か？

ユイってヤツは、話を突然変えるのが得意だ。

これもＢ型の特徴だな。

人の話は聞いてるようで意外と聞いてねぇ～し。

「献血の件だろ？」

「そう、それ！」

「結局ウチの両親は、血の繋がった実の親だったよ」

「やっぱねぇ～！！　アタシもそうだと思ってたんだぁ～」

マジかョ？！

あの話を徹底的に膨らましたのはオマエだぞ！

さんざん人をビビらせといて。

これだからＢ型の女は・・・・・

「じゃ、私はこれで。失礼しました」

ユイが突然、素っ気無く他人のような態度になったかと思うと、スタスタと早足で先に行ってしまった。

はあ？

何なんだ、アイツ。

ワケ分かんねぇ～。

オレと一緒に登校すんのが恥ずかしいのか？

アイツって、そんな照れ屋だとは思わなかったけど・・・。

ま、一般的にＢ型っつーのはシャイだけどな。

でも、別にオレらの周りには、冷やかすようなヤツはいねーし、たとえ女と一緒に歩いてるからといって、オレを冷やかすようなヤツがいるとは思えねぇ～けど・・・・。

「よお、朝から熱いねぇー」

うしろから声が！！

オレはすぐにうしろを振り向いた。

「ヒュ～ヒュ～、熱い熱いっ！！」

「ヒャハハハハ」

となりのクラスのヤツらだ。

オレの真後ろに、5、6・・・7人いる。

こいつら川田中出身の長山義廣を筆頭に、いつも7人でつるんでるタチの悪い不良共だ。

どいつとも面識はなく、話はした事がない。

それなのにこうしてオレに話し掛けてくるって事は、やっぱり高1の時、学年を仕切っていたテルがいなくなった事で、トップの交代を狙っている証拠なのだろう。

オレが長山の方を見ると、みんな知らんぷりしてそっぽを向いている。

熱いねぇ～とか言われてたのは、オレの単なる気のせいなのか？

何もオレなんて無視していれば、自然にトップになれるかもしれねぇ～のになぁ、コイツも。

川中出身の長山っつったら、喧嘩が強いかどうかは分かんねーけど、中学の頃から名前が売れてたワルだ。

仮に、オレをおちょくっていたとしよう。

だからといって、ここで喧嘩をするのはどうだ？

７ＶＳ１では分が悪いぞ。

どう見たって勝てねぇ～。

ここは、カッコ悪いが、ムシだ、ムシ！！

「はっはっは、長山さん、やっぱコイツはテルがいなけりゃ何もできねぇ～ただのクズなんすよ」

長山のとなりにいる背の低いヒョウタンみたいな顔をしている男が言った。

うしろを見たが、長山たちは相変わらずこっちを見ようとせず、オレの方は全く見ようとしない。

でも、今、明らかにテルの名前を出したよな・・・。

周りにはオレの他には誰もいないし・・・。

ナメられてるよな、オレ。

第7話　海のような心の広さで

オレはチンケな罵声など気にしない。

プライドがないのか？

・・・なんて人に思われるかもしれないが、オレは自分を愛してくれた人に刃を向けられない限り、プライドは傷つかない。

自分なんか何言われても構わないが、守るべきものがある時は命を賭けて闘う。

それが真の漢だと、オレは思っている。

それにオレはO型だ！

海のように心が広いんだ！！

オレは、うしろの長山たちと距離を置こうと早足になった。

「オイ、何シカトこいてんだョ」

「いいよ、やめとけ。弱ぇ～のおちょくっても、しょ～がねぇ～だろ」

「そっすねぇ～。ヒャハハハハ」

誰かがオレに向かって何かを言ってるが、聞こえない聞こえない。

オレは逃げるように学校に向かった。

このルートは長山たちの登校ルートでもあるのか。

明日から時間、変えようかな・・・・・。

学校に辿り着くと、校門の前にヤバイオーラを身にまとった3人の男がいた。

ポケットに手を入れて、何か話しながら門の前に立っている。

誰かを待ち伏せしているようにも見えるが、まさかオレ?

あいつらとは一度も話をした事がないし、まさかな・・・。

真ん中にいるのが1年の時、メチャクチャ名前を売った高城伸之。

タカノブと呼ばれ、喧嘩がやけに強いという噂のアブねーヤツだ。

何でも地元の暴走族『ギャラクシー』の一員らしい。

鷹のような鋭い目つきをしていて、幾多もの修羅場を潜ってきただろうという雰囲気をいつも漂わせている。

その右隣にいるのが、オレと同じ石田中学校出身の貴船将隆。

同じクラスにはなった事がなかったので、中学の時はあまり気にはしてなかったが、子供の頃から悪ガキだったのは確かだ。

貴船の喧嘩のエピソードはひとつも聞いた事がなかったが、事実上、アイツが石中のトップだったと言える。

オレは中学の時の戦国時代はすでに隠居中だったので、アイツがどうやって石中のトップになったかなんてのは知る由もなかった。

そして、タカノブの左隣にいるのが芒みちる。

3人の中ではコイツが一番アブないという噂だ。

とにかく限度を知らないヤツで、こいつの兄貴がヤクザという噂もある。

猛者揃いの山田中学校のトップだったそうだ。

そんな3人が同じクラスっていうんだから、たまったもんじゃない。

しかもこいつら、なぜか仲間意識が強く、いつも一緒にいる。

どうしてこんなヤバイ3人をさておき、テルが学年をシメていられたのかは分からない。

なぜいつもテルとツルんでいながら、そんな事も知らなかったのかって人に言われそうだが、そんなの、こんな修羅な世界はみんなテルに任せてたからに決まってる。

一生懸命動き回っていたテルの横で、自分は何もせず平和にのさばっていたんだ。

テルの横にいれば、誰も逆らうヤツがいなかったので、大いに威張り散らした。

そんなツケが、今頃になって回ってきたのだろうか？

ああ、見てるよ、オレのこと見てる。

テルがいなくなった今、2年が始まったのを機に、戦国時代に突入するんだろうな。

ああ、オレの平和な高校ライフもここまでだ。

1年の時、テルの隣でデカイ顔して目立ってたから、どうせオレが最初に狙われるんだろうな・・・。

オレは覚悟を決めて3人の前を通った。

もちろん遠くを見つめ、出来る限り存在感を消すようつとめた。

すると、アラ不思議、なぜか通り過ぎることが出来た。

おそるおそる後ろを見ると・・・

長山たちとタカノブたちが睨み合っている。

アレ？

オレはいいの？

そ、そうか、アイツら、まずは潰し合いをして、最後にオレを狙う腹づもりだ。

いつかあの中の誰かとやる時がくるのか？

誰とやる事になっても今のオレじゃやべーな。

ま、その時は勝ち抜いてオレまで辿り着いた健闘を称え、トップの称号を無料で譲るつもりだ。

第8話　あいうえお順ですか

２－５

総勢４０名。

男２０、女２０のクラス。

１年からメンバーは変わっていない。

ウチのクラスは進学を目指している奴らが集中している、比較的マジメな生徒で溢れている。

その為、入学当初は他のクラスにナメられていたが、テルがメキメキと頭角を現し、１ヶ月後には学年でウチのクラスがトップに立った。

・・・と、言うよりテルがトップに立ったのだが。

主にオレはテルとだけツルんでいたので、クラスのヤツらには対等に話が出来るヤツはいない。

みんなオレに気を遣ったり、怖がったりしている。

幼馴染のユイは別格なのだが・・・。

席はうしろ、一番うしろだった。

窓際ではあるが、窓から見える景色は中庭と3年の校舎だけ。

チラッと青空が見えるが、ＵＦＯを探すには見える範囲が狭い。

ウチのクラスのメンバーは変わらないが、担任の先生が変わるらしい。

1年の時の担任は、定年退職で学校を去ったので、新しい担任が誰になるかに注目が集まっていたが、みんなの大方の予想を裏切り、担任は全く新しい新任教師らしい。

メガネの体育教師で、大学上がりのマジメな若造だって話だ。

一言で言えば、余裕!!

これで平和なクラス決定だ。

ま、その分、他のクラスからはナメられやすくなったんだが、そこはこれからどうカバーしていくか考えねばなるまい。

オレが腕を組んで自分の席で考え事をしていると・・・

「何でよりにもよってアンタがとなりの席なのよ!!」

ユイが額に青筋をたてながらオレの隣の席に座った。

席は男女がとなり同士、男子の列、女子の列と並んでいる。

怒っているユイの脇には、ユイと仲の良い佐倉愛がいる。

小学校の時好きだったアーティストに似ているもんで、オレは佐倉に少しだけホレているが、もちろんそんな事は口が裂けても誰にも言えない。

佐倉は髪に少しだけゆるいパーマをかけていて、比較的長いロングヘアー。

たまに髪を結うのだが、それがオレにはたまらなく魅力的に映る。

血液型は本人いわく不明だが、オレの予想ではA型だ。

周りの女子とのコミュニケーションのとり方の上手さを見ていると、A型としか思えない。

「ジオン君、私の席ここだから。ユイ共々、ヨロシクね」

ユイの前の席に座った佐倉が、可愛らしい声で笑顔を見せた。

一番うしろのオレの席のとなりがユイ、その前が佐倉らしい。

オレの前って誰なんだ?

今回は苗字のあいうえお順で席が決められてるっぽいな。

オレの苗字の頭は「か」だから、その前・・・

「やあ、ヨロシク、ジオン」

大仏のような優しい笑顔で、メガネの沖田良雄がオレの前の席に座った。

沖田、通称オッキーは、小柄で小太り、短髪の茶髪で、マジメなヤツが多いこのクラスでは、唯一不良に近い存在だ。

本人は不良気取りでいるが、外見が妙に弱そうなので、みんなオッキーを不良だと認めていないのが実情だ。

テルの事を妙に慕っていて、いわばテルの舎弟のような存在だった。

テルの手下だったので、必然的にオレの手下でもあったワケだ。

ま、優しいオレは、特にコイツをパシリに遣ったりはしなかったが・・・。

「ジオン、これからどーする?」

オッキーがオレに聞いてきた。

おかしいな・・・。

コイツは1年の時、オレをさん付けで「ジオンさん」と呼んでいたはずだが・・・・・。

テルがいなくなったから、コイツもオレを潰すチャンスだとでも？

まさかな・・・

「何だよ。これからどーするって、何をだよ？」

「このクラスだよ」

「はあ？　このクラス？」

「誰がシメるかだよ」

コ、コイツ・・・

テルがいなくなった今、自動的にオレがこのクラスのボスになるんじゃないの？

みんなそう思ってんじゃないの？

・・・まてよ。

何もオレがこのクラスをシメなくても、他のヤツにやらせれば、喧嘩に巻き込まれても被害を最小限に抑えられる。

これはチャンスか？！

誰かにボスの座を譲るチャンス到来だ！

ラッキー！！

なんてオレはついてるんだ！！

「みんなで決めたんだけど、このクラスはジオンにまとめてもらいてぇ～んだ」

オッキーが神妙な顔つきで言った。

「おいおいおいおい、何を弱気な事を言ってんだよ。オマエが仕切れよ。オレがオマエのうしろで支えてやっから」

「何言ってんだよ、ジオン。このクラスはあのテルのせいで、今、一番狙われてんだゼ！！」

ま、またコイツ、オレを呼び捨てに！

この間まで、さん付けだったはずだぞ！！

ガラーッ

突然入口が開いた。

誰だっ？！

第9話　きづるって誰？

「オラ、オメェら、自分の席につけっ！！」

ゲエッ！

リッキーだっ！！

物凄い威圧的なオーラを身に纏い、赤いジャージ姿で片手に竹刀を持ったこの男、年齢５３才、未婚、血液型Ａ型。

リーゼントで体格はプロレスラー並、教育指導の暴力教師、岡村力也だ。

２階から不良を突き落としたとか、ビンタで耳の鼓膜を破ったとか、ＰＴＡも鋭い眼光一つで黙らせるとか、数々の恐ろしい伝説を持ち、どんな不良もこの学校ではコイツには勝てない。

な、なぜ、リッキーがここに？！

「きりーつ、れー、ちゃくせーき！　出欠をとる！！　あおい」

あれ～？

何？　何？！　ど～いうこと～～？？

何でコイツが出欠とってんの～？！

ど～して担任みたいな事してんのぉ～？？

「あお～い」

「ふぁい！！」

リッキーの大声で、いつもは小声の青井が、聞いた事もないくらいのデカイ声をあげた。

「声が小さ～い！　廊下に立ってろぉ～！！」

「ひい」

「早く行けぇ～！！」

「ふぁ、ふぁいっ」

あ、青井が廊下に立たされた。

あ、あの声の大きさでダメなのか？！

一体どんだけデカイ声で返事しなきゃならねぇ～んだヨ、オイ。

「メガネの新任教師って話じゃなかったっけ？」

オレは小声で隣のユイに聞いた。

「・・・・・・・・・」

ユイが物凄く怖い目でオレを睨んでいる。

ハイハイ・・・

話し掛けるなってワケね。

「きづるー！！」

「ちょ、ちょっとアンタ、呼ばれてるわヨ？！」

ユイが謎めいた言葉をオレに吐いた。

「きづるーーー！！」

はい？！

ゲッ！

リッキーがオレの事を見てる。

何？

何があったの？！

何かクラスのヤツら、みんなオレの方見てるし。

ツカツカツカ

な、何？

リッキーがオレの方に向かって歩いてきている。

何かしたのか、オレ？

「オマエ、確かテルの側近だな。金魚のフンのように、いつもテルにくっついて歩いてた・・・」

はあ？

側近？

金魚のフン？！

オレとテルは対等なんだよ！

オレがテルの下みてぇに見るんじゃねぇーよ・・・・・

「はっはっはっは、オイ、金魚のフン。オマエは耳が聞こえんのか?!」

「ははは・・・」

「クス　クス・・・」

クラスの中から笑い声が聞こえる。

「オイ、きづる、耳鼻科行くか?　一人じゃ行けないんなら、東京からテル呼んでやるぞ?!」

リッキーはわざと笑いをとるかのように、クラスを見渡しながら言った。

「ははははは」

クラスの連中の笑い声が大きくなってきた。

「なぁ、みんな知ってるか?　テルは歌手を目指して東京に行ったんだぞ。あんなクソ田舎モンが歌手になれると思うか?　今頃、泣きながら東京で畑耕してんじゃねぇ〜のかぁ〜?」

「ははははは」

クラスの連中、調子に乗りやがって・・・。

ちきしょう、リッキーめ、オレの事だけならともかく、テルの夢をバカにするのは許せねぇ!!

全国の畑耕してる方々をもバカにしやがって・・・。

ガタン

オレは立ち上がった。

もちろん無意識だ。

頭の中は真っ白。

クラスの中は、一斉に静寂が訪れた。

誰かのゴクンと生唾を呑む音が聞こえる。

「何だ、その反抗的な目は・・・」

オレは目の前のリッキーにガンを飛ばしている。

もちろん、頭の中は・・・

「ちょっと、やめなさいよ、ジオン」

ユイが小声でオレに忠告したが、今のオレの耳には届かない。

第１０話　パソコンフリーズ

「今日からオレがここのクラスの担任だ。ビシバシ指導するからな、覚悟しとけよ、きづる」

「オレはかめつるだよ！！　担任だったら、よく覚えとけ」

「分かった、座れ」

ツカツカツカ

リッキーは教壇まで戻った。

「浅野～」

「はい」

何もなかったかのようにリッキーは出欠をとりはじめた。

ガタン

オレは席に座り直した。

・・・・・・・・・・

今、何があったんだ?!

オレの脳みそというハードディスクが異音を立てて止まってしまった。

もちろん目の前の光景というオレの画面はフリーズしていて、どんだけマウスを動かしてもポインタは動こうとしない。

再起動しなければ・・・

少々時間は掛かったが、出欠が終わる頃にはオレの意識はだいぶ回復していた。

「今日はこれから始業式だ。時間になったら椅子を持って体育館に行くよーに。1年の時の委員長、うまく誘導しろよ」

それだけ言うと、リッキーは去っていった。

「ちょっとアンタ〜、何やってんのヨ!!」

ユイが険しい顔でオレに言うが、そのセリフをオレも自分に言ってやりたい。

「ジオン、いきなり飛ばしてくれるなぁ〜。あのリッキーが担任だったってのも驚きだけど、あのリッキーといきなり揉めるってのは

凄いよ。テルなきあと、このクラスを引っ張って行こうっていう、ジオンの気迫みたいなのを感じたよ」

オッキー、あのな・・・、あれは事故であってだな・・・・・

「でも、リッキーって不気味よね。ジオン君があそこまで反抗してるのに、ビクともしないんだモン。普通の先生だったらビビっちゃうし、生徒が突っかかってきたって言って、大問題にしちゃうよね」

佐倉・・・

佐倉もオレとリッキーの闘いを見てたんだよな・・・

カッコ良かったかナ、オレ？

さっきのバトルで、今までの佐倉のオレに対するイメージも、だいぶ変わっただろう。

オレはやる時はやる男なのさ・・・・・

でも、佐倉の言う通り、リッキーのあの引きのよさは不気味だ。

リッキーはＡ型。

Ａ型は揉め事があった場合、尾を引きずるタイプだから、ああ見えて気にしてるはずだ。

これからネチネチ攻撃されるのだろうか？

厄介なヤツを敵に回したかも・・・・・

「なぁ、素朴な疑問なんだが、オレってテルの金魚のフンみたいに見られてたの？　まさかそんな事ないよな？」

オレは一番気になる事を、ユイにストレートに聞いてみた。

「へ？　そんなのみんな思ってたよ。それがどーしたの？」

「はあ？　マジで？　さ、佐倉も？！」

「う、うん。いつもテル君のうしろをくっついて歩いてる人だなぁ～ってのは思ってたけど・・・」

「オッキーは？」

「アレ？　ジオンって、テルの舎弟だったんじゃないの？」

ガ～～～ン

オレの中で何かが崩れ落ちた。

今の今までオレはテルと対等だと思っていた。

ずっとテルが龍で、オレが孔雀、その龍と孔雀が学年全部をシメてると思ってた。

ちなみに何でオレが孔雀が好きかと言うと、あの色とりどりの輝き

だけじゃなく、孔雀ってのは蛇を食べるって話を聞いたことがあるからだ。

毒蛇すらいとわない姿勢に魅了された。

そんで制服の胸章には孔雀がほどこされているってワケだ。

それでいて、四聖獣の玄武、白虎、青龍、朱雀、その中の朱雀ってのは龍を食べる。

つまり、龍のテルも手を出せない朱雀ってのがオレってカンジだ。

なぜオレが虎じゃないのかって？

それはユイのせいなんだ。

1年の時、テルと四聖獣の話をしている時、ユイも混ざってきた。

そんで、誰がどれで、とかって話をしてる時、テルは真っ先に青龍を選び、ユイは白虎を選んだ。

本人曰く、『びゃっこ』は『しらとら』とも読めるので、そう読むと自分の苗字に似ているからだそうだ。

『しらとり』と『しらとら』・・・・・。

オレには何のこっちゃってカンジだが、ユイは白虎をその日から気に入り、何と胸章の刺繍を虎に変えた。

オレの胸章の孔雀を真似て刺繍を変えたようだ。

典型的なB型らしいマネっ子ぶりだ。

・・・・・しっかし、周りはオレを単なるテルの側近で、仕舞いにゃ舎弟だったと思ってたってか？

バッキャロー！

ざけんじゃねぇ～ぞ、クソヤロォー！！

オレはテルの舎弟でも何でもねぇ～～～！！！

どっちかって言うと、オレの方がテルより少しだけ強ぇし、立場は上だったんだ、本当は！

もう、拍子抜けだ・・・

ゼロスタートってワケね。

もう、いいよ・・・

こうなったらいっそ、オレはこのクラスのシャバ王になってやるか？

シャバ王に！！

そんなこんなで始業式も終わり、新学期がスタートした。

新任教師と噂されたメガネの若造は、結局、研修として今年いっぱいはウチのクラスの副担任を務めるらしい。

担任がリッキーなので、嵐の予感をビンビン感じる憂鬱な幕開けだ。

第１１話　味噌汁いらず

キーンコーン　カーンコーン

始業式を終え体育館から教室へ戻ると、クラスの色んな当番、役割などを決める面倒なホームルームが待っていた。

ま、あと1時間だけ耐えれば今日は午前中に帰れるからもう少しの辛抱だ。

運良く担任のリッキーは、急遽、教育指導で呼び出され、教室からいなくなった。

副担任のメガネの若造もリッキーについて行ったので、オレたちは自由の身となった。

教師の代わりに、１年の時の委員長、小倉夕香が黒板の前に立たされたが、こうなるともう、黙っているヤツは一人もいない。

ＡＢ型の小倉は1年の頃から積極的にクラスを統率しようと努力をしているようだが、何分周りに振り回されやすい性格の為、いつもクラスがまとまるのに時間が掛かっていた。

最初は私語をやめない男子を中心に、怒りをあらわにしていた小倉だったが、５分もしないうちに前の席の女子たちの雑談会にまざっている。

周りの状況を読み、みんなの空気に合わせるのが上手いＡＢ型だけに、小倉はこういう教師のいないホームルームには合わない委員長だといえる。

すっかり教室の中は、祭りのような賑わいを見せた。

「ねぇ、ユイ、最近カラオケでバイト始めたんだよね？」

佐倉がうしろを向いてユイと雑談を始めた。

「うん、先週からだけど、時給安いし仕事キツイからあんまり行きたくないのよねぇ～」

「へ～、カラオケのバイトって簡単そうに思えるけど、意外と大変なの？」

オッキーが調子こいてユイと佐倉の雑談にまざり始めた。

「レジ打ち、調理、接客、掃除、しまいにはマシンメンテよ。もう、仕事覚えるの大変なんだからぁ～」

「え～、調理もやるんだぁ～。専門の料理人とかいないのぉ～？」

佐倉が目をクリクリさせてユイに聞いた。

「私のトコは、店長かバイトのコが全部調理してるよ」

「ピザも？」

オッキーは、沢山ありそうなメニューの中から、唯一ピザを選んでユイに聞いた。

「ピザは冷凍。レンジでチンして終了だモン。簡単よ」

「あぁ～、チンチンかぁ～～～」

「・・・・・・・・・・・」

オッキー、バカだ。

あまりにも寒い空気を作ってしまった。

ユイと佐倉は目を合わせたまま口元を歪めている。

オッキー、そういうアホな下ネタオヤジギャグは、もっと会話が弾んでからにしろよ。

しょうがない、ここはオッキーを助けてやるか。

このままじゃ、オッキーがあまりにも可哀想だ。

「ところでオマエは何が作れるんだよ?!」

とても料理が得意そうには見えないユイに、オレは意地悪く質問してみた。

「牛丼とか・・・」

「ウソつくなよ!!」

「ホントよ」

「どうせレトルトなんだろ?!」

「それが本格的な牛丼なのよ。ちゃんと仕込みからやるのよ。タマネギ切って、肉も食べやすい大きさに切って・・・」

マジかよ?!

「ウッソ～?　大牛みたいに?!」

佐倉もかなり驚いている。

ちなみに佐倉の言う大牛というのは、全国にある有名チェーン店、大吉牛丼の事だ。

「大牛の店員って、いつも忙しそうだよな・・・・・」

オレは独り言のように呟いた。

「まぁ、調理以外は全部一人でやってるからね。昼時なんかはてんてこ舞いだろうね」

ユイがその光景を思い浮かべてるかのような顔で言った。

その時、オレはある出来事を思い出した。

一瞬間

「ぷぷぷっ」

思わず吹き出すオレ。

「何笑ってんだよ、ジオン。気持ち悪ィな・・・」

オッキーに即、ツッコまれた。

「おもしれ～話あるんだよ」

「何？　聞かせて」

ユイと佐倉が身を乗り出した。

「この前行ったんだよ、大牛。そしたら店員、すっげぇ～汗だくだったの。店に客もいっぱいいてさ。そんで、走り回ってる店員やっとつかまえて、大盛り注文しようとしたのさ。オレ、いつも、つゆだくにしてもらうからさ、そん時もつゆだくをお願いしようとしたワケ。店員が汗だくだくかきながら、ご注文お決まりですかって。オレ、店員に、すんません、牛丼大盛り、汗だくで・・・って、つい、言っちゃったんだよね・・・」

爆笑だ。

「そしたら、その店員、かしこまりましたって・・・」

さらに爆笑だ。

「オレも大牛でおもしろいエピソードあるぞ」

オッキーだ。

「ある日さ、注文する時、無意識でこう言った事あるんだよね、オレ。すみませ～ん、牛丼、並、大盛りで・・・・・」

「どっちだよ、みたいな？」

ユイは、ややウケだ。

「あっはっはっはっは」

佐倉は相変わらず涙目で笑っている。

「あと、つゆだくでって言おうとしたのを、間違ってつゆだけでって言ってしまった事もあるよ。牛丼大盛りつゆだけでって・・・・・」

さらにオッキーが追い討ちをかけた。

「タプタプのつゆだけ、キッツ〜イ」

これにはユイも大ウケだ。

「あっはっはっはっは」

佐倉はとうとう、かがみながら笑い出した。

牛丼、大盛り、汗だく。

牛丼、並、大盛り。

牛丼、大盛り、つゆだけ。

想像すると笑わずにはいられないぜ、コレ。

第１２話　仕事をしっかりこなすＡＢ型

オレたちがくだらない話で盛り上がっている頃、いつの間にか委員長の小倉は懸命に役員を決めていたらしく、それなりにホームルームは終了していた。

与えられた仕事をしっかりこなすＡＢ型の小倉は、ホント大したヤツだ。

あとはリッキーが帰ってくるまで適当に時間を潰してればいいようだ。

「ところでさ、佐倉はどんな歌唄うの？」

オッキーがオモシロイ質問を佐倉にぶつけた。

「まゆとか・・・」

佐倉の言うまゆとは、若者、特に女性に人気の高い歌姫、大崎まゆの事だ。

ま、妥当なトコだろう。

「他には？」

オレも佐倉に聞いてみた。

「う〜ん。トニーフェアリテールとか？」

トニーはゴシックロック中心の曲を歌う女性歌手だ。

ＴＶや雑誌には滅多に顔を出さないし、ライヴもやらないので、通好みとも言える。

実は、オレもトニーフェアリテールのファンだったりする。

「ｇａｎｇ　ｏｆ　ｈｏｏｌｉｇａｎｓとかｆｒｅｅ　ａｎｄ　ｅａｓｙとかサイコーだよなぁ〜」

オレは自分が良く聞く曲名をあげてみた。

「・・・・・・・・」

あれ？　佐倉の反応がない。

ま、まさか・・・

「私、ライト　オブ　ザ　スターしか知らないんだ」

佐倉は舌を出して照れ笑いしている。

ライト　オブ　ザ　スター。

確かにトニーのヒット曲はそれくらいしかない。

何か、知ったかぶりを装ってるみたいじゃない？　オレ。

佐倉は恥ずかしそうにしてるけど、オレの方が恥ずかしいような気がするのは、単なるオレの気のせいだろうか？

「ユイは歌上手いから、何でも唄えるよな」

オッキーがユイに話をふった。

これはオッキーがオレをフォローしてくれたのか？

何か恥ずかしいオレのフォローをしてくれたのか？

さっきの「チンチン」の時のオレのフォローの恩を返してくれたのか、オッキー？

「ホンっとに歌、上手だもんねぇ～、ユイは。将来、歌手になりなよ。絶対なれるよ、ユイなら」

「やめてよ、も～う」

ユイはオッキーと佐倉にホメられて、今にも高い所にのぼりそうな勢いだ。

それくらいにしとけよ。

B型はホメられると、どこまでものぼるぞ。

確かにユイの歌の上手さは半端じゃない。

去年の文化祭では、体育館を超満員にした学園ライヴのトリをつとめたバンドのヴォーカルがユイだった。

そんなユイがカラオケでバイトってのも、自然な流れだし、必然とも言える。

「なぁ、ジオン。今日、これから空いてるか？　ユイのバイト先のカラオケ行こうゼ。佐倉も一緒に行かねー？」

オッキーが意表をついた。

「うん、行く行く」

佐倉もノリノリだ。

「え～？！　アタシだけ働いてんの～？！　みんなズル～イ・・・・って言ってもアタシも仕事抜け出してちょこちょこ唄いに行くけどネ」

自分の歌だけ唄って、人の歌を聞かずに仕事に戻る。

さすがユイ。

それでこそB型だ。

「・・・でも、オレ、金あっかなぁ～？」

案の定、オレの財布の中には小銭しか入っていなかった。

しかも1円と5円。

「しゃ～ね～なぁ～。オレがオゴるよ、今日は・・・」

オッキー。

何ていいヤツなんだ。

こういう時のA型の気前の良さは見上げたモンだ。

「やったぁ～」

佐倉も今日はずいぶんとテンションが上がったようだ。

気分の浮き沈みが激しいA型だけに、最初から飛ばすとカラオケで失速するぞ、佐倉。

いつも一定のテンションを保つO型のオレと、一度上昇したら限界知らずのB型のユイの心配は無用だが・・・。

しかしオレもこの間までA型だったと思っていたが、こうして改めて血液型を分析すると、やっぱオレは昔からO型気質だったのかも

な。

ケチだし、いつもテンション一定だしな・・・。

しばらくすると、慌しく副担任のメガネの若造が帰ってきた。

どうやら今年の1年はイキがいいらしく、入学早々揉め事が多発しているらしい。

全く物騒な学校だ。

ま、お陰で口うるさいリッキーの顔を見ずに済んだからラッキーだ。

第１３話　B型はあらゆる事に要領がいい

学校が終わると、オレは寄り道せず真っ直ぐ家に帰った。

待ち合わせはユイのバイト先のカラオケに5時。

まさか、あの佐倉と学校以外で会えるなんて夢のようだ。

佐倉の事は、1年の初めの頃から気になっていたんだ。

でも、席も遠かったしきっかけもなく、話をする機会はロクになかった。

これからは席も近いし気軽に話せそうだ。

それに今日は・・・

これはチャンスか?!

告白なんてしちゃったりなんかして?!

い、いや、焦る必要はない。

これからチャンスはいくらでもあるはず。

ゆっくりじっくり時を待とう。

うまくいけば、もしかしたら、高嶺の花だと思っていた佐倉愛と、近い将来付き合えちゃったりなんかして・・・・・

家に着くなり、オレは風呂に入り、髪を洗った。

風呂から上がると、鏡の前での格闘が始まった。

どんな服がいいだろうか？

髪型は？

アクセサリーは？

そんなこんなであっと言う間に時間になった。

待ち合わせのカラオケに着くと、すでにオッキーと佐倉はカウンターのユイと雑談をしていた。

「おせーよ、ジオン」

オッキーは、子供の七五三のようなカッコウをしている。

カラオケに就職の面接みたいなカッコウで来るか、フツー。

お見合いでもすんのか？

「悪い、ヤボ用で役所行っててな・・・」

本当は髪型がうまくキマらなかっただけだったりするが、一応言い訳してみた。

「早く行こっ」

佐倉がニコニコ言った。

オッキーと比較するのも何だが、佐倉はいたってフツーのカッコウだ。

白い長Tシャツにジーンズ。

一見何でもない普通の格好のように見えるが、クロスハートのシルバーリングがクールなオシャレさを演出していた。

クロスハートは有名なシルバーアクセのブランドで、とにかく値段が高い。

お嬢さんに見えて、佐倉はハードロック系なのだろうか？

さりげなく左手の中指にクロスハートをつけ、ラフなカッコウで来る辺り、佐倉は意外とアクティブなんだな。

A型女性は比較的、ルイビとかティファとかそっちのブランドにいく傾向が強いと思ったけど・・・。

ビビアンとかプレゼントしたら喜ぶかも。

「それ、クロスハートだよね？　高かったろ？」

一番気になるトコロを佐倉に聞いてみた。

「これ？　去年、家族で行った観光地で買ったの。５００円くらいだったかな？　安かったよ」

オモチャの指輪かよっ！！

もういい、もういいよ。

ユイに連れられ、オレたちは２階の大部屋に案内された。

「へぇ～、いいのぉ～？　私たち３人でこんな大っきな部屋ぁ～」

佐倉は部屋を見渡して感激している。

「あ～、好きなドリンク選んでい～よ、サービスするから。その代わり食べ物は料金とられるからネ。あと、このメダルゲーム１０回分無料に設定しとくから、上手くメダルゲットできたら帰りに景品と交換忘れないようにネ」

ユイは随分とサービスしてくれているが、店側にはバレないのだろうか？

ま、そんなチンケな心配は、あらゆる事に要領がいいユイの場合、無用なのだが・・・・・

間もなく、ユイはドリンクと大量のポテトを持ってきた。

ホカホカのポテトは、大皿3皿合計で、約3ｋｇはある。

それを、サービスだから食えと言って置いていった。

無料なのは嬉しいが、あまりにも多い。

ヴィジュアル系バンドのフックの歌を中心に、所々アニメの歌を交えながらオレは、それなりにカラオケを楽しんだ。

上手に唄えた時に限って、2人とも歌本に夢中。

しかも拍手すらない。

佐倉は最初は私はいいよ～などと遠慮がちに言ってはいたが、いつの間にかノリノリでまゆを熱唱していた。

一方、オッキーは顔に似合わずダミ声で音痴だった。

ウチらの親たちが喜びそうなナツメロ中心に曲を選択するのは、親の影響なのだろうか、はたまたコイツの趣味なのだろうか。

時折ユイが来て、適当に歌を唄っていったが、さすがにビックリするほど上手かった。

自分の歌を唄い終わるとさっさと部屋を出ていくのだが、歌が上手いので許せた。

しばらくして、トイレに行くと言って出て行ったっきりの佐倉が帰ってこないのに気が付いた。

第１４話　液晶より本の方が良いよね？

「なぁ、ジオン。オレ、少しだけ様子見てくるわ」

そう言うと、唄っているオレをよそに、オッキーは部屋を出て行った。

～♪

おぉ～～～い、オレ、一人かよ～～～！

こんな大部屋に、オレ、一人かよ～～～～～！！

歌を唄ってる最中、部屋を出て行かれるのって、妙に寂しいんだヨナ・・・

流石に誰もいない大部屋で一人で唄っているのはバカらしく、途中で止めようとした時、オッキーと佐倉が帰ってきた。

２人とも、さっきまでの元気さがない。

「どうした２人とも、深刻な顔して。何かあったのか？」

「佐倉が6組のヤツに口説かれたんだよ」

「6組のヤツ？　誰？！」

「あっ、いいの、気にしないで歌、続けて・・・」

こんな状況で唄えっかよ。

オレは曲を止めた。

「・・・で、6組の誰だよ」

「安藤ってヤツ」

オッキーがドアの窓から廊下を気にしながら言った。

「安藤？　誰だ、それ・・・」

「長山といつもツルんでるヤツだよ」

長山だと？！

長山とツルんでるって言ったら、あの長山の手下6人のうちのどれかだな・・・

「6組のヤツらも来てんのか？　ここに」

「あの、6組の長山って人にいつもくっついてる人たちのうち、2

人が来てるみたい。私、トイレの帰りにドリンクバーにいたあの人たちとバッタリ会っちゃったの。無視して歩いてたら、後ろから声掛けられて・・・」

「何て？」

「誰と来てんの？　とか、一緒に歌おうよ、とか。多分、私が女の子だけで来てるのかと思ったんじゃない？」

なるほど・・・

単なるナンパか・・・・・

「あんまりしつこかったから、ジオン君と沖田君と来てるって言ったの。そしたら丁度沖田君が来てくれて・・・」

「・・・で？」

「無事、帰って来れたってワケ」

「オッキーはヤツらと何かあったワケじゃないんだな？」

「・・・ああ。別に何もなかったけど、鼻で笑われたり、足元から頭まで上下にジロジロ、ガンつけられたりしたからさ、オレもキレそうになったよ。佐倉がいる手前、我慢したけどな」

あいつら、ナメやがって・・・

テルがいた頃は大人しくしてたくせによぉ～・・・

その時！！

ガンッ！！！

突然入口のドアが大きな音を立てた。

何かがぶつかった音だ。

ドアを開けて廊下を見ると、走り去る男たちの後姿があった。

笑ったり騒いだりしながら、突き当たりを右に曲がった。

あの、うしろ姿・・・

間違いない、長山の手下共だ。

「何？　どうしたの？！」

佐倉が心配そうに廊下に顔を出した。

「何でもねーよ。さっ、そろそろ再開しよーゼ」

オレは佐倉とオッキーを心配させまいと、今見た事を黙っていた。

長山の手下共のイタズラなのは間違いない。

オレらの部屋をわざわざ探してドアに蹴りを入れるとは、随分と暇なヤツらだ。

こんな時、テルならどうしただろう・・・

速攻ぶんなぐりに行っただろうな。

それに比べてオレは・・・・・

・・・何もできない只のシャバ憎だ。

このままじゃ、ホントにシャバ王も夢じゃないかもな。

こんなんじゃ、マジでクラスのトップに立つ資格ねぇ～よな。

『2年になっても、ウチのクラスがナメられねぇ～よぉ～に、オマエがちゃんと守るんだぞ。頑張れよ！！』

『分かってるって・・・』

あの時の、テルとの約束、ちゃんと守れてねぇ～よな、オレ。

第１５話　ナーバスになりがちなＡ型

すっかりネガティブな空気に包まれた部屋には、そう長くは居れず、オレたちは1曲ずつ唄うと今日はお開きにしようという事で部屋を出た。

6組のヤツらが来てる事を知らないユイは、まだ8時前なのに帰るとは何事だ、とか、門限は破る為にあるんだ、とかワケの分からない事を言っていたが、オレたちは逃げるようにカラオケをあとにした。

佐倉と別れ、オッキーとの帰り道。

「なぁ、ジオン、これからどうすんだよ、マジで。1年の時はテルがいたからオレらナメられずに済んだけど・・・」

確かに、オレだけならまだしも、オッキーや佐倉、他の連中までナメられるのは我慢できねぇ・・・

面倒くせぇけど、やるしかねぇ～か・・・・・

「心配すんな。オレはテルより強ぇ～んだヨ、マジで。オレ、あいつとは2勝1分けで勝ち越してんだから・・・」

「マジかよ、すげぇな、ジオンって・・・」

2勝1分け・・・

・・・とは、言うものの、最初の引き分けは入学当初の初遭遇時の軽い喧嘩。

その後の2戦はお互いグデングデンに酔っ払ってた時の話だが・・・・・。

「はぁ～。オレはジオンと違って喧嘩弱いから、これからの事を考えると凄く憂鬱・・・」

「オマエA型だからな。ま、そうクヨクヨすんなって。考えたってしょうがねぇ～よ。何かあったら、そん時考えようゼ」

「ジオンはい～よな。楽観主義者で・・・」

「まぁ～な」

・・・ま、オレも最近まで自分はA型だと思ってたし、いつもクヨクヨしてたんだけどな。

どうやらオレのクヨクヨは血液型に関係なく、単なる気のせいだったみたいだ。

つまり、人間、ネガに考えりゃネガになり、ポジに考えりゃ人生ポジになるって事だ。

次の日、６組の長山たちや、１組のタカノブたちを避ける為、オレは３０分早めに登校した。

１年の時は、テルのお陰で守られてたんだとつくづく感じる。

オレには、思い出すにはあまりにも惨く残酷な中学時代があった。

そんな過去がオレのトラウマになっていて、テルがいなくなってから、目に見えない恐怖と怯えが時折訪れた。

テルとツルんでた時は、あの時の苦い日々を忘れる事ができたんだが、一人になってからというもの、フラッシュバックでオレの頭を最近よぎる。

キーンコーン　カーンコーン

４校時が終わり、昼休みにオッキーが、ある噂話を口にした。

「今年の１年、ヤバイらしいゼ」

「・・・・らしいな」

リッキーを見ていれば分かる。

アイツは1年のイザコザで、昨日から大忙しだ。

「何でも、この辺の地区の中学の番格がウチに勢揃いしたらしく、入学早々大荒れみたいだゼ」

「ふ〜〜ん」

1年が荒れていようが何しようが、オレには全く関係のない事だ。

「聞いて驚くなよ、ジオン。何と、もう1年をシメちまったヤツがいるらしいゼ」

「はあ?」

ウソだろ?!

アイツら入学式終わったばっかだろ。

今日はまだ2日目だぞ。

2日でケリがついたってのか?!

「だいたい中学の頃って、ヤンキーの小競り合いとかで、顔や名前って他の学校にも売れるモンだろ。そんだけ強けりゃさ。なのに、そいつの事、誰も知らなかったらしいゼ」

誰も知らない？

「高校デビューなんじゃねぇ～の？」

「いや、だったとしても、そいつと同じ中学だったら名前も顔も分かるだろーよ」

「どっかからか引っ越してきたヤツってか・・・」

「・・・だと思うゼ。しっかし、たったの2日で1年をシメちまうって、フツー有り得ねぇ～よ。あのテルだって、1ヶ月くらいかかったもんな」

ま、テルの場合は力でねじ伏せるって言うより、他のクラスと友好関係結んだり、話し合いで決めた観が強いよな。

オレはそっちの方はテルに任せっきりだったからよく分かんねぇ～けど、1組のヤツらも6組の長山たちも、何か自然にテルにトップの座を譲ったようなカンジだった。

「でも、たった2日でさ、たった一人でシメるって、凄くねー？」

一人でか・・・

今のオレと同じような状況だよな・・・

「よっぽど強ぇのか、よっぽどアブネ～奴だな。ヤクザの親分の息

子とか、シャブ中とか、務所上がりとか・・・」

「ジオン。ムショはないだろ、ムショは・・・」

「ま、そんなアブネ～兄ちゃんとは関わりたくねぇ～モンだな。オレは大人しくここで昼寝でもしてるよ」

「頼むよジオン。テルみてぇーにこのクラスを引っ張ってってくれよー」

・・・ったく、テルテルってウルセ～んだよ。

引っ張るって、どうやって引っ張りゃい～んだよ。

そんなの委員長の小倉にでも任せとけって。

・・・オレは、寝るっ！！

その日は特別な事もなく、一日が過ぎた。

相変わらず廊下で長山たち7人組とすれ違ったりしたが、特におちょくられる事もなかった。

リッキーは教育指導で忙しいらしく、ほぼ一日顔を見せず、まったく平和な一日だった。

しかし、そんな一日は、嵐の前の静けさにすぎなかった。

事件は次の日起きた。

第16話　ゴールデンドラゴン

昼休み、売店の焼肉弁当を食べ終わり、机に顔をふせて昼寝していた時、オッキーがオレの眠りの邪魔をした。

「なぁ、ジオン。例の1年、見てきたゼ、今・・・」

「あっそ・・・・・」

「普通のヤツっぽかったゼ。髪は真っ金、金だったけど」

「オレは興味ねぇ～よ、そんなヤツ。わざわざそれしきでオレの眠りを妨げるな」

「ジオン、オマエ、ど～したんだよ。1年の時のあの威勢のよさは何処にいったんだよ。テルがいなくなったこんな時だからこそ、ジオンがしっかりしなきゃなら・・・」

オッキーは急に血相を変えて黙り込んだ。

今まで和やかムードだった教室の空気がガラリと変わり、周りは急速冷凍されたような静けさに包まれた。

クラス中の生徒の大半は、一斉に対象に顔を向けたまま、固まった状態で表情だけ歪めている。

「ジ、ジオン。あ、あいつだ。い、1年の・・・」

オッキーが固まって見ている方角をふと見てみると、そこには見慣れない男が一人いた。

ポケットに手を入れ、ポーカーフェイスでゆっくりと教室の中を見渡している。

「何だアイツ。堂々と人のクラスに入って来るとは、いい度胸してるなぁ・・・」

「あ、あいつだよ、ジオン。噂の、たった一人で1年をシメちまった・・・・・りゅ、竜崎光一！！」

竜崎？

ふ～ん、あいつがたったの2日で学年をシメちまったという噂の1年か・・・。

大した事なさそうに見えるけど。

「や、やばいぞ、あのオーラ。こんな威圧的で強烈なオーラは初めてだ！！」

オッキーが震えながら興奮状態で言った。

そうか？

背はオレより低いし、痩せ型だし・・・

何か、もっとゴツくて怪獣みてぇ～なヤツかと思ってたけど。

髪は肩まで伸びたセミロングの金髪、鋭い目つきではあるものの、その瞳は澄んでいて、不良というより好青年にも見える。

・・・が、あ～いうヤツに限って犯罪とか殺人とか平気でやるのかもな。

オォ、恐い！！

「ここ、２－５っスよね？」

竜崎は誰にともなく大きな声で言った。

そのまま竜崎は、ポケットに手を入れたまま教室の中を歩き出す。

「おい、ジオン。やばい、アイツ、こっち来た・・・」

オッキーはさらにひるんだ。

「ここにテルって人がいるって聞いて来たんスけどぉ～。テルさんどこっスかぁ～～～？」

竜崎はついに黒板の前を通り、教室の中ほどまでやってきた。

アブネ～ヤロォーだ。

ここは寝たフリを続行だ！！

オレは即行で机に顔を伏せた。

相変わらずクラス中はザワザワと小さな声は聞こえるものの、大半の生徒はその場を動けずにいた。

かつてない修羅場のような、異様な禍々しい空間を創り出した竜崎に、果敢にも歩み寄る勇者が一人いた。

オッキーだ。

アイツ、バカか？

何、考えてんだよオッキーのヤロォー！！

殺されても、オレは知らねぇ～ぞ。

「何なのよ、アイツ。見ない顔ね？　1年？」

ユイが眉をひそめながら言った。

「何でも1年を2日でシメちまったアブネ～奴らしいぜ。ユイ、あんまり見るな。アイツ、危険なニオイがする・・・」

静まり返った教室の中、堂々と2年のクラスに乗り込んできた1年の竜崎の前に、オッキーが一人、立ちふさがった。

「ちょっと～、大丈夫～？　オッキー、行っちゃったけど・・・」

ユイが心配そうに言った。

「・・・・・・・・」

佐倉なんかは言葉もなく、ただただ固まっていた。

オッキーは竜崎と何か話していたが、振り返ってこっちを見ると、そのままオレの方に歩いてきた。

机に顔を伏せた状態で様子をチラ見していたオレは、オッキーと目を合わす前に、急いで顔を腕の中に埋めた。

「アンタの所に来たよ、ジオン」

ユイが何か言っているが、今のオレは眠っている。

「ジオン！　コイツ、ジオンに用があるみたいだゼ・・・」

オッキーらしき声が聞こえた気がしたが、今のオレは深い眠りにつ

いているので、残念ながら何も聞こえない。

「アンタがテルって人より強いっていうジオンさんっスか。話があるっス。ちょっとだけ付き合ってくれませんか？」

第17話　身にかかる火の粉を払ってただけ

竜崎とやらが、机に顔を伏せて熟睡しているであろうと思われるオレに向かって何やら独り言を言っているが・・・

・・・はて？

竜崎は最初、テルの名を呼んでいたのに、急にオレの名を出してきたって事は、オッキーが何か余計な事を言ったに違いない。

それに、オレに話があるって？

そんなの嘘だぁ～！！

ちょっとだけ付き合ってくれませんかだとぉ～？！

そんな悪魔の囁きには騙されんゾ！！

オレは子供の頃から、親から知らない人には着いていっちゃダメだと教育を受けて育っているし、人を外見だけで判断するなって誰か偉人が言ってたような気がする。

コイツに黙って着いて行ってみろ。

コイツの手下共に袋叩きにされて、監禁されて、海の藻屑となるの

が目に浮かぶ・・・・・

「おい、ジオン、起きろって・・・・・」

オッキーらしき声がオレを呼んでいるような気がするが、きっと何かの間違いだ。

だってオレ、眠っているもの。

夢、そう、夢だ。

竜崎が眠っているオレに話し掛けているのも、オッキーがオレに助けを求めるような声でオレを起こすのも、みんな夢だ。

そうに違いない。

「アンタねぇ、1年のくせに何、生意気な事言ってんのヨ！！　勝手にウチのクラスに入ってきて、何突然ケンカ売ってんの？　アタマ大丈夫？」

ユイが竜崎に向かって果敢にも言い放った。

オイオイ、大丈夫か、ユイ。

オレは知らんぞ、マジで！！

「オレは別にケンカを売ってるワケじゃないっス。どうせやられる

なら早い方がいいと思って、自分から来ただけっスから」

「何、ワケの分かんない事言ってんのよ」

「・・・ん？　やられに来た？　違うな。ま、やられたらやり返しますけど。オレは自分からは手を出さないんで・・・」

自分からは手を出さない？

オレと同じじゃねぇ～か。

オレは昔から決して自分からは手を出さない。

それがオレのポリシーだ。

それを、この竜崎とやらは真似する気か？！

これは、まさしく著作権の侵害だ。

訴えるぞ！！

「・・・何かオレ、いつの間にか1年をシメちまってたみたいで、出る杭は打たれるって言うじゃないっスか。だから、どうせ2年とか3年の人に狙われるのは時間の問題だなって思ったんで、こうして自分から挨拶に来たワケっスよ」

「挨拶に来た割には随分とケンカ越しじゃない？　それに、いつの間にか1年をシメてたって？　いつの間にかって何よ・・・」

オイオイオイオイ、大丈夫かョ、ユイ!!
何か竜崎ってヤツと口喧嘩してない?

「オレは身にかかる火の粉を払ってただけっス・・・」

身にかかる火の粉を払ってただけ?
もっともらしい事を言うじゃねぇ〜か、コイツ。
自分からは手を出さないって言ってたな。
・・・だが、コイツは自分から2年のクラスに乗り込んできている時点で、どうぞオレをやっちゃって下さいと言ってるようなモンだ。
そんでやられたらやり返すワケだろ?
ある意味タチ悪くねぇ〜か?

「自分から2年生のクラスに乗り込んできている時点で、どうぞボクをやっちゃって下さいって言ってるようなものでしょ? それってある意味、凄くタチ悪くない?」

オオォ?!
ユイがオレが思ってる事と全く同じ事を代弁している!!

「それもそ～っスね・・・・・・・・」

竜崎は考え込んだまま、しばらくその場で黙り込んだ。

何なんだ、この竜崎ってヤツ。

全くコイツの性格が読めない・・・

この、紳士的とも思える引きの良さはA型とも言えなくもないが、一人で上級生のクラスに乗り込んで来る辺り、無謀なB型の行動力ともとれる。

夢想家のAB型の行動にしては突飛すぎるし、陰を嫌う正義感溢れるO型気質からは離れてる気もするが、それが正義のつもりなら有り得なくはない行動力。

てっきり1年をシメたから、今度は2年をシメに来たのかと思ったが、コイツ、マジで話し合いに来たのか?

だったら平和的に解決できるかも?!

第１８話　キメっ子の気持ちは良く解ります

「・・・失礼しました」

竜崎はなぜかユイに謝っている。

「わ、分かればいいのよ」

ユイも竜崎を許したみたいだ。

何なんだ、この空気は・・・

ますますオレの起きるタイミングが掴めないじゃないか。

オレはいつ起きればいいんだ？

これじゃ～まるで、お父さんに怒られて、泣き出して顔を埋めたままの子供が、お母さんにチヤホヤされても泣き止むタイミングを逃して、いつまでも顔を埋めてイジケているシチュエーションと似ているじゃないかっ！！

オッキーにはオレがシャバ憎だって思われてそうだし、クラスのヤツらの瞳には、机に顔を埋めているオレがどう映るんだ？

竜崎に泣かされた可哀想な人って思われたりしてねぇ～か？

「・・・じゃ、そういうワケで、ジオンさん。テルって人にもヨロシク言っといて下さい。オレは逃げも隠れもしないんで」

「テルはいねぇ～よ。退学して東京行ったから・・・」

オッキーが竜崎に向かってボソッと言った。

「・・・そうっスか。それでこのジオンって人がアタマになったワケっスね？」

アタマ？

やっぱり、この竜崎ってヤツに、オレが2年のトップだって誤解されてるみたいだ。

オッキー、今だ、オレは2年のトップじゃねぇーって言ってくれ！！

「じゃ、2年の人ら皆に言っといて下さい。オレは2年の人たちと喧嘩をする気はないって。大勢にこまごま襲われるのはイヤなんで、オレはどうすれば無駄な喧嘩をせずに済むか相談に来ただけっスから」

やっぱりコイツ、話し合いに来たのか？

起きるなら、今が絶好のチャンスだな・・・

ガタン

オレが起きようとした瞬間・・・

「リッキーだぁ～～～！！」

誰かが大声を出した。

慌しく教室がザワめく。

オレが顔を上げた時には、竜崎の姿はそこにはなかった。

「あれ？　リッキー来ないね・・・」

佐倉がキョロキョロしながら言った。

「誰かが竜崎を追い出す為に言ってくれたのよ。それにしてもアンタ、よくあんな状況で狸寝入りできたわね。てっきり挑発に乗るのかと思ったわ。アンタも大人になったわね」

ユイがオレを褒めている？

「私も、ジオン君がいつキレるか冷や冷やしちゃった」

佐倉・・・

オレって、佐倉にそういうキレ易いキャラって思われてんのか？

それ、ちょっと誤解かも・・・。

「ジオン。オレはてっきり竜崎にジオンがビビッちまってるのかと思ってたけど、狸寝入りは計算の内だったのか？　竜崎なんて、相手にするまでもないってか。さすがジオンだぜ」

オッキー、オレは竜崎にビビってたワケじゃないんだが、狸寝入りは計算でもないんだよ。

たまたま起きるタイミングを逃してグダグダしてたら、何となく嵐が去っていただけで・・・。

ま、ヘタに状況を悪化させる事もなく、何事もなく竜崎が去ってくれて一安心なのだが、問題はこれからだな。

アイツの話を整理すると、入学早々トップ争いに巻き込まれて、気がついたら自分がトップに立っていたと。

1年をシメる気なんてなかったのに、身にかかる火の粉を払っていたら、いつの間にかシメていた。

ちょっと目立ってしまったんで、上級生に目をつけられるのは時間の問題だと思ったんだな。

そんで、上級生に襲われる前に、自分から大将のトコロへ話し合いに来たってワケだ。

自ら乗り込む時点で、普通、どんな状況になるかは容易に想像できるはずだ。

やられるのを覚悟で、どうすれば無駄な喧嘩をせずに済むか相談に来た。

見上げた根性だな・・・。

紳士っていうか、デキるっていうか、何ていうか、男だな・・・。

たった一人で、大したモンだ。

でも、竜崎、残念ながらオマエの期待には応えてあげられないんだ。

申し訳ない・・・。

オレ、トップでも大将でも、番長でも何でもない、ただのシャバ憎ですから・・・。

ついにはシャバ王を狙っている、とんだ食わせ者っす・・・。

今度オレのトコロに顔出しに来たら、正直に話そう。

オレはトップでも何でもない、ただのシャバ憎だって・・・。

それが、アイツに対する男としての礼儀ってヤツだと思うし。

オッキーや佐倉に何と思われようと、オレもいつまでも逃げてらん

ねぇ～。

今まで曖昧だったけど、今度こそハッキリさせよう。

オレはトップを目指すつもりはないってな・・・・・。

シャバ憎のトップは目指すけど・・・・・みたいな?

何か、情けねぇ～～～な、オレ。

第１９話　伝説の番長

夜中、小便で目を覚ましたついでに、冷蔵庫に入ってた牛乳を２５０ｍｌほど一気飲みして、さらに冷凍庫にあったアイスを食って寝た。

そしたらその２時間後くらいに急に腹に激痛が走り、オレはトイレに１時間ほどこもる事になった。

お陰でオレは寝坊した。

学校を休むかとも考えたが、家に居てもどうせヒマだし、４校時辺りに間に合うように登校する事にした。

学校に着くと、廊下には相変わらず長山たちが７人、かたまって雑談していた。

オレを警戒しているのか、眼中にないのか、コイツらは変わらずオレに向かってくる気配はない。

ただ、オレを見てヒソヒソやったり、ニヤニヤしているのでナメているのは確かだ。

オレを遠まわしに挑発して、オレから仕掛けるのを待っているのか？

それともマジでオレなんて眼中にないのか？

どっちにしろ7人相手じゃ分が悪い。

1年の竜崎には、オレがトップだって誤解されてるようだけど、残念ながらオレはトップでも何でもないし、これからトップを目指すつもりも毛頭ない。

6組の長山たちとか1組のタカノブたちが勝手にトップ合戦すりゃいいんだ。

そんで竜崎と勝手にやってりゃいいんだ。

オレなんて全然シカトしてくれてい～から。

オレをこれ以上、いざこざに巻き込まないでほしい。

教室に入り席に着くと、オッキーがオレの顔を見てニヤニヤしだした。

「何だよ気持ち悪ィな。何ニヤついてんだよ・・・」

「何で遅刻したんだよ、ジオン。もったいねぇ～なぁ～」

「何がだよ?!」

「今日は朝から自習続きだゼ。ずっと休み時間状態」

「なぜ?」

「3年の伝説の番長が登校してきたんだよ」

伝説の番長？

あぁ、噂でよく聞くアレか？！

この学校には、伝説の番長っていう、何か凄い人がいるらしい。

名前は『宮　大地』。

今の2年、3年なら誰もが知ってるであろう名前だ。

その人は体が大きく、怪獣みたいな人で、物凄く喧嘩が強いらしい。

高1の時に学校のみならず、他校も含め、この辺の高校を制覇してしまったという、恐ろしい人だ。

俗に言う、総番長。

今の時代、そんな人も珍しいと思われそうだが、いるんだから仕方がない。

中学の頃、柔道で国体優勝候補と謳われていたそうだが、腰を痛めたか何かで夢を諦めたらしい。

それからグレ出したって噂だが、真相は誰も知らない。

本当はヤクザだとか、実はホモだとか、色んな噂があるが、結局どれもこれも単なる噂だ。

喧嘩のエピソードは星の数ほどあるようで、それらは伝説となってウチらの耳にもたまに入ってくる。

だが、この総番長、大の学校嫌いでたまにしか登校しないらしい。

ギリギリ単位をとってダブらずに済んでいるのか、何か裏があるのかは定かではないが、オレはまだ、総番長を見た事がない。

本当はそんな人、存在しないんじゃないかとすら思った事もあったが、オッキーの話を聞く限り、どうやら今回も彼の入場シーンを見逃してしまっただけのようだ。

「凄かったゼ。先コー共が何人か校庭に出てきてさ、色々警戒してんの。野次馬とかテロとか警戒してたのか分かんねぇ～けど、とにかく先コーが出てきてさ、伝説の番長はさ、一人で校庭の真ん中を歩いてくんの。それが、１校時の時。数学の竹中も出て行っちまって、それっきり自習ってワケ・・・」

オッキーが興奮しながら言った。

ちなみに数学の竹中ってヤツは、リッキーと同じ生徒指導の教師だ。

リッキーほどではないが、暴力教師として名を轟かせている荒くれ者だ。

３９歳、家庭持ち、Ａ型。

リッキー共々、敵に回したくない教師の一人だ。

「テロって何？　テロって・・・」

「ホラ、番長はいつでも狙われてるだろ。そりゃ～恨みだっていっぱい買ってるだろうしさ。滅多に来ない番長だけに、彼を倒そうとしてるヤツらには登校時がチャンスなんだろ」

そんなモンなのか？

そりゃ～恨みは沢山買ってるかもしれねぇ～けど、この学校に今更彼を倒そうとしてるヤツが残ってるとは思えねぇ～けど。

「ま、仮にテロを警戒して、先コー共が番長の登校時に見張ってたとしよう。それで何で今の時間まで自習が続くんだよ？」

「分かんねぇ～けど、竹中がいなくなった後さ、もうみんな廊下に出て、校庭の番長の入場シーンに釘付けだよ。他のクラスも廊下の窓からみんな外見ててさ、もうお祭り騒ぎ」

「ふ～ん」

「でもよ、同じ遅刻でも、伝説の番長とジオンと、入場シーンの違いはケタ違いだな」

オッキー・・・

余計なお世話だ！！

テメェ、オレをナメてるのか？！

ケタ違いって、そりゃ～確かに認めるけどさ。

確実にオレをナメてるよネ？

オッキー、オレをナメてるよネ？

キーンコーン　カーンコーン

鐘と同時に委員長の小倉が黒板に自習という文字を書いた。

「４校時目も自習だって」

佐倉がニコニコしながら後ろのユイを見て言った。

「ウン、ラッキーだね。トコロでさ、オッキー。その後どうなったの？　彼、吉岡のヤツらを全滅させたんでしょ？」

ユイがオッキーに聞いた。

「えっ？　そんな話、全然知らない？！　何、それ・・・」

オッキーの両目が飛び出した。

吉岡のヤツらを全滅？

吉岡って言やぁ、隣町の吉岡工業高等学校の事だよな？

「あの、1年の竜崎もまざってたって話よ・・・」

ユイがまたしても衝撃的な言葉を吐いた。

竜崎？

一体、何が起こってるんだ？！

第２０話　ＡＢ型は社交辞令はお手のもの

「宮って人、一人でやっちゃたらしいよ。５人？　６人だっけ？」

「１０人じゃなかったっけ？」

ユイの質問に佐倉が答えた。

・・・１０人はないだろ、１０人は。

いくら伝説の番長とはいえ、吉岡の猛者共を１０人も？

せめて３人とか・・・。

それより、ど～いう事だ？

何で総番長が吉岡のヤツらと？！

「おい、ユイ。話が突飛すぎるんだよ。何も知らないオレに分かるようにキチンと説明してくれ。まず、その話は何情報なんだよ？！」

「アンタ、何で遅刻したのよ？」

「ただの下痢だよ」

ゲッ！！

ついついユイのいきなりの質問攻撃に、そのまま素で答えちまったよ。

「汚いわねぇ～」

ユイが汚らわしい目でオレを見た。

「あはははははは」

ホラ、佐倉が笑ってるじゃねぇ～か。

オレの目を悪そうに見ながら、腹抱えて笑ってるじゃねぇ～か。

・・・くっそぉ、佐倉と目が合ったまま、お互い、いつ視線を逸らせばいいのか分からない状態だよ。

佐倉も赤面してるし、オレも何だか徐々に赤面してるみたいだし。

「・・・で、誰情報なんだよ?！」

オレはさっさと話を戻した。

「ミノブさんよ」

ユイが答えた。

保健室のミノブさん。

血液型ＡＢ型の５０代、おばさん先生だ。

女子から特に支持されていて、優しい頼り甲斐のある相談者で人気を博している。

そんなミノブさん情報なら、伝説の番長が１人で１０人の猛者を倒したという話も満更嘘ではないと思われる。

「どうしてミノブさんの所に行ったの？」

オッキーがユイに訊いた。

「別にいいじゃない。女の子の事情ってモンがあるのよ、色々。放っといてよ」

オッキー、バカだ。

ユイに怒られてやんの。

「どうやら吉岡の生徒がウチに乗り込んできたらしいの。今日襲撃があるって情報を、ウチの先生たちは掴んでたみたいなのね。そんで、宮って人を警戒してたら、案の定、屋上で乱闘事件勃発ってワケよ」

「なぁ、ユイ。今までもウチの学校に他校の生徒が乗り込んできたってのは何度かあったから分かるけどさ、竜崎が絡んでるって本当なのか？」

オレは一番気になる事をユイに聞いてみた。

「・・・さぁ。金髪の1年が宮って人のそばにいたって聞いたから勝手に竜崎って思ってるだけなんだけど、ホントに竜崎かどうかまでは知らない」

金髪の1年。

・・・って言えば、真っ先に思い浮かぶのはアイツだよな。

でも、どうしてアイツが？

3年の大将にも、例の挨拶ってか？

たまたま挨拶に行った時、その乱闘に巻き込まれたとか？！

・・・ま、オレには更々関係ない事なんだが。

「トコロでアンタ、下痢、大丈夫なの？」

何で話をぶり返すんだよ、ユイ！！

第２１話　今時アイドルって

「ウンコ出るならまだいいけど、出ないのアレ、キツイよなぁ～」

オッキーがウンコの話に乗ってきた。

「そうなのよねぇ～、女の子は特にさ、便秘気味になりがちだから苦労するよネ～」

「そうそう。私、３日に１回とかでね・・・」

ユイならともかく、佐倉まで自然にウンコの話にまざってきてるゾ？！

３日に１回とかって、随分リアルだな・・・

な、何かオレの中の佐倉のイメージが遠のいていくのを感じるのは気のせいか？

ホラ、アイドルってウンコとかしてほしくないじゃん。

せめて、そういうイメージって払拭していたいじゃん・・・みたいな？

「・・・でもさ、３日に１回だったら出る時ってまとめて出るワケ

？」

ユイは佐倉に失礼な事を聞いた。

「ううん。少～しだけ」

平気な顔で平然と答える佐倉。

「溜まる一方じゃん」

ユイのツッコミ。

「だからね、１０日に1回くらい必ずトイレにこもらなきゃいけないのよ。大変なんだからぁ～」

佐倉、何か、オレとオッキーが聞いてるの忘れてない？

べ、別にいいけど。

・・・と、その時、突然オレの脳裏に、昔の面白いエピソードが次々とフラッシュバックした。

「ぷぷぷっ」

思わず吹き出すオレ。

「何よ、別に面白い話してるワケじゃないんだからねー」

ユイが少し怒り気味で言った。

「いや、そ〜じゃなくって、小学校の時、物凄くでっかいウンコが毎日通学路にあったの思い出してさ」

「あぁ〜、あったあった」

ユイも思い出したようだ。

「どのくらいデケェーの？」

「こんくらい」

オッキーが大きさを聞いてきたので、オレは両手で大きさを示してみた。

大きな魚を釣った釣り人が、両手で魚を胸の所で抱えて持って写ってる写真をたまに雑誌で見かけたりするが、その抱えられてる魚くらいデカイのである。

想像する人により大きさは異なりそうだが、その大きさで構わない。

オレは決して過言な事を言ってるとは思わないから。

「うっそ〜？！」

「ウソだろ？！」

佐倉もオッキーも信じていないようだ。

「本っ当なのよ！！　アタシたち、小学校の時は集団登校してたんだけど、ホラ、毎日同じ道通るじゃん。ある電柱の下に、いっつもスゴク大っきいソレがあったのよ。本っ当にこんくらいなのねっ」

鼻から蒸気機関車が出す煙のような鼻息を出しながら、ユイがオレの示した仮想ウンコを後押ししてくれた。

人の意見を大概反発してジブンが思ってる事と逆の事を言うＢ型にしては、珍しい助太刀である。

ただ、ユイの示す仮想ウンコを見て、オレはデジャブ。

子供の頃も、こんな光景、見た事ある。

そういえば小さい頃のユイも、今と同じように、両手で仮想ウンコを示していたっけ。

子供の頃は小さいので、大人が見る物とは明らかに見える大きさが違うよな・・・。

・・・大人が見る３０ｃｍと、子供が見る３０ｃｍは違う。

・・・・・・・・・・・・・・・ま、いいや。

「なぁ、ユイ、あれってさ、毎日誰かがあそこにウンコしてたっていう噂があったけどさ、絶対アレ、冬場だったから凍ってただけだよな？」

「アタシもそう思う。でも、一冬あったよね。風化しないでそのま

ま一冬原型保つって凄くない？」

「アレ、人間のウンコだよな？　犬のじゃないよな、アレ・・・」

「うん、犬のじゃない。でも、電柱の下ってさ、今考えると超笑えない？　ギリギリまで我慢してたんだけど、耐えきれずにするしかなかったんだろうね」

「あはははははは」

状況を想像して、腹を抱えて爆笑する佐倉。

「はっはっはっはっは」

ついにオッキーも大仏のような笑顔の瞳から涙を出した。

想像するのは個人の自由だし、勝手に色々作ってもらって構わないが、笑いすぎじゃねぇ～か？

通勤帰宅途中の生真面目な中年サラリーマン。

電車の革吊りを握り締めてる時から腹痛に悩まされ、ギリギリまで我慢してたんだけど通勤距離残り３０％でギブアップ。

運良く今は夕方、人通りゼロ。

やるなら今しかない・・・みたいな。

・・・ってオレも勝手に色々想像して爆笑してたっけな。

でも、こっからなんだよ、面白エピソードは！

オレはついに、今まで封印していたあの話、オレしか知らない、オレしか見ていない、今も忘れぬ決定的瞬間、あの面白エピソードを語ろうとした瞬間、悲劇が訪れた。

ピー　ビーッ

突然腹の底に激痛が走った。

この症状は、昨夜のアレと同じ、いや、それ以上・・・。

そう、まさしく下痢。

ガビーン

よりにもよって、こんな時に！

ヒジョーに行きづらい。

自習とはいえ、今教室から出て行ったら明らかに便所だってバレる。

おそらく誰の目から見てもそれは明らかだろう。

堂々と出て行けばそれで済むだろうが、今までの流れからしてユイたちに笑われるのは必至。

しかも、便所の帰りが遅かったら尚更。

小便のフリして便所に駆け込み、即行で終わらせるのが得策か？

それとも、もう少し粘って・・・

ピー　ビーッ

ダメだ！

躊躇している時間はない！！

このままだと、ここで・・・

第２２話　綺麗好きはＡ型の誇り

オレは無言のまま席を立ち、小走りで教室を出た。

ユイやオッキーが何かオレに向かって言っていたが、言い訳や説明をしている暇はない。

廊下に出ると、隣の６組は授業をしていた。

６組の教室のドアが全開だった為、廊下を歩くオレの姿にみんな注目していた。

クネクネとウンコを我慢しながら早歩きするオレを見て、６組のヤツらはどう思っただろうか？

やっぱりウンコ我慢してるヤツとしか見えなかっただろうか？

それとも、他に何か・・・

いや、ウンコ我慢してるヤツとしか見えない。

もう、いい！！

何でもいい！！

誰でもするじゃんか、ウンコ。

したくてもすぐできない時、誰でもあるだろ?!

笑いたきゃ笑え!!

だがな、明日は我が身だゼ。

オレはトイレに駆け込んだ。

・・・!!

・・・・・ん。

・・・な、なにィ〜〜〜!?

よりにもよって、ウンコルーム3ヶ所とも誰かに入られている!!

ちっきしょ〜、誰だ?

6組が授業中の所を見ると、ウチのクラスか?!

それか、他のクラスも自習の所あるのか?

ピー　ピー　ビーッ

ぐわっ!!

ま、待てない。

くっそぉ～、こうなったら、他の階のトイレだ！！

下の階のトイレまでやっとの思いで辿り着いたオレに、さらなる悲劇が待ち受けていた。

駆け込んだトイレの中は大荒れ状態だったのだ。

1組のタカノブ、貴船、芒の3人が、誰か知らない生徒を痛めつけてる最中。

こんな所では出るものも出ない。

ラッキーな事に、タカノブたちは自分たちの事に必死で、オレの存在にはまだ気付いていない為、オレは急いでその場から離れた。

こうなったら安全地帯はあそこだけだっ！！

オレは迷わず職員室の隣の職員便所を目指した。

やっとの思いで職員便所に辿り着くと、ついに至極の安らぎがオレを待っていた。

ホッ

3ヶ所とも空いている・・・

オレは手前のトイレに駆け込んだ。

・・・瞬間、とんでもないどんでん返しだ！

か、紙がないィ～～～～！！

あ、あぶねぇ～、このままここでウンコしたら、拭けねぇ～よ。

オレはその隣の真ん中のトイレに駆け込んだ。

そこにはちゃんとトイレットペーパーがある。

「・・・・・・・」

・・・助かった。

ふう～～～っ・・・・・。

しばらく余韻に浸った。

あっ、そうだ。

ユイたちの事、忘れてた。

今更カッコつけたって、もう遅いよな。

どうせ、すでにウンコヤローのレッテル貼られてるんだ、もうしば

らく余韻に浸るか。

「くぷぷっ」

あいつらに話そうとしていた面白エピソードを思い出し、オレは一人吹き出した。

どうせ誰もいないし、職員便所なんて入ってくるヤツなんてそうはいないし、少しくらい思い出し笑いしても変なヤツだと誰にも思われないだろう。

そう、あの電柱下の巨大物は、何の前触れもなく姿を消したのだ。

オレたちに内緒で処理するなんて、ズルくねぇ～？　子供も納得できるように、電柱に張り紙くらいしてから処理してほしいよ！　と、あの頃誰かが言っていたが、今思うとアホな話だ。

オレたちの通学路は裏道の1本道。

小学校に向かう時、左手側にはドブ川、右手側には田んぼがあった。

左手側のドブ川にはガードレールがある。

歩道がなかったんで、オレたちは田んぼ側をゾロゾロと一列に並んで登校した。

例のアレは、田んぼ側の電柱の下にあったんだ。

道路に面した所にドーンと。

オレたちの行く手にあるもんで、みんな避けるのに必死だった。

結構車の通る道だったから、ジャンプしたり。

でも、オレなんかは電柱を上手く利用してグルンと田んぼ側経由で回って避けたりしてたな。

ユイなんかは普通に車が来ないのを見計らって、道路側経由で避けてたな。

田んぼ側だと落ちるおそれがあるし、ジャンプすると道が凍ってるから転ぶんだ。

現に田んぼに落ちてる下級生もいたし、転んでウンコに接触しそうになってたヤツもいたな。

「あははっ」

オレはもう1度思い出し笑いをした。

ある日、いつものようにみんなで登校してた時、事件は起きた。

冬も終わりに近づき、巨大ウンコも解けかかっていた頃と思われる。

前から超大型トラックが来たんだ。

丁度、後ろからも車が来て、トラックは田んぼ側に避けた。

その時、バキンっていう物凄い音を出して、ウンコが超大型トラックに撥ねられたんだ。

その時の破片が、こっぱ微塵に散らばった。

その中の一つの破片がガードレールまで飛んだと思ったら、はね返ってオレの前を歩いてたヤツのランドセルに直撃したんだ。

その瞬間を見逃さなかったのはオレだけ。

みんな下を向いていたり、別方面を見ていたりして気付いてなかった。

オレの前のヤツも、もちろん気付かなかった。

ランドセルの側面には、明らかにウンコが付いてるってのに。

そいつの名はケンちゃん（仮名）　男性　当時オレより1コ下　血液型A型。

A型ってのがミソだ。

それでなくても比較的潔癖気味なA型なのに、ケンちゃんのランドセルにはいつまでもウンコが付きっぱなしだった。

おそらくランドセルの側面な為、いつも視界からズレていたのだろう。

「はっはっはっ」

例のモノを発見した時のケンちゃんの顔を想像して、オレは大きな声で笑った。

・・・その時！

バタン

誰かが職員便所に入ってきたようだ。

ダッ　ダッ　ダッ　ダッ・・・

走っている。

キィーッ　バタンッ

・・・うおっ？！

と、隣に入った！！

そ、そこには、か、紙がないんだぞぉ～～～っ！！

第２３話　Ｂ型って感情の表現ストレートだよね

ドゴォォォォォォン

うおお？

で、出たのか？

な、何かスゴイの出たのか？！

その時、隣のトイレから「ふう～～～」っという安らぎにも似た、大きく息を吐く声が聞こえた。

き、気持ちは分かるぞ。

どこの誰かは分からないが、オレもさっきまでアンタと同じだったから、凄く良く分かるぞ、その気持ち。

・・・その時！

カラ　カラ　カラッ

カラッ

トイレットペーパーをセットする、あの棒を転がす音が虚しく響く。

き、気の毒に。

・・・すると「ちっ」っという舌を鳴らす音の後、「これだぁ～、これだよぉ～」という小さな小さな呟きが聞こえた。

オレは気を利かせてトイレから出ようとした。

そうすれば、職員便所にはこの人だけしかいなくなるから、上手くパンツにウンコが付かないように注意しながらオレが入ってた所に移動するといい。

もしくはトイレットペーパーを持っていくといい。

フンジャー

水を流した時、隣の紙がない人が突然大きな声をあげた。

「お～い、隣の人ぉ～。悪いけどぉ～、紙くれないかなぁ～？」

・・・何だこの人？！

オ、オレならこっそり誰もいなくなったの見計らって移動するぞ？！

トイレにこもってる時、知らない人にそんな大声で声掛けたりしないぞ？

この人B型か？
その大胆さはB型か？

「投げますよぉ～」

無視しようかとも考えたが、オレは親切に助けてやる事にした。
こういう小さな親切が、やがて大きな幸せとなって自分に返ってくるのだろう。
いや、親切というより、常識かコレは・・・

「ありがとね～」

隣の人にお礼を言われた。
オレは当然の事をしたまでなんだが。

オレはさらに気を利かせて、すぐさまその場を去ろうとした。
知らない者同士、ウンコルームから出た時、顔を合わすだけでも気まずいのに、そんな助け合いをした後などに合わす顔はない。
おそらくこの人はまだ出ないだろうし、このままオレが入ってたら出るタイミングを計算してしまうに違いない。

だったらこの人がまだ出ないであろう今のうちに、オレが先に出るべきだ。

キィーッ

・・・・・・・ん、何ィ～～～ッ！！

出た瞬間、隣の人と目が合った。

まったく同じタイミングで一緒に出てしまったのだった。

彼も計算したのだろうか？

先の先を読んだつもりらしいが、どうやらその先読みが仇になったようだ。

・・・・・・・ん？

この人、どっかで・・・・・

「いやぁ～、今、ホント助かった。マジ、ありがとね」

この声、この顔、この体格。

そうか、あの時の人だ！！

側溝にタイヤがハマってオレに車出すの手伝わせた人だ。

目の前にいる人は、まさしくあの時のオッサンなんだが、何かオカシイ。

なぜ、この人はウチの学校の制服を着ているんだ？

コスプレか？！

それにしてもおかしな制服だ。

ブレザーの背広がやけに長い。

イメージはガクランの長ランってトコロか？

それにズボンが妙に分厚い。

イメージはちょうちんボンタンってトコロだろうか？

靴は踵が潰れてスリッパのようになっている。

それならまだ許せるが、裸足だ。

それにＹシャツの代わりに赤いトレーナーを中に着ている。

ベルトはヘビ皮。

太い首にぶら下がったネックレスと左手首のブレスレットが黄金に輝いた。

この人、アブネェ～。

「あれ、君、どっかで」

これはヤバイ。

この人オレの事思い出しそうだ。

ここは早急に立ち去るべし。

「じゃ、オレはこれで」

「君はこの前、オレを助けてくれた人だよね？」

「さ、さぁ～」

オレは知らんプリしてその場をやり過ごそうとした。

・・・と、その時！！

「宮さん、リッキーが生徒指導室で呼んでますよ。早く来いって・・・」

りゅ、竜崎？！

このオッサンと竜崎は知り合い？

・・・それが、オレと竜崎、宮さんの、運命的出会いの瞬間だった。

第２４話　外見で人を判断しない方がいい

竜崎?!　なぜ、ここに。

コイツの顔、オレは知っているが、竜崎はオレの顔を知らない。

「オイ、オマエら、こんな所で何やってる！　早く生徒指導室へ来いっ!!」

リッキーだ。

リッキーがトイレに顔を出してきた。

「亀鶴っ!!　貴様、こんな所で何やってんだ?　まさかオマエもこの２人の仲間かっ?!」

はい?!

オレ、関係ねぇ～し。

「・・・オレはただ、ウンコしに」

「言い訳する気か?!　何でわざわざこんな所まで用足しに来る必要があるんだ?!　オレは騙されんぞ。亀鶴、オマエも来いっ!!」

はい?!

何でオレまで生徒指導室へ行かなきゃなんねぇ〜の?!

マジ有り得ねーっ!!

「この人はカンケーないでしょ。それに、竜崎君だって何もしてねぇーし。オレだけでいいでしょ、オレだけで」

オッサンはリッキーに向かって困った表情で言った。

「黙れっ!!」

リッキーの怒鳴り声がトイレに響いた。

「・・・・・・・・」

リッキーに怒鳴られ、オッサンは今にも殴りかかりそうな表情をしているが、グッと堪えている。

どうやら強面のこのオッサンも、流石にリッキーには手を出せないようだ。

生徒だったら当たり前か・・・。

「先生。ホントにこの人は関係ないっス」

竜崎もオレの事を庇っている。

しかし、そんな2人の弁解も、この男には効果はなかった。

「問答無用だ。今すぐ3人来いっ！　来なきゃ、退学だっ！！」

リッキーは凄い剣幕でトイレから出て行った。

・・・た、退学ぅ～～～？！

職員便所を使っただけで生徒指導室に呼ばれ、今すぐ行かなきゃ退学ってかぁ～～？！

・・・ざけんなっ！！

「ゴメンね。ホント、オレのせいで・・・」

オッサンはペコペコとオレに謝っている。

何なんだ、この人。

顔や雰囲気に似合わず妙に優しい。

そこがまた不気味だが・・・・・。

「宮さん、退学っスよ、行かなきゃ。逃げらんないっス」

竜崎がオッサンに言った。

「・・・だよねぇ～、退学だけは勘弁だからね」

「当たり前じゃないっスか」

「そうだよねー。オレ、竜ちゃんに昔言われたよね？　高校は出とかなきゃダメですよって。オレね、あん時の言葉忘れらんなくてね、意地でも高校出てやるって心に決めたの。だから今でもこうして頑張ってんのね」

「それにしては学校嫌い、直ってないみたいじゃないっスか？　去年の単位、ギリギリだったんでしょ？」

「へへっ、痛いトコロ突かれたなぁ～。でも、こうして竜ちゃんにまた出会えたってのは、運命だよね。オレ、これから出来るだけ休まないで学校来るわ」

「当たり前っス。それより早く行かないと、またどやされますよ」

何なんだ、この2人？？

それにしても、なぜこのオッサンは竜崎に対して頭上がんねぇ～んだ？

リッキーを睨みつけてた所を見る限り、このオッサン、見たまんまのワルそうな人だし、おそらく3年だよな？

竜崎は1年。

・・・もしかして竜崎って、このオッサンを遥かに凌ぐ、ヤバイヤロォなのか？！

こんな強面のオッサンを手なずけるとは・・・。

「ホント、関係ないのに、ゴメンね」

突然オッサンは、思い出したようにオレにペコペコと頭を下げてきた。

「かめつるさん、でしたっけ？　ここはオレたちが上手く処理しますから、今のうちに教室に戻っていいっスよ」

竜崎が気を利かせてオレに言った。

「気持ちは有り難いけど、オレのクラスの担任リッキーだから、どっちにしろ逃げらんねぇ～し」

「あらら」

竜崎は苦笑いした。

オレとオッサンと竜崎の3人は、リッキーの待つ生徒指導室へと入っていった。

「そこに座れっ！！」

中に入ると、生徒指導の教師が4人揃って待っていた。

リッキーは偉そうに、机の上に座っている。

ピシッ

「そこに正座だって言ってんだろーがっ！！」

リッキーの竹刀が床を叩いた。

「だからオレだけの責任だって言ってるでしょーが。この2人はホント、カンケーねぇ～んだから帰してやってくれよ！」

オッサンはこの期に及んでまだ抵抗している。

オレなんてもう、即、正座してるっつーのに。

「大和先生、間違いないんですよね？　あの場にこの2人が居たのは」

リッキーが、オッサンと竜崎に竹刀を向けながら、大和に尋ねた。

大和は黙って頷く。

大和というのは、リッキーの次にこの学校で恐れられている凶悪教師だ。

柔道部の顧問であり、尚且つ頭がイカレているので、コイツを怒らせたらタダでは済まない。

実際コイツに投げ飛ばされて骨折した生徒もいるほどだ。

それに巨体がプラスされている為、ある意味リッキーよりヤバイ。

「私も見ましたから、間違いないですよ」

オレのクラスの数学の教師でもある、竹中が言った。

「屋上に私が駆けつけた時、吉岡の生徒が１０人ほど倒れてました。
そこに、この２人が立ち尽くしていたワケです」

竹中が腕を組みながらリッキーに説明した。

ちょっと待てよ？　じゅ、１０人？！　吉岡の生徒が１０人？？

・・・それって、もしかして？！！

第２５話　オレ、弁・・・

「１０人ですと？　それは有り得ないでしょ。いくら宮が柔道黒帯だからと言っても、いくらなんでも吉岡の猛者、１０人相手に無傷とは・・・」

もう一人の教師が、信じられないというような顔をしながら言った。

垂れ目で背の低い、見た事のない教師だ。

「いや、宮なら有り得る。内藤先生は転任してきたばかりだから分からんでしょうが、この宮大地ってヤツは、そういう男です。それに、大和先生だって、大勢にかかられても軽々と対処しますよねっ」

大和は黙って頷いた。

宮大地・・・

宮大地って言ったよね、リッキー。

あの時の無免許の人、トイレでバッタリ遭遇したこのオッサン、やっぱり伝説の番長、宮大地だったのか・・・。

「・・・で、竜崎、オマエも加勢したのか？」

リッキーは竹刀を竜崎の顔に向けた。

「だから竜崎君は・・・」

ビシッ

リッキーの竹刀が思いっきり床を叩いた。

「宮、オマエは黙ってろ！　オレはコイツに聞いてんだ！！」

「だから竜ちゃんは・・・」

「やめて下さい、宮さん。先生はオレに質問してんスから、オレに答えさせて下さい」

竜崎の言葉に宮さんは口を閉ざした。

「オレは宮さんが屋上で襲われてるって噂を耳にしたんで、助けに行っただけっス。オレが見た限り、宮さんは間違いなく正当防衛っス」

「どうして1年のオマエが3年の宮の喧嘩を止めに来るんだ？　宮とはどういう関係だ！！」

そうそう、リッキーの言う通り、どういう関係なんだよ、オマエら。

「ガキの頃、世話になった先輩っス。昔、家が近かったんで・・・」

「いや、世話になったのはオレの方だから。今でも相変わらず世話

ばっかかけちまってるけど・・・」

そうか、宮さんと竜崎はガキの頃から知り合いだったワケか。

何で竜崎が絡んでるのか疑問だったが、少し謎が解けたぞ。

「オイ、亀鶴っ!!」

「ふぁいっ?!」

リッキーに突然呼ばれた為、思わず甲高い声で返事をしてしまった。

「貴様はこの2人とはどういう関係だ?!」

「だからこの人は全然カンケーねえって言ってんだろォー!!」

とうとう宮さんがリッキーにいきりたった。

「宮さん、リッキーはオレに質問してるんすから、オレに答えさせて下さい」

オレは竜崎風に、クールにキメてみた。

「何だとクォラァ?!　誰がリッキーだクォラァ!!」

アレ?　オレ、何か変な事言った??

リッキーが青筋立てて怒っている。

「き、昨日から下痢なんすよ。で、ジブンとこのトイレに行ったんすけど全部入られてて、下の階もダメで、結局そこの職員トイレしか空いてなかったんす。で、ウンコして出た時、丁度先生が・・・」

「賭けるか？」

はあ？

まだ信じないってか？

人が下手に出てりゃ、調子こきやがって・・・

「どうした、黙ってないで答えてみろ。オマエは潔白だって言い切れるのか？　証拠はあるのか？」

「命・・・」

「なに？」

「命、賭けてやるよ！！」

オレの苛立った気持ちが、ついつい態度に出てしまった。

初めてリッキーに歯向かったあの時と同じ空気が、生徒指導室にも立ち込める。

先コー４人と、宮さん、竜崎も、緊迫した空気の中、黙ってオレを見つめる。

静寂が訪れた。

「もういい、分かった。フン、今日のトコロはこれで許してやるが、今度オマエら悪さしたらタダじゃおかんぞ。場合によっては退学もじさない。覚悟しとけ」

職員便所でウンコする事が、そんなに悪い事なのか？

仕方なく職員便所でウンコしただけで、場合によっては退学なのか？！

何てショボイ学校なんだ！！

・・・と、声を大にして言ってやりたかったが、そこは冷静に大人として受け流した。

「力也先生、吉岡の連中の件ですが、宮が本当に彼らが誰なのか知らないと言い張る以上、警察へは通報しない方がいいのでは？」

内藤だ。

「もちろんですよ。以前、やはり同じようにウチにやってきて、暴力事件を起こした他校の生徒がいたんですが、全員自主退学にさせました。今回は逃げられてしまいましたからね。今、追えば、確実に隠れられますよ。その内必ず仕返しに来るでしょうから、その時に通報しましょう。悪の根は、確実に絶やさなければなりませんよ。吉岡の連中も、コイツらもね・・・」

リッキーの不気味な捨て台詞が耳に残る中、オレたちは生徒指導室から追い出された。

キーンコーン　カーンコーン

リッキーたちのせいで、せっかくの自習が丸潰れだ。

昼休み突入である。

「メシ、一緒に食わない？」

生徒指導室の帰り、宮さんがオレを昼食に誘ってきた。

なぜに？

「ねっ、竜ちゃんもいいよね？」

「はあ。オレは別に構わないっスけど」

竜崎がクールに答える。

「今日はオゴらせてよ。ワビ入れさせてヨ、ワビ」

ワビ？

ワビって何だよ、ワビって！！

それに、今日は・・・って言ったよネ、宮さん。

今度この人に会った時、この前オゴったんだから今日はオマエがオゴれって言われない？

そのままこの人に、昼休みの度にお金出させられない？

それが段々エスカレートして、財布の中のお金巻き上げられたり、家に来て「お母さんのタンスどこかな？」とか聞かれたり、「この車の傷付けたの、君って事でいいかナ？」とか犯人にされたりされない？

・・・ここは断るのが無難だな。

そうだ、弁当持ってきた事にしよう！

「残念っすけどぉ～、オレ、弁・・・」

オレが上手く逃げ口実をしようとした瞬間、前方から、強烈な嫌～なオーラを感じた。

タカノブこと、高城、それに貴船、芒みちるの３人だ。

トイレで痛めつけられていた生徒を先頭に、廊下をこっちに向かって歩いてきた。

「・・・弁当忘れたんで、今日はお言葉に甘えちゃおっかなぁ～」

タカノブたちの顔を見て、オレはとっさにそう答えた。

「ＯＫ、ＯＫ。じゃあオレ、購買部で色々買ってくから、竜ちゃん

と亀ちゃん、先に行っててよ」

か、亀ちゃん？

べ、別にいいけど・・・。

「どこに行けばいいんスか？　いつものトコっスか？！」

竜崎が宮さんに尋ねた。

「そうだね」

宮さんが満面の笑みで答える。

オレが宮さん、竜崎と、親しそうに並んで歩いているのに気付き、タカノブたちはオレを睨みつけている。

学校の1年と3年のトップと肩を並べて歩いてるオレを見て、タカノブたちは何を思うのだろうか？

やっぱりオレを凄いヤツとして、一目置くのだろうか？

それとも、オレが一人になった隙をついて・・・・・

竜崎に連れられて、ひと気のない校舎裏に来た。

ここはオレが1年の時、テルとよくタバコを吸いに来た所だ。

「タバコ、吸うっスか？」

竜崎はタバコを1本差し出した。

「サンキュ・・・」

「・・・・・」

沈黙が訪れる。

今がチャンスか？　竜崎に、オレがジオンだ、オレがシャバ憎のジオンだって正直に話すチャンスか？

第２６話　月光

「亀鶴って、珍しい苗字っスね・・・」

竜崎がどうでもいい事を聞いてきた。

「まぁ、ね。よく言われるよ。所で、竜崎って、血液型何型？」

とりあえず一般的な会話から距離を縮めていくとするか。

「何型だと思います？」

そうきたか。

ここでオレが適当に答えてはずれた場合、しつこく聞いても教えてくれない場合、大概そいつはＢ型だ。

血液型って、関係ないよね・・・みたいな事を言ってきた場合、そいつは大概Ａ型。

さて、こいつはどんな反応するのかな？

「オレはＯ型だと見たけど・・・」

オレは正直に答えた。

「どうしてそう思います？」

「いや、行動力ありそうだし・・・」

「他には？」

「いや、なんとなくだけど・・・」

「O型っスよ」

当たった！

そうか、竜崎はO型か・・・。

「亀さんは何型っスか？」

「亀さん言うな！」

「じゃあ、鶴さん」

「それもイヤだ！」

「名前は・・・」

「亀鶴でいいよ、呼び捨てで」

「いや、オレは先輩を呼び捨てするのは性に合わないっスから」

竜崎のヤツ、オレの下の名前を知りたがっているようだ。

正直に「オレがジオンだ」って言おうとしたが、オレは無意識で自分の名前を出すのを避けていた。

「オレはA型だよ」

「へ〜、そうは見えないっスけど・・・」

「・・・あっ、オレ、O型だった。この前発覚したんだよ。ずっとAだと思ってたんだけど、献血したらOだったんだ。所で、オレってAには見えない？」

「まあ・・・」

「どうして？　オレってやっぱ、O型っぽい？」

「・・・何となく」

そうなのか？

オレは今でも自分はホントはA型なんじゃないかって思うんだが・・・。

最初はO型ってのが発覚した時、オレは大胆で単純で大雑把だったんだって思ったけど、どう考えても几帳面で繊細で悩みやすい性格だ。

「なあ、竜崎。悩みってある？」

「ないっス」

な、何～～～！！

こ、コイツ、テルと同じ事を言ってやがる。

「少しくらいあるだろ？」

「そりゃ～、あるにはあるっスけど、悩んでたってしょうがないんで・・・」

「将来に不安は？」

「考えたって答えは出ないんで、そのうち何とかなるんじゃないかって思ってますけど・・・」

「過去は？」

「振り返らないっス」

ポジティブだ。

これが本来のO型の姿なのか？

思えば、オレの周りにはO型ってテルしかいなかった。

母親はAだし、親父はBだし、妹はABだったから、その3つだけはマニュアルと比べたり、分析したりして血液型の基本性、日常性

を知った。

でも、O型って、思えば・・・

・・・・・・・・・よく知らないや。

大胆で単純で大雑把ってキーワードしか、知らない。

・・・って事は、自分の事、何も知らないって事だ!!!

自分はA型だと思い込んでたから、A型の事ばっかり詳しくなって・・・

逆にO型って、羨ましいっていう嫉妬心の反動で、よく調べなかったような気がする。

O型の事、別物の生物みたいに見てたんだ。

オレとは違う、だから、O型の事は別に知らなくてもいいって・・・。

「ゴメン、待ったぁ〜?」

宮さんが、両手に沢山の弁当やパンを抱えてやってきた。

「マジ、いいんすか?」

「いいよいいよ、ガンガン食べて!!」

伝説の番長は、噂とは大違いで、実に優しい面白い人だった。

そんなガキのような無邪気な宮さんを、まるで親や教師のように厳しく、それでいて包み込むような温かさで見守る竜崎。

年は竜崎の方が下だが、師匠が竜崎で、弟子が宮さんみたいな図式だ。

オレがこの2人に気に入られた理由は単純だった。

リッキーに果敢にも突っ掛かっていったオレの行動と、結果的にあのリッキーを黙らせてしまった事実に賞賛してくれたのだった。

まるで戦場を共にした戦友のように、2人はオレに接してくれた。

オレたちは、まるで初めて会ったとは思えないほど意気投合し、楽しく昼食の時間を過ごした。

そんな中、竜崎は宮さんの存在を『必要悪』だと呼んでいた。

つまり、学校には宮さんのような番長的な存在が必要不可欠だと。

言葉には出さなかったが、オレはその竜崎の考えにどうしても納得できなかった。

力で人を押さえつけ、まとめあげる。

オレも1年の時、学年をシメたつもりでいたし、中学の時もトップ

の経験があるから上の立場の気持ちはよく分かる。

自分はそれが良い事だと思ってやっているし、上手くまとめたいって必死にもなる。

それに、自分に逆らうヤツがいなくなれば、それはもう毎日が平和で快適だ。

気持ちも高ぶるし、益々怖いものはなくなる。

だが、それが周りの人に嫌われる行為だって、本人は気付かないんだ。

こうして落ちぶれて、一人になった時によく分かる。

トップの人間に対し、恐怖や怯え、その他嫌悪感すら感じると・・・。

「凄いよ亀ちゃん、ダブルマスカケじゃん。天下獲れるよ」

宮さんに手相を見られた。

興味がないので、あっそ・・・ってなカンジだが、褒められて嫌な気はしない。

そういえば、ユイもオレと同じ手相してたっけな・・・。

宮さんに言わせれば、アイツも天下獲りだよ。

「それにしても凄い覇気持ってるよね。只者じゃない。ウン、見て分かる」

宮さんは人相も見れるのか？

・・・ま、オレにどんな潜在能力があるのか知らないが、オレは超ダメダメメダメメダメ人間だ。

そんなこんなで一時はどうなるかと思ったが、宮さんや竜崎と仲良く別れた。

「またね」なんて宮さんが言っていたが、オレはまた会うつもりはない。

竜崎にはオレがジオンだって、本当の事を言えず仕舞いだったが、オレが動かなければ2年のトップが誰かなんて事、竜崎も自然に忘れてくれるだろう。

教室に着くなりユイたちに笑われた。

話の途中、オレが突然ウンコに行った事を、コイツらはさんざんネタにしていたと思われる。

勝手に笑ってろと、オレは開き直った。

「なぁ、ユイ、オレってO型に見える？」

オレは、竜崎に言われた一言を思い出し、ユイにも訊いてみた。

「当たり前じゃん。アンタがO型だったって聞いたとき、やっぱりねぇ～って思ったわよ。アンタほど単純なバカはいないじゃん」

単純なバカ??

「何でもす～ぐ信じ込む辺り、単純極まりないと思わない？　アンタ自分の事A型だと思い込んでたから、ずっとクヨクヨ悩む性格を演じてたんでしょ？　血液型マニュアルに踊らされて、それこそ単純な証拠じゃない」

・・・うっ、返す言葉が見つからない。

そんなユイの言葉が、何度もオレの頭を駆け巡った。

教室の窓から見える景色は、今日もオレの心をそのまま映し出したかのように暗く灰色だ。

しか～～～し、それから数時間後、オレの人生は一転する。

ネガティブな人生を今日限り捨て去り、これから超ポジティブな人生が始まろうとは、この時は知る由もなかった。

もうすぐオレは、爆発する。

第２７話　第４話の激昂とはワケが違う

オレは学校が終わると、家に帰るなり、シラミ潰しにＯ型を調べまくった。

窓から漏れる月明かりに照らされ、オレの影が部屋の壁に浮かび上がる。

本、インターネット、あらゆる手を尽くした。

調べるにつれ、次々にオレの知らない事実が浮き彫りになる。

「ＳＮＡＰの日村炊哉、通称ヒムタク。怒ってダメとものヤモリ、世界のたけしのヒートだたけし、自由気ままなタレント、そこのジョージ。ホンネルズの火梨もオレと同じＯ型だ。あんなオレとは別物の生き物のような人たちが、みんなオレと同じＯ型だ。輪田アツ子も、アフロ波恵も深井恭子も、広末洋子もみんな、みんなＯ型だ！！」

そんなＯ型、調べれば調べるほど、自分の性格と当てはまるのに気がついた。

「Ｏ型は悩む時はドン底まで悩むが回復も驚異的早さ？　全血液型中最速を誇るだと？！」

思えばオレは、何事も後に引かないような気がする。

どっちかって言うと、母親や妹なんかより、さっぱりしてるよな・・・。

「O型は外面はさわやかだが、内面は自分の信念や自我が強く頑固？」

まさにその通りだ。

自分の信念は、誰に何と言われようが揺るがない。

「精神の安定性も全血液型中トップ。O型は、何が起きても対処できる自信を持っている？」

そうかも。

「逆境にも強く、スタミナも抜群。現実行動派でバイタリティ旺盛。耐乏生活も何のそのだが、極貧時代をバネに将来は金持ちになる傾向が強い。力の強弱関係を敏感に意識する・・・か」

なるほど、オレだ。

オレは、沸々と熱い何かを感じた。

そしてオレは今まで、血液型ってのは、あくまでデータを元にした占いのようなモノだと思っていたが、血液型と人間性の関係は、理論的にも事実上、相関性が強いという事を知った。

科学的に見ても、それを否定する事は出来ないらしい。

益々激昂した。

オレの体に流れる龍脈のマグマが、灼熱の炎を上げる。

やがて龍頭から大量の煙が噴出し、オレの地球という体はとうとう至る所で噴火を起こした。

地球の真ん中にある核の部分が、とうとう大爆発を起こしたのだった。

バチバチと弾け出したオレを、もう誰も止める事は不可能だ。

おそらく、自分でも制御は不可能だろう。

「ふふ・・・ふふふふ・・・・・・」

オレは震える手を見つめて不敵に笑った。

「オレは、無敵だ・・・。オレは最強だ・・・。今、この瞬間から、オレは生まれ変わった・・・。ふふ、ふふふ。オレは・・・・・・」

ガタガタと体全体が震える。

物凄い歓喜が体の奥底からこみ上げてくる。

こ、これが気付き、これが悟りってヤツか?!

分からない。

何を気付いたのか、何を悟ったのかハッキリと説明が出来ない。

ただ、自分はA型ではなくO型だったという事実を完全に受け入れた直後に起こったのは確かだ。

まさかこれほどまでとは思わなかった。

自分がO型だったと受け入れるだけで、これほど強烈な大爆発を引き起こすとは・・・・・。

今日からオレは、O型だぁぁぁぁぁ～～～～～!!

完っ全に、生まれ変わった、亀鶴ジオン様だぁぁぁぁぁぁぁ～～～!!

初めてA型ではなく、O型だと知った日、オレは生まれ変わった気分になった。

でも、それは気分だけだった。

今は、完全に生まれ変わった。

今までのネガな世界が急にポジな世界に変わった気がするだけだったが、今は完全にネガからポジの世界に変わった。

オレは、血液型が実はA型ではなく、O型だったという単純な事を受け入れる事で、大きく自分の世界を変える事に成功した。

それは言うまでもなく、オレの人生を大きく左右した出来事だった。

些細なことで憂鬱な気分になることも、クヨクヨと将来を悲観的に考えることも、A型だからとか、O型だからとか関係なく、実際は誰にでもある事だと思っていた。

だが、そんな人間にとって必要のないネガティブな気持ちを、自分の心次第で完全に消す事が出来るんだって事をオレは学んだ。

人は変われるんだ！！

第２８話　顔に傷つくっちゃイカンよ

完全に生まれ変わった世界の目覚めの朝は、意外に普通な朝だった。

昨夜の熱々の高揚感も今では落ち着きを取り戻している。

普通に歯を磨き、普通に顔を洗い、普通に朝食を食べ、普通に着替えて普通に出発した。

ここでオレはふと、今までの自分と今の自分を比較してみた。

すると、驚くべき事実が浮き彫りになったのである。

昨日までのオレは、朝起きるとすぐ、「あ～～～、もっと寝てたい～～～」と、目覚めた事に文句をつけていた。

それからしばらくすると、今度は「あ～～～、学校に行きたくない～～～」と、これから起こる出来事に対し、否定的な考えを頭に張り巡らせていた。

嫌々歯を磨き、嫌々顔を洗い、嫌々朝食を食べ、嫌々着替えて嫌々出発していた。

つまり、今日のオレが普通だと思っていた行動は、実は普通ではなかったという事だ。

これはオレの中では大きな違いなのではないか？　・・・と、漠然とだが思った。

オレが普通と感じた普通は、何も考えない状態というより、「あ～～～、朝だ、起きよう」「あ～～～、今日は学校がある」「そろそろ出発の時間だ」という風に、日常を川の流れに身を任せる状態だった。

そして驚いた点は、昨日までならこれから起こる事、つまり未来に否定的だったオレが、意外に楽観的に考えてると気付いた事だった。

今まではひとつひとつを嫌な出来事に結びつけ、被害妄想に駆られていたような気がする。

例えば、「あ～～～、今日も学校だ。喧嘩や事件に巻き込まれなきゃいいな・・・」

朝起きた時から未来を悲観的に見ている。

これでは自分からネガティブなモノを引き寄せ、ネガティブな世界を創造してしまう。

・・・だが、今日からのオレは今までのオレとは違う！

世界は変わったはずだ！！

ポジティブな世界に！！

そんな事を考えながら学校への道を歩いていると、後ろからオレを

冷やかす声が聞こえてきた。

「ヒャハハハハ。安藤、クネクネダンスやってみろよ」

「え〜〜、ムリっすよ。オレ、あんな高度なテクニック持ってないっす」

「やっぱ我慢してる時しかできませんよ、あんな華麗なダンス」

「ヒャハハハハ。朝から腹いて〜〜〜」

長山たちだ。

そうか、ヤツらと登校時間が重なる時間帯だったな、今は・・・。

それにしてもコイツら、明らかにオレの事をバカにしてるよな。

これは、面白くない。

オレはその場に立ち止まり、腰に手を当てて後ろを向いた。

「・・・なぁ、あの花綺麗じゃねぇ〜？」

「あっ、ホントホント」

オレの後ろには、長山を真ん中にして、ズラリと左右に3人ずつ、7人が道を遮っていた。

オレが立ち止まって後ろを見た瞬間、長山は通り道の花屋に関心を

寄せ、みんなはそれにならった。

面と向かってオレと対峙する気はないようだな、この長山ってヤツは・・・。

つまり、オレをおちょくっても、オレは何もしてこないと思ってたワケだ。

長山たちは、花屋の前に並んでいる花を取り囲み、爽やかな笑顔を見せている。

・・・アホくさ。

オレは半分シラケ顔で学校へと歩き出した。

・・・。

世界が変わったと思っていたが、どうやらそんな一気には変わらないようだ。

そりゃ、そうか。

目の前の光景は、オレが今まで築き上げてきた世界そのもの。

コツコツ、自らの手で、ポジティブの世界を築き上げるしかないのかもな・・・。

その日は実に平和な一日だった。

相変わらず隣のユイや佐倉、オッキーとバカ話で盛り上がり、担任のリッキーと目を合わす事なく帰宅の時間が訪れた。

しか～～し・・・

それまでの平和なひと時は、嵐の前の静けさだったんだと、校門前までオッキーと歩いてきた時に感じた。

「なぁ、ジオン。今年も部活入らねぇ～の？　ジオンが入るワケねぇ～か・・・」

「・・・オッキー、前、見てみろ、前」

「え、えぇっ?!　ま、マジ～～～??!!」

何と、校門前にズラリと４人の猛者が立ち尽くしているのである。

それが吉岡の生徒だという事は、見た瞬間気づいた。

しかも、あの伝説の番長こと、宮さんにやられた生徒だってことも。

「なぁ、ジオン。アイツらみんな、ウチの番長にボコられたヤツらだよな？　顔腫らした吉岡の生徒がここで待ち伏せしてるって事は、アレだよね、やっぱり・・・」

「・・・仕返しだろうな」

「でも、番長、今日、休みかもしれないよね?」

「・・・オレは来てると思うけど」

何となく、オレはそう思った。

竜崎と再会した以上、宮さんはこれから無闇に休まないんじゃないか？　・・・と。

「どうする、ジオン？」

「大丈夫だ。道は他にもある」

いつもの道が塞がれちゃ～、しょうがないよな。

ここが通行止めでも、運良くこの学校には、あと2ヶ所の出口がある。

オレとオッキーは、職員や父兄の車両出入り口方面へと歩き出した。

「・・・なぁ、ジオン。あっちにも吉岡のヤツら、立ってない？」

「・・・ひィ、ふゥ、みィ、よォ。確かに向こうも塞がれてるな」

「どうする、ジオン？」

「大丈夫だ。道は他にもある」

いつもの道が塞がれちゃ～、しょうがないよな。

ここが通行止めでも、運良くこの学校には、あと1ヶ所の出口がある。

オレとオッキーは、自転車置き場の隅っこにある出入り口へと歩き出した。

「おっ、流石ジオン。ここには吉岡のヤツらいないみたいだな。でも、オレら別にアイツらとは関係ないから、何もコソコソ帰る事ないんだよな。ははは」

「用心に越した事はねぇ～よ」

「だよね。特にジオンは目立つモンな～」

「・・・へ？　オレってそんなに目立つの？　どこが？！」

「う～ん。何か、うまく言えないけど、何て言うか、オーラ？」

オレとオッキーは、自転車置き場の隅っこにある出入り口から、無事学校を出る事に成功した。

・・・と、その時！！

「オッす」

聞き慣れない太い声が・・・

はあ？

誰だ?!

「すいません、ちょっと、いいっすか?」

顔面を腫らした吉岡の生徒がオレに向かって何かを言っている。

気のせいだろうか?

その隣には、もう一人怪我をした弱そうな生徒がペコペコとオレに頭を下げている。

おそらく気のせいだろう。

その後ろに、もう一人いる。

何か、この人、他の吉岡の生徒とは明らかに何かが違う。

とてつもない恐ろしいオーラを感じる。

宮さんに負けず劣らずの巨体で、頭は丸坊主。

こめかみの辺りと頬に大きな古傷が見える。

あの傷はおそらく刃物傷。

こいつ、ヤベー。

「武蔵の総番長、宮大地さん呼んでいただけますか?」

第２９話　１１人いる

学校の校門前が２ヶ所共、吉岡の生徒によって塞がれてたもんで、オレとオッキーは何気に避けたんだ。

自転車置き場の隅っこの出入り口から、無事学校の外に出れたと思った矢先、待ち伏せしていた吉岡の生徒３人に声を掛けられた。

何で、よりにもよって、沢山ヤンキーがいる中で・・・オレ？

マジ、有り得ねぇ～～！！

ホラ、見てみろよ、周り。

オレよりワルそうに見えるヤツいっぱい、いるだろ？

ど～～～して、オレなワケ？！

「武蔵の総番長、宮大地さん呼んでいただけますか？」

恐らく宮さんに倒されたと思われる生徒が、オレに向かって寝言を吐いた。

「どうする、ジオン？」

オッキー、オマエは『どうするジオン』しか言えないのか？

どうするもこうするもねぇ～だろ？

どうせ逃げたって捕まるだろうし、敵は見た所、計１０人はいる。

コイツらに顔を覚えられた時点で、もうオレとオッキーは逃げられねぇ～よ。

先コー共にチクったトコロで何も解決しねぇ～。

後にコイツらに怯え、捕まってフクロにされるくらいなら、ここで許しを請うか戦うか、道は２つしかない。

いや、待てよ・・・

「場所を変えましょう」

オレは前者でも後者でもない、『移動』を選んだ。

「おい、オレたちは喧嘩しに来たんじゃねぇ～んだよ！！」

吉岡の怪我をした生徒が吼える。

喧嘩しに来たんじゃねぇ～だと？

そんなハッタリ通用するとでも？

仕返しだろ、ど～せ。

「だったら尚更でしょ？　校門の前はマズイっしょ。昨日のイザコザで、ウチの教育指導が目を光らせてますゼ。アイツらケーサツ平気で呼びますよ。そしたら、ここにいる全員、退学っす。もちろん、オレも・・・」

「ジオン、何考えてんだよ？」

「オッキー、悪いが、宮さんを呼んできてくれ。オレたちはそこの第３公園で待つ」

「わ、分かった！」

オッキーは一目散に校舎に向かって走っていった。

第３公園ってのは、学校のすぐ近くにある、滑り台とブランコくらいしかない小さな公園だ。

たま～に子供が遊んでるくらいで、いつもひと気がないので、喧嘩をするには打って付けの場所だ。

オレの先導で、吉岡の生徒を公園に誘き出すのに成功した。

しばらくして、学校の周りに散らばった吉岡の他の生徒も辿り着き、第３公園は凄い光景になった。

武蔵の生徒はオレ一人、他は全員吉岡の生徒だ。

しかもやっこさん方は１１人もいる。

オレは一人、ベンチに座って立ち並ぶ吉岡勢を眺めていた。

あっ、そうだ！

オッキーにできるだけ多勢で来いって言うの忘れたぁ～。

アイツA型だから、気を利かせて助っ人呼んでくんねぇ～かなぁ～？

竜崎も来てくれりゃ～、鬼に金棒だ。

でも、来るのが宮さん一人だったとしても、コイツらまたまた返り討ちだろ～な。

オレの出番はまったくない。

・・・って言うか、最初からオレは『戦う』気は更々ない。

宮さんが駆けつけた時点で、オレは『とんずら』を選択させてもらう！

こういう場合は、『逃げるが勝ち』だっ！！

そんな事をカチコチ考えていると、一人だけ怪我をしていない、あの恐ろしいオーラを持った強面が、オレに向かって図太い声をあげた。

「オイ、貴様・・・」

来たよ、来たよ。

オレが一人だからって、来たよ、とうとう。

ハイハイ、何でしょうか？

「オレは吉岡の番長、大橋剛太だ！　貴様、オレたちをこんなひと気のない所に連れてきて、どういうつもりだ？」

理由？　理由なら、さっきも言ったろ？

耳つんぽ？

あっ、そうか、オレのセリフがあまりにもカッコ良かったから、他のヤツらにも聞かせてやりたいってか？

・・・んなワケねぇ～よな。

「さっきも言っただろ？　昨日のイザコザで、ウチの教育指導が目を光らせてんだよ。アイツらケーサツ平気で呼ぶぞ。そしたら、ここにいる全員、退学だ」

おっ、無意識で敬語じゃなくなってるぞ、オレ。

つまり、臨戦態勢ってワケね、オレ。

今のオレの勇士、誰も見てねぇ～のが辛い！！

「そうか、気を利かせたつもりらしいが、もし、宮大地が来なかっ

たら、オマエ、オレらにどうワビを入れるつもりだ？　このまま宮に会わずに帰れと言うのか？」

何だよこの男、偉そ～に。

オレはオッキーも信じてるし、宮さんも信じてるんだよ・・・

「絶対来るよ」

「宮はオマエを出し抜けて、シカトこいて帰っちまうかもしれねぇ～ぞ。そしたらオマエ、責任とってワビ入れろや」

はあ？

ナメくさりやがって・・・

「ワビって何だよ、ワビって」

勢い。

そう、勢いでオレは目の前の吉岡の生徒と睨みあった。

もちろんこの時は、目の前の男が吉岡の番長、大橋剛太だなんて知らなかった。

どっかで自己紹介したらしいが、何気に右耳から左耳へ流していたのだろう。

「ワビがイヤならオレとタイマンで勝負だ」

「のぞむところだ！！」

第３０話　必要悪の理由

一触即発！

オレは吉岡の猛者を目の前にし、一歩も引けない状態に陥った。

メチャクチャ強そうな大男と、その後ろに１０人のヤンキーが面を揃えている。

「度胸あるなぁ～、貴様ぁ～」

目の前の男は不気味に微笑んだ。

・・・と、その時！！

「ジオン！　待ったか？！」

オッキーの声だ。

後ろを振り向くと、オッキーを先頭に、宮さん、そして竜崎が公園に入ってくる所だった。

ひゃっほぉ～！

助かったぁ～～～!!

「よォ、大橋ぃ～」

宮さんだ!

やっぱり宮さんは来てくれたっ!!

ニッコニッコしながら宮さんが、こっちに向かって堂々と歩いてきた。

はて?

どうしてこんな状況なのに笑ってるの?

オッキーはオレの顔を見ると、二カッと歯を見せて笑い、そのまま手を振って去っていった。

あっ、オッキー、ズルイ!

オレも帰るぞ!!

「大橋ぃ～、来るなら来るって言えよぉ～」

「だってオマエ、ケータイ出ねぇ～し」

「あっ、そうか、ゴメン。オレ、今、ケータイ止められてっから」

「はっはっはっはっ、相変わらずだなぁ～、宮ぁ～」

何だコイツら・・・

ニッコニコしながらお互い肩を叩き合っているぞ。

な、仲良しなのか?!

「あっ、亀ちゃん、ありがとネ」

「そうか、やっぱり宮の知り合いか」

「オウ」

「暇だったから、時間つぶしに彼をからかって遊んでようかと思ったんだ。最初は見せ掛けだけの、ただのハッタリヤロォかと思ってたんだが、後悔したよ。まさか、こんな度胸ある兄ちゃんが武蔵にいるなんてな。大橋剛太の名を聞いて怯まなかったヤツは初めてだ。だっはっはっは」

はて?

大橋、剛太?

どっかで聞いた事あるような・・・

吉岡の、そうだ、吉岡の番長が確か・・・オオハシ、ゴウタ・・・・

・

こ、こいつが大橋剛太？

オレが今まで対峙してたのは、吉岡の番長？

な、な、なぁ～～にぃ～～～～？！

「亀鶴君？　ホント、申し訳ない。しかし、宮、下のモンをしっかり教育してんだなぁ～。オレも見習わなきゃな・・・」

「コイツらは、オレの下でも何でもない。対等・・・いや、むしろオレより上だ！」

宮さんはオレと竜崎を親指で指差しながら言った。

宮さん、アンタ、褒めすぎ。

ヒトを総番長より上にすんな、勝手に！

「へ～、あの人が吉岡の大橋剛太か。この状況を見る限り、アイツらは仕返しじゃなくて、ワビを入れに来たみたいっスね」

竜崎だ。

「竜崎、オマエもあの番長の名前知ってたのか？」

「ま、一応、名前だけ・・・」

「吉岡の番長、一体どんなヤツなんだって思ってたけど、予想通り

の猛者だな」

「見た感じ、宮さんにそっくりっスよね」

「そうそう、オレもそこ、気になってた。まさに同キャラ」

「そうなんス。キャラかぶってるっス、あの2人。見ててウザイ」

「そこまで言うか？　竜崎・・・」

「今回は、オレの不手際でウチの1年、下のモンが宮に手を出してしまって、申し訳ない。どんな事でも聞く、言ってくれ」

やっぱり吉岡の番長、自ら宮さんにワビ入れに来たみたいだな。

不手際って言っても、この1年だって入学して間もなかったワケだし、単なる売名行為でウチに乗り込んできただけだろ？

しょうがないって気もするが、ハッキリ言って、無謀だったな・・・

罪を償うってのも大事だとは思うけど、やっぱ宮さん次第かな？

「別にい～よ。コイツら知らなかったんだし。1年はイキがいいよ」

流石、宮さん、心が広い。

「・・・そう言ってくれるか、宮」

大橋は涙ぐんでるように見える。

熱い男だ。

「ウチはたまたまコイツがシメてくれたから助かったけど、場合によっちゃ、ウチも吉岡に手を出したりするアホがいたかもしれない。それを考えると、お互いさまだよ」

宮さんは竜崎を親指で指差しながら言った。

「ありがとう、宮。オレの方から、野牛とかには言っとくから。早めに、ちゃんと下のモンまとめとけってな。そうしねぇ～と、ウチみてぇ～にムチャするヤツ出てくっから」

・・・竜崎が言ってた『必要悪』の意味が、少しだけ分かった気がする。

こ～いう事か。

宮さんが他校と仲良くして学校を守ってるお陰で、揉め事や戦争が起きずに済んでるんだ。

去年とか、もしこの人がウチを守ってなかったら、とっくにテルが他校との喧嘩に巻き込まれて、オッキーとか兵隊として駆り出され、もしかすると大怪我とかしてたかもな。

野牛とかおっかねぇ～し！

ちなみに野牛ってのは、野牛農業高等学校、通称『やぎゅう』だ。

ド田舎の荒れた高校で、生徒の半数は気合の入ったヤンキーだ。

そして驚くなかれ、今時学ランなのだ。

少数だが女子もいて、何と制服はセーラー服という、何とも摩訶不思議な高校だ。

そんな時代遅れの、地方の片隅にある高校だけあって、問題事も数多く、ある意味、県長も市長も見て見ぬフリを決め込んでるという噂も多々ある。

オレは首を突っ込んだ事がないので詳細は不明だが、とにかく恐ろしい高校なのには違いはない。

これぞまさしく、『さわらぬ神に祟りなし』ってヤツだろう・・・。

「そう言えば、竜ちゃん。2年って誰がシキってんの?」

宮さんが思い出したかのように竜崎に聞いた。

「テルって人が学校辞めたらしいんで、今はジオンって人がシメてるらしいっスよ」

きたぁーーーー!!

第３１話　運命共同体

とうとう竜崎の口から『ジオン』の名が出たぁーーー！

「そうか、今度挨拶しとかんとな」

宮さん、挨拶せんでいい！！

ここにいるから！

ホントはここにいるオレがジオンだから！！

「宮、本当に迷惑を掛けた。申し訳ない！」

吉岡の番長を筆頭に、後ろの１年たちは全員頭を下げた。

数十分前には想像も出来ない光景だ。

「ところで、大橋。今回の件なんだが、裏で指揮とったヤツとかいねぇ～のか？」

「さすが、鋭いな、宮。確かにアイツらまとめたのは秋鹿だとか言ってるヤツはいるが、オレは秋鹿を信じてるよ。なんたって、オマエの中学ん時のダチだしな・・・」

「アキガ・・・ジュンか。確かにオレの中学ん時のダチだが、アイツはオレと違って頭良いから・・・。何考えてっか、昔から読めねぇヤツなんだよ、準は。一応、気をつけろよ、大橋」

「オウよ」

こうして吉岡の猛者、番長を含む１１人は去っていった。

やっとの事で解放されたオレは、緊張が解けたせいで、疲れが体にドッときた。

「いつもいつも、ホントにありがとネ、亀ちゃん」

ホントだよ!

もう、オレをアンタの運命に引き込まないで!!

「お疲れ様っス」

竜崎がニコやかに缶ジュースをオレに投げてよこした。

気が利くなぁ～。

・・・でも、ちょっぴり缶コーヒーを期待したんだけどな。

コレ、紅茶だよね。

しかも、ストレートだよね。

味、ないよね、ストレートって。

ミルクかレモンティーが良かったなぁ～、なんて・・・。

オレは心とは裏腹に、爽やかな笑顔で紅茶を飲んだ。

プハ～。

あぁ～、タバコがうまい。

「ここ、良い喫煙スポットっスね」

竜崎もおいしそうにタバコを吸いながら言った。

「桜、綺麗だねぇ～」

宮さんは鼻から大量の煙を出しながら、ソメイヨシノの木の枝から落ちてくる桜の花びらを、キツネ目で眺めている。

「もうすぐゴールデンウィークっスけど、何か予定あります？」

竜崎が不特定多数に訊いた。

「オレは・・・忙しいや」

別に忙しくないけど、コイツらとはこれ以上かかわりたくない。

「そう言えば、竜ちゃん、合コンがあるとか言ってなかった？」

出たっ、B型特有の会話切り替え。

「・・・言ってないっス。宮さん、オレが同級生の女の子と話してる会話を勝手に盗み聞きしただけじゃないっスか。・・・ったく」

「5月5日、だったよね？　オレ、空いてるよ、その日」

「合コンじゃないっスよ、別に。ただのカラオケっス」

何か、竜崎のプライベートに、宮さんが強引に乱入したがってるみたいだ。

「女の子だけなの？　へ～。一体、何人来るの？」

「う～ん、分からない」

「オレもいいでしょ、竜ちゃん。まぜてよ～」

宮さん、必死だ。

そんなに女が欲しいのか？

「ほんじゃ、オレはこれで・・・」

今が帰るチャンスと見たオレは、2人に手を振って第3公園をあと

にした。

そんでもってゴールデンウィーク突入の前日、４月２９日。

オレの人生で最もハッピーな出来事が訪れた。

何と、佐倉がオレの家に、５月４日の夜、遊びに来るという！！

正確にはユイとオッキーのオジャマ虫の２人も、もれなく付いてくるのだが・・・。

信じられるか？

あの、佐倉が、５日後、オレの家に来るってさ。

い～～～ヤッホォ～～～！！

オレはハシャギまくった。

ハメを外しまくった。

もう、ノリノリだ。

・・・一人で、だけど。

５月４日は最高な一日だ。

まずは午後2時15分、大花見堂公園近くのクリーニング屋『顔のワイシャツ』前で待ち合わせ。

その後、大芝生で軽く花見の小宴会。

神社や公園の屋台で楽しんだ後は、ユイのバイト先のカラオケで2次会だ。

牛丼食うぞォ～～！！

そして、カラオケ後は・・・ムフフ！！

丁度その日はウチの家族はみんな旅行で留守なんだ。

ウチで3次会！

オールナイトで大パーティーだぁぁぁ～～～～！！

オレは学校が終わり、家に着くなり、入念に部屋の大掃除を始めた。

ついつい夢中で掃除をしてしまい、気がついたら徹夜だった。

1日を無駄に過ごしてしまったが、まだ5日も休みが残っている。

・・・と、思ったが、そんな休みはあっけなく過ぎ去った。

とうとう5月4日、最高な日が訪れた。

思えば今まで、掃除とか今日の日の為の服選びとか、佐倉との会話

のイメージトレーニングくらいしかしてないような・・・。

超楽しみに待っていた、５月４日。

この日に・・・

ユイ、竜崎、宮さんをも巻き込む、あの、忘れもしない大事件が訪れようとは・・・

この時はもちろん知る由もなかった・・・・・。

第３２話　ハジケろ！！

５月４日。

予定通り、午後２時１５分、待ち合わせ場所の大花見堂公園近く、クリーニング屋『顔のワイシャツ』前へ着くと、すでにオッキーが待機していた。

流石、Ａ型、時間にはウルサい。

相変わらず七五三のようなカッコウをしている。

こんな小春日和に、ネクタイのスーツ姿で暑くないのだろうか？

少なくともオレは、休みの日くらいネクタイから解放されたいけど・・・。

「よぉ、ジオン。おはよう」

「ユイたちはまだか？」

「見ての通り。待ち合わせ時間はとっくに過ぎてるんだけどな。電話入れてみるか？」

待ち合わせ時間、とっくに過ぎてるだと？　大げさな。

まだ予定より5分も経ってないから。

「予定よりだいたい5分くらい遅れるのがセオリーなんだよ」

「誰の？」

「オレの」

「結局ジオンのセオリーだろ？　自分のものさしで世の中の基準を計ってはダメだよ」

オッキー、オレはオマエのセリフをそっくりそのまま返してやりたいぞ。

今日の所はオレも機嫌が良いから許してやるが・・・。

「待ったぁ～？」

佐倉だ。

イエローの長ティーシャツに、下はジーンズ、いたってシンプルだ。

それに比べて隣のユイは、監獄から逃げてきたようなカッコウをしている。

ファッションだと思われるが、黒い拘束ジャケットに、下は十字架レーススカートに穴だらけの網タイツ。

「早く行こっ！」

そんな脱獄囚さながらのユイが、到着して早々オレたちを煽った。
まるでオレたちを随分と待っていたかのような口振りで・・・。

「綺麗～！！」

佐倉が桜を見て感激している。

それは、オレが隣にいるからさ・・・と、言ってみたかったが、明らかに場の空気を乱すので止めておこう。

しかしこの季節、この大花見堂公園は相変わらずの賑わいだ。
祭日だけあって、人ごみは予想できたが、これは想定外の混雑だ。
ちょっと離れると迷子になりかねない為、オレたち４人は出来る限り近寄って歩いた。

普通は男女４人の行動の場合、大抵男２人が前を歩き、女２人が後ろを歩くパターンが多いが、オレたちはユイの突飛な行動を常に監視していなければならない為、そんな照れくさいなどという初々しい感情は捨てねばならなかった。

「おっ、金魚すくいやろうよ、金魚すくい」

わたあめ、りんごあめ、焼きイカを買わされた挙句、とうとうお遊戯が始まった。

「ユイちゃん、そんなのいらないヨ。ホラ、遊んでないで、行くぞっ！」

佐倉はそんなユイには付き合わず、マイペースで楽しんでいるようだ。

「ぶ～っ」

「面倒だよ、金魚は。意外にしぶといから。ウチの金魚、もう１５年以上生きてて、フナくらい大きくなってるから」

ふてくされてるユイを言い聞かせてるつもりだろうけど、オッキー、それって金魚ではなく、フナだったんじゃないの？

「そうそう。私の家の金魚もね、こ～んな大きくなっちゃったの～」

佐倉まで。

それは屋台特有のアレなんじゃなくて？

その金魚って、ちゃんと尾ヒレとかフワフワしてるの？　違うでしょ？　フナでしょ？　フナ？！

「アタシのおばあちゃんちの水槽にも、でっかい金魚が２匹いた～！！　あんなの飼いたくないワ～」

ユイまで言ってるよ。

ソレってフナじゃないの？

やっぱ金魚なの?!

3人が3人共言うんなら間違いないのかな?

金魚ってそんなに成長する生き物だったんだ・・・。

オレたちは、てんやわんやの屋台通りをやっとの思いで掻い潜り、目的地の大芝生まで辿り着いた。

めぼしい場所を見つけると、佐倉が大きめのレジャーシートを敷いてくれた。

「ジャジャーン」

な、何と、ユイの黒いリュックから、ビ、ビールがぁ〜〜〜!!

「おい、おい、オレたち未成年だぞ? 大丈夫なのかよ?!」

オレは先陣をきって、一応お決まりのセリフを吐いてみた。

もちろんそんなチンケな心は微塵もない。

「そうだよぉ〜。もし補導されたらどうするのぉ〜?」

正義感の強いA型佐倉は、案の定オレの正当な言葉を後押しする。

これも計算の内だ。

「ちょっとくらいなら・・・」

言うと思ったぞ、オッキー。

「大丈夫よ！　アタシは一人でも楽しんじゃうモンねぇ～～～！！」

プシュン

ユイは豪快に缶ビールを開けて飲み出した。

そうそう、B型は自分の意見を反対されると強引に押し通そうとする。

それを上手く利用すれば、たとえマジメで心配性なA型が2人もいたとしても、難無く問題クリアーだ。

結局最初は渋ってた佐倉だったが、ユイの持ってきたチューハイを軽々飲み干した。

・・・ま、ジュースのようなモンだけどな、チューハイなんて。

そんなこんなで暖かい陽気と周りの雰囲気に呑まれ、オレたちはホロ酔いどころか結構酔っ払った。

酒は天の美禄だけあって、これを機にオレたちの仲も今まで以上に深まると思われ・・・。

それもこれも、天真爛漫なB型、ユイのお陰でもあるな。

「・・・ところで、ユイ、今日、これから仕事なんだろ？　聞くまでもないが、大丈夫なのか？」

「だに言っでんのよ、ジオンちゃん。ジョブよジョブ！！」

「ジョブならいいが、時にはムリせず休んでもいいんだゼ」

「ヤだ。絶対行く！　誰がアンタの指図ナンかに従うモンですかっ！！」

「何ムキになってんだか・・・。これだからB型は・・・」

「何ヨ！　ついこの間までA型だと思ってたクセに～」

「カンケ～ねぇ～だろ？！」

オレは急に催してきたので、トイレに行くべく立ち上がった。

「気をつけろよ、ジオン」

「オウ・・・っとっとっとっとっと！！」

オッキーの助言も虚しく、オレは芝生を豪快に駆け下りた。

・・・と言うのも、オレたちが座ってた場所は比較的高台に位置していて、トイレの方角はちょっとした坂道になっていたのだ。

アルコールも手伝って、オレはまるでスキップするかのように、大股の全速力で芝生を駆け抜けた。

「あっはっはっはっは」

佐倉の大きな笑い声が後ろから虚しく響く。

「きゃはははははは」

ユイも腹がよじれるほど笑い転げているようだ。

「ばっはっはっは」

オッキーの笑い声が小さく聞こえる中、オレはどうしていいのか分からず、とにかく足を止めようと必死になった。

「はははははははは」

周囲から沢山の笑い声が聞こえる。

どうやらオレを見て、みんな爆笑しているようだ。

そりゃそうだ。

お酒の席で、こんな楽しいショーが突然始まったのだから・・・。

「・・・とっとっとっとっと！！」

マジ止まらねぇ～！！

オレはそのまま大芝生を駆け下りると、坂道の後半で大きな石に躓き、大きくでんぐり返しした。

しかも2回、3回、4回。

そのまま忍者のようにスチャッとアスファルトの道に着地したので、オレは何もなかったかのように、ポケットに手を入れて、平然とトイレまで歩いていった。

第３３話　ユーモアを忘れるな

やがて薄暗くなってきた。

「そろそろアタシ、一旦家に帰って、支度してバイト行かなきゃ・・・」

ユイは片づけを始めた。

「ウチに帰っちゃうと、バイトとか行きたくなくならない？」

佐倉が後片付けをしながらユイに聞いた。

「シャワー浴びてから行くから大丈夫。ねぇ、ジオン。予定通り、カラオケ終わったら、アンタんち行くけど大丈夫なんでしょうね？」

「もちろんだ」

「私もシャワー浴びたいなぁ～。私、帰ろうかなぁ～」

な、な、な、何ィ～～～～～？？！！

い、一番オレが恐れていたセリフじゃねぇ～～～かぁ～～～！！

マズイ！！

このまま、もしもユイが「アタシも面倒くさくなっちゃった」なんて言い出したら、もう完全消滅だ。

せっかく佐倉がウチに来るって言うから徹夜で大掃除までしたのに！

5日も楽しみにしてたのにぃ～～！！

ど、どうする？

佐倉はA型、オッキーもA型、ユイはB型、オレはO！！

こんな時、どうすればいいんだ？！

オレの頭は、突然の想定外な佐倉の言葉について行けず、かなりテンパっている。

「ジオンの家で浴びるといいじゃん」

ユイが素っ気無く言った。

「いいの？」

はれ？

そこ、いつもなら、いつもの佐倉なら、「え～？　いいよぉ～」じゃない？

気を使ってんだか嫌がってんだかハッキリしない言い回しじゃない？

これはアルコールのせいなのか？
それとも・・・・・

「ジオン、オレもさ、シャワー浴びたい。後で貸してくれ」

「あ、ああ。勝手にしろよ」

ダメだ、誰がテメェなんぞにフロ貸すかって言いたかったが、佐倉の事まで非難してそうだったので、オッキーをイジメるのは止めておいた。

「じゃ、アタシは一旦帰ってから行くから。みんなは先にカラオケ楽しんでてねぇ～。バイバ～イ」

「ユイ、後で牛丼なぁ～！！」

ユイは親指を立ててニッコリ笑うと、足をグラつかせながら芝生を下りていった。

ユイは芝生を下りながら、何度も後ろを振り返り、オレの顔を見ながらクスクスと思い出し笑いをしている。

おそらくオレの豪快な爆走ステップを思い出して肩をヒクつかせていると思われ・・・。

さてさて、一先ず佐倉がウチに来るっていうプランの変更はなさそうだし、ちょっぴり頭がガンガンするけど、気を取り直して2次会

のカラオケ行きますかっ。

今日こそ、牛丼食うぞォ～～！！

カラオケに到着するやいなや、佐倉はトイレに駆け込んだ。

よっぽど我慢してたんだな・・・。

「部屋はこの間と同じ、あの大部屋だってさ。ユイが気を利かせて予約入れてくれてたみたい。あっ、ジオンはその空グラス３本持ってきてよ」

オッキーが、カウンターから選曲用のリモコンと薄っぺらい新作用の歌本を受け取り、長～いマイクスタンドを片手に持ち、脇腹にタンバリンを挟み、アフロのカツラを被って大部屋に向かった。

随分ノリノリだゼ、オッキー。

「オレ、佐倉を待ってっから。なあ、オッキー、オマエ、何飲む？持っててやるよ」

「サンキュー。オレ、コーラ」

ふふふ、コーラか。

ならば、アイスコーヒーを入れてあげよう。

でも、どうせ一口目に「なんだコリャ」で終わりだよな。

くだらねぇ～からオッキーをイジメるのは止めとくか・・・。

「あっ、あれ？　沖田君は?!」

佐倉がトイレから戻ってきた。

「先、大部屋に行った。この前のトコだよ」

「あそこ、広くていいよネ」

佐倉がニッコリ微笑んだ。

「何飲む?」

オレと佐倉はドリンクバーへと向かった。

近い。

佐倉が近い。

嬉しい。

いい香りがする。

フレグランス?

そうかっ、佐倉のヤツ、トイレに行って香水をつけてきたのか。

おっしゃれ～。

・・・でも、もしかするとウンコして、臭いを消す為かもしれねぇ～ぞ・・・・・・・・・・・みたいな悪い想像は止めとけ、オレ！！

「あっ、ゴメン」

何気に佐倉とオレの手がぶつかった。

や、柔らかい。

何とも言えない素敵な感触だ。

佐倉の横顔をチラ見すると、頬を赤らめて、ニコやかにグラスにジュースを注いでいる。

その頬の赤さは、アルコールのせいなのか、それとも照れくさいせいなのか、そんなのどうでもいいくらい、カワイイぜ、佐倉！！

オレ、もう、正直に自分の気持ちをアナタに伝えます！

好きです、惚れてます！！

・・・でも、言葉に出して、言えっこねぇ～よなぁ～～～。

清水の舞台から飛び降りるような一大決心をするには、まだまだ経験不足ですわ。

部屋に向かう途中、オレの視界にとんでもないモノが飛び込んできた。

何か、夢のような、おとぎ話のような無邪気な空間から一気に目を覚まされ、邪気たっぷりの現実世界に強引に引き戻されたような気分だ。

オレの視界に入ったのは、個室で一人、歌の練習をしていると思われる、宮さんの姿だった。

でも、よく考えると・・・宮さん、あんな恐い顔して案外おちゃめだよな。

例の合コン？　カラオケパーティ？　5月5日って言ってたよな、確か。

5日って言やぁ、明日だ。

明日の為に練習してんだよ、彼は。

けなげ、実にけなげだ。

そっとしておいてやろう・・・。

「どうした？」

「あっ、いや、何でもない」

ここで佐倉にあんな怪物の姿を見せたら、それこそ興醒めだ。

部屋に着いてソファーに腰掛け一息つく間もなく、オッキーがアフロヘアーで怒りの叫びをあげた。

「ふざけんなよジオン！　こんなくだらないイタズラやめろよなぁ！！」

「どうしたの？　沖田君」

「オレ、ジオンにコーラ頼んだのにさ、コレ、コーヒーなんだよ。アイツ、わざとだよ、わざと！！」

「はっはっは」

佐倉は楽しそうに笑っているが、オッキーはマジで激怒している。

ユーモアのないヤツだ。

別にイタズラする気はなかったんだが、すっかり佐倉に夢中になってたせいで、ヤツのドリンクなんて適当に注いでたんだな、オレ。

「責任とって交換してこいよ」

「分かったよ」

オレはオッキーのグラスを手に取った。

・・・しっかし、コイツ、ジュースを間違っただけで随分怒ってんなぁ～。

コイツなりの場を盛り上げる為の演出なのか？　それとも単なるアルコールによる感情の高ぶりなのか？

「沖田君、それくらいで怒っちゃダメっす」

佐倉がオッキーの腹ボテに、正拳突きをお見舞いした。

・・・ま、今日の所は佐倉に免じて許してやるか。

しっかし、今日の佐倉、何てカワイイんだ。

ドリンクバーに向かうまで、オレの頭の中は佐倉でいっぱいだった。

今日一日、体中に心地良く浴びた春の香り。

桜舞う日本の美とも言うべき絶好の季節、このタイミングに、君とこうして出会えた奇跡。

何億、何兆、いや、それ以上の天文学的数値の確率で僕たちは今、ここにいる。

あぁ、佐倉、高嶺に咲いた一輪の花、佐倉愛。

僕は・・・　僕は・・・　僕は君に・・・　あぁ・・・　恋をしている・・・・・・

ロビーまでさしかかった時だった。

またしてもオレの心地良いロマンチックな心を引き裂き、いつもの現実世界に引き戻すヤロォーがオレの視界に入ってきた。

「あれ？　亀さんじゃないっスか?!」

第３４話　優しさと極悪は紙一重？

「亀さん言うな！！」

「じゃあ、鶴さん」

ロビーは華やかな女の子たちで溢れていた。

・・・３、４、５・・・・・

実に、５人もの女の子がロビーで所狭しと戯れている。

女５人、男１人？　まるでハーレムぢゃねぇ～か？！

これは、一体これはどういう事なのですか？　竜崎君。

説明してもらおうか？！

「合コン？　カラオケパーティー？　明日じゃなかったっけ？！」

オレは、一人黙々と歌の練習をする宮さんを思い浮かべながら、竜崎に問い詰めた。

「明日っスよ。今日はたまたま誘われたんで、暇つぶしに来ただけっス」

たまたま？　暇つぶし？！

「ちょっと、こっち来い」

オレは、ロビーのテーブルの椅子に腰掛けていた竜崎を、ドリンクバー近くまで呼んだ。

「どうしました？」

「そこで、宮さんが一人で歌ってっから、邪魔するなよ！　・・・ってか、絶対見つかるなよ！！」

「え？　どうして宮さんが？！」

「オレの口から言わせるな！　男なら気付け！！」

「は、はあ・・・」

「いいか、絶対見つかるなよ！！」

「は、はい・・・」

「よし、分かればいい。ところで竜崎君。あのコたちは・・・クラスのコかな？」

オレは初々しい女子たちを横目で見ながら竜崎に訊いた。

「紹介してほしいんスか？」

「バカ言っちゃいけないよ、チミ。こう見えてもオレには・・・」

「あ～、彼女いるんスか？　それは失礼しました」

「いや、いるっつ～か、何つ～か・・・」

いねぇ～し。

ホントは彼女いねぇ～し。

でも、何か竜崎の前では彼女いねぇ～って言いたくねぇ～！

何か、言いたくねぇ～！！

負けを認めたみたいで、何かイヤだ！！！

「クラスのコが2人と、あとは他のクラスのコっス」

「なるほど～。通りで初々しいワケだ」

「へ？」

「ホラ、2年にもなると、みんな化粧したりオシャレしたりして、女の子～って言うより、ギャル～ってカンジになるだろ？」

「オレ、そんなヤツらとは、一緒にカラオケ来ませんよ。ガングロとかコギャルとか、チャラチャラしたヤツとか、ケータイいじってばっかいるような女は嫌いっス」

「ふ～ん。あ～いうマジメそうな女学生とならＯＫなワケか・・・」

「ははは。・・・っつ～より、アイツらマジメっスけど、ぶっちゃけウザイっス。ハッキリ言って、女は苦手っスから」

「苦手？　説得力ねぇ～なぁ～」

「・・・だって、オレ、断り方知らないんですモン。誘いをヘタに断って、傷つけたくないし」

「だから女共は勘違いすんだよ。ハッキリ断らねぇ～と、余計傷つけるぞ。オマエは優しさのつもりらしいが、ハタから見りゃ、それは極悪だ」

「ゴクアク？！　それは酷い！！」

「あぁ、極悪だ。オマエのやってる行為は、ホント極悪だ！！」

「・・・別に、カラオケだけっス」

「ホントにそれだけか？！」

「ただの友達っスから・・・」

「深入りすんなよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・オ、オレは、極悪なのか？　・・・・・・・・・・・・・・・・・だと、したら・・・・・・・・・・・・・・・・・オ、オレは、どうすればいいんだ」

竜崎は金髪の髪をかき上げながら、悔しそうな顔をしている。

今にも地面にうな垂れそうな勢いだ。

何なんだ、この竜崎の弱気な発言、弱気な表情は。

これが1年をたった2日でシメた男のセリフか？

あの、痛快なポジティブオーラはどこ行った、竜崎。

オレのギャグが通じないほど、なぜにそこまで混乱する？

カラオケの受付が終了し、女の子5人が竜崎のもとへやってきた。

オレは真剣な顔で床を見つめる竜崎を余所に、そそくさとドリンクバーへ急いだ。

竜崎のうしろ姿は非常に淋しく、何とも後味が悪い。

オレのせいか？

違うよな、アイツが勝手に自爆しただけだよな？

女の事で、すっかりネガティブになってしまった竜崎の身を多少心配しながら部屋に戻ると、佐倉が可愛らしい声で、例のまゆを熱唱している所だった。

「ホラよ」

オッキーの手元まで、アメリカンのテキサスのバーテンがよくやり

そうな、グラスを滑らせるパフォーマンスをやってみた。

バシャン

見事にオッキーにぶつかって、そこら中、ビチョビチョになった。

「～♪、あっはっはっは」

佐倉は唄いながら爆笑した。

「いい加減にしろよ！」

オッキーはふてくされながら、こぼれたコーラをおしぼりで拭った。

ジュワワワワ

コーラの炭酸が虚しく音を立てて拭き取られる度、オッキーの眉間のシワが濃くなった。

「何、怒ってんだよ」

そりゃ～怒るわなぁ～とか思いながら、一応定番のセリフを吐いてみた。

「怒ってねぇ～よ」

言うと思ったゼ。

さて、ど～すっかな。

A型を怒らせると後が厄介なんだよな。

長〜く、引きずるから。

でも、ちょっとやそっとじゃ怒らないA型のオッキーが、なぜにこんなに機嫌が悪い？

そんなに酒癖が悪そうに見えないし、ここに来るまで機嫌が良かったような気がするんだけどなぁ〜。

「オレ、ちょっと、トイレ行くから・・・」

佐倉が唄い終わったと同時に、オッキーが席を立った。

「ねぇ、ジオン君、何か、沖田君の様子、おかしくない？」

オッキーが部屋を出て行ったのを見計らって、佐倉が小さな声で囁いた。

〜♪

オッキーが入れたと思われる、ナツメロの曲だけが寂しく鳴り響く。

「自分の曲そのままにして便所行くようなヤツじゃねぇ〜けどな、アイツ。よっぽど便所に行きたかったか？」

それとも、オレと佐倉を2人きりにさせようっていう、アイツのにくい魂胆か？

「何かね、私たちが部屋に来る前に、誰かからメールが来てたみたいなのね。そんで、さっきもジオン君がいなくなってから、ずっとケータイ気にしてたの。私、ちょっと様子見てくる」

佐倉はジュースを一気飲みすると、あっと言う間に部屋から飛び出していった。

おいおい、今、明らかに一気飲みしたよね？

そんなにオレと2人きりになるの、恥ずかしかった？

まだ2人きりは、オレたちには早いのかもな、ウン。

～♪！！

オッキーの入れた寂しいナツメロの曲が終了した頃、佐倉が帰ってきた。

「今ね、沖田君、誰かの部屋から出てきたような気がしたんだけど、気のせいよね？」

第35話　何もしてくれねーから

オッキーが誰かの部屋から出てきたって?!

オレは真っ先に竜崎と宮さんの顔を思い浮かべた。

・・・・まさか、な。

じゃあ、一体、誰の部屋から出てきたってんだ?!

佐倉が部屋に戻って間もなく、オッキーも帰ってきた。

「おい、オッキー、ちょっと来い」

オレは佐倉の顔を見ないようにしながら、オッキーを廊下へ連れ出した。

思えば、いつの間にやらアフロヘアーじゃなくなっている。

結構似合ってたのに、残念だ。

見損なったぜ、オッキー。

「どうしたんだよ」

オレは険しい顔で遠くを見つめるオッキーに問いただした。

「何でもねーよ」

「嘘つくなよ」

「ホントだって」

「賭けるか？」

「何をだよ」

「命」

「はあ？　ふざけんなよ」

オッキーは引き止めるオレの手を払いのけて、部屋へと帰っていった。

こりゃ～、胸クソ悪い。

あのヤロォ～、絶対何か隠してやがる！

オレは少々カッとなったが、これからの事を考え、ここは冷静に踏み止まる事にした。

ここでオッキーと内輪揉めしてしまったら、せっかくのオレの部屋での3次会がオジャンになりかねない。

トイレで小便でもしながら頭を冷やす事にした。

トイレで小便をしていると、誰かが入ってきて、手洗い場の鏡の前で鼻歌を唄い始めた。

「フンフンフ〜ん♪」

トイレに人居るの知らねぇ〜のかな？　ウンコルームにも誰か居るのに。

・・・どうでもいいけど、その鼻歌気になるなぁ〜。

なんだっけなぁ〜、その歌。

曲は分かるんだけど、歌詞も出てこないし、曲名も出ない。

誰の歌だっけなぁ〜？

バタン

その時、ウンコルームから誰かが出てきた。

「来た？　アイツ」

ウンコルームに居た誰かが、小便をするオレの後ろを通って、手洗い場まで歩いていった。

「何ウンコしてんだよ。オレ一人で対応してたんだゼ」

どうやら今までウンコしてたヤツと、鏡の前で鼻歌を唄ってたヤツは知り合いのようだ。

「悪ぃ・・・で、いくら持ってきたの？　アイツ」

「３万」

「３万？　シケてんなぁ～。ホントにカンパ回してんのか？！」

「分かんねぇ～けど、とりあえずって言ってたゼ」

何の話だ？

カンパ？

オレが小便をし終わるのと、そいつらがトイレから出て行くのは、ほぼ同時だった。

「アイツらっ」

間違いない。

６組の長山率いる６人の中の２人だ！

この間ここで見た、ウチらの部屋のドアを蹴っ飛ばしたヤツらだ！！

バタン

「どうしたのジオン君、血相変えて・・・」

オレが部屋に戻るなり、佐倉が心配そうな顔で呟いた。

「オッキー、来い！！」

オレは無理矢理イヤがるオッキーを廊下に引っ張り出した。

「なんだよ」

オッキーは汚いものを見るような目で、オレの太もも辺りを睨んでいる。

グイッ

今度は逃げられないように、オレはオッキーの胸倉を掴んだ。

「カンパって何だよ。オマエ、クラスのヤツらから集めたのか？」

「まさか・・・。オレの金だよ。みんなに迷惑掛けねーよ」

オッキーは視線を外しながら、ふてぶてしく言い放った。

認めたな？

アイツらが言ってた通り、オッキーは3万もの大金を、アイツらに渡したんだ。

「何でだよ？　何で渡した？！」

「・・・・・・・・・」

「答えろっ!!」

「・・・・・・・・・」

「長山か？　長山に持ってこいって言われたのか?!　いつからだ!!」

「・・・・・・先週」

「なぜ黙ってた!!」

バシッ

その時、物凄い力でオッキーはオレの手を払いのけた。

「ジオンが何もしてくれねーからだろっ!!!」

信じられない言葉がオッキーの口から飛び出した。

『ジオンが何もしてくれねーからだろっ!!!』だと?

・・・テルなら何とかしたのか?

・・・アイツは何とかしてたのか？　今まで。

テルがいなくなったから、ウチらのクラスがナメられて、そんなシ

ワ寄せがオッキーに来てたって言うのか？
そんな事も知らず、オレは今までのうのうと生きてきたって言うのか？

丁度その時、さっきの2人組がこっちに向かって歩いてきた。
佐倉にアタックしてフラれた男、安藤は、フラれて当然の如く、醜い顔をしている。
その隣には、細い目が特徴の、少し太り気味と思われる中尾がいる。
2人ともドリンクバーの帰りらしく、なみなみジュースが注がれたグラスを持っている。

「アイツらどうしてこっちに向かってるんだ？　またココを蹴飛ばしに来たのか？」

オレはこっちに向かって歩いてくる2人を、思いっきり睨んだ。

「部屋があっちなんだよ。ジオン、もういいから、やめろって・・・」

安藤と中尾は、バツが悪そうに黙りこくり、下を向きながらオレたちの前を通り過ぎて行った。

間違いねぇ～！！

このうしろ姿は、さっきのうしろ姿と同じだ。

オレは目の前の2人が、オッキーから金を奪ったヤツらだと確信した。

「オイ、待てよテメェ〜ら！　オッキーから受け取った金、今すぐ返せ！！」

第３６話　プライドを曲げるな

「はぁ～？　ふざけんな」

佐倉にフラれた男、安藤が醜い顔を、さらに醜くさせながら言った。

「何だテメェ～」

隣の中尾は、オレの顔など初めて見るぞと言わんばかりの表情で、顎を突き出した。

「やめろって、ジオン」

オッキーが小声で何か囁いたが、オレは当然の如く、それを無視した。

「返せって言ってんのが分かんねぇ～のか、コラァ！！」

オレの気迫に押され、安藤は財布からオッキーが渡したと思われる３万を取り出した。

「どうなっても、知らねぇ～ぞ」

安藤は捨てゼリフを吐きながら、オッキーに金を返した。

「長山さん怒らせたら、タダじゃ済まねぇ～ぞ、テメェ～ら」

中尾がビビる自分を懸命に隠すように、裏返った声で強がりを吐いた。

「いいのか、ジオン。６組のヤツらと戦争になるぞ」

安藤と中尾の背中を遠目で見つめながら、オッキーが呟いた。

「オレは自分が正しいと思ってる」

自分の言葉に、嘘偽りはなかった。

後悔もしていない。

矢が降ろうが槍が降ろうが、オレは守るべき仲間の為なら、信念を曲げるつもりはない。

それを貫いて死ぬのなら、それも本望だ。

またしても暗いカラオケになってしまった。

何かを察知したのか、それとも一部始終を盗み見してたのか、佐倉はしょんぼりうつむいたまま黙りこくっていた。

オッキーはそんな佐倉を慰めてるのか励ましてるのか、歌本を佐倉に強引に渡し、何か曲を入れろと強要して煙たがられていた。

「ユイちゃん遅いね。そろそろ現れてもいい頃だけど」

佐倉がもっともな事を思い出したように言った。

確かに遅いな、アイツ。

まさか、眠った？

「電話してみれば？」

オッキーが佐倉に促す。

「そうだよね。じゃあ、ちょっと電話してくるね」

佐倉はケータイを持って、廊下に出ようとした・・・瞬間！！

バターーーンッ

「きゃっ！」

イキナリ開いたドアに驚き、佐倉が小さな悲鳴をあげた。

ドクン

オレの鼓動が大きく音を立てた。

部屋のドアを蹴り開けたのは、長身の長山義廣だった。

その後ろに、見慣れない女の姿が見える。

突然の事態に、オレは言葉を失った。

震え上がる佐倉とオッキーが視界の隅に入ったが、オレは目の前の予想だにしなかった光景から視線を外せない。

口の中が乾くのを感じた。

長山を筆頭に、見知らぬ女を含め、８人がオレたちの部屋に我が物顔で入って来た。

男たちは、全員見覚えがある。

いつも長山にくっついている６人だ。

どうやらオレが楽しみにしていた最高の日は、コイツらの登場によって脆くも崩れ去ったようだ。

最高にハッピーな一日のはずが、最高に最悪な一日に様変わりしやがった。

一体どんな事が起こりやがるのか、ワクワクするぜ・・・。

第37話　ピポパポパ

長山の彼女なのか何なのか、長山の隣にいる女は、祭日だというのに制服を着ている。

見るところ、吉岡の女子生徒のようだ。

青いブレザーのボタンを全開にし、だらしなくはみ出したブラウスは、胸元までボタンが外してあり、男たちの視線を釘付けにしていた。

大きなオッパイの谷間と、見えそうで見えないコギャルのパンツを想像し、ヨダレを垂らした安藤たちは、ふと我に返ったようにオレを見て、思い出したように睨みをきかした。

一方、ボスの長山義廣は、オレの目の前の長ソファーに、ふてぶてしく腰掛けた。

背もたれに両手を広げ、両足をテーブルの上に堂々と置き、長く見せかけた足をゆっくりと組んだ。

真っ赤なドクロが印象的な、黒のスタジャンに身を包み、ヘビ皮だか何だかのパツパツのパンツでワルを強調しているようだが、黒いランニングの下は、残念ながら、きゃしゃな筋骨が見え隠れしている。

「何コレ〜、超、ダサイんですけどぉ〜〜〜」

オレに背を向けて、テーブルの上に腰を掛けて足を組み、ケータイをいじっていた女が、比較的早口で言った。

「どれ？」

ソファーに深々と腰掛けていた長山が、身を乗り出して女のケータイを覗き込んだ。

「クァ〜ッ、ぶっさいくだなぁ〜〜」

長山のひん曲がった顔を見て、子分たちが声を出して愛想笑いをした。

「ミケコのカ・レ・シ。新しい彼氏。超・・・ダサくね？」

女の一言で、長山は足をバタつかせて笑っている。

長山の手下たちは、タバコをふかしながら壁に背をつけて立っているヤツもいれば、イスに座っているヤツもいる。

そんな中、タバコの煙が肺に入ったヤツが、大きく咳き込んだ。

「ゴホッ、ゴホゴホ、ゴホッ」

「本山(もとやま)ぁ～、早く慣れろよぉ～」

長山が、咳き込んだヤツを一蹴した。

慣れねぇタバコふかしてっから恥かくんだ、バ～カ。

タバコの初心者モトヤマ君、オレを笑わせないよ～にしようネ。

張り詰めた空気の中、オレはマジで笑いを堪えていた。

それを感付いたのか、ついに長山が、ここに姿を現した理由を語り出した。

「亀鶴君、沖田君から何も聞いてなかったの？　ちゃんとクラスの皆から千円ずつ集めるように、沖田君に頼んだんだけどな～。もちろん亀鶴君も含まれてたんだけど・・・」

長山は両手をヘソの辺りで組み、ゆっくりと両足をテーブルに乗せた。

コイツの親は、一体どんな教育をしてきたのだろうか・・・？

食事をするテーブルの上に足を、しかも土足。

「い、言い忘れたんだよ」

「オメェーには聞いてねぇーんだよォ！！」

オッキーが適当な言い訳をし終わったすぐ後に、間髪入れず長山が言い放った。

普段は温厚そうに見える長山だが、どうやらすぐキレるワガママなこわっぱだったようだ。

こんな怒鳴ったりとかしない、もっとシャバイイメージだったんだけどな・・・。

血液型、何型なんだろ、コイツ。

万が一の時に備えて、コイツらの血液型を聞き出しておくか・・・。

だが、血液型が知りたいからって、直接コイツらに「血液型教えてくれ」なんて聞いてもムダなのは明らかだ。

唯一、女がいるのが救いだ・・・女なら男と違って、どこか褒めてやれば乗ってくる可能性がある・・・「部屋とか綺麗そうですね、A型ですか?」ってオレが聞いたら、「何で分かるの~?」なんて女が驚いて、オッキーが「ジオンは血液型マニアなんだよ」なんて言って、女が「ふ~ん。ねぇ、ねぇ、長山は何型?」なんて展開に・・・・なるワケねぇ~!!

突然アホな事を尋ねるのも墓穴を掘るだけ。

じゃあ、どうやってコイツらから血液型を聞き出すのかって?

ふふふ・・・、オレには秘策があるのさ。

ま、黙って見ててくれ・・・。

そして、コイツらと喧嘩になった時、オレが血液型マニュアル男といわれる所以を知ることになるだろう。

オレがそんな事をコチコチと考えていると・・・

「黙ってねェーで、何とか言えよコラァー！！」

長山はさらに甲高い声を張り上げた。

そんなキーの高い声で怒鳴られても、ビビんねぇ～んだよ。

「シク、シク・・・・・」

佐倉はとうとう泣き出した。

オッキーも悔しそうにうつむいている。

残念だが、何もかもがオジャンだな・・・・・。

第３８話　木登り競争に着眼しました

「佐倉、帰れ」

オレは泣き出した佐倉に言った。

「何オメェーがシキってんだよ！！」

「帰らせればぁ～？　ヒクヒクうるせぇ～しぃ～」

女がケータイをいじりながら、ぶっきら棒に言った。

「コイツ、このまま帰らせたら、オレらの事、先コーにチクったりしねぇ～か？　もしチクられたら、上木（かみき）、オマエもヤバイぞ」

カミキ？

ふ～ん、あの女、カミキって言うのか・・・。

「アンタさぁ～、帰ってもいいけどぉ～、この事誰かにチクったら殺すかんね」

上木はケータイの画面から視線を佐倉に向けて、クソ生意気なセリフを吐いた。

「さ、佐倉はチクったり、他の人に言いふらしたり、そういう奴じゃねぇ～よ。オレらは何でも言う事聞くから、佐倉だけは勘弁してくれ」

おい、オッキー、オレは何でも言う事聞かねぇ～ぞ！！

オレが心の中でオッキーに抗議してる間に、佐倉は無事、部屋を出た。

よしっ、みんながあっちを向いてる今がチャンスだ！！

オレは、目の前のカラオケの選曲用リモコンの、液晶画面のタッチパネルを、誰にも見られていないのを確認しながら操作した。

右上の・・・そう、『お楽しみコンテンツ』。

「オレ、心配だから、送ってきます」

安藤が冗談っぽく長山に言った。

「安藤、いいよ、構うなよ。ホラ、沖田君、怒っちゃったし・・・」

オッキーが歯を食いしばっている顔を見て、長山が苦笑いしながら優しい口調で言った。

みんながオッキーに注目している隙に、オレはタッチパネルの『お楽しみコンテンツ』の中の、『血液型占い』を選択し、決定ボタンを押した。

そう、オレは前回ここに来た時に、この部屋のカラオケには、そんなコンテンツがあるのを知ったのだ。

そして、オレの思惑通り上手くいけば、これから面白い展開が待っている・・・・・。

ジャジャーン♪

『カラオケキャッスル、血液型占いランキング～～～』

部屋の大型画面に、４体のアニメキャラが現れた。

それぞれ血液型のゼッケンを大きく体に付けたアニメキャラは、愉快に木登り競争を始めた。

「誰だよ、こんなの入れたの」

長山は呆れた顔をしている。

長山の表情を見る限り、どうやらコレを入れた犯人を、上木だと思っているようだ。

上木は好奇心溢れる顔で、画面に注目している。

よしっ、オレの計算通りだ!!

みんなそれぞれ、無言でアニメキャラの木登り競争に見入っている。

表情や目線だけではヤツらの血液型を読み取れない。

自分の血液型のアニメキャラを、口に出して応援してほしい所だが・・・・・。

結局誰も一言も発さないまま、アニメキャラの順位が決定した。

「あはは、アタシ、恋愛運二重丸なんですけどぉ〜。ラッキーカラー、赤だって。今、赤いケータイ持ってるし〜〜〜、みたいな」

画面は現在、1位だったA型の、本日の運勢を映し出している。

はい、上木、A型!!

「ぶっは。オレなんて全体運下降気味だぞ! 健康に注意だってよ!!」

長山、O型!!

上木と長山が占いにウケたのを皮切りに、その他多勢も一斉に盛り上がりだした。

「安藤何型だっけ?」「ははは、オレ、恋愛運バツだゼ、バツ」「

オレA型」「うっそ、マジ？」「オレ、今日の血液型選手権で1位だったんだけどなぁ～」「オマエ、AB？」「長山さん、Oだったんすか？」

いっぺんにみんな話し出したが、オレは瞬時にテキパキと頭に叩き込んでいった。

失恋安藤、A型。

そこのIQ高そうなヤツ、O型。

ヒョウタン、AB型。

「オレ、Oだよ、オマエは？」「血液型選手権ってさ、何が面白いの？」「オレ、Bっす」「オレも恋愛運バツ」「ラッキー、外出して運気アップだってよ」「赤い物なんて、ねぇ～よ」「オマエA型だったの？」

タバコ初心者モトヤマ君、AB型。

太り気味中尾、A型。

一番目立たない、弱そうなチビスケ、B型。

全員、把握、完了！　どんなモンだい！！

オレ様は、授業の内容は全く頭に入らないが、血液型の事ならこの通り。

「なぁ、ジオン、どうする？」

オッキーが泣きそうな顔をして、オレに向かって小声で聞いた。

まるで、「今のうちに逃げられないのかな？」とでも言いたげだ。

「そうそう、亀鶴君・・・」

隙を見てオレに話し掛けたオッキーの声を小耳に挟み、我に返った長山は、思い出したように話を元に戻した。

「カメツルって言うの？　この人～。変な名前ぇ～」

ムカッ

上木の一言で、オレは一瞬キレかけた。

上木がチラっとオレの顔を見たが、鬼のようなオレの形相に一瞬驚いたような顔を見せ、上木はクルっと背中を向けた。

イカン、イカン・・・

ここで冷静さを欠いてしまっては、コイツらと同レベルになりかねない。

オレはとりあえず怒りを堪え、テーブルの辺りだけに目をやった。

「亀鶴君、とりあえず3万円、返してよ。そっから話しようよ」

寝言は寝てから言えよ、長山・・・。

・・・ん？　２８ｃｍ？

長山の靴、でけぇ～な・・・。

「あぁ～～、もう、面倒だから、やっちゃいなさいよ、こんなヤツ！！」

オレが長山の靴の裏に書いてあった小さな数字を細目で見ていると、上木は大きく溜息をつきながらテーブルから下りた。

「・・・だな。決定っ！！　やっちまえ、コイツ」

長山の号令で、手下共が動き出した。

「オラ、オモテ出ろ、コラ」

オレとオッキーは、廊下に蹴り出された。

第３９話　偶然の奇遇な遭遇

オレたちが部屋から締め出される時、ＡＢ型のヒョウタン顔に、オッキーが背中を蹴られていた。

こういう時のＡＢ型は、とてつもなく非情そうだ。

ＡＢ型は、このヒョウタン顔と、タバコ初心者モトヤマ君。

コイツらは、特に気をつけよう。

しかし、オレたちは、これから一体、何をされるんだ？

ここはユイがバイトをしているカラオケだぞ。

暴力事件など、もってのほかなんだぞ。

やるなら、ひと気のない所が望ましいが、コイツらどこまでオレらを連れて行く気なんだ？

ロビーまで差し掛かると、竜崎たちが清算を済ませて帰る所だった。

何と、宮さんと一緒だ。

宮さんはいつから居たのか分からないが、竜崎たちは1時間しか歌わなかったようだ。

あのコたちは、お家に帰る時間かな？

確かに外はもう、真っ暗だ。

しかし、宮さん一人で来てたの竜崎にバレちゃったんだねぇ～。

くぷぷっ・・・。

「鶴さん、随分、大勢で来てたんスね」

竜崎がこっちを見て呟いた。

「何か様子、おかしくねぇ～？」

宮さんが何かを勘付いたようだ。

知らんプリ、知らんプリ。

オレは竜崎と宮さんに顔を見られないように、そっぽを向いて歩いた。

竜崎と目が合った時点で、今更知らんプリをするのはムリがあるような気がするが、致し方ない。

オレとオッキーが、同時に外に出た時だった。

「アンタたち、どこ行くのよ。佐倉は？」

バッタリ、出勤時のユイに出くわした。

偶然とはいえ、恐ろしいくらいに奇遇な遭遇だ。

ユイは風呂上りらしく、髪はまだ半乾きで、随分とラフなカッコウだ。

ピンクのジャージ、おそらく普段の寝巻きだろう・・・。

面倒くさがりのＢ型らしい、アクティブな出勤スタイルだ。

「佐倉は帰ったよ。具合が悪いって言ってたから、今日は電話は入れない方がいいかも」

オッキーがヘタクソな作り話をユイに語ったが、当然ユイは聞き流した。

「ああぁ～～っ！　どうしてアンタがココに居るのヨ！！」

ユイは竜崎を指差して大声をあげた。

特にアルコールのせいではなく、これがいつものユイのテンションと思われ・・・。

・・・しっかし、ユイは、ココのカラオケを、自分の家だとでも思ってるのか？

「いや、別にココに居てもよくないっスか？」

竜崎が困った顔で宮さんに助けを求めた。

宮さんは意味が分からず、ただただ笑っている。

「今からカラオケっスか？」

竜崎がユイに問う。

「アタシは今から仕事よ」

「バイト？　もしかしてココで？」

「別にいーでしょーよ！　アンタ、来たばっか？」

「いえ、帰る所っスけど」

「良かった！」

「はい？　客が帰るのを喜ぶとは・・・。何て店員だ・・・」

竜崎は呆れ顔で苦笑した。

「あら？　アイツら、隣のクラスのヤンキー達？　どうしてアイツ

らと、あの2人が？」

ユイが独り言を呟いた。

「あっ、店長、アタシ、今日、休むわ」

ユイはカウンター越しの店長に、ぶしつけに言った。

鳩が豆鉄砲を食らったような目で、店長はポカンと口を開けたまま頷いた。

「今から仕事って言ってたじゃないっスか・・・」

竜崎がユイにツッコミを入れた。

「気が変わったのよ」

相変わらず破天荒（はてんこう）なB型だ。

まさにオマエの為に地球は周ってくれてると思うぞ、ユイ。

「何、突っ立ってんだよ！　さっさと行けよォ！！」

突然のユイの出現と、1年のルーキーと伝説の番長の登場に、訝（いぶか）っていた長山たちだったが、とうとう痺（しび）れをきらした長山が、キーの高い声を張り上げた。

第４０話　恥を知れ

カラオケの大きな建物の裏手に、車数台分の、従業員用駐車場があった。

そこの駐車場は民家からも離れていて、誰かをリンチするにはもってこいの場所だ。

双眼鏡でも使わない限り、ここでの犯罪を発見するのは困難と思われる。

カラオケの店員が出勤時や帰宅時に姿を現すのでは？　・・・という期待は抱けそうにない。

なぜなら、従業員たちはみんな、客用駐車場を利用してるらしく、ここには一台も車が止まってないからだ。

丁度オレたちがその場に辿り着いた頃、強めの南風に煽（あお）られた。

近くの桜の木から、沢山の花吹雪が宙を舞う。

こんなシチュエーションでなければ、最高に綺麗で素敵な、思い出深い春色（しゅんしょく）だと思われ・・・。

さてさて、どうする、オレ。

敵は男7人、女1人。

ココのボコられスポットで、許しを請うのか戦うのか・・・。

今回は吉岡のヤツらとの時みたいに、『移動』という選択も、『とんずら』という選択もなさそうだ。

男7人相手じゃ、さすがに分が悪いな・・・・・。

「じゃ、とりあえず座れ」

長山が偉そうに言った。

「正座だよ、正座ぁ～」

O型の、真面目ヅラしたIQ高そうなヤツが、オレとオッキーに指摘した。

オレとオッキーは、一応、アスファルトの地面に正座した。

「土下座したら許してやっから」

B型の、一番目立たない弱そうなチビスケが、オレたちに土下座を要求した。

コイツは、屈辱極まりない・・・。

中学の時、トイレで土下座させられた苦い経験があったが、あの時の屈辱に匹敵する。

チラっとオッキーの方を見ると・・・

「マジでやるんかいっ?!」

言われるがまま土下座をするオッキーを見て、オレはついついツッコミを入れてしまった。

「土下座ってどぉーやんの、土下座って。土に額を擦り付けるのが土下座でしょ?」

長山がオッキーの土下座にイチャモンをつけた。

・・・これ以上、オレも黙ってるワケにはいかないな。

「オマエの言う土下座ってヤツをオレがやれば、それで許してくれんのか? もう、ウチのクラスにカンパを回す事もねぇ〜のか?!」

オレは長山に条件を突き付けた。

クラスのヤツらにカンパが回らないって保障があるなら、土下座くらいの屈辱、喜んで呑んでやるよ・・・。

・・・喜んで? いや、喜びは嘘だ。

悔しいが、やってやるよ、土下座・・・。

オレの威勢の良い一言で、一時はその場がシーンと静まり返ったが、すぐに幾つかの失笑が聞こえた。

「もう、いいから、やっちゃいなよぉ～」

放置自転車の荷台に跨ってた上木が言った。

「ＯＫ。安藤、桜田、本山、中尾、原、気の済むまでやっちゃっていぃ～よ、コイツ」

長山の一言で、ＡＢ型のヒョウタン顔以外のヤツらが動き出した。

くっそぉ～～～、く、くるのか、オマエら・・・！！

「やるなら、オレをやれっ！！」

オッキーが前に出た。

何カッコつけてやがる、オッキー！

それは、オレのセリフだ！！

「うるせぇー、オメェーは引っ込んでろっ！！」

オレの一声で、オッキーは怯んだ。

「ジ、ジオン・・・」

オッキーは涙を浮かべている。

「気の済むまでやれよ。その代わり、2度とウチのクラスに手を出すなよ・・・」

バッコ　ボコ　バコ　バコ

オレのカッコイイ捨てゼリフも虚しく、長山の手下共は容赦なく蹴りを入れてきた。

しかし、どれもこれも威力がない蹴りだ。

バコ　ボコ　バコ　ボコ

中学の時と比べたら、屁だな・・・。

コイツらサッカーボールしか蹴った事ねぇ～んだろうな。

どいつもこいつもヘナチョコキックだ・・・。

「そりゃっ！」

ボコッ

たま～に良いのが入るが、どれも響かない。

さて、どのくらい蹴られれば、オレは解放されんだろぉ～な・・・。

バキャッ

「痛っ！」

思わず声を出してしまった・・・。

コイツら調子に乗ってきたな？　今の蹴りは誰だ？　A型の失恋安藤か・・・。

こめかみに入ったぞ、今の蹴り。

チクショー、左目開かねぇ～。

靴紐か何かが目に入ったな、こりゃ。

腫れるぞ、こりゃ・・・。

しっかしコイツら、人の痛み知らねぇ～んだろうな。

もっとも知ってたら、こんな大勢で、たった一人を寄ってたかっていたぶるようなマネはできっこないけどな。

恥を知れ！！

・・・って、コイツらの気が済んだら言ってやりたい。

・・・殺されなきゃの話だが。

・・・ははは。

バコ　ボコ　バコ　ボコ

バコッ

あの上木って女も、よく平気で見てられるよな・・・。

こんな残酷なシーンを楽しんでやがる。

誰のか知らねぇ～けど、人様のチャリの荷台に座りやがって。

パンツ見えるぞ、縞模様のパンツ！

そんな、はしたないカッコウしやがって！！

テメェーには、美醜の区別ができんのか？

・・・と、その時！！

ゴ　ゴ　ゴ

ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ

な、何だ、この重苦しい空気はっ？！

何か、とてつもない、気を感じる！

あっ、あそこだっ！！

バァァァーーーーーーーーン

そこには、ユイ、竜崎、宮さんの３人が、腕を組んで立ち尽くしていた。

３人とも横一列に並び、３人とも同じポーズ、３人共真剣な顔でこっちを見ている。

「ジオン！　何やってんのよアンタ！！」

やべっ、ユイのヤツ、とうとうオレの名を・・・・・。

第４１話　本人に直接聞いたワケじゃない

「ジオン？　亀鶴さんの事？」

とうとう竜崎にバレてしまったようだ。

「竜ちゃん言ってた、例の2年のトップって・・・・・」

宮さんにも、オレがジオンだってバレちまったようだ。

まぁ、いいや。

・・・ははは、そうです、私がシャバ憎の頂点とも言うべき、シャバ王を目指してる、亀鶴ジオンです！！

笑ってやって下さい。

「アレ？　アンタ、ウチのクラスに来た時、ジオンに会ってなかったっけ？」

「オレ、あの時、顔、見てませんから・・・」

「そっか」

「・・・それに、オレ、まだ本人から直接名前聞いたワケじゃないんで」

ドクン

竜崎の言葉に、オレの心臓が波打った。

「オレも、亀ちゃんから直接、下の名前聞いてないから・・・」

宮さんまで・・・

ドクン

オレの心臓が、さらに大きく波打った。

その頃、長山と上木は3人の姿を見て、慌ててコソコソとケータイをいじりだした。

一方オッキーは、突然現れた3人を前にして、愕然としている。

「ユイ！　そ、それに、りゅ、竜崎?!　で、伝説の番・・・いや、み、宮先輩まで・・・。・・・た、助かったぞ、ジオン！　オレたちを助けに来てくれたんだ！　竜崎～、宮先輩～、ありがとうございま～す！！」

オッキーは今にもゲハハと涎を垂らしそうな勢いで、３人の下へ走っていった。

「うるさいっ！　黙って見てろっ！！」

「へ？　た、助けに来たのでは？！」

オッキーは宮さんに撥ねつけられた。

「彼の喧嘩だろ？　邪魔はしたくない」

ドクン

宮さんの男気溢れる言葉にオレの心臓は、またまた波打った。

「助太刀してもいいっスけど、そんな事したら、あの人、怒るでしょ？」

ドクン

竜崎の男気溢れる言葉にオレの心臓は、またまた波打った。

「何なんですか、あなた方は？　ジオン、どう見たって一方的にやられてるでしょ？！　しかも相手は５人ですよ、５人！！」

オッキーが仁王立ちの３人と、ボコスカやられてるオレを交互に見

ながら言った。

「オッキーさん、でしたっけ？　あの目、見てくださいよ。まだまだ元気ですよ、あの人は」

竜崎がオッキーに言った。

「イキイキしてるもんね」

宮さんは他人事だと思って、勝手にオレをイキイキさせている。

「で、でも、竜崎。この前はジオンは元トップのテルより強い、なんて言っちまったけど、アレ、ホントは嘘なんだ。ジオンはホントは小心者で・・・」

ふふふ・・・。

それでいい。

それで、いいよ、オッキー。

よくぞ、オレの素直な気持ちを代弁してくれた。

オレはオマエの言う通り、ホントは・・・・・

「あの人、強いっスよ」

竜崎。

「オレらくらいに喧嘩の経験積むとね、人を見ただけで分かるから、その人の強さ。亀ちゃんは、あの周りの5人なんて比べモノにならないくらい、全然強いよ。・・・って言うか、蝿がブンブンまとわりついてるカンジじゃない？　それくらいのレベルの違いがあるよ」

宮さん。

「でも、オレ、1年以上アイツと一緒にいるけど、ジオンが喧嘩してる所、見た事ないですよ?!」

ふふふ・・・。

そうだよな。

オレは、ずっと口だけだったよな。

「能ある鷹は、爪を隠す。彼ほどの人は、いざという時だけに、その真価を発揮するんスよ」

竜崎・・・・・。

・・・・丁度、今と同じような桜の香りがする季節だった。

一年前、入学式が終了し、教室に戻る時だった。

オレが持ってた椅子が手に当たったとか、オマエの態度がムカつく

とか何だとか因縁をつけられ、入学早々オレはキレた。

・・・が、『何か』がオレの心の中に引っかかっていて、オレの衝動を制御する。

結局、どんだけ殴られても無抵抗で一歩も退かないオレに根負けしたテルが、折れるカタチで決着がついた。

互いの力量に優劣がないという事で、テルの口から『互角』という言葉が飛び出し、オレはその日からテルに一目置かれる事になった。

思えば、中学の頃もそうだった。

同級生に、志を砕かれた時も、身の危険を感じた時も、心の中で引っかかる『何か』がオレのコブシを引っ込めたんだ。

「ところで亀ちゃん、何でやっちゃわないんだろ？　何か理由でもあるの？」

「ジオンは、ウチのクラスを守る為、ああやって5人にフクロにされてるんだ。自ら、フクロに」

宮さんの問いに、オッキーが答えた。

『ところで亀ちゃん、何でやっちゃわないんだろ？　何か理由でもあるの？』・・・そんな宮さんの言葉が、オレの脳裏を何度もかす

めた。

そうだよな、どうして、オレ、やらないんだろ？

プライド、とっくに傷つけられてんのに。

メチャクチャ楽しみにしてた、佐倉がウチに遊びに来るイベントが壊され・・・

突然現れた長山に、佐倉が泣かされ・・・

オッキーの土下座を見せられ・・・

みんなの前で恥をかかされた・・・

なのに・・・

どうしてオレは・・・・・・。

遠くから、小さな母親の声が聞こえる。

その声は、次第に聞き取れる大きさになった。

『やられたら、やって返しなさい』

いつもの母ちゃんの決まり文句だ。

思えば、ガキの頃は、喧嘩ばっかしてたっけ。

たまに打ちのめされて、母ちゃんに泣き面見られたっけな。

『そんな事言ったって、仕返しされるモン』

『仕返しされたら、またやって返しなさい』

・・・ははは、今思えば、母ちゃんの言ってた事って、報復による報復のテロみたいなモンで、どっかの大国の戦争と同じだな、アレは。

そんな事を小さい頃にオレは悟っちまったのかな?

それからか?

いや、違うな。

いつからだ? いつから封印した?! いつからオレはやらなくなったんだ?

中1? 中2? 中3か? ・・・う~ん、思い出せない・・・・・・

「アタシのせいだわ・・・・・」

ユイが何かを思い出したかのように呟いた。

第４２話　Ｂ型は世話好きが多い

アタシのせいだと？

オレ、オマエに何かされたっけ？！

「ユイ、何かジオンに言ったのか？」

オッキーがユイに訊いた。

「あ、う、ウン。中学の頃ね、アイツ調子に乗りそうだったから、ガツンと言ってやった時があったのよ」

・・・そんな事あったっけ？

ガツンと、何言われたっけ？！

「何て言ったんだ？」

「暴力はサイテーって。喧嘩するヤツは女にモテないって！　ついでに、プライドを傷つけられた時以外は何があっても手を出すなって・・・・・」

ガツーーーーン

頭に重い衝撃を食らった気分だ。

思い出した、思い出した、思い出したぞ。

オレが今までどうして喧嘩を躊躇していたのか、やっと思い出したぞ。

中学の時、メッタクソにやられた日々も、高校入学早々、テルに因縁をつけられた時も、ずっと無抵抗だった理由！

ユイに言われた一言が、トラウマになってたんだぁ～～～～！

・・・そう、あれは中学3年の春。

ある事件をきっかけに、戦国時代に突入した石田中。

さっそく気合を入れて、戦乱の中へ挑んでいった矢先、ユイの忠告を受ける。

その頃オレは、自分の中の『悪』を執拗（しつよう）に感じていた。

嫌な『モノ』。

自分以外の人間が振るう暴力。

嫌な『人』。

生意気な同級生。

理不尽な大人たち。

親、先生、学校、社会。

嫌な『ニュース』。

ＴＶ、雑誌、インターネット。

事故、事件、殺人、テロ、食糧不足、水不足、不景気、就職氷河期・・・・・。

戦争、環境破壊、繰り返される歴史・・・・・。

それらの『悪』全て含め、もしかしたら自分の中にあるのかもしれない・・・？

それらに対し、多少の抵抗感を覚えていた時期と重なり、ユイの言葉は痛撃に響いた。

『暴力はサイテー』

もっともだ！

『喧嘩するヤツは女にモテない』

モテない？

・・・それは、困る！

・・・ならば、オレはもう、喧嘩はしないっ！！

『プライドを傷つけられた時以外は何があっても手を出すな』

上等だ！

これからオレは、ちょっとやそっとじゃ、手を出さない。

プライドがないのか？

・・・なんて人に思われるかもしれないが、オレは自分を愛してくれた人に刃を向けられない限り、プライドは傷つかない。

自分なんか何言われても構わないが、守るべきものがある時は命を賭けて闘う。

それがオレの理想の男！

それが真の男だ！！

・・・それで、オレは中学の時、メッタクソにやられた日々も、高校入学早々、テルに因縁をつけられた時も、ずっと無抵抗だったん

だ。

なぁ～～～～んだ、そうかぁ～～～～！！

「お～～～い、ジオ～～～ン！　守りたいモノがあるなら、戦ってもいいのよ！！」

ユイの一言が、オレの全身を稲妻の如く走り抜けた。

身にかかる火の粉を払うだけのヤツもいれば、自らを必要悪とみなして闘う人もいる。

オレは、ちょっとやそっとじゃ、手を出さないが・・・

プライドを傷つけられたら・・・

「何か、目が覚めた気がするゼ・・・」

オレはユイに向けて、親指を立てた。

「・・・ったく、世話の焼ける男ねっ！！」

ユイの言う通り、オレ、オマエの一言にメッチャクチャ影響受けてるゼ・・・。

ホントに世話の焼ける男だな、オレ。

ギロッ

オレの一睨みで、５人は蹴るのをやめた。

喧嘩もロクにした事がなさそうなコイツらでも、さすがに空気は読めるらしい。

修羅場の空気が・・・。

安藤、ＩＱ高そうなヤツ、タバコ初心者モトヤマ君、太り気味中尾の４人は、１歩、２歩と、少しだけ後ずさりした。

中でも一番目立たないチビスケは、息をしてないんじゃないかと思わせるほど、蛇に睨まれた蛙のような顔をして立ち尽くしている。

ヒョウタン顔と、ボスの長山も、息を呑んだ。

コイツらのビビリ具合は、オレの一睨みだけじゃなく、後ろの宮さんと竜崎の存在を意識してのものと思われる。

放置自転車の荷台に跨っていた上木は、ケータイをポケットにしまうと自転車から降り、キョロキョロと辺りを見渡し始めた。

その時！！

バババン　バババン　バババン　バン

錆びれた直管マフラーから聴こえる爆音が、小さな駐車場に近づいてきた。

ステレオタイプな古典的不良クンの登場だ！

失敗したようなクルクルパーマのリーゼント男が、薄紅色のＣＢ－ＲＥＸに乗ってやってきた。

改造された単車から降り立ったノーヘルの男は、ニコニコしながら上木に向かってニカッと笑った。

前歯が数本、溶け落ちている。

どうやら上木が呼んだ、助っ人のようだ。

「上木ぃ～、待たせたなぁ～」

「アキガ先輩！　超早いんですけどぉ～～～！！」

アキガ？

どっかで聞いた事あるような・・・。

あぁ、確か、吉岡の番長、大橋剛太がそんな名を呼んでたような・・・。

「秋鹿？　秋鹿、準？　準なのかっ?!」

あの宮さんが、秋鹿を見て戸惑っている。

「久しぶりだなぁ～～～。みぃ～やぁ～～～～」

第４３話　優等生からアンパンマンへ

「オマエ、変わったな・・・」

「ははははぁ～～～。アレから何年経つと思ってんだ?」

「優等生だったオマエが、吉岡で天下を獲り損ねたって噂を聞いた時は、さすがにオレも自分の耳を疑ったけどな。今のオマエを見ると何となく分かるわ」

「偉そうな口を聞くんじゃねぇ～よ、みぃ～やぁ～～～。ははははぁ～～～。人を高校デビューみてぇ～な目で見やがってよぉ～～～。オレは中学ん時からバイク乗ってんだよ。タバコだって吸ってんだよ」

宮さん随分困ってるぞ。

宮さんの中学の時のダチらしいが、あの秋鹿ってヤツ、随分豹変したみたいだな。

アンパンのせいとはいえ、とても優等生とは思えない発言の数々・・・。

こりゃ～、相手が悪そうだ。

シンナー漬けの、ラリッてるイカレヤロォーは何すっか分かんねぇ〜ぞ。

『さすが、鋭いな、宮。確かにアイツらまとめたのは秋鹿だとか言ってるヤツはいるが、オレは秋鹿を信じてるよ。なんたって、オマエの中学ん時のダチだしな・・・』・・・なんて言ってた吉岡の番長、大橋剛太。

絶対、剛太も心の中では疑ってたよね、ウン。

秋鹿の事、ぶっちゃけ疑ってたよね、剛太。

どっから見ても、嘘つきそうなヤツだモン、秋鹿。

そんな秋鹿を、宮さんの中学の時のダチだからって理由で信じてたっつ〜んだから。

剛太は、よっぽど宮さんを信頼してるのか、よっぽど頭が弱いのか・・・。

それとも、宮さんの昔のダチって事で、秋鹿が嘘をついてるのを、知ってて知らないフリをしていた、剛太の宮さんに対する心意気ってヤツか?

「オマエが吉岡の1年をまとめあげて、ウチに兵隊を送り込んだって噂聞いたんだが、何か知らねぇ〜か?」

「ははは〜〜〜。ばぁ〜〜〜か、オレがそんなチンケなマネする

と思ってんのかぁ～～～？　誰が言ってた？　剛太かぁ～～～？」

「実はな、吉岡の1年坊主に、襲撃されたんだよ」

「ははははははぁ～～～。それはお気の毒にぃ～～～」

「アイツら白状したぞ。自分らをまとめあげたのが、誰かってな・・・・」

「なにぃ～～～？！　ちきしょう、アイツらめぇ～～～～！！」

「はっはっは。さすがのオマエも、ラリってる時は頭の回転が鈍いみてぇ～だな。ボロを出しやがって」

「騙したな？！」

「どっちがだよ」

「そうだよ、オレが送り込んだんだよ！！」

「とうとう白状したか。フン、どうせ天下を獲り損ねた腹癒せなんだろ？」

「図星だよ。てめぇ～を潰すとか、そんなのはどうでもいいんだよ。それよか、あのやろぉ～の面子を潰したかったんだよ。大橋剛太のよぉ～～～」

「オレはそういうヤツが世の中で一番嫌いなんだよ！　オレの事を信頼してくれてるヤツに、裏からコソコソ牙を向くような臆病なヤツがな！！」

「誰が臆病だってぇ～～～？　みぃ～～～やぁ～～～！！」

とうとうブチキレた秋鹿が、先制攻撃を仕掛けた。

ガッ

ポケットに手を入れたままの前蹴りが、宮さんの太もも辺りに直撃！

「蹴った？　今、蹴った？」

宮さんが秋鹿に蹴ったかどうか確認をしている。

オレはどう見ても、宮さん蹴られたと思うけど・・・。

宮さんは舌なめずりをしながら右手のコブシを握り締めた。

ブンッ

早いっ！！

ついに宮さんが攻撃を開始した。

シャッ

宮さんが繰り出した右フックを寸前でかわした秋鹿は、右ポケットからバタフライナイフを取り出した。

「オレ、いつでもムショ行く覚悟できてっからさぁ～～～。アレだったら、一緒行く？　ムリか？　ここで死んじゃうモンね」

ヤバイ！！

宮さんが殺される？！

「助太刀しますか？」

隣で黙って様子を見ていた竜崎が、宮さんに訊いた。

「いや、余裕」

流石、宮さんだ。

バタフライナイフ如きではビクともしない。

・・・が、気をつけろよ、宮さん。

・・・と、その時！！

「オマエの相手は、このオレだよ！　竜崎光一！！」

駐車場の片隅の物置の屋根に、しゃがみ込んだ男の黒いシルエットが浮かび上がる。

桜の木の枝から見え隠れする月明かりに照らされて、シルエットの男の眼光が鋭く光った。

ダンッ

男は2メートルの高さから、軽々と飛び降りた。

第４４話　メ・ガ・テン

「オマエが休んでる間、その金髪ヤローが1年のトップ代理をしてくれたみたいだぞ。感謝しとけよ、柴（しば）」

突如現れた男に、長山が言った。

どうやら長山が呼んだ助っ人のようだ。

「噂は聞いてたよ、竜崎光一！　たった2日でシメたんだって？　でもね、オレを倒せないと、意味ないから」

1年の残党か？

前髪が妙に長いが、目鼻立ちがハッキリしていて、女性にモテそうなタイプだ。

女子中高生に人気のある、ジョニーズ事務所所属のイケメン男子って所か？

・・・でも、ちょっぴり背が低いのが残念っ！

とは言っても、身長は２０歳の朝まで伸びるって言うから、ヤツの成長期はこれからか。

・・・・敵の容姿のフォローしてどうする、オレ！

「オレは柴義経（よしつね）！　今までトップ代理、ご苦労さんっ！！」

シャッ

義経の高速ハイキックが竜崎の顔面めがけて繰り出された。

ガッ

それを片手でキッチリガードする竜崎。

「手伝う？」

隣で秋鹿と対峙している宮さんが、竜崎に訊いた。

「ご冗談を。楽勝っス」

流石、竜崎。

そんな竜崎と宮さんの様子を黙って見ていたユイの元に、上木が歩み寄った。

「ちょっとぉ～、アンタ、さっきからジャマなんだよね。お願いだから消えてくんない？」

上木が右の眉を上げ、左の眉を下げながら言った。

「アタシ？」

突然、吉岡の女子生徒に因縁をつけられたユイは、まるで幽霊や未確認飛行物体の類を見てしまった、と言う様な表情をしている。

「はあ？　アンタよ、アンタ。アンタしかいないから！」

「ジャマって言われても、アタシ何もしてないけど」

ユイは、困ったなぁ、どうしよう～ってな顔をしているが、心の中では目の前の存在を、ＵＭＡやＵＦＯの類としか見ていないと思われ・・・。

「存在自体がジャマなんですけどぉ～。アンタさぁ～、カンケ～ないんだから、言われた通り消えてくんない？」

「意味分かんない」

「大丈夫か？　ユイ！　ここはオレに任せて、ユイは下がってろ！！」

上木に絡まれてるユイの前に、オッキーが立ち塞がった。

何考えてんだ、オッキー？！

「何、コイツ～。超キモイんですけどぉ～」

上木はオッキーを、まるでゲテモノ扱いだ。

「おい、オマエ！　いい加減にしろよっ！！」

ユイの助けに出てきたつもりなのか？　オッキーは今にも上木の胸倉を掴む勢いだ。

女に手を出すのだけは、止めとけオッキー。

オッキーが上木に掴みかかろうとした、瞬間！

「うるせ～、ブタ公っ！！」

バコッ

クリーンヒット！

上木の鮮やかなハイキックが、オッキーの頭部に決まった。

突然の出来事にオレの目は点。

オ、オッキ～～～～！！

そんな女のハイキックで倒れないでくれぇ～～～～。

バタン

黒縁眼鏡は見事に吹き飛び、オッキーは大の字に後ろに倒れたが、辛うじて後頭部の強打は免れたようだ。

キョトンとしたオッキーは、目をパチクリさせている。

恐らく自分の身に起きた事が、頭の中で整理できないのだろう。

そんなオレも、ただのコギャルだと思ってた上木が、あんな鮮やかなハイキックを決めるとは思いもしなかった。

あの蹴りを見る限り、ちょっとは喧嘩慣れしていると思われる。

「アタシの言う通り、さっさと消えてくんないかな？　このブタ公みたいに痛い目にあいたくなかったらさぁ～」

・・・と、その時!!

「オイ、テメェーら、いつまでよそ見してんだ、コラァー！　そんなヤツ、さっさとやっちまえって!!」

長山が言った。

たった今までウチらと一緒に、向こうの喧嘩を見物してたくせに～と、心の中で思ってるであろう5人組は、長山に言われるがまま、

それぞれファイティングポーズをとった。

・・・が、オレが立ち上がると、５人はその場を後ずさりした。

「何ビビってんだよ！　いいからいけって！！」

だったらオマエがいけよ～と、心の中で思ってるであろう５人組は、長山に言われるがまま、オレに向かってジリジリと歩み寄る。

・・・さて、やるか。

敵は７人。

グルリとオレの周りを囲んだ敵は、Ａ型の失恋安藤、Ｏ型のＩＱ高そうなヤツ、ＡＢ型のタバコ初心者モトヤマ君、Ａ型の太り気味中尾、Ｂ型で一番目立たないチビスケの５人。

少し離れた桜の木の下で、Ｏ型の主将、長山義廣は、自分が指揮を出した手下たちの様子を見守るカタチで腕組みしている。

その隣で、ＡＢ型のヒョウタン顔はせせら笑っている。

竜崎、宮さんの登場で、一時は動揺していた長山だが、どうやら助っ人たちの登場で落ち着きを取り戻したようだ。

オッキーが戦線離脱し、ウチらの戦力は、竜崎、宮さん、オレの３人。

図式的に3対10か・・・。

長山が余裕を見せるワケだな。

見た所、ユイは上木と揉めてるようだが、取っ組み合いの喧嘩に発展するにはもう少し時間が掛かると見た。

ユイに何かあったらすぐ駆けつけられるように、ユイと上木の方も視野に入れとく必要があるな。

オレに、その余裕があればの話だが・・・。

第４５話　ＶＳ　悪

オレをさんざん虐げてくれた５人は、喧嘩慣れしてないザコ共なのは確かだが、さすがに５人いっぺんに本気で来られたらヤバイ。

１対１のタイマン勝負なら、この５人は連戦でも倒せそうだが・・・。

やっぱり、どうにか分散させるしかないよな。

Ｏ型の長山は、オレが目をヤツに向けない限り手を出してくることはあるまい。

手下の６人の、長山に対する忠誠心と、長山の統率力を見る限り、ヤツは組織を牛耳る力に長けてると見た。

そこを分析する限り、オレを囲む５人がやられ出した際、手下たちと一緒になってオレに攻撃をしてくるとは考えにくい。

オレをやるなら、「オマエらは下がっていろ」と言って５人を退かせ、長山はオレにタイマン勝負を挑んでくるはず。

だが、オレが見る限り、ヤツはよっぽど熱がこもらない限りはそれもしてこないと見た。

なぜなら、オレにタイマン勝負を挑んでくるなら、オレを囲む5人が怯んでる時点でそうしてくるはずだからだ。

そうしない理由は2つ、長山自身、喧嘩の経験が浅い、あるいは無く、オレに勝つ自信がないか、よっぽど仲間を信頼しているかだ。

・・・長山の言動、行動を見る限り、独裁だと思われる。

・・・と、言う事は、やはり前者。

長山は弱いと見た。

それにO型は、自分に注目が訪れない限り、大人しくしている傾向が強い。

人が多勢いる場などで、会話が誰かの一つの話題で盛り上がった時など、O型は自分に注目が集まった時は会話も秀でて発言も多いが、そうじゃない時は徹底して聞き役に回る傾向が強い。

様子を見て会話に参加しようとし、決してでしゃばったりしない。

それは喧嘩でも同じだ。

つまり、長山を挑発したり、ヤツと目を合わせたりしない限り、この5対1の喧嘩にヤツが混ざってくる可能性は低い。

そして、長山の隣にいるAB型のヒョウタン顔のヤローも同じく、この5対1の喧嘩に混ざってくる可能性は低いだろう。

長山が「行け」と言ったら話は別だが、ヒョウタンが自らの意志で

オレに向かってくる事は、ほとんど有り得ないはずだ。

ＡＢ型は基本的に、集団の中では個人の独走を好まず、協調性を重視するから、ヒョウタンの内面までは分からないが、この場では長山に絶対的に服従するのは確かだ。

今、長山の隣にいるって事は、今はまだ側にいろって命令されている証拠。

・・・と、いう事で、オレの敵は今の所、この５人。

Ｏ型のＩＱ高そうなヤツは長山と一緒で、目を合わしたり、こっちから攻撃を仕掛けなければムキになってオレを攻撃してこないはず。

４血液型中、Ｏ型を怒らせるのが一番危険だからな。

Ｏ型は熱くなればとことん燃え上がる。

仲間意識が強くて、自分以外のヤツがやられたとなれば、一番力を発揮しそうだが、挑発しなければ他の血液型のヤツらほど怖くない。

・・・と、言うワケで、ＩＱ高そうなコイツは無視。

やるなら５人中最後だ。

Ｂ型の、この一番目立たないチビスケなんだが、やるからには弱そうなコイツを先にと思いがちだが、ここは後回しにしたい。

B型は主に、ルール無視の個人主義だが、一度燃え上がらせてしまうと直線的に突進してきて、とてつもなく厄介になる。

剛速球を絶え間なく投げられては、投げられる方もたまったもんじゃない。

じゃあ、どうやってコイツの突進を止めるのか・・・。

挑発すればいい。

B型はアマノジャクなので、言われた事と正反対の行動をとる傾向が強い。

「こいよ」ってオレが挑発すれば、おそらく「フン、誰がオマエの挑発に乗るかい」ってなるはずだ。

あとは隙を見て挑発していれば、むやみやたらに攻撃をする事もないだろうし、放っておいてもさほど問題はないはずだ。

それに、長山に「いけ」と言われて、心の中で一番しゃくにさわってるのはコイツのはずだし。

B型は人に命令されるのを極度に嫌がるからな・・・。

さて、問題は残りの3人だな。

AB型が1人とA型が2人か・・・。

ここは、A型の失恋安藤と、太り気味中尾、コイツらを先に倒した

いトコロだ。

なぜなら、ＡＢ型のタバコ初心者モトヤマ君を先に倒してしまうと、それを見てＡ型の２人が逆上してしまうからだ。

喧嘩で一番最初にキレやすいのはＡ型だ。

Ｏ型がゆっくりと燃え上がるのに対し、Ａ型は最初から飛ばしまくる。

キレて攻撃力が倍増した２人に同時にかかられては、形勢不利。

ここはＡ型の失恋安藤か太り気味中尾のどっちかを先に倒すのが得策だろう。

そしてキレた、残りのＡ型１人を倒し、３番目にＡＢ型のタバコ初心者モトヤマ君だな。

そうと決まれば、さっそく攻撃開始だ！！

Ｏ型のＩＱ高そうなヤツは無視、まずはＢ型で一番目立たないチビスケを挑発。

「オラ、コイよ！！」

オレはＢ型のチビスケに向かって、右手の人差し指をクイクイと曲げ、「向かって来い」と挑発した。

案の定、B型のチビスケは、人を馬鹿にしたように鼻で笑った。

そして、計算通り、オレに向かってくる様子はない。

・・・その時、A型の失恋安藤が凄い形相でオレに向かってきた。

予想的中、一番最初にキレるのはA型。

しかも仲間が挑発されただけでキレるとは、想像以上だ。

ビュオッ

安藤の飛び膝蹴りを寸での所でかわした。

コイツは佐倉をナンパしたり、カラオケで人の部屋を蹴飛ばしたり、オッキーの金を巻き上げたり、オレのプライドを十分傷つけてくれた。

蹴飛ばしたといえば、A型の太り気味中尾も同じ。

AB型のヒョウタンに関しては、オッキーの背中を蹴ったという大罪も含んでいる。

主犯格の長山をはじめ、コイツらの罪はあまりにも大きい。

コイツらは許さねぇ！

オラ、安藤クン、隙だらけだゼ！！

ガ　ゴオッ

飛び膝蹴りをかわされ、ハッと息を呑んだ安藤の左頬に、オレの渾身の右フックがついに炸裂した。

第４６話　頭脳戦

左頬を大きく歪め、片膝を地面につけたＡ型の失恋安藤だったが、すぐに体勢を立て直して反撃を繰り出してきた。

同時にＡ型の太り気味中尾もオレに向けて攻撃を仕掛けてきた。

読み通りの展開だ！

オレは安藤の攻撃を両腕をクロスしてガードすると、すぐさま安藤の顔面めがけて頭突きを放った。

ゴ　ウン！！

１発で崩れ落ちた安藤を見た中尾は、目を吊り上げて唇を尖らせた。

中尾は右足だけで、何度も高さのない蹴りを放つ。

やっぱりキレてやがる・・・。

攻撃力は倍増してるかもしれねぇ～が、冷静さを欠いたら喧嘩は勝てねぇ～ぞ・・・。

ド　ガッ！！

オレは隙だらけの中尾の左太ももに、渾身の力を込めた蹴りを放った。

「ヴッ」

中尾は太い声を腹奥から出し、その場に尻餅をついた。

オレは無防備の中尾の顔面に、思いっきり蹴りを見舞おうとしたが、寸前で止めた。

A型のコイツには、ヘタな攻撃はかえって危険だ。

A型との喧嘩は後々まで尾を引く。

ここはジワジワ痛めつけず、失恋安藤と同じように、1発で戦線離脱させるのが得策！

マウントをとってパンチを連打って手もあるが、そんな事をしたらコイツはオレに対し、復讐心を抱く。

コイツらには強い恨みがあるワケじゃない。

今回の喧嘩以降、コイツらと関わり合いを絶つのが目的だ。

オレの計算通り長山戦まで辿り着ければ、間違いなくそれは可能だ！！

長山がオレに対し、関わり合いを絶てば、コイツらは確実にそれに

従う。

その為にも、オレへの恨みを最小限に抑えて倒さなければならない。

それには、コイツらを1発で倒していければベスト。

力の差を見せつけ、コイツらの戦意を喪失させるのも手だ！

その為には、まずはコイツを1発で伸すのが先決！！

「てめぇ・・・」

中尾は歯をむき出しにしながら、ゆっくりと起き上がった。

「オレは間違った事をしてるつもりはねぇ！　後でよく考えてみろ！！　どっちが悪いかを」

ガ　ゴォッ！！

オレは起き上がった中尾めがけ、安藤と同じように、顔面めがけて頭突きを放った。

そのまま大の字に倒れる中尾。

よしっ、1発で仕留めるのに成功したぞ！

残り3人。

だが、今の頭突き攻撃でコイツらを倒すのは、もう難しいかもな・・・。

コイツらは、確実にオレの頭突きを警戒するはず。

だが、それを逆手にとれば、必ず勝機はある。

中でもB型のチビスケは、オレを頭突きしか引き出しがないヤツと思ってるはずだ。

B型は、印象深いシーンをベースに思考を組み立てる傾向が強い。

・・・と、その前に、AB型のタバコ初心者モトヤマ君だな。

コイツはこの中では一番喧嘩が強そうな顔をしているが、AB型は平和主義者が多いのが特徴。

案外、喧嘩は初めてかもな・・・。

だが、AB型をナメてかかると痛い目に遭う。

なぜならAB型は、とっさの判断に長けていて、戦術も華麗で奇想天外な攻撃を仕掛けてくるタイプが多いからだ。

その上、正義感が強い。

ここは、モトヤマにオレを悪モノと認識させないようにするのが先決だ!

コイツとは、頭脳戦で勝負だ！！

オレはとりあえずＢ型のチビスケに、「オラ、コイよ」と挑発を入れておいた。

計算通りＢ型のチビスケは、自分から向かってくる気配はない。

Ｏ型のＩＱ高そうなヤツの事は、相変わらず完全無視！

「モトヤマ、冷静になって考えてみるんだな・・・。敵が違うんじゃねぇ～のか？　敵が・・・」

オレはＡＢ型のモトヤマに、静かな声で言った。

案の定モトヤマは、キョトンとして大層驚いた表情をしている。

ＡＢ型は、嘘を見破るのが得意だ。

なので、オレは素直に真正面からぶつかったのだ。

モトヤマは、自分の名前をオレが知ってる事に驚くと同時に、自分の本当の敵が誰なのかを真剣に考え出したようだ。

「・・・・そう、オマエの思ってる通り、長山なんじゃねぇ～の？」

オレはさらに、「オレはオマエの味方だぞ」的な口振りで、モトヤ

マに囁いた。

「・・・・・・・・・・・・・」

モトヤマはオレから目を逸らし、真剣な顔で何かを考えている。

「ふざけんなよ、てめぇ！　敵はおめぇ以外いねぇだろ！！」

B型のチビスケだ！　オレたちの会話を聞いてたの？　さすが地獄耳、B型！

こいつは想定外の展開だ・・・！！

どうする？！

第47話　ちょっとしたコツ

B型のアマノジャク性を刺激してしまったようだ。

こうなったら仕方がない、AB型モトヤマの前に、コイツが先だ！

B型は喧嘩を後に引かないから、コイツには遠慮なくいける！！

オレはB型のチビスケの目を見ながら、自分の眉毛をハの字にして、いかにもビビってます的な表情をしてみた。

そして尻を後ろに引き、へっぴり腰でパンチを2、3繰り出した。

シュッ　シュッ　シュッ・・・

「くるなっ！　やめろぉ～！！」

オレは弱々しい声を、チビスケだけに向けて出した。

さてさて、オレの極端な豹変作戦、吉と出るか凶と出るか・・・・・？

「ふざけんなよ、てめぇ！！」

チビスケは、口をタコのように尖らせ、目を大きく吊り上げた。

おっ？

おいでなすったな。

B型のチビスケは、オレの挑発にまんまと引っかかった。

「来い」と言われりゃ「来ない」し、「来るな」と言われれば「来る」、まさにアマノジャク。

一瞬の隙が命取りになる戦いの中では、冷静さを欠いたヤツが負けるのが条理。

血液型の人間性は、そんな研ぎ澄まされた空間の中で、最も極端に行動として現れるのが特徴。

血液型の人間分析に長けていて、常に冷静さを失わない絶対の自信があるオレが、こんな単純極まりないヤツに喧嘩で負けるワケがない！

シュッ　シュッ

チビスケは、オレが先ほど繰り出したパンチと瓜二つなヘナチョコパンチを放ち出した。

さすが印象深いシーンを見逃さず、物真似上手なB型。

好奇心旺盛なB型のそんな特技が、こんな所でアダになるとは皮肉なモンだな。

コイツを本格的に怒らせて、剛速球を絶え間なく投げられる前に、さっさとぶっ倒しておくか。

「コイよ」

オレは鋭い眼光でチビスケを睨みつけ、右手の人差し指をクイクイと曲げた。

へっぴり腰でパンチを放っていたチビスケは、案の定、困惑した表情で打つ手を止めた。

ヤツの頭の中は今、「行くか」「行かぬか」の試行錯誤の真っ只中。

今がチャンス！

パンチってのは、こう放つんだよっ！！

シャウッ

オレは腰を落とし、右足を前に出すのと同時に右フックを素早く放った。

ワザと外したオレの右フックに、目を閉じてしかめ面をしたチビスケ。

一瞬の隙を見逃さなかったオレは、渾身の左フックをチビスケのこめかみ目掛けて放った。

ガキッ

腰を落とした、左足ステップと同時に放ったオレの左フックを、頭部にまともに喰らったチビスケは、オレから見て右方向へ倒れかかった。

バゴン

その隙を突いたオレの下から突き上げるような、スナップを利かせた頭突きが火を吹いた。

ズダーン

オレの1発の頭突きで後ろに倒れるチビスケ。

一丁上がりっ！

残るはＡＢ型のタバコ初心者モトヤマ君と、Ｏ型のＩＱ高そうなヤツの2人。

「あのチョーパン使い、とことん卑怯なヤローだ！」

Ｏ型のＩＱ高そうなヤツだ。

チョーパンとは頭突きの事で、オレを頭突き使いだと思ってるようだ。

ま、そう思われても仕方ないよな。

1発で敵を倒すには、それしか方法が浮かばないモンでね・・・。

とりあえずコイツは完全無視！

さてさて、予定通り、今度の狙いはＡＢ型との頭脳戦だな。

第４８話　洞察対決

ＡＢ型は、とことん外面はクールだ。

内面は人情味溢れてるくせに、それを決してオモテに出さないのが特徴。

喧嘩で厄介なのは、表情などで相手の感情を読み取れないのと同時に、こっちの行動をも外面だけで判断しない洞察力。

人の内面を読む力は全血液型中、１位を誇る。

つまり、嘘は簡単に見破られる・・・。

・・・・真っ向勝負しかないか。

気持ちの優しさが優先し、聞き役に回る傾向が強いＡＢ型の特徴を利用し、ここはオレの話術で突破口を開いていこう。

「モトヤマ！　さっきも言ったが、オレは本当はオマエらの敵なんかじゃねぇ！　ただの被害者だ。それはオマエらも同じなんじゃねぇ～のか？　本当はみんな心の中では長山の態度や行動に疑問を持っている。でも、それを言えずに、みんな我慢してヤツの言いなり

になってるんだ！！」

オレの熱弁に、モトヤマは冷静な面持ちだ。

読み通り、人の話にしっかりと耳を傾けている。

オレの読みが当たっていれば、今現在、コイツは結構、動揺してるはず。

理由は３つ。

オレは本音で話してる為、洞察力に長けているコイツからしたら、オレが言ってる事を疑いようがない。

もう１つ。

オレは被害者だと強調した上で、モトヤマもひっくるめて長山以外の全員を一まとめで被害者なんじゃないのかと、相手に善悪の判断を委ねるカタチで問いただした事。

そして３つ目、これがミソ。

みんな我慢して・・・。

人一倍、協調性と正義感が強いＡＢ型。

みんなが我慢して言いなりになってるという事実に疑問を持たないワケがない。

そして、ここでオレの追い討ちが加わると・・・・・？

「オマエらと組んで長山をぶっつぶしたいってのがオレの本音だけど、オマエらにもプライドってのがあると思うし、いくらオマエらが信じていたものが悪だと分かった所で、そう簡単に引き下がれない気持ちも痛いくらい分かる。だからオレは、オマエの判断に委ねるしかない・・・」

モトヤマは何かを深く考えるように、ゆっくりと視線を地面に移した。

ＡＢ型は自分の気持ちに正直だし、自分の判断力にかなりの自信を持っている。

今回はそんなＡＢ型の特徴を有効利用したオレの作戦に、まんまとコイツが引っ掛かった図式だ。

さらに、オレの計算通りに進めば、これからＯ型のＩＱヤローがこの会話に加わってくる。

「おい、モトヤマ！　オマエ、コイツの言う事信じているのか？！」

そら来た！　ＩＱヤローだ！！

Ｏ型の喧嘩は、敵が善だろうが悪だろうが理由に関係なく、仲間を最も優先させる。

上手くいけばコイツもオレの話術で何とか冷戦に持っていけそうだが、そんな時間はない。

このままだと確実に後ろに控えている長山たちが参戦してくる。

急がねば！

スキがある、今のうちに・・・・・！！

「いや、オレは別に・・・」

今し方オレの話術の虜になっていたモトヤマは、ＩＱヤローに、とりあえず弁解をしている。

モトヤマのヤツ、偽善を憎む割に、流石にスイッチの切り替えが早い。

やはり、いくらＡＢ型でもここは仲間優先だよな・・・。

ここはヤツらに戦略を練られる前に、作戦を実行しないとな。

ＡＢ型とＯ型は、時として知的な最強タッグになりかねない・・・。

「モトヤマ！　ここはオレと組んで、コイツをとりあえずやっつけようぜ！！」

オレはＩＱヤローを指差しながら、モトヤマに友好的に近づいた。

案の定、モトヤマは距離を置く。

ＡＢ型は、相手との距離に、妙に敏感に反応する。

ましてやそれが対峙中の敵なら尚更。

その隣では、ＩＱヤローがブチギレ寸前のご様子だ。

そこでオレは、ついにＩＱヤローと目を合わした。

思った通り、ヤツはオレに近づいてきた。

ここまで計算通り。

オレの読みが当たれば、オレの目前で確実にコイツは何か言葉を発する。

その瞬間のスキを突いて、オレの一撃が炸裂するという策戦（さくせん）だ！

・・・来た、来た。

Ｏ型はＡＢ型とは違い、相手との距離を縮めたがるのが特徴。

喧嘩なら至近距離でのメンチ合戦などお手の物だ。

まるでキスができちゃう程のガンのつけ合いは、距離感重視のＡＢ型には信じがたい光景だろう。

ＩＱヤローはオレの狙い通り、オレの真ん前に来た。

今の今まで無視されていた反動で、コイツはオレが今まで頭突きでここまできた事を忘れているようだ。

「オ・・・」

出たっ！　オレの読みが当たった！！

喧嘩の前に何かセリフを吐こうとしている。

Ｏ型は自己主張が強い為、自分が話をしている時、己の表現したい概念のみに集中する。

いわゆるスキだらけ状態！

今が絶好のチャンス！！

ボゴッ

オレの、今日４度目の頭突きがＩＱヤローの鼻っぱしらに直撃した。

バタ～～～ンッ

ＩＱヤローは直立不動の体勢で後ろにバッタリ倒れた。

Ｏ型の、自己主張の強さがこんな所でアダになったようだ。

「ヤロォ～～～～！！」

モトヤマは、やぶれかぶれでオレに突進してきた。

へぇ～、常に冷静沈着のＡＢ型が、そこまで歯をむき出しにするって事は、相当アタマに血が上ってるご様子で・・・。

喧嘩は冷静さを欠いたらおしまいですゼ。

シュン

モトヤマの右ストレートをしゃがんで避けたオレは、そのまま勢いよく立ち上がった。

バッゴッ

ついに本日、５発目の頭突きが炸裂した。

長山とヒョウタンは唖然としている。

ザコは倒した！

残るは中ボスとラスボス！！

流石にもう、頭突きは使えない・・・よなぁ～？！

いい加減、アイツらも警戒するよ、絶対。

・・・さてさて、これからが勝負だ、な。

第４９話　誰かさんの攻撃みたいだ

残るは長山とヒョウタンの２人だ。

Ｏ型とＡＢ型。

図式はさっきと同じ血液型の組み合わせだが、はたして同じように上手くいくかどうか・・・？

さっきは同レベルの仲間同士だったが、今度は親分と子分の関係。

作戦はイチから練り直した方がよさそうだ。

・・・そんな事を考えていると。

・・・？？

「村田、テメェー、オレの言う事が聞けねぇ～ってのか？　アァ～ン？！」

「いや、ここはやっぱし、一番強ぇ～人が行くべきですって」

「いいから行けって！！」

「いや、ここはやっぱし、長山さんが片付けちまった方が、絶対早いですって」

「テンメェ～！！」

長山とヒョウタンが揉めている。

どっちがオレとやるかで揉めている。

・・・っつ～事は、やっぱり長山もチキンヤロォ～だったって事か。

O型の性格上、手下の前で負けたら面目丸潰れ感は否めない。

・・・と、すると、やはり何としてでもここは手下のヒョウタンを先に送り込もうとするはずだ。

ズバコッ

ゲッ、想定外の展開、仲間割れだぁ～～～！！

何と、ヒョウタンが長山に頭突きを喰らって倒れてしまった。

モロ、顔面にヒットした為、ヒョウタンは1発でノビてしまった。

まるで誰かさんの攻撃みたいだ・・・・。

「・・・ったく、どいつもこいつもよォ～～！！」

長山がキレた？

・・・いや、何か仕方なく、無理矢理自分に気合を入れてるような、そんな雰囲気を感じるのはオレの気のせい？

夜の桜吹雪が舞う中、長山がゆっくりとこっちに向かって歩いてきた。

指をポキポキさせ、首を傾けながら眉間に強めのシワを寄せてカッコつけてるが、少々足が震えているように見えるのは、オレの気のせい？

「オレはこいつらみてぇ～にはいかねぇ～ぞ。テメェ～のチョーパンは見切ったゼ」

長山が口元をほんの少し緩めながら、キーの高い声で言った。

見切った、だと・・・？！

そのセリフ、オレはどう受け取ればいいんだ？　まともに受け取っていいのか？

オレを笑わせようとしてんのか？　ただの挑発か？　マジで言って

んのか？

マジで言ってるとしたら、相当自信アリ？

それか、作戦？

作戦だとしたら、ハッタリがオレに通用すると思ってんのか？

・・・それとも、もしかして、アタマの中、ビビリ過ぎて真っ白？？

「オラ、こいよ亀鶴。フン、それとも怖気づいたってか？！」

長山が腰を引き気味で言った。

オイオイ、ど～見たって怖気づいてんのはオマエだろ。

何か、声、震えてるし・・・。

それに、ファイティングポーズ？　モロ、顔面への頭突きを警戒した構えだろ、それ。

小学生にすら分かるぞ、頭突きをメッチャ警戒してるって。

よし、そのまま顔面ガードだけしてやがれ。

ダッダッダッタッ

オレは長山めがけて突進した。

キキッ

オレは瞬間的に現れた目の前の黒い影にビビって、寸での所で走を止めた。

何と、長山の前に鼻から血を流したヒョウタンが立ちふさがっている。

「む、村田・・・」

長山は突然のヒョウタンの登場に、困惑の表情をしている。

「長山さん、さっきはスミマセンでした。ここはオレが先にやりますから、長山さんは下がってて、ください」

第５０話　長山に見た、漆黒の闇

長山に頭突きで倒されたはずのヒョウタンが、オレの攻撃から長山を守るように立ちふさがった。

普通だったら、明らかに敵にビビっていて、仲間を道具としか思ってないボスなんか、完全に見切りをつけると思われるが、コイツは見捨てるどころか長山を庇(かば)いやがった。

理由は何だ？

長山の心の醜さを知りながら、あえてそれを包み込み、自分の非を認め、長山に謝りつつ、敵の前に立ちふさがる、その意味とは・・・？

ヒョウタンはＡＢ型。

・・・・そうか。

・・・なるほど。

ＡＢ型は誰もが認めるように、二面性がある為周囲は本心を読みにくい。

ＡＢ型のヒョウタンは、外面はいつもクールなヤツに見える為、Ｏ型の長山には、ぶっちゃけ何を考えているか分からない不気味な存在だったのかもしれない。

いわば、本心の読めない、敵なのか味方なのか分からない、曖昧（あいまい）な手下・・・。

長山は自分の手下が一人、また一人と倒れる度、自分が今まで築き上げてきた地位を失う恐怖と戦い、また、自分が築いてきた仲間との人間関係をも危うく感じていた。

そんな折、訪れた側近との亀裂。

ヒョウタンには何らかの意図、考えがあったのかもしれないが、そんなものに聞く耳を持つどころか、心に全く余裕のない長山は、仲間すら信じられないという、一種の錯乱状態に陥り、側近のヒョウタンに暴力を振るうような突飛な行為に及んだんだ。

ＡＢ型はクールだ。

だが、それは顔や口に出さないだけなのだ。

本当は、内面は物凄く感情が豊かで、熱い心を持っている。

しかし、そんなホットな自分を相手に分からせようともしない為、そう簡単にＡＢ型の本性を暴けない。

長山が困惑するのも当然だ。

恐らく、何らかの理由があって、ヒョウタンは長山を心の底から慕っているんだと思われる・・・。

・・・さてさて、どうしたものか。

その友情という名の牙城を崩すには、どんな手でいくべきか、だ。

「村田ァ～！　テメェ～はもう出てくんなっつ～の！！　オレを怒らせるんじゃねぇ～っつ～の」

長山は自分の目の前に現れたヒョウタンに怒りを向けた。

ヒョウタンの首根っこを掴むと、そのまま振り回すように服ごと揺さぶった。

「ジャマしてんじゃねぇ～よ！！　人の喧嘩のジャマしてんじゃねぇ～～～よ」

ズサッ

長山の前蹴りでヒョウタンは尻餅をついた。

バキッ　ドカッ

倒れたヒョウタンに対し、長山が何発も蹴りを見舞った。

長山・・・、哀(あわ)れなヤロォ～だ。

何に対して、どういう理由でそこまでキレたのか分かんねぇ～けど、無様(ぶざま)すぎるぞ、長山。

オレの目には、弱いモンにしか強くなれない、哀れなイジメっコにしか見えねぇ～よ・・・・・・。

・・・言葉もねぇ～よ。

「・・・おい、長山」

「アアァ～～～ン」

長山がいきり立って振り返った。

「オマエは仲間を勘違いし過ぎた。仲間ってのは、オマエの道具か？　単なる手駒か？　もしそう思ってんなら、それはオマエだけだ。オマエの仲間は、みんな澄んだ目をしていた。今のオマエみてぇ～に淀(よど)んだ目はしてなかったぞ」

「はあ？　何ワケの分かんねぇ～事言ってんだよ、クソヤロォ～」

「初めから間違ってたんだよ。だから、今ぶっ倒れてるコイツらに

も責任がある・・・」

「テメェ～、さっきからワケ分かんねぇ～事ほざいてんじゃねぇ～よ」

「・・・オマエには、オマエには、オマエにはボスになる器（うつわ）がねぇ～って言ってんだよ！！」

「オマエオマエうるせぇ～～～～んだよっ！！」

ゴキッ

長山が至近距離で頭突きを放った。

オレの顔面に長山の攻撃が直撃したのだ。

一瞬目の前に、蜂が花畑を飛び回るが如く、星が無数に瞬いて見えたが、後ろに倒れるまでには至らなかった。

鼻の下に熱いものを感じる。

どうやら鼻血が流れ出たようだ。

目の前には、顔を下に向け、上目遣いで顎を突き出し、目を大きく見開いた長山が息を切らしてこっちを睨んでいる。

ヤツの鼻息は、赤いマントで挑発された闘牛場の猛牛のように荒い。

初めての喧嘩でかなり興奮しているようだ。

だが、今のオレにはオマエの心境が手に取るように分かる。

目の前の存在、つまりオレが、あまりにも巨大で、恐ろしくて、どうしようもなくて・・・

ただ、ただ、目に映る一瞬一瞬を途切れ途切れに心に刻んでいるだけの状態だろ？

その心境、初めてか？

オレは昔、何度も味わったぞ、その心境。

逃げたくても逃げ出せない、戦うしかないんだが、どうしても勝てそうな気がしない。

それ以上に、急所がこれでもかっていうくらいに縮こまる。

息を吸ったまま、いつまでも吐ききれない。

目に映るもの全て、夢であってほしいと思うほどの絶望感。

・・・それが、敗北だ。

長山、今、ラクにしてやるゼ！

オレがコブシを握って少しだけ屈(かが)むと、長山が脅えるように両目を閉じ、素早く両腕で顔面をガードした。

そんな長山が、とても滑稽(こっけい)に思えた。

・・・その時!!

オレの脳裏に浮かんだのは、とてつもなく深く、漆黒の闇をも覆い尽くす、自分のトラウマの数々だった・・・・・。

子羊のように脅える長山を見て、口元と頬をいやらしく歪めた自分が、堪らなく怖かった・・・・・。

第５１話　追いかけっこ

子供の頃、近所のガキ共と鬼ごっこをした時の事・・・。

下級生を追い回す、鬼の自分。

まるでヤツらを全員手玉にとった気分だった。

自分より足が遅くて知能が低い下級生たちを捕まえるのは簡単だったが、ワザと追い回して鬼を愉しんでたっけ・・・。

あの時、その時間がいとおしい程面白くて、涎（よだれ）がこぼれるほど夢中になったっけ・・・・・。

追い回される方も不安と恐怖に駆られるが、所詮遊びの為、そんな自分を楽しむ余裕がある。

そして自分も鬼になった時に、追い回す側の悦びも味わえる。

いわば弱肉強食の野生の世界を疑似体験できる、子供ならではの知的な発想行為。

そんな鬼に扮した際味わった感覚に、今の自分の感覚が似ている。

怯える長山に対し、余裕で対峙するオレ。

まるで長山を自分の手玉にとるように、手の平でコロコロと転がしている。

笑いながら・・・。

人は時として、残酷だ。

相手の気持ちを全く考えず、何のためらいもなく自分の欲心を満たす。

今のこの状況、何かに似ている・・・。

そう、中学の時、強いヤツと喧嘩した時、こんな場面、何度もあったっけ・・・。

喧嘩で優勢になった敵が、ニタニタと笑みを溢しながら、オレをいたぶるんだ。

さも、楽しそうに。

それが堪らなく嫌だった・・・。

堪らなく怖くて・・・。

さらにオレがイジメられ・・・

いや、もうこれ以上・・・・・

思い出したくもない・・・・・・！！

オレは、あの時の喧嘩の相手と、今の自分をダブらせているのか？

今は全ての面であの時とは意味合いが違うんだぞ？！

こっちには正当な理由があり、正義を貫いてるつもりだし、どっから見ても向こうが敵だ。

何もためらう事はないんじゃないか？

・・・でも、状況が違うとはいえ、オレが長山を前にして不敵な笑みを溢してるのは事実。

長山から見てオレの姿は、あの時の敵と何ら変わりがないのではないか？

・・・これじゃあ、長山にとって、オレは単なる悪でしかない！！

戦争。

国と国との対立。

例えば、どっかの国が地球の資源を独り占めして金儲けをしていた

とする。

それを我が国は、みんなで分け与えようと説得してみる。

でも、独り占めしていた国は、断固反対する。

のみならず、うるさいと言って蹴飛ばしてきたとする。

我が祖国は正論しか言ってないし、正義だ・・・。

攻撃を仕掛けてきたのは向こうの国だ・・・。

話し合いでは埒があかないので戦う。

勝つ。

でも、報復されたとする。

アタマにきたので報復を報復で返した。

そしたらテロ攻撃された。

そのテロに対してブチギレし、徹底的に潰しに掛かった・・・・・。

・・・どこかの戦争の話。

・・・人間の喧嘩も同じ。

スケールの違いだけ。

これじゃあ、いつまでたってもキリがない！

この戦いだってそうだ。

オレはこの戦いで、決着がついて完結だと思っても、長山が恨みを抱いたらそうはいかない。

オレは長山の報復を喰らう。

もしかしたら、長山は自分のバックを出してくるかもしれない。

例えば、暴走族。

その暴走族を倒しても、今度は暴走族が自分らのバックを出してくる。

例えば、ヤクザ。

そのヤクザを倒しても、今度はヤクザが自分らのバックを出してくる。

例えば、マフィア。

そのマフィアを倒しても、今度は・・・と、永遠にキリがない。

上には上がいる。

中学の頃のオレは、完全に戦意が喪失するまでいたぶられたから、報復する気は失せた。

オレが親や教師にチクったとしても、それに対する報復が怖くて誰にも話せなかった。

あの時の敵は、オレにとって悪でしかない。

・・・オレは悪にはなりたくない。

オレは正義でいたい。

それには、どうすれば?!

・・・そうか、長山の立場になればいいのか?

今の長山は、敗北感で竦(すく)み上がっていた時のオレに似ている。

それに、コイツの血液型はO型。

あの頃オレは、自分の血液型はA型だと頑(かたく)なに信じ、本当はO型だって事なんて知る由もなかった。

でも、O型には変わりなかったはずだ。

A型だと思い込んでいたからといって、境地に陥った時の感情まではコントロールできなかったはず。

つまり、あの時のオレの心境を思い出せばいい。

・・・あの時、オレはどうしてほしかった？

第５２話　勝利の雄叫び

あの時のオレは・・・・・・

許してほしかった。

できれば、平和に解決したかった。

もう、目の前の敵とは関わり合いたくなかった。

・・・じゃあ、オレが今、こいつに出来る事は？

「長山、もういいだろ？　やめようゼ。ムダな争いは、もう、止めようゼ」

オレはいつの間にか、無意識でそんな言葉を口にしていた。

困惑した表情の長山は、眉間に強烈なシワを寄せて言った。

「はあ？　さんざんやっといて、今更止めるだ？　ふざけんじゃねぇ～ぞ、コラァ～！！」

オレは自分の周りを見渡して改めて考えた。

・・・そりゃ、そうだよな。

こんだけ好き放題やってきて、今更止めようってのは、虫が良すぎるよな・・・。

・・・じゃあ、どうしたらこの喧嘩、終わるかな?

「長山。どうしたら、ウチのクラスにカンパ回さなくなる? 拒んだらこうなったんだよ。オマエらに先にやられたから、オレはやって返しただけだろ? オマエをオレが倒したら、それで終わるのか?」

オレの問いに、長山は・・・

「奇麗事並べてんじゃねぇ〜よ。仲間やられて、今更退けるかよ」

「仲間? 手駒の間違いだろ? 仲間ってのは、自分の下でも上でもなく、同類の事なんじゃねぇ〜のか? 自分の意見を押し付けるワケでもなく、信頼できて、全てを共有できるヤツが仲間って言うんじゃねぇ〜のか?」

オレは自分の気持ちを率直に述べた。

・・・と、その時!

「だから、さっきからウルセ～って言ってんだろォ～がァ～～～！！」

バキッ

長山のストレートパンチがオレの右頬にぶち当たった。

・・・ったく、喧嘩は冷静さを欠いたら終わりだって何度も言ってるだろ？

いや、口に出してねぇ～から言ってねぇ～か。

ま、いいや。

おそらく自分から自分へのメッセージだろうな。

オレ、冷静さを欠くなよ・・・ってね。

「うるぉ～あぁっ！」

ビシッ

長山は奇声を発しながら、オレの右頬へもう一発パンチをぶち当てた。

・・・このままオレが無抵抗だったら、コイツの気が済んだらそれ

で終わるかな？

中学の時、メッタクソにやられた日々のように、高校入学早々、テルに因縁をつけられた時のように、ずっと無抵抗を続けていれば、いつか終わりがくるかな？

でも、もしかしたらコイツはオレをボコボコにした事によって、自分は強いって勘違いして、ウチのクラスをも支配するような凶悪に変化する事も考えられるよな。

O型は調子に乗ったら止まらない。

・・・結局、理屈じゃねぇ～のか？

・・・なんか、考えてても答えが出ねぇ～や。

もう、なんか、面倒くせぇ～し、どうでもいいや。

目の前の長山はどの観点から見ても、今のオレにとっては悪！

ならばオレは、ぶっ潰すのみ！！

後先どうなるか？

そんなの今は関係ねぇ～！！

そんなの後先が今になった時考えりゃいい。

「長山ぁ～～～！！　もう2度とウチのクラスに手を出すんじゃねぇ～ぞ、コラァ～～～！！」

オレは勢いよく長山の顔面目掛けて突進した。

長山は案の定、頭突きを警戒して頭部を両腕でガードしている。

O型の感情表現は全血液型中トップ。

喜怒哀楽、内面、感情がストレートに表情や行動に出る。

それが、単純と呼ばれる所以（ゆえん）。

長山の腹部はガラ空きだ。

オレの頭突きを、さも嫌がっていると思われる長山の表情を見る限り、何か作戦があっての顔面ガードとは思えない。

素直な顔面のみ、ガード。

オレは頭突きを放つフリをして、渾身の力を込めて長山のみぞおち目掛けて右腕を振り上げた。

ボフッ

苦悶の表情を見せる長山。

そのまま長山は、痛めた腹部を両手で押さえると、両膝を地面につけた。

そして、尻を上空に突き上げる格好で、まるで頭が地面に吸い込まれるように、ゆっくりと額を地面にくっつけた。

桜の花びらが数枚、ヒロヒロと舞い降りてはオレの視界を少しだけ遮る。

長山は動く気配は、ない。

今の一発で、完全に仕留めたか？

もしかして、いわゆる、死んだフリかもしれない？

いや、たとえそうだとしても、コイツに優しい言葉や情けをかける事は無用・・・。

なぜなら、オレがされたら嫌だから！！

オレは両コブシを握り締め、両腕を左右に突き出し、大きく胸を張

った。

そして、天空に向かって、ひと吼え、勝利の雄叫びをあげた。

「うおぉ～～～～っ！！」

有り余る喜びや怒りなどの様々な気持ちを、全て天に向かって解き放った。

オレの叫びと同時に、強めの風が桜を散らせた。

まるで、沢山の桜吹雪がオレを祝福してくれているようだ。

戦場の敵を蹴散らした勇者の、勝利のキメポーズってトコロかな？

たぶん今のオレ、超カッコイイゼ・・・。

ふぅ～～～っ。

オレは大きな溜息を吐いた。

・・・・終わった。

終わったぞ、オッキー！！

見たか、オレは7人掛けに勝利したぞぉ～～～！！

みんな、見たかぁ～～～?!

・・・って、だ～～～れも見てねぇ～～～し!

オッキーは相変わらず大の字。

ユイは上木と睨みあい、竜崎と宮さんは戦闘中。

オレの勇士、オレの活躍、オレの最後のキメ、ｅｔｃ・・・結局、誰も見てねぇ～～～～し!!

第５３話　ユイの別儀

長山を一撃で沈めたオレは、その場にあぐらをかいてみんなを見学してやろうかと考えたが、ユイの姿が視界に入って我に返った。

とりあえず竜崎や宮さんはどうでもいい。

助太刀に入ろうとしても、拒否されるだけだろうし。

そんな事より、ユイを助けねば！

オレはユイの元に駆け寄った・・・瞬間！！

ブオン

おそらく口喧嘩から発展したのだろう、とうとうキレた上木が手を出した。

と、言うより足を出した。

ユ、ユイが蹴られる。

オッキーのようにハイキックを顔面に喰らってしまう。

助けねば！！

・・・でも、間に合わないっ！

ちきしょう、ユイ～～～！！

バシッ

へ？！

オレの目前には、信じがたい光景があった。

上木の高速ハイキックを、ユイは左手で素早くキャッチした。

そのまま・・・

グルン

速いっ！！

ユイは上木を鮮やかに投げ飛ばした。

「きゃっ」

ズサッ

上木は宙を、弧を描くように一回転し、地面に叩きつけられた。

一瞬の出来事だったので、頭の中で目の前の視覚から得た情報を分析する処理が遅れたが、どうやらユイは、ハイキックを片手で受け止めた際、その足を押し出したのと同時に上木の軸足を払いのけたようだ。

その動きが高速だった為、上木は勢いで宙を一回転してしまったワケだ。

ユイは全く力を入れた様子もなく、それを平然とやってのけた。

まるで、相手の攻撃の反動を利用し、そのまま投げてしまうという、護身術や古武術の中でも難易度の高い『当て身投げ』のようだ。

ユイは上木が地面に叩きつけられる際、上木の腕を掴んだ。

そのお陰で上木は自然に受身をとらされるようになっていたようだ。

しかし、しばらく戦線離脱は免れないだろう。

相手を怪我させずに戦闘不能にさせる、まさに計算されつくされた護身術？

上木は言葉もなく、倒れたまま痛そうに太ももなんぞを擦っている。

ユイに罵声を浴びせる事も、立ち上がる事もしない。

目の前のユイには、もう関わりあいたくないといった所だろうか・・・？

確か上木はＡ型。

Ａ型と言えば、論理的に思考を組み立て、目の前の現実のみを着実に、ゆっくりと分析するタイプが多い。

しかし、今回のように突然の事故のような場合、さすがにゆっくり分析する余裕はないだろう。

反撃を企てない所を見る限り、Ａ型独特の早とちりも加わり、ユイをかなりの強敵と判断したものと思われる。

それより、なぜ、ユイがそんなワザを？？

オレの頭の中では、一生懸命分析困難な現実と戦う脳細胞たちがいたが、とうとうトルネードに巻き込まれ、渦を巻いて吹っ飛んでしまった。

オレの頭の中は大パニック。

大災害だ。

「正当防衛よ」

ユイはオレの顔を見て、言い訳がましい表情をしている。

ユイ・・・

あまり自分の事を口にしない性格だから、謎多きミステリアスな女性的イメージは昔からあったが、これほどまでの謎を秘めているとは・・・。

・・・って感心してる場合じゃない。

「ユイ、これはど～いう事だ。ど～して今まで黙ってた?!」

「はい?　何の事よ」

「とぼけるなよ。たった今、そいつをぶん投げたろ。オレはこの目でしっかり見たぞ!」

「別にアンタに隠してたつもりはないわよ。ただの当て身投げじゃない」

「やっぱり当て身投げかよ!　・・・っつ～事は、痴漢とか犯罪防止で護身術を習ってたとか、極秘で古武術とかを習ってたとか、総合格闘技をやっていた・・・とか?」

「どうでもいいけど、ちょっとオッキー、いつまで寝てんのよ!」

ピシッ

オッキーはユイに引っ叩(ぱた)かれて目を覚ました。

「あれ？　ここはどこ？　私は誰？」

オッキーは、どうやら軽い脳震盪を起こしていたようだ。

「・・・ったく」

「アレ？　どうしてあの女が倒れて・・・？　あれぇ?!　長山たちが、全滅してるぅ～～!!」

オッキーがオレの下へ駆け寄ってきた。

「ジオン。竜崎たちに助けてもらったのか?!」

「オレが一人でやっつけたんだよ!」

「マジかよ?!」

「あたぼーよ」

「嘘つくなよ」

「ホントだって」

「はい、はい」

オッキーはまるで信じていない。

もう、い～よ。

信じるか信じないかはオマエ次第だ。

・・・勝手にしろ！！

それより、どうしてユイが強いか、だ。

「おい、ユイ！　どうして当て身投げなんて出来るんだ？」

「アンタもしつこいわねぇ～。そんなのアンタに関係ないでしょ～」

ダメだ、ユイが怒り出した。

B型はこうなると、頑固として教えない。

テコでもダメだ。

聞けば聞くほど門が閉まるだけ。

B型は気まぐれだから、そのうち気が向けば簡単に教えてくれる。

ここは黙って、ユイの口からポロっと真実が飛び出すまで、気長に待つのが得策だな。

「伝説の番長、宮さんだっけ？　あの人の構えは柔道だね。相手はそれを知ってて武器を使ってるのかな？　この戦い、間合いをどう

詰めるかがカギね」

ユイがオレの隣で腕を組みながら、宮さんと秋鹿の戦いを分析しだした。

ますますユイが分からなくなってきた・・・。

長年ユイの近くにいるが、ユイってこんなヤツだっけ？

・・・ま、今までユイがオレの喧嘩にまざった事なんてなかったから、こんな一面があったなんて知らないだけだったのかもしれないが。

「あれ？　ユイって格闘技好きなんだっけ？　やけに詳しいな」

オッキーが不思議そうな顔をしてユイを見た。

「別に」

別に・・・って、別に格闘技に興味ないヤツが、人の構えを見ただけでそれが何々の構えだとかって瞬時に分かるモンなのか？

それより瞬時に高速ハイキックをキャッチして、鮮やかな当て身投げに持っていけるモンなのか？

「あっ！　宮先輩が刺されたぁ～！！」

オッキーが叫ぶ。

な、なにぃ～～?!

み、宮さぁぁぁ～～～ん!!

第５４話　虹の架け橋

宮さんが刺された?!

・・・と、思いきや、宮さんは秋鹿の高速の一突きを右腕の脇の下に挟み込み、瞬時に払い腰の体勢に持ち込んだ。

ゴスッ

地面に叩きつけられた秋鹿は、衝撃でバタフライナイフを手放した。

よしっ、チャンスだ、宮さん!!

「うるァ～～～」

宮さんは太い声を上げながら、素早く倒れた秋鹿を絞めに入った。

両足をガッチリ秋鹿の体に食い込ませ、右腕でしっかり首をロックし、左腕で秋鹿の片腕を捻じ曲げている。

さすがだ。

「凄ぉ～い、３箇所も同時にキメてるよ」

ユイも宮さんの絞め技に絶賛だ。

「どうだ？　まいったか？！」

「・・・う、うう。ま、まいった！！」

秋鹿は即行ギブアップだ。

あれではタップしないのがおかしい。

完璧にキマっている為、宮さんがロックを解除しない限り、脱出は不可能と思われる。

「よし、じゃあ、誓え！！　もう、２度と人様（ひとさま）に迷惑を掛けませんってな・・・」

「・・・も、もう、しません。ううっ、ぐ、ぐ、苦しい」

「アァ～？　よく聞こえんなぁ～」

「・・・ぼ、ぼう、じません。ゆるじで」

「何だって？　もう１回言えって？　オレは誓えって言ったんだよ。もう２度と人様に迷惑掛けませんって誓えってな」

「・・・・・ゆ、ゆるじでぐださい。ぼう、じどどじません」

秋鹿は今にも泡を吐き出しそうなほど悶絶しながら、声を喉から絞

り出した。

「宮さん、ワザとイジメてない？」

ユイが苦笑した。

オレもユイの言う通り、宮さん流の時間稼ぎだと思う。

あんなポーカーフェイスを装って、ホントは秋鹿に対してはらわたを煮え繰り返してたんじゃないかと思う。

あっけない幕切れに、少々拍子抜けしている観は否めない。

宮さんは秋鹿へのロックを解除し、ゆっくりと立ち上がった。

「アンパンは、もう止めとけ。それから、早めに歯医者も行っとけ」

立ち上げれない秋鹿に対し、そんな言葉を残した宮さんの背中からは、今し方戦っていた対戦相手への敬意すら感じた。

はらわたが煮えくり返っていたにもかかわらず、たとえ相手が武器を持っていても、卑怯でも、おそらく戦った本人にしか分からない何かがあるのだろう。

それとも、秋鹿への憐れみからきた言葉だったのだろうか・・・。

「アンパンって、シンナーの事だろ？　どうしてアンパンって言うの？！」

オッキーがあどけない顔で聞いてきた。

「ビニール袋にシンナーを入れて、吸うんだよ。それが、袋に入ったアンパンを食ってるように見えるから、そう言うんじゃねぇ〜の？　多分・・・」

オレは思いつきを言ってみたが、おそらく由来はそこだろうと思う。

オレは中学の時、好奇心で1度だけやった事があるが、もう2度としないと心に誓った。

やってる時は無意識になれるが、終わった後は半端なく頭に激痛が走る。

それが、いつまでも、いつまでも・・・。

実際、一緒にやってたヤツは、今はもうこの世にいない。

そいつは、たった一晩のアンパンで命を落とした。

薬物もそうだが、一時の快楽の為に人生を終わらせてしまうのはもったいないような気がする。

オレは、どうせならいつまでも続く快楽が欲しいと思う。

去年、学校に講演をしに来た、ある青年実業家が言ってた。

『自分が好きな事をやって、人を喜ばせりゃいい。会話で人を笑わ

せるのもいいし、人に自分の経験事や得た事を述べて、感心してもらってもいい。何かを作って人にあげてもいい。それが物でも、食事でも、愛情でも、自分の歌でも、踊りでも、人に喜んでもらえるなら、何でもいい。シンナーや薬物に染まってるヤツらは知らないんだ。そんなモノに頼らなくても、人間の脳には薬物の何十倍もの快楽を生み出す力が眠っている事を・・・』

幸せになりたいなら、人を幸せにするしかないって、その人は言ってたっけ。

人は私利私欲では、決して心の満足を得ることが出来ない・・・って。

確か、アオイとか言う人だったかな?

若い頃、豪華客船の事故か何かで、無人島暮らしをしたって言ってたな。

昔は相当苦労したらしいけど、そんな経験から編(あ)み出した、人間として理想の生き方なる人生の道しるべを伝えるべく、全国で講演会をして回ってるそうだ。

・・・ってな事を考えてると、宮さんがこっちに気付いたらしく、微笑みながら歩いてきた。

そんな宮さんの後ろには、首の辺りを押さえ、フラつきながらゆっくりと立ち上がる秋鹿の姿があった。

秋鹿は、落ちていたバタフライナイフを拾うと、物凄い勢いで宮さ

んへ突進した。

「みぃ～～～やぁ～～～～!!」

秋鹿は宮さんの背中にナイフを突き刺そうと、駿足を駆る。

宮さんはうしろを振り向く気配がない。

「宮先輩っ！　うしろぉ～～～!!」

オッキーが悲鳴のような叫び声をあげた。

宮さん、どうした?!

うしろから秋鹿が来ているぞっ！

秋鹿の気配に気付かないのか?

戦いの疲れか?　それとも、戦闘が終了して安堵感にでも浸っているのか?!

それとも・・・・・

第５５話　お茶の子さいさい

ガッ

それは一瞬の早業（はやわざ）だった。

秋鹿の突進の一突きを、後ろを振り返らずに寸前でかわした宮さんは、走り込んできた秋鹿の反動をそのまま利用し、華麗なる背負い投げをキメたのだ。

鮮やかな弧を描き、秋鹿の体は宙を舞った。

ビッタァァァン！！

「かっこいい・・・」

オレは思わず思った事を口に出していた。

隣ではオッキーが、オレの言葉に応えるように何度も頷いている。

ユイは澄ました顔で静観していた。

さっきのユイの投げ技にはキレを感じたが、宮さんの投げには重みと説得力を感じた。

その上、どうして後ろを見ないで攻撃をかわし、そこから投げれるの？　・・・という疑問を感じた。

強い、なんてモンじゃない！

並大抵の強さじゃないのは確かだ。

「訓練しただけで、人はあんな余裕が生まれるものなのか？」

オレは独り言を呟いた。

もちろん、ユイが何かを語るのを期待して言ってみたのだが・・・。

「あの人は、人智を超えた強さを持ってるね。相当な数の修羅場を潜って来たんじゃない？」

ユイが乗ってきた。

「人智を超えた強さ？」

オレはユイの言葉に、ワザと疑問をぶつけてみた。

「野生の勘みたいなヤツよ。第六感とか言うじゃない。後ろにも目がある、みたいな」

「何となく分かるけど、それって経験で生まれるモンなの？　元々生まれ持って授かったモンじゃなくて？」

「センスもあると思うけど、この世の天才って呼ばれてる人は、みんな影で努力してるのよ。運がいいとか悪いとか、人はよく言うけれど、私は運がいい人なんていないと思う。頑張った分だけ、努力した分だけ良い結果として返ってくるものだと思うから」

ユイの妙に説得力のある言葉に、オレは返す言葉が思いつかなかった。

「亀ちゃん、お疲れ。結構やられたみたいだけど、大丈夫？　しかし、タフだねぇ～」

自分の事より先に、オレの体の事を心配してくれた宮さんは、オレの隣にあぐらをかいて座ると、おいしそうにタバコを吸い出した。

「宮さん、お疲れさまっす。さんざんでしたね。何か、オレの喧嘩に巻き込んじゃったみたいで・・・」

「いや、いいんだよ。お陰でオレの方のイザコザも清算できたし」

「さっきの投げ、とてつもなく凄かったっすけど、柔道の特訓だけで、あんなに強くなれるモンなんですか？」

思わず気になっていた事を、直で聞いてしまった。

宮さん怒る？

「いやいや、どっちかって言うと、喧嘩かな？　体で覚えたってカンジ？」

おぉ、宮さん、やっぱりオレには優しいぞ。

そうか、喧嘩の経験か。

・・・って、この人、やっぱヤバイって！

どんだけ今まで戦ってきたんだ？！

「アイツ、絶対宮さんを刺そうとしてましたよ。あんな武器持ったヤツが背後から襲ってくるのに、よく後ろも見ないで余裕でかわして背負い投げに持っていけましたね」

「え？　武器持ってた？」

「し、知らなかったんすか？　アイツ、バタフライナイフを拾って、宮さんにナイフを向けながら突進してきたんすよ！」

「マジで？」

宮さんは鼻からＳＬ並みの煙を出しながら、しばし硬直した。

「知らなかったんすか？」

「・・・でも、いつもの事だから。オレは運がいいんだよ。がはは

は」

宮さんは嬉しそうに笑っている。

この人にとって、敵が武器を持っていようが持っていまいが関係ないようだ。

「・・・でも、どっちにしろ凄いっすよ。運も実力の内って言いますからね。敵が武器を持とうが持つまいが、後ろを見ずに投げるという発想は凄い。相当喧嘩慣れしてる証拠っす。相手の性格とかで、距離や位置とかを瞬時に計算したんすか？」

「いや、たまたまじゃない？　頭で考えるって言うより、感じるってカンジ？」

宮さんの笑顔が一段と増した。

宮さんは、オレに褒められて上機嫌のご様子だ。

頭で考えるより、感じる、か・・・。

オレは断然、前者の頭で考えるタイプだ。

宮さんはオレとは全く正反対なタイプなんだなぁ～。

その時、オッキーが叫んだ。

「すげっ！！」

オッキーが感心している方を見ると、竜崎と柴義経が、アクロバット的な戦いをしている真っ最中だった。

2人とも、アクション映画スター、ジョッキー・チェン張りの動きだ。

こんな戦いは、双方とも互角で、尚且つ、それ相応な強さを持ってなければ出来ないと思われ・・・・・。

宮さんといい、竜崎といい、何てヤツらなんだ・・・。

まさか、これほどとは・・・。

第５６話　ちなみに成龍はＡＢ型

義経の素早いパンチを、瞬時に上か下か左か右に避け、素早いキックをジャンプや身屈(みかが)みで避ける。

避けるだけでなく、的確にガードも織り交ぜている。

右パンチを左手、左パンチを右手、右キックを左腕か左足で、左キックを右腕か右足でしっかり防御しているのだ。

まさに、ジョッキー・チェン！！

竜崎の繰り出す攻撃も、義経は竜崎と同じようにしっかりガードする。

２人とも、メチャクチャすげぇ！！

「う～～ん。イマイチだな～～～」

ユイだ。

何てヤツだ。

この戦いをイマイチだとでも？

一応、何がイマイチなのか訊いてみるか・・・。

「どこが？」

「竜崎の動き、全般よ。せっかく攻撃の避け方も防ぎ方も一流なのに、距離を測る一瞬一瞬に、微妙なズレを感じるのはアタシの気のせいかしら？」

「は？　どういう事？」

「何か、一回毎の動きの後、目の前のピントがズレちゃって、それを修正している最中に次の行動を起こしてるカンジ？　つまり、先手先手を先読みしながら戦ってるのよ」

「瞬時に敵の攻撃を避けてるんじゃなくて、前もって先読みして避けてるってのか？　凄いな、そりゃ・・・」

「全然凄くないよ」

何～？！

どんだけ自分に自信があるんだ、コイツは・・・。

「ユイ、オマエ、やっぱり何か格闘技でもやってたのか？　それとも今でもやってんのか？　別に公言しねぇ～から、正直に言えよ・・・」

「そうじゃなくって、竜崎の今の動きは、本来の動きではないって

言ってるの。いい？　前もって先読みして攻撃を避けるって事は、例えば上段か下段の攻撃、つまり、２舎選択を迫られた場合、２分の１の確率で攻撃を受けるって事なのよ」

「そうか！　だから竜崎は、敵の攻撃を避けたりガードしたりしてるワケか。つまり、ガードしてる時は読みが外れた時ってワケだ」

「そう。だから、防御に専念してるから、なかなか攻撃に移れないワケよ」

「思えば竜崎の手数は妙に少ない・・・」

このスピードの中、瞬時に竜崎の動きを分析するとは・・・。

なかなかやるな、ユイ。

「ユイさん？　さすがだね、図星ぃ～！　竜ちゃんは、目が悪いんだよ・・・」

宮さんがユイの言葉に感服しながら言った。

「やっぱり。どうしてメガネ掛けないの？　アイツ」

「あっ、いつも竜ちゃんソフトコンタクトつけてんだけど、今日、カラオケで落としたみたい。目がゴロゴロしてたから、洗面所で外したんだって。その時にどっかに消えたって言って、キレてた」

「ドジね～」

全くだ！！

こんな大事な時に、コンタクト落とすか？　フツー。

・・・ま、大事な決戦が控えてた、なんて、落とした時は思いもしなかったんだろうけどさ。

ドカッ

義経の肘鉄（ひじてつ）が、ついに竜崎の首筋にヒットした。

「今、エルボーが当たっちゃったぞ！　大丈夫か？！」

オッキーも心配している。

見る限り、竜崎が攻撃をくらったのは、今のが初か？！

さすがに避け続けるのも限界があるよな。

ギャウッ

義経の水面を蹴るような回転足払いが、見事に決まった。

意表を突いた義経の大技に、竜崎は一瞬転びかけたが、すぐに体勢を立て直した。

ほんのちょっとスキを見せた竜崎に、義経はチャンスとばかり乱舞（らんぶ）

を見舞った。

掌打とローキックの連発から、左右のハイキックの乱れ打ちに続き、シメとばかりにもう1度水面蹴りを放つ。

それはまさしく入り乱れて舞うような動きのコンビネーションアタック。

さすがの竜崎も、2度も同じ大技をくらうワケにはいかない。

義経の水面蹴りを大きなジャンプで回避した。

が、着地と同時に義経の、左右高速ハイキックが待っていた。

片ひざをついた竜崎は、義経のトリッキーな連続する攻めをガードする間もなく、ついに義経の必殺技をくらう事になる。

義経は竜崎の片ひざを踏み台にして、強烈な飛び膝蹴りを竜崎の顔面にヒットさせた。

ザウッ

背中から滑り落ちた竜崎に、馬乗りになった義経は、目にも留まらぬ速さでナックルを早打つ。

バキ　ドカ　バコ　ドコ

ガードする間もなく、竜崎は義経の顔面攻撃を浴び続けている。

「どうする？　止めるか？！」

オレは誰にともなく言った。

「もう、やめろぉ～～！！」

オッキーが堪らず叫ぶ。

残念だが、もう勝負はついた・・・。

あれだけ攻撃を浴びて、立てるはずはない。

それを証明するかのように、手応えを肌で感じた義経は、攻撃を止めてゆっくり立ち上がった。

「どうします？　次・・・。誰か、オレとやりますか？！」

第57話　宇宙空間歪曲航法

喧嘩と言うより、まるでプロ同士の格闘技戦を生で見せられたような気分だ。

そんなカンジなので、竜崎の敗北を認め、義経の言葉を頭で理解するまで少々時間が掛かってしまった。

オレの隣では、オッキーは恐怖に満ちた表情で固まり、宮さんとユイは難しそうな顔で静観している。

あれ？　宮さん、行かないの？！

そ、そうだよね、この喧嘩、元々オレが引き金だモンね。

やりますよ、オレ。

やりゃいいんでしょ、やりゃ～。

その代わり、オレが死んだら骨を拾って下さいね。

・・・っつ～より、オレがピンチになったら、すぐ助けて下さいよ！

「オレが・・・」

嫌々を態度に出さないよう注意を図りながら、義経の挑発に乗ってみたオレの視界に、とんでもないモノが入った。

マジかぁ～～?!

バァァァーーーーン

何と、竜崎が全然へっちゃらな顔をして、義経の後ろに立っている。

首をコキコキと動かし、余裕すら漂わせる風格だ。

立っちゃたよ、アイツ。

それにしても、あんだけ攻撃を受けて、なぜに平然?!

「・・・・・・・・・」

オッキーは口を大きく開けて、先ほど以上に固まっている。

そりゃそうだ、フツー、納得できない。

あれだけ連発くらって、平気で立つ？　フツー。

少しくらい痛そうな顔したり、血～くらい出そうよ、血～くらい。

せめて鼻血くらいさ～。

「竜ちゃん、相変わらず打たれ強いなぁ～～～」

宮さんが感心した口調で言った。

「なかなか、やるわね」

ユイも微笑んでいる。

宮さん、『竜ちゃん、相変わらず打たれ強いなぁ～～～』・・・って、打たれ強いにも程があるって！

ユイ、『なかなか、やるわね』・・・って何？　なかなかって、何？

「マジかよ！！　信じらんねぇ～なぁ～。ははは・・・」

義経は頭をポリポリかきながら、竜崎の顔を見て苦笑いをしている。

オマエのリアクションも信じられねぇ～よ、柴義経っ！

オマエら変！　絶対、変！！　・・・ってか、ここにいる人、みんな変！！

ぶっちゃけ、オレＶＳ長山の手下とか、オレＶＳ長山とか、自分でスゲェーと思ってたから、コイツらにオレの戦い見てもらえなくて

残念だったなぁ～って思ってたけど、今思うと、見られなくて良かった・・・・ってなくらい、ここにいるヤツらのレベル、凄くねぇ～?!

その時、信じられない光景を目の当たりにした。

何と、竜崎が目を閉じたのである。

目を閉じてその場に立ち尽くす竜崎に、困惑の表情を浮かべた。

「気でも狂ったか？　竜崎光一！」

竜崎は無表情のまま沈黙している。

立ったままKOしてるのかぁ～?!

「ムリして立つからそうなるんだ、竜崎光一。今すぐラクにしてやるよ」

義経はとどめとばかりに竜崎に突進した。

おそらく義経は、右腕に有りっ丈の力を溜め込み、勢い任せに渾身の一撃を放つつもりだ！

あの距離の助走で殴られたら堪ったもんじゃない!!

どんなにタフだと言っても人間には限界がある。

無防備状態であの速度の一撃を喰らっては、歯、もしくは鼻、頭蓋

骨骨折だって考えられる。

気を失ってるのか竜崎？

それとも・・・・・作戦？

「トドメだ竜崎～～～！！」

義経の助走をつけた攻撃が竜崎を襲う。

竜崎～～～～、目を覚ましてくれぇ～～～～～！！

・・・と、その時！

シャウッ

何と、竜崎が目を閉じたまま瞬間移動をした。

ガゴッ

義経の右ストレートを余裕でかわした竜崎は、その瞬間、鮮やかにカウンター攻撃を決めた。

竜崎の左腕は弓を引くような格好で、それと同時に手首をスクリューのように回転させ、義経が勢い良く近づいた反動を利用して鼻元を抉（えぐ）った。

「み、宮さん、竜崎って、何か格闘技とかやってるんすか？」

宮さんに堪らず質問してみた。

あの竜崎の強さは尋常じゃない。

「いや、何もやってないと思うよ？」

「へ？　じゃあ、あの強さはどっから？」

「オレも詳しくは分からないけど、竜ちゃんはオレと違って頭良いから」

いや、頭良いとか悪いとか関係ないような気がするけど・・・・。

さっきの宮さんは、とっさに第六感のような人間の本能的感覚で攻撃を避けた感が強いが、今回の竜崎のソレは、明らかに故意にやっている。

まるで、頭で考えるんじゃなく心で感じるってヤツを、自ら実践してるみたいな・・・？

オレは頭を振って、今見た光景を自分の脳裏で巻き戻してもう一度再生してみた。

超能力ばりのテレポテーションに見えたが、さすがにアニメや特撮のような瞬間移動は有り得ない。

高速移動で攻撃をかわした竜崎が、素早く左腕を義経の顔面付近に

配置し、待ち構えたカウンター攻撃を見事に炸裂させた図式で間違いないだろう。

天晴(あっぱ)れだ。

竜崎にカウンター攻撃を喰らった義経は、その場に崩れ落ち、ピクリとも動かなくなった。

説得力のある竜崎の完全勝利だった。

「やったぁぁぁ～～～～っ！！」

オッキーが叫ぶ。

今までの経緯とか感情とか、色々思い出したのだろう。

万感の涙を零しながら、オッキーはガッツポーズを何度もキメた。

ユイも竜崎も宮さんも、そんなオッキーを見て笑った。

オレも、心の底から込み上げてくる何かを感じた。

これが、勝利だ！　これが歓喜だ！！

「オレがぁぁぁ～～～～～っ！　ジオンだぁぁぁ～～～～～～～～っ！！」

オレは解放感と昂揚感を、天高く解き放つ如く、上空に向かって大きな声を張り上げた。

その時、何者かの気配を感じた。

オレだけじゃなく、その場にいた全員がその異変に気付いた。

暗闇の中から数人の男たちが次々にこっちに向かってやってくるのである。

今はまだ人影状態だが、それでもそいつらが普通のヤツらじゃないのは見てとれた。

明らかにヤンキー共だ。

しかも多勢。

「クククク・・・。ここに来る前よぉ～、電話しといたんだよ。オレは頭良いんだよ、ハッハッハッハ・・・。オメェ～らの命運は、尽きた・・・」

上半身を起こしながら、秋鹿が不敵な笑みを溢した。

第58話　夜（よ）露（ろ）詩（し）亀（く）

せっかくのオレの自己紹介。

絶好なタイミングを見計らって、『オレがぁぁぁ～～～～～っ！
ジオンだぁぁぁ～～～～～～～っ！！』・・・なんて大きな声を
張り上げた瞬間だった。

あっちから沢山のヤンキー共がやってきて、オレの大舞台をあっさ
り破壊しやがった。

オレの計算では・・・

竜崎『やっぱり、亀鶴さんがあの有名なジオンさんでしたか。やっ
ぱりオレの目に、狂いはなかったっス・・・』

オレ『いやいや、それほどでもないよ、竜崎クン。はっはっはっは』

宮さん『ジオンって、竜ちゃんが言ってた、例の2年のトップ？』

竜崎『そうっス。噂の凄い人っス。オレたち、そんな人と知り合え
て、ホント光栄っス』

ユイ『ジオン、今日はカッコ良かったヨ』

オレ『何だ？　ユイがオレを褒めるなんて、明日は雪か～？』

ユイ『うふふ。アタシだって、たまには褒めるわヨ』

オッキー『・・・ジオン。いや、ジオンさん。今までずっと、誤解してたスンマセンでしたっ！！』

オレ『いやいやいや、分かればいいんだよ、君たち。はっはっはっはっはっはは・・・・・・』

・・・みたいな予定だったのに！

誰だ、誰だ、誰だぁぁぁ～～～！

オレに恥をかかせたヤツは～～～～！！

「大橋ぃ～、来るなら来るって言えよぉ～」

はい？　どうしたの、宮さん。

誰と話してんの？

「だってオマエ、ケータイ出ねぇ～し」

「あっ、そうか、ゴメン。オレ、今、ケータイ止められてっから」

何だ、この会話・・・。

どっかで・・・。

「はっはっはっはっ、相変わらずだなぁ～、宮ぁ～」

宮さんと、ニッコニコしながら肩を叩き合っているのは、頭は丸坊主でこめかみの辺りと頬に大きな刃物傷がある男。

吉岡の番長、大橋剛太？

なぜ、ここに？！

大橋剛太の後ろには、見覚えのある面々が・・・。

「吉岡の1年の人たちっスね」

竜崎もアイツらの顔を覚えてたようだ。

「大橋～？　なぜここにぃ～～？！」

秋鹿が、本日のリアクション大賞を受賞しそうなリアクションをした。

「宮の言う通りだった。裏で指揮をとってたのは秋鹿だったとはな。宮、またしても、申し訳ない！！」

大橋は宮さんに土下座をする勢いだ。

それを制止しながら、宮さんが言った。

「これはオレとジュンの問題だから、大橋は関係ねぇ～から、マジで」

その時、ひょう然と現れた秋鹿が、大橋に泣きついた。

「大橋ぃ～、目を覚ましてくれ！　オマエは宮に騙されてるんだぞ！！　コイツはウチとか野牛とかを利用して、ただ単に勢力を拡大しようとしてるだけなんだよ。それを察知したオレが、オマエに変わって1年をまとめただけなんだ。いいか？　オマエは頭がキレるタイプじゃないだろ？　その点、オレが吉岡のブレーンとして・・・・・」

「うるせぇーーーっ！！」

大橋が秋鹿に、地響きが起こるほどの怒声をあげた。

一気にシ～～～ンと辺りが静まり返り、オレも含めそこにいる全員が、大橋剛太の次の言葉を固唾を呑んで待った。

「オレが宮に騙されてるだと?！　宮はオレより数倍バカだぞ～～～っ！！　宮はオレを騙せるほど、頭良くねぇ～～～～っ！！」

ズコーーーーッ

ほとんど全員がその場でコケた。

しばらく秋鹿と大橋と宮さんの間で一悶着あったが、どうやら秋鹿が許しを請うカタチで決着がついたようだ。

結局、あの吉岡の1年がウチに襲撃してきた事件の全ての根源は、秋鹿だった。

自分が吉岡のトップになれなかった腹癒せに、大橋剛太をギャフンと言わせる為、何も知らない入学したての1年ヤンキーをかき集め、武蔵の総番長、宮大地を襲わせたのだ。

その際、秋鹿は、武蔵の教師たちに襲撃の予告をするのを怠らなかった。

そうする事によって、総番長、宮大地を永久追放でき、尚且つ吉岡の1年も捨て駒として処分できる。

全ての企てを実行したのを吉岡の番長、大橋剛太にする事で、大橋のメンツをズタズタに引き裂く事もできる。

秋鹿の中では、全てが上手くいくはずだった・・・。

しかし、残念ながら、そんな巧みな計画は、宮さんと大橋剛太の豪快な腕力と、武蔵と吉岡の信頼関係によってぶち壊された。

やがて事件が解決したと見るや、吉岡の1年たちは我が先にと帰っていった。

アイツらも急遽呼び出されて、さぞ迷惑だったことだろう。

大橋剛太も宮さんとのハグが終了すると、自然にフェードアウトしていった。

そんな中、気がついたら上木も含め長山たち、秋鹿や義経もいつの間にか消えていた。

私利私欲で金を掻き集めていたと思われる長山。

そんな長山の恋人なのかただのツレなのか分からないが、そばにいた上木が助っ人として呼び出した秋鹿。

その秋鹿は吉岡襲撃事件の主犯だった。

偶然とは思えないほど絶妙なタイミングで現れた宮さん、竜崎、ユイ。

そんなオレたちによって、２つの悪の根源が絶たれたんだ。

大変喜ばしい状況だし、ユイもオッキーも宮さんも竜崎も笑顔だったりするので、自己紹介するには最高のシチュエーションなのかもしれないが、妙にタイミングが掴めない。

竜崎の勝利と同時にあげた、オレの自己紹介を含んだ雄叫びは、見事に吉岡勢にかき消されてはいるが、明らかにコイツらの耳には入ったはずだ。

オレ的には、今、新たに自分を紹介し直すのもどうかと思うのだが、コイツら的にはオレの一言を待っているように見えるのは気のせいだろうか？

オッキーなんかはたまにチラチラオレを見たりしてるし、みんな沈黙を避けるように桜が綺麗なんて話をしちゃったり何かして。

オレの最後のシメを待ってるってのがビンビン伝わってくる。

とりあえず当事者のオレが、何かビシッと決めなきゃ、な。

「みんな・・・」

オレが声を出したと同時に、みんな一斉に注目だ。

やっぱりオレの一言を待ってたよ、コイツら～。

・・・さて、何て言おうかな？

第５９話　アリが１０

「・・・ありがとう」

一瞬言葉に詰まったが、気がつくとそんな感謝の気持ちを口にしていた。

たとえばコップの水なんかに、「ありがとう」なんて素敵な言葉をかけてみたりする。

すると、アラ不思議、コップの水の結晶は、綺麗なカタチになるという。

逆に「バカヤロウ」などと罵声を浴びせたコップの水の結晶は、崩れたカタチになるという。

それは水が凍りつく際も同じように、結晶は言葉により変化するらしい。

声掛け効果が植物やお腹の赤ちゃんだけでなく、水にまであるとは驚きだ。

おそらく水だけじゃなく、森羅万象にそれが値する、かもしれない？

これの応用で、人間の体を想像してみると面白い。

人間の体の細胞は主に水で出来ているらしい。

つまり、人間の体は、ほとんど水と言っても過言ではない。

・・・と、言う事は、「ありがとう」と人から言われまくってる人は、体全体が喜ぶから、おのずと健康体になるってワケだ。

逆にみんなから罵声を浴びせられっぱなしの人は、病気がちなんて事も・・・。

ちなみに細胞の核は光らしい。

嬉しい事があったりすると、人から輝いてるね～なんて言われたりするが、細胞の核が光だと考えると、妙に納得できる表現だと思う。

そんな人の体に優しい「ありがとう」なんて言葉を、オレは無意識で言った。

みんながそんな言葉を惜しみなく使えたら、世界はもっと平和になるのかな？

なんて事を考えていると、「なぁ、ジオン・・・」と、オッキーが最初に口を開いた。

どうやらオレに労(ねぎら)いの言葉をくれるようだ。

「・・・どうすんだよこれから。６組のヤツらだって、このまま黙

って引き下がるとは思えないぜ。仮に長山たちは乗り切れたとしても、今度は1組の高城たちに目、つけられるぜ」

オッキーはオレに労いの言葉をくれるどころか、オレの「ありがとう」の言葉を完全無視した。

しかも、ハッピーエンドで今日を終わりたかったのに、オッキーはトゥービーコンティニューにしようとしている。

「宮さん、そろそろオレらも帰りましょ」

ホラ、竜崎が帰るタイミングを見つけちまったじゃねぇ〜か。

「そうだね。じゃ、ジオン君、また学校で」

宮さんがオレの名を呼んだ。

「では、ジオンさん、ごきげんよう」

竜崎まで、オレの名を・・・。

オレが今まで自分の名を伏せてた事に触れもしない竜崎と宮さん。

そんな2人の義理人情を垣間見てオレは、心のずっと奥の方から込み上げてくるものを感じた。

「ねぇ、２人とも暇ならさぁ、これからジオンの家に来ない？」

ユイがとんでもない事を言ったもんで、オレの心の奥から込み上げてきたものは、また元の場所へと帰っていった。

「オレは別にいいけど、竜ちゃんどうする？」

「宮さんが行くなら・・・」

あららら？　勝手に何決めてんの、そこ！

「じゃあ、オレ佐倉に連絡入れてみようかな」

オッキーがケータイを取り出しながら言った。

ほえ？　佐倉？？　マ、マママ、マジ？！

「・・・あっ、佐倉、オレ良雄だけど。ウン、ウン」

な、ななな、何と、完全に諦めていた佐倉が・・・・・！！

「・・・そう、無事解決したからさ。今から祝賀会も兼ねて、ジオンちで大パーティーするんだけど、来れる？」

おいオッキー、祝賀会って何だよ、祝賀会って。

・・・っつ～より、佐倉は来るの来ないのどっちなの？　そこんとこ非常に大事なんだけど！

「・・・そうか」

あ、あれ？　ダ、ダメなの？！　夜遅いから？

「ジオン、佐倉も来るって言うから、さっそく買い出し行こうぜ」

マジかよオッキー！

心の奥から込み上げてくるモンを、今度こそ止められそうにない。

「みんな、ホント、ありがとう・・・」

そんな言葉を口にした途端、涙が溢れて零れ落ちた。

「ジオン、大げさだぞ」

オッキーがはにかみながらオレの肩を叩いた。

「バカねぇ～ホントに」

ユイは、人目も憚（はばか）らず顔を歪めているオレを見て微笑んでいる。

笑いたきゃ笑え。

でも、オレの「ありがとう」っていう気持ちは正真正銘、ホンモノ

なんだぜ。

ユイの「守りたいモノがあるなら戦ってもいいのよ」の一言で、オレの目が覚めたんだからな。

ホント、感謝してるゼ、ユイ。

「亀ちゃん、そんなにオレが遊びに行くの嬉しかった？」

宮さん、ま、そういう事にしとこうか。

オレが泣いてる理由、ホントは佐倉が家に来れる事になって、嬉しくてたまらないってのが一番デカイんだけど。

それに、オレの呼び方、戻ったね。

別にいいけど。

しかし、伝説の番長がオレん家来るって？

世の中何が起こるか分からんゼ。

「ところでジオンさん。オレらも行って、大丈夫なんスか？」

竜崎の一言で、オレへの注目が一層高まった。

「手ブラじゃなければ・・・」

オレの一言で、みんな爆笑した。

最高な一日を夢見た今日、最悪な一日になってしまった。

でも、最悪な一日が終わったら、また最高な一日が始まりそうな気がした。

人生、捨てたモンじゃない。

第６０話　青春、そして無敵

２４時間やってる激安スーパーに、ユイと宮さんと竜崎が買い出しに行ってる間、オレとオッキーは、近所のコンビニで佐倉を待った。

コンビニのベンチに腰掛け空を仰ぐ。

近くの桜の木から舞い散る花びらが、たまらなく美しく思えた。

これから念願の佐倉がオレの家に来る。

それだけじゃなく、ユイやオッキー、竜崎や宮さんまで。

これからの青春、そして無敵な人生の予感に心が踊る。

「なぁ、ジオン、このチャンスを絶対逃すなよ。今日は宮さんの舎弟になる絶好のチャンスだ。これからは宮さんにくっついて、うちらだけじゃなく、ウチのクラスも守ってもらおうぜ」

オッキーがオレの踊る心を邪魔しだした。

「あのな、オッキー。宮さんは世間から見たら、そりゃ～大物だろうけど、オレからしたら宮さんは宮さんなんだよ。舎弟も何も・・・」

「おい、ジオン、目を覚ませ。仮にもあのお方は伝説の番長様だぞ。総番長なんだぞ。ジオンはテルの影に隠れてたから知らなかっただろうけど、ウチの学校もヨソの学校も全部ひっくるめて、あのお方が率いてるからこそオレたちは平和を保ててたんだぞ」

さらにオッキーは続けた。

「オマエが長山に逆らったりして揉め事を作っちまった以上、あのお方に世話になるより他ないだろ？　直接関係ないにしろ、吉岡とだって揉めた事実は変わらないんだし、いつまでも孤立してたら命がいくつあっても足りないぜ。長い物には巻かれろって言うだろ？」

「あのなぁ～」

「オマエの言いたい事は分かるよジオン。テルの時もそうだったみたいだけど、誰の子分にもなりたくないっていうオマエの気持ちは分かる。だけどな・・・」

「そうじゃなくってよ、宮さんってのは、人の下に人を作らずって人だと思うんだ。よく考えてみろよ、今まであの人が徒党を組んでる所、見た事あるか？」

「・・・言われてみれば、いつも一匹狼のような気も」

「・・・だろ？！　ま、一匹狼って言っても、竜崎は別格だけどな。宮さんにとって竜崎は手下じゃない。対等な仲間なんだよ」

「それはあの2人を見てれば何となく分かるけど、でも、だったら尚更どうすんだよ？　総番長は手下を作らない。じゃあオレたちは誰に守ってもらうんだよ？！」

「心配いらねぇ～って。オレらは無敵だ」

「・・・ったく、どっから来るんだよ、その自信は」

オッキーは溜息混じりでそっぽを向いた。

まったくコイツは分かってねぇ～。

宮さんにとって、オレも別格なんだよ！

・・・と、その時！

「待ったぁ～？」

おわわわわあああああああ～～～～！

佐倉だぁ～～～～！！

ホワイトのキャミソールにパープルのニットパーカ、ブルーのデニムパンツにブラックのサンダル。

オーソドックスなファッションではあるが、カラオケ時とは全く違う容姿を見る限り、オレの家に来るのを意識していると思われ・・・・。

「あれ？　ジオン君、どうしたの？　腫れてるよ」

佐倉が指差したトコロ、オレの目は確かに腫れてるが、オレの心は佐倉を見た途端、真っ昼間に澄み渡る空よりも青く晴れた。

「晴れてる？　そうだな、綺麗だな、星空」

「何言ってんだジオン、ホラ、宮さんたち来ちまうだろ？　早く行こうぜ」

「宮さん？」

佐倉が目を丸くしている。

「あっ、佐倉にまだ言ってなかったよな。実はな、色々ワケあって、これから伝説の番長こと宮大地と、あの1年をわずか2日でシメた竜崎光一がジオンの家に来るんだ。今、ユイと買出しに行ってる」

オッキーの言葉に佐倉は目をパチクリさせている。

何て説明すればいいんだ？

あの後、6組のヤツらに袋叩きにされたんだけど、そん時助けに・・・いや待てよ、アイツらオレを直接助けちゃいないよな？

勝手に参戦してきた？　いや、長山たちが助っ人を呼んで、そいつらとアイツらは戦ったワケだから・・・・・

でも、アイツらが来なかったら、あの大人数相手にオレ1人で・・・？

いや、アイツらが来たから長山は助っ人を呼んだんだよな？

オレがイロイロ考えていると・・・・・

「オレたちの命の恩人さ」

オッキーがたった一言で佐倉を納得させた。

「男の人の部屋って乱雑なイメージがあったけど、ジオン君の部屋、凄く綺麗でおっどろき～」

佐倉の第一声は褒め言葉だった。

手を後ろに組んで、本棚なんぞを眺めている佐倉に、オレは適当に座るよう促した。

「ジオン、シャワー借りるぜ」

勝手にしろ、オッキー。

・・・って、オッキー風呂行っちまったら佐倉と2人きりじゃねぇ～のか??　マジマジマジ?!　それってオッキー、計算したの?　A型特有の優しさ溢れる気遣いってヤツ?　それともたまたまなのか?!

ふ、2人きりだよ、2人きり。

そりゃ～、頭の中では何度も想像したさ、そのシチュエーション。
それがこんなに早く現実になるなんて信じられる？
もう、頭ん中、真っ白！！

オッキーを風呂に案内し終えて、佐倉と2人きりになっても緊張してギクシャクしないようにしなきゃな、なんて考えながら、2階へ戻ろうと階段に足を掛けた時だった。

ピンポーン

はいはい、定番だよね。

来ると思ったよ、でも、ちょっぴり想像より早いけど。

オレの想像ではホラ、佐倉と部屋で2人きり、ロマンチックなムードもピークを迎え、自然な成り行きで唇と唇を重ね合わせる瞬間に『ピンポーン』みたいな？　「あれ～？」なんつって2人ともドギマギしちゃって・・・みたいな？

ピンポン　ピンポン　ピンポーン

はいはい、出りゃいいんでしょ、出りゃ。

「ねぇジオン、台所借りるね」

買い物袋を両手に持ったユイが、ズカズカと台所に歩いていった。

何か料理する気か、ユイ?!

「おじゃましま〜す」

宮さんがビールの箱（３５０ｍｌの缶ビール、６缶パック×４）を抱えて、ニッコニコした笑顔で現れた。

潰れるまで飲む気か、宮さん?!

「ジオンさん、オレも台所借りますね」

バケツ?を片手に持った竜崎が、ユイの後を追うように台所に歩いていった。

うなぎがバケツの中を泳いでいたような気がしたが、気のせいだろうか?

一体どこからソレを仕入れてきたんだ竜崎。

そしてオマエはソレを捌(さば)いて調理すんのか、竜崎?!

辺鄙(へんぴ)な街の、ちょっぴり清閑(せいかん)な住宅街の一角にある一軒家の２階。

オレの部屋が宴会の会場と化した。

第６１話　ロックの王道

カラオケで食べるはずだった牛丼が、中途でダメになった事を気に掛けてくれたのか、ユイが手作り牛丼を料理してくれた。

しかもインターネットで大牛のレシピを入手したとかで、隠し味の甘口白ワインを加え、ホンモノにより近く再現された味だった。

「どう？　美味しいでしょ」

激ウマだった。

みんなこぞって絶賛した。

竜崎は鰻（うなぎ）の蒲焼を披露した。

「休みは予定がなければほとんど釣りっこしてるっス。昨日、たまたま近くの河川で釣った鰻があったんで、思い出してウチから持ってきたんスよ。丁度買い物に行ったスーパーがウチの近くだったんでね」

川で鰻って釣れるモンなのか？って聞いてみると・・・

「夜、下流域で、ミミズを餌にして簡単に釣れますよ」

鰻って簡単に捌(さば)けるモンなのかも聞いてみた。

「そのまんま裂くのは難しいんで、オレは頭を切って殺してから裂くっス。調理は白焼きでも良かったんスけど、今日はみんな慣れ親しんだ味にしたかったんで、蒸した鰻をスーパーの鰻のタレで焼いてみたっス」

土用の丑の日でも滅多に食さないというユイですら舌鼓をしていた。

さすが天然の鰻、ウマイ・・・っていうか、ンマイ。

趣味は飲酒だという酒豪な宮さんは、あっと言う間にビールを3缶飲み干し、さっそく豪傑(ごうけつ)っぷりを見せ付けた。

「今日は酒のつまみが沢山あって、ホント最高な夜だね。ホント、ありがとね」

相変わらずウチらには優しい宮さんに、普段のつまみを聞いてみると・・・

「やっぱイタリアの雄馬、スルベシター・シタローンの名作『ボッキー』かな」

それってつまみ？　ボッキーっていやぁ、オレも大好きな映画だ。

ただのボクシングの映画じゃなく、人生とは何たるかを描いたヒューマンドラマでもある。

「ボッキー・ザ・ファイナル見たっすか？」

「もちろん」

「面白かったっすか？」

オレは最近レンタルで、借りるか借りまいか迷ってたボッキーのラスト作品の感想を聞いてみた。

「泣いたね。最初っから」

旧作になるまで待とうかと思ったけど、明日借りてこよ～っと・・・。

ユイ、竜崎、宮さんの、色濃いキャラがオレの部屋に一同に揃うと、時間がいくらあっても足りそうにない。

そんな中、なかなか色を出せずにいた佐倉が、部屋の片隅に飾られたオレのギターを発見した。

「へ～、ジオン君ってギター弾くんだぁ～」

「おっ、定番のストラトじゃん」

オッキーはやけに楽器に詳しかったりする。

コイツの家は沖田電気といって、街では意外と有名な家電屋さんだ。

ガキの頃から経済的に恵まれていたオッキーは、ギター、ベース、ドラムなど、一通りのバンドマン楽器は部屋に揃っているらしい。

「今欲しいのはさ、フォールリードスミス。中古で２００万越すんだよね」

得意の自慢が始まる前に、さっさと話題を変えるのが得策かな。

「ねぇ～ジオン君、何か弾いてみてよぉ～」

佐倉が甘い声でおねだりをしてきた。

ムフフ、では、とっておきのわたくしめのギターテクニックを軽くお披露目してみますか？

オレは押入れからギター用のスピーカーを取り出すと、マック・ホラン率いるＣ・レックスの曲「２０ｔｈ　Ｃｅｎｔｕｒｙ　ｆｒｉｅｎｄ」を徐(おもむろ)に弾(ひ)き始めた。

キュイ～～～～ン

オレは目を閉じながら弦(げん)を弾(はじ)いた。

ジャジャ～～～～～ン

さすがオレ、キレがある。

中学１年の時に親にダダをこねて買ってもらったギターで、練習した幾年月。

今まさに本番を迎えようとしている。

オレの熱きソウルよ、佐倉のハートを貫けっ！！

ジャジャッ　ジャ～ジャ　ジャ～ジャジャ～ジャ～～ン

さぞかし今のオレ、キマッてるだろうな・・・・・

プチッ

「うるせ～よジオン」

オッキーがいきなりスピーカーの電源を切った。

「バカヤロ～、切るんならツマミをゆっくり回して切れよ。そんな切り方してたら壊れちまうだろぉ～が！」

オレはオッキーを怒鳴りつけた。

「何キレてんだよ。夜中だぞ、近所の事も考えろよ。それより誰も聞いてねぇ～んだし、弾くんなら1人の時にでもやれよ」

「・・・・・」

オッキーの言うとおり、いつの間にか佐倉は、ユイ、宮さん、竜崎と盛り上がっていて、オレのギターなんぞ誰も聞いちゃいねぇ～。

オレは黙ってギターとスピーカーを片付けた。

「ジオンさん、オレ、そろそろ帰りますわ。明日、用事あるんでね」

いつの間にか時計の針は朝方の４時辺りをさしていた。

どうやら窓の外の薄明かりを見る限り、目の錯覚ではなさそうだ。

そろそろ雀たちの、チュンチュンという大合唱が聞こえてくる時間帯だ。

「あれ？　そういえば竜崎、酒飲まなかったな」

「オレ、飲めないクチなんス」

「ふ～ん。なぁ、竜崎、オマエ、どうしてあんなに強いの？　何か格闘技でもやってたのか？」

オレは気になっていた事を竜崎に訊いてみた。

宮さんは柔道黒帯だから別格だとして、竜崎がどうしてあんなに強かったのかどうしても知りたかった。

「特に何もやってないっスよ。気合っスよ、気合」

気合？　そんなモンなのか？！

「宮さん、明日行くんスよね、カラオケパーティ。大丈夫っスか？」

帰りがてら竜崎は、結構酔っ払っている宮さんに、心配そうに声を掛けた。

「ガハハハ、当たり前じゃん。そんじゃ、オレもそろそろ・・・」

「何？　もう帰んの？」

「ガハハハ、いや、まだ飲むよ、もちろん」

宮さんはユイにせき止められ、帰るタイミングを見失ったようだ。

酒の席での付き合いの良さは、全血液型中おそらくB型がトップだろう。

そういえば宮さんって、ホントにB型だったのかな？

今まで勝手に宮さんはB型って思い込んでたけど。

もし当たればオレの特技の自信に繋がるゼ。

外見で血液型を当てるというオレの特技のね・・・。

「宮さんって、血液型何型？」

オレが宮さんに訊ねると・・・

「B型でしょ～？」

ユイもオレの予想と同じく、宮さんはB型と見たようだ。

「当ったり～」

やっぱり。

「ほんじゃ、また・・・」

「竜崎、今日は、アリガトな」

「オレは別に何もしてないっスよ。自分の身に降りかかる火の粉を払っただけっスから」

「・・・分かってるって。オレが言いたかったのは、鰻に対するありがとうだよ。マジ、旨かったよ」

「当然っス。オレが釣った鰻っスから」

「じゃあ、またな」

「また」

竜崎が帰った。

外は朝独特の清々（すがすが）しい香りがした。

眠いな。

みんな、そろそろ帰らないのかな？

部屋に戻ると、つまみのさきいかや柿の種などが散乱し、宴会独特の煙たい臭いがした。

みんな、まだ帰りそうに・・・ない。

第６２話　また氷河期～？

ユイと宮さんのＢ型コンビと、オッキーと佐倉のＡ型コンビは妙に意気投合し、それぞれが楽しそうに会話を弾ませている。

唯一オレと同じＯ型の竜崎が帰ってしまった今、どっちの会話に混ざるかが今後のオレの方向性を決める鍵のような気がする。

この場を徹底的に楽しむなら迷わずＢ型コンビに混ざるべきだが、今後の展開も考えて、ここは佐倉との距離をもっと縮めておくのがベスト。

オレはオッキーと佐倉の会話に耳を澄ました。

「マヤ文明の暦ってさ、２０１２年で終わってるって言うじゃん。太陽のフレアとかさ、地軸がズレるとか、太陽・地球・月、さらにこれに加えプレアデス星団までもが正確に地球と一直線に並ぶとか天文学的に稀な現象が発生して地球滅亡に拍車が掛かるっていう。アインシュタインは、ミツバチが消えてから４年後に人類が滅亡するって言ってたらしいし・・・・・」

オッキーは地球滅亡説を熱弁している。

一方佐倉はそんな都市伝説的マイナス思考な発想に対し、不思議そうで疑問たっぷりの表情でオッキーの話に耳を傾けている。

ここは佐倉に加担し、オッキーの地球滅亡肯定派の意見にチャチャでも入れてみっかな。

「どうせ１９９９年のノストラダムスの大予言みたいにさ、単なる噂に尾ヒレをつけた、大袈裟な現実逃避の破滅的発想だろ？　ネガティブな話題を面白がるのもたまにはいいけどさ、度が過ぎると笑えないゼ」

ちょっと毒舌すぎたかな？　オッキーも佐倉も黙り込んでしまった。

「・・・でも、何だかんだ言ってさ、地球温暖化とか石油枯渇問題とか、日本の借金１０００兆円超過問題、はたまた秘密結社や宇宙人なんかにも興味あったりするゼ、オレも」

フォローしてみたりなんかする。

「何だ、ジオンも意外とそっち系詳しそうだな。じゃあ、フリーメイソンとかバビロンシステムとかにも興味あんの？」

「一応な。でも、オレはプラス思考派だから、どれも結果的にはポジティブに結びつけるゼ。破壊より建設ってヤツだ」

「ジオン的には石油枯渇問題はどう見る？　結局世の中、油田を持ってる一族の１人勝ちか？」

「いや、オレは日本の地殻、プレートに注目してるんだよ。もしかすると、日本にも油田があるかもしれないゼ。そもそも地球の石油って、地底からほぼ無限に溢れ出てくるモンだと思うんだよ。あくまでオレ説だけどな」

「面白いと思うゼ、その説。結局オレらは誰かの奴隷だって言う・・・」

「いや、奴隷じゃなくって、みんなホントは富に溢れてるのに気付かないだけ。お金お金って言うけど、そんなの時代が変わればタダの紙切れ。それよりさ、面白い説があるんだ。太陽の周りに地球の月のような衛星があってさ、そいつも燃えながら回ってんの。そんで、太陽には地球のように海や大陸が・・・」

佐倉が全然ついてきてないのを感じた。

むしろつまんなそうだ。

「え？　何だよそれ。太陽ってメッチャ燃えてんじゃないの？　地球みたいに海とか大陸って、それってあの炎の下に、外面からは見えない世界が存在してるって事？！」

「なぁ、オッキー、最近のマイブームって何だ？」

オレは突然話題を変えた。

「う〜ん、そうだなぁ〜、今はネットサーフィンとかブルーレイ鑑賞とか・・」

そんなオッキーのマイブームなんて、マジでど〜でもい〜！

「佐倉は？」

一番話をしたかった佐倉に、やっとふる事ができた。

「そうだねぇ～、何だろ～？」

「普段、暇な時とか何やってんだ？」

「ケータイとか、本とか雑誌とか？」

「どんな本見るの？」

「マンガはＭＡＭＡとか、雑誌だったら洋服関係とか街の情報誌とか、かな？」

「へ～、他には？」

何かここぞとばかりに質問ばっかだな、オレ。

「学校の帰りは、みんなでプリクラとかするけど。あと、まゆとかＫＡＴ－ＴＯＮの話とかでよく盛り上がるよね。あとはやっぱり、ケータイ小説だよね」

「相変わらず女子はプリクラ好きだよなぁ～。それとケータイ小説？　オモロイのか～？！」

オレはついつい本音を言ってしまった。

「え～、面白いよ～。みんなはライトノベルがいいって言って、最近文庫本に走ってるけど、私は断然ケータイ派」

佐倉のマイブームを貶しちまった手前、少しヤバイかなって思ったけど、逆に会話が盛り上がってきてたりする。

「主にどんなの読むの？」

「最近はホラーかな。ホラ、去年の学園祭に来た、あの作家の・・・」

その時、せっかくオレと佐倉が盛り上がってきたってのに、オッキーが突然乱入してきやがった。

「オレさ、ゴールデンウィークの始めに『２０１２地球滅亡』と『アバター神の化身』の２本、新作でレンタルしたんだ。いや～、地球滅亡は３回に分けて見たんだけど、長い長い。逆に神の化身は同じ３時間くらいの長い映画なんだけど、あっと言う間」

「あのな、オッキー、オレたちは今・・・」

「私も神の化身見たけど、短く感じた。やっぱり楽しい時間は早いよね。逆につまらない時間は長く感じると思う。ゴールデンウィークなんていい例じゃない？　超高速で駆け抜けちゃうよね。この調子で高校生活もあっと言う間に過ぎていくのかな・・・」

佐倉がオレの言葉を無視してオッキーの話題に乗った。

なぜ？

「元々佐倉とは、新作レンタルの話をしてたんだよ」

なるほど、通りで２０１２年のマヤ文明とかの話をしてたワケか・・・。

「神の化身って、監督誰だっけ？」

「タイタンニックのジョージ・キャメロンだよ」

アバター神の化身は、タイタンニックを超えて、映画史上歴代１位の映画だ。

監督が今まで１位のタイタンニックの監督だったら、そりゃ～期待できるわなぁ～。

ボッキー・ザ・ファイナルと同時にレンタル決定だな・・・。

「あれ？　もうこんな時間？！」

佐倉が驚きの声をあげた。

外はすっかり明るくなり、時計の針はいつの間にか６時を回っていた。

佐倉とオッキーを、玄関の外まで送った。

ついに佐倉とお別れの時間だ。

でも、案ずる事はない。

まだ高2は始まったばかり。

これからまだまだオレたちには時間がある。

それに、今はぶっちゃけ眠い。

「やっぱり楽しい時間は過ぎるの早いね。また明日、学校で会おうね」

佐倉、可愛い。

それに、また、明日って・・・・なんて素敵な響きなんだろう。

「じゃっ、また明日な」

あばよ、オッキー。

外は少しだけ霧がかかり、肌寒いくらい新鮮な空気が冷たく鼻をついた。

部屋に戻ると、カップラーメンやポテトチップスなどの空ゴミが散乱し、宴会独特の煙たい臭いが鼻をついた。

ユイも宮さんも、まだ帰りそうに・・・ない。

第６３話　屋根より高い恋

「しっかし随分飲んだなぁ～」

宮さんが買ってきた缶ビールは、いつの間にか残り１本になっていた。

「あっ、亀ちゃん飲んでいいよ」

「いやいや、もう腹パンパンですから」

プシュン

ユイが最後の１本を横取りした。

「オイ、ユイ。目の焦点が合ってないけど、オマエ大丈夫か？」

「・・・・・」

ダメだ、ユイのヤツ、かなりイっちゃってるよ・・・。

「宮さんも随分飲んだみたいっすけど、大丈夫っすか？　確かこれからカラオケでパーティーがあるとか言ってましたよね？」

「ガハハハハ、大丈夫大丈夫」

ホントかよ。

「れぇ、ジオン。アンタ、られがスキなのよ」

ユイが絡んできた。

「誰が好きかって？　そうだなぁ～、倉井麻衣はデビュー当時から大好きだけど」

「ちがくって、クラスのコよ、クラスのコ」

「オ、オマエは誰が好きなんだよ」

「質問を質問で返さないでよね。アタシはいらいわよ」

「オレもいないよ」

「ウソつくらって。アンタ、嘘ヘタよれ～、マジれ」

「ガハハハハハハ」

宮さんが鼻から液体を垂らしながら爆笑している。

「佐倉がスキらんれしょ？　アンタ見てれば分かるわよ。単純らから」

「・・・・・」

「やめといたら？」

はあ？　やめろだと？　何でユイに指図されなきゃならねぇ～んだ？！

「どういう意味だよ」

「あれ？　何ムキになってんろ？　アンタ、スキなコいないんれしょ～よ」

・・・ったく、ワケ分かんね。

「ガハハハ、亀ちゃん、ユイちゃんは、亀ちゃんの事が好きなんだよ」

「そ・れ・は、ない！！」

ユイは真顔で完全否定した。

別にそこまで本気で否定しなくってもよかろうに・・・。

しかし、ユイの言う『やめとけ』は、一体どんな『やめとけ』なんだ？

どうせジオンが告白してもフラれるだけだから『やめとけ』なのか？

それとも、ジオンが佐倉と付き合っちゃったら、アタシはどうなるの？　アタシの気持ちは無視なの、ジオン・・・から来た『やめとけ』なのか？

・・・いや、それは本人が完全否定した通り、絶対ないな。

・・・と、言う事は、つまり、オレは佐倉にアタックしても、無謀なだけだと。

フラれるのがオチだと。

・・・・勝手に、決めんなぁ～～～～！！

「アタシもそろそろ帰るわ。あ～あ、連休最後の日、寝て曜日になっちゃったわ」

「オレもお暇（いとま）しますわ。亀ちゃん、今日は楽しかったわ。また学校で」

「はい、いつもの場所でお会いしましょう」

オレはタバコを吸うジェスチャーをした。

「いつもの場所ね」

宮さんも、笑顔でタバコを吸うジェスチャーだ。

「アンタたち、もしかして学校でタバコ吸ってんの？」

ユイに睨まれ、オレと宮さんは首を大きく横に振った。

あの伝説の総番長が、ユイに手玉にとられてるよ・・・。

もし1年前の自分が、2日で1年をシメちまった喧嘩のメッチャ強い「竜崎　光一」とか、泣く子も黙る伝説の総番長「宮　大地」とかが家に来て、仲良く酒を飲む仲間になったなんて知ったら、一体どんな顔をしただろう？

オマケに憧れの「佐倉　愛」がオレの部屋に遊びに来たなんつったら、あの頃のオレは・・・・・。

2人を見送って部屋に戻ると同時にベッドに倒れ込んだ。

目を閉じると、そのまま意識が遠のいていった。

・・・気付くと夕方だった。

部屋は荒れ放題に荒れ、ついでにアルコールやつまみの臭いがいまだに充満している。

思えば、ここに佐倉がいたんだっけ・・・。

夢のようだ。

でも、やっぱり色濃いメンバー揃いだったし、ロクに会話もできなかったな・・・。

そういえば宮さん、カラオケパーティーちゃんと行けたかな?!

そろそろ始まる時間じゃねぇ〜のか?

二日酔い&物凄い酒臭い宮さんが容易に想像できて、超笑えるゼ。

とにかく、今日はかったる過ぎて、とても掃除をする気にはなれない。

ゴールデンウィーク最終日の今日、5月5日こどもの日、そんなグダグダな一日を過ごし、オレは早めに床についたのだった。

第６４話　下駄箱の中はファンタジー

ゴールデンウィーク明けの初日、ユイは体調不良で学校を休んだ。

オッキーと佐倉はユイほど飲んでなかったので、二日酔いは免れたようだ。

ユイと宮さんはへべれけだったから、昨日はさぞグダグダだったに違いない。

ちなみにオレは、昨日丸一日潰して眠ったから今日はすこぶる元気だ。

６組の長山たちとの関係はというと、廊下で擦れ違った時もお互いに目を合わせる事もなく、面識のない時のような状態に戻った。

仕返しを恐れていたワケじゃないが、このまま先日の喧嘩がフェードアウトしそうな予感に、少しホッとした。

昼休み、偶然にも１年の校舎のゲタ箱付近で、竜崎を発見した。

「よぉ～、今からかよ、竜崎～！！」

「あっ、ジオンさん、おはようっス」

何かコイツにジオン呼ばわりされるのも、変な気分だ。

「宮さん、今日来てんのかな?」

一応、訊いてみた。

「今日は休むって言ってましたよ。トコロで、何処行くんスか?」

「コレ・・・」

オレは、タバコを吸うジェスチャーをした。

「モク? じゃ〜、オレも!」

ガタッ

バサ　バサ　バサ　バサ

竜崎がゲタ箱を開けた時だった。

何十通もの封筒が、竜崎のゲタ箱から床に落下する。

バサ　バサ

「ラブレターかよ！　そんなに一杯！！」

オレは怒りモードの強めの口調で竜崎を睨んだ。

「いつもっス。でも、いつもはこんなに入ってないな。昨日まで休みだったから多いんスわ」

竜崎は落ちたラブレターを拾い集めると、さも大事そうに鞄に入れた。

いつもだと？　ヘン、モテる男は言う事が違うねぇ～。

誰もいない校舎裏。

オレたちの喫煙スポットだ。

「しっかし、何で今時ラブレターなんだ？　こんな何でもケータイでやり取りできる便利なご時世に。メールでいいじゃん、メールで・・・」

竜崎が貰ってた沢山のラブレターに関し、全く雅量（がりょう）のないオレは、皮肉たっぷり言ってみた。

「オレ、メアド誰にも教えないんスわ。教えると大変な事になるんで・・・」

あっ、そ～！！　ふ～～～～ん。

「そういえばオマエら、昨日カラオケ行ったの？」

「宮さんは二日酔いでダウンしてたんでキャンセルしましたけど、オレは普通に行きましたよ」

「宮さんダウン？　はっはっはっは、女の子たちとのカラオケ楽しみにしてたのに？　はっはっはっは、可哀想なんだけど、何か笑えるゼ」

「来なくて正解っスよ。宮さん来ても居場所ない」

「ははは・・・」

いやはや、竜崎って物事ハッキリ言うよなぁ～。

しかもクールに真顔で本音っぽいし。

「何っ？　アイツ、こんなバイトを・・・」

「どうした？」

オレは竜崎が読んでいた手紙を覗き込んだ。

「やめて下さいよ。人のプライバシーを侵害するのは！」

「だったら人前でラブレターをおっ広げるのはやめろって・・・」

オレの白けた眼差しで、竜崎は申し訳なさそうに手紙をしまった。

「友達が夜のバイトを始めたんス。そいつ、片親なんスけど、母親の稼ぎだけではメシ食っていけないらしくて。何度か相談を受けてて、オレ、夜の仕事だけはやめろって言ってたんスけどね」

「兄弟とかいるカンジ？」

「そいつ、オレと同じ高校1年なんスけど、長女なんス。小学生の弟と妹がいて、そいつらのメシを食う分を、そいつがバイトで稼いでるってカンジっスね。母親は家賃と、出て行った父親の残した借金を稼ぐので精一杯みたいで」

竜崎が話し終えた瞬間だった。

オレたちの背後に、何者かの気配を感じた。

「聞き捨てならねぇ～話だ。出て行ったクソ親父が残した借金で苦しんでる母親と、小さな兄弟を守るため、高校1年の美少女が、夜のバイトをしてるだとぉ～？」

そ、その声は？！

第６５話　夜の帝王

夜の繁華街は、会社帰りのサラリーマンや、学校帰りの学生、平日休みの会社員の家族サービスや、仕事のない中年たち、はたまたプーやニートで遊びほうけている金のなさそうな若者たちで賑わっていた。

オレたちはひと気のない路地を過ぎ、欲望と金と女に溢れた釜桐町（かまきりちょう）へと入っていった。

釜桐町、またの名を『夜のカマキリ』。

カマキリのメスは、交尾後にオスを食す。

そんなカマキリを彷彿させるこの町は、オレたちが住んでいる石田町から一駅の所にある、飲み屋街だ。

中でもアーケードから離れた『ニコニコ通り』なるギラギラした路地は、風俗店やホストクラブなどが建ち並ぶ、学生には似つかわしくない通りだ。

「竜ちゃん、ここいらで間違いないんだよね？」

「う～ん、確かに住所はこの辺で間違いないんスけど・・・」

「カシオン、カシオン・・・。何とかビルの何階だっけ？」

「エンゼルビルの２階っス」

オレはキョロキョロとＢＡＲを探す、竜崎と宮さんの後ろを歩いている。

てっきり休みだと思っていた宮さんは、結局昼休みに登校してきた。

喫煙スポットの校舎裏で、オレと竜崎の会話を盗み聞きした宮さんは、人情話に激高してしまい、知っての通りＢ型特有の強引さと勢いで、オレたちをこんな所まで付き合わせたしだいだ。

竜崎の同級生を勝手に美少女に作り上げ、昨日カラオケに行けなかった分を取り戻す勢いで、宮さんは目を輝かして歩いている。

「あった！　エンゼルビル！！」

宮さんが嬉しそうに叫んだ。

とうとうあったよ、エンゼルビル。

いいのか？　ホントにいいのか？　入っちまって、いいのかオレたち。

未成年だぞ？　バレたら補導どころじゃ済まないゾ。

退学だぞ、退学〜。

「カシオン。ＢＡＲカシオン。間違いないっス。ここで朝露雫が働いてるっス」

あさつゆ、しずく・・・

ウン、確かに美少女的な名だ。

オレたちはチラシやポスターが、壁にたくさん貼られた階段を上り、朝露雫さんが働いているというＢＡＲに向かった。

いかにも大人の店っていう雰囲気の扉だ。

「ホントに大丈夫なのかよ?」

オレは念を押して竜崎に聞いた。

「大丈夫っス。良心的な店らしいんで、ボッタクられたりしないって本人言ってましたから」

マジかよ?

こ〜いう所って、パンティが見えそうで見えない装飾的な下着を身に着けた綺麗なお姉さんとかが、隣に座って酒を注いでくれたり、カラオケとか勝手に歌っちゃったり、人のお酒を勝手にバンバン注文しちゃったりして、ガンガン人の金で酒を飲んで、ついでに酔っ

たフリしてドンペリとか頼んじゃって、お会計で大惨事ってオチが定番の飲み屋じゃなくて？

「持ち合わせがないもんで」なんて言った日にゃ、強面（こわもて）の黒いスーツに身を包んだ、面接時の腕立て伏せで好成績を収めた、用心棒的アルバイトのお兄さんが数人登場して「そうですか。では、朝まで待って、無人契約機でお金を借りてきましょうね」なんて展開になるパターンなのでは？

「ちょっとオレ、先に中入って様子見てみるわ。２人はここで待ってて」

宮さんはそう言うと、先駆（さきが）けで中に入っていった。

魁（さきがけ）するほど、待ちきれないのか？　宮さぁ～～～ん！

・・・いや、単にオレと一緒で、色々と心配してんだろ～な。

自分はおっさん顔だから全然へっちゃらだけど、童顔のオレと、若輩（じゃくはい）ヤローが一緒じゃなぁ～。

「大丈夫。長年のオレの経験上、ここは竜ちゃんのおっしゃる通り、お金の問題はない店！　２人とも、今日の外見だったら未成年だってバレない。大丈夫！」

店から出てきた宮さんが、自信たっぷりに言った。

「あっ、オレ、２千円しかないっすよ」

オレは正直に言っといた。

「もし足りなくなったらオレ金持ってっから」

さすが宮さん、何かが違う。

それに、さっき宮さん、長年の経験上って言ってたよね、確か。

もしかして、夜の帝王？

「宮さんって、夜の帝王なんすか？」

オレは一応、聞いてみた。

「あったりきぃ～！！」

中に入ると、同年代ともとれる若者ばかりがウジャウジャいた。

丸いテーブルに2、3人がひと塊となって、みんなワイワイ楽しく飲んでいる。

そんなテーブルがいくつもあり、広い室内は満席だった。

オレのイメージとはかけ離れた店内を見渡し、一安心した気分と、初めての感覚にどうしていいのか分からない複雑な気分とが入り混じった。

タバコの煙に巻かれた室内は、アメリカン風な装飾が散りばめられ、奥の方にあるアメリカンバイクが一際目立っていた。

耳に入るか入らないかくらいの小さな有線はジャズ。

片隅のピアノ。

幅広い棚に、所狭しとズラリと並んだウォッカにジン、ウイスキーにワイン、ビールに日本酒、焼酎に果実酒の数々。

そして、ユイ。

へ？　ユイ？！　ど、ど～～～してユイがココにいるのぉ～～～～？？

しかも、カウンターの向こうに！

蝶ネクタイをして、バ、バーテン？！

第６６話　白ウサギの誘い

バーテンダーユイは、バーでカクテル類やオードブルなんかを調製していた。

数人いるバーテンの中で、唯一女性でシェーカーを振るユイの姿が印象的だ。

「何でいるんでしょうね？」

さっそく、遠くのカウンターでシェーカーを振っているユイの存在に気付いた竜崎も、オレと同様唖然としている。

星の数ほど飲み屋がある釜桐町で、偶然とは思えないほど奇跡的な遭遇だ。

「３名様ですね。お席は空いております。こちらどうぞ」

女性の店員に案内され、オレたちは空いていた席に座った。

しかもカウンター！

「何でアンタらがココに来るワケ？」

ユイが眉間に濃い、非常に濃いシワを寄せながら、いつものハスキー声で言った。

「何でオマエがココにいるんだよ！」

オレは、竜崎と宮さんもそう思っているであろう気持ちを、代表して言った。

「悪い？　ふたまた悪い？　いや、今はふたまたじゃなくなったのよ。アンタのせいでねぇ～、アタシ、カラオケのバイト、クビになったんだからぁ～！！」

それは聞き捨てならない。

オレのせいでクビだと？

「どうしてカラオケ、クビになったんだよ？！　この間も食いそびれて、まだあそこの牛丼食ってないってのに！！」

「そんなのど～でもい～わよ！　それよりね、アンタこの前の部屋の料金、未払いだったのよ。ま、それは大きな問題じゃないんだけど、よりにもよって、あの店長に見られちゃったのよ、みんなが喧嘩してる所」

「マジかよ」

オレは込み上げてくる溜息を感じた。

「警察には黙ってやるから、もう2度とウチに来ないでって言われ

たわ！」

ユイはお手上げ的な表情をしながら言った。

「ゴ、ゴメン。ホント、ゴメン・・・」

宮さんが申し訳なさそうにユイに謝った。

「ス、スミマセンっス」

竜崎も弱々しく頭を下げている。

「いや、ホント、オレのせいで、申し訳ない」

オレも深々と頭を下げた。

下げた勢いで、思いきりテーブルに頭をぶつけ、隣の席のカップルに笑われた。

「過ぎた事はどうでもいいし、それはもういいよ。ところでアンタたち、何しに来たのよ！」

「出たよ。客に向かって何しに来ただよ・・・」

竜崎はユイの方を見ないで小声で呟いた。

「ここに、朝露雫って人、バイトしてない？」

宮さんがユイに尋ねた。

「雫ちゃん？　あぁ～、確か、昨日入ったコね。もうすぐ来ると思うけど・・・」

「しっかし、学校休んでこんな所でバイトしてるとは、ね・・・」

「こんな所で悪かったわね。これでもアタシはここのサブリーダーなのよ。アタシの指示ひとつで、アンタらなんか即、つまみ出せるわ」

オレの独り言がユイを怒らせてしまったようだ。

「スミマセンでした・・・」

さすがユイ、ここでも我がもの顔だ。

もう数十年もココで働いてる古株のような佇(たたず)まいには、さすがのオレも感服する。

「ところで、何、飲む？」

ユイが注文を促した。

「オレ、生中！！」

さすが宮さん、こんなＢＡＲでも庶民的な居酒屋魂を忘れていない。

「オレも」

オレも宮さんに続いた。

「オレ、ウーロン茶」

さすが竜崎、自分の道はとことん貫く姿勢だ。

「ゴメン、ウチ、樽生ないから、グラスビールでいい？　しかもバドしかないけど。ちょい高めだけど、大丈夫？」

ユイが指で円を作った。

「いくら？」

「ひとグラス、７００円」

オレの問いに、ユイはとんでもない金額を示した。

な、７００円？！

グラス一杯、７００円だと？！

「帰ろーゼ！！」

オレは思わず席を立った。

「まぁ、一杯くらい、い～じゃん、たまには・・・」

宮さんに引き止められ、オレは席に座りなおした。

「だって、3杯飲んだらオレの今の全財産終わりっすよ！　だったら５００ｍｌの発泡酒１ダース買って、家で飲んだ方が・・・」

「アンタ、ホント何しに来たのよ。・・・ったく。分かったわ、今日は2千円で飲み放題でいいわ。その代わり、おつまみはちゃんと料金貰うから、気をつけながら注文してね」

出たっ！

ユイの太っ腹大サービス！！

「やったぁ～！！　宮さん、今日はトコトン飲みますよぉ～～～！！」

「お～よ！！　ガンガン飲むぜぇ～！！」

オレと宮さんは大はしゃぎだ。

「いらっしゃいませぇ～」

適当な乾き物を摘みながら、アルコールをグビグビ喉奥へ流し込んでいると、聞き慣れないカワイらしい声が耳に入ってきた。

竜崎と何やら親しげに会話している彼女こそ、例の朝露さんと思われ・・・。

第67話　メガトンフレア

「ここ、何時までなの？」

随分と長居したような気がする。

自分では平気だと思っても、トイレに行く度フラつく足を見る限り、相当酔っていると思われる。

「もうすぐ11時よ」

ユイの言葉を聞く限り、ココには4時間近くいる計算になる。

ジョロロロロロ

小便をしていると、隣にラップ系の若い黒人が現れた。

年は同じくらいだろうか？　金のネックレスを光らせ、ダボダボの大きなTシャツ、そしてズボンを腰で履いたヒップホップ系ファッション。

バンダナの上に野球帽を被り、指には沢山のシルバーリング。

このオーバーサイズの服装に腰パンは、海外の収容所上がりのヤンキーや若いギャングなんかを彷彿させる。

オレは即行で小便を終わらせ、トイレから逃げるように出た。

別にビビってるワケじゃないが、オレの左曲がりの蛇口から出る小便がかかっちまったら因縁をつけられるに決まってる。

おお、怖い怖い。

トイレから出ると、朝露さんがタオルを持って待っていた。

何て、優しいコなんだ?!

「お気遣いなく・・・」

「あ、いえ、仕事ですので・・・」

だよね、それも仕事の内なんだよね、ははは。

「あの、もうすぐ私、今日のバイト終わりなんで、そしたら一緒に混ぜてもらっていいですか?」

「あ~、11時で終わりなんだ。ユイは?」

「ユイさんはラストまでだと思います~」

「ふ~ん」

しかし、このコ、会う前のイメージでは、ブランド物に目がなくて、

金髪でウェーブなんかがかかってて、化粧が上手で、ネイルにキラキラつけてそうなカンジだったけど、実際は真面目そうな普通のコじゃん。

おっとり系？　どっちかって言うと、メイド喫茶とかが似合いそうなイメージだけど。

やがて朝露さんがバイトを終え、着替えてウチらに加わる頃、ユイの計らいで丸テーブルに案内された。

「アイツ、気が利くなぁ～」

・・・なんて笑ってたのも束の間だった。

若くて背の高い、アメリカ人っぽいスマートな男がユイの前に座った。

「ははぁ～ん、彼と話がしたかったのか」

宮さんは、ユイとアメリカ人が仲良く会話をしている姿を見てニヤニヤ言った。

「ア・イ・ツ・・・。オレには絶対見せねぇ～笑顔なんかしやがって・・・」

オレがユイの楽しそうな顔を見て独り言を呟いていると、

「妬(や)いてるんですか？」

朝露さんに痛いトコロを突かれた。

「いや、何ていうか、別に妬いてるワケじゃ・・・」

「亀ちゃんには好きな人がいるから」

オレが答えに困っていると、宮さんがとんでもない事を口走った。

「クラスのコ？」

朝露さんは、下から覗き込むようなカワイらしい顔でオレを見上げた。

「い、いや、別に好きなヤツなんていねぇ～し・・・」

「打ち明け、ないんですか・・・？」

「だから、いねぇ～し、好きなヤツ・・・」

素直じゃねぇ～よな、オレも。

分かってるって。

どうせ嘘がヘタなんでしょ？　バレバレなんでしょ？　クラスに好きなコがいるって、顔に書いてあるんでしょ、ど～～～せ。

「ハイハイ、いますよ好きな人。クラスにいますよ。何で打ち明け

ないかって？　そんなの勇気がないからに決まってんじゃんよ」

何なんだオレの開き直り具合とこの会話。

グダグダだぁ～～～。

「飲んでますか？」

オレは会話を変えるため、唐突に宮さんに尋ねた。

「あったりきよぉ～！！」

相変わらずこの人は元気だ。

「スミマセン、ジン下さい！　ストレートで！！」

オレは気分転換に、メニューの中から適当なものを注文した。

「亀ちゃん、大丈夫？　そんなの飲んで。それって何かに割って飲むアレじゃない？　何つ～か、例えるなら、カルピスの原液っつ～か・・・」

すぐにオレの目の前に、コップに注がれたジンのストレートが届いた。

ついでに、ピザも来た。

「誰？　注文したの」

「私ですぅ～。コレ、ルシアンルーレットピザって言って、この中に一つだけ激辛のピザが隠されているんですぅ～」

朝露さんがニコやかに言った。

何もムリして場を盛り上げんでも、オレたちは十分楽しんでるって！

その時、ユイの向かい側で爽やかにカクテルを飲んでいる、鼻の高いアメリカ人が、こっちに向かってニコやかに手を振った。

「実は、彼のオゴリなんですぅ～」

なにぃ～～～？

あのアメリカ若造のオゴリだってぇ～？

ど～いう風の吹き回し？！

「彼はジェシーさんって言って、ユイさんに会いに、いつもあ～して飲みに来る常連さんみたいですぅ～。竜崎クンたちが、ユイさんの友達って聞いて、ジェシーさんはここのテーブルに何か注文したいって言ってくれたんですぅ～。私、遠慮したんですけどぉ～、ユイさんがお言葉に甘えろって言うから・・・」

ジェシーだと？　フン、随分陽気でフレンドリーなヤツだ。

・・・ま、嫌いじゃないけどな、そ～いうヤツ。

「ぐふっ！」

オレはジンのストレートを一口飲んで吐き出した。

これは、人間の飲めるモノじゃ、ない・・・。

「朝露さんって、血液型、何？」

オレは気を取り直して、いつものアレを聞いてみた。

「O型ですぅ～」

ふ～ん、O型か。

そのボケっぷりは、計算されたモノではなく、天然ってワケね。

「じゃあ、さっそくオレから食うか。いただきまぁ～す」

8切れあるピザのうち、オレは手前の1切れを口に入れた。

ムグムグ、うん、ンマイ！！

セーフ、ただのピザだ。

「じゃ、次は、オレが・・・」

竜崎が1切れを口に入れた。

・・・ん？　様子が変だぞ？　もしや、もうビンゴ？！

「ぐわぁぁぁ～～～～っ！！！」

突然、いつもクールで冷静沈着な竜崎が、人目も憚らず吼え出した。

まるでコールドブレスを得意とするブルードラゴンが、真っ赤なファイヤーブレスを吐いているような光景だ。

「きゃっ」

朝露さんが軽く握ったコブシを口元に当て、小さな悲鳴をあげた。

「み、水ぅ～～～～！！」

竜崎が、砂漠で干からびそうなキャラバン隊のような悲痛な叫びをあげる。

「は、はい」

朝露さんが、とっさにテーブルにあったグラスを竜崎に差し出した。

グビグビグビッ

それを一気に飲み干す竜崎。

アレ～？！

もしかして竜崎が今飲んだソレって、オレが飲んでたジンじゃない？

「ぐおおおおおおおおお～～～～～～～～！！！」

竜崎が吼える！　吼える！　吼える！

ついにブルードラゴンは、灼熱のメガトンフレアを吐き出した！！

第６８話　説得力ゼロ

竜崎の灼熱メガトンフレア事件は、ヤツがトイレに駆け込んだ時点で一先ず落ち着きを取り戻した。

ジンは、主にカクテルの材料として使われるが、ストレートやロックで飲むのも別におかしい事ではない。

しかし、他の酒と比べてアルコール度も高めで、口当たりが相当キツイ酒だ。

そんなジンを一気飲みした竜崎の安否が心配だ。

「ところで雫ちゃんは、彼氏とかいるの？」

オヨヨ？　宮さん、竜崎が居ぬ間に朝露さんにアタックですかい？

「いないですぅ～。早く、カレシ欲しいですぅ～～～」

宮さん『グフフ』的な笑みを溢してるけど、そのコを口説くのはムリっすよ。

竜崎にラブレターを書く時点で勝敗は決まってるし、お目当ての竜崎がココに顔を出した時点で、このコは竜崎の気持ちを誤解しているはず。

アイツがいつまでもハッキリ、ココに来た理由を言わないから、朝露さんはドンドン誤解の幅を広げてしまう。

『竜崎クンは、私の事、想ってくれてたんだ～』・・・ってね。

「実は、ココに来た理由なんだけど、アイツがいつまでもハッキリ言わないから、オレが代わりに言うね・・・」

オヨ？　オレってば、てっきり宮さんは朝露さんを口説きに入った？とか思ってたけど。

でも、本人いないのに、言っちゃっていいの？　いいか、別に。あいつは百年経っても言いそうにないし。

「雫ちゃん、まだ、高校1年生だよね・・・」

「お説教ですか？」

宮さんが言おうとしてる事を敏感に察知した朝露さんが、少しだけ口を尖らせて言った。

「いや、説教ではないんだ。ただ、ここら辺はさ、見ての通り、色々と危険な場所でさ・・・」

宮さんが見た方向には、ヤンキー風の3人の若者がいた。

オレがトイレで会った黒人もその中に含まれている。

「・・・分かってます、でも」

後姿だけでも十分アブナそうな男たちの背中を見て、朝露さんが言った。

「こんな所で、危険を冒して稼いだお金でご飯を食べても、弟クンたちは喜ばないんじゃないかな～？　それより、お姉ちゃんが働いてる姿を、弟クンたちに見せてあげられるような所で働こうよ。ちょっとくらい給料安くても、汗水垂らして稼いだお金で、愛情たっぷりのご飯を作ってあげようよ」

宮さん、何て深いイイ話をしてるんだ。

貫禄があるだけに、アンタの言葉は説得力ありますなぁ～。

そう、そういう事を彼女に教える為に、今日はこうして釜桐町まで来たのだ。

断じてお酒を愉しみに来たんじゃ、ない！

宮さんはさらに続けた。

「たとえ大層なメシじゃなくっても、みんなの笑顔が食卓にあれば、オレはそれで十分満足だけどな～。どんな豪華なメシでも、一人で食うより断然いいよ～。それに、ココって通うの時間掛かるだろうし、夜も遅くなるでしょ？　色々と危険だって付きまとうし、まだ

若いが故にリスクは大きいと思うよ。水商売ってのは、生半可な気持ちじゃ出来ないんじゃないかな～？」

「オレもそう思う」

オレも宮さんの深イイ話を後押しした。

「酔ってるんですよね？　酔ってる人たちに言われても、説得力ありません」

朝露さんが、顔に似合わずキツ～イ一言を言い放った。

オレが下唇を前に出して困った表情をしていると、宮さんが切り出した。

「酔ってない。酒に酔うのは、信頼できる仲間や身内に囲まれて、バカ話をしている時だけだ。男は、どんなに酒を浴びるほど飲んでも、酔っ払う生き物じゃない。ましてやこんな大事な話をしている時だ。これは素直なオレの気持ちだよ・・・」

宮さんの言葉に、朝露さんは黙ってうつむいた。

宮さん、アンタの言葉、何てカッコイイんだ！

名言じゃないか。

『酒に酔うのは、信頼できる仲間や身内に囲まれて、バカ話をしている時だけ！』

『男は、どんなに酒を浴びるほど飲んでも、酔っ払う生き物じゃない！』

この店の目立つ所に、その言葉を掛け軸に筆で書いて飾っておきたいくらいだ。

「アレも酔ってないって言うんですか？」

朝露さんが指差した方向を見ると、真っ赤な顔の泥酔男がフラフラとよたついている。

他の客に迷惑を掛けそうな竜崎の元へ、宮さんが急いで駆けつけた。

「竜ちゃん、そっちじゃない。こっち、こっち」

宮さんに連れられ、やっとこ竜崎は自分の席に戻ってきた。

「酔ってないっしゅよ。オレはジェンジェン酔ってないっしゅ！！」

竜崎は顔を真っ赤にして怒っている。

「分かった、もういい。オマエは酔ってないっシュ。さて、そろそろ帰ろうか」

「それでも男っスかぁ～？！　それでもジオンしゃんは男っスかぁ～！　見損ないました！！」

オレが立ち上がろうとすると、竜崎が凄い剣幕で怒った。

「竜ちゃん、そろそろ帰ろう、ねっ。店に迷惑掛けたくないし・・・」

「るせぇ～！　オレはジェンジェン酔ってないって言ってるでショーガーッ！！」

宮さんの優しい言葉も、今の竜崎の耳には入らない。

「竜崎君？　私が分かる～？　コレ、何に見える～？！」

朝露さんは、人差し指を立てた。

「イチ～！！」

元気よく手を上げて答える竜崎。

「はい、良く出来ました。じゃあ、そろそろ帰りましょう」

朝露さんが立ち上がろうとした瞬間、竜崎がとんでもない事を仕出(しで)かした。

それが、あの大変な事件の引き金になろうとは、みんなこの時は知る由も無かった・・・・・・。

第６９話　テーブル投げ事件

ガタッ

ガチャ　ガチャ　ガチャン

ガチャーーーーン

テーブルの上にあったモノは、全てが床に落っこちた。

オレたちの大きな丸テーブルを、頭の上まで持ち上げ、竜崎がニコニコ笑っている。

「コレ、どこまで飛ぶかなぁ～？」

アブネェ～、コイツ、マジ、あぶねぇ～！！

「やめろって、竜ちゃん！！」

宮さんが体を張って、何とかテーブル投げだけは阻止した。

「てめぇ～ら黙って見てれば、ウチの店でやりたい放題暴れやがって！　今すぐ帰りやがれっ！！」

さすがにユイも、竜崎の側まで来て怒っている。

「スンません。・・・じゃ、スンません？　・・・だっはっはっは」

竜崎が腹を抱えて笑っている。

ダメだコリャ。

「ジャパニーズはコレだ。酔っ払って人にメーワク掛けてもみんなヘッチャラ。ウチの国だったら半殺しじゃスマナイよ」

ラップ系の黒人が甲高い声をあげた。

何気に日本語が上手い。

その黒人と、仲間の日本人2人の3人組は、ドサクサに紛れてユイに突っ掛かってきた。

「オイ店員、気分悪ぃ～わ。あ、コレ、クレームね。お詫びに、今日の飲み代チャラにしてよ？」

B系ヒップホップな、上下、ラメプリントブラックジャージに身を包んだセミロングヘアーの男が掠(かす)れた声で不敵な笑みを溢す。

「お客様、大変申し訳ございませんが、そのようなサービスはウチではやっておりませんので」

ユイが腰を90度に曲げながら、礼儀正しく言った。

「ナメてるよ、コノ店。いい、帰ろうゼ！！」

黒人は仲間の2人を出口に促す。

「お客様、お会計はアチラですけど・・・」

ユイがヤンキー3人組の前に立ち塞がった。

「ウチの国では人にメーワク掛けたらタダにするゼ。コノ国腐ってるヨ」

黒人は尚も抵抗を続けている。

ドサクサに紛れて、何としてでも会計を誤魔化したいつもりなのだろうか・・・。

「お客様の国のルールは存じません。この国にはこの国のルールがありますし、この店にはこの店のルールがあります。もし、ルールに背いてお帰りになられるのであれば、無銭飲食で通報しますが、よろしいですか？　それとも、ルールに従い、素直に会計していきますか？」

ユイは、3人組の脅しにビビる気配はない。

「オイ店員、リチャードをあんまり怒らせない方がいいよ」

セミロングの男は、黒人の男をリチャードと呼んでいる。

リチャードってヤツ、あのキレ具合を見るとマジで怒ってるから、きっとヤツの国では酔っ払いは本気で嫌われてんのかな?

確か、アフリカ系アメリカ人の8割がA型だったよな・・・。

すると、あのリチャードってヤツも理論的で生真面目なA型だったりすんのかな?

ヤツは正当な善を貫いてるつもりだろうが、こっちからしたらヤツは悪でしかない。

「じゃ〜、こうしよう。オレたちの会計は、あの人たちが払うから。それでいいだろ?」

セミロングの男が、こっちを見ずに言った。

はい?

オレは一気に酔いが醒めるのを感じた。

ふと、隣を見ると・・・

ヤバイ、宮さんがキレかかっている。

・・・と、その時!

「オメ～らいい加減にしやがれろ～～～」

宮さんがキレる前に、竜崎が3人組に突っ掛かっていった。

これじゃ～後先を考えてる余裕も、戦略を練る暇もなく、喧嘩勃発だ・・・・・。

「酔っ払い、オメー、何したか分かってんのかコラ？　リチャードの背中見てみろ、背中！」

パイソン柄のゴージャスシャツとアメカジジーンズの、お兄系ファッションに身を包んだ丸刈りの男が、リチャードの背中を指差した。

ケチャップだ！　あれはウチらの食べたピザのケチャップに違いない！！

きっと、竜崎がテーブルを投げようとした時、勢いでリチャードの背中まで吹っ飛んだんだ。

オレもユイも、宮さんも朝露さんも、その場で一瞬凍りついた。

目の前の3人組と対峙している竜崎は、見ての通りグデングデンに酔っ払っている。

非があるのは、明らかにウチら・・・って言うか、竜崎。

「オレは酔ってレ～よ。マジでイってんラよ～」

竜崎のロレツが回ってない。

「竜崎、ホラ、アンタも謝りなさいよ。・・・ったく」

「やめれ～～～」

竜崎はユイに頭を押さえられ、無理矢理頭を下げさせられた。

まるで、学校で泣かした友達の家に謝罪に行った小学生が、友達の家の玄関で、自分の母親に強引に謝らせられているみたいな光景だ。

「洋服のクリーニング代は飲食代から差し引いてサービスしておきます。それでよろしいでしょうか？」

ユイは何とかその場を繕うのに必死だ。

オレの隣からは、今にもブチキレそうな宮さんのただならぬオーラが漂う。

たのむ、宮さん、ユイがせっかく事無きを得るよう頑張ってるから、もう少し辛抱してくれ・・・。

「どうする、リチャード？」

おっ、丸刈りの男はそれで引き下がりそうだ。

いいぞ、後はリチャードが納得してくれれば・・・・・。

「フザケンナよ」

ダメだ、アイツ、頭固すぎ。

絶対あの頑固さはAだよ、A。

「ゴメンらサイ・・・」

ただひたすら謝る竜崎だが、自分が今何をしてるのかも、ちゃんと分かってねぇ～んだろうな～。

ドカッ

ガーッ　ガラガラガラン

突然だった。

竜崎がリチャードに蹴られて吹っ飛んだのだ。

腹部を回し蹴りのようなカタチで蹴られ、勢いよく他の客のテーブルに吹っ飛んだ。

「きゃ～っ」

被害を受けた女性同士の2人組は、怯えるように会計を済ませて去っていった。

修羅場到来・・・・・。

トホホ、だ。

第７０話　野牛退学組

いくら竜崎に非があったとしても、頭も下げ謝罪もした。

それにユイは、クリーニング代をサービスするとまで言っていたにもかかわらず、リチャードは竜崎に蹴りを入れやがった。

しかもあの吹っ飛びようったらない。

不意を突かれた竜崎も不覚だが、それよりリチャードの蹴りの威力は目を見張るものがある。

一言で言えば、強い。

ユイの身の危険を感じたオレは、とっさに荒れてる現場に駆け寄った。

オレの隣には宮さんもいる。

リチャード、丸刈り、セミロングの３人組を目の前にし、何を言おうか考える間もなく、セミロングの男が思わぬ言葉を口にした。

「宮、コイツ、宮大地だゼ・・・」

「ホントだ。ヤベ～よ、マジで武蔵の宮じゃねぇ～か・・・」

丸刈りの男も小声で返した。

さすが宮さん、名前も顔も売れっ子だ。

こ～いう時頼りになるねぇ～。

「ミヤダイチ？　聞いた事ネェ～」

リチャードが不思議そうな顔をしていると・・・

「コイツんトコに殴り込みに行って、ウチら学校クビになったんだよ。ホラ、シンちゃんも言ってたろ？　メチャクチャ強ぇ～総番長の話」

「あ～～、思い出したヨ。コイツが例の、泣く子も黙る総バンチョー。伝説のコーコーセー」

リチャードは白い歯をむき出した。

「てめぇ～ら、野牛（やぎゅう）のモンか？」

何かを察した宮さんが、ついに口を開いた。

宮さんの口から飛び出した言葉は衝撃的だった・・・。

・・・野牛はヤバイ！！

あの高校とだけは揉めたくないって、ずっとずっとそればっかり思ってた。

あう～～～、オレはこれから、どうやってコレをすり抜けていこうか・・・・・。

「正確に言うと、元野牛だ。オレたちは誰かさんのせいで、とっくに学校退学させられてるんでね」

丸刈りの男が口元を歪めながら言った。

「声震えてんぞ、大丈夫か？」

さすが宮さん、堂々としてる。

「シンちゃん覚えてるか？　オメ～の中学ん時のダチだよ」

セミロングの男が宮さんに訊いた。

「シン？　仲村シンの事か？」

「そうだよ。オレらがいつまでも大人しくしてると思うなよ。オレら退学組は、シンちゃんや長須（ながす）さんに迷惑かけねぇ～ように今まで黙って引き下がってたけどな、あんまりオメ～がデケ～ツラしてっと、いつまでもオレらも我慢できねぇ～から」

「ほ～、じゃ、今やってもいいんだぜ」

ヤバイ！

セミロングの男と宮さんは一触即発のムードだ。

話によると、どうやらこの丸刈りの男とセミロングの男は、以前ウチの学校に殴り込みに来て退学になった、元野牛の生徒らしい。

オレも名前だけは知ってる野牛の2トップ、仲村シンと、番長の長須光雄（ながすみつお）は、宮さんと同じ、現役の3年生だ。

宮さんの中学時のダチだという仲村シン、又の名をバイソン・ソルジャー。

そのバイソン・ソルジャー、噂では野牛一番の喧嘩王で、猛者揃いの荒れた野牛で無敗の戦績をいまだに保っているという。

宮さんが大人数を相手に敵を蹴散らす覇王伝説を持つなら、仲村は、王道のタイマンで確実に敵を蹴散らす無敗伝説を持つ。

おそらく仲村がパイプ役になり、宮さんと長須のラインを上手く作り、吉岡と野牛と武蔵のトライアングル平和協定を結んでる図式なのだろう。

現役高校生の仲村と長須に迷惑を掛けないようにという理由で、宮さんに恨みがある退学組は大人しくしていたようだが、こいつらが自暴自棄になった今、はたして・・・・・

「表面では分かんねぇ～かもしれねぇ～が、シンちゃんは内心オメ～にムカついてんだよ。長須さんもな」

丸刈りの男はとんでもない事をぶっちゃけた。

宮さんと野牛の番長、長須光雄は仲良いんじゃなかったのぉ～～～？

「シンちゃんは今でもオレらの味方なんだよ。ただ、長須さんが吉岡の大橋剛太と仲良いし、オメ～と協定結んでっから手ぇ～出せねぇ～だけだ」

セミロングの男は随分といきり立っている。

「能書きはいいから、やるのかやんねぇ～のかハッキリしろや」

ヤバヤバ、宮さんがやる気だ・・・・。

第71話　それはジェシーのせい

「宮さん、そこ、どいて・・・」

竜崎がヨロヨロと立ち上がった。

「竜ちゃん、これはオレの喧嘩だよ」

「オレの喧嘩だぁ～～～～！！」

ダメだ、竜崎が完全に我を失っている！

「ちょっとアンタたち～！　いい加減にしないと警察呼ぶわよ！！」

ユイが一瞬で全員の動きを止めた。

「覚えとけよ、宮大地。いつか必ずオメ～の首をとってやる。それまで首を洗って待ってろよ」

セミロングが財布をポケットから出しながら吼えている。

威勢良いセリフだが、そのままユイが立つレジで素直に会計を済ませると、何も言わず出口から出て行った。

「へへっ、じゃ～な」

丸刈りの男は声を震わせながらそう言うと、逃げるように店から飛び出し、そのままセミロングの後を追うように階段を駆け下りていった。

2人が店の外に出た後、オレたち一人一人の顔を覚えるようにゆっくりと睨みつけたリチャードは、去り際に竜崎に向けて中指を立てていった。

ふ～～～っ、とにかく助かった・・・・・。

「大丈夫っすか、宮さん」

オレは興奮冷めやらぬ宮さんの心境が気になった。

いつもストレートなB型の性格上、怒りを抑えるのは困難なはず。

「大丈夫、大丈夫。こんなの日常茶飯事だから」

とは言うものの、宮さんが腹に一物溜めてるのは一目瞭然。

こんな風に平然を繕うのも、捻くれた表現をするのも、いわゆるB型特有の悲しい性なのかもしれない。

本当は一番悔しいくせに・・・。

さてさて、一件落着かと思いきや、オレたちは竜崎が壊した食器や何やらを片付けさせられ、ついでに閉店後の店内掃除もさせられるはめになった。

終始ニコやかに笑っていた竜崎を見て、朝露さんがムッとしていたのが妙に可笑(おか)しかった。

何はともあれ、一先ず無事で何より・・・と、思いきや、ユイが店長に呼び出され・・・・・。

トボトボ帰ってきたユイは、俯(うつむ)き加減で衝撃的な言葉を吐いた。

それは、オレたちを震撼させるに十分な一言だった。

「クビだって」・・・・・・・・・。

その言葉が、何度もオレの頭の中を交差する。

『君がいると〜、今後、また、こ〜いう事態が起こりかねないよネ？　君が〜、不良な連中と揉めてしまった以上、ここに居るのはかんばしくないよネ？　それに〜、もし警察の手が回るような事があったら、高校生を雇ってるって事で、ボクのクビも飛ぶよネ？　これ以上、君に目をつぶるワケにはいかないんだ。君なら、ボクの立

場も、よく理解できるよネ？　今まで、ウチのために一生懸命働いてくれた君には、ホントに感謝してるよ。だからこそ・・・・・』

・・・だ、そうだ。

同時に朝露さんもクビになったそうだが、彼女は入ったばかりだし、次は近所のクレープ屋でもたこ焼き屋でも、何でもやるといい。

それこそ、宮さんが言ってた、弟たちに堂々と見せられる、そんな所で働くといい。

それより、ユイだ。

ユイはいつからか分からないが、あそこまでシェーカーを振れ、尚且つ常連まで来させる健闘ぶりを見せ、サブリーダーまで昇格した。

それが突然、不本意な解雇通告。

誰のせいだ、誰のせいだ？　ユイがクビになったのは誰のせい？！

ヤンキー3人組か？！

でも、店長はヤツらとユイが揉めたって事を強調してたらしいが、本当は他に理由があるんじゃないかと思う。

ヤンキー3人組ＶＳユイだけだったら、クビにはならなかったんじゃないかな？

きっと原因は、ユイの知り合いが店で暴れたって事だ。

・・・って事は、竜崎か？

でも、元々竜崎は、間違って飲んだオレのジンのせいでこうなったんだ。

じゃあ、つまり、オレのせいってか？　いや、待てよ。

元々、竜崎がジンを飲んだのは、朝露さんが頼んだルシアンルーレットピザが原因だ。

でも、頼んだのは朝露さんだが、元はと言えば、ジェシーが余計なお節介で、好きなものを注文させたのが悪い。

・・・って事は、ジェシーだ！

そうだよ、ジェシーだよ！！

・・・何で今まで気がつかなかったんだ？！

ジェシーが犯人だ！

全てジェシーのせいなんだ！！

「ユイ、ジェシーが悪い！！」

オレは遠慮せず、キッパリ言ってやった。

その直後、今までの酔いが一気に醒めるほどの一撃を食らったのは言うまでもない・・・。

「なぁ、ユイ。いつからココで、バイトしてたの？」

「1年前よ・・・」

店の帰り際、階段を下りながら、オレの問いにユイが静かに答えた。

「どうしてココでやろうと思ったんだ？　色々な飲み屋がある中で、どうしてココを選んだんだ？」

オレはちょっぴり、最初にユイが選んだ店が、いかがわしい店じゃなくて良かったと思いながら訊いた。

「名前が気に入ったからよ。それだけ・・・・・」

それだけ言うと、ユイは無邪気な笑顔を一瞬見せた。

「そうか。上手く言えないけど、また、いい所見つかるよ」

「当然よ」

オレの励ましに力強く答えたユイに迷いはなく、オレは少しだけ安心した。

そして、帰りに店の看板を見て、オレは絶句した。

「ＢＡＲカシオン・・・。バーカシオン・・・。馬(ば)～鹿(か)、しおん」

オレの本名は、詩音(しおん)。

第72話　なぜに金魚すくい

まだ5月のゴールデンウィークが明けたばかりだというのに、ホームルームでは、もう7月の学園祭の出し物の選出が始まった。

ウチの学校の大イベント『武蔵祭』は、毎年恒例、夏休み直前の学園祭で、次の日が終業式、その後はバカンスに突入するため、かなりテンションが上がる。

去年のウチのクラスは、『恐怖の怪談展覧会』と称して、様々な怪談グッズを集めたり、クラスの物真似が上手いヤツが、怪談話の大御所、猪川淳二のコスプレをして、それなりの手作り舞台で、ある事ない事でっち上げた怪談話で盛り上げた。

だが、一番の功績は、怪談マニアのクラス委員長、小倉が呼んだ、餓龍氏の登場だろう。

餓龍氏というのは、知る人ぞ知る、現代版『怪談百物語』の作者で、どれもこれも実話系の凄い作家だ。

ベストセラーの『三葉リゾートパークホテル』は、日本、韓国のみならず、ハリウッドでも映画化されている。

そんな有名人を呼んでしまったのだから、それはそれは大盛況だった。

ほんの15分ほどのサイン会だったが、長蛇の列に、オレたちは警備として忙しかった。

さすがにペンを持つ作家だけあって、握手は原則禁止というのが印象的だった。

度肝を抜くような出し物をするクラスが他にもゴロゴロいるもんだから、他校や一般人にも大ウケの学園祭なのだ。

2ヶ月以上前から企画を練る所以(ゆえん)はそこにある。

さてさて、去年は大盛況だった学園祭、今年は去年を越えるイベントがあるのか〜?!

「他に意見はありませんかぁ〜?」

委員長の小倉がみんなに意見を求めるが、誰も手を挙げるヤツはいない。

「なあ、ジオン、いいのか? このままだと金魚すくいに決定しちゃうぞ」

オレにふるなよ、オッキー。

オレは何でもいいよ、フナでも鯉でも鯛でもマグロでも、何でもいいよ。

「ユイはやりたいのとかないの？　ホラ、メイド喫茶とかさ？　ねぇ、メイド服、着てみたくない？！」

佐倉が突拍子もない事を言った。

なに？　メイド服が着たい？　マジ？！

ハイハイ、ボク、佐倉さんのメイド服が見たいどぇ～～～～す！！

「アタシは遠慮しとく。いつでも着れるから・・・」

は？　はい？！

イマ、何て言ったの？　ユイさん。

「え？　いつでも着れる？！」

佐倉が目を丸くして聞き返した。

「あっ、ウン？　な、何でもない、何でもない！！　・・・で、ナニ？　あっ、アレね、学園祭よね。ウン、ど～しよ～」

隠してる。

絶対、何か隠してるぞ、ユイのヤツ。

まさか、カラオケとＢＡＲに引き続き、次なるバイトはメイド喫茶だとでも・・・？！

ま、まさかな。

でも、実際ユイがメイド喫茶で「いらっしゃいませぇ～、ご注文は、ナニにいたしましょうかぁ～？　ご主人さまぁ～？」なんてやってる姿を想像すると、とても尋常じゃいられない。

おそらくその場で爆笑、いや、キレるかもな？　「オマエらしくねぇ～よ！！」なんて・・・。

「オイ亀鶴、何ニヤニヤ妄想してんだ、このボケナス！」

「はあ？」

オレは突然の出来事に仰天した。

目の前に、赤ジャージのリッキーが、竹刀を肩にして立っている。

「亀鶴と沖田、オマエら隠し芸とか持ってないのか？　そうだ、沖田は腹踊り、亀鶴は腹下りってのはどうだ？　あっ、腹下りは芸でも何でもねぇ～か？！」

「あはははははは」

クラスのみんながこっちを見て笑っている。

出たよ、出たよ、出たよ、出たよ。

リッキーのネチネチした口撃が炸裂したよ、コレ。

恒例の、得意のイヤミが始まったよ、コレ。

「オマエら、笑ってないでさっさと決めろ！　ホントに金魚すくいでいいのか?!　何かねぇ～のか、パッとしたヤツ。焼きそば屋とか、たこ焼き屋とかあるだろ。喫茶店とか。そうだ、オマエら、メイド喫茶とかやってみたらどうだ？　男子は皿洗いと厨房できるし、いいな、それ」

おい、リッキー。

オメェーは単に、女子のメイド姿が見たいだけだろぉ～が！

だって飛躍したモンな、随分。

焼きそば屋、たこ焼き屋ってきて、喫茶店まで飛ぶか、フツー。

パッとしたヤツねぇ～のかって言った時点で、明らかにメイド喫茶を思い浮かべてたぞ、この変態オヤジ！！

「・・・と、いうワケで、今年の学園祭、ウチの出し物は、金魚すくいに決定しました。ウチのクラスは屋台系なので、校庭か中庭に出店すると思います。よって、この教室は他のクラスの控え室等に

なると思いますので、あしからず・・・」

小倉が適当に締めくくって、学園祭のイベント決めのホームルームが終了した。

あぁ～～～あ、今年の出し物は、金魚すくいに決定かよ。

こんな事なら去年に引き続き、『餓龍氏を呼ぶ』ってのに一票入れとくんだった・・・。

クソ面白くねぇ～な、こりゃ。

他のクラスとか、他の学年に期待だな、こりゃ。

昼休み、オレはいつものように、いつもの喫煙スポットに顔を出した。

相変わらず竜崎と宮さんが、おいしそうにタバコを吸っている。

「2ヶ月半も先だけど、学園祭の出し物決め始まったよね～。竜崎、宮さんのトコ、決まった?」

オレが2人に学園祭のイベントの事を聞いた時だった。

ゾクッ

まがまがしいオーラを背中に感じた。

1組のタカノブ、貴船（きぶね）、芒（すすき）の3人だ。

第７３話　Ｂ型はＯ型の包容力で気楽

タカノブ、貴船（きぶね）、芒（すすき）の３人は、オレと竜崎には目を合わせず、宮さんに軽く頭を下げると、そのままこっちには来ずに去っていった。

「何だ、アイツら」

宮さんが不思議そうな顔をした。

「ここでタバコを吸いたかったんじゃないんスか？　でも、宮さんがいるから避けたんでしょう」

竜崎が皮肉たっぷりに言った。

「何も遠慮しなくていいのにな。アイツら２年の不良だろ？　亀ちゃんとは面識ないの？」

宮さんがオレに聞いてきた。

「・・・ないっす」

面識・・・。

ないって言ったら嘘になる。

アイツらは分からんが、ぶっちゃけオレはメチャクチャ、ヤツらを意識してるのは確かだ。

ハッキリ言って、ヤツらとはかかわりたくない。

タカノブは暴走族、貴船は中学時代の同級生、芒の兄弟はヤクザ。

中でも、貴船だけはゴメンだ。

貴船とかかわるって事は、芋蔓式でアイツらを引っぱり出すようなもんだ。

中学時代、オレを地獄に落としたアイツらを・・・・・。

「なぁ、亀ちゃん。ホラ、あん時の、長山だっけ？　あの7人組とはあれから何もないの？」

「ないっすよ。アイツら、妙に大人しくなって、廊下で擦れ違う事も、学校に来る時に会う事もなくなりましたよ」

思えば、あれから長山に会わないな。

結局、カンパで集めた金の使い道も分からず仕舞いだったし。

ま、大方ヤツらの遊戯代ってトコだろう・・・。

このまま自然にフェードアウト希望っ！

「竜崎、あの時の、柴義経はどうした？　学校で会ったか？！」

「アイツ、ウザイっス。隣のクラスなんスけど、しょっちゅうウチのクラスに来るんスわ。ウチのクラスの女子目当てってのもあるんでしょうけど、妙に親しげにオレに話し掛けてくるんスよ」

竜崎は本気で義経を嫌っているようだ。

分かるぞ、その気持ち。

「アイツ、血液型何型かなぁ～？」

「ＡＢっス」

オレの独り言に、竜崎が即、答えてくれた。

「ＡＢ型かぁ～。Ｏ型の竜崎とは、最強タッグか犬猿の仲ってトコロかな」

「じゃ～、犬猿っスね。オレはヤツとタッグを組む気にはなれません」

「そういえば、秋鹿（あきが）もＡＢ型だったっけ・・・」

宮さんが思い出したように言った。

へ～、あのアンパンマンも、ＡＢ型かぁ～。

通りで2面性があると思った。

あんな巧妙な作戦を企(くわだ)てる割には、「みぃ～～～やぁ～～～」だもんな。

「アレ？　宮さんって血液型、何型?!」

竜崎が宮さんに尋ねた。

「言ってなかったっけ？　オレ、B型」

「O型はB型に対しては、いつもの包容力をさらに拡大できる特性があるんだよ。だから、B型は自由にのびのびいられるの。O型がB型に対して、キレさえしなければ最高の相性」

「・・・だってさ。お酒を飲んでも、ボクにキレないでね、竜崎クン」

宮さんが竜崎に、皮肉を込めて言った。

「はい？　オレ、酒飲んだ時、やっぱり何かしました?!　全然記憶がないんスよ、あの時の・・・」

竜崎が心配顔で、オレと宮さんの顔を交互に見た。

「何もしてないって」

宮さんが竜崎の肩をバンバン叩きながら言った。

「テーブル投げには気をつけよう」

オレも宮さんに引き続き、竜崎をイジメてみた。

「はい？　何スか、それ？　テーブル投げって何スか、テーブル投げって。あの後、朝露に聞いても何も答えてくれないんス。ユイ先輩にも鼻で笑われるだけだし」

・・・でしょうな。

「さて、竜崎。オマエのクラスの出し物って何？」

オレは話を学園祭の話に切り替えた。

「終わりっスか？　テーブル投げの話はもう終わりっスか？」

「ウチは金魚すくいだよ、金魚すくい」

「はっはっはっは、渋いねぇ～」

宮さんにウケた。

「ウチは、焼きそば屋。オレの特製焼きそば、食いに来てねぇ～」

宮さんのクラスは焼きそば屋だそうだ。

宮さんが作るのか？　大したモンだ。

「・・・で、竜崎は？」

「熱帯魚博覧会ですよ。トコロで、テーブル投げの話はもう終わりっスか？」

「熱帯魚？　何でまた？」

オレは竜崎に訊いた。

「だって、みんなオレに決めさせるんスもん。オレが、自分の趣味でもある、熱帯魚の展示なんかどうっスか～って提示したら、みんな乗ってきただけっス。トコロで、オレのテーブル投げの話はもう、完全に終わりっスか？」

そうか、竜崎って意外にクラスの人気者なんだな。

オレなんてクラスの笑い者だゼ、まったく。

「熱帯魚展示って、大変そうだね。竜ちゃん家にある、あのでっかい水槽持ってくるワケ？」

宮さんが竜崎に訊いた。

「まさかぁ～。ウチの魚を学校に持ってくるなんて、とんでもない！　クラスの経費で買うんスよ。水槽なら理科室にたくさんあるから、それを借ります。１つの水槽に１匹だけ入れて、初めて見る人

にも分かり易く説明ＤＶＤとか流して・・・。問題は照明と水温。それらを調節するには特殊な器具が必要で、揃えるには経費がかさむんですわ。それと、熱帯魚店から魚を運ぶ時が至難なんですよ。スピードと水温が重要で、魚をビニール袋に入れたら、それを発砲スチロールへ移して、迅速に且つ慎重に運びます。中でも海老は、息の根がすぐに途切れるんで、それはもう大変で・・・ウンヌン・・・・」

竜崎の熱帯魚の話は永遠に終わりそうにない。

オレは隙を見てその場をあとにした。

教室に戻ると、オレのケータイに珍しく着信があった。

スルベシター・シタローンの演じた名作『ボッキー』のテーマが５校時前の教室に鳴り響く。

♪～

トゥル～ル～　トゥル～ル～　トゥル～ル～　トゥル～ル～♪

トゥルル～ル～　ルル～　ルルルッルル・・・・・

「消しなさいよ、音。うるっさいわねぇ～」

隣のユイに怒られた。

前の席のオッキーも、迷惑そうな顔でこっちを見ている。

いつも電話なんて来ないから、ついついマナーモードにしとくの忘れてたのだ。

「ハイ、もしもし・・・」

「「出るのかよ!!」」

ユイと前の席のオッキーに同時にツッコまれた。

『ジオン、オレだ・・・・・』

それは、意外な人物からの、意外な電話だった・・・・・。

第７４話　向こう岸の友へ

その夜、オレは部屋のベッドに寝っ転がりながら、テルのケータイに電話をかけた。

昼休みにテルから電話をもらったのだが、生憎、５校時が始まってしまった為、夜にかけ直すと言って、その場は切ったのだった。

『プルルル・・・プルルル・・・ハイ、もしもし・・・』

「テル？　オレ、オレ。昼間はゴメン。竹中の授業があったからさ・・・」

『竹中？　竹中って、あの、生徒指導の？　数学の竹中？！』

「そうそう、あとな、驚くなかれ・・・・・・」

オレは積もる話が沢山あったが、まずは担任がリッキーだという事をテルに話した。

『マジかよ。そいつは傑作だな・・・』

「あとな、伝説の番長、知ってるか？　宮大地・・・」

『ああ、もちろん知ってるゼ。挨拶くらいしかした事なかったけどな・・・』

「オレな、彼とな・・・・・・」

その後オレは、総番長の宮さんと仲良くなった事、1年を2日でシメた竜崎なる大型ルーキーと仲良くなった事なんかをテルに話した。

その他、オレの血液型がA型ではなくO型だった事、リッキーと揉めた事、吉岡の番長たちとの件、6組の長山たちの件や、、ユイがバイトしてたBARでの一件なども話したかったが、時間がいくらあっても足りないので、今日はそれらを語るのは諦めた。

『・・・そうか、楽しそうだな、学校』

「まぁ〜な。ところでテル、上京して2ヶ月経つけど、どうなんだ？　調子は・・・」

どうせ嫉妬しそうな成功話や自慢話が待ってんだろうなぁ〜なんて思ったが、最初にオレの楽しい学校生活の話をさんざんさせてもらった手前、テルの近況を聞かないわけにはいかないよな。

『全然ダメだ。もう、帰りてぇ〜よ』

はあ？　帰りたいだぁ〜？　何言ってんだ、コイツ。

「マジで言ってんのか？」

『この就職難だろ。仕事が全く見つからねぇ～んだ。予定ではとっくに金貯めて、親戚のおばさん家出(ち)て行く手筈(てはず)だった。何もかも計算通りいかねぇ～よ。もう、目の前が真っ暗でよぉ～』

ははぁ～～ん、さてはテルのヤツ、そんな愚痴？　弱音？　誰にも言えない本音？　悩みなんかを誰かに聞いてもらいたくてオレに電話してきたんだな。

しゃ～ねぇ～、慰(なぐさ)めてやっか。

オレ流に、表面厳しく、中、温かくな。

「何、弱気な事、言ってんだよ。そんなセリフ、オマエの口から聞きたくねぇ～よ」

『変わったな、オマエ。何か、頼り甲斐のあるヤツになったな・・・。そうか、一人になっちまって、オマエも色々苦労してんだな・・・』

苦労？　苦労どころじゃないわい。

死ぬか生きるかの戦いの日々じゃい。

・・・ってのは大袈裟か？

「就職はできなくても、バイトくらいはしてんだろ？」

『そのバイトが見つからねぇ～んだよ』

「東京だろ？　オマエ、本気で探してんのか？！」

『探してるよ。でも、見つからねぇ～んだモンよ。そっちは、いいバイトあるか？』

「こっちの話はどうでもいいだろ。現実から逃げんなよ、テル。夢ばっか見て、現実から目を逸らし過ぎなんじゃねぇ～のか？！」

『・・・ふっ、そうかもしれねぇ～な』

・・・ったく、何のために東京行ったんだよ。

「音楽はやってるんだろ？　そっちの方はどうなんだよ」

『ああ。何社かデモテープを送ってみたけど、返事はまだ、ないな。あとな、夜に公園や街中で、単独のストリートライヴをやってるよ。少しでもオレの知名度を上げたくてな』

「みんな聞いてくれんのか？」

『ボチボチな。でも、ぶっちゃけ、挫けそうな夜ばっかだ。ははは・・・』

冷たい夜風に冷えきった、重たい楽器を背負うテルの姿が目に浮かぶゼ。

「テル、オマエの夢って何だっけ？」

『何だよ今更・・・』

「何だっけ？　言ってみろよ・・・」

『はあ？　何で・・・』

「オマエ、何て言って学校辞めたか忘れちまったか？　オレは自分の夢を追い掛けて生きるって言ってたよな？」

『ああ、言ったよ。その通りだよ。今でももちろん夢は諦めてねぇ～よ』

「じゃあ、オマエの夢を言ってみろよ。オマエは何の為に東京に行ったんだっけ？」

『・・・ミュージシャンになりたいっていう夢を叶える為だよ』

「その夢は、もう、叶ってるだろ？」

『はあ？　叶ってねぇ～よ』

「オマエは、ミュージシャンになりたいって思い続けてる。ちゃんとオマエの望みは叶ってるだろ。これからもずっと、その気持ちを抱き続ける事だろうよ。ミュージシャンになりたい・・・ってな」

『・・・なに？　それは、どういう意味だよ』

「ミュージシャンになりたい（・・・・）っていう夢を、いつまでも追い掛けて生きればいいだろぉ～！！」

『う、うるせ～！　オレは、なりたい（・・・・）んじゃない！！なるんだ（・・・・）！！　ミュージシャンになるんだ（・・・・・）！！』

「・・・はっはっは。だろ？　そこだろ？　それって、大きな違いだぞ」

『くっそぉ～、ジオンに一本とられたな・・・。オマエ、強くなったな』

「そうか？」

『ああ。声で分かるよ。オレほどの男はな、声を聞いただけで相手の力量が分かるんだゼ』

どっかで聞いたようなセリフだなぁ～。

第７５話　笹商の織川

駅前なんぞを、宮さんを先頭に竜崎と並んで歩いていたりする。

要は暇つぶしだ。

最近、放課後は1人でいるよりこの2人とつるんでる方が多い。

妙に落ち着くのだ。

それは宮さんと竜崎も同じようで、オレたちは当然の如く、学校が終わるとこうして駅前をブラつくのが日課になっていた。

時折道端で、おまわりさんに宮さんが声を掛けられていた。

たまたま会った巡回中の警察が、宮さんの名前を覚えてるって事は、よっぽど有名な証拠だ。

宮さんの顔と名前が売れている証拠はそれだけじゃない。

ウチの学校の生徒だけじゃなく、吉岡工業高等学校の生徒ならびに宝蔵学院の生徒までが宮さんと擦れ違うたびに頭を深々と下げた。

ちなみに宝蔵学院は、ヤンキー生徒などほとんどいない、勉学に勤

しむ優等生揃いの高校だ。

そんな宝蔵学院に負けず劣らずマジメな学校、笹城商業高等学校、通称、笹商に、意外にも気合の入ったヤンキーがいたのには驚きだ。

小道からアーケードの歩行者大通りに入った時である。

数人のヤンキーが、我がもの顔で横一列になり、道幅を占領してこっちに向かって歩いてきた。

紫がかかった青、いわゆる瑠璃色のあのブレザーはまさしく笹商。

目立つ色だからすぐ分かる。

そして数歩前を歩く宮さんが、そいつらを睨みつけてるのも、後姿だがよく分かる。

笹商の連中は、宮さんがどんな人か知らないらしく、無謀にもガンをつけてきやがった。

そんな中に、宮さんが堂々と突入する。

「なんだ、織川じゃねぇ～～～か。久しぶりだなぁ～～～、元気か？」

どうやら宮さんの知り合いが一人、笹商のヤンキー軍団の中にいたらしい。

宮さんは、ヤンキーたちの中に混じった、物凄く真面目そうで弱そうなヤツの肩に手を回して再会を喜んでいる。

何であの中に、あんなシャバイのがいるんだ？

大方、ヤンキーたちのパシリとかだろうな、気の毒に・・・なんて思っていると、

「アイツ知ってるっス。宮さんの元舎弟っス」

竜崎がビックリ情報をくれた。

宮さんって、舎弟いたの～？

「それって、中学の時？」

「そうっスよ。あの織川（おがわ）って人、宮さんと同じクラスでイジメられっ子だったんスわ。宮さんは、そんな彼を助ける意味で、自分の舎弟にして彼をイジメから守ったんス」

「へ～、宮さんらしいな」

でも、中学時代は宮さんに守られて平和だったかもしれないけど、高校生になって単独になった時、結構苦労したんじゃねぇ～のか？

そんなオレの気持ちと同じ心境なのか、宮さんは喰らいつくように

周りのヤンキーを見渡した。

「宮さん、心配いらないですよ。ボク、あれから体鍛えたし。仲間にも恵まれてるしね」

織川が周りのヤンキーに宮さんを紹介すると、一同「おい、この人が噂の？」とか「織川、凄ぇヤツと知り合いだゼ」などとコソコソやっていたが、みんなそれぞれ宮さんに頭を下げた。

ついでに？オレと竜崎も頭を下げられ、どう返したらいいのか迷った挙句、一応オレたちも軽く会釈（えしゃく）をした。

「風の噂でボクシングやってるって聞いたけど、ホントか？」

「アマチュアボクシングのジュニア、ライトフライ級だよ。地区の選手権では今の所負け無し」

「ホントかよ？　そうか、オマエ出世してんだなぁ～。そうかぁ～」

宮さんは自分ごとのように喜んでいる。

「プロ目指すんだろ？　頑張れよ！！」

「うん、ありがと。宮さんも、お元気で・・・」

織川と笹商のヤンキー軍団は、アーケードの人ごみに紛れていった。

それにしても人は見掛けで判断しちゃいけないモンだ。

笹商のヤンキーたちで一番弱そうに見えたのに、実はボクサーだったなんて・・・。

ヘタに喧嘩できねぇ～よ。

歯ぁ～折られるよ、簡単に、歯ぁ～。

しばらくすると、またしてもどっかの生徒が宮さんに頭を下げていた。

「宮さんアレ知ってる人？」

竜崎が尋ねた。

「い～や、知らん」

知らんのかいっ！！

泣く子も黙る総番長、宮大地のネームバリューと顔の広さには毎回驚かされる。

そんなビックネームと肩を並べて歩けるオレは、極力自惚(うぬぼ)れないよう自粛(じしゅく)した。

「どっかでコーヒーでも飲んでこ～ゼ」

宮さんがタバコを吸いたそうなのは、結構前からオレは知っていた。

落ち着きなくキョロキョロと喫茶店の看板に目を向けてたもんな。

「ここなんてど～っスか？　ＯＰＥＮ記念で半額セールやってるっスよ」

竜崎の視線の先には、先日オープンしたての喫茶店の看板があった。

店名は横文字で読めないが、料金が安い店なら大歓迎だ。

オレたちは吸い込まれるように階段を下り、地下１階の喫茶店に向かった。

レンガ造りの階段は、ヨーロッパの風景を醸(かも)し出す。

チリンチリ～ン

「いらっしゃいませぇ～。何名様でしょうかぁ～？」

「さ、３人だけど・・・」

宮さんの声が震えてるように聞こえたのは気のせいだろうか？

「３名様、ご来店でぇ～～～す」

「いらっしゃいませ、ご主人様ぁ～」

「いらっしゃいニャ～」

どうやらオレたちは、不思議の国へ入り込んでしまったようだ。

第７６話　竜崎と宮さんと異世界

オレたちは、一人だけでっかいネコ耳を付けた、語尾に「・・・ニャ」を付ける、ネコの着ぐるみを着用した女の子に案内され、奥の席に案内された。

店内は意外に広い。

「ご注文がお決まりになりましたら、このベルをチリンチリンって鳴らしてニャ。すぐにお近くのメイドが駆けつけるニャ。ではごゆっくりニャ～」

宮さんも竜崎も口を開けて固まっている。

周りの席には、どっから見てもオタクなヤツらばかりが座っている。

オレたち3人は浮きまくりだ。

「ここ、俗に言うメイドカフェぢゃねぇ～？」

宮さんがタバコの煙で目をシバシバさせながら言った。

「帰りましょ」

「まあ、待て。とりあえず社会見学だ。こんな珍しい所、オレらのキャラじゃ滅多に来れない」

席を立とうとする竜崎を、何とか留めようとする宮さん。

「オモシロそうじゃん。せっかくだからゆっくりしてこうゼ」

オレも宮さんの意見に賛同してみた。

店内を見渡す限り、１０名近くのメイドが調理や接客をしている。

世の中不景気不景気言ってるが、景気がイイ所はいくらでもある。

しかもココは超好景気だ。

「コレでメイドさんを呼ぶの？」

チリンチリ～ン

竜崎がベルを鳴らした。

「まだ決まってねぇ～って！」

「竜ちゃん勝手に鳴らすなよ～」

「オレ、ただ持ち上げただけっスから」

どっから見てもヤンキー３人組がメイドカフェでアタフタしてる姿

は、通い慣れた常連さん方の目には一体どう映るのだろうか・・・・。

そうこうしてる内に、一人のメイドがやってきた。

「お待たせしましたぁ～～～～って、どうしてアンタらがココにいるのよっ！！！」

ユ、ユイーーーーーーーーーーーー！

な、なぜにココにいるぅ～～～～！！

上品な質感の黒いワンピースに、かわいらしいフリルの付いた白いエプロンを組み合わせたエプロンドレス。

同じく白いフリルの付いたカチューシャ。

まさにメイド服。

メイド服に身を包んだユイが、オーダーをとりにきたのが偶然にもオレたちの席だったようだが、オレたちはそんな光景が頭で処理できず、しばらく固まってしまった。

オレの頭の中では様々なキーワードが飛び交った。

ユイ？　バイト？　メイドカフェ？

前回のバイト先のＢＡＲがクビになったから今度は喫茶店？

そういえば学校で佐倉が「ユイはやりたいのとかないの？　ホラ、メイド喫茶とかさ？　ねぇ、メイド服、着てみたくない？！」って聞いた時「アタシは遠慮しとく。いつでも着れるから・・・」って言ってたのはコレの事？

・・・と、その時！

「コラ、雫（しずく）～～～！！　あんなにコイツらには口が裂けても絶対言うなって言ったのにぃ～～～！！」

へ？　雫？！　雫って、もしかして・・・

「え～～～？？　私ホントに知らないですぅ～。アレ～？　竜崎君に宮先輩に、え～～～っと・・・」

「ジオン」

「そうそう、ジオンさん。どうしてココに？」

それはこっちのセリフだ！

それになぜオレの名を忘れる。

少なくともここに居る中では一番覚えやすい名前だと思うんだが、そう思うのはオレだけか？

「朝露(あさつゆ)？　こんなトコでバイト始めたのか？」

「こんなトコで悪かったわねぇ～」

竜崎の朝露さんに対する問いに、ユイがツッコむ。

「ユイさんをムリに誘ったのは私なの。一人じゃ心細かったし、この間の件でユイさんにはお詫びがしたかったから。ちょうど私が面接受かった時、店長に、友達にカワイイ人いない？って聞かれて、私より全然カワイイ人いますよ～って話したら、すぐ紹介して欲しいって。ユイさん店長との対面だけで即採用が決まって、トントン拍子に・・・」

朝露さんの弁解？

「いつからやってんの？」

「一昨日(おととい)のオープンからよ」

オレの問いにユイがふてくされながら答えた。

「か、かわいいよ2人とも・・・」

唐突に、今現在意味不明的な事を切り出す宮さん。

「アタシはただ、時給が他より高めだったし、雫がムリにアタシを誘うから、ホント仕方なく・・・」

ユイが何やらいいわけを始めた。
宮さんに褒められたせいか、目の下をほんのりピンク色になんぞ染めやがって、全くもってユイらしくない。
その直後、
「アンタら、また喧嘩とかしたら、マジ許さないから・・・」
ユイが凄い睨みをきかせながら、ドスのきいた脅し口調で言った。
「ないないないない」
オレたちは完全否定した。
平和主義者のオタクの聖地で喧嘩はマジ有り得ない。
チリンチリ〜ンと入口の鈴が鳴り、また新たな客が着ぐるみに招かれた。
「こちらへどうぞ、だニャ〜」
2人のヤンキー女子高生が、オレたちの席の前を通り過ぎる。
「ねぇ、アレじゃない？」
前髪を赤い花の飾りピンでとめた女がユイを指差した。

「そうかも」

その後ろを歩くロングヘアーの女が振り向いて言った。

短いスカートにルーズソックス。

制服を見る限り、どうやら吉岡の生徒のようだ。

物見（ものみ）していたその内の一人が、ケータイをユイに向けると、だしぬけにシャッターをきった。

「あ〜、もしもし〜、アタシ。ウン、多分間違いない。そこにマヤいるんだよね？　今、写メ送るから、確認取れたらすぐ返事ちょ〜だい。アタシから直接（ひまる）日丸さんに連絡するから」

第77話　ユイはツンデレの名に相応しい？

撮ったよね、今、絶対ユイの事、撮ったよね？

他校の女子の間でユイは人気でもあるのか？　それとも単なるメイドに憧れる女子高生だったのか？　メイドの研究とか、メイドカフェを渡り歩いてるサークルの人とか・・・？

「アンタたち、いい加減注文まだぁ～？」

「はいはい、え～～～と、竜ちゃんはちなみに何？」

「オレ、このアイスティー。宮さんこの何とかパフェにして下さい」

「コレって何？　愛情たっぷりパフェって書いてあるけど」

「それは、メイドさんがお口に、あ～～～んって、一口食べさせてくれるサービスですぅ～」

「アブネぇ～、竜ちゃんにハメられるトコだったゼ」

みんなメニューに気を取られて、どうやらユイが写真を撮られた事に気付かなかったらしい。

もちろんユイ本人も気付いていない。

こ～いう所って、写真とか普通なのかな？　オレじゃねぇ～し、ま、いっか。

オレも記念にユイのメイド姿でも写真に収めておこうかな？　ユイの弱みを握る絶好のチャンスでもあるな？　切り札として、ユイに脅された時に重宝しそうだ。

「なぁユイ、写真撮らせて！」

「ジオン。寝言は寝てから言え！！」

おいおいおいおい、コレだよ。

ツンデレだよ、ツンデレ。

いや、デレ～ってのはユイに限って有り得ない。

ツンだよツン。

ツンツン。

結局さんざん迷った挙句、宮さんはプリプリプリン（ただの手作りプリンらしい）５４０円、竜崎は愛すティー（メイドがストローで最初の一口目だけ飲ませてくれるサービス付きだが、竜崎は断固拒否）５５０円。

そしてオレは、どんだけーキとコーヒーセット（日替わりケーキと

コーヒーのお得なセット）６８０円を注文した。

「いやいやいや、ビックリしたねぇ～。まさか、あの２人にこんなトコで会うとは・・・」

額の汗と共に、顔をおしぼりで拭きながら、宮さんが驚きを隠せない表情を見せた。

「宮さん、話は変わるっスけど、野牛とは今ど～なってんスか？」

そうそう、オレも竜崎と同じ意見。

「吉岡との関係は何となく良好だってのは分かるんですけど、野牛とは一体どうなってんのかオレも知りたいトコロです。あと、武蔵の今のレベルとか、宮さんがどうして総番長なのか、とか・・・」

どさくさに紛れて、オレは今まで聞けなかった事をピックアップしてみた。

「２人はそんなの知らなくてい～よ」

なぜに？

「１年も２年も２人がちゃ～んとまとめてくれてる。それだけで大変でしょ？　他んトコとかはオレが上手くやってっから、竜ちゃんも亀ちゃんも心配いらないよ」

いや、竜崎は分からんが、オレは2年をまとめた覚えはない。

「宮さん、そうはいかないっス。心配っス」

竜崎が一蹴（いっしゅう）。

「ホント心配いらないって。2人には余計な心配掛けさせたくないから、マジで」

宮さん、ど〜してそんなに頑（かたく）なに拒（こば）むの？

武蔵を取り巻く不良に敏感なオッキーも、吉岡の番長、大橋剛太を知ってるくらいで、野牛の番長、長須の顔すら知らねぇ〜し。

あのテルだって宮さんとは挨拶程度だったみたいだし、タカノブ、貴船、芒の3人も宮さんとは何の関わりもなさそうだ。

総番長って言うくらいだから、沢山の子分を率いてんのかと思ったけど、どうやら一匹狼みたいだし。

「宮さん分かった！　面倒なんでしょ？　人付き合い」

どうだ？　的中だろ、宮さん。

「分かる？」

分かるさ、人間関係にドライなB型特有の、イチイチ理由を話すのもめんどクサってヤツでしょ、ど〜せ。

「面倒くさいでしょうけど、そもそもの始まりを教えて下さい」

竜崎のいつになく真剣な眼差しに根負けした宮さんは、タバコの煙を大きく吐くと、淡々と事の始まりを語り出した。

「そう、あれは・・・」

オレもタバコに火を着けて、本格的に話を聞く体勢に入った。

第７８話　総番長の誕生秘話

「まぁ、今じゃ想像できないくらい、昔の宮さんは相当なワルでしたよ」

竜崎が豪語する。

今でもはたから見たらヤバイくらいの超不良なのに、昔はもっとあぶなかったってか？　一体どんだけだよ！

「秋鹿は今ほどワルじゃなかった。オレは途中までずっと柔道やってて、ある時腰痛めて出来なくなってから、狂ったように喧嘩に明け暮れてた。仲村シンとは意気投合して、２人で他の中学に乗り込んだりしたっけ。そこで争ったのが、今の野牛の番長、長須光雄だ」

出たよ、ビッグネームの数々。

武蔵の総番長、宮大地。

吉岡のナンバー２、秋鹿準。

野牛のナンバー２、仲村シン。

そして当時の宮さんの舎弟が、今の笹商のトップ、ライトフライ級の織川。

錚錚（そうそう）たるメンバーだな、こりゃ。

そんな４人が同じ中学だったってんだから、天の悪戯とでも言うべきか、時に出会いの運命や縁ってのは恐ろしさすら感じさせるゼ。

「野牛の長須。オレも名前くらいは知ってるっス」

竜崎も知ってる長須光雄、一体どれほどの怪物なのだろうか・・・・。

「中学卒業して、オレは武蔵高校、仲村は野牛農業、秋鹿は吉岡工業、織川は笹城商業、当時のダチはみんなバラバラになった。仲村は野牛のトップを目指すのかと思いきや、長須と協定を結び、お陰で中学時代の長須との戦争は、和平という運びになった」

和平という運び・・・、そんな聞き慣れない言葉を平気で使用する宮さんに、Ｂ型の特性である、話にユーモアを織り交ぜるセンスを感じた。

「結局、長須と仲村は、利害抜きでお互いがトップを目指すという野望を叶える為に、一時的に異色タッグを組んで１年をシメた。だが、所詮コップの中の嵐。すぐに大海の渦が押し寄せた。野牛と吉岡、武蔵の３つの学校は、当時戦争が絶えなかった。野牛の１年をシメた２人が、そんな戦火に巻き込まれないワケがない」

戦争？　おお、怖い。

オレたちは、何て平和な時代に生きてるんだろう・・・。

「そんなムダな戦争時代を終わらせる為に、ウチの学校の、当時の2年と3年を力づくで黙らせ、オレは武蔵の番長になった。番長になっちまえば、後は自分の首さえ守ればいいだけだからラクだと思ったんだ。あの頃は毎日が血だらけで、地獄のような修羅場の連続だったなぁ～。ガッハッハッハ」

お、恐ろしい、耳に入れるだけでも恐ろしい話だ。

「そん時に、野牛の長須と仲村、吉岡の大橋とは仲良くなった。アイツらは自分トコの先輩らの顔を立てて番長の座を当時の3年とかに譲ろうとしてたけど、結局1年で野牛の番長、長須光雄と、吉岡の番長、大橋剛太が誕生した」

凄ぇ～、3校とも、番長は1年が務めたって事か?!

結局、野牛の長須も吉岡の大橋も、宮さんの決起に賛同したカタチだったんだろうな・・・。

そんで戦争が終結した時、文句なく宮さんを総番長に任命したんだ。

それから3年、政権交代もなく、今があるってワケか・・・・・・。

「じゃあ、この間のＢＡＲで会った野牛退学組がいくらほざいた所で、彼らに対する絶大なる信頼は揺るがないワケですな・・・」

オレは野牛退学組の、長須も仲村も内心宮さんにムカついてる発言を思い出しながら訊いた。

「そりゃ～もちろんね。アイツらのハッタリだって事くらい、オレだってお見通しさ」

テーブルに１０分ほど前に注文した品々が並んだ頃、オレはこの辺の主な高校を思い浮かべていた。

宝蔵学院は問題ナシ。

塚原学園も上泉学園もヤンキーは皆無に等しく、絡む気ゼロ。

吉岡は大橋が、笹商は織川が上手くまとめてるし、後は宮さんが近々野牛の長須や仲村と会ってコミュニケーションを深めれば、問題ナッシングだ。

「だいたい話は分かったっス。後は、さっきジオンさんが知りたがってた、武蔵の現段階でのレベル、オレも知りたいっス」

竜崎が注文した愛すティーのグラスがハート型なので、宮さんはそればっかり気にしてしまい、「え？　何だって？」と2回くらい質問を聞き返した。

武蔵のレベル、ハッキリ言ってオレは、宮さんだけが飛び抜けて強いんだと思う。

後は特に去年なんかもそうだが、ウチの学校で大きな喧嘩の話なんかも聞いた事がない。

1年は竜崎がシメた段階でまとまりがなくなってるし、2年はオレがトップなんて言われてる時点で終わってるし、3年で名前や顔が売れてるヤツは宮さん以外見たことない。

・・・もし、宮さんが学校辞めたりしたら、あっと言う間に武蔵は他の学校に潰されるんだろうな。

「武蔵のレベルねぇ～」

宮さんは考え込んでしまった。

「ハッキリ言って下さい。吉岡や野牛より下なんでしょ？　ただ、他校になめられないのは、宮さんが総番長として君臨してるからっスよね」

オレも竜崎の言う通りだと思う。

吉岡はウチより圧倒的に不良の数は多いし、野牛はケタ違い。

もし戦争なんかになったら、ひとたまりもない。

「オレが心配してんのは、もし宮さんがいなくなったら、武蔵は大丈夫なのかって事」

「そうそうそうそう」

竜崎の尤(もっと)もな意見にオレも数回頷いた。

「大丈夫だヨン。オレ、絶対学校辞めないから」

「いやいやいやいや、そうじゃなくって、来年とか再来年とかの話ですよ」

オレは思わず、間髪居れずツッコんでしまった。

「・・・・・・・・・・」

黙り込む宮さん。

「ジオンさん。来年もし、ウチが他校に戦争とか仕掛けられても、オレは無視するっスよ。喧嘩とか戦争とか興味ないし。ましてや番長とか、そういうの嫌いなんで・・・」

相変わらず遠慮ない竜崎。

宮さんが目の前に居るっつ～のに・・・。

確かにオレも、宮さんの後釜頼まれても、丁重にお断りする予定だ。

だって、今時番長だなんて、古くさいって言うか、何かヤダ。

「オレは、卒業しても亀ちゃんがいるからウチは安泰(あんたい)だって思って

たんだよ。その後には竜ちゃんも控えてるし、オレは気持ちよく2人に後釜を引き渡そうと・・・」

「迷惑っス」

オレも同意見だが、竜崎ほどハッキリは言えねぇ～なぁ～、ははは・・・。

「宮さんら3年が卒業した時点で、昔の戦争時代を知るヤツもいなくなるワケじゃないですか。だったら、オレらの時代で、平和って言う名の新時代を築けばいいワケですよね？」

「亀ちゃんの言う通り。オレらで番長時代は終わらせるから、新しい時代は戦争も喧嘩もない、平和な時代を作ってほしいと切に願うよ」

「ホントっスかぁ～？　たった今、思いついたくせに～」

竜崎が宮さんをからかった。

でも、何となく明るい未来が見えてきたような気がした。

今までは、総番長という大きな壁に守られていたけど、それが無くなった時の不安がどこかしらにあった。

そんな不安な気持ちが、スーッと消えていくようなカンジがした。

「おっ、コレ、なかなかイケル」

宮さんはプリプリプリンを絶賛している。

「それ、量、多いっスね」

竜崎に笑われたオレのどんだけーキは、誕生日のホールケーキ並みのデカさだ。

「しかも生クリーム少量で、ほとんどスポンジ。ケーキっつ〜よりカステラだから！！」

「ガッハッハッハッハ」

「あっはっはっはっは」

オレたちはどんだけーキのカステラネタで数分爆笑した。

そんな楽しい一時も、長くは続かなかった。

まさかこの後、あんな大事件が勃発するなんて・・・・・・・・・・・・・。

第７９話　水兵の制服をモチーフに

野牛関連の事件は、ロクでもない噂ばかりだ。

喧嘩や万引きは当然だし、集団暴行や監禁事件なんかも記憶に新しい。

もちろん警察沙汰になる事件もあるが、それは氷山の一角。

ほとんどは影で行われる。

少数ではあるが、野牛には女子生徒もいる。

そんな女子の悪事ったらない。

とても口に出せないほど悪質な事件の話は後を絶たない。

陰湿さは男顔負けだ。

そんなワル揃いの野牛には、女番長、通称スケバンがいるというから驚きだ。

一度どんなヤツが番を張っているのか生で見てみたいモンだ。

・・・なんて思った矢先。

ガッチャーーーーーーーーン

それはそれは物凄い裂帛音だった。

どうやら店の入口扉のガラスが割れたらしい。

店内からは多数の悲鳴があがった。

とっさにオレたちは、音のした方へダッシュした。

「コレが原因か？」

転がった消火器をいち早く見つけた宮さんは、他に原因がないか調べ出した。

「こりゃ～、酷い・・・」

竜崎は散乱したガラスの破片を見て、普段見せない切なそうな表情を一瞬見せたが、錯乱するメイドたちを目の当たりにして、彼女たちを落ち着かせるのに一役買った。

案の定、しっかり者のユイは、あたふたする朝露さんに渇を入れつつ、他の仲間たちに色々と指示を出している。

どうやら店長は不在のようで、どう対処すべきか指示を仰ごうにも、ケータイが繋がらないらしい。

そんなとんでもない惨事の中、その光景を見てニヤニヤと不適な笑みを溢す2人組が視界に入った。

例の、ユイの写真をケータイで撮った、吉岡のヤンキー女子高生たちだ。

前髪を赤い花の飾りピンでとめた女と目が合った瞬間、

「なんだよコレ～、入れねぇ～よ」

入口方面から女の声がした。

声のした方を見ると、セーラー服を着た女子高生が一人、割れたガラス扉の向こうからこっちを見ている。

その後ろの階段から、次々とセーラー服の女が姿を現した。

セーラー服、コスプレ？　いや、違う、間違いなくあの服は、野牛の制服！！

なぜ、こんなトコロに野牛が？！

その中の一人が中を覗き込んだ。

「あっ、いたぞアイツら。お〜い」

野牛の女の一人が手を振ると、店内の吉岡ヤンキー2人組が手招きした。

アイツらの、知り合い？

「いらっしゃい、ニャ〜」

ガラスの破片をブチブチ踏みながら、ネコの着ぐるみ店員が慌てて走ってきた。

野牛の女たちを店内に案内しようとすると、

「ふざけんなよ、テメ〜。こんなガラスの破片ばっかのトコ、歩けっかよ」

野牛の女の一人が着ぐるみ店員に講義した。

「ゴメンなさいニャ〜」

「早く片付けろ、ボケ」

「ニャッ」

何と、その女は、着ぐるみ店員の背中を足蹴にした。

「申し訳ございません。すぐに片付けますので」

数名のメイドが、箒（ほうき）と塵取（ちりとり）を持って走ってきた。

野牛の女子生徒は全部で5人。

店の玄関先で横一列になり、ガラスの破片の掃除が終わるのを睨みつけながら待っている。

どいつもこいつも只者じゃないのは一目瞭然なのだが、中でも真ん中で腕を組んでいる女は特殊だ。

一人だけマスクをしているから目立つのは当然なのだが、目つきや雰囲気、スカートの長さ（特注の制服と思われる）を見る限り、コイツがこの中のボス的存在だろう。

コイツらがココに来た時点で、楽しい不思議の国の雰囲気が丸潰れ・・・・その位、コイツらの発するオーラは強烈だ。

・・・と、その時、よりにもよって朝露さんの箒が、一人の女にぶつかった。

しかも柄（え）の角（かど）が、鼻の辺りに直撃である。

ドジっ毛がありそうなのは何となく知っていたが、まさかこんな時に本領発揮する事ないのに・・・。

「貴様～～～～！！」

「ごめんなさい～～～」

鼻を叩かれて涙目の女は、朝露さんの髪の毛を両手で掴むと、力いっぱい振り回しだした。

さすがにそれは黙って見過ごすワケにはいかない。

オレと竜崎と宮さんが足を踏み出した瞬間・・・！

目の前にユイが立ち塞がった。

行動は勇ましくカッコイイが、背中の結び目は、メイド服のオチャメさを醸(かも)し出している。

「日丸(ひまる)さん、コイツ・・・・・」

「ああ、分かってるよ」

日丸と呼ばれた、ボス的女がユイと対峙した。

今にもブチキレそうな宮さんが躍り出そうな雰囲気だが、竜崎の右手が宮さんの行く手を遮(さえぎ)り、それを制止した。

宮さんの気持ちはオレにも良く分かるが、ここはユイに任せるしかない。

いつの間にか後ろには吉岡のヤンキー2人組が腕を組んで立ち塞がっている。

・・・・オレたちは囲まれていた。

第８０話　ミ・ケ・コ

髪を掴まれて振り回された朝露さんは、泣きべそをかきながら騒然とするメイドたちの中へ逃げ込んだ。

オレたちはというと、野牛の女子生徒５人と、吉岡のヤンキー女子高生２人に囲まれたカタチだ。

ブチキレ寸前の宮さんを、冷静に制止する竜崎。

その隣で、この掴みがたい状況を何とか把握しようと、目の前の光景を必死に分析してるオレ・・・・・。

メイド服のユイとセーラー服の日丸と呼ばれた女は、お互いに威圧的なオーラを放ちながら睨み合いをしている。

「アンタ度胸あるねぇ～。だけどね、その命知らずな向う見ずの態度や行動が、自分の寿命を縮める結果に結びつくんだよ。それを今からアンタにたっぷり教え込んでやるよ」

日丸と呼ばれたボス的女が、挑発というより脅し文句を吐いた。

どうする、ユイ。

「お客様方は、ここは不似合いかと存じます。今すぐ回れ右して帰っていただけませんか？」

さ、さすがだ。

ユイのヤツ、野牛相手に全く臆す気配がない。

「テメ～、この方を誰だと思ってんだコノ～」

ボス的女の後ろから、そんな声が飛んだが、ユイは微動だにしない。

「このお方はなぁ～、野牛のスケバン、日丸ミケコ様だぞぉ～～～～！！」

ミ・ケ・コ？

そのインパクトのある名前、どっかで・・・？

・・・それより、野牛のスケバンだってぇ～～～？！

宮さんも竜崎も、スケバンという言葉を聞いて動揺を隠せないでいる。

もちろんオレの頭の中は、いつ真っ白になってもおかしくない。

できればココをスタコラサッサと逃げ去りたい気分だ。
目の前のユイが修羅場だってのに、それを助けるどころか、何も出来ない自分が情けない。

「肩書きが何であれ、お客様方を店内に入れるワケにはいきません。このままお引取りを・・・」

ユイは主張を曲げるつもりはないようだ。

「何を～～～?!　テメ～、客に向かって何だその態度はぁ～～～!!」

ミケコの後ろから、発狂寸前の声が飛んできた。

「ここは健全な優良庶民の為の、優良なメイドカフェ。不適切な人は店内に入る資格はないって言ってるんです。暴力、建造物損壊・・・」

ユイは転がった消火器を見ながら言った。

「貴様・・・・、このガラスを割ったのを、ウチらのせいにしようってのか?」

ミケコの後ろから、怒り震える声が聞こえた。

「この消火器を投げつけた犯人を見た目撃者が、こっちには数名います」

ユイは、こっちを怯えた目で見るメイドたちを見ながら言った。

「日丸さん・・・」

「フン、ど～って事ないよ。見たってだけで、証拠がないじゃん」

ミケコはシラをきるつもりらしいが、ユイの言葉を聞く限り、コイツらがガラスを割ったのは明白な事実のようだ。

「これ以上話をするつもりはございません。今すぐお引取りを。それが出来ないのであれば、警察を呼びますよ」

ユイの毅然（きぜん）とした態度に、野牛の女たちは口元を歪めて笑い出した。

コイツらはユイが言ってる事を冗談だと思ってるのだろうか？

自分らはオフザケのつもりかもしれないが、やってる事は犯罪以外の何物でもない。

これ以上事態が悪化する前に、マジで警察に通報した方がいいのでは・・・？

「アタシがココに来た理由をハッキリ述べてやるよ」

ミケコがユイを下から覗き込むように睨みつけながら言った。

「マヤの敵討ちだよ。マヤはアタシの大切なダチ。ダチがやられたって聞いて、野牛のスケバンやってるアタシがそれを黙って見過ごせるか？　マヤはもう済んだ事だから、いいって言うんだよ。そんなセリフ聞いて、アタシは余計腹が立ったよ。マヤをやったアンタにね・・・」

マヤ・・・？　何のこっちゃ・・・。

「マヤって誰？」

ユイが困った顔をしている。

その時、吉岡のヤンキー女子高生の一人が言った。

「日丸さん、そいつでマジ、間違いないっすから。マヤと今一緒にいるダチ公んトコに、そいつの写メ送ったら、マヤが間違いないって言ってたらしいんで」

「マヤはカラオケでアンタにやられてから、ずっとその事をアタシに黙ってたんだよ。アタシに迷惑掛けたくないって思ったんだろうね。アタシは、そんなマヤのやりきれない思いを想像すると、腸が煮えくり返るんだよ・・・」

カラオケ？　もしや、あの時の・・・？

「マヤって、もしかして、上木(かみき)マヤ？」

ユイが思い出したように言った。

「アタシの、小学校からの、大切なダチだ」

上木・・・！！

オレはその時、カラオケでのひとコマを思い出した。

『何コレ～、超、ダサイんですけどぉ～～～』

オレに背を向けて、テーブルの上に腰を掛けて足を組み、ケータイをいじっていた女が、比較的早口で言った。

『どれ？』

ソファーに深々と腰掛けていた長山が、身を乗り出して女のケータイを覗き込んだ。

『クァ～ッ、ぶっさいくだなぁ～～』

長山のひん曲がった顔を見て、子分たちが声を出して愛想笑いをした。

『ミケコのカ・レ・シ。新しい彼氏。超・・・ダサくね？』

女の一言で、長山は足をバタつかせて笑っている・・・・・・・・・・・・。

あの時、確かに上木は言っていた。

ミ・ケ・コ。

ユイと今対峙しているマスクの女は、野牛のスケバン、日丸ミケコ。

点と点が線で結ばれた気がした。

第８１話　聴牌（テンパイ）

「残念だけど、アタシは何も悪い事してないからね。あの上木って人がアタシを突然蹴ってきたから、アタシはその足をとっさに掴んで投げただけ。ホントそれだけだから。ただの正当防衛だし。先に手を出したのはあっちだし、それを知ってるからあの人も、そんなクダラナイ事わざわざダチのアンタに言わなかったんじゃない？」

ユイが正論を述べている。

まさにその通りで、１００％ユイに非はないと、オレは断言できる。

「何ワケわかんねぇ～事ぬかしてんだテメ～。オモテに出ろコノ～！！」

ミケコの後ろから、キレかかった女の声が飛んだ。

「オイ、野牛のネェ～ちゃんたち、悪ぃ～けどホントにこの人、正当防衛だから。オレが保証する」

宮さんが、とうとう口を出した。

「宮さん、コレはアタシの・・・」

「分かってるって。でも、コイツらいくら言っても理屈じゃ分かんねぇ～って」

「宮だとぉ～？　宮って、もしかして武蔵の総番長の宮大地かぁ～？」

野牛の女の一人が、宮さんの正体に気付いたようだ。

「へ～、この人が宮大地・・・・・」

その時、ミケコが不気味な笑みを浮かべたのを、オレは見逃さなかった。

「オレは武蔵の宮大地。ここは、オレの顔に免じて退いてもらいたい。アンタがホントに野牛のスケバンだったら話は早いはずだ。オレは野牛の番長、長須光雄とはマブダチだし、仲村シンとも付き合いは長い。もちろん吉岡の大橋剛太ともな」

宮さんは野牛の女子生徒だけじゃなく、背後の吉岡のヤンキー女子高生にも目配りして言った。

こんな時の宮さんの肩書き、やっぱ超役立つよなぁ～、なんて思ってたら、ミケコがとんでもない事を口走った。

「あっそ。だから、何？　総番長だか何だか分かんねぇ～けど、そ

んなのアンタら男が勝手にやってる話だろ？　コレはアタシと、このユイって女との問題だから、カンケーねぇ～ヤツは黙ってろって！！」

ミケコのとんでもない発言に、宮さんの青スジがブチキレ寸前だ。

「宮さんがキレたって始まんないっしょ。コイツらの挑発？　脅し？　そんなのに乗ってど～すんスか。総番長なら、もっとデンと構えてて下さい」

竜崎がいつものポーカーフェイスで宮さんを宥めた。

常に冷静さを保てる竜崎の感情に、さすがのオレも感服する。

さてさて、事態は悪化を辿る一方だぞ。

今後の展開が、全く予想できないし・・・。

オレは一体、ど～すりゃいいんだ？

ヘタに宮さんを焚きつければ、野牛ＶＳ武蔵の戦争に成りかねない。

かと言って、ユイが連れて行かれるのを黙って見てるワケにはいかない。

何としても、ここはユイを守りたい。

しょ～がねぇ～、ここはオレが人肌脱ぐか・・・・・。

「オレが詫(わ)びを入れたら、引き下がってくれるか？」

オレは土下座も辞さない勢いでユイの前に出た。

「ジオンは引っ込んでてよ」

即、ユイに追いやられた。

オレ、今、超カッコ悪くねぇ～か？

「ふ、ふざけんなよ、ユイ」

気がつくとオレは、またしてもユイの前に出ていた。

何がしたいんだ、オレ？

「何なんだよテメ～はよぉ～。カンケ～ねぇ～雑魚(ザコ)は引っ込んでろって」

ミケコの後ろから、オレに対する非難の声が飛んできた。

雑魚は酷いよ、雑魚は・・・・・。

「オマエ、血液型、何型だよ？」

何言ってんだ、オレ・・・・・？

オレは無意識でミケコに血液型を聞いていた。

そんなオレの、荒唐無稽なテンパった質問が、まさか局面を大きく変える事になるとは思いもしなかった。

「O型だよ」

知らないヤツからのいきなりの質問に、ミケコも無意識で、反射的に答えてしまったのだろう。

ミケコはO型だったようだ。

そんな、一般的にはくだらない事柄を知ってから、間もなく・・・・・、

雄大かつ剛健な、浩然の気が沸々（ふつふつ）と沸いてきた。

行ないが道義心に基づいた時に、自然に湧き出る屈託ない心ってヤツだ。

オレの得意分野は自他共に認める、血液型での心理戦。

敵の大将の血液型を知った今、コイツらはオレの手の平にいるも同然。

オレの導火線に火がついた。

第８２話　紳士的に且つ合理的に

奴さん（Ｏ型）はその場の喧嘩は絶対に退かない為、こっちは決して喧嘩腰になってはイケナイ。

あくまで紳士的に、しかもそっちの味方を装うのが合理的。

まずはミケコを優越感に浸らせるべく、オレは先手をうった。

「あの野牛でトップを張るとは、只者ではないな・・・」

突然のオレの褒め言葉に、ミケコは薄い眉毛を捻らせた。

「おっと、オレは別に怪しい者じゃないぜ。この人たちの仲間でもないし、ただ、たまたま一人でココに遊びに来たら、偶然同級生のユイに会っただけで、マジでオレはコイツらとは関係ねぇ～し」

そして中立を強調。

オレの作戦通り、ミケコたちは困惑の表情を浮かべている。

今の段階でのオレの目的は、コイツらの興奮を抑える事。

一先ずそれは達成。

・・・しかし、すぐに問題は発生する。

ホラ、案の定、ユイが今にもオレに突っ掛かってきそうな雰囲気。

竜崎はオレの言葉を感慨深げに受け止め、意味する所を考慮してくれてるようだから後で対処するとして、その隣の宮さんが問題だ。

信じてたオレに裏切られたとでも言いたげに、ポカンと口を開け、目を丸くして静止状態だ。

そしてもう一点。

吉岡ヤンキー2人組は、ココに入店時にオレと竜崎と宮さんとユイが一緒にいる所を見ている。

オレがいくらコイツらとは仲間じゃないと主張しても、にわかに信じ難いはず。

さて・・・・・。

オレはチラリと吉岡ヤンキー2人組の表情を窺(うかが)った。

ラッキー。

ヤツらの目的は元々ユイっぽいから、オレなんて眼中になくて当たり前。

あの表情を見る限り、オレを疑ってるようには見えない。

大方、オレたちのテーブルを横切った際、オレなど全く視界に入らなかったのだろう。

入ってたとしても、背景ってトコロか。

吉岡ヤンキー2人組は、ミケコより立場は下なのは明白。

日丸ミケコに対して敬語、プラス、さん付け。

それに、上木は秋鹿の事を、確か「アキガ先輩」と呼んでいた、イコール、上木は秋鹿より年下。

吉岡ヤンキー2人組は、上木をマヤと名前で呼び捨て、イコール、同級生の可能性大。

つまり、ミケコと上木は、仲の良い先輩後輩のダチ同士。

上木がこの間のカラオケでの件を、ここだけの話&内緒話的に同級生の、吉岡ヤンキー2人組に話した所、表面だけ聞いて誤解した2人が、ミケコに報告。

大切なダチがやられたと勘違いしたミケコは、吉岡ヤンキー2人組に犯人を探させ、ユイを突き止め今に至る・・・・ってのが、おそらく今回の事件の全貌(ぜんぼう)だろう。

吉岡ヤンキー2人組はミケコより立場は下。

オレを敵でもなく味方でもなく、ただしゃしゃり出てきた変なヤツとして見ている。

その2点を元に推測する限り、この2人はオレとミケコとのやり取りに口出しするとは思えない。

そして、オレと対峙してる野牛のヤンキー女子生徒5人組は、スケバンのミケコをボスとして、バックに4人。

この4人は間違いなくミケコの手下。

長山の時もそうだったが、O型の組織の統率力、牛耳る力は見張るものがある。

さっきまでのコイツらの会話を聞く限り、ミケコの発言力、権力は絶対と見た。

ミケコは目の前のオレの目を見て視線を外そうとはしない。

どうやら警戒心も重なり、O型特有の、その場の喧嘩で一歩も退けない状態にいるようだ。

ミケコはオレを睨みつけ、オレはミケコを紳士的に見つめている。

この状況から予測する限り、ミケコと対峙してたユイは、ミケコから視線を外され、少々拍子抜けしている。

無視されるのが大嫌いなB型だけに、獲物をオレに取られたような不快さと、敵を見失いそうな複雑な思いが交差し、ミケコよりオレへの嫌悪感が増している事だろう・・・。

そうなってくれれば、オレの計算通りの展開になる。

ユイがオレへの嫌悪感を、B型特有の分かり易い表情や態度で表してくれればくれるほど、オレの「マジでオレはコイツらとは関係ねぇ〜し」発言が、信憑性を高める結果になる。

そして忘れてはならない、もう一人のB型、宮さん。

宮さんはユイ以上に表面で物事を判断するし、感情も露骨で行動も大胆、まさに典型的B型。

そんな一直線の宮さんに、今この状況で、オレのとってる言動はアドリブに見えるだろうけど、ホントは全部が計算通りの作戦なんだよ〜って、口に出さずに伝えるのは、エスパーのテレパシーでもない限り無理だ。

ここは、竜崎に賭けるしかない。

・・・頼む、竜崎、オレの真意を受け取ってくれ。

宮さんを、どうにかそのまま抑えといてくれ。

できればユイも。

竜崎はO型、しかも、人に裏切られるのが大嫌いだと以前言っていた。

裏切られるのが大嫌いなだけに、人を見る目は確かだと思いたい。

オレを信じろ、竜崎。

オレが今のような状況で、一人だけ逃げる為に、仲間を裏切るような行動を取るワケねぇ～だろ！

オレは精一杯の思いを心に込めて、竜崎にアイコンタクトを送った。

微かに竜崎が頷(うなづ)いたような気がした。

よしっ！！

あのオレを見通すような目と、口元の軽い笑みを見る限り、何となくオレの真意を受け取ってくれたようだ。

任せたぞ、竜崎。

第８３話　仲間だから

本来Ｏ型相手の場合、こっちには強力なバックがいるとか嘯(うそぶ)いて怯(ひる)ませた方が、今後の展開的に効率が良くスムーズなのだが、コイツが宮さんにビビらない以上、ハッタリは危険と判断した。

ミケコの自信と態度を見る限り、総番長をも凌(しの)ぐバックがいる可能性は高い。

ここはこれ以上コイツらとはかかわらないように進めていきたい。

「このユイがさっき言ったように、上木って人は、ユイに攻撃して自爆したって捉(とら)えるのが一般的だと思うんだ。スケバンさんの事、上木って人は大切なダチだって思ってるんですよね？」

あえてオレは質問的に言った。

予想通りミケコはオレの質問に答えようとしないので、オレは続けた。

「本来、大切なダチになら、悔しい思いをしたら確実に伝えるはずですよ。しかもスケバンさんですよ。野牛のスケバンですよ。最強ですよ、最強。こんなヒヨっ子に怯えて報告できないワケない」

オレが指差したユイは、今にも爆発しそうなほど怒りを溜めているのが、真っ赤な表情で読み取れる。

それは宮さんも同じだ。

今にもオレに講義しそうなユイと宮さんを、竜崎が交互に警戒している。

オレはユイと宮さんのB型コンビの暴走阻止を、引き続き、暗黙の了解で竜崎に託した。

オレは今度は朝露さんを指差した。

「向こうに非があるとはいえ、所詮あのコはまだ子供。オープン間もないメイドカフェのバイトで、しかも中学を卒業したばかりの世間知らずのガキんちょ。鼻を叩かれたお姉さんは、もちろんカワイそうだし痛そうだし何も悪くない。でも、大人として対処してほしかった」

朝露さんに箒で鼻を叩かれた女は、何か言いたげにしてたがオレは言葉を続けた。

「何度も言うようですけど、オレはアンタらの味方だから」

オレはあくまで野牛の味方なんだと強調した。

「でも、もし警察なんぞにチクられたら、非があるのは手を出したアナタ」

オレが指差した、朝露さんに鼻を叩かれた女は、今までオレに対して睨みしかなかったが、ここにきてついに視線を外した。

「もしかすると、このガラスが割れた時点で、何らかの事件だと勘違いしたメイドが、すでに警察に連絡している可能性は高い。・・・って事は、ここに警察が来るのは時間の問題」

野牛の女たちは外を気にしだした。

オレは口調を早めた。

「結局今回の件は、お互いに全くメリットはない。ここはお互いに早急に退くべきだと思う。このユイにはオレからもよ〜く言い聞かせておくし、ウチの総番長にもオレから上手く言っておく」

何かオレ、物凄く態度デカクね？

でも、今更このキャラ止められねぇ〜。

オレは話しを続けた。

「それに、店側から見ても、オレたちは今、揉めてるとしか見えないと思う。それにココの客は、何を考えてるか分からない、得体の知れないオタク系がほとんど。自分らの聖地が汚されたとあっちゃ、もしかしたらヤンキーよりタチが悪いかもしれない。オレたち、ホントは純粋に話し合いをしてるだけなんだが・・・」

一方的にオレが語ってるだけなんだが、オレはコレを話し合いだと

言説（げんせつ）した。

「・・・・・・・・」

相変わらずミケコは、獣のような目でオレを睨みつけている。

オレが語り出してから、一言も発さない。

非常に、不気味だ・・・・・。

その時！！

「マジそろそろヤバくね？」

「早く精算済ましてこようよ」

吉岡のヤンキー２人組は、そそくさと伝票を持ってレジへ向かった。

どうやらオレの警察という言葉に、一番ビビったのはこの２人のようだ。

オレたちがミケコたちから視線を外し、吉岡のヤンキー２人組に気を取られている間、予想だにしない事が起きた。

何と・・・！！

「行くよ」

ミケコはそう言うと、オレたちに何も言わず店から出て行ったのだ。

他の４人もミケコの後を追うように店から姿を消した。

間もなく、吉岡のヤンキー２人組も出て行く。

あっと言う間に嵐が去った。

あの逃げの早さを見る限り、ミケコはずっと帰るタイミングを待っていたのかもしれない。

おそらく、吉岡のヤンキー２人組の精算が、そのキッカケになったのだろう。

被害が最小限に抑えられたのは奇跡としか思えない。

なぜアイツらが、いとも簡単に退却したのかは、全く持って謎だが・・・。

ミケコたちの退散後、店内は徐々に活気が戻ってきた。

小さな溜息を吐いたユイは、オレの顔を見るなり、「・・・ったく、調子いいんだから」と、呆れ顔で言った。

「アレ？　オレが裏切ったのに、怒ってないの？」

あんなにユイを小馬鹿にする態度をとってたのに、ユイは笑顔さえ見せている。

「見え見えよ、アンタの演技」

バレてたか・・・。

「でも、ジオンさんのお陰で、あれ以上揉めずに済みましたからね。被害は大きいかもしれないっスけど、人的被害が少なくて良かったっスね」

竜崎も、もちろんオレの演技を察してくれてたようだ。

一方、宮さんは？

「え？　アレ、演技だったの？」

「当たり前じゃないですかっ！　オレがマジで仲間を裏切ってアイツらに寝返るとでも思ったんですか～？　そのまま一人だけ逃走するとでも？」

「ま、まさか～。亀ちゃんが演技してるって、最初から知ってたさ、ガハハハハ」

・・・・ま、いいや。

オレたちはその後、散乱したガラスの破片の掃除を手伝ったり、朝露さんを慰めたりした。

ユイに「またアンタのせいでバイト、クビになったら洒落にならないから！」なんて皮肉たっぷり言われたが、「今回はオレのせいじゃなくて、自分のせいだろ？」なんて言い返してやった。

・・・が、よく考えてみると、元々上木は長山と現れたワケで、その長山がカラオケに現れたのは、オレが原因。

結局、元々はカンパを回した長山が悪の根源だから、オレもユイも敵が違うのは確かだ。

そんな事を考えてたら、いつの間にか夜になっていた。

「今日はココでメシ食ってくか」

宮さんの一言で、オレたちはメイドカフェで夕飯まで食う事になった。

適当にパスタやピザなんかをたらふく食べ、帰りの精算時。

ユイがレジで一言。

「今日はアタシのおごりだから」

「はい？」

オレたちは自分らの耳を疑った。

野牛のスケバン共を追い払った礼のつもりか？　４０００円近く飲食をしたんだぞ？　ココの時給、１０００円だとしても、今日一日分の給料じゃねぇ～か？！　ふざけんなよ、ユイ。

「オマエのその、浪花節だか何だか分かんねぇ～が、人情くせぇ～のウザイんだよ」

オレはユイのお節介に嫌気がさし、ハッキリと自分の気持ちを言ってやった。

「うるっさいわねぇ～」

「ユイちゃん、悪いけど、ココはオレらに払わせてよ」

宮さんはそう言いながらお金を財布から出し始めた。

一枚、二枚・・・、どう考えても宮さんの出したお金は、割り勘の額より多い。

この人は算数もできないのだろうか？

「そうっスよ。オレらはユイさんにおごってもらう義理がない」

そう言う竜崎は、４千円出した。

「オイ竜崎、それこそオカシイ」

オレは即、竜崎にツッコミを入れつつ、負けじと5千円出した。

そんなオレたちを払いのけ、宮さんは財布ごとレジの前に置いた。

もうワケ分からん。

「アタシに恥かかせないでよ。今日はたまたまアタシのおごりだって言ってんの」

ユイが下向き加減で語り出した。

「次回はアタシがおごってもらうから、今日は素直におごらせなさいよ」

そう言われたらオレたちも返す言葉が見つからない。

オレとユイはお互いを見ずに、ハイタッチで別れた。

竜崎は軽く右手で別れの挨拶をし、宮さんは親指を立ててユイと別れた。

・・・しかし、いつも自分勝手なヤツだ。

お礼のつもりなのか何なのか分かんねぇ～けど、３人分の飲食代、ムリしておごる事ねぇ～のに。

・・・ま、仲間だから、しょうがねぇ～か・・・・・。

第８４話　坊主ライン

なぜにユイが、メイドに扮してまで金を稼ぎたいのかは知らないが、せっかくやり始めたバイトがまたクビになるのではないか？という、一物の不安を隠しきれず、オレは登校早々ユイに状況を聞いた。

「クビ？　冗談じゃないわよ。アタシは何も悪い事してないし。でも、もしバイトがクビになったらアンタのせいだからね！」

ユイのクビは飛ばずに保たれてるのは分かったが、もしクビになったらオレのせいなのは変わらないらしい。

ハイハイ、どうぞご勝手に、人のせいにでも何でもしてくれってカンジだ。

宮さんはあれから野牛の番長、長須光雄に連絡を入れたが、一向に繋がらないそうだ。

ＢＡＲカシオンでの野牛退学組、そしてメイドカフェでの野牛のスケバンたちと揉めた事件は、吉岡の番長、大橋剛太へは、余計な心配は掛けさせたくないという理由で、今の所伏せているという。

オレとしては、物騒な野牛などと断じて関わりたくないってのが本音だから、このまま自然にフェードアウトするのを希望している。

ユイと野牛のスケバンの件も、オレの大道で一件落着をみたことだし、野牛退学組の件も、宮さんと長須の首脳会談で、スッキリ解決を早急に望むところだ。

オレはとにかく、このまま余計な問題を抱えないように、ひっそりと暮らしていけたらと切に想う。

五月雨（さみだれ）なんて風情もどこへやら、最近は異常気象とやらで、連日真夏日が続いた。

そんなある日・・・。

キーンコーン　カーンコーン

昼休み、さてさて、いつものように売店で激安弁当でも買って、いつもの校舎裏で食おうかなと、席を立とうとした瞬間、視界にとんでもないものが入った。

教室を、1組のヤンキー、芒（すすき）みちるが覗（のぞ）き込んでいる。

『人に降りかかる災いはその人の罪のせいではなく、その災いを通して更に霊的成長をもたらすものである。つまり、災いとは神からのプレゼントなのだ』ってな事をある聖者が言ってたらしいが、もし神というヤツが存在するなら「余計な事すんじゃねぇ～！」と言ってやりたい。

いつもはタカノブ、貴船と行動を共にしているが、今は珍しく一人。

それより何より、ヤツらは下の階なので、ここら辺で見るのは初めてだ。

教室中をキョロキョロと見渡し、誰かを探しているように見える。

みんな芒に因縁をつけられないように、そそくさと教室から逃げ出したり、目を合わせず弁当を食べたりしている。

ウチの教室に他のクラスの生徒が入ってくるのは竜崎以来だが、あの時とはまた雰囲気が違う。

明らかにクラスのみんなは芒にビビっているのが分かる。

芒は坊主頭で、バリカンで器用にラインを入れているのだが、そんなヤツは全校探してもコイツだけだし、制服のズボンもパンツが丸見えなほど下げて履いていたりして、容姿からしてヤンキーなのは誰が見ても分かる。

その上、兄貴がヤクザって噂もあるし、コイツは喧嘩をすると限度を知らないって話だ。

みんな、芒を2年で一番アブナイヤツだと思ってるようだ。

オレ的には、自分の出身中学でもある石田中のトップだった貴船、

そして、地元の暴走族『ギャラクシー』の一員という噂のタカノブ、
この2人といつもつるんでるコイツが恐ろしくてならない。

オレは即行、机に顔を伏せた。

竜崎の時を思い出す。

「おいジオン、アレ、1組の芒みちるってヤツじゃねぇ〜か?」

オッキーが何か言っているが、今のオレには何も聞こえない。

「おいジオン、こっち来るぞ・・・」

オッキーが尚も言うが、オレには何も・・・・・。

「亀?　亀、何だっけ?!」

オレのすぐ近くで、聞き慣れない声がする。

もしかして、芒だろうか・・・?

「亀鶴の事?」

オッキーが余計な事を・・・。

「そうそう、亀鶴ジオン。コイツがそう？」

「う、うん」

オッキー、後で覚えてろよ・・・。

「お～い、亀鶴ジオン君」

オレの名を、誰かが呼んでいる・・・・・気がする。

・・・こ、この禍々（まがまが）しい雰囲気、間違いなく芒だな・・・・。

観念するか。

オレは伏せていた顔を上げた。

目の前、オレの前の席のオッキーは、青い顔で苦笑いしている。

まるで塩をかけられたナメクジみたいに、アソコが縮んでいるんだろうな。

そう言うオレも縮んでるけど。

第85話　ロシア語「カンパニア」の略

ユイと佐倉は、一足先にチャイムと同時に教室を出ていて留守なのが幸いだ。

ショボイ姿を見られないで済む。

ユイの席に堂々と座った芒（すすき）は、オレの肩に腕を回してきた。

初対面だってのに、とてもフレンドリーなヤツだ。

「亀鶴ジオン君」

頭が少し弱そうに見えるくらい不敵な笑みを浮かべた芒は、長い舌を出しながら、さも楽しそうにオレの名をフルネームで呼んだ。

「長山義廣君がさぁ～、このクラスの分の支払いだけいつまでもよこさないからさぁ～、どうしてって問い詰めたのさ。でもさ、全然理由を教えてくれないワケ」

長山？　支払い？　例のカンパの件か？！

アレは長山が、自分の私腹の為に集めてたモンじゃなかったのか？？！

「結局最後までさ、アイツ口を割らないワケ。いつまでも口割らないからさ、アイツの頭割ってやったら、アイツの仲間が素直に教えてくれたよ」

長山が最後まで口を割らなかったって？

頭割られても口を割らなかったって？

なぜだ？

・・・それよりオレは、ずっとカンパを回してた張本人、悪の根源は長山だと思ってたけど、本当は長山も被害者・・・・・？！

敵が違ったってか？

その時オレは、あの日のワンシーンを思い出した。

そう、あれは先月、始業式の登校時。

校舎の前で長山たちは、タカノブ、貴船、芒の3人と睨み合っていた。

あの時、いや、あの後だろうか、おそらく長山が芒たちに何らかの圧力をかけられ、金銭の徴収を余儀なくされたと思われる。

そんな長山の仲間の誰かが、オレがカンパを嫌がってる事を芒にチ

クったってワケか・・・？

「このクラスにいた、テルってヤツ、学校辞めたんだってな。ど～りでこのクラスの分だけ徴収がされてないワケだ。長山もさ、ハッキリそう言ってくれればさ、無駄な怪我せずに済んだのにな」

長山の仲間も、あのカラオケでの件はコイツに伏せてるようだ。

なぜだ？　なぜ、オレの名を出さなかった。

分かった、オレが怖いからだ。

いや、単純に、オレに一発で伸されたってのが広まるとカッコ悪いからか？！

きっとそうに違いない。

オレだって長山たちの立場だったら、あの時の失態は永久に葬りたいモンな～。

「そこでだ、亀鶴ジオン君。君に折り入って頼みがあるんだわ。テル君の代わりにさ、君がこのクラスから毎月金を集めてくんねぇ～かなぁ～？」

はあ？

コイツ、何ワケ分かんねぇ～事言ってんだ？！

さっきから黙って聞いてりゃテル、テルって。
テルが何だって？

「テル？　確かにアイツは学校を辞めたよ。でも、何でそこでオレなんだよ？」

「さっき廊下でこのクラスのトップ誰？って聞いたら、亀鶴君だってみんな言ってたぞ。それに、この学校の総番長とか、１年の大物ルーキー竜崎君だっけ？　そんな凄い人らといつも一緒にいるじゃん」

やっぱりコイツ、何気にオレの顔、知ってやがった。
少なからず意識してたってワケだな。
いつかは目をつけられるとは思ってたが、まさかこんな早くに訪れるとは・・・。

「それにさぁ～、テル君だって、毎月ちゃ～んと支払いしてくれてたんだゼ～～～」

「は～～～あ？」

オレは自分の耳を疑った。
マジでか？

あの、あのテルが・・・・・・・・・・・・??!!

「う・・・、嘘だろ?」

「嘘じゃないゼ。毎月2万ずつ、しっかり支払いしてくれてたゼ」

「・・・・・」

「ここじゃ何だからさ、放課後、校舎裏に来てよ。ホラ、亀鶴君たちがよくタバコ吸ってる所。あそこでちゃんと話し合おうよ」

放課後、校舎裏に来いだと?

どうせ力づくでオレを黙らせる気だろ?

ふざけんな!!

今、ここでやってやるよ。

第８６話　怒りの矛先

オレが立ち上がろうとした、その時・・・！！

「オイ、芒～。何やってんだよ、早く行こうゼ。やきそばパン売り切れるぞ～～～」

貴船とタカノブが教室を覗(のぞ)いている。

オレはすぐにそこから視線を外し、窓の外へ顔を向けた。

「じゃ、そ～いう事だから。詳しくは放課後、校舎裏で。ほんじゃ、またなぁ～」

芒はそれだけ言い残すと、教室を出て行った。

「マジかよ。とうとう1組のヤツらにまで目、つけられちまったな。オレも協力すっからさ、毎月2万払っていこうゼ。オレとジオンで1万ずつ、何とかなるだろ？　先月の分はさ、オレが何とかすっから」

オッキーが優しい笑顔で言った。

「・・・ざけんなよ」

「ジオン。気持ちは分かるけど、いくら吼えたって、負け犬の遠吠えにしか聞こえないよ。もう、諦めて払ってこうゼ。あの長山から逃れたって、結局バックにはアイツらがいたんだよ。アイツらから逃げたって、またさらに上がいるかもしんねぇ～し・・・」

「このまま、いつまでもアイツらに怯えて暮らせってのか？」

「違うだろ、ジオン。今のままだったら怯えて暮らすハメになるけど、ちゃんと支払いしてれば、何の問題もない。逆にアイツらに守ってもらえんじゃねぇ～のか？　日々の安全を金で買ってるって思えば、月1万くらい安いモンだろ」

保険料みたいなモンだってのか？

だとしたら、アイツらはオレらが例えば野牛とかに狙われたりしたら助けてくれんのか？

・・・・んなワケねぇ～～～だろ！！

「・・・・・」

「まさかジオン、宮さんとかにチクったりしないよな？」

「当たり前だ」

「だ、だよな。宮さんとかにこんな事バレたら、大変な事になるモンな。芒の兄貴はヤクザだって言うし、宮さんが出てきたら、大変な抗争にまで発展しちまう。それに、あんまり表沙汰になって先公とかにバレたりしても厄介だよ。後から芒たちにどんな仕返しされることやら・・・・・」

・・・そうじゃねぇ。

そうじゃねぇ～んだ、オッキー。

ヤツらからの仕返しなんて怖くもなんともねぇ～。

そうじゃなくってよぉ～、こんな無様な姿、宮さんや竜崎に恥ずかしくて見せらんねぇ～んだよ。

オレは、アイツらを大切な仲間だと思ってる。

大切な仲間だからこそ、言えないんだ・・・・・。

大切な仲間だからこそ、心配掛けさせたくないんだ・・・・・。

分かるか、この気持ち・・・。

分かんねぇ～だろぉ～～～なぁ～～～。

「テルだって払ってたって言うじゃねぇ～か。オレらもさ、穏便(おんびん)に

いこうゼ、穏便に」

「はあ？　だからテルが何でカンパなんかに協力してんだよ。アイツは学年トップだったんじゃねぇ～のかよ」

「だからジオン、テルはオレらの為に、オレらに心配掛けねぇ～ようにこっそり払ってきたんだよ。テルはそういうヤツなんだよ。でもジオン、テルを責めちゃなんねぇ～よ。テルはな、1年間、ずっと苦しみや、悔しさ、孤独に耐えてきたんだと思う。たった一人で、やりきれない思いと戦ってきたはずだから・・・・・」

「オレは信じねぇ～。テルがそんな事をするワケがねぇ～～～！！」

オレはその場を立ち上がると、教室を出た。

出る際、教室の壁に渾身の力コブシを放った。

無意識で手が勝手に出たカンジだ。

自分の怒りが制御できない。

偶然にも、壁を殴った瞬間、丁度佐倉が教室に入って来た。

一番見られたくない人に、一番無様な姿を見られてしまった。

・・・が、今のオレは、そんなのどうでもいい。

廊下でユイが擦れ違いざまに、「何怖い顔して歩いてんのよ」何て

言っていたが、オレは完全にそれを無視した。

オレはとにかく、早く誰もいない所に行きたかった。

テルに確認を取りたかった。

真相を聞きたかった。

テルを信じたかった。

親友のテルを・・・・・。

第87話　粗暴

廊下の突き当たりまで来ると、オレは非常口に手をかけた。

扉を開けると生暖かい風が頬をつく。

オレは非常階段にしゃがみ込むと、胸ポケットからタバコを取り出した。

最後の一本に火をつけ、タバコの空き袋をクシャクシャに潰すと、真下の草むらに投げ捨てた。

そしてケータイを取り出す。

少しだけ震える手で、テルに電話を掛けた。

『はい、もしもし』

「オレ、ジオン・・・」

『ど～した？　昼休みか?!　声が変だぞ。何かあったのか?』

「テル・・・」

ためらいを感じたが、オレはきり出した。

「カンパの件なんだが・・・」

『あぁ～、とうとう来たか。ゴメンな、黙ってて。でも、アレはクラスのトップ張るヤツの宿命なんだよ。他のクラスもみんなやってるしさ。誰が来た？』

「芒（すすき）だ」

『やっぱりな。多分オレの予想では、ギャラクシーが絡んでるんじゃねぇ～かと思うんだ。ジオン、ヘタに逆らうんじゃねぇ～ぞ』

「テル・・・」

『何だよ』

「じゃーな」

ブチ

オレは電話を切った。

そのまま電源も切った。

テルは、そんなヤツじゃねぇ～と思ってた。

オレに内緒でアイツらの言いなりになってただと？

ふざけんなっ！！

そんなにオレが頼りなかったか？！

水くせぇ～にも程がある・・・。

それより何より、オレはテルの事、親友だと思ってた。

だが、アイツはオレに、とんでもない事を隠していた。

完全に裏切られた気分だ・・・。

あんなヤツを親友だと思ってた自分が恥ずかしい。

チクショ～、胸くそ悪ぃ～～！！

そのままオレは、チャイムが鳴っても教室に戻らなかった。

込み上げてくる怒りが収まらず、どうせ今教室に戻っても、この怒りが何かにぶつかるだけのような気がしたからだ。

みんなに当り散らして迷惑も掛けたくなかったし、何よりこんな無様な姿、誰にも見られたくなかった。

怒りの矛先は、ほとんどテルに向けられた。

だが、怒りの矛先がそもそも間違ってるのも痛いくらい知っている。

何度も何度も頭を巡るのは、「敵が違う」という言葉だった。

しばらくして、非常階段を下り、芒との約束の場所へと向かった。

そのままオレは、放課後まで校舎裏で芒を待った。

芒・・・。

オレは逃げも隠れもしねぇ～。

そして、オレはオマエの思惑通りにはいかねぇ～。

そっちがその気なら、こっちも・・・・・。

やがて部活動の学生たちの声が遠くから聞こえ始めた頃、

「おっ、待たせたか？」

腰より下で履いたズボンに手を突っ込んだ芒が、ふてぶてしく一人で現れた。

「タカノブ、貴船は一緒じゃねぇ～のかよ」

「アイツらはとっくに帰ったよ」

フン、オレも随分ナメられたモンだ。

「・・・で、話って何だよ」

オレは出来る限り冷静さを保とうとしたが、どうやら無駄のようだ。

オレの頭の中のメモリはすでに満杯で、何度も「メモリ不足です」のメッセージが表示され、今にもパソコンがフリーズしそうだ。

気がつくと、オレは芒を物凄い目で睨んでいた。

「オレ、そんなに心広くねぇ～ぞ。テメ～、あんまりナメてっと、マジ殺すぞ」

芒はオレの前に詰め寄ると、いきなり襟首を掴んできた。

「話って、何だよ」

「黙って大人しく、金出せって言ってんだよ」

「断る」

オレは断言した。

「ヒャハハハハハハハ」

突然芒は笑い出したかと思うと、オレを掴んでいた手を離した。

そしてブレザーのポケットから取り出したタバコに火をつけると、それを銜(くわ)えながら歩き出した。

「一人５００円、毎月クラスの皆に払ってもらえばそれで済むだろ？　でもよ～、オマエも一端(いっぱし)の不良なら、そんな事したらすぐに足が付くって事くらい分かるよな？　皆が皆、賢いワケじゃねぇ～からさ、もし先公なんかにチクるヤツがいたらさ、大変じゃん」

芒は両手をズボンに入れながら、銜えタバコでヨタヨタとオレの近くを歩いた。

「頭使えよ。クラスのとっぽいヤツにタンマリ集めさせてさ、オマエも儲けちまえばいいだろ。そ～すりゃ毎月ウハウハだぜ～。ヒャハハハハ」

それが話か？　オレをわざわざ校舎裏まで呼び出して言いたかった話か？

結局、コイツがさっき言った「黙って大人しく、金出せって言ってんだよ」って言葉が全てじゃねぇ～か。

ここで黙って引き下がれば、オレも人並みのヤンキーだろうな・・・。

だが、オレは引き下がるつもりは、ねぇ～し。

多分、修羅場になるだろぉ～けど、オレは負け犬にはなりたくねぇ～。

何より、自分に負けたくねぇ～。

もう、人生負けねぇ～って決めたんだ。

もう、俯(うつむ)きたくねぇ～から!!

絶対、負けねぇ～～～!!

第８８話　お天気屋

オレは、ここで引き下がるつもりはない。

・・・と、言う事は、芒とココで決闘は必至。

何が何でも勝つしかない。

後先は後から考える。

オレは怒りで時折我を失いつつあったが、「喧嘩は冷静さを欠いたら負ける」と何度も自分に言い聞かせた。

「ふ～～～～～～っ」

頬を膨らませながら、ゆっくり少しずつ、尖った口から息を吐いた。

何度も、何度も息を吐いて、オレはやっとの思いで冷静さを取り戻した。

さてさて、コイツと取っ組み合いになる前に、何としてでも血液型を入手する必要がある。

それを知ってるのと知らないのとでは、泥雲（うんでい）の差。

芒が教室に入ってきた時、オレの隣に座ったかと思うと、いきなり肩に腕を回してきたり、馴れ馴れしい口調で、妙にフレンドリーな態度だった。

・・・と、思いきや、校舎裏では一変し「テメ〜、あんまりナメてっと、マジ殺すぞ」などと暴言を吐きながらオレの胸倉を掴んだ。

その矢先、突然笑ったかと思うと、またフレンドリーな態度に一変した。

オレの推測では、芒はＢ型。

こっちが押せば引き、こっちが引けば押してくる。

一応、試してみるか・・・・・。

「なぁ〜芒、そ〜いえば芒の血液型って何型だっけ?」

唐突だが、芒に血液型を聞いてみた。

上手くいけば、野牛のスケバン、ミケコの時みたいに簡単に血液型をＧＥＴできるかもしれない。

B型の対人性に壁はなく、距離もない。
初対面でも、長年付き添った親友並に打ちとけるケースも稀じゃない。
いくら踏み込んでもOKなのがB型。
コイツがもしA型やAB型だったら一発アウトだろうが、オレにはコイツがB型だという自信がある。

「はあ？　何だよイキナリ」

流石にムリがあったか？
女ならまだしも、こんなガキの頃から悪行三昧そうなヤロ～に、血液型を聞く事自体、ムリがあったか・・・・・。

「オレO型なんだけどさ、芒は何型かなぁ～と思って」

ちっ、グダグダになってきた・・・。

「ガタガタだよ」

ガ、ガタガタ？！

「ははは。・・・で、何型？」

「クワガタだよ」

クワガタ?!

「ははははは。・・・で、何型?」

「しつけ~んだよ!!　何型でもい~だろ」

芒は銜(くわえ)えタバコを吹き捨てると、またすぐに新しいタバコに火をつけた。

ま、い~や。

コイツはオレの読みでは、１００中９９、Ｂ型と見た。

芒がここに現れた時、オレが怒りを露にしていたにもかかわらず、コイツはちょっとムカついただけですぐに話を本題に移した。

しかも全く動揺は見せずに・・・。

以上の事からも、コイツはアマノジャクなＢ型、そしてオレをだいぶナメてると判断できる。

Ｂ型との喧嘩は・・・・・、ガチでもイケる!!

Ｂ型は尾を引かない。

「芒、オレはオマエに一円もやる気はねぇ～よ。金輪際、オレのクラスに手出しする事も許さねぇ～」

「はぁぁ～～～?!　オマエ、それ、マジで言ってんの?」

芒は急に目の色を変えた。

「ああ。マジだよ。オレはテルとは違うぞ」

「あの雑魚(ザコ)が大将だと思ったら、影に隠れてこんなのが潜んでたとはな・・・」

テルを雑魚扱いかよ、ナメやがって・・・。

「・・・ざけんなよ、テメ～!!」

オレは有(あ)りっ丈(たけ)の氣(き)を両腕に込めた。

力(りき)むと胸の奥から沸々と怒りが沸いてきて、歯を食いしばった瞬間、顔が左右に小刻みに震えた。

コブシもプルプルと痙攣(けいれん)している。

そんなオレの怒りの形相を見て、芒も興奮を抑えきれず、目を大きく引ん剥(む)いた。

「・・・ざけんなよ、テメ〜〜〜〜！！！」

芒はオレと同じセリフを吐いた。

よほど頭に血が上ってるようだ。

そんな芒を見て、オレは少しだけ冷静になれそうな気がした。

ガッ

芒は銜えタバコのまま、オレの胸倉を掴んだ。

「殺すぞ」

瞳孔が開き、目が血走っている。

芒はオレの胸倉をめい一杯持ち上げると、握り締めたコブシを弓引いた。

・・・その時！！

「貴様らぁ〜〜〜〜〜〜っ！！」

その声はっ！

第８９話　停学１週間

校舎裏、芒がオレに殴り掛かる瞬間だった。

聞き覚えのある声、そう、担任のリッキーの声である。

芒もすぐにオレから手を離し、平然を装ったが、口に銜(くわ)えたタバコは流石に隠し切れなかった。

「現行犯だ。貴様ら、停学１週間だ」

「はい？　オレはタバコ吸ってねぇ～し」

何でオレまで停学なんだよ！　オレはマジで被害者だぞ！！

オレはリッキーに必死で抗議した。

「とぼけるな。そこにタバコが落ちてんだろ！！」

それは芒がさっき吹き捨てたヤツだ、ボケ。

オレは芒と共にリッキーに生徒指導室まで連行された。

タバコで停学？　冗談じゃない。
親父に半殺しにされる・・・・・。

生徒指導室には、柔道部の顧問の大和（やまと）をはじめ、数学の竹中や新任の内藤までいた。
幸いオレは、校舎裏に行く前にタバコの空き箱を捨てていたのだ。
ライターは見つかったものの、オレは「拾ったんだよ」といいわけをした。
タバコを持っていたという証拠が見つからず、結局オレは停学を免れた。

芒と何をしていたのか問い詰められたが、オレはカンパの事も、喧嘩の事も完全に黙秘した。
やがてオレは釈放されたが、芒は1週間の停学が確定。
生徒指導室の去り際、芒が執拗（しつよう）にオレを睨む顔が脳裏に焼きついた。

あのヤロー、必ず仕返しにくるぞ。

カンパの件、停学の件、全てをオレのせいにして、あのヤローは来るはずだ。

ヤツが来る前に・・・・・。

教室に戻ると、みんな帰る支度をしていた。

何だ、もうそんな時間かよ・・・。

「うぉ～～～、ジオン、停学だってぇ～～～?!」

席に戻ると、オッキーが目を輝かせながら近づいてきた。

「何ニヤついてんだよ、オッキー」

「だってオマエ、停学っつったらオマエ、不良の格が上がるってモンだろ～」

不良の格だぁ～?

コイツはホント、ミーハーなヤローだ。

「最っ低～」

隣のユイは、シラケた目でオレを睨みながら、机の中の教科書をカバンに入れている。

佐倉は黙って前を向いているが、オレに気付いてないフリを装っているのは、ひと目見ただけでハッキリと分かる。

この2人は、オレが昼休み教室を出て行く際、腹癒せに壁を殴った事を怒っているのか？　それとも授業をサボった事？　いや、間違いなく停学の件だな。

大方、ロクでもない噂が飛び交ってたんだろうな・・・。

コイツらは、何か誤解している。

「言っとくけど、オレは停学じゃねぇ～かんな。停学なのは芒の方だ！！」

「噂ではジオン君がタバコで停学1週間って・・・・・」

佐倉が不思議そうな顔でこっちを見た。

「たまたまタバコ持ってなくってな。運が良かったっつ～カンジ？」

「そうか、良かったなぁ～ジオン」

さっきの目の輝きがなくなってるが、オレが停学じゃなくて残念だったか、オッキー？

「コレに懲りて、タバコ止めなさいよ」

ユイが去り際にそんなセリフを吐いていった。

ユイと佐倉が離れていったのを見計らい、オレはオッキーに言った。

「頼むっ！　何としてでも芒の血液型知りてぇ～んだ。オマエの顔の広さでさ、何とか周りのヤツに聞き込みしてもらえねぇ～かな？」

「え？　ええ？？　芒って、1組の芒みちるの事だろ？！　何でまた。なぁ～ジオン、一体何があったんだよ。昼休みの件といい、その後の失踪といい、何があった？」

「ヤツとの交渉は決裂だ。結果、オレはヤツに狙われてる」

「・・・・・・・・・・・っぱっか・・・・・・・ばっかだ・・・・・・ほんっとっに、ばかだ！！」

オッキーはかなり力を溜めて、オレの事をバカ呼ばわりした。

「頼む。オレが探ったら、すぐ足がつくだろ？　オッキーなら、少しは融通が利く。血液型ってさ、クラスの誰かしらがさ、なぜか知ってるモンじゃん。1組のヤツとかさ、芒と同じ山田中だったヤツとかに聞いてさ、芒の血液型調べといてもらえるかな？」

「分かった。オマエが本気だってのも分かった。だけど約束してくれ。ちゃんと聞くだけ聞いてやっから、これだけは約束してくれ」

「何だよ、もったいぶらずにさっさと言えよ」

「・・・・・死ぬなよ」

返す言葉もない。

「死ぬかボケ～ッ」ってツッコミたい気も山々。

その一方で、黙って頷くしかない自分もいる。

とにかく、修羅場ってヤツだ。

「嗅ぎ回ってるってバレねぇ～ように、マジで慎重に頼む」

「任せとけって。絶対誰にも言うなよってのを前提に、信用できる顔見知りにしか聞かねぇ～から」

そう言い残すとオッキーは教室を出て行った。

こ～いう時のＡ型は頼りになる。

第９０話　薔薇の蕾

その日の放課後もまた、竜崎、宮さんと一緒になった。

コンビニのベンチ、横一列に座ってタバコを吸っていた時、ふと、芒の停学事件を思い出した。

思えばここは目立つよな・・・。

タバコに火をつけて間もなかったが、オレはタバコを消した。

「いや～、実は今日・・・」

危機一髪で停学の難を逃れた事を、２人に話そうと思った瞬間・・・！！

ボボボボボボ

車高短（シャコタン）の白いヤン車がやってきた。

マフラーに穴を開けてると思われ、排気音が異常な程デカイ。

窓は全面スモーク、しかも字光式（じこうしき）ナンバープレート、いわゆる光るナンバープレート。

サブウーファーの重低音と共に聞こえてくるカーステレオの歌声は、ヤンキーたちには根強い人気を誇る、ヒムタクの奥さんこと須藤静香。

オレたちに排気ガスを吹きかけながら、白いヤン車はバックしてきた。

後部窓にはビッシリと、カッティングした文字が連なっている。

『情熱という名の真っ赤な薔薇よ、蕾（つぼみ）のままならままでいい。早く摘まねば枯れるなら、男は黙って枯れるまで。自然なままで、枯れるまで。蕾のままで、枯れるまで』

随分とネガティブな文章だ。

枯れないで、是非（ぜひ）、咲いて欲しいな。

「ゴッホゴホゴホ」

ヤン車の排気ガスで、宮さんが咳き込んでいる。

「大袈裟っス。因縁つけないでくださいよ～」

竜崎が宮さんの咳に対して言明（げんめい）。

ヤン車の運転席、そして助手席が開き、まず最初に靴だけが地面を踏んだ。

土禁(どきん)だ！

運転席からは、見るからにヤクザな人が現れた。

そして助手席からは・・・・・。

「まさか、こんなに早く会えるとはなぁ～～～、亀鶴～～～～～！！」

す、芒(すすき)みちる！！

「オレらの所に来たっス。宮さんの知り合い？」

「いや、全く。亀ちゃんじゃないの？」

「探したぞ、亀鶴～～～～～～！！」

芒は口元をさも楽しげに歪めているが、眼光は獣のようにオレを捉えて放さない。

さ、探した、だと～～～？！

「あ～～～、亀ちゃんの同級生かぁ～」

宮さんが何かを思い出したように言った。

「アニキ、コイツだよ、さっき言ってたヤツってのは」

「とりあえず乗せっか？」

アニキ？

ヤベ～よ、ヤクザだよ、噂のヤクザ。

ヤベ～よ、オレ、事務所？　山？　海？

事務所に監禁されんのか？　生きて帰れれば、まだいいや。

山中で土の下に埋められるかも？　生き埋めされたら苦しそうだな・・・。

一思いに海の藻屑にされた方がマシか？！

このままじゃヤベ～よ、オレ、マジで殺されるよ～～～。

「でもよ、アニキ。隣のデケ～奴って、３年の宮大地っつって、有名な総番長なんだわ」

芒が兄と思(おぼ)しき人物に話し掛けた矢先、宮さんが立ち上がった。

「宮さん・・・」

オレは芒兄弟に立ち向かう宮さんを追った。

「亀ちゃん、ここは任しとき。い～から座っててて」

オレは宮さんによって、強引にベンチに戻された。

「どうします？　力づくで止めます？」

竜崎が、ヤクザに果敢にも立ち向かう宮さんを、止めるか見守るべきかオレに問う。

「いや、ここは・・・・・しばし、様子を見よう」

毎度の事ながら瞬時に打開策を練らなければならず、オレの頭脳という名のコンピューターは、またしてもメモリ不足だ。

いやはや、相変わらずの修羅場続きにウンザリするゼ・・・・・。

第９１話　枯れるまで

「み、宮？　もしかしてオマエ、宮大海（ひろみ）の弟か？！」

「宮大海は、オレのアニキだ」

芒の兄は、胸ポケットからタバコを取り出すと、宮さんの目の前で吸い出した。

「ふ～～～～ん。ひろ君、元気？」

煙が目にしみる表情で、芒の兄は聞いた。

「ああ。クソ元気だ」

「ふ～～～～ん」

芒の兄は、宮大海という名を出した辺りから、急に弱々しく感じられる。

どうやら宮さんのお兄さんと知り合いのようだ。

「アニキ、コイツの兄貴、知ってんの？」

芒が兄に聞いた。

「あぁ～、知り合いの知り合いっつ～か、直接面識はねぇ～けど」

会った事すらねぇ～のかよっ！！

そのまま芒兄は、芒を指差して助手席に乗るように促すと、運転席に乗り込んだ。

芒は困惑した表情で兄を追う。

はあ？　に、逃げんのかよっ！！

オレの事探してたんじゃなかったのかよ？！

宮さんのお兄さんが会話に出た途端、妙に逃げ腰だと思ったけど、行動早っ！！

その逃げ足の早さ、芒兄も弟の芒みちる同様、Ｂ型と見た！

「ちょ、オイ、ちょっと、アニキ・・・」

芒は運転席の兄と何やら話をしている。

揉めてるのか？　少々兄弟喧嘩気味に見える。

断片的だが、芒兄弟の声がいくつか耳に入った。

芒兄「だから、やべぇ～んだって、マジで。宮大海っつったら、あぶねぇ～ヤクザで有名なんだぞ。そんなヤツと揉めたくねぇ～って！」

みちる「じゃ～、どうすんだよ?!」

芒兄「そんなのオメ～が勝手にやればい～だろ。オメ～が自分のバックを出さねぇ～って言えば、向こうだってバックを出せねぇ～んだから。頭使えよ、頭・・・」

ちゃんと脳ミソ使ってるようには思えない、低レベルな会話だ・・・。

芒みちるは、兄との会話が終わると、こっちに向かって歩いてきた。

宮さんが下から突き上げるように、凄味を利かせて睨み込んだが、芒は宮さんの視線を避け、真っ直ぐオレだけを睨みながら歩いてくる。

「宮さん、スミマセン。アイツとサシで話がしたいんで・・・」

後ろを振り向き、オレの真剣な眼差しと目が合った宮さんは、一瞬でオレの心を察してくれた。

軽やかな笑みを浮かべると、そのまま竜崎のいるベンチへと戻っていった。

さて、芒みちる・・・・・、どう出る？

オレはまず最初に、芒みちるの言葉を待った。

「今度会った時がテメ～の命日だ。アッハッハッハッハ・・・」

何て胸クソ悪い捨てゼリフなんだ？　芒は高笑いしながら車の助手席に乗り込んだ。

ボボボボボボボ

これでもかって言うくらいエンジンを吹かすと、白いヤン車は威勢良く走り去ってしまった・・・・・・・・・・。

結局、彼らは何しにコンビニに寄ったんだろ～？

何も買わず、しかも、中にも入らず・・・。

「面識もねぇ～のにアニキの事ひろ君とか言いやがって。極道のマネ事してる、タダのチンピラが・・・」

「宮さんのお兄さんって、ヤクザ？」

オレはドサクサに紛れて聞いてみた。

「カタギだけど、環境的にヤクザに囲まれて育ってるから、さっきみてぇ～なチンピラとはワケが違うよ。それに、昔っからアニキの名前聞いて知らねぇ～ヤツいねぇ～し・・・」

「いくつ離れてるんですか？」

「３つ？　オレが中１の時あっちが高１。中学も高校も顔を合わす事はなかったけど、アニキの伝説だけは耳に入ったねぇ～」

泣く子も黙る総番長、宮大地の兄、宮大海。

どんなモンスターなのだろうか？

宮さんがマンモスだとしたら、お兄さんは恐竜とか？

とにかく凄ぇ～兄弟だ。

さすがの芒兄弟も、宮兄弟には敵わなかったらしい。

ここは長いものには巻かれろってなカンジで、宮さんという後ろ盾の世話になっとこう。

いやはや、予想もつかぬ展開で救われた。

一先ずここは一時しのぎは出来た。

後はオッキーが芒の血液型をＧＥＴしてくれれば何とかなるかもしれ

ない。

オレの予想ではB型なんだが、確証を得て自信に繋げたい。

今度会った時が勝負みたいだし・・・。

とにかく、芒との喧嘩で一番ネックだった、芒のケツ持ちがさっきのヤツだと思うと、心底ホッとした。

その後、竜崎や宮さんに芒との事を聞かれたが、オレは上手く誤魔化して話題を避けた。

自分のケツは自分で拭きたい。

第９２話　雫の母

「Ｂ型だってよ。後な、タカノブはＡＢだって」

次の日の朝、席に着くなり眠気眼（まなこ）を吹き飛ばすようなオッキーの第一声。

「誰から聞いた？　タカノブの血液型まで・・・？！　嬉しいのは山々だけど、もし嗅ぎ回ってたのがバレたらオマエ・・・」

「大丈夫だって、ジオン、心配すんなよ。信頼できるルートからの情報だし、絶対漏れない自信あるさ。それにもしバレたら、全責任はオレがとるって」

まぁ～、こういう時のＡ型の責任感と信頼感は絶大だけどさ、素直に喜べないっていうか、不安が募るっていうか、とにかく余計な事しやがって・・・ってな気持ちの方が大きい。

・・・と、思いつつ、オレは貴船の血液型も気になった。

「で、貴船の血液型は？」

「そこまでは聞けなかったよ。貴船って確か、ジオンと同じ中学だよな？　だったらジオンの方が探り易いだろ」

探れるモンならとっくに探ってるって・・・。

オッキーにとっておきのガムをあげ、オレは窓の外を眺めた。

芒がＢ型ってのは予想的中だ。

意外なのはタカノブだったな・・・。

思えばタカノブって、いつも無口でクールな雰囲気だ。

もしタカノブと喧嘩になったら、とてつもなく厄介だな。

そうならないように、芒との一件をどうにか・・・・・。

昼休み、オレたちはいつもの校舎裏でタバコを吸うのをやめ、新たな喫煙スポットを探した。

カンパの件は未だに竜崎と宮さんには言ってないが、校舎裏で芒がタバコで停学になった件は話した。

１０分ほどウロウロしたが、結局宮さんのオススメスポット、写真部の部室に決定した。

写真部の部長は、昼休みに部室を提供する事を、宮さんの秘技『裏ＤＶＤ欲しくね？』でニコやかに承諾した。

「マジ大丈夫なんですか？　ココ」

オレは宮さんに念押して聞いてみた。

やっぱり芒の停学を目の当たりにして、オレは小心者になってるようだ。

「大丈夫大丈夫。写真部の顧問は若造の体育教師だし、そいつ盗撮やってんの知ってっから、いざとなったらそれをダシにすり抜けるよ」

「その人ってメガネ掛けてて、今年だけの期間限定の教師？」

「そうそう、ヒョロっとしてるヤツ」

ウチのクラスの副担任じゃねぇ～か！

ヤツは盗撮やってたのか。

こいつは凄ぇ情報ＧＥＴだゼ！！

「そういえば、今朝、朝露の母親が学校に乗り込んできたっス」

竜崎の話は衝撃的だった。

何と、あの朝露さんの母親が、校長室に抗議しに来たというのだ。

着物姿で、まるで極道の妻（おんな）のような雰囲気だったという。

「じゃあ、朝露さんの出て行った父親って、コレモン？」

オレは頬を人差し指でなぞった。

「さあ・・・」

竜崎は首を傾げた。

「ねぇ、竜ちゃん、雫ちゃんの母ちゃん、何で学校に来たんだ?」

「多分、メイドカフェでの野牛との絡みの件だと思うっス」

・・・だろうね。

髪の毛引っ張られて振り回された事、母ちゃんに話したんだろうな、朝露さん。

そしたら母ちゃんブチキレ・・・みたいな?

「オレの名前も出たろぉ〜な、多分」

宮さんは溜息混じりで遠くを見つめた。

「ど〜っスかね」

竜崎は肯定も否定もしなかった。

しょ〜がない、オレが軽くフォロー入れとくか。

「まさかぁ～、朝露さんが宮さんの名前、出すワケないでしょ～」

「いや、女の子は容赦ないよ、そ～いうの」

いつになくネガティブだなぁ～、宮さん。

その日の放課後、宮さんは「案の定、リッキーに呼ばれたよ。今度、野牛と揉めたら即、退学だってよ」という衝撃発言を、ガッハッハッハと笑いながら言った。

・・・って事は、朝露さんが母親にチクり～の、母親学校に来て校長に抗議し～の、校長はリッキーに相談し～の、リッキー激怒～って流れ?!

でも、宮さん被害者。

どっかで誰か誤解してる。

おそらく、朝露さんの母親辺りで、大～～～きく間違ってる気がする。

宮さん何も悪くない。

・・・もしかして、宮さんの名前が出たって事は、オレも?

「でも、さっきまでホームルームでリッキーと一緒だったけど、オ

レは何も言われませんでしたよ」

「オレの事だけ言ったんでしょ、雫ちゃん。ま、仕方ないよ。野牛を黙らせようと、自分の名前を出したのオレだしさ。雫ちゃんは何も悪くないよ。悪いのはオレだから・・・」

そんな散々な目に遭った宮さんにオレは一言、言ってやった。

「誰も悪くないですよ」

第９３話　雫、さらわれる

土曜は午前中で授業が終わった。

事件はその日の放課後、オレたちがファーストフードで昼食を食べてる時に起きた。

『雫がさらわれた！！』

ユイからの突然の電話だった。

学校の帰り、ユイはいつものようにバイト先へ。

朝露さんも出勤。

メイドカフェに、朝露さんの弟と妹が遊びに来て、ユイは紹介されたという。

しばらくして、その子たちのいるテーブルに顔を出した際、

「お姉ちゃん、さらわれた」という弟の悲痛な叫び。

ユイが直感で思い浮かべたのは、野牛のスケバン、ミケコの顔。

急いで調理室に駆け込み、仲間のメイドたちに朝露さんの事を聴取。

聞き込みの結果、ユイが得た情報は２つ。

『１０分くらい前、私服に着替えて出て行った』

どうやら、誰にも理由を告げずに外出したらしい。

メイドの一人が、朝露さんの後姿をチラっとだけ目にしたという。

そして、もう一つは『怪我してた』という情報だ。

朝露さんのメイド服には、血が付着していたという・・・。

以上の情報を聞き、オレもユイ同様、朝露さんは何者かに連れて行かれたと判断した。

「ゴメン、待った？」

ユイが到着したのは午後１時３５分。

それほど待ってない。

ただ、オレも竜崎も、今すぐにでも飛び出しそうな宮さんを止めるのに必死だった。

宮さんは、「朝露さんがさらわれた」と知った瞬間から激怒。

宮山（みやさん）という名の巨大な山が、大噴火を起こしてしまったから手に負えない。

宮さんは、もし野牛と揉めたら即、退学だとリッキーに脅されている。

そうなったのも、朝露さんが母親に野牛との件を話した際、宮さんの名前を出してしまった事が原因だと考えられる。

母親が宮さんをどう捉えたかは分からないが、学校側に宮さんの名前を出したのは明白な事実。

と、言う事は、悪く捉えれば、宮さんにとって朝露さんは退学を促したチクリ魔とも言える。

自ら自分の墓穴を掘りに、そんな朝露さんを助ける為、野牛に乗り込むというのか？

B型は追い込まれれば追い込まれるほど勢いが増す。

こうなったら誰も宮さんの暴走を止められそうもない。

・・・とは言うものの、朝露さんがさらわれたと聞いて、オレたちだって黙ってるワケにはいかない。

が、宮さんの激怒ぶりを見て、オレと竜崎は少しだけ冷静になれた。

「単独行動は危険っス！」

「オレ、犯人は何となく、あの野牛退学組だと思うんだ。オレへの腹癒せの為に、オレに想いを寄せてる雫ちゃんを・・・」

なに？　マジでか、宮さん！！

「自惚(うぬぼ)れ過ぎっス」

さすがにそこは竜崎に即行ツッコまれた。

「でも、宮さんの言う、野牛退学組って線も拭いきれねぇ～な。頭イカレてるヤツは、ホント何すっか分かんねぇ～」

オレの意見にユイは、

「私は、この間のスケバンが怪しいと思うんだけど」

ミケコだろ？　オレもミケコの線が強いと思う。

吉岡の、この間メイドカフェにいたヤンキー2人組＋上木って線も捨てきれねぇ～けど。

「長須に連絡つかねー以上、手当たり次第探すしかねぇー！！」

宮さんは相変わらず、闇雲に探す気満々だ。

「分散したいのは山々っスけど、ど～します？　２手に分かれます？」

竜崎は宮さんの闇雲案を完全無視。

２手か・・・。

オレ、竜崎チーム＝もう１チームは必然的に宮さん、ユイのＢ型チーム。

問答無用の却下だ。

オレ、宮さん＝竜崎、ユイチーム。

オレも竜崎も、お互いＢ型の暴走を止めるのに労力を費やし、ムダに疲れるチーム編成だ。

オレ、ユイチーム＝竜崎、宮さんチーム。

その逆もまた然(しか)り。

「２手はダメだ。４人で行動しよう」

「ＯＫっス」

オレの判断に竜崎が了解し、とりあえず４人での捜索隊が結成された。

宮さんは再三、長須に連絡を入れたが一向に繋がらなかった。

頼りの野牛ナンバー2の仲村シンとは、元々微妙なダチ関係の為、お互いにケータイの番号までは知らない仲らしい。

そんな微妙な関係って、詳しく聞いたワケじゃないが、何となく分かる気がする。

口では上手く説明できないけど、いるんだよね、そ～いう知り合い。

何となく仲間内にいる友達ではあるけど、微妙に親しくなれないっつ～か・・・。

「分かってるとは思うけど、喧嘩は許さないからね」

ユイの言葉にオレたち3人は黙って頷くが、隣の猛者が素直に聞くとは思えない。

オレたちは話し合いの結果、一刻も早い朝露さん救出に乗り出す事にした。

野牛周辺での聞き込みを手がかりに、まずはスケバン、ミケコを探し出す手筈（てはず）だ。

オレも、ミケコとの接触に成功さえすれば、必ず何らかの情報は得れるという確信を持っている。

午後3時、オレたちは野牛農業高等学校前の、野牛駅に到着した。

「田舎の香水」

思わず独特の肥やしの臭いを嗅いで、オレは一言、言った。

無人駅を下りると、駅裏は田園風景が広がり、駅前は寂(さび)れた駄菓子屋が一軒あるだけだった。

あとは民家と田と畑、まさにド田舎の名に相応しい佇(たたず)まい。

「あっちが海っスよね」

潮の香りを嗅ぎつけた竜崎が、港方面を指差して言った。

ハイハイ、釣りはプライベートでゆっくり愉しんでね・・・。

・・・と、その時!!

野牛駅の駐輪場の片隅に、タバコを吸って屯(たむろ)しているヤンキーたちを見つけた。

私服だが、見る限り中学生だと思われる。

一人は改造した単車に乗っている。

その周りに5人ほどウンコ座りでタバコを吸っている。

さっそくこっちに睨みをきかせて、喧嘩上等ってな雰囲気だ。

案の定、オレたちに何の相談もなく、宮さんが突入した・・・・・。

第９４話　２１人いる

「ここいらギャラクシーの縄張りじゃ」

中坊の一人がいきり立った。

ギャラクシー・・・詳しくは知らないが、ここら辺も統括地域なのだろうか？

てっきり武蔵の辺りに生息する族かと思ったが、どうやら想像以上にデカイ規模の族のようだ。

「長須って番長、知ってる？　野牛の番長」

宮さんはそんなギャラクシーの名に臆す事なく、中坊の一人を捕まえて言った。

宮さん、ココ、敵地だよ敵地。

オレら武蔵の制服着てっから、すぐ野牛のモンじゃないってバレるジャンよ～。

・・・・思えばヤベ～よ、この状況。

これからどんな修羅場が待ってんだよ～。

今更逃げらんねぇ～し、ど～んすんのマジで。

こんなトコロで死にたくねぇ～～～よ、オレ。

逃げれたとしても、後が怖くね～？

・・・ま、全部の責任は宮さんに任せっけどさ～～～。

宮さんが話し掛けた中坊は、長須の名を聞いて「長須さんを知ってるかって？　あたぼ～よ」とムキになって言った。

宮さんは落ち着いた口調で「野牛で長須、仲村の他に、名前売れてるヤツいる？」と聞いた。

オイ、宮さん、アンタ何企(たくら)んでるの？　オレたちに何の相談もなく！

「橋さんとか・・・？」

「誰かそいつんトコ案内してよ。野牛の溜まり場とかさ、ないの？」

み、宮さぁ～～～～～ん！！

オレたちを地獄へ誘(いざな)わないでぇ～～～～～！！

「さっき、橋の下の溜まり場に、橋さんいたから、ちょっと呼んで

くるわ、オレ」

バン　バン　バババン　バン　ババン　バン

単車の男は、橋の下の橋さんというヤツを呼びにバイクで向かった。

「揉めないでよね～」

戻ってきた宮さんにユイが再度忠告した。

「大丈夫大丈夫、心配しないで」

宮さんは優しい笑顔でそう言うが、どうも説得力がない。

自分が逃げたいのは山々だが、オレはカッコつけて、「ユイ、ここは危険だ。後はオレたちに任せて帰れ」なんて言おうとした矢先！！！

・・・・・・・・・・・・・・何じゃ、アリャ～～～～～～！

バーババ　バーババ　バーババ　バーーーーッ

単車の男が橋さんというヤツを連れて戻ってきた。

後ろに物凄い数のヤンキーを引き連れて・・・・・。

単車の男は低速で単車をころがし、その後ろをゆっくりとヤンキーたちが歩いてくる。

道幅を埋め尽くすほどのヤンキーたちは、私服のヤツもいれば野牛の学ランを着ているヤツもいる。

どいつもこいつも見るからにワルそうなヤツらばかりだ。

コブシをポキポキさせたり、首を回したり、何かアイツらやる気満々なんじゃねぇ～?!

オレは足が震えないように、膝をしっかり伸ばした。

「ど～すんスか、アレ・・・」

竜崎が呆れ顔で宮さんに聞いた。

宮さんは軽く微笑むと、ポケットに手を入れて歩き出した。

・・・１４、１５・・・１６。

駐輪場でウンコ座りしている中坊を含めて、敵は総勢２１名。

ど～～～すんの、マジで!

第９５話　橋

「オマエら何年？」

宮さんが誰とも限らず目の前のヤンキーたちに訊ねた。

「オレらは１年。橋さんだけは２年」

目が腫れぼったい、坊主頭の学生が答えた。

「何だ、３年はいねぇ～のか？　で、橋さんってのは？」

「オレだ！」

短ランを着た、背が低めのその男は、茶髪で長いアゴヒゲが特徴的だ。

「オレは武蔵の宮大地」

宮さんのその言葉に、多勢のヤンキー達は顔を見合わせている。

話を聞く限りアイツらは全員１年。

宮さんと対峙している橋ってヤツだけオレとタメってワケか。

願わくば、コイツら宮さんの名前と顔を・・・・・。

「アンタが宮さんですか。噂通り凄いオーラですね」

おおおっ?!　天から一筋の光がっ!!

橋は知っていたんだ。

宮さんの伝説を耳にしていたんだっ。

いいぞ、橋、そのまま宮さんにゴマをするくらい下手(したて)に出ろ!

そ～すりゃ周りのヤツらは1年だし、すぐに状況を把握して宮さんの下につく。

オレの命も安泰(あんたい)だ!!

「・・・で、総番長さんが、この辺に一体何用ですか?」

「実は・・・」

宮さん、もしかして朝露さんの事を話そうとしているのか?

コイツら、まだ味方だって決まったワケじゃないのに?!

もしコイツらも朝露さんをさらったヤツとグルだったりしたら、ここで一気にアウトだぞ!

・・・いや、だったらオレらがここにいる時点でバレバレか？

とにかく、今はまだ、そいつらを信用するのは早くね～？！

・・・と、その時、オレの気持ちを代弁するかのような竜崎の声が！！

「宮さんっ！！」

威圧的な呼び声と、迫力のある氣。

敵じゃなくて良かった・・・と思わせるほどの氣を放った竜崎の鋭い眼光は、しっかりと宮さんに向けられていた。

そんな竜崎の氣を敏感に感じ取ったヤンキーたちは、一人残らず竜崎に視線を向けた。

せっかく宮さんが場を明るくしてくれそうだったのに、竜崎が一気に緊迫した空気にさせやがった。

宮さんは「オレ何か悪い事した？」的表情でこっちに戻ってきた。

「朝露の事、言おうとしたっスよね、今。ダメっスよ。アイツらまだ味方と決まったワケじゃないんス。万が一、アイツらが朝露をさらった犯人だとしたら、オレら嘘つかれて終わりっスよ」

流石、O型竜崎、オレと同じキレ者だ。

「ガッハッハッハ、だよね」

宮さんは自分の非を認めながら、タバコを胸ポケットから取り出そうとした時、

「タバコはダメよ。学校近いんだから」

ユイに即、止められた。

ユイが言う通り、このすぐ近くに野牛がある。

現に野牛の野球部が練習していると思われ、カキーンという、球が打たれる音が時折聞こえる。

宮さんはションボリしながらタバコを胸ポケットにしまった。

「じゃあ、どうする？」

宮さんが困った顔で聞いてきた。

どうする言われても、どうしよ～ね、マジで。

どうやってヤツらから探ればいいんだ？

「ジオン、アンタ、機転が利くんだから、アイツらから上手いこと聞き出してよ」

はい？　ナニを言ってるんだ、ユイのヤツ。

「オレも今、それを考えてたっス。こ～いう時こそ、ジオンさんの独特なトークが役立ちそうっス」

りゅ、竜崎まで、ナニを言い出す！

オレはオマエらの中で、この間のスケバンミケコとの一件以来、そ～いうキャラが確定してるんかいっ！！

さらに、「宮さんは余計な事を言いかねないから、オレらと一緒にココにいて下さい」と竜崎が言う。

オ、オレ、一人であそこに行けと・・・？！

「よしっ、亀ちゃん、ここはビシッと決めてきてちょ～だい！」

はあ？　宮さ～ん、オレはナニをビシッと決めればい～んだよ～。

勝手にオレを代表にすんなぁ～～～！！

「ジオンさん、頼んだっスよ」

な、何だ～竜崎、その瞳（め）は！

オレを信頼してるっス的な瞳は～！！

「ジオン、頼んだわよ」

こ～いう時だけ優しい言葉掛けるな～、ユイ！！

「亀ちゃん、ヨロシク～」

宮さん、何だよその笑顔～～！！

確かにアンタよりはこの場を混乱させない自信あっけどさぁ～。

え～～～～、マジでぇ～～～～。

「やるだけやってみますけど、何かあったらすぐ助けてくださいよ」

「大丈夫だって」

宮さんは自信有り気に親指を立てたが、オレにはそのエールが当て擦(こす)りに見える。

ユイ、竜崎、宮さんが後ろで見守る中、オレは多勢のヤンキーたちに歩み寄った。

何たる修羅場。

かつて、これほどの度胸を試される場があっただろうか・・・。

単車に跨(またが)った中坊、２年の橋、そして１年が１４人。

駐輪場に中坊が５人。

総勢２１人。

さてさて、コイツらを敵に回す事無く、ここを突破できるかどうかはオレにかかってるワケね。

万が一喧嘩になったら、いくら宮さんと竜崎が強いって言っても、この数相手じゃヤバイだろ～な。

何としてでも穏便に・・・。

「何だオメ～は？」

橋がいっきなりガンをつけてきた。

周りのヤンキーたちも物凄い形相でオレを睨む。

ど～～～～すんの、マジで・・・・・。

第９６話　Ａ型もＡＢ型も見栄えを重視

橋がいきなりガンをつけつつ、「何だオメ～は？」と聞いてきた。

「何だチミは？」ってか？　「そうです、私が亀鶴ジオンです」とでも、言うと思ったか？

心の中で、何度も何度も、「名前は出すな」、「ジオンって言うな」、「ここら辺で名前を売るのはマズイ」という声が聞こえる。

オレは心の中で、その声に言ってやった。

「ナメんじゃねぇ～よ。オレを誰だと思ってる？　野に暮れるようなヘタなマネをオレがするとでも？」と言ってやった。

さてさて、ど～したモンか。

コイツだけが野牛の２年。

これだけの数の１年の中でたった一人、２年。

単車の中坊は、この橋を呼びに行ったトコロを見る限り、この橋ってヤツがこの中でトップなのは間違いない。

もしかすると、そのまま野牛の2年のトップって事も十分有り得る。
番長の長須光雄、そして、スケバンミケコに、コイツが一番近いのは確かだ。
断然、オレの狙いはコイツ一人に絞られる。
後のヤツらは完全無視、決定。

まずはコイツの「何だオメ～は？」という質問に答えねばなるまい。
もちろん橋だけじゃなく、コイツら全員に聞こえるくらいの声の大きさでな・・・。

「見ての通り、オレは宮大地と同じ、武蔵のモンだ。総番長、宮大地同様、オレはアンタらの敵じゃない」

よしっ、我ながら上手くいった。

自分の名を伏せ、尚且つ宮さんが総番長だって事を全面に出しつつ、オレらは敵じゃないと強調。

しかもオレの目線は橋ではなく、周りの不特定多数に向けられてる為、コイツはオレと対峙しているものの、目の前の男は直接喧嘩越しではないという思いを馳(は)せる。

「実は今、ワケあって野牛の番長、長須光雄を探している」

もう、ここに来た時点で宮さんが、中坊に「長須って番長、知ってる？　野牛の番長」って聞いてしまった以上、今更その名を伏せる事もあるまい。

それに、ここにいる誰かが長須の元へ案内してくれた時点で、事件のスピード解決が期待できる。

「協力してほしい。誰か、番長を呼んできてくれないか？」

オレは唇を結びつつ、不特定多数に協力を要請した。

・・・アレ～～～？　誰一人返事がないぞぉ～～～。

「頼むっ。ワケあって急いでるんだ。誰か、番長を呼んできてくれないか？」

返事はない。

オレ、余計な事言ったかな？　急いでるとか、言わない方が良かったかな？

この中に、朝露をさらった犯人がいないとは限らないモンな・・・。

さてさて、ど～したモンか・・・。

「3年は今日、休みだよ」

橋が言う。

な、何〜？　3年が休みだと？　なぜ？！

「休み？　なぜ」

「テスト明けだよ」

ふ〜ん、ま、い〜や。

「じゃあ、番長がどこにいるか知ってるヤツとかいないか、みんなに聞いてくれないか？　宮が番長のケータイに何度も掛けてるんだが、一向に繋がらないんだ」

オレは、橋に特別な使命を与えるかの如く、小声で頼んでみた。

「オイ、誰か長須さんの居場所知ってっか？」

作戦通り、橋は何の躊躇（ちゅうちょ）もなく、オレの頼みを聞いてくれた。

周りのヤンキー達は、それぞれ顔を見合わせて話し始めた。

・・・・ドサクサに紛れて、今がコイツの血液型を聞くチャンスかも。

この橋ってヤツの血液型さえＧＥＴできれば、一気にオレのペース

に持ち込める！

その時、オレの視界にあるモノが入った。

橋の腰からぶら下がってるチェーンの先、尻のポケットからはみ出してるのはルイビの財布。

高級ブランド、しめて7、8万の長財布。

「それ、ルイビ？　高かった？」

「あ？　あぁ」

突然のオレのぶしつけの質問に、ふてくされながら答える橋。

中古じゃないな。

ブランド物を持つ理由・・・、A型は主に人の目を引く為、AB型は主に自慢、B型は使い易さ、O型はノリ。

もし橋がB型ならば、オレの質問に「高くね～よ」的に答える。

B型の返事はひねくれた回答が多いものの、YESかNOを直球で返す。

O型ならば、少なくとも、もう少し会話のキャッチボールが続きそうだ。

・・・と、すると、コイツの血液型はＡ型かＡＢ型。

オレの「高かった?」という質問に対し、あの嫌がりようは、橋にとってルイビは見栄を張る道具である可能性が高い。

こっからが勝負。

「血液型Ａ型?　Ａ型の人って比較的ルイビを好むんだよな」

唐突に血液型を聞いた。

まさに一か八かの賭け。

これで正直に答えればＡ型、曖昧ならＡＢ型。

Ａ型なら、まず最初に正直に答えてから、「血液型は当てにならない」と、血液型判断を断固として否定する傾向大。

ＡＢ型なら相手を警戒するので、そう簡単に教えない。

さ～、どっちだ?!

「それがどうしたっつ～んだよ。そもそも４つの血液型で人を判断するってオカシ～だろ・・・」

・・・?!

今のコイツの返答からして、図星と判断していいのかな?

オレの勝ち?

ふふ・・・

ふふふ・・・

ふはははははは!!

どうだ?!

どうだ、見たかオレの実力!

橋の血液型、ほぼ間違いなくA型ぁ~~!!

さてさて、これからコイツをどう料理してやろうか・・・・・。

第９７話　瞬氣（またたき）と響氣（ひびき）

橋の血液型をＧＥＴし、次の作戦を考えていると、

「コイツら誰も長須さんの居場所知らね～から、他に用がねぇ～ならオレらは行くゼ？」

橋が予想に反し、退却の構えだ。

待てよ～、せっかくこれからだってのに！

・・・でも、語尾に？を付ける辺りニクイね、Ａ型の優しさが滲み出てて。

「待て。なら、スケバンのミケコってヤツの居場所を・・・」

「スケバンって何だよ」

「女の番長だよ。野牛の女番長、略してスケバン」

「知らね～よ」

ダメだ、コイツ、不機嫌になってきた。

Ａ型の頭の中は、最初は物事を把握するまで慌てふためくが、一旦

冷静さを取り戻すと頑固一徹、テコでも動かない。

相手が得体の知れない外敵なら尚更、警戒心を募らせ、心の壁は高く、固くなる一方・・・。

これ以上、橋と友好的に話を進めるのは困難だ。

どうする?!

朝露さんが、ミケコ、あるいは野牛退学組、どっちにさらわれたとしても、この野牛駅に下り立った可能性は高い。

だが、ユイはバイト先での聞き込みで、『１０分くらい前、私服に着替えて出て行った』という情報を得ている。

と、言う事は、野牛駅に下り立った時点で私服な為、そこの中坊たちが仮に朝露さんを見てたとしても、それが武蔵の生徒だったかどうかを知る術はない。

「じゃ～な」

あ～～、橋～、みんな～～～、帰らないで～～～。

橋を始め、野牛のヤンキーたちは、みんな後ろを向いて帰ろうとしている。

コイツらは本当に、朝露さんを知らないのだろうか？

もし、コイツらの誰かが、朝露さん誘拐の事実を知ってて隠してるとしたら、オレは今、コイツらをここで逃してしまった事を一生後悔するんじゃないか？

それで、いいのか、オレ？！

これは遊びじゃないんだぞ・・・。

そう思ったら、今までの明瞭な状況の分析、判断能力が刹那的に消えた。

「オイ、待てよ、橋！！」

凄味を利かせたオレの声に、ヤンキーたちは一斉に振り向いた。

竜崎の時もそうだったが、オレも一瞬にして緊迫した空気を作ってしまったようだ。

しかも、自分で発した氣で、体が電気が走ったようにビリビリとする。

自分の気迫でビビってど～すんだよ、オレ。

「アァ？　気安く人の名前を呼ぶんじゃねぇ～よ」

橋の目が血走っている。

A型の喧嘩っ早さはこれだから困る。

ま、喧嘩を売ったのはこっちだから仕方ねぇ～か・・・。

「オレはオマエの苗字を呼んだんだよ。オレはオマエの名前知らねぇ～し」

「コウジだよ」

教えてくれんのかよっ！！

「オレらは何も知らねぇ～って言ってんだろっ！　オレらは長須さんの許可なくオメ～ら武蔵と揉めるワケにはいかねぇ～んだよ。ココで喧嘩売られても、オレらは買えねぇ～んだよ」

キレてるよ、橋コウジ、結構キレてるよコレ。

・・・と、その時！

「亀ちゃん、どうなってんの？」

宮さんが駆け付けてきた。

「大丈夫っスか？」

「揉めるなって言ったでしょ～よ！」

竜崎とユイも心配そうにやってきた。

「・・・分かったらとっとと・・・・・・・・・帰るぞっ！」

橋がヤンキーたちに号令を掛けた。

絶対今、「・・・分かったらとっとと帰れっ！」って言いたかったよね、コイツ。

でも、それを言うと自分から喧嘩を売った事になるから、我慢して「・・・帰るぞっ！」にしたよね。

「待てコラ～！！」

あ～～～、宮さ～～～～ん！

ガッ

何と、宮さんが橋に掴みかかった。

そのまま・・・

シャウアッ　バシッ

橋は背負い投げで投げ飛ばされてしまった。

ヤンキーたちは目を丸くして、オレたちに向かって声高らかに抗議しだした。

それぞれ宮さんにではなく、オレや竜崎に向けて「何手ぇ出してんだよ～」とか、「ふざけんなよ」とか文句を言っている。

「うるせ～～～！！」

そんな小賢(こざか)しいヤンキーたちに向かって宮さんが吼えると、一瞬で全員大人しくなった。

その迫力は、オレや竜崎の放った氣(き)をも凌(しの)ぐ、まるで地響きすら感じさせるほどのものだった。

第９８話　黄昏の無人駅

「オメ～ら、ぶっ殺されてぇ～のか、コルァ～～～！！」

氣で一気に怯んだヤンキーたちを尻目に、宮さんが怒鳴った。

そんな中、宮さんは地面に大の字で倒れた橋の上に馬乗りになり、胸倉を掴んで言った。

「朝露雫って女を捜してるんだよ。知ってるなら大人しく吐けや」

まるで、白状しないと殺すぞと言わんばかりの殺気に、ヤンキー達は言葉を失った。

・・・・あ～～～あ、とうとう朝露さんの名前を口にしちゃったよ。

今までオレがコツコツやってきた事、全～～部、水の泡じゃんよ。

「オ、オレは知らない。オ、オイ、オマエら、誰か知らないか？」

橋がヤンキー達に聞いたが、全員首を横に振った。

「全員シロね」

ユイが溜息混じりで言った。

「宮さん、もういいっしょ。みんな、マジで知らないみたいっス」

竜崎が興奮する宮さんを、橋から引き離した。

オレもそうだけど、宮さんも一回、頭をリセットした方が良さそうだ。

「宮さん、ちょっと一服しましょう・・・」

オレは宮さんを自販機のある、無人駅のホームへ促した。

今にも止まりそうなほど錆びた古時計が、水道の蛇口から滑り落ちる水のように時を刻む・・・・。

オレたちは、橋たち野牛のヤンキー達に協力を要請し、長須光雄、スケバンミケコ、そして仲村シンの情報を探ってもらった。

1年のヤンキーたちは手分けして、学校に残ってるヤツらに情報を募ったりしたが、これといった情報は得られなかった。

遠くに見える山々に、真っ赤な夕日が沈み行く。

赤く染まった大空を羽ばたきながら、カラスが数羽、哀しげに鳴いていた。

黄昏（たそがれ）ゆく無人駅のベンチに腰掛けたオレたちの影は、音もなく静かに伸びてゆくだけだった・・・・・。

ガタンガタン　ガタンガタン

午後5時、電車から下りた人たちが、無人駅を通り過ぎてオレたちの前を通り過ぎていった。

サラリーマン、老人、女子高生・・・・・。

オレたちは、朝露さんの姿に期待を寄せたが、それも儚く消え去った。

やがて野牛のヤンキー達も、一人、また一人と姿を消し、最後まで協力してくれた橋も、宮さんに「ありがと、もういいよ」と言われて姿を消した。

元からあったのか、それともオレらが吸ったのか、オレたちの使っていた灰皿には、とてつもないほどのタバコの吸殻があった。

オレはオレなりに、竜崎は竜崎なりに、宮さんは宮さんなりに、やりきれない思いでもがき苦しんでいた。

ユイはずっと唇を尖らせ、遠くの景色を眺めていた。

やがて、誰も喋らなくなってから一時間が過ぎた頃、

「もしかしたら、ハンター達かもしれねぇ～」

ベンチに腰掛け背を向けるオレたちに、橋が言った。

「オマエまだいたのかよ。もう、帰れって言っただろ～」

宮さんが迷惑そうな顔で答えた。

「アンタらが探してる女の事だよ」

その一言でオレたちは目が覚めた。

「マジか?!　詳しく話せっ!!」

宮さんが声を裏返して叫んだ。

「ちょっと、それホント?!」

ユイも素早く振り返る。

「マジかよ」

竜崎も開いた口が塞がらないでいる。

オレたちの興奮は、宮さんがベンチから転げ落ちても誰もツッコまない事からも、相当なものだというのが窺えた。

「オイ、橋、く、詳しく話せよ」

オレも橋に歩み寄った。

「この辺りで有名なギャングっつったらアレだけど、ちょっとタチの悪ぃ～連中がいてよ、そいつら、見境なしに若い女を連れ去っては、監禁だのレイプだの、とにかく犯罪まがいの事しでかすんだ」

まがい？

歴とした犯罪だろ、バカヤロ～。

橋が語ったハンターと呼ばれる連中の話は衝撃的だった。

確かに、そ～いう連中が野牛周辺に存在しているという事は、噂では多少耳にしていた。

しかし、どれもこれもオレにとっては現実離れしていたから、遠くの世界の事のようにしか思っていなかった。

でも、今こうして現実を目の当たりにすると、そんな事実が身近に感じざるをえなく、恐ろしくてならない。

ハンター。

主に、野牛を中退したヤツらが結成したチームのようなモノで、月1、2くらいで女をさらっては、数日から数週間監禁し、弄ぶ(もてあそ)という。

時には金を取り、それを商売にしたりもするらしい。

なぜそんな犯罪行為がなくならないかというと、被害者が口を割る事がないからだという。

よっぽど酷い事をされたのか、口止めをされているのか、写真や動画の流出を恐れてるという噂もあるが、それ以上に、ハンターたちの、いわば仕返しが残忍な為、それを恐れて通報もなかなかされないという。

あるいは、そんな事以前に、さらわれた女はどこかの国に売り飛ばされ、日本から消されるという噂もあるそうだ。

野牛駅から港までたいして距離もない為、そんな噂も完全には否定できないらしい。

オレたちが、ずっと口に出せずにいた事だった。

朝露さんの身の危険。

「橋、ハンターの所に案内しろ」

オレは無意識で、そんな言葉を口にしていた。

橋は軽く頷くと、暮れなずむ民家方面へ歩を進める。

その後を、オレたち４人は黙って歩き出した。

第９９話　ハンターのアジテイティングポイント

噂のハンターが潜むアジトへ向かう途中、何人かの野牛の生徒だと思われるヤンキーと擦れ違った。

橋の顔の広さや、権力の高さを窺い知る事が出来る。

オレが分析する限り、Ａ型特有の面倒見の良さとカリスマ性も加わり、橋コウジはこの辺のヤンキー、主に1年から、それなりに慕われていると思われる。

擦れ違いざまのヤンキーが、「大丈夫ですか？」、「応援呼びますか？」と、心配そうに口にする事からもそれを察知できた。

橋を先頭に、武蔵のオレたち４人が立ち並んで歩く姿は、橋の後輩からしたら、さぞ困惑の瞬間だったはずだ。

橋は常々、「大丈夫だ」、「コイツらは被害者だ」と口にし、目的地を語る度、「ヤバイですって、あそこ」とか、「マジ行くんですか？」、「どうなっても知らないですよ」などと言われていた。

それを聞くに、今オレたちが向かってる場所は、相当ヤバイ所だと思われる。

もしかすると、全部が橋の作戦で、オレたちは敵の罠にハマる可能性だって考えられる。

・・・だが、今はそんな事より、朝露さんの安否だけが心配だった。

午後7時を過ぎ、辺りが薄暗くなるにつれ、その思いが強くなる。

オレたちは一言も発さなかった。

「ここが、例のハンターのアジトだ。オレは以前、仲間がここで女を抱いた事があるって聞いた事がある。信憑性はかなり高いはずだ。そいつは土曜の夜には、金さえ出せば、毎週ここで女が抱けるって言っていた・・・」

そこは、ボロボロの2階建てのアパートだった。

朽ち果てた様子や散乱したゴミなどからも、ここの住人の生活態度が窺える。

「毎週違う女が抱けるってんで、ホントは若い女たちの売春の場なんじゃないかって噂もある。ハンターが本当に女をさらって監禁し、ここで商売をしてるのかどうかは分からない」

なるほど。

さらってきたって嘯(うそぶ)いて、女の価値観を高めて客に高く売るっていう手も考えられるな。

「ここがハンターってヤツら、クソ犯罪者の隠れ家か。竜ちゃん、亀ちゃん、ユイちゃん、ここはオレが一人で潜入すっから・・・」

「宮さん、潜入って、こっそり入り込むって意味ですよ?!　宮さん絶対正面から乗り込みますよね?　・・・って言うか、乗り込もうとしてますよね、もう」

オレは片足を階段に乗せている宮さんに、即ツッコミを入れた。

「ここはアタシが行くわ」

「・・・ざけんな。オマエが行ってどうすんの?!　売春する気か、売春。この期に及んでバイトかバイト」

オレはユイの意味不明な発言に対し、これもまた即ツッコミを入れた。

つい調子に乗って毒舌が入ってしまった為、一時期ユイの怒りの氣が辺りに充満した。

「オレが囮になるっス」

「嘘つくな、何が囮だ竜崎。中のヤツら一人で全滅させる気満々のクセに」

竜崎らしくない幼稚な作戦を、オレは即、却下した。

「オレが行く」

オレは、即3人に止められた。

「何でだ～。ここは一番冷静沈着なヤツが行くべきだ。みんな頭に血が上った状態で行っても絶対ロクな事になんねぇ～って」

「アンタが頭、冷やしなさいよジオン」

「そ～っスよ。そんな怖い目して、どこが冷静なんスか？」

な、何ぃ～、オレが冷静さを欠いているだと～～？

い、言われてみれば、確かに頭の中は朝露さんを助けるって事しかないかも・・・。

「みんな一回、落ち着こうか」

ユイの一言で、オレたちは近くのコンビニで夕食をとる事にした。

おにぎりやサンドイッチなどを買ったが、どれも喉を通らない。

もしかすると目の前に朝露さんがいるかもしれないと思うと、気持ち悪くさえなった。

どうしてみんな、そんな冷静でいられるんだ？

どうして今すぐ乗り込まないんだ？

どうして・・・・・。

第１００話　友情

「どう考えても、良い案は思い浮かばないや。オレ、学校退学になってもいいや。そこのハンターのアジト、乗り込むよ」

宮さんが意を決したように言った。

「何も暴れなくっていいっしょ。上手く中に入って、朝露がいるかいないか調べてくるだけでいいんスから」

「竜ちゃん、オレもそれは考えたよ。でも、悪いヤツって、やる事が非道なんだよ。もしかすっと、押入れとかに隠してるかもしれない。そうすると、正攻法じゃ解決できないんだよ」

宮さんの言う通りかもしれない。

「みんな、どうして朝露の為に、そんなに熱くなれるんスか？　特に宮さんは、朝露のせいで退学が危ぶまれてるワケっスよね。なのに、どうしてそこまで・・・」

竜崎の問いに、オレは即、答えた。

「竜崎、それは野暮（やぼ）な質問じゃねぇ～か？　理由なんてねぇ～んだよ。理屈じゃねぇ～んだよ。ダメなモンはダメだろ？　それが善か悪かなんてカンケ～ねぇ～よ。頭が勝手に働いて、体が勝手に動く

んだ」

「・・・そう、だね。ウン。オレも、本能で怒りが沸くし、理由とか後先なんか考えずに、雫ちゃんを助けたいって思うから」

宮さんが下向き加減で言った。

「・・・じゃあ、これが朝露じゃなかったら、どうします？」

竜崎がとんでもない質問をオレたちにぶつけてきた。

オレはその質問に、正面からぶつかっていった。

「知ってるヤツじゃなかったら、命を懸けてまで助ける自信はねぇ～けど、通報したり、誰かに相談したり、極力出来る事はする」

だからこそ、常日頃から周りに対し迷惑を掛けないように生きるべきだし、できるなら、いざとなった時に助けてくれるような仲間がいればベストだと思う。

その為には、自分が常に、率先して仲間を助けるっていう気持ちがなけりゃ、ダメだと思うけど。

オレの正直な答えに、竜崎は小さく頷くと、

「朝露には、命を懸けれると・・・？」

さらに究極な質問だ。

「正確には、竜崎のクラスメートだし、ユイのバイト仲間だし、宮さんが助けたい一心で先頭切って突っ走ってるからかな。きっとオレ一人じゃ度胸なくてここまで来れなかったと思うんだ。でも、今のオレには心強い仲間が3人もいるから」

さらにオレは続けた。

「命を懸けるって言うより、自分の命を守れるって言うか、守ってもらえるって言うか。それより、みんなの命を守れるっつ～か・・・」

何か自分で何言ってるか分からなくなってきた。

でも、竜崎を含め、宮さんにもユイにも、オレの素直な気持ちが伝わったようだ。

「アタシもジオンの意見と同意見かな。異議ないわね？　2人とも」

ユイが竜崎と宮さんに聞いた。

「もちろん」

「もちろんっス」

「じゃ～、決まりね。アタシたちは仲間。これから何があろうと、必ずお互いの命を守りぬくこと。そして、必ず雫を救出すること」

ユイが差し出した手の甲に、竜崎が、そして宮さんが手を置いた。

「当たり前だ」

最後に、オレが手をのせた。

思えばここまでオレたちは一言も喋らなかったり、心がお互いバラバラになっていた。

だから、今こうして、心を一つに通い合わす事には深い、大きな意味があるんだ。

オレは４人の心が通じ合った事で、言葉で言い表せないほどの心強さと、胸の奥から込み上げてくるものを感じた。

ユイの言葉が、熱く、オレの心の奥に響いた。

『アタシたちは仲間。これから何があろうと、必ずお互いの命を守りぬくこと。そして、必ず雫を救出すること』

お互いの命を守りぬく・・・。

そんな熱い言葉に、オレは万感の思いを巡らせずにはいられない。

オレは誰にも見られないように、そっと零れる涙を拭った。

第１０１話　用心棒との戦い

午後８時、２階建てのボロアパート、ハンターのアジトと思しき２階の一室。

今日初めて会い、しかも敵か味方か分からないにもかかわらず、橋がオレたちの為に一肌脱いでくれた。

Ａ型の優しさ、正義感溢れる理性心、秩序を守ろうとする気質に感謝せずにいられない。

「ここが受付の部屋なんだ」

そう言うと、橋は慣れた手つきでノックを７回した。

暗号か？

「橋～、オマエ、初めてじゃねぇ～だろ？　絶対何度か来てるよな？！」

オレの問いに、橋は答えなかった。

すると、中から顔色が悪く、痩せ細った若い男が現れ、橋と何やら会話していた。

「今日は全部で3人いるってよ。運良く3人共、まだ客が付いてないってよ。ど～する？　もしオマエらがＯＫなら、一人、一時間で1万だ。丁度、3人だし・・・」

突然宮さんが橋の前に躍り出た。

橋の胸倉を鷲掴みにすると、

「テメ～、自分は関係ねぇ～みてぇ～な事抜かしてやがったが、随分慣れてるじゃねぇ～か！！」

「宮さん、カッカしないっ！　今はそいつを責めてる場合じゃないっス」

そうそう、竜崎の言う通り、敵が違う。

「せっかく強引に乗り込まなくても、雫がいるかいないか確かめられるチャンスなんだから暴れないで」

宮さんはユイに非難され、落ち着きを取り戻した。

オレたちは、金を払う前にまず女の顔を見たいと主張し、何とか橋がＯＫをもらった。

「アタシはここで待ってるから。ジオン、アンタ変な事したら絶交だからね」

アホ。

金もねぇ～し、そこまでオレは落ちぶれちゃいねぇ～。

それが売春行為だとしても、そいつらの親の顔を思い浮かべたら、そのコにヘタなマネできねぇ～よ。

どんな思いで我が子が大きくなるまで育てたと思ってんだ？

仮に親の愛情なんか知らずに育ったなんてヤツがいたとしても、絶対に嘘、いいわけでしかない。

必ず親代わりになってくれた人がいるはずだ。

ほんの少しの愛情でも、誰かからもらった大切な心を、たった一時の快楽や、ほんの少しのあぶく銭の為に壊してはならない・・・・・。

さらに、どうしようもないくらい、愛情のカケラもなく大人になったヤツがいたとしよう。

そいつは金が欲しくて売春をしているとしよう。

オレはそいつに、こう言ってやるね。

アンタが欲しいのは金じゃねぇ～！　愛だ！！　・・・ってね。

だから、オレはアンタにほんの少しだけど愛をくれてやろう。

オレはアンタを抱かない・・・、アンタがどんだけ魅力的でオレを興奮させても、オレはアンタの肌に指ひとつ触れることはない・・・ってね。

全８室ある２階建てのアパート。

どうやらここが全部、ハンターとやらの住処のようだ。

ここを利用し、例の違法事業も行われているらしい。

オレは１階、竜崎と宮さんは２階の部屋の鍵を受け取った。

ガチャッ

鍵穴にキーを差込みドアを開けると、コタツと布団が敷いてある汚い一室が見えた。

「イラッシャイね～。サービスするわヨ～～～ン」

フィリピン人だろうか？　化粧が濃い、４０代後半～５０代前半と思われる太ったオバチャン外人だ。

オレは引きつる笑顔でドアを閉めた。

丁度オレがユイの元に辿りつく頃、竜崎と宮さんも戻ってきた。

「ダメっス。いないっス。若い女性だったんスけど、高校生っぽかったんで、一応説教かましてきたっス」

「オレんトコも同じ。中学生か高校生だな、ありゃ～。でも、自分から頼んでココで働かせてもらってるって言ってたよ。ムリヤリ連れて来られるコはいないんじゃないかっても言ってたよ。どこまでホントか分かんねぇ～けど」

竜崎も宮さんも、目的の朝露さんには会えなかったようだ。

これでハッキリした。

ここには朝露さんはいない。

・・・と、その時、受付をしていた痩せ型の男が歩み寄ってきた。

「兄ちゃんたち、お疲れさん。約束通り、1万ずつね。3人で3万」

「オイ、橋、対処しろ！」

宮さんが太い声を腹の底から出した。

「鍵を貸した時点で1万なの。これは昔っからのルールなの。これ守ってくれないと、困るんだよね。もしアレなら、そこの部屋に男連中何人かいるから出てくるよ。君たち武蔵でしょ？　アレだったら、君たちの実家探すよ？」

痩せ型の男が虚ろな目で語った。

「脅しか、クソがぁ～～！！」

宮さんは、オレの瞬(まばた)きより速く、痩せ型の男の懐に潜り込んだ。

腰骨を痩せ型の男の腹部に当てるように入り、右手を上げると、左手で相手を崩し、右足で相手の左足内腿を蹴り上げる。

宮さんの内股が鮮やかに決まった！！

痩せ型の男の悲痛な叫び声と共に、２階から雪崩(なだれ)の如く、５人の男が駆け下りてきた。

・・・と、同時に宮さんが先頭の男に見事な背負い投げを決めた。

でも、宮さんそのまま投げ捨てる。

通常の柔道技の背負い投げは、相手を怪我させないように手は離さない・・・のに。

今の宮さん、容赦ねえ～！！

宮さんはすぐに次の男を大外刈りに持っていった。

それをすり抜け、３人の男がこっちに向かって走ってきた。

１人は竜崎に、もう１人はユイに、そしてもう１人はオレに向かってやってきた。

第１０２話　インプリズンメント

竜崎は男のパンチを屈んで避けると、鮮やかにカミソリのような蹴りを放った。

一方、駆け寄った男の後ろに素早く回り込んだユイは、正面でキャッチしていた相手の腕を捻り上げた。

相変わらず見事な護衛術である。

そんな2人に見とれてる暇はなかった。

オレは襲い掛かる男の、上から振りかざす斧のようなコブシを、スポーツテストの反復横跳びでかわした。

こんなトコロで先日のスポーツテストが役に立つとは夢にも思わなかったゼ。

さらに、男はコブシを弓引き、横殴りを狙ってきた。

オレはそんな相手の攻撃を、今度は立位体前屈でかわす。

垂直跳びのような、跳躍力を生かしたジャンプで素早く相手から離

れると、オレは５０メートル走のスタート時を思い出し、ダッシュでそこを駆け抜けた。

ユイ、竜崎、宮さんたちを、小学生時のスポーツテスト、ジグザグドリブル風にすり抜け、走り幅跳びで階段に飛び乗った。

すぐさま2階に駆け上がる。

下から凄い勢いで男が駆け上がってきた。

オレは階段を上り終えると、踏み台昇降運動の上り下りを思い出し、上ったと見せかけたフェイントで、下から駆け上がってきた男を後ろ蹴りで叩き落した。

新鮮組、井ケ田屋の階段落ち並みの迫力で、男は転げ落ちる。

だっ、大丈夫かぁ～～～?!

下におりると、宮さんが痩せ型の男を問い詰めてる所だった。

「他に事件性強い所ねぇ～のか?!　女をさらって何かしてそ～な所に案内しろや!!」

「か、監禁、お、女を数日監禁してたっつ～ヤツ、知ってるっ」

「そいつんトコ連れてけ!!」

オレたちは、ハンターたちの誘導で、そこから近い場所にあるという民家に向かった。

ハンターたちの話によれば、ハンターとは名ばかりで、実はただの売春を利用した商売らしく、安全で健全な出会い系などと偽って売春婦を集め、男性客には「さらってきたての女とデキる」という謳い文句で巧みに騙し、商売をしていたらしい。

宮さんが、「万が一マジで人攫いなんかやってたら、タダじゃ済まねぇ～ぞ。すぐにでも、とっ捕まえてやるからな」とハンターたちに脅しを掛けた。

どうやら全容は、痩せ型の男が親からもらったアパートを利用し、同級生の野牛を退学した仲間たちと一緒に始めた闇商売だったようだ。

やがてオレたちは、ハンターたちの知り合いが住むという、マジで監禁行為をしていた事があるという男の家にやってきた。

築２０年ってトコだろうか？　２階建ての一戸建てだ。

こんな大きな家に高校生が一人暮らしとは、大層な身分だな。

ピンポーン

玄関先に現れたのは、茶髪のロングヘアーの男だった。

男の許可を得るとか得ないとか以前に、宮さんは土足のまま真っ直ぐ2階を目指し階段を駆け上がる。

「何なんだオメ～らよぉ～！　ふざけんなよ、ケーサツ呼ぶぞ、ケ～サツ～」

「警察を呼ばれるような事やってたのは、何処のどいつだ?!」

叫び狂う男に竜崎が一喝。

オレと竜崎は一応靴を脱ぐと、宮さんの後に続いた。

オレたちの後ろからは、ユイと橋、そしてハンターたちが続く。

結局男の家には誰も居なかった。

以前、ある女性を監禁していた事があるという部屋は、薄暗くて不気味な雰囲気を漂わせていた。

帰り際宮さんは、ロングヘアーの男の顔を掴むと、頬っぺたを潰す勢いで握りながら壁に頭を押し付け、

「監禁だぁ～？　テメ～今度そんなクソ汚ねぇ～マネしやがったら、テメ～をぶっ殺してテメ～の家族も根絶やしにすっからな・・・」

お、恐ろしいセリフを吐いた。

「ジオンさん、この人野牛の生徒っスよね。この人経由で、番長と

かスケバンまで辿り着けそうな気がしないっスか？」

竜崎、冴えてるゼ。

「アンタ、何年？」

「3年だよ」

オレの問いに男は渋々答える。

運良く3年だ。

番長、長須もスケバンミケコも3年。

イケる！！

第１０３話　ミケコの行方

監禁男の家で、徹底的に長須とスケバンミケコの情報を探った結果、思った通りの成果を得た。

監禁男の中学時のアルバムを頼りに、近しいと思われるヤンキーたちに電話をしまくり、午後１１時過ぎ、やっと長須とミケコの家を発見するのに成功した。

オレたちは、まず野牛の番長、長須光雄の家を目指す事にした。

流石に橋が帰りたいと言い出したので、とりあえずここで別れる事にした。

オレたちは、深々と頭を下げ、今日一日付き合ってくれたお礼をした。

宮さんが、「何かあったら、いつでもオレの名を出してくれ」という、巷（ちまた）のヤンキーにとっては最高のプレゼントを、橋は笑いながら持ち帰った。

ハンターたちは、オレたちに何度も頭を下げながら、小走りで逃げるように立ち去った。

「とうとう見つけた～。マジ疲れたぁ～～～」

オレの気が抜けたような声に翻弄（ほんろう）され、ユイも竜崎も、立ち止まって大きな溜息を吐いた。

宮さんは崩れるように道路にあぐらをかくと、「そろそろいいよね」と言ってタバコを吸い出した。

思えば今まで一服するのも忘れ、夢中で突っ走ってきた。

こうしてタバコの煙に巻かれるのもホント久しぶりだぜ。

「なぁ～、オレたちってさ、新鮮組みてぇ～だよな」

オレは、ユイが大好きな、江戸時代後期の幕末期の新鮮組の話題を出した。

ずっとユイの険しい顔しか見てなかったから、オレなりに少しだけ気遣いをしてみたってワケだ。

好きな話で、少しでも強張った気が解れてくれればそれでいい。

「どこが・・・」

そう来たか。

ま、B型の特性上、致し方ないっちゃ～、仕方ないが。

「ホラ、新鮮組って、警察活動とかして活躍した組織じゃん。局長

の近藤が宮さんでさ、副長の土方がオレでさ、一番隊組長の沖田が竜崎・・・みたいな？」

「・・・」

アレ？　あっ、そうか、ユイの存在入れるの忘れてた。

まずい、B型は自分が無視される事に一番腹を立てる。

ヤバイ、ご立腹（りっぷく）オーラを感じる。

「ははは。ユイは二番隊組長の永倉と三番隊組長の斉藤だったらどっちがいい？」

「ちょっと黙っててくんない？　疲れて頭痛いから・・・」

ユイはうずくまる様に座り込んでしまった。

そんな情けないオレの姿を見ないように、あっちの方を見ながらタバコを吸う竜崎と宮さんを見ると、自分に対して小さな哀愁（あいしゅう）を感じずにはいられなかった。

それから間もなく、オレたちは念願の長須の家に辿り着いた。

やっと、こっからが本番だ。

気合入れて行かねば・・・。

・・・でも、今日一日気を張りすぎて、もうボロボロズタズタ。

心も体も疲れ果てたよ～～～・・・なんて泣き言、言ってる場合じゃないよな。

こうしてる間にも、朝露さんは・・・・・。

長須の家は、格式の高そうな立派な家だった。

瓦屋根の両脇に聳(そび)えたつ、金のシャチホコ。

3棟ほどの大きな倉。

オヤジはこう、長～～～いヒゲとか生えてそうだゼ。

ピン　ポーン

宮さんが少々遠慮気味にインターホンを押した。

『はい？　どちら様でしょうか』

母親らしき人の声。

流石にこの時間、夜分に申し訳ない気がするが、こっちも一時を争う非常事態だけに仕方がない。

「あの～、光雄君いらっさいますか？」

宮さんがやけに丁寧に喋っているのは、「いらっしゃい」を「いらっさい」と言った事からも十分窺える。

「普段使わない、『緊張』ってヤツをカッコつけて使うからそうなるんですよ」ってツッコミたかったが、とりあえず今は止めといた。

『あの子、今日は帰って来ないんじゃないかしら？　今日は彼女と海に行くって言ってましたけど、午前中に出て行ったし、大抵土曜日はあの子留守ですわよ』

な、なにぃ～～～！

オレにも、いないって言うのに、長須には彼女がいるってかぁ～～～！！

この時間、彼女と一緒なら・・・、彼女の家あるいはラブホテルに違いあるまい。

長須を見つけるのは困難だな、コリャ。

「分かりました。ありがとうございます」

宮さんは丁寧にインターホン越しの長須の母親と別れた。

「ど～します？　ま、これで残るはミケコの家だけですけど」

オレは元気のない宮さんに、一応訊ねてみた。

「最後の希望だ。行くしかないだろ」

オレたちは最後の力を振り絞り、スケバンミケコの住んでいると思われるアパートに向かった。

時はすでに0時を回り、午前1時に近かった。

そのアパートは全体が淡いブルーの色調で、築1、2年の真新しいアパートだった。

名は『野牛荘』、思えば野牛駅の近くだ。

オレたちは今日一日、この町をグルリと一周してきたのであった。

「ここ、野牛農業高等学校の女子寮って書いてあるわよ」

ユイが、ゴミ捨て場付近の木製ボードに書いてあった文字を読みながら言った。

・・・って事は、独り暮らしか。

親御さんを相手にしなくて済むから、多少気楽だな。

それに、６つある部屋、１つだけ抜かして全部電気付いてるし。

・・・何と、１つだけ真っ暗な部屋が日丸ミケコの部屋だった。

何度チャイムを鳴らしても、物音はない。

玄関の裏側に回り、窓から中をそ～っと覗いてみたが、やはり留守なのは間違いないようだ。

ここにきて、オレたちは行き場を失った・・・かに見えたが、ユイが突飛な行動に出た。

「ここの寮のコから、手当たり次第に情報を聞き出すわ」

そんなＢ型ユイの、遠慮を吹き飛ばすようなチャレンジ精神が思わぬ結果を招くとは、この時点では誰も知る由もなかった。

第１０４話　ピンクのお部屋

野牛にしては、比較的マジメそうな眼鏡っコ。

ポニーテールが似合う、物凄く可愛い女のコ。

そして3番目にユイが訪ねた部屋に、そいつは居た。

ピンクのカーテン、ピンクの絨毯（じゅうたん）、ピンクのベッド。

一面ピンクの部屋をバックに、ピンクのパジャマを着た女が玄関に聳（そび）え立つ。

あのメイドカフェに突如として現れた、野牛のヤンキー生徒5人。

その中の一人、朝露さんの髪の毛を引っ張って振り回した女。

間違いない、あの顔を忘れるモンか。

ショートヘアー、そばかす、黒渕眼鏡、そして尖った鼻。

あの女だ。

「何よアンタら。ゲッ、もしかしてアンタ、あの時のメイドじゃない？」

パジャマ姿の女の後ろには、３人の女が酒を飲んでいた。

どうやらコイツら、宴会をしていたようだ。

後ろの３人が、あの時のヤンキー生徒だって事にオレたちが気付くまで、それほど時間を要しなかった。

「ミケコはどこ？　スケバンのミケコ。それより雫は？　ねえ、朝露雫、あの時アンタが髪を引っ張って振り回したコ、覚えてるでしょ？　雫はどこよ」

ユイが女を問いただす。

「はあ？　ちょっと、何よそれ。マジでそんな女知らないし」

「嘘付くなよ。オマエの顔はオレも良く覚えてるしな。まさかオレの顔を忘れたワケじゃあるまい？」

宮さんの登場に、女たちは驚きの顔を見せた。

「な、何よ一体。私らはホント何も知らないから」

「悪ぃ～けど、中、見せてもらっていいか？」

「何よ、変態！！」

宮さんが変態扱いされているっ！

ど～する宮さん、大ピ～ンチ！！

その時竜崎が、

「宮さん、残念っスけど、コイツらシロっス」

「ぐうゥ～～」

宮さんは悔しそうに唸った。

「ねぇ、お願いっ！　スケバンの日丸ミケコを探してるんだけど、誰か連絡付けられない？」

ユイが必死に頼み込んだ。

「はあ？　日丸さんは最近できた彼氏にお熱で夢中だから、今頃ラブホで愛し合ってるんじゃない？」

「あはははは」

後ろからそんな声が聞こえる。

「なぁ、オマエらさぁ、あの時一緒だった、吉岡のヤンキー女子高生2人組のケータイ番号知らねぇ～か？」

オレはあの時の事を思い出し、吉岡の2人組、もしくは上木マヤの線も視野に入れて訊いてみた。

「はあ～？　マジふざけんなって。誰がオマエみてぇ～なションベン小僧に友達のケータイ番号教えるかってんだヨ」

「あのコたちの気を引きたかったら、もっと自分を磨いて来いって」

オレは、後ろからの衝撃的な言葉の数々にダウンした。

膝から砕け落ちる。

腰が抜けるような脱力感もある。

『ションベン小僧』、それにどれほどの意味合いが含まれているのかは大いに謎だが、ブサイク男（ブ男）並みの侮辱的言葉だと思っていいのかもしれない・・・。

そして、『自分を磨いて来い』・・・。

少なくともオレは、あんな女たちの気も引けない、輝きもしない男だってワケか・・・・。

ああ、死んでしまいたい・・・・。

「ジオンさん、大丈夫っスか?!　目を覚まして下さい!!」

オレは竜崎に肩を叩かれ、失いかけた意識を取り戻した。

・・・おっと、イケナイ、思わずぶっ倒れる所だった。

くそ～、意外に強敵だゼ、コイツら。

一瞬とは言え、超ポジなオレを、ここまでネガにさせるとは・・・。

オレが意識を失いかけた頃、ユイは事情を女たちに話していた。

この後オレは、とんでもない事実に気付く事になる。

第１０５話　海陸風

「だいたい話は分かったわ。でも、私らはアンタらにそれほどの恨みなんてないから。現に、日丸さんもアレからアンタの話は出した事なかったし。それに、吉岡のアイツらだって、そんな人を誘拐するなんてマネするとは思えないけど・・・」

「ところでアンタらさ、その朝露雫ってコに連絡取れないの？　もしかすると今頃無事、保護されてるかもしれないじゃん」

そんな女たちの言葉に、オレたち一同顔を見合わせた。

思えば今まで、朝露さんに連絡入れてなかったっけ・・・・・。

「ユイ、朝露さんの番号知らねぇ～のか？」

「ケータイ、バイト先に忘れたのよ。慌てて出てきたから」

「竜崎も知らねぇ～んだよな？　朝露さんのケータイ番号。メアドも？」

竜崎は残念そうに首を振った。

「ダメだよ竜ちゃん、ちゃんとそ～いうのは聞いておかなきゃ・・・

」

珍しく竜崎が、宮さんに説教を喰らっている。

いや、アレは宮さんの、『ドサクサに紛れて雫ちゃんのケータイ番号&メアドＧＥＴだぜ～作戦』かもしれない。

ユイも竜崎も朝露さんのケータイ番号を知らないって事は、もう、お手上げだな。

唯一朝露さんのケータイ番号、及び、朝露さんの安否を知ってるであろう、メイドカフェの店長に連絡をつけるのも、ユイがケータイをバイト先に忘れてきている時点で不可能。

・・・何か、朝露さんが無事かもしれないって線が濃くなってきたような気がするのは気のせいだろうか？

竜崎も宮さんも、むしろユイも、「あちゃ～」的な表情をしている。

「さっ、帰ろっか」

ユイがサバサバ言った。

「ちょっとアンタらさ～、こんな夜中に人ん家訪ねてきてさ、マジ失礼だと思わないの？」

この部屋の主、ピンクのパジャマの女がキレかかっている。

「そ～いえば、アイツってさ～、オレこの人たちの仲間じゃないとか、マジでオレはコイツらとは関係ないみたいな事言ってなかったっけ？」

後ろの女がオレを指差しながら言った。

ヤッベ～～～、あの時の嘘が、バレるぅ～～～！！

「じゃっ、ホント、アリガトネ」

ユイは満面の笑みでドアを閉めた。

ドアの向こうからは、「待てコラ～」とか「ちっきしょ～」などという、甲高い声が聞こえる。

オレたちは猛ダッシュしてその場から離れた。

野牛駅の始発の電車は朝６時。

それまでまだ５時間もある。

この辺に、時間を潰せるような場所は皆無。

カラオケもなければインターネットカフェもない。

唯一のコンビニは、夜11時で閉まってしまった。

オレたちは、途方に暮れるように歩いていた。

気付くとそこは、海だった。

日中は海から吹いていた風が、今は陸から吹き抜ける。

誰もいない港の防波堤で、オレたちは風に吹き上げられていた。

午前3時、冷たい缶コーヒーが、空きっ腹に響く。

さらに、吸いすぎたタバコで喉が痛む。

暗き海を前にして、オレたちは言葉もない。

ただ、さざなみを聞きながら、時間が流れ去るのを待っていた。

宮さんは一人、少し離れた所で佇んでいた。

オレが近寄って声を掛けると、

「ホラ、こっからだとさ、あそこのホテルから出てきた人が見えるじゃん」

宮さんの視線の先には、『渚のギリギリ人魚』というラブホテルがあった。

宮さんは、一人で最後まで闘っていた・・・・・。

「・・・・・・・」

オレは掛ける言葉も見つからず、何も言わずそこから立ち去った。

第１０６話　－　ｌｉｅ（ライ）　－

すっかり明るくなった港の朝は、さぞ忙しそうだった。

倉庫には、トラックや詰め込まれる箱が並び、騒がしい声が幾つも飛び交う。

何隻もの漁船が出港し、朝焼けの海に波しぶきを上げた。

「くっさ～い」

ユイと防波堤を歩いている時だった。

コンクリートに打ち捨てられた、たくさんのヒトデの死骸を見てユイが鼻を摘む。

「コイツらは被害者なんだゼ」

「キモイ～」

「ヒトデって分裂するんだゼ。あとさ、魚食うし、たくさんの種類がいるし・・・」

「ねぇ、この辺に公衆電話ないかしら？」

「公衆電話？　あの駅まで行くしかないんじゃね？」

「だよね。そろそろ5時でしょ？　始発は6時だけどさ、駅、行かない？」

「あ、ああ」

オレとユイは、ラブホを見張る宮さんと、どうやって作ったのかは分からないが、手作りの釣竿で釣りをする竜崎に声を掛け、野牛駅へと戻った。

ユイが公衆電話を見つけるやいなや、すぐに受話器を掴んだ。

自宅に電話を掛け、バイト先、メイドカフェの店長のケータイの番号を母親に聞き出したようだ。

「そ～いえば、オマエ外泊するって親に伝えたの？」

というオレの質問に、「当たり前じゃない。昨日の夕方には電話入れといたわよ」という答えが返ってきた。

どうしてその時、朝露さんのケータイ番号聞き出そうって閃（ひらめ）かなかったのだろう・・・と、一物の疑問を覚えたが、今更責めてもしょうがない。

思えばオレ、親に電話すんの忘れたわ・・・なんて考えていると、

「店長、お早うございます。・・・そう、雫の電話番号。・・・そ

う」

さぞ、こんな日曜の朝っぱらから起こされて、店長も迷惑だろうな。

ユイはすかさず、メイドカフェの店長から聞き出した、朝露さんのケータイに電話を入れた。

ど～して店長に、昨日朝露さんはその後どうなったのか聞かなかったのだろう・・・と、一物の疑問を覚えたが、今更責めても、これまたしょうがない。

「あ、もしもし?」

もしかして、繋がったのか?!

オレも竜崎も宮さんも、固唾を呑んで状況を見守った・・・・・。

「あっ、雫ちゃんのお母さんですか?」

な、なに～～? ど、どうしてお母さんが朝露さんのケータイに出るんだぁ～～～?!

オレは心配そうな表情を浮かべる竜崎と、蒼白顔の宮さんと交互に目を合わせた。

イヤな予感が胸を過ぎる。

『待っててね。しずく～～～、電話よ～～～。しらとりさんって人から～～～』

受話器の向こうの、朝露さんのお母さんの声が聞こえる。

・・・へ？　いるの？　朝露さん。

『ハイ、むにゃむにゃ？』

「あっ、雫?!　無事だったのね。あ～～～、良かったぁ～～～」

『ハイ？　何のことですか～？　心配したのはこっちですよ～。突然バイト抜け出して出て行っちゃったんでしょ～？　ダメですよ～、理由くらい告げなきゃ～』

はて・・・？

受話器の向こうから聞こえる朝露さんの、スローペースの声に耳を傾けるオレたちは、目をパチクリさせながら耳を澄ませた。

「アンタの弟に、アンタがさらわれたって聞いたから、今までずっと探してたんだけど・・・」

『はい～？　私はずっと寝てましたよ～？　昨日は夕方6時でバイト終わらせてお家に帰ったし』

な、何てこった・・・。

「アンタの弟が・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・あ～～～、皿、割れましたね～～～、確かに』

皿、割れた?!　出たよ、ダジャレだよダジャレ！

たくさんの人たちを、メッチャクチャ巻き込んで、このオチだよ、このオチ!!

『・・・弟たちのテーブルにですね、私～、転んでぶつかっちゃったんです～。そしたら～、お皿が床に落っこちてですね～、割れちゃったんで～、処理しようとしたら～、破片で指を切っちゃったんですぅ～。私ってドジですよね～～～』

ユイがメイドカフェで得た、２つの情報の内の１つ。

朝露さんのメイド服には、血が付着していたという謎が、ハイ、解けましたっ！

『それで、絆創膏を買いに近くの薬局まで行ったんです～。メイド服で外に出るの恥ずかしいんで～、着替えて行きました～～～』

そしてもう１つの情報、バイト中、私服に着替えて外に出て行った謎も、ハイ、解けたぁ～～!!

「ばか～～～っ！」

ガチャン

ユイは、ちょっと八つ当たり気味に電話を切った。

「てへっ」

舌を出して恥じらいの表情を浮かべるユイ。

何が「てへ」だよ、何が！

竜崎は、長い長い溜息を吐きながら、かなりの作り笑いをしている。

「まっ、一件落着だ」

宮さんが締め括った。

一件落着～？

・・・どこがじゃ！　お陰でこの辺でオレの顔売れたよ！！

結局終始、Ｂ型コンビの洞察力の無さ＋突飛な行動（考えるより先

に行動）に、オレと竜崎のO型コンビが振り回されたカンジだった。

ユイはミケコのせいにしてたし、宮さんは野牛退学組のせいにして、我先にと飛び出そうとしてたモンな。

も～～～～う、早く帰って、寝るっ！！

第１０７話　とるにたりない

夜中・・・

「今度会った時がテメ～の命日だ。アッハッハッハッハ・・・」

そんな芒（すすき）の胸クソ悪いセリフを思い出し、オレは何度か目を覚ました。

汗で濡らしたＴシャツを洗濯機に放り投げ、パンをかじりながら玄関を出る。

近所の家の前に霊柩車が止まっていた。

今日は朝から縁起が良い。

学校では、校門に生徒指導の教師たちが勢揃いしていたり、リッキーが朝のホームルームを留守にしたり、何だかキナ臭いムードが学校中に漂っている。

まるで、何かを警戒しているようだ。

宮さんが屋上で、吉岡の１年１０人に襲われた日を思い出す。

宮さんの登校に、大層にも沢山の教師が、テロの警戒として校内を見張った時があったけど、あの日にまさしく襲撃があった。

今回も事前に予告でもあったか？　まさかな・・・。

オレは一物の不安を窓の外に投げ捨てた。

そんなオソロシイ事を想像してたら身が持たない。

何事もなく、穏やかなまま４時間目が終了。

隣のユイは、朝から大人しい。

口も聞いてくれない。

さては一昨日、はしゃぎすぎたから反省してんのかナ？

・・・っつ～のは冗談で、さすがにショックだったんだろ～な。

自分の早のみこみで沢山の人に迷惑掛けたんだもんな。

今はそっとしておいてやろう・・・。

今日、芒は停学明け、復帰の日のはず・・・・・。

でも、昼休みまでココに顔を出さないトコロを見ると、今日は休みか？

いや、ヤツはとっくにオレの存在なんて忘れてるかもしれない？

どっちにしろ、あんまり教室から出たくないや。

弁当持ってくりゃ良かったかな？

オッキーに売店でオレの昼食を買ってくるよう頼んだが、鬼のような形相で「パシリじゃねぇ～ぞ」と断られた。

1年の頃は、たまにオレとテルが頼むと、優しい笑顔で快く買ってきてくれたのに、変わったな、オッキー。

昔の方が、オッキーらしくて良かったのに・・・。

今日宮さんは、ついに吉岡の番長、大橋剛太に会って、野牛の番長、長須光雄との接触を試みるそうだ。

今まで大橋には心配掛けたくないからと、野牛と揉めてる事を黙ってた宮さん。

一方竜崎は、野牛ナンバー2、仲村シンとの接触に成功した。

昨日、中学の時の友人に連絡をつけ、仲村の電話番号をゲット。

今日、会う約束をしたらしい。

と、いうワケで、竜崎も宮さんも、今日は学校を休んでいる。

今日は色んな意味で、大きな動きがありそうだ。

何だかんだと理由をつけて、オッキーをお供させようとしたが、全く持って付き合いの悪い男だ。

渋々一人で向かった売店の、混雑さったらない。

これなら芒がいたとしても、お互い気付かない。

少しホッとしながら売店に突入。

しかし、どうして学校側は、こんな初詣や正月のアメ横並みの人ごみを、毎日許しているんだろう？

並んでる順番とか関係なく、強引なヤツ、目立つヤツや要領がいいヤツらからバシバシ買ってくし。

新作ゲームの発売日に並ぶオタクたちや、バス停に並ぶおばちゃんたちのように、みんな順番を無視しないでルールを守ってほしい。

・・・ん？　もしや？　そ、そうか、分かったぞ！

どうして学校側が、こんな混雑やルール無視の状況を見て見ぬフリをするのか。

そ～いうことか。

学校とは学びの舎。

つまり、社会は混雑混乱を極め、ルール無視の世界も多々あるよってのを、こうして実践で学ばせているワケか！

・・・いや、単にこの売店オヤジたちが要領悪いだけかもな。

・・・『ブッ』。

そんな事を考えていたら、屁が出た。

それからオレは、人ごみの中で屁をしまくった。

アレだよ、野牛とか芒のせいだよ・・・。

精神的にデリケートなんだよ、オレは。

オレのオナラが止まらないのは、１週間便秘気味だったからだと思われる。

普通に並んでたら３０分は買えないトコロを、３分で脱したオレは、焼肉弁当と焼きそばパンを持って屋上に向かった。

屋上へ向かう途中、階段を１段上るたび「プッ」。

オレは、『プッ』『プッ』『プッ』『プッ』リズムに合わせるように階段を上った。

陽気に一応クルッと後ろを振り返り、下を確認。

誰もいない。

『プッ』『プッ』『プッ』『ブ～ッ』・・・・・ん？　いる？？

オレはもう1度後ろを振り向いた。

・・・・お～まいがっ！！

あ、あ、あ、朝露さんが、オレのケツら辺にいる。

オレの尻にくっつくほど近い距離に、朝露さんの頭が見える。

下向きで、ほくそ笑みながら、オレの後をつけてきている。

『ブッ』・・・。

第１０８話　ＡＢ型の女はガタイがイイ男に憧れる

「売店からずっと付いてきてたの知らなかったんですか～？　ジオン先輩～、買ってる時、私～、隣にいたんですよ～」

なぬぃ～？！

もう、開き直るしかない。

臭いや音や、そんなモンどうでもいい。

人間誰でもオナラするしウンコするじゃん。

朝露さんだって、ユイだって、佐倉だって、みんなするじゃん。

オレの後を追うように、朝露さんも屋上にやって来た。

屋上は意外に人は少なく、青空の下、のびのびとメシが食えそうだ。

せっかくだから、あの事を聞いてみるか・・・。

「ちょっと噂を耳にしたんだけどさ・・・」

Ｏ型はＡ型と違い、突っ込んだ質問もＯＫ。

その代わり、巧みにすり抜けたりするけどね。

「朝露さんのお母さんが学校に来たって話」

「・・・・・・」

図星、それは間違いないみたいだな。

「宮さんの事なんだけどさ、宮さんが今度野牛と揉めたら即退学だって、リッキーに脅されてんのね。朝露さんさぁ～、何か宮さんの事、誤解してない？」

「え～？　宮先輩は大好きな先輩です～！」

だ、大好き？

れ、恋愛対象じゃないよな、まさか。

マッチョ系や強い男に憧れ易いＡＢ型じゃあるまいし、もしかしてモンスターマニアとか？

いや、ここはそういう意味ではなく、普通に友達として好きという意味で受け取ろう。

「私～、家ではジオン先輩とか光一君とか、ユイ先輩とか宮先輩の話ばっかりするんですけど～、この間の野牛のスケバンたちの件の時も、宮先輩には助けてもらったって言ったし～、ウチの母が宮先輩を悪く言うとは思えません。それに～、今度機会があったらウチにみんな遊びに来て欲しいって母は言ってました～。ご馳走作るっ

て」

行く～！　ご馳走食べる～～！！

・・・ってか、やっぱり朝露さんもシロ。

母親もシロっぽいな。

オレはてっきり、

朝露母「変な連中と、最近娘が付き合ってるみたいなんです～」

リッキー「誰ですかね？　名前とか知ってるカンジですか？」

朝露母「ミヤ・・・？　確か、そのようなカンジの」

リッキー「おそらく宮大地の事ですな」

朝露母「そうそう、その人です」

リッキー「どうします、校長！」

校長「では、今度揉めたら、即、退学って事で・・・」

的な流れだと思ってたけど、違うみたいだ。

するとアレか？　校長室にリッキーもいたって聞いたけど、最初からいたんじゃなくて後から来たとかで、会話の途中から登場したか

ら、リッキー話の内容知らなくて、母親の口から宮さんの名前が出た時たまたま誤解したってヤツか？

A型は妄想を膨らませる達人だし、妙に早とちりだからな。

そんで宮さんが野牛と揉めたせいで、関係ない善良な生徒まで犠牲になってるって勝手に思い込んで、「今度野牛と揉めたら即退学」を勧告したんだな。

「ウチの母が、学校に殴り込んだとか～、極道の妻（おんな）だとか言われてますけど、全くの誤解ですから～。ただ、ウチの母、呉服屋さんで働いてるから」

呉服屋さん？　だから着物なワケね。

オレも着物って聞いて、てっきりスジ系、もしくは水商売系かと・・・。

オレはそんな事を考えながら、自分の口元についた焼きそばのソースをティッシュで拭った。

「光一君、今日、お休みですかね～？」

「光一？　竜崎ね。ウン、今日は来ないよ、おそらく」

朝露さんは「ふ～ん」的な顔で口元を微笑ませた。

淡いピンクのリップクリームで光る小さな唇を見るたび気になって

た事を、オレはついに切り出した。

「ねぇ、あの日、本当に何もなかったの？」

朝露さんの口元に、見慣れない痣（あざ）があるのをオレは最初から見逃さなかった。

人間、殴られて一番腫れあがるのが、皮膚組織の薄い、デリケートな口元。

殴られた直後より、翌日の方が腫れたりする。

「私がさらわれたって話ですか～？　そんな事あるワケないじゃないですか～。現にこうしてココにいますよ～」

朝露さんの瞳は、いつも以上に澄んでいる。

オレの経験上、朝露さんの口元の痣は、ぶつけたって言うより殴られた痣のように見えるんだけど、本人否定してるし。

朝露さんの母親が武蔵側に相談した事で、野牛のスケバンたちが自分の学校の教師に怒られ、腹癒せにメイドカフェに来た、という流れがしっくりくるんだけどな・・・。

「・・・・分かったよ。じゃ～、アレね。野牛とはホントに何もないのね？」

あったら困るけど。

「・・・・・・・・・・はい」

朝露さんは、ニッコリと微笑んだ。

うっ、何か怪しい～、何か隠してそ～。

その時オレは、中学の時、職員室で担任に、「本当にイジメられてないのね？」と聞かれた時の事を思い出した。

あの時オレのこめかみ付近には、しっかり靴裏の跡がついていたから、クラスの誰かから報告を受けたのか、担任自ら気付いたのか分からないが、とにかくオレを職員室に呼び出して真相を聞こうとしたんだと思う。

担任の質問にオレは笑顔で返答した。

「・・・・・・・・・・・・はい」

第１０９話　泣いてもいいと思うよ

イジメられてたのにそれを誰にも言えず、心の奥深くにずっと隠し込んでいたオレ。

救いの手が差し伸べられたにもかかわらず、その手を払いのけたオレ。

でも、あの時のオレと、今の朝露さんは違うよな？

オレは親にも友人にも、手を差し伸べてくれた担任にも言えなかったから。

朝露さんは、しっかり自分がメイドカフェで、野牛のスケバンたちに髪を引っ張られて振り回された事実を、母親に話している。

だからこそ母親が学校まで出向いてくれたんだ。

じゃあやっぱり、一昨日バイト先で何かあったんだとしたら、母親に話すよな・・・。

一応、念の為に、もう一度手を差し伸べてみるか・・・。

中学の頃オレは、誰かに何て言われたら嬉しかったかな?

誰にだったら心を開けたかな?

誰の救いの手だったら掴めたのかな?

何て言われたら・・・・・。

オレは朝露さんの母親が、娘の為に学校に来たって聞いて、少し嬉しかった。

でも、朝露さんのクラスのヤツらは、「甘やかしすぎなんじゃね?」とか、「高1にもなって、喧嘩に親が顔出すかよ」とか、「盲愛」「親バカ」なんて言ってたって話を聞いて、少し寂しく感じた。

子供に優しい親もいれば、厳しい親もいる。

最近、幼児虐待なんかのニュースが多くて、こんなオレでも考えさせられる。

結局、そこに愛があるかどうかが大事な鍵のような気がするんだ。

甘やかし過ぎても優しくし過ぎても、子供の自立心を奪ってしまいかねない。

逆に厳しすぎても子供の愛を枯らしてしまう。

やっぱり、ほどほどが大事なのではないだろうか・・・・・。

だが、今回の朝露さんの母親が娘に対して持った感情は、子育てを越えた所にある、目に見えない何かがあるような気がするんだ。

子供は本能で、知らない人に叩かれたら、泣くし喚(わめ)くし親にチクる。

力の弱い自分を守ってもらうためだ。

生まれたての赤ん坊は、自分で危険を回避できないから、物音に敏感だし、誰かの救いを求めてすぐ泣き喚く。

大人の社会を自然に生き抜こうと思ったら、やはり子供と同じ行動を起こすよりほかないんじゃないのか？

自然な流れ（人間の本来、あるべき生き方）に逆らおうとするから、ズレが生じるんじゃないのか？

オレは、吹き抜ける風がやってくる方向を睨みつけた。

遠くに見える山々は雄大で、尊厳すら感じさせる。

そんな偉大な自然に逆らうかの如く存在する街。

歪(いびつ)だ。

地球が人間だとしたら、オレたちが住んでいる街はまるで、肌に付いた瘡蓋(かさぶた)のようだ。

そこで右往左往している人間は、肌の上で歩き回る微生物。

キモチワルイくらい、うじゃうじゃと歩き回る。

そんな景色を眺めながら、心の奥底に巣食う、オレの中の世間という悪魔にマシンガンの銃口を向けた。

世間や周囲の目を気にして、「いい大人が・・・」とか、「自分で何とかしろよ・・・」とか、「オレはこうして生きてきた。だからオマエも・・・」とか、そ～いう考え持った大人たちばかりだから、せちがれぇ～世の中なんじゃねぇ～の？

もっと、みんな助け合って生きていければ、心にゆとりができて、平和な世の中になるんじゃねぇ～の？

人と人の間に生きる、人間って、本来そうやって生きるんじゃねぇ～の？

誰も一人で生きていけねぇ～だろ、ぶっちゃけ。

子供は本能で、知らない人に叩かれたら、泣くし喚(わめ)くし親にチクる。

でも、そんな頼りの親が子供を叩いたら、子供はどこに救いを求めればいいんだろう？

人は大切な人と生き別れた時、立ち直るまで1年は掛かるらしい。

自然な心の回復を待つには、癒されるまで相当な時間を要するのだ。

だから、落ち込むのは必要な事なんだ。

そうする事により、その姿を見て周囲がサポートしてくれる。

メシも喉を通らなくなるのは、活動する気力が失われる為、それほど栄養が必要じゃなくなるから。

そんな人を見て、周囲が食事を用意してくれるから、ゆっくり回復できる。

つまり、物音に敏感になったり、眠れないし臆病になるのは、弱い自分を守るための防衛本能。

だから、弱くていいんだ。

助けてもらっていいんだ。

でも、現代人は「いつまでもそうやって落ち込んでないで・・・」とか、無理に忘れさせようとしたり、涙を我慢させたり、笑おうとさせたり・・・。

周囲のサポートが、自然の流れから逸れている。

それは、そもそも自分が子供の頃から、周囲の自然なサポートを受けてないから、人にやれって言われても、分からないし出来っこない。

子育てしかり。

幼児虐待をする親の８割は、自分も虐待された経験を持つという。

自分がしっかり育てられずに成長した大人が、しっかりした子育てを出来るワケがない。

でも、だからこそ、どこかで連鎖を断ち切らなきゃならないんだ。

悪い連鎖を。

オレは引き金をひいた。

自分が親に冷たくされた？　だったら自分は、絶対子供に冷たくしねぇ～って思えよ！

誰にも助けられず生きてきた？　だったら自分は、たくさんの人を助けまくって生きてやるって思えよ！！

だって、自分が親に冷たく育てられたら、どんだけ辛いか、苦しいか、寂しかったか知ってるじゃん。

自分が誰にも助けられず生きてきたら、どんだけ辛いか、苦しいか、寂しかったか覚えているじゃん。

昔の自分と同じ気持ちを持たせたい？　あの頃の自分の気持ちを分からせたい？　分かってもらいたい？

寂しかったんだろ？　だったら素直に認めろよ！　寂しいんだよ～～～って！！

みんな助けてくれっから。

人を助ける方法が分からない？　子供を育てる方法が分からない？
愛し方が分からない？　上手に生きていく方法が分からない？！

求めろよ、方法を、救いを！　教えてくれるヤツ、助けてくれるヤツ、いっぱいいるから！！

愛してくれるヤツ、必ずいるから！！

サポートしてくれるヤツ、必ずいるから！！

心の中で、見えない敵にマシンガンをぶっ放したオレは、ニッコリ微笑む朝露さんを視界から外し、町並みを眺めた。

そして、心の葛藤と戦って息切れしている自分に問う・・・。

そりゃ～世の中、人の数だけ真理は存在すると思う。

地球上の全人口が同じテーブルで話し合えば、膨大な数の正義と悪が入り混じると思うさ。

・・・でも、オレの中の真理は一つだろ？

・・・・・なぁ、ジオン、正義を貫いていこうゼ。

オレは朝露さんの母親がとった行動を支持する。

じゃあ、朝露さんの母親が抱いた感情とは一体・・・？

単なる本能？　正義？　愛情？

オレが朝露さんに対して抱いたような、守ってあげたいと思う気持ち？

それは過去の自分への慰めでもあるのか？

・・・まて、待て待て待て～、待てよオレ！

何を迷ってる？　何を躊躇している？　もしかすると朝露さんは深刻な状況なのかもしれないんだゼ？！

過去のオレのように、切羽詰ってるのかもしれないんだゼ？

面倒かどうかを遠回しに探ってる場合じゃねぇ～だろ。

傍観者になっていいのか？

路上で通り魔殺人があったら、ナイフを持ってるヤツや刺された人たちをケータイで撮影してるようなヤツや、事件事故の被害地や被災地を観光して笑ってるようなヤツらと一緒になっていいのか？

・・・全てひっくるめて考えるまでもないな。

あれこれ理由をつけて行動を起こすまでもない。

そしてオレには、朝露さんのように辛い状況にある時の気持ちが良く分かる。

だったら答えは一つだ。

オレが朝露さんに出来る事、それは・・・、自分が出来る限りの力を使ってサポートすること・・・。

屋上の手すりに肘をつけ、遠くを細い目で見つめながらオレは、昔の自分に言ってみる。

悲しい時は、人前で泣いてもいいんだと思うゼ・・・・・。

そんな言葉をオレは、無意識で言っていた。

「悲しい時は、人前で泣いてもいいと思うよ」

第１１０話　詩話総亀（しわそうき）

ふと、その時、オレの見つめる方向に、歪（いびつ）なものを発見した。

遠くの住宅地の路地を覆い尽くすような、動く黒い固まり。

見た瞬間、吸った息が吐き出せなくなった。

血の気が失せる。

唾が飲み込めない。

野牛の生徒と思われる、学ランを来た集団。

少数だが、セーラー服の女子も交じっている。

１００人ほどの野牛勢が、武蔵目指して押し寄せている。

金属バットを抱えたヤツ、フルフェイスを片手に持っているヤツ、木刀、チェーン・・・。

「キャーッ！　私のせい？　私のせい？！」

隣でオレと同じものを見た朝露さんが絶叫した。

「勘違いすんな、朝露さん。アンタは被害者だ！　正義を貫けっ！！」

落ち着け、落ち着け、オレ。

アイツら相手にこれからど～する？

１００人相手に戦うのか？！

屋上から真下を見下ろすと、朝と同じく校舎付近で隠れるように立っている教師を発見した。

やっぱりアイツら、野牛の襲撃を事前に知ってる！！

ど～する？　竜崎も宮さんもいない今、ど～する？

とりあえずオレは、凄い勢いで階段を駆け下り、全速力で廊下を走り抜け、教室へ駆け込んだ。

昼休みで和やかだった教室は一瞬で静まり返り、みんな驚いた表情でオレを見る。

「ユイは？」

ユイの席には誰もいない。

いち早く目が合ったオッキーが、「どーした？　何があった！　芒か？！」と、真顔で言った。

「ユイはどこだ？」

「ぐ、具合が悪いって言って、ほ、保健室に行ったよ」

佐倉が目を丸くしてオレに答える。

・・・保健室？　なら、一先ず安全だ！

「オッキー、来いっ！！」

オレはオッキーを廊下に連れ出した。

「何だよジオン、血相変えて、何があった？」

「落ち着いて聞けよ」

「オマエが落ち着けよ、ジオン」

「野牛が来る。凄い人数だ」

オレの一言で、オッキーは一瞬のうちに血相を変えた。

「ヤギュー？　一体、何の用だー？」

「殴り込みだ。もうすぐ１００人くらい、ウチに乗り込んでくる」

「マジか？　な、な、な、な、な、ナンでー？　ヤギュウの目的はナニ？」

「おそらくヤツらの狙いはオレたちだ」

「は、はあ？　冗談はよせ、こんな時に」

今まで我を失いつつあったオッキーだったが、騙（だま）された～的表情で言った。

「野牛の目的は、きっと大した事じゃないって！　他校と絡むイベントって何かあるだろ～。ホラ、体育大会とか合唱とか何かの発表会とか。分かった、部活動の対校試合で・・・」

「とても友好的には見えなかったけどな、野牛のヤツら。それにオレは冗談を言ってるんじゃねぇ～よ。思い当たるふしがあるんでな」

オレの言葉に、オッキーはまたもや顔を蒼白させた。

「まさか、宮さんとかが目的か？」

「その宮さんは休みだ」

オレの言葉に、オッキーはまたまた顔色を元に戻した。

「な～んだ。なら、一安心だな」

「・・・・・・・・・・」

ミケコや長須の立場に立ったら、濡れ衣で自分の家まで来られたとあったら、腸（はらわた）、煮えくり返る。

自分らのテリトリーに土足で足を踏み入れたオレたちを、許すはずがない。

こうなるのは分かっていたんだ。

だから宮さんは大橋に相談に行ってるんだし、竜崎だって仲村シンと接触して交渉してるんだ。

宮さんたちはどうしてるんだ？

この事実を知っているのか？！

第１１１話　オッキーの切り札

その時、オレの視界に６組の長山の姿が入った。

深々と腰掛けるように椅子に座り、前の席の机に足を乗せて、相変わらず下品に手下たちと戯(たわむ)れている。

楽しげにしているが、額に巻かれた包帯が痛々しい。

頭割られても口を割らなかった長山。

オレの名前を芒(すすき)に出さなかった長山の手下たち・・・。

「宮さんも竜崎もいねぇ～けど、学校は、オレが守る！」

「はあ？　何寝言ほざいてんだよジオン。宮さんも竜崎もいねぇ～なら、尚更良かっただろ。先公に任せろよ、野牛の殴り込みなんて。それにさ、オマエ自分を過信しすぎなんだよ」

オッキーが溜息交じりでオレの言葉にケチをつける。

「ど～いう意味だよ」

「オレ、この前さ、６組の安藤に聞いたんだよ。ウチのクラス、芒に狙われてんだけど、カンパの件、どうしたらいいかって・・・」

・・・は？　何、余計な事してんの、コイツ。

「そんなの今更知らねぇ～って言われたけど、しつこく何かいい方法がねぇ～か聞いたら、とにかく1組の芒たちに謝れって言ってたよ。長山も一緒に頭下げてくれるってよ」

ワビ入れろって？

長山もそれに付き合ってくれるって？

・・・こんな時にオレを怒らせるなよ、オッキー。

「どのツラ下げて、長山と一緒に、芒らなんかに頭下げれるっつ～んだよ」

「オマエ一人で何とかできる問題じゃねぇ～だろ。オレはオマエが校舎裏で芒とやり合った時から、ずっと考えてたんだよ。あん時はオマエの気迫に負けて、協力してやるなんて言ったけど、やっぱり付き合いきれねぇ～よ。考え直せよジオン。あのテルですら黙って従ってたんだ。それにオマエ、野牛とか敵に回してたら、そのうちギャラクシーとか敵に回す事になるんだぞ。その前に、命いくつあっても足りないぞ」

・・・だから、テルの名前とか出して、マジでオレを怒らすなって!!

「オッキー、てめぇ～オレを何だと思ってんだよ。そこら辺のザコと一緒にするんじゃねぇ～!!」

オレは今にもオッキーをぶん殴ってやりたかったが、オッキーの襟首を掴んだだけで何とか堪えた。

「なぁ～ジオン、知ってるか？」

オレを冷め切った目で睨むオッキー。

オレの心を凍りつかせるに十分な何かを掴んでるとでも言うのか？

だが、残念だがオッキー、どんな言葉も、今のオレの怒りを、この帯びた熱を冷却させることは不可能だ。

「カラオケの時オマエ、チョーパン1発で長山たちをノシたんだってな。オマエ、まさか本気でチョーパン1発でアイツらノビたと思ってたのか？」

何かと思えば、コイツの切り札はそんな事か・・・。

くだらねぇ～。

「ジオンの攻撃で死んだフリをしたのは、バックが怖かったからに決まってんだろ。竜崎とか宮さんとか居たから、死んだフリしたに決まってんだろ」

オッキーは勝ち誇った顔で言った。

「・・・・・」

ヴォン　ヴォ　ヴォ　ヴォ　ヴォ　ヴォ　ヴォ

爆音が聞こえてくる。

その音で周りの教室から沢山の生徒たちが廊下に出てきて、窓の外を見出した。

「離せよジオン。その手を離せ」

オッキーはオレの手を振り解くと、窓の外を見て言った。

「ジオンには怪我をしてほしくねぇ～んだよ。死んでほしくねぇ～んだよ。頼むから、ムチャすんなって」

「・・・・・」

オレはオッキーを無視し、その場から離れると、廊下を走り抜け、階段を駆け下りた。

第１１２話　弥次馬

玄関はすでに、沢山の生徒たちが集まっている。

ゲタ箱に手をやると・・・。

「待てよジオン」

出たよ、しつこいＡ型。

「マジくどいんだよ。邪魔だ、消えろ」

オレの冷たい言葉にも負けず、オッキーはまたもや「待てよ」と言ってオレの手を掴む。

「しつけ～んだよっ！　ど～せオレは弱ぇ～よ。超弱ぇ～かもしんねぇ～けど、自分のケツは自分で拭きてぇ～んだ。誰にも迷惑掛けたくねぇ～んだよ」

「仲間にもか？」

「はあ？」

オッキーは自分のゲタ箱から靴を出して履きながら、オレに手を差し伸べた。

「行くんならオレも連れてけジオン。地獄でもどこでもお供してやるよ」

・・・フン。

掴んだオッキーの手は温かかった。

「オレより弱ぇ～くせにカッコつけんじゃねぇ～よ。来るなら勝手についてきやがれ」

力いっぱいオッキーの手を振り解く。

オレとオッキーは、野次馬たちをかき分けて外に出た。

正面玄関には、生徒指導の大和を中心に、竹中、内藤、そしてウチのクラスの副担任の４人が立ち並ぶ。

リッキーは職員室に陣取り、高みの見物気取りだ。

いつでも警察に通報できるよう、手を伸ばせばすぐの所に電話を置いて。

この校舎からは、オレとオッキーの他、外に出てきそうな生徒はいない・・・・・と、思った矢先。

「先輩、迎え撃ちですかぁ～？　今日は竜崎休みみたいですよ。1年で役に立ちそうなヤツ、集めますかぁ～？」

柴だ。

1年のナンバー2、柴義経だ。

「引っ込んでろ。いいか、柴、1年全員に言っとけ。絶対オモテに出てくんじゃねぇ～って」

「・・・ジオン、オマエ、いざとなったら頼りになるヤツだなぁ～、感心したよ」

オッキーは惚れ惚れした顔でオレを見つめている。

「オレに見惚れてる場合じゃねぇ～。オッキーは2年のヤツらが外に出ないように見張っといてくれ。頼んだぞ、2人とも」

「わ、分かった。だけど、ジオン。オマエど～すんだよ？」

「オレは3年を止めに行くんだよ。いいかオマエら、何としても野牛との戦争だけは避けるんだ！」

「分かった。3年は頼んだぞジオン。2年は任せろっ」

「分かりました。1年はオレが止めときます」

オッキーと柴は、「オマエら外に出るんじゃねぇ～ぞ」と、玄関に集まる野次馬に叫びながら、校舎の中に入っていった。

さて、ど～すっかな。

ああは言ったものの、オレは3年を止める気はないし、そんな暇はない。

それに、3年で野牛と向かい合えるヤツが、宮さん抜きでいる？

ウチの学校の生徒は問題ないとして、問題は野牛勢だ。

きっと、教師たちが野牛襲撃を事前に知ってて待ち構えてるって、アイツら知らねぇ～んだ。

今、武蔵に殴り込むのは自殺行為、飛んで火にいる夏の虫ってヤツだ。

すでにゴ○ブリ○イホイなんだよ、ココは。

それに武蔵の総番長の宮さんはいない。

その2点を早急に野牛のヤツらに伝えれば、ムダな犠牲を出さないで済むはず。

そう、ヘタすりゃリッキーが警察を呼んで、とっ捕まったヤツは停学もしくは、退学だぞ～。

どんなに悪いヤツらでも、話し合えば必ず分かり合えるはずだ。

何とか説得に成功すれば、野牛の殴り込みを未然に防止できるかもしんねぇ～。

戦争を防げるかもしんねぇ～ぞ！

こうしちゃいられない。

早急にヤツらに伝え・・・・・・・って、アレ～～～～～？！

も、もう、野牛勢、校内に入ってきてるし～～～～！！

第１１３話　レディース登場

あぁ～、大和が戦っている。

１０人くらいと戦っている。

竹中、内藤はもみくしゃになってるし、副担任はぶっ倒され、沢山のヤンキーたちに、背中を次々と歩かれている。

「野牛だぁ～、野牛が攻めてきた～！」「キャ～～～ッ」「やっちまえ～」

校舎からは沢山の悲鳴や野次が聞こえる。

ヴォー　ヴォ　ヴォ　ヴォー

何台かバイクも入ってきた。

バイクの連中は、威嚇しているのか何なのか校庭をグルグル回りながら砂煙を上げている。

パ・ラ・リ　パ～ラ・リ・ラ　パ・ラ～リ～ラ・ラ～

ラッパ音も聞こえる。

定番のゴッドマーザーのテーマだ。

ヴァヴァヴァン　ヴァヴァヴァン　ヴァヴァヴァヴァヴァン　ヴァヴァヴァン

アクセルミュージックに合わせて、後部座席のヤツがタコ踊りを踊っている。

「タコ踊りだ～」「はじめて見たぞ～」「ふかし上手くね？」「やれやれ～」

校舎からは沢山の声が飛び交う。

みんな見慣れない光景に大興奮だ。

ウチの学校のヤツら、他人事だと思って調子に乗りやがって・・・。

「アイツらギャラクシーじゃね？」「カッコイイ～～～」「暴走族だ暴走族～」

この騒ぎを楽しんでいられるのも今のうちだ。

コイツら目的は人探しだ。

学校に入ってくるぞ・・・。

職員室を見ると、リッキーが電話をしている。

通報したぞ！！

ヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォ

「レディース、レディースも来た～！」「女だぁ～」「野牛のスケバンじゃね？」

みんなが叫ぶ方角を見ると、校門とは別の出入り口、職員や父兄の車両出入り口方面から、数台の改造バイクが現れた。

一際目立ち、前面が超デカイ、ピンクの改造バイクが先頭を切り、唸りをあげてやってくる。

ス、スケバンミケコ？！

ミケコだ！

カラスマスクをしたミケコは、特攻服に身を包み、尖ったサングラスを掛けている。

サングラスを掛けてても、カラスマスクをしていても、見慣れない服を着ていても、瞬間的に見ただけで分かるオーラ。

日丸ミケコ！！

これはやっぱり、アイツの差し金か？！

その後ろからは、これまた見たことがある面々。

メイドカフェで見た４人、あの、野牛の女子寮で見た女たちだ！！

・・・オレが今、アイツらに顔を出したら、間違いなく殺されるよな??

説得なんて・・・・・、ムリだよね、やっぱり。

オレは無我夢中で走った。

逃げた。

姿を、身を隠したかった。

無意識で校舎裏にたどり着く。

はぁ、はぁ、はぁ、はぁ～。

こ、ここならアイツらも来ない・・・・・よな?!

・・・・・・っぐ?!!

安全地帯に逃げ込んだつもりだったが、そこは、オレにとっては最悪のデンジャラスゾーンだった。

「よぉ～、亀鶴ジオン君、久しぶりぃ～」

第１１４話　熊が出た！

ギョギョギョギョギョ～～～ッ？！

す、す、芒ぃ～～？

芒（すすき）がなぜここに？？！

１週間前停学になった場所で、芒みちるがウンコ座りでタバコを吸っている。

他には誰もいない。

コイツ、学習能力ないのか？　フツ～停学になった場所で、停学明け初日にタバコ吸うか～？

これがＢ型特有の挑発行為ってヤツかな？

誰が見てるワケでもないのに、常に反骨心・・・。

「何の騒ぎだ？」

芒は校庭の方角を見ながら、独り言のように言った。

「さぁ～な・・・」

オレは一応、知らないフリをする。

「ここで会ったが１００年目ってな。１週間、待ち焦がれたゼ～、ジオン君！」

芒は足元の周辺に転がっていたブロック塀を拾うと、それを右手に持ちながら、銜えタバコで歩いてきた。

煙そうに片目をつむりながら、ゆっくりと不敵な笑みで近づいてくる。

・・・ま、まさか、それでオレを殴るんじゃねぇ～だろうな？

そんなコトしたら、オレ、死んじゃうぞ！

マジで死んじゃうぞバカヤロ～！！

芒はブロック塀を振り上げると、そのままそいつをオレの頭めがけて振り落とした。

銜えタバコで、煙そうなしかめ面で。

ゴッ・・・

「・・」

ドサッ

避けるとか逃げるとかよけるとか考える間もなく、突然だった。

目の前の景色が縦から横に切り替わり、高さが急に低くなった。

芒の靴しか見えない。

まるで、昆虫にでもなった気分だ。

体は全く動かない。

どうやらオレは、マジでブロック塀で殴られたようだ。

芒はアブネ～奴だと、かねてから噂は耳にしていたが、どうやらホントの話だったようだ。

オレは歴史ではなく、経験で学んだ。

芒はアブネ～から、気をつけなきゃなんねぇ～って。

・・・でも、もう遅い。

時すでに晩(おそ)し、オレは死ぬ・・・・・。

どうせなら、意識を失いたかったなぁ～。

死ぬならスパッと死にたかった。

こんなハッキリした意識を保ちながら、言う事を全く聞かない体と共に、この場にいるのは苦痛以外ない。

芒の足が消えたかと思った直後、そいつはオレの視界を真っ黒に染めた。

どうやらうつ伏せにぶっ倒れたオレの顔面めがけ、芒が蹴りを放ったようだ。

鼻っ柱に直撃したようで、ドクドクと鼻血が溢れ出るのが分かる。

さらに、頬や耳に手痛い蹴りを数発入れられた。

動かないオレを見て、芒はどう思ってんだ？　死んだフリでもしてると思ってんのか？

１発で死んだと思わねぇ～のか、コイツは？！

オレは死んだフリなんかじゃねぇ～！　マジで体が動かねぇ～んだ！！

戦闘不能なんだよ、もう。

戦いたくても戦えねぇ～んだよ、もう。

またもや芒の蹴りが顔面にやってきそうな風を感じた間際、オレの

背後に気配を感じた。

「オイ、誰かいるぞ、こっちに」

「大将はどこだ大将は」

どうやら野牛のヤツらのようだ・・・・・。

第115話　ルナティックワールド

野牛の殴り込みの日が、よりにもよって芒の停学明け。

しかも2つの時刻が重なり、オレは今、人生最大のピンチを迎えていた。

芒にブロック塀で殴られ、戦闘不能となったオレは、意識だけはなぜかしっかり保っていた。

冷静な判断も出来る・・・が、体は指一本動かない。

そこへ運が良いのか悪いのか、野牛のヤツらが現れた。

一体オレは、この先どうなってしまうのか～～～?!

「大将はいねぇ～な」

「そ～みてぇ～だな」

背後から感じる気配と会話からして、野牛のヤツは、どうやら2人。

「行くぞっ」

え～、行っちゃうの?　もう、行っちゃうの?　もう少し居ようよ、

せっかく来たんだしさ～。

ホラ、君たちの目の前に人が倒れてるんだよ。

不自然だよね、どっから見ても。

フツ～、人が目の前で倒れてたらさ～、助けないかな～？　助けようとか思うの、オレだけなのかい？　オレがオカシイのかい？

「オイ、コイツ知ってるぞ」

野牛のヤツの声だ。

バレたのか？　オレが野牛にあの時乗り込んだヤツだって、コイツら気付いたのか？！

まさか連れてかないよね？　引きずってミケコの前に連れてかないよね？

「コイツ、山田中のトップだった、芒だゼ」

・・・ど～やらオレの事じゃないみたいだ。

ふ～っ、思わず取り乱すトコロだったゼ。

「芒？　芒って、在日のススキ？」

在日？

「そうそう、在日韓国・朝鮮人」

「ニューカマー？　オールドカマー？　どっち？」

「どっちでもいいだろ。行くぞ」

どうやら野牛の2人は、ここには用がないと見て、行ってしまうようだ。

芒だ。

「待てよオマエら。何で野牛がココに居んの？」

「何でもいいだろ。オメ～みてぇ～なヤツに構ってる暇はねぇ～んだよ」

野牛は武蔵を潰しに来たんじゃねぇ～のか？

もし潰しに来たんなら、知名度の高い芒は格好の獲物。

芒なら野牛の大将に誇れる首のはず。

それを逃すという事は、やっぱり野牛の目的は・・・オレらだけ？

「オイ、待てって言ってんだろ？」

ゴンッ

ズサッ・・・

ま、まさか、オレを叩いたように、ブロック塀で?!

「オイ、てめぇ、何・・・」

ゴッ

ドサッ・・・・・

も、もう1人も?!

オレの足元の方で、倒れる音が2つした。

その直後、怒鳴り声が地面に響く。

「在日で悪ぃ〜かコラ！　生まれ育ったのは日本なんだよクソガキが！　在日、在日って、てめぇ〜らオレらの気持ち分かんのか?!　馬鹿にすんじゃねぇ〜ぞクソが！！」

芒は完全にブチキレてると思われる。

「や、やめろ！　やめろって！！」

常日頃の、静寂な空気を忘れず保つ校舎裏。

緑に萌えたケヤキの若木の雀が2羽、せわしく飛び立つ。

何発、何十発と、倒れた野牛の生徒にコブシを叩き込む音と、それを止めようとする悲痛な声だけが響き渡った。

燎原(りょうげん)の火は、そう簡単に消えてはくれない。

「もう、やめろ～！！　やめてくれ～」

片割れがボコボコにされてるのを、オレと同じように動けずに見ていると思われる男は、涙声で叫んだ。

悪の化身とでも言おうか、まるで何かに取り憑かれたように、狂乱の叫びをあげ、コブシを何度も振り落とす芒。

何度も、何度も。

「ぐわぁ～～ちゃぁ～～～～あああ！　ムカツク～～～～～！！！」

今までの人生の怒りを全てぶつけるが如く、芒は奇声をあげる。

オレは歴史にそれほど詳しくないので、芒の怒りの根源までは掴めないが、根底にあるのは長い歴史が作り出した差別からきているのだと思われる。

差別・・・、オレは、自分と違うと思うものを区別した時点で差別だと思っている。

つまり、『在日』の人を『在日』と呼ぶ時点、いや、頭の中で思う時点でもうすでに差別！

世に溢れる様々な差別の一つ、『在日差別』の問題も、どこかで偏見を語り継ぐような悪い連鎖を断ち切らない限り、なくならないんじゃないのか？

芒も歴史の被害者なんだ・・・・・。

「も、もうやめろ・・・。し、死ぬぞ、マジで死んじまう・・・」

凄惨極まりない状況を目の当たりにする仲間の声が、とうとう小さくかすれ出した。

「殺すんだよ。コイツ殺したら、次はテメーだ、ヒャハハハハ」

野牛の２人が殺された後は、オレも・・・・・。

第116話　トノサマガエルの晩飯

「いたぞ、捕まえろ!!」

慌しく風を切る気配。

誰か来た!

「マ、マッポォー?」

芒(すすき)が素っ頓狂(とんきょう)な声をあげる。

警察?

そうか、リッキーが呼んだ警察が来たのか?

・・・って事は、野牛勢はみんな捕まったのか?!

ど~なっちまうんだ、この先。

・・・ん?

動く、体が動くぞ!!

今まで全く微動だにしなかったオレの体が、突然動くようになった。

防衛本能？

そんな防衛本能が、警察が来たという安心感によって解けたのか？

人間の体は、危機に直面すると静止するよう出来てるのかな？

熊なんかに遭遇した時、死んだフリすると助かるなんて言うけど、本来人間には自動で死んだフリが出来るような力が備わっているのだろうか？

虫なんかがよく使用する擬死（ぎし）。

バッタなんかは擬死により、カエルからの捕食を完全に回避できるという・・・。

・・・ま、ジャングルなんかで体が硬直すれば、物音を出さなくなるし、気配も感付かれにくくなるから、ある程度外敵から身を守るのに役立つとは思うけど、敵に遭遇してからではねぇ～。

オレの場合、頭ぶったから、ホントに死ぬ一歩手前だっただけかな？

・・・ま、動くならそれでい～や。

オレは伏せていた顔を上げた。

警察官が2名、そして倒れる野牛のヤンキー生徒が2人。

そして芒。

教師の姿も見える。

ウチのクラスの副担任だ！

副担任の顔は酷く汚れていて、メガネにヒビなんか入ってたりするが、この騒乱の中、大人しく寝ているワケにもいかず、こうして校舎にいる野牛勢を警察と探しているのだろう。

「いてっ、いててててて。は、はなせコラ」

必死に抵抗する芒だったが、後ろ手に捕らえられたまま連行された。

さらに、倒れた野牛2人も、後から来た警察官によって引きずられるように連行された。

「そこの生徒は武蔵の生徒ですか？」

警察官の一人がオレを見て言った。

「う、うちのクラスの生徒です」

副担任が答える。

「じゃ、お任せします」

警察官は去っていった。

・・・・どうやらオレは、難を逃れたみたいだ。

「大丈夫かい？　は、鼻血が・・・」

副担任はハンカチを出し、オレの鼻血を拭ってくれた。

思えばオレ、盗撮疑惑は知っててても、この人の名前すら知らねぇ～や。

「一応、保健室行こうか」

「う、うん・・・」

オレは副担任の肩を借り、保健室へと向かった。

校舎裏を出てすぐ、オレは校庭の方に目をやる。

とにかく現場は騒乱していた。

第１１７話　明日天気にしておくれ

ほぼ全校生徒と思われるほどの生徒たちが、屋上や校舎の窓から顔を出し、校庭の騒乱を愉しんでいる。

暴走行為をしていたバイクのヤンキー共や、スケバンミケコたちレディースの面々の姿はない。

バイク勢はいち早く逃げ去ったのだろう。

校庭に残された沢山のタイヤの跡が、現場が荒れてた様子を想起（そうき）させる。

校庭を見下ろす生徒たちの愉快そうな顔を見る限り、どうやら校内への殴り込みや侵入はなかったと思われる。

平和でなによりだ。

野牛勢が校内へ突入する前に鎮圧されたのだろうが、もし教師たちが事前に襲撃を予知していなかったらと思うとゾッとする。

そしたら今頃はもう、とっくにアイツらのマヌケな笑顔は消えてただろうな・・・。

警察が来て、みんな慌てて逃げたと推定できるが、警察官に取り押さえられた野牛の生徒は、見る限り１０人近くいる。

そいつらは皆、マムシのように大和を睨み、今にも噛み付きそうな表情をしている

大和の活躍が容易に連想できるが、そんな大和も魔獣のようなひきつり顔で、服はボロボロ、ざんばら頭だ。

学ランのヤンキーたちがパトカーに次々と乗せられる様は、武蔵創立以来の異質な光景なのではないだろうか。

そんな中、学ランの生徒に交じって、一人だけブレザーの男に注目が集まった。

「芒だぁ～！」「芒みちるだぁ～」「アイツも終わりだよ」

警察官に両手を奪われ、頭を押さえられながら連行される芒が、ヤジを飛ばす生徒たちを睨んだ。

「アイツ、停学中じゃなかったっけ？」「何で野牛に交じってんの？」「今日、停学明けだよ」

校舎から見下ろす生徒たちを見上げた芒は、長い舌を出しながら不敵に笑った。

「芒っ、芒っ・・・」

芒コールである。

湧き上がる芒コールの中、芒はパトカーに乗せられ検挙された。

そんな中、血だらけで副担任の肩に抱かれたオレの登場である。

「誰だアレ～？」「2年じゃねぇ～の？」「いたっけ、あんなヤツ」

出たよ出たよ～、オレに対する注目とヤジ。

「2－6の長山の手下だっけ？」「違うよ、テルの子分だよ」「そうそう、テルだ」

下の階のヤツらはオレの事知らねぇ～んだな。

オレって、どんだけ知名度低いんだよ！！

「2－6のテルの子分だ」

だから2－6じゃねぇ～って！　2－5だっつ～の！！

「あ～～～、テルの舎弟」

ぶっ殺すぞテメ～ら！　テルテルテルテル、仕舞いにゃ手下子分舎弟！！

オレをテルの下に置くんじゃねぇ～よ！！

「1年の大型ルーキー竜崎と、ウチの総番長サマといつもつるんでる亀鶴ジオンだぞ」

誰だ？　ん？　分かってんじゃねぇ～かよ・・・。

「あ～～～、竜崎の側近」「総番長の子分」「総番長の最近のお気に入りの犬だよ」

オレはどうせ桃太郎のお供だよ！！

オレは力いっぱい野次馬たちを睨んだが、ウチのクラスのヤツらが視界に入ると、妙に恥ずかしさを感じた。

しかも、よりにもよってこんな時に、佐倉と目が合う。

物凄く心配そうに、顔を引きつらせてこっちを見ている。

オレはすぐに顔を逸らした。

第１１８話　風船のように

保健室にたどり着くと、ミノブさんが優しい笑顔で迎えてくれた。

ベッドにはユイがいる。

「じゃ、あとヨロシクお願いします」

副担任はミノブさんに頭を下げると、その場を後にした。

「なぁ～ユイ、アイツって何て名前？」

「さあ」

オレの問いにユイも首を傾げる。

「代田（しろた）まさみ先生でしょ？　あなたたち、自分のクラスの副担任の名前くらい覚えておきなさいよ」

ミノブさんに怒られた。

「でもさ～、アイツ自己紹介もなかったし」

オレはヤツの名前に関しては、自分の非を認めるつもりはない。

「そうそう、何か暗いし」

ユイもオレを後押しする。

そんなオレたちの顔を見て、ミノブさんは「うふふ」と笑い、副担任の話題に乗ってきた。

「こっからってさ～、校庭の隅々まで見えるでしょ～？　私ね～、いつも気になる事があるのよ。あの代田先生なんだけどね、いつも挙動不審だし、女子の近くを通る時の動作がオカシイのよ」

ミノブさん、ハッキリ言っちゃって下さい。

それって・・・。

「盗撮してるって噂があるのよ。みんな言ってる。ホラ、あの人写真部の顧問でしょ？　それに、体育教師の研修で来てるんだよね。体育の授業中なんだけど、ユイちゃん、あなた気をつけなさいね。あの人女子のブルマ姿に目がないみたいだから」

出たよ、ＡＢ型のウワサ好きの血が騒ぎ出しちゃってるよ、コレ。

とにかく色んな人が集う保健室だし、話好き噂好きのミノブさんだから、学校中の情報に詳しい詳しい。

その上どんな相談にも乗ってくれるし、まさにダントツ人気のオバサン先生だ。

「ブルマに気をつけろってさ」

「・・・っるさいわねぇ～。アンタに言われたくないわよ。それよりアンタさ、エライ罵声浴びてたわね」

ぐぅ～～～、い、痛い所を突いてきやがった。

「気にしない気にしない。意外とアナタ、学校じゃ人気あるのよ。カッコイイって」

え？

「ミノブさん！　コイツを浮かれさせないで下さいっ！！」

いや、もっと浮かせて下さい！

そのまま雲の上まで飛ばしちゃって下さい！！

「1年の女の子たちからはね、竜崎君の先輩って事で、かなり有名よ。竜崎君がアナタの話をよくしてるみたいね」

うっひょ～～～！

「そのまま竜崎と付き合っちゃえば？」

はあ？　ミノブさん、ユイに注射ぶって下さい。

何か、こう、無口でしおらしくて、おしとやかになりそうな注射ってないんですか～？

「でもね、喧嘩はダメよ。ど～したの、その鼻」

お～、忘れてましたね、ココに来た本来の目的。

「ミノブさん、コイツの固まった鼻血汁、さっさと拭き取らせてやって。見ててキモチ悪い」

はなぢじる？　キモチワルイ？

オレは保健室の洗面所の鏡で自分の顔を見て驚愕（きょうがく）した。

鼻血が顔面をクモの巣のように四方八方に流れてて、それが固まっている。

副担任め、親切にオレの鼻血を拭ってくれた気がしたが、適当にやり過ごしたな？

くそ～、確かにキモチワルイな・・・。

この顔をみんなに見られたと思うと、超恥ずかしい。

佐倉に見られたと思うと、超死んでしまいたい。

オレはミノブさんの手当てを受け、鼻に大きな絆創膏（ばんそうこう）を貼ってもらった。

「殴られたのは顔だけ？」

「ま、まあ・・・」

オレは嘯(うそぶ)いた・・・・が。

「ミノブさん、頭も詳しく見てやって下さい」

ユイが指摘する。

「あら？　怪我してるじゃない。ど～したの、これ？！」

見つかっちゃった・・・。

「ど～して分かった」

「鼻血の跡に砂が付いてたから。それに鼻血の流れ方。あの状態で鼻血が固まるって事は、倒れてた時間が長いはずよ。って事は、頭を強打した可能性が高いじゃない」

さすがユイだ。

オレの鼻血の痕跡を辿り、頭部の怪我に行き着くとは・・・。

一体、何者なんだコイツ。

「全く～～～！　何ですぐに教えないの？　コブシで殴られた傷じゃないわよ、コレ。何か武器でやられたの？」

「ま、まあ・・・」

トホホ・・・逃げられそ～にない。

「すぐ救急車呼ぶわ」

「いや、大丈夫ですから」

「頭ぶったのよ！」

ミノブさんが怒っている。

でも、救急車、イヤじゃ～～～～！

「いや、大丈夫ですって！！」

「ジオン、大丈夫じゃないっ！！」

あう～、ユイがキレた～～～～！

「大丈夫そうに見えてもね、ヘタすりゃ死ぬのよ、ジオン君」

「そうよ、頭の強打が一番良くないんだから」

し、死ぬ？

・・・・オレは急に死ぬのが恐くなった。

「何か、吐き気が・・・」

「先生、早く救急車っ！」

「電話、電話・・・。職員室っ！　すぐ戻るからっ！！」

ミノブさんは血相を変え、廊下を駆けていった。

やっぱり、死ぬのか？　オレ、死ぬのか？！

第１１９話　翼が欲しい

「・・・ったく、ドジなんだから」

ユイは呆れた顔でオレを睨んだ。

「オレ、やっぱり死ぬのかな・・・」

「そんなイイ顔色で死ねたら本望ね」

・・・ユイに返す言葉が見つからない。

「ところでオマエ、ココで何やってんの？　具合悪そうに見えねぇ～し。それに、今、学校中大変な事になってるゼ」

「知ってるわよ。全部ここで見てたから」

「マジでか？　ミケコ見た？！」

「うん。多分、私を探してたんだと思う」

遠くを見つめるユイの目が、少しだけ細くなった。

「ヤツら、校舎の中に入ったかどうか分かるか？」

「校内には誰も入れなかったはずよ。教育指導の教師たちが校門で足止めしたのよ。でも、２、３０人は突破してた。でも、その直後に警察来たから、みんな慌てて逃げたのよ。結局、野牛の殴り込みは未遂で終わり、ウチの野次馬生徒たちの目の保養でしかなかった・・・？みたいな」

そうか・・・って事は、オレが屋上で見た１００人くらいのうち、ほんの一部のヤツらしか入って来れなかったってワケか。

「どんなヤツが捕まったんだ？」

「捕まったのは、校門の所で大和に投げられて動けなくなった生徒が数名と、校舎裏から警察に取り押さえられて出てきた人たちだけだと思う」

オレが見た限りか・・・。

「アンタ、誰にやられたの？　アタシたちが知ってるヤツ？！」

「ウン」

「誰？　野牛駅にいたヤツ？！」

「いや・・・、芒。・・・芒みちる」

「やっぱりね。どうりで校舎裏から出てきたと思ったわ。アイツも・・・アンタも・・・」

こっから一部始終、全部見てたってか？

まさかその為に保健室に来た？

ユイも事前に野牛が襲撃すんのを知ってたのか？！

「オマエ、どうしてココにいるんだ？　本当に具合悪かったのか？」

「・・・・・・・」

「話せよ、ホントの事」

ユイはキョロキョロと周りを見回したあと、小さな声で語り出した。

「朝から学校の様子、変だったでしょ？　ホラ、吉岡の1年生が宮さんを襲撃した日みたいな」

ユイも直感が働いて気付いてたんだな。

「ミノブさんなら知ってるかと思って・・・」

「そんで探ってたのか」

「うん」

「・・・・・で？」

「アンタの疑問に全ては答えられないわ。ミノブさんも詳細までは

知らないみたい。私がやっとつかんだ情報は一つだけ。やっぱり今回も学校側は、野牛の襲撃を知ってたって事」

予想的中？　マジかよ！

前回は秋鹿（あきが）が学校に密告したって聞いたけど、今回は誰がチクッた？

前回の事情は分かるけど、今回はなぜ？

密告して、得するヤツ、いるのか？！

ヤツらの狙いは、野牛の力を示したり、武蔵を潰すためって言うより、オレたちが狙いだった感が強い。

なら、どうして竜崎や宮さんがいない時に来た？

それは偶然、というより、知らなかったって捉えるのが的（まと）を射（い）る。

あえて竜崎や宮さんという、剛（ごう）の者がいない時を狙ったとも考えられるが、そんな小癪（こしゃく）なマネをしたトコロで、武蔵の怒りの火に油を注ぐだけ。

やはり知らなかったと推察するのが妥当。

オレたちが野牛に乗り込んだのは土曜日。

日曜日を経て、襲撃は今日、月曜日。

長須やミケコは土曜日の夜外泊したから、少なくとも家に帰ったのは日曜の朝。

それからオレたちの無粋な行為に角を出した野牛が、武蔵への報復を企てたとして、休日に兵隊を集めて「ハイ、明日行きますからね」なんて集会を開いたとは思えない。

・・・って事は、ヤツら野牛勢が決起したのは今日の朝。

学校で集会が行われ、それを見た誰かや、賛同できなかったヤツや、教師がそれから武蔵に即行で密告したとしても、朝っぱらから校門の前で生徒指導の面々が立ち並んでた時刻と合わない。

武蔵が報告を受けたのは、日曜日か月曜の早朝と見込むのが望ましい。

分析するに、やはり、アイツらの中に密告者がいるのは間違いないが、いるとすれば報復を企てた人間に近しい人物だ。

つまり、たくらんだ人物、長須かミケコに近い人物。

アイツらの親かもしれないし、もしかしたらミケコの手下に回し者がいるのかもしれない。

それとも他に・・・？

分からない。

「なぁ～ユイ、ミケコの他に知ってるヤツはいたか？」

「私も注意して見たんだけど、分かんなかった。あのスケバンだけは目立ってたから、すぐ分かったけど・・・」

「そうか」

パープー　パープー

どうやらお迎えが来たようだ。

「内出血してなきゃい～ね」

「うるせ～」

恐ぇ～事言うんじゃねぇ～よ。

「じゃ、ジオン君、いってらっしゃい。多分、すぐそこの大学医学部付属病院の脳神経外科だと思うから」

ミノブさんと、その後ろから担架を持った救急隊員が保健室に入って来た。

ぐうぅ～、近くなら歩いていきたかった。

野次馬が沢山いる中、救急車に乗せられるんだぞ、オレ。

超カッコ悪くね〜？

保健室を去る際、「ユイ、一応さ、朝露さんの事、気に掛けてやってよ」と言い残した。

オレの最期かもしれない言葉にユイは黙って頷（うなづ）いた。

第１２０話　停学明けの傷害事件

ＣＴスキャンですぐ結果が出た。

頭の毛を剃られたりするのでは？とヒヤヒヤしたが、そんな事もなく、ほんの５分ほどで終了。

診察結果は、頭部打撲の軽傷。

外傷多少見受けられるが、日常生活に問題なし。

今日から風呂に入ってもＯＫとのこと。

ブロック塀で強打され、ぶっ倒れて全身マヒしたのに、オレって凄くね～？

救急車で運ばれて、１時間もしないうちにオレは学校に戻った。

教室に顔を出すと、みんな一斉に驚きの声。

丁度帰りのホームルームをやっている時間だった。

リッキーはいない。

代わりに副担任の田代・・・じゃなかった、代田がいる。

「どうやら大丈夫だったみたいだね？」

代田は心配そうに案ずる。

「まあ・・・」

みんなオレに注目するんで、思わず赤面してしまった。

み、見るな。

みんな見んなチクショ～。

オレは注目を浴びれば浴びるほど、真っ赤なタコチュ～と化すんだから！

オレ様とあろう者が、小学生の高学年になった頃から赤面症で、これがちょっとしたコンプレックスだ。

この意味のない劣等感を退治するのが今後の課題でもある・・・。

ホームルームが終わると、佐倉とオッキーが気遣いながら声を掛けてきた。

「ホント無事で良かったよ、ジオン君。沖田君がね、もうジオン君に会えないかもって言うから」

ゴメンよ佐倉。

ざけんなオッキー！

「ジオン、オレさ、副担任にさ、ジオンがどうして校舎裏にいたのか聞かれてさ、オレ、その時、機転利かせてさ、昼休みにオレと口喧嘩して、すねて校舎裏に行ったんですよって。その時たまたま野牛の殴り込みの犠牲になったみたいですって言っといたよ」

マジでか？　オッキー。

何てイイ奴なんだオマエは！

「だからリッキーに聞かれても、ホントの事言うなよな」

ホントの事？　ホントの事知ってんの、オッキー？

「ジオンから説明すんの大変だろうと思って、アタシからオッキーと佐倉に伝えたのよ。アンタが野牛の生徒を捕まえようとしたら返り討ちに遭ったって。ついでに怪我の件は、ミノブさんからリッキーたちに上手く言ってもらえるように頼んどいた。ミノブさん快くＯＫしてくれたからさ、アンタからも後でお礼言っときなさいよ」

ユイ・・・、サンキューな。

でも、オッキーと佐倉に芒の事とか話さないでくれたのは大変有難いが、それって何か、オレ、相変わらずカッコ悪くね～？

カッコつけて野牛を捕まえようとして、でしゃばったら返り討ちって、超カッコ悪くね～？

「ジオン、もしリッキーにそれ言ったら、弱いクセに余計なマネするんじゃない！ってどやされるから、絶対言うなよな。それに、オレも佐倉もこの事はみんなに黙っててやるから」

オッキーは唇を硬く結んだ。

・・・オレは返す言葉もない。

「あの校庭をバイクでグルグル回ってた女の人ってさ、あの有名な野牛のスケバンだよね？　あのスケバンって、相当ヤバイんでしょ？」

佐倉だ。

「そうそう、一度狙った獲物は、食い千切るまで絶対逃さないって話だよな。あんなヤバイ奴がウチに乗り込んで来たって事は、ウチに狙われちまったヤツがいるのかもな・・・」

オッキーが囁(ささや)くように言った。

「・・・狙いは誰なんだろうね？」

佐倉が不安そうに言う。

「ジオン、オマエ何かオレのせいだ、みたいな事言ってたよな？話せよ、何か知ってるんだろ？　竜崎とか宮さん絡みなんだろ？」

オッキーがオレに訊いてきた。

ユイの手前、この2人の前で例の件を話すのは道理から逸(そ)れる。
スケバンの狙いは隣のユイかもな・・・なんて口が裂けても言えるワケねぇ～。

オレが黙っていると、オレの気持ちを瞬時に察してくれたのか、心優しいA型の佐倉は、すぐに話題を変えてくれた。

「ねぇ～、沖田君、2－1の芒って人が退学になったってホント～？」

佐倉がオッキーに聞いた。

よく聞き取れなかったが、誰が退学だって？

「そうそう、芒、退学だってよ」

オッキーの衝撃発言。

「たっ、退学～？！」

オレは思わず、人目も憚(はばか)らずデカイ声を出してしまった。

そうか、退学か。

停学明けに校内暴力だもんな。

・・・ま、ブロック塀でオレを殴った事で、ヤツのオレに対する怒りも消えてくれりゃ～いいけど。

・・・っつ～か気は済んだろ、あれだけ暴れりゃ。

・・・ん？　・・・って事は、もしかするとカンパもなくなるんじゃねぇ～の？

これでウチの学校も、少しは平和になるかもな・・・・・・・。

ユイと、もっと深い話をしたかったが、オッキーと佐倉がいる手前ロクに話も出来ず、オレたちは学校を後にした。

学校の帰り道、第3公園の前を通りかかった時、オレは信じられないものを目の当たりにした。

・・・み、宮さん？

ど～～～して、ここに？！

第１２１話　勇ましき壮言

第3公園の前を通り掛かった時、ポツンと一人、ベンチに腰掛けている宮さんを発見。

と同時に宮さんと目が合う。

「おゥ、亀ちゃん元気ィ～？　・・・ん、どうしたの、ココ？」

ゲッ、鼻か？！　そういえば絆創膏貼ってるし、結構腫れてるから目立つよな・・・。

「大方、オヤジさんと喧嘩でもしたのかな？」

そうそう、野牛に乗り込んだ日、親に連絡怠ったから・・・・・って、違うんだけど、それでいいならそ～いう事にしときますよ、その方がこっちも好都合だし。

「そんなトコです、ははは。ウチの親父の鉄拳、ガンガン飛んできて・・・ははははは」

ま、ホントはオレがどこに外泊しようが連絡を怠ろうが、最近ウチの親は特に干渉しないんだけどね。

良いんだか悪いんだか、高2の息子への心配りっつ～モンが、最近ウチの親からは微塵（みじん）も感じられん・・・。

ココまで育てばどこで野たれ死のうが知ったこっちゃねぇ～ってか？
ま、そこまで酷くないにせよ、いちいち細かいトコまで立ち入られるより良いけどね。

「心配してくれてんだよオヤジさん。愛されてる証拠だよ」

宮さんが優しい目で語る。

何か胸がチクチクするゼ・・・。

でも、オレが芒にやられたなんて宮さんにバレたら、この人仕返しとか行ったりしてメチャクチャ事を大きくしそうだ。

せっかくカンパの件も穏便に済みそうなのに、今更この人に穿り返さないでほしいモンな。

それより野牛の殴り込みの件だ。

「・・・ん？　どうしたんだい、オレの顔に何か付いてるかい？」

この大胆不敵な面構えを見る限り、野牛の殴り込みの件はまだ知らないみたいだ。

今言うべきか？　でも、言った瞬間、野牛に吹っ飛んで行きそうだし・・・。

ここで言わなくても明日には分かる。

でも、オレ一人では宮さんの暴走を止められないよな。

ここはまず、竜崎に事の経緯（いきさつ）を話して2人で宮さんを引き止めながら作戦を練るほかないよな・・・。

それ以前に、宮さんココで何してんだ？

今日宮さんは、吉岡の番長、大橋剛太に会って、ついに野牛の番長、長須光雄との談論（だんろん）に挑むって予定では・・・・・？

「待たせたなぁ～、宮ぁ～～～！」

お、大橋剛太、見参？

い、今から首脳会議～～～？！

「オレも今来たトコロ。ゴメンな、わざわざ来てもらって」

え？　ココでやるの、会談。

「ウチの1年が世話になった件も含め、今度宮に会う時は、吉岡まで足を運ばせるワケにはいかねぇ～と思ってたんだわ。それに、最近休まず学校に通ってるって聞いたからな、わざわざ休ませるの何だから、この時間なら丁度良いと思ってナ。だっはっはっは」

相変わらず仁義を通す男だなぁ～、大橋剛太は。

でも、残念ながら宮さんは学校を休んで・・・。

「わ、悪ィ～な大橋ぃ～。お蔭さんで今日も無事、単位をとらせてもらったよ。ガッハッハ」

う、嘘だぁ～～～、み、宮さん嘘だぁ～～～！　絶対学校行ってないよね？　もし行ってたら今頃ココでそうして笑ってられないから！！

「いいって事よ。宮の為なら天国でも地獄でもってな・・・だっはっはっは」

「アリガトな。オレは大橋の為ならアンドロメダでもマゼランでも吹っ飛んでいくよ。ガッハッハッハ」

大丈夫かよ、コイツらの首脳会議・・・・・。

「あの～、オレ、ココにいていいんですか？　アレだったら帰りますけど」

「い～よい～よ亀ちゃん、むしろ居てよ。もうすぐ竜ちゃんも来るし」

大橋は手土産のリポビタンＺ（医薬品）をオレにもお裾分けしてくれた。

和気藹々（わきあいあい）と事が進むと思われたが、それも束の間だった。

「宮、ここに来る前、長須と電話で話したんだが、オマエ、ミケコと長須の家に押し掛けたんだって？　何やってんだ宮！　オマエらしくないぞ」

宮さんが大橋にイキナリ怒られた。

「こっちにも色々理由っつ～モンがあるんだよ」

宮さんもすぐに反抗する。

あ～あ、何かお互いムカつきながら話てるよ。

それに、宮さん肝心な部分聞き逃してるし・・・。

しゃ～ねぇ～な、オレが間に入って進めねぇ～と、ロクな会議にならねぇ～ぞ、こりゃ。

「あ、あの～、話の途中アレなんですけど、どうやって野牛の番長に連絡付けたんですか？　宮さんはずっと番長に電話入れてたんですよ。それでも連絡つかなくて・・・」

「そ～なんだよ。全然連絡つかなくてな」

「長須、ケータイかえたんだよ。コドモからａｖにしたってよ。何でも、最近できた彼女がａｖだからとか言ってたな」

・・・機種変更したっていいけどさ、電話番号まで変えんなヨ、長須！

変えてもいいけど、その旨宮さんに教えろヨ！！

・・・ったく、宮さんと長須の首脳会議が遅れたせいで、事がどんどん大きくなってんだぞ。

この後オレたちは、大橋からとんでもない一言を耳にした。

野牛の番長、長須光雄の大言壮語（たいげんそうご）だ。

「武蔵は宣戦布告なしに野牛に攻撃してきた。これに勝る大義名分はない！　武蔵に報復を！！」

第１２２話　悪に媚びるな

「長須はやる気だぞ？　あんな大国に勝てると思ってんのか？！」

大橋も知らないようだけど、実は、もうとっくに野牛は報復に来たんだよね・・・。

それに、大橋が焦慮（しょうりょ）する通り、ウチが野牛なんかに勝てるワケねぇ～よ。

向こうは気合入ったヤツらが大勢、しかも正面から堂々と入ってきてんのに、ウチからは誰一人として外に出なかったモンな・・・。

ま、外に出ねぇ～ようにオッキーたちに頼んだのはオレだけど、フツー学校守る気あったら出てくるよナ。

・・・っつ～か、学校守るとかそんな事思うヤツって、ウチには宮さんしかいねぇ～し。

「ちわぁ～っス」

その時、竜崎が登場した。

野牛のナンバー2、仲村シンとの折衝（せっしょう）、はたしてどんな話し合いが持たれたんだ？

見るからに元気がないけど。

「・・・ダメっス。交渉決裂っス」

落胆の様子を見せる竜崎は、結論から唐突に述べた。

「そうか、ダメか」

「野牛の番長の承諾がなくちゃ、話し合いは出来ないって。裏でコソコソ謀議（ぼうぎ）してるみたいで筋が通ってないし、ここで密談してしまったら、秩序が乱れるからって」

固いヤツだな、仲村シン、A型タイプか？

「あの人・・・・・・・・・・律儀（りちぎ）って言うか・・・細かくてメンドクサイ」

竜崎、せっかく言葉を選んで『律儀』って言ったのに、結局、本音出したよね？　律儀からメンドクサイって、天地ほどの差があるよね？　相変わらず竜崎は、・・・・・誠実って言うか・・・容赦ないよね。

「でも、今日、武蔵と野牛がお互いに顔を合わせた事に意味があるって言ってたっス。まずはトップ会談、宮さんと長須の話し合いが先だと・・・」

もっともだけど、な。

「あぁ、仲村シンはそ～いうヤツなんだよ、昔っから。なんつ～か、めんど～、面倒見がいいっつ～か何つ～か」

何それ、宮さん、それ何？　今、明らかに言ったよね？　仲村シンは昔から面倒なヤツだって、最初に言ったよね？　でも、何か体裁とか建前を考慮して、面倒見に訂正したよね？

・・・竜崎の話を聞く限り、仲村は野牛の殴り込みの件を知らないみたいだぞ？

野牛内に、派閥でもあるのか？

それとも、知ってて知らないフリをしたのか？

どっちにしろ、仲村は殴り込みには来なかったのは確かだ。

長須も来てないような気はしたが・・・、顔見た事ねぇ～からなぁ～・・・・・。

「一応、ケータイ番号ＧＥＴしてきたっス。何でも。コドモからａｖに変えた時、番号も変わったみたいで」

「聞いたよ、大橋から。さっそく電話してみっか、長須に」

おォ～～～？！　ついにその時が来るのか？！！

「ジオンさん、どうしたんスか？　その鼻」

竜崎が突然指摘してきた。

「あ、これはだな・・・」

竜崎の言及（げんきゅう）を当の昔に先読みしていたオレは、用意していた言い訳をかました。

親父に殴られたというオレの嘘に何の疑いもない竜崎。

どうやらこの先も、永遠にカンパの件は封印しなくてはならないようだ。

一つの嘘を付くと、こうやって沢山の嘘を積み重ねる必要がある。

まったくもって、めんどくせぇ～。

状況が状況だし、今更正直に話すのも気が引ける。

突き通すしかない・・・。

「・・・え～と、長須の番号は」

「コレっス。０８０・・・」

宮さんが竜崎のケータイの電話帳を見ながら、自分のケータイのボタンをプッシュする。

大丈夫なのか？　ホントに今、長須に電話しちゃって大丈夫なのか？

野牛の殴り込みの件を知らずして、宮さんが長須に平然と電話をしてみろ、まるで野牛に媚びてるみたいじゃねぇ～か？

媚びるってどういう意味か分かるか？　へつらうって事だぞ？　人の気に入るようにヘコヘコするって事だぞ？

そして、殴り込みの件を知ってて今話さないのは、カンパの件に引き続き、殴り込みの件も嘘を突き通さなきゃならないって事だぞ？

それでいいのか、オレ？！

「待って下さい、宮さん！！」

オレはとっさに宮さんの手を止めた。

みんな不思議そうな顔でオレを見る。

野牛の殴り込みの件、正直に話そう・・・・・。

第１２３話　ブチギレ必至

まずは宮さんが冷静さを保つ必要がある。

竜崎と大橋の力が必要だ。

その為にはまず、大橋の血液型を知らねばなるまい。

オレの予想では、９８％Ｂ型なんだが・・・。

「これから大事な話をします。でも、そこら辺のヒヨっ子なら、度肝を抜かれて卒倒しかねない驚く話です。でも、ここにいる３人なら肝座ってるし、数々の修羅場潜ってるからちょっとやそっとじゃビビらないかと・・・」

まずは３人に心の準備をさせる必要がある。

さらに、オレの話だけに気を集中させないように、みんなにはタバコでも吸ってもらうか・・・。

「ここじゃ何ですから、あっちにタバコ吸えるいい喫煙スポットありますから、そっちに行きましょう」

オレは３人を、第３公園からそれほど離れていない場所にある、ドブ川近くの使われていないトンネルに案内した。

そこは、人が滅多に来ない所なので、1年の頃はよくテルと学校の帰りにタバコを吸った場所でもある。

向かう途中、オレは大橋の隣を狙って歩いた。

たわいもない会話の後、「血液型って何型ですか?」と、大橋に切り出してみた。

「オレ?　う〜ん、何型なんだろ?!　実は知らないんだよなぁ〜」

意外と自分の血液型知らないヤツっているモンだな、オレには信じられんゼ。

「親とかの血液型も知らないんですか?」

「親父はB。確か、母親もBだったかな〜?」

そこまで知っててどうして自分の血液型知らねぇ〜んだ、コイツは・・・。

おめぇ〜はB型だよ、大橋剛太!!

さてさて、B型なら大丈夫だな。

熱くなってる宮さんを見て、冷静に止めてくれるはずだ。

一緒になって激怒する、なんて事はまず、ない。

B型は人のフリ見て自分を直すのが得意だからな。

マネもするけど、ちゃ～んと考えてマネするから、宮さんが怒ってるのを見て少しは怒ったフリを見せるかもしれないが、それは単にフリだフリ。

問題は宮さんだな。

当事者だから確実に、１００％キレる。

ブチギレ必至（ひっし）。

目的地に到着したオレたちは、固まるようにウンコ座りをしながらタバコに火をつけた。

まずは宮さんに、鎌をかけとくか・・・。

「多分怒りますよ、宮さん。しかも激怒」

そこまで言われたら、B型のアマノジャク性を刺激されるかな?

「大丈夫だよ亀ちゃん。ちょっとやそっとじゃ怒んない怒んない」

ね？　一応言うでしょ？　でもね、きっと怒るよ宮さん。

これから話す事は、ちょっとやそっとじゃないから・・・。

「大橋さん、宮さんを止めて下さいね。竜崎も頼むよ」

2人はニッコリ微笑んだ。

では、もったいぶらずに行きますか！

「武蔵に野牛が乗り込んで来ました。１００人くらいで」

3人は絶句している。

「・・・じゃあ、その鼻」

鼻を指摘する竜崎に、必死で誤解を解く様に「これは違う」と言い訳した。

オレはその後、できるだけ細かく、野牛勢の殴り込みから検挙までの流れを説明した。

冷静に言葉を選び、できるだけ宮さんを刺激しないように慎重に、どっちつかずに。

話に自分の感情を込めてしまうと、ここにいる3人を焚きつけるだけなので、オレはとにかく淡々とした口調を心掛けた。

終始3人とも沈着していたが、中でも竜崎の不変不動な冷静さは際立っていた。

「ジオンさん、大橋さんにも分かるように、今までの経緯をここで

整理してもらえますか？」

「ＯＫ」

オレは野牛の殴り込みに関して、事の成り行きを説明した。

カラオケ裏で起きた、ユイと上木の一悶着（ひともんちゃく）が発端（ほったん）である事。

自爆だとは知らず、上木が一方的にやられたと勘違いしたスケバンミケコが、ユイのバイト先に殴り込み、そこで無関係な朝露さんに暴行した事。

その晩朝露さんが母親にその旨話すと、母親は心配して学校に相談。

学校側は野牛に即報告、その結果、野牛側がスケバンミケコに厳重注意を施行したと思われる事。

そんな矢先、朝露さんが野牛の誰かにさらわれたと読み違えたオレたちが、野牛に乗り込んで、長須やミケコの自宅を探ってしまった事を正直に話した。

「・・・って事は、そもそもオマエらの勘違いが原因ってワケか？！　・・・っつ～事は、報復されても仕方がないワケだよな？　オマエらが野牛に乗り込んだ報復で、ヤツらは武蔵に乗り込んできたワケだ。これでタイだよな？」

大橋の言葉にオレは唇を噛み締めながら小さく頷いた。

まさに大橋の言う通りなのだ。

そもそも、オレたちが勝手な解釈で、野牛に乗り込んで朝露さんを探したっていうマヌケな行為が今回の事態を招いたのだ。

これでこっちが逆上したら戦争は確実。

そうなってはオレたちにメリットはないし、武蔵の兵隊の数では絶対に野牛には勝てない。

野牛との戦争だけは、何としてでも避けなければならない。

オレは今日、身を持ってそれを体験し痛感した。

宮さんは感慨深く遠くを見つめながら、いまだ沈黙を続けている。

竜崎の表情からは、何か良い方法がないか思考しているのが窺(うかが)えるが、そんな中でも常に宮さんと大橋に目配りしている姿は我ながら感心する。

大橋は腕を組みながら、考え込むように、「う〜〜〜ん」という深い唸り声を何度もあげた。

辺りが薄暗くなった頃、季節外れのトンボが一匹、ユラユラとドブ川の上空をかける。

茜色の夕焼けと、静かに流れる川の揺らぎを、音もなく見つめるオレたち・・・。

そんな中、宮さんがついに、長い沈黙を破る。

第１２４話　B型同士の篤き仁義

「吉岡は中立を守るのか？」

宮さんが長い沈黙を破り、大橋に訊いた。

「当たり前だ。吉岡は最期まで中立を守る」

「オレが今から野牛に単身乗り込んでもか？」

み、宮さん、まさか・・・？

竜崎も固唾を呑んで宮さんの横顔を見つめる。

「宮が今回の野牛の報復に対し、テロを仕掛けたり、報復を実行するようなら吉岡は容赦なく野牛に加勢して武蔵を潰す」

な、なにぃ～？　それって中立なの？？

「それを訊いて安心したよ」

マジかよ宮さん？！

「その代わり宮、オマエらが何もしないのに、野牛がさらに攻撃を仕掛けてくるようなら、オレは迷わず武蔵に加勢する」

そんな大橋の言葉に、竜崎は納得の表情を浮かべ、何度も小さく頷いた。

・・・?!　へ?　ど～いう事?!

勘違いで野牛に乗り込み、墓穴(ぼけつ)を掘ったオレたちがいるだろ?

案の定、怒った野牛が仕返しに武蔵に殴り込みに来ただろ?

その殴り込みに対して怒って野牛にもう1回乗り込んだら・・・、

そうか、怒られるよな。

間違ってA君を叩いたら、A君が怒ってお返ししてきた。

それに腹を立ててA君をさらに叩いたら、こっちは単なるイジメっ子。

悪でしかない。

そりゃ～、一部始終を見てたB君に怒られるわな～。

野牛&吉岡VS武蔵・・・・言葉もないよ。

でも、野牛VS吉岡&武蔵。

何か、イケる気がする。

このバランス、これしかない！

そうか、宮さんはそこに気付いたのか？！

やるなぁ～宮さん、伊達に総番長やってないよね～、やっぱり。

B型同士の篤い信頼感と、義理人情を重んじて仁義を通す、大橋の心を見越した信頼感が成せる業だ。

3つの学校がバランスを保つには、これしかない。

宮さんが今回の件を黙って見過ごす事。

大橋は、武蔵が今回の報復をしなければ、近いうち必ずまた今までの良好な関係は復活すると言う。

そして、戦争が起こらないよう、和平への協力を、全面的に吉岡総出で行う事を約束してくれた。

「ホントに大丈夫っスかぁ～？　内心怒ってるんでしょ～？！」

竜崎が、意地悪く宮さんに聞いた。

「ガッハッハッハ。元々こっちに非があっからね、ホントは侘びなきゃならんのはウチらだから。それを意地張って知らんプリするワケだから。我慢しないとね・・・」

それを聞いた竜崎は、安心したように肩を撫で下ろした。

オレもそんな2人を見て、今まで腹底に蓄積されていた溜息を一気に吐き出した。

野牛との全面戦争、フェードアウトの予感に自然に笑みがこぼれ、オレたちはすっかり暗くなった路地を、大人気なく走ったり競争なんかしたりして、各々家路についた。

次の日は予想通り、学校に着くなり野牛の殴り込みと、芒の退学の話で持ちきりだった。

芒は容疑を否認したらしいが、武蔵が一方的に懲戒退学にしたらしい。

噂ではリッキーの一任で決定したという。

リッキーは前回、野牛の殴り込みの際、乗り込んできた生徒を全員自主退学に追い込んでいるが、今回は警察に任せた為、野牛側の生徒の処分には関与していない。

野牛側は警察に検挙された生徒を全員、無期停学処分としている。

そんな野牛の対応は甘いと言わんばかりに、芒を退学処分にしたリッキー。

悪の根を一つ引き抜いたって事に関しては文句はねぇ～が、相変わらず自分の権力を示唆しやがって。

オレらからしたらリッキーの横暴な言動はパワハラに近いぞ？　いや、すでにパワハラなんじゃね？　宮さんとか、パワハラ受けてね？！

一方、警察にパクられた野牛勢は、全員黙秘を貫いたという。

全員が黙秘って事は、前もってそうなった時を予測していたとも言える。

やはり、衝動的な殴り込みではなく、計画的な殴り込みだったのだろうか？

ま、野牛の真意も全て、今日には明らかになるはずだ。

大橋が長須と徹底的に話し合うって言ってたし・・・。

まずは総合的に見て、一安心ってトコだな。

芒が否認してたって事は、オレと揉めてた事も黙ってるって事だし、野牛勢が全員黙秘って事は、オレとユイと竜崎と宮さんの４人が野牛と関わってたっていう事実が、リッキーの耳には入らないって事だ。

証拠がない以上、リッキーがどんなに疑っても、「今度野牛と揉め

たら即退学」なんて強行手段も講じる事は不可能。

それに隣の席のユイが、授業中、小声でこんな事を囁(ささや)いた。

「噂では、今回の件、リッキーは宮さんを疑うのは諦めたみたいよ。証拠不十分だって・・・」

「誰情報？　もしやミノブさん?!」

「もち！　朝イチで聞いてきた」

さすがユイ・・・、当事者だけあって、情報収集にも抜かりがない。

ミノブさん情報なら間違いないだろう。

これでさらに一安心！

しか～し、そんな安心ってヤツも、昼休みにあっけなく吹き飛んでしまう。

昼休み、写真部の部室にて・・・・・・・・・・。

第１２５話　骨身に沁みる

「聞いたっス。ホントは野牛の殴り込みに一人で対応したそうっスね」

部室に入るやいなや、竜崎が武骨（ぶこつ）に言った。

「誰から聞いた？」

「朝露とか、柴とか言ってたっス。救急車で運ばれたにしては、随分とタフなんスね」

「・・・・・」

返す言葉が見つからない。

さて、どうしたものか・・・。

「どうして野牛のヤツらにやられたって事を、昨日黙ってたんスか？　オレはてっきり被害者はゼロだと思って安心しきってたっス」

「・・・だからコレは～、親父と喧嘩してだなぁ～」

「オレはそれで納得できても、宮さんは黙ってないっスよ。あの人絶対、ジオンさんが一人で対応したって思ってるっスよ。それこそ単身で野牛に乗り込みかねないっス」

「・・・・・」

ぐゥ～ゥ・・・、コレだから嘘って辛いよナ～。

初めからカンパの件を竜崎や宮さんに話しとけば、こじれる事もなかったのに、一度嘘ついちまったから、ずっと貫くしかねぇ～んだよナ～。

コレに懲(こ)りて、嘘つくのは金輪際やめよう・・・。

貫くのはカンパの件のみっ！！

・・・と、心の中で誓った頃、部室のドアが開いた。

「アレ？　一足先に来てたの～？　ど～したの２人とも、深刻な顔しちゃって。そんな顔してたら、幸せの鳶(とんび)に笑われるヨ～ン」

あれ？　宮さんご機嫌だぁ～。

「ン～ン、ンンンン、ン～♪」

珍しく、鼻唄なんぞを歌っている。

オレと竜崎は、思わず顔を見合わせた。

そ～か、竜崎と違って、オレに関する情報は宮さんの耳には入ってないんだ。

またしてもギリギリの所で、何とか難を逃れたゾ！

しか～～～し、そんな宮さんのご機嫌も束の間、一本の電話が一気に流れを変えた。

ヴゥー　ヴー　ヴー　ヴーヴヴ　ヴヴヴヴッヴゥー　♪

こ、この着メロは・・・？！

永内（ながうち）つよしの『とんび』！！

オレらが生まれる前にテレビでやってた任侠（にんきょう）ドラマの主題歌だ。

宮さんシブイぜ！！

そんな昔のドラマを知ってるオレもシブイ？！

電話の主は大橋だった。

昨日の武蔵への殴り込みの件を長須に聞いた所、奴（やっこ）さんたちはかなり御立腹（ごりっぷく）だったそうだ。

パクられた野牛の兵隊の数、ジャスト１０名。

全員黙秘を貫き、警察からは当日解放されるものの、学校側が下した処分は全員、無期限停学。

うち、病院送りを余儀なくされた負傷者2名。

野牛側は、これらの落とし前をつけろと言ってきているらしい。

思えば宮さんのケータイ番号知ってるくせに、直接宮さんにその事を言わない長須は、オレからしたらそれこそ筋が通っていない。

長須光雄、宮さんたちとは正反対の、単なるチキンヤロー？　それとも頭脳派？　それとも、宮さんの声を聞いちゃったら怖じ気づいちゃう？　いや、ブチキレそうだから・・・？？

どっちにしろ、今、宮さんと長須の接触は非常に危険だ！

大橋は、一応その件はオレから宮に上手く言っとくと言って、長須をとりあえず宥めたという。

そして大橋は、「一応そ～いうワケだから、ま、気にするな。今の話は聞かなかった事にしとけ。どうせ向こうもオレが中立にいる以上、吉岡が武蔵に加勢するのを恐れて手出しは出来ない。だから宮、オマエは大人しくとりあえず耐えろ」と言って電話を切ったというのだ。

全く持ってワケが分からない。

だったら初めからそんな事いちいち報告すんなって大橋に言ってやりたい。

わざわざ宮さんを焚きつけるような事言いやがって。

気にすんな言われても、宮さん怒ってるから！

耐えろ言われても、ホラ、もうすでにその辺の机とか椅子とか壁とかにあたってるし。

踏ん張りすぎて前歯も奥歯も折れちゃうよ。

・・・ったく、大橋は槍(やり)を持ってないのか、槍を！

インディアンが持ってるヤリだよ、ヤリ！！

重い槍・・・思いやりだよ『おもいやり』。

何とかその場はオレと竜崎で巧みに宮さんを落ち着かせ、何とか事無きを得た。

その日の放課後、いつものように宮さんを待ってる際、竜崎がとんでもない事を言い出した。

「ジオンさん、ジオンさんは心配じゃないんスか？」

「何が？」

「野牛がこのまま引き下がるとでも？」

「・・・ど～いう事だ？」

「これはオレの推測でしかないんスけど、野牛が武蔵に手を出したら、いくら吉岡が武蔵の加勢に回るって言っても、そんなの無視して攻撃してこないっスかねぇ～アイツら。ウチも吉岡もまとめて敵に回しかねないような気がするんスけど・・・」

説得力ある推論に反論する余地はない。

第126話 ― Save Our Souls ―

それからしばらくは、何事もなく毎日が過ぎ去った。

嵐の前の静けさのような予感がするのは、オレだけでなく竜崎も宮さんも同じだった。

街を歩いていても、常に周囲を警戒し、生きた心地はしなかった。

野牛の生徒を街で見かける度、オレたちは気を引き締めながら歩いた。

もちろん宮さんから長須へ連絡を入れる事も、逆に連絡が来る事もなかった。

さらに、大橋とのやり取りすら途絶えてきたというから困ったもんだ。

宮さんのやりきれない思いや悔しさ、目に見えない不安は痛いくらい分かるが、それはオレも一緒だ。

宮さんとか竜崎は強いからい～さ。

オレの強さは、ハッキリ言ってハッタリだからね！！

そんな日々が続いたある日・・・。

休み時間、佐倉がトイレで席を外し、オッキーが前の席のヤツと夢中で何か話している時だった。

「アタシ、バイト辞めようと思ってるの」

ユイがボソッと言った。

「へ？　バイトって、あの・・・」

・・・メイドカフェ？と口に出しそうになったが、寸前で止めた。

「なぜに？！」

「これ以上バイト先に迷惑掛けたくないし・・・。それに、親戚から、あるバイトを持ち掛けられてて・・・・・」

メーワクって？　これ以上って、あの時の他に何かメーワク掛けたのか？

一体何が・・・？！

思えば今まで、ユイとまともに話す機会ってなかった。

オレは自分の事で精一杯だったし、ユイまで気が回らなかった。

オレや竜崎、宮さんだけでなく、ユイも戦ってたんだ・・・・・、
野牛と。

これはユイのＳＯＳかもしれない？　・・・絶対、見逃してはならない！！

「ユイ、今日さぁ～、放課後空いてるか？　少しでいいんだ、時間とれねぇ～か？」

「ゴメン、今日は学校終わったら、すぐバイト行かなきゃ・・・」

「・・・・じゃあ、バイト先に行っていいか？　辞めんだろ？　じゃあ、あの制服も見納めだな」

「仕事中、話できる時間なんてないわよ」

「だったらバイト終わるまで待つよ」

その時、佐倉が教室に戻ってきた。

「アレ？　２人共～、仲良く何の相談～？」

「何でもないヨ～ン」

ユイが佐倉の髪を束ねながら無邪気に言った。

ユイとシリアスな会話をするタイミングなんて、この教室にはねぇ～よな・・・・・。

学校の帰り、オレたちはいつものように駅前をブラつき、意味もなく時間を潰した。

心に一物ある宮さんも、時折笑顔を見せるのだが、その顔は笑っていても目は笑っていないのが常。

それは竜崎も同じなので、おそらくオレもそうなのだろう。

常に必要最低限の事しか喋らない為、オレたちは沈黙する時間が日に日に増えた。

やがて2人と別れると、オレは真っ直ぐユイの働くメイドカフェに向かった。

チリンチリ～ン

「いらっしゃいニャ～」

ネコ耳着ぐるみだ。

相変わらずこの店は明るいニャ～・・・・・と、思わずオレまで語尾に「ニャ」を付けてしまったニャ～。

席に着いてメニューを眺め、オレは後悔した。

金、ねぇ～よ。

ヤッベ～よマジで、オレ、ヤッベ～！

お賽銭(さいせん)分も金持ってねぇ～よ。

唯一サイフの小銭入れるトコに入ってる硬貨はゲーセンのメダル１枚だよ。

これじゃ～賽銭箱に入れてもご利益(りやく)ねぇ～よ多分。

ど～しよ水飲んじったよ。

水だけ飲んで、帰っていいかな？

・・・と、その時！

「何で来んのよ！！　・・・・・ったく」

出たっ、ツンデレ、もとい、ツンツン？

究極のツンデレ、ユイ嬢の登場だ。

相変わらずこのメイド服って、オタク的、サブカルチャー的な分野では秀でてるよなぁ～。

アンバランスなユイのこの姿も見納めかぁ～なんて思ってると、ユイは注文をとりに他のテーブルに行ってしまった。

オレはまたメニューに視線を戻す。

『ご主人様に、メイドが一口飲ませてくれるサービス』

思えばユイも仕事だって言って割り切って、客に「あ～ん」とか「ご主人様ぁ～」とか、甘い声を出したりすんのかな？

ちょっぴり見てみたいよ～な、やっぱり見たくないよ～な・・・・・。

おっ、コレは凄いぞ！

『ご主人様に、メイドが全部食べさせてくれるサービス』

愛してマスカットパフェ？　ぶどうか・・・。

不味(まず)そうだな。

高けぇ～し、超恥ずかしそうだ・・・。

ま、硬派なオレには縁(えん)のない世界だが。

・・・と、その時！

「ジオン先輩お久しぶりですぅ～」

やっぱり一番ココにピッタリ合うのは朝露さんだよ。

トレーの持ち方もサマになってるしな。

「ユイ先輩、今日で辞めちゃうみたいです～。やっぱし私のせいですよね～？　私のせいで野牛の人たちがいっぱい学校まで押し掛けてきて・・・」

前も言ってたっけな、朝露さん。

やっぱりあのスケバンミケコとの件から、また一悶着(ひともんちゃく)あったなコレは。

素直に話してくれっかナ？

単刀直入で行くか？　それともユイに聞いて知ってるみたいなカンジで鎌(かま)かけで行くか？

正攻法？　自然体？

・・・・素直に、正直に、本音で行こう。

「お姉ちゃん皿割れた・・・は、朝露さん流のギャグだよネ？　ホントは何があったの？　あの日」

第127話　糸口

「・・・・・・・・・・」

「ユイには相談したの？」

朝露さんはオレの問いに、黙って首を振った。

・・・やっぱり、朝露さんは隠してる。

何か重大な事を隠してる。

オレは漠然とだが、それが今回の野牛との戦争の、何か大事な鍵のような気がしてならない。

問題解決のヒントは常に、足元に転がっているのか？

今回の戦争の発端（ほったん）は、遡（さかのぼ）ればミケコの誤解から始まった。

友人の上木の敵討（かたきう）ちの為、ユイの元に現れたミケコ。

しかし、そもそもその敵討ち自体、元々実体のない虚像。

誤解が誤解を生み、さらにそれが暴力にまで発展して、取り返しの

つかない所まできている。

世の戦争なんて、所詮始まりはそんなモンなのかもしれない。

最初の頃なら、しっかり話し合えば解決できた問題かもしれないのに、時が経つにつれ、話し合いでは到底解決できない所までいってしまう。

それが最終的に戦争なんていう、大きな事態にまで発展するのかもしれない。

どこかでこの連鎖を断ち切らないことには、平和は来ない。

朝露さんはベルに反応し、音の鳴る方に足を向けた。

「待って。一つだけ聞かせて。ユイに隠す理由は？」

さぁ、どう出る？！

「だって、ユイ先輩が・・・・・・・・・・・・・。私には、た、大切な・・・と、友達を売るなんて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・、できないよっ！！」

朝露さんは瞳に沢山の涙を浮かべながら、強い口調で言った。

その直後、あふれた涙の雫をたくさん散らせながら、疾風怒濤（しっぷうどごう）に走り去ってしまった。

「・・・・・・・・」

朝露さんがあそこまで感情的になるのを見たのは、初めてだ・・・。

聞かなきゃ良かったかな？　言わせなきゃ良かったかな？

オンナのコの涙には、弱いゼ、マジで。

あぁ、胸が、心が痛い～～～！！

あ～、時間よ、戻れ～～～。

もっと、こう、朝露さんを泣かすことなく進行した未来があるはずだぁ～！

そっちにオレを連れてけぇ～～～！！

オレは見てはならないものを見てしまった気がした。

今まであの口調、オットリ系、全て天然かと思っていたが、もしかすると、ネコをかぶってるだけかもしれない？

・・・と、ネコ耳着ぐるみを見て思った。

『私には、た、大切な・・・と、友達を売るなんて・・・・・、できないよっ！！』

最後の『できないよっ！！』は、いつもの話すスピードじゃなかったし、何かその時の朝露さんが、本当の朝露さんっぽい気がした。

うまく表現できないけど、そんな気がした・・・・。

しばらくして。

「アンタいつまで居るのヨ。しかも何も注文しないで。あのね、今日はアタシの送別会あるからさ、このままアタシを待っててもムダなんですけど」

「早く言えよ、そんな大事な事！！」

「はあ？　アタシはアンタと一度も会うって言ってないから！」

ぐゥ～あ～！！

「分かったよ、帰るよ、帰りますよ。ど～せ金ねぇ～し・・・」

オレは席を立った。

「・・・ちょっと待ってなさいよっ！」

そんな一言を残し、ユイは厨房（ちゅうぼう）へ行ってしまった。

待ってろだと？　・・・ったく、帰れって言ったり帰るなって言っ

たり、勝手なヤツだ。

しばらくしてユイが、何やら大きなパフェのようなものをトレーに乗せて、こっちに向かって歩いてきた。

それって、メイドが全部食べさせてくれるっていう、確か２８００円もする『愛してマスカットパフェ』では？！

冗談だろ？　オレの所に置くのか、それを！！

な、何となく分かる、オマエの意図してる事・・・。

でも、マジで実行するか？　フツ～！

「冷たいの食いたくねぇ～よ」

思わず本音が出てしまった。

「・・・うるっさいわね。アタシのオゴリなんだから、黙って食べさせてもらいなさいよ」

「頼んでねぇ～し、食べさせてもらいたくねぇ～し、食べさせてもらいなさいよって、何か日本語オカシイし！！　それにオマエ、コレ、高いだろ？　今日のバイト代全部コレに飛ぶ・・・フガフガ」

オレが話してる途中、ユイが勝手に生クリームを口に入れてきた。

どうせ入れるなら「あ～ん」とか合図送れよ！

「ジオン、この事は竜崎とか宮さんたちには黙ってなさいよ！！」

「はあ？　当たり前だろ！　こんな事されてるなんて口が裂けても・・・フガフガ」

何か一口の量が多いし、スピード速いし。

通常のパフェの3倍くらいあるこの大量のパフェ、このスピードだと約5分で完食だ！

オレ、明日学校休むぞ多分・・・、下痢で！

「誤解しないでよね！　アタシは別に、好きでこうしてアンタの口にスプーンを運んでるんじゃないから！」

何ワケ分からん事を・・・。

オマエが勝手にオレの口に入れてんだろ～が！

「あのなぁ～ユイ、オマエ、さっきから何が言いたいのかさっぱり分からん。もっとオレに伝わるように、分かり易く最初からゆっくり話せ。そんな急がなくても時間はまだあるだろ？」

「・・・・・」

ユイは急にしおらしくなり、恥ずかしそうにそっぽを向いた。

第１２８話　究極のツンデレ

「もしかして、こ～いうの初めて？」

ユイは頬を赤く染め、黙って頷いた。

「あのなぁ～、オマエ何の為にコレ持ってきたんだよ。オレと少しでも話がしたいと思ったんだろ？　学校じゃ話せない事をさ。なのにオマエ、コレ、オレの口にそんなハイスピードで入れてたら、オレも喋れないし、あっと言う間になくなるぞ。そしたらせっかくコイツを持ってきた意味がねぇ～だろ、意味が」

さらにオレは続けた。

「もっと間隔（かんかく）を空けて入れろよ。それに『ア～ン』とかって合図しろよ最初に」

「・・・・・」

何か、ユイのオレを見る目がオカシイ。

まるでエロオヤジでも軽蔑（けいべつ）するかのような目だ。

コイツ、何か誤解している？

「・・・分かった分かった勝手にしろ。オマエも恥ずかし～かもしんねぇ～けど、オレだって恥ずかし～んだヨ。今まで黙ってたけどな、誰にも言わなかったけどな、オレはこう見えても超照れ屋で恥ずかしがり屋の赤面症なんだよ」

「嘘よ。アンタがシャイ？　世界が転覆（てんぷく）しても有り得ない」

「でも、もう今日で、超照れ屋で恥ずかしがり屋は卒業した。オマエを見てて思ったよ」

「・・・な、何よ」

「赤面するのも悪くねぇ～って。嫌なのは自分だけでさ、周りはむしろ好印象なんだなって。自分なんかの為に、目の前の人が顔を赤らめてくれるってさ、何か嬉しいって言うか何て言うか・・・」

「・・・・・」

ムムッ、そんな上目遣いでオレを見るな。

それこそ赤面しちまうだろ！

「だ、だからオレは、今日から赤面っつ～コンプレックスを逆手にとって、コレをオレの武器、対人手段として有効に用いる！」

「勝手にすれば。それよりアンタこそ、さっきから何が言いたいのよ」

「だから、オレだって恥ずかしいんだよ。でも、それってオレたち

だけだろ？　周りはオレがただ単に金出してコレを注文した客であり、オマエは客のために仕方なくスプーンを口に運ぶ仕事をする、単なるバイトでしかない。つまり、オレは客でオマエは仕事・・・フガフガ」

ぐわっ、またしても大量のアイスを口に入れやがって・・・。

「だから何よ。一体何が言いたいワケ？」

「時間を大切にしろよ。オレたちの時間、今、こうしてる間にも削られてんだよ。放っておいたら、このパフェのアイスのように、あっと言う間に溶けて無くなっちまうんだ」

「・・・・・」

「オマエとこうしてココに居れる瞬間は、一生のうちで今しかねぇ～し、この時間を、貴重な時間を、オレは大切にしたいんだよ」

「・・・」

「話してくれ、オマエの本音を。どうしてバイト辞めるんだ？　これ以上、バイト先に迷惑掛けたくないって言ってたな。ど～いう意味だ？」

ユイは周りを気にしながら、誰も居ないのを確認すると、ゆっくりと真相を語り出した。

それは、オレの予想を遥かに凌ぎ、オレの推測すら覆す、衝撃的な

事実だった。

案の定、オレたちは『さらわれた』と『皿割れた』のトラップにまんまと引っ掛かっていたのだ。

「お姉ちゃん皿割れた」自体、存在しないデタラメな事実だった。

弟が叫んだ言葉は、紛れもなく、「お姉ちゃんがさらわれた」が正しかったのだ。

つまりオレたちは騙(だま)されていたのだ。

朝露さんにも・・・、そしてあの日、野牛に乗り込んだ日にやっと辿り着いた先にいた、野牛のスケバンミケコの手下たちにも・・・、オレたちは騙されていたんだ。

第１２９話　多元的無知と責任分散と評価概念

オレと竜崎と宮さんの3人が偶然にもメイドカフェに足を運び、ユイと朝露さんと奇遇な遭遇をした日が事の始まりだった。

ユイ目的で現れたスケバンミケコと手下４人。

その手下の一人に、たまたまその場に居合わせた朝露さんが因縁をつけられ、髪を引っ張られて振り回されるという事件が発生。

朝露さんはその日、バイト先での出来事を母親に話した。

母親が学校に相談し、学校側はその旨野牛へ報告、報告を受けた野牛側は、即ミケコたちに厳重注意を施(ほどこ)した。

民間の公共の場を乱す行為、そして、罪のない無関係な一般人に手を出した事は、被害届が出なくとも、れっきとした犯罪である・・・と。

母親の対処も学校側の対処も、決して間違ってはいないと思う。

問題はそこではない。

ある日、朝露さんの弟と妹が店にやってきた。

姉のバイト姿を一目見ようとしたのか、美味しいデザート目当てなのかは分からないが、健気で温かい場景だ。

そんな兄弟の見てる前で事件は起きた。

現れたのはスケバンミケコと手下４人、まさしくあの時の５人だ。

学校側に注意を受けた５人は即、メイドカフェに訪れ、朝露さんに制裁を加えた。

弟と妹が見てる所でスケバンたちが現れ、朝露さんを殴ったのだ。

その際テーブルに激突し、テーブル上の皿が床に落下し割れたという。

その後朝露さんは、周りに相談することもなく着替えると、誰にも告げずに店を出たのだった。

５人に強要され、連れ去られたのである。

朝露さんは路地裏を通り、ひと気がなく、暗くて狭い空き地に連れて行かれ、そこで殴る蹴るの暴行を受けたが、大きな怪我はなかったという・・・。

これが事の真相なのだが、驚くべき点が一つあった。

この真相は、何とメイドカフェの店長が激白したというのだ。

メイドカフェの店内にはドームカメラという監視カメラがあり、そ

のカメラが店内至る所を監視し続けている。
もちろん録画もされているので映像履歴も残る。
ユイは店長の個室に呼び出され、朝露さんが連れ去られる様を見せられたのだ。
朝露さんが路地裏を通って連れて行かれた場所は、偶然にもメイドカフェの裏、店長の個室の窓の外だったという。
窓から空き地を覗(のぞ)き見し、店長は暴行の様や会話も一部始終を目撃したのだ。
ミケコは去り際、「てめぇ～今度チクッたら家族ごと殺すかんね・・・」と言って去ったという。
その事からも、この日の目的はユイではなく、朝露さん一本だった事がうかがえるのだが、第3者の店長の目からは、どうやらそうは見えなかったようだ。
ユイは、店長から一部始終を聞かされたのち、「元々の発端、原因は君にある。責任をとって自主的な退職をすすめたい」と言われた。
おそらく、オレたちとミケコたちが対峙した日の一部始終は、とっくに店長は録画を見て把握していたに違いない。
そして、自主的な退職をすすめてきたらしいが、ハッキリ言えば、クビだ。
これ以上自分の店にヤンキーたちが来ないようにする為、ユイには

辞めてもらいたいという気持ちも分からないでもないが、大人として、店長として、はたしてその行為、決断はどうなのだろうか・・・？

目の前の犯罪を見ても、それを他人事のように、まるで映像や作り物を見るかのように知らんプリを決め込む傍観者（ぼうかんしゃ）め・・・・！

オレは、その現場を一部始終黙って見ていた店長に腹が立った。

今でもこの現場を、オレたちを見ているのか？

隠しカメラでメイドカフェの店内を盗み見している変態オヤジが・・・！

妙にムカつく、腹立たしい！！

やり場のない怒りをぶつけるようにオレは、渾身の力を込めて天井の、黒くて丸いドーム状のプラスチックを睨んだ。

だが、そもそも敵が違う。

店長はただの傍観者に過ぎず、文句を言っても仕方がないんだ。

朝露さんが連れ去られたのを知っていて放っておいた事や、偶然にも自分がいる個室の外で朝露さんが暴行されてるにもかかわらず、声を掛けることも助けることもなかった事など、いくら責めても仕方がないんだ。

それは個人の意識の問題だから。

淋しいけど・・・。

朝露さんも、朝露さんの母親も、ユイも、店長も、ホントは誰も悪くない。

悪いのは、ミケコたちだ！！

オレたちはずっと、野牛に乗り込んだのは間違いだと思っていた。

自分たちの勘違いだと思っていた。

勝手にオレたちが誤解し、暴走し、野牛に土足で踏み込んで、戦争の原因を作ったのは自分たちだと思っていた。

オレたちはやりきれない思いを口に出さず、それぞれが苦い思いを押し殺し、黙って唇を噛み締めていた。

悪いのは自分たちだから、野牛の報復に対して報復するのは筋違いだと言い聞かした。

・・・・・が、全てが覆（くつがえ）される！！

第１３０話　アタシが敵を討つからよ

「ジオン、この事は竜崎と宮さんには黙ってなさいよ」

そのセリフ、一番最初にも聞いたナ。

そうか、てっきりパフェを食わしてもらってる事を言ってるんだと思ってたけど、この事を言ってたんだナ・・・。

B型の話は飛～ぶ飛ぶ。

こうしてマジメに語り合わないと、本当のB型の気持ちは分からねぇ～。

これが俗に言う、B型が扱いにくいって誤解される一因なんだな・・・。

「ユイが顔を赤らめながら、この事は黙ってなさいよ、なんて言うから、てっきりユイはオレの事を好きなのかと思っちまったゼ・・・、ははは」

「バッカじゃないの？　マジ有り得ない！！」

・・・そこまで否定されるのも淋しいな。

「竜崎と宮さんに、今の話をしろって言われても・・・、さすがに言えねぇ～だろ。言ったらあの2人、どんだけキレるか分かんねぇ～。いくら何でも、あの大国とやるには・・・」

竜崎は賢いから、オレのように思いとどまるかもしれねぇ～けど、宮さんは絶対キレるよね。

そしたらオレも竜崎も、宮さんに加勢しなきゃならなくなるし、ヘタすりゃ吉岡をも巻き込む大戦争になりかねない。

いや、それは過言か・・・？

あっと言う間に潰されるよね、オレたち。

「約束よ。もちろん雫にもね・・・」

「わ、分かったよ。でも、ど～してユイは、みんなに話さないんだ？」

理由はオレと同じだってのは分かってる。

みんなに言った所で、結局打開策が見つからず、妥協して悔しさを押し殺すのがオチだし、ぶっちゃけ、恐いんだろ？

野牛の仕返しもそうだし、どんどん事が膨らんでいきそうで・・・。

でも、オレはユイの口から聞きたかった。

ユイの本音を・・・。

みんなに話さない理由を・・・・・・。

「ど～してって、そんなの決まってんじゃない。アタシが敵を討つからよ」

そう言うとユイは、最後の一口をオレじゃなくて自分の口に入れ、颯爽とその場を去った。

え？　ユイ？？　今、何て・・・・・・？！

朝露さんが、ユイがいなくなるのを待ってたかのようなタイミングでテーブルの前を通り掛かった。

「あ、あの～～～、さっきの件ですが・・・」

さっきの件？　何だっけ？　何か色んな情報が入ってきて、頭ん中が整理できない。

「正直に話します。あの後、あのスケバンたちに脅されたんです。あっ、でも～、すぐ帰ってきました。ホント、ちょっと脅されただけなんです～」

へ？　もしかして朝露さん、事の真相をオレにぶっちゃけてるって

か?!

「あの～、だから～、その事は～、え～～～とぉ～～～、誰にもぉ～・・・・」

「ユイに隠す理由は？　大切な友達なんでしょ？」

さっきは取り乱したけど、今なら話せるだろ、朝露さん？

「・・・話せば長くなるので～、・・・・・ちょっと、待ってて下さい～」

「あっ・・・・」

行ってしまった。

・・・と、思ったら、朝露さんはトレーに何かを乗せてやってきた。

そ、そ、それは・・・？　メイドが全部食べさせてくれるっていう、確か２８００円もする『愛してマスカットパフェ』では？　たった今、完食した、『愛してマスカットパフェ』では？

確かに朝露さんと、しっかり話をしたいけど、仕事をしてるフリする為に、オレにそれを食わせるってかぁ～～～?!

朝露さんは、「私のおごりですから心配しないで下さい～」とか言

って、オレの隣に座った。

さっきまでオレがコレを食ってたって知らないみたいだ。

それに、せっかく朝露さんが打ち解けてくれそうなこのタイミングを逃してはならない。

でも・・・・・！！

「はい、あ～～～～ん」

そんな可愛い顔でせがまれたら、食わないワケにはイカンだろ！

コレを拒否ったら、男がすたるよな？　ジオン・・・。

心頭滅却すれば、舌も口も喉も胃も腸も、冷たくない痛くない、明日下痢じゃない、大丈夫、大丈夫、オレは強靭、平気、平気・・・・・。

「原因は私じゃないですか～。私が転んだ勢いで、スケバンの仲間を箒で叩いちゃったりしたから～。そのお返しに髪を引っ張られたワケじゃないですか～」

ウム、それはそうだけど・・・。

「その事を母親に話したら、母親が学校に言ってくれて、多分ウチの学校は、その件を野牛に言ったんですよね～。その事を注意されたスケバンたちが、私のトコロに来て、ちょっとだけ愚痴をこぼし

ただけですから～」

グチ・・・？　どんだけ庇うんだよ、朝露さん。

「私だけでいいんです、私がちょっとだけ我慢すれば、それで済む事ですから～。この事をユイ先輩に話したら、きっと皆さん怒って野牛に仕返しとか行っちゃいそうで・・・。それって、スケバンたちに大切な友達を売って、自分だけ助かろうとしてるみたいで・・・・・・私には、とても～・・・・」

なるほどね、そ～なんだ。

「言わないよ、誰にも。もちろんユイにも」

言ってもユイのヤツ、知ってる事だし。

「あ、ありがとうございます～。弟たちには、あのスケバンたちは間違ってお姉ちゃんを叩いちゃったんだよって言ってあるんです～。それに、母にもあの後の事は一切話してません。だから、もしもウチの家族に会う事があっても・・・」

「オレは人一倍、口は堅いよ。なぜなら、朝露さんの気持ち、痛いくらい分かるから・・・」

小さい子や、頼りにしてる母親に、少しでも心配掛けさせたくないもんね。

「あの～、だからですね・・・」

朝露さん、『だから』が妙に多いな。

一番言いたい事をまだ隠してる。

・・・何となくなんだが、朝露さんはオレのように、過去にイジメられた経験とかありそうな気がする。

もし、そんなトラウマが朝露さんの心に引っ掛かってるのなら、オレがそいつを取っ払ってあげたい。

「オレ、昔、イジメられっ子だったんだ。あっ、コレはみんなには内緒ね」

カミングアウト！

朝露さんにはなぜか話せた。

「イジメられっ子ぉ～？　え～～～、そうなんですか～？　意外です～、全然そうは見えないです～」

朝露さんは、オレがイジメられっ子だったと聞いて、想像以上に驚いている。

あれ～？　オレの予想では、朝露さんもイジメられっ子だったんだが、ハズレ～？

・・・と、その時！

「・・・実は、私も～、人に話せない悲惨な過去があるんですよ～。聞きたいです？」

朝露さんはオレに誘発（ゆうはつ）され、とんでもない事を語り出した。

赤裸々（せきらら）に自分の全てを曝（さら）け出す朝露さん・・・。

そこには、朝露雫という絵に描いたような、アニメチックでファンタジックな今の人格が形成されるに至る、痛撃で残酷な背景があった・・・・・。

第１３１話　光なき真影

朝露さんは、実の父親に性的虐待を受けて育ったという。

本人(いわ)曰く、そのせいで腐女子(ふじょし)になったそうだ。

ま、それはさておき、驚いたのは朝露さんの容姿や仕草だった。

男性の暴力を恐れ、意識的に柔らかい女性を演じているのだという。

スローな口調も、私服も、髪型や仕草まで・・・。

朝露さんは恥ずかしそうに、「そうする事によって、周りが優しくしてくれるかもって私、どこかで思ってるのかもしれないですね～。それって単なる甘えですよね～。そのうち徐々に直していこうとは思ってるんです～」と、笑顔で言った。

それが朝露雫という、一見、常識ある世界では場違いなほど異彩を放ち、逆にサブカルチャーな世界観の中では洗練され、デフォルメされたキャラクターとして際立つほどの優艶(ゆうえん)な容姿と人格を形成したのだ。

つまり、悪態をつく残虐者から逃れるために生み出した、朝露さんの苦肉の産物。

それが、今の朝露雫だ・・・。

堪(こら)え切れない憤(いきどお)りを感じる。

加害者は被害者の気持ちを知らないし、全く理解していない。

目の前の人物は、全く自分とは無関係の固形物としか思ってないのだろうか？

思いやり・・・。

それは、相手の立場に立って物事を見ること。

つまり、暴力も口撃(こうげき)も、される側に立つと辛いから、やらないという気持ちが思いやり。

自分が関係ない第3者だとしても、被害者側に立つと辛い場合は助けたいという気持ちが思いやり。

逆に、自分が気付かず過ちを犯していたならば、注意して欲しいという気持ちが思いやり。

気付いてるにもかかわらず過ちを犯しているなら尚更、注意してほしいという気持ちが思いやり。

オレは、そんな思いやりってヤツを抱いて生きていきたい。

それがオレの理想とする男らしさにも繋がるってモンだ。

りりしくて、勇ましく、義侠心に富む真の男ってヤツだ。

悪は許してなるものかっ！

先公もケーサツも神ってヤツも、ど～せ誰も救ってくれねぇ～んだろ？

誰も悪を裁いちゃくれねぇ～んだろ？

だったらオレが裁いてやるよ！

とことん制裁を加えてやるよ！！

「・・・ジオンさん、ちゃんと聞いてます～？」

「はいっ？」

「もうっ！　やっぱし聞いてなかったんですね～？」

そんな朝露さんの一言でオレは目が覚めた。

どうやら今までジオンワールドへトリップしていたようだ。

「あの～、だからですね、もうスケバンたちと何もないので、仕返

しとか絶対しないで下さいね～」

あぁ～～～、それが一番言いたかったんだね～、今日。

「大丈夫。今日の事は絶対誰にも言わないし、オレは、こう見えても臆病だから・・・」

「ジオン先輩～、パフェ、食べてくれてアリガト～です～。コレ、全部食べれた人って多分、初めてですよ～。凄いですよ～、カッコイイです～」

そこを褒められても、あんまり嬉しくないなぁ～。

しかもオレ、そんなパフェを2杯食ったし。

おそらくこの記録は破られまい・・・。

それからオレはユイに軽く挨拶し、金を払わずして「ありがとうございました～」とか皆に言われ、頭をポリポリ掻(か)きながら店を出た。

外はすっかり暗くなっている。

それにしても痛々しい、痛々しいよ、朝露さん。

何か、中学の頃、イジメられっ子だった時の自分を思い出すよ。

今の朝露さんを見てると、何か昔の自分がダブってならない・・・。

朝露さんが悪から身を守るために形成した容姿や人格。

自分に照らし合わせると、もしかしたらオレがヤンキーに拘(こだわ)るのは、朝露さんと同じように悪から少しでも逃れたい一心が生み出した産物なのかもしれない？

オレが抱くヤンキー像、強くて男らしくて、イジメなんて吹き飛ばすようなイメージ・・・。

オレは、過去のトラウマから逃れるために、今の自分を、ヤンキーを演じてるのか？

それに、朝露さんの、自分は被害者なのに加害者を庇(かば)う様な態度。

まさに、中学の頃のオレじゃねぇ～か。

シャバ憎まっしぐらだった頃の、オレじゃねぇ～か。

・・・・でも、その気持ち、クソ分かるんだよ！

痛いよ、メチャクチャ痛いくらい分かるんだよ！！

そうだよな？　ど～しよ～も、ねぇ～んだよな・・・・・。

戦ったって、どうせ負けるんだモンな。

周りに迷惑掛けるだけだモンな。

積極的に行動した事によって、事態が緊急性を要する事になるくらいなら、何もしないで耐え続けた方がいいよな？

ガキじゃねぇ～モンな。

泣き寝入りしてりゃ、そのうちほとぼりが冷めるかもしれねぇ～し、辛い事なんて永遠に続かないって事くらい、ガキじゃねぇ～から知ってるモンな。

今だけ、今だけ耐えりゃ～、そのうち・・・・・。

オレはやり場のない気持ちを抱えながら家路を歩いた。

何度忘れようとしても、あの日の事が思い出されてならない。

野牛の女子寮で、スケバンミケコの手下との１コマ。

『ねえ、朝露雫、あの時アンタが髪を引っ張って振り回したコ、覚えてるでしょ？　雫はどこよ』

ユイが女を問いただす。

『はあ？　ちょっと、何よそれ。マジでそんな女知らないし』

マジでそんな女知らない・・・か。

そんな単純な嘘を見破れなかった、オレたちが甘いのかもナ・・・。

暗く、憂鬱（ゆううつ）で、呼吸をしてない街路灯が、うざったらしくオレを睨む。

淋しそうに立ち尽くし、酸素を欲しがる街路樹だけが、オレに優しく笑顔を見せた。

オレは黙って歩いた。

月が照らすビルの影を、実体のない影を、黒く、憎たらしい、真っ黒な影を睨みながら・・・・。

第１３２話　シロ装束と３匹の子ブタ

シトシトと鬱陶(うっとう)しい梅雨や、ムンムンと苛立(いらだ)つ蒸し暑い日々が続いた６月が過ぎ、本格的な夏の到来が間近に迫った頃、今まで冷戦の続いていた野牛ＶＳ武蔵の嵐が、とうとう近づいてきていたが、この日はまだ、オレたちはそんな気配すら感じていなかった。

昨日、突然宮さんが神社に行きたいと言い出した。

何でも、クラスの女子生徒が妊娠して学校を辞めるので、安産祈願のお守りを餞別(せんべつ)としてあげたいと言うのだ。

人情味溢れる宮さんらしい心意気に、オレと竜崎は断る理由もない。

神社か・・・。

オレは金欠だから、金持ちになれるよ～にってお願いしようかな。

最近は初詣(はつもうで)すら行かねぇ～からホント久しぶりだゼ。

日曜日、オレたちが向かったのは、七福神の弁才天(べんざいてん)が祀(まつ)られているとされる、由緒正(ゆいしょ)しき『琵琶(びわ)神社』。

真っ赤な鳥居を潜るとそこには、小さな湖を髣髴させる池。

その池の真ん中に、橋を渡って行く本殿があるという、全体的にしゃれたデザインの神社だ。

恋愛成就の他、音楽、豊穣、弁舌、学問といった具合に、随分と御利益の多い女神様だ。

他に、水神、蓄財の神としても有名らしいが、そこまでいくと、もう、とにかく縁起が良い神様って一言で言ってしまった方が手っ取り早いような気がする。

神社に着くなり、宮さんはお守りを探し出した。

思えば、どの神社にも安産のお守りってあるよなぁ～、それだけお産って、人々にとって不安で大変な事なんだなぁ～なんてしみじみ考えていると、宮さんの唸り声が聞こえてきた。

「末吉かぁ～」

おみくじを引いてぼやく宮さん。

「アレ？　お守り探してたんじゃないんですか？」

「売店の子がいないんだよねぇ～」

売店の子？　それって巫女さんの事じゃない？　宮さん、それって巫女さんって言うんじゃないかな？

「オレ、小吉っス」

宮さんに続いて竜崎もガッカリしている。

何のためにわざわざ金出してまでおみくじ引いたんだよ、この2人。

「何吉とか関係ねぇ～よ。おみくじってメッセージが大事なんだよ。オマエ、おみくじ引く前に何を聞きたいのか思い浮かべたか？」

竜崎に聞くと・・・。

「い～や、何も思い浮かべないっスよ」

「大吉出ろって・・・」

宮さんも答えた。

「もったいない・・・」

そんなオレの呟きに、「聞きたい事思い浮かべると、誰か教えてくれるんスか？」と、竜崎がぶっきらぼうに訊いてきた。

「バカ、オマエ、そりゃ～神様だろぉ～が・・・」

「ジオンさん、目を覚まして下さい！」

コイツは真っ向から神を否定しやがる。

・・・でも、思えば神って・・・一体何だ？

「神様って、やっぱり天国とかに住んでたりすんのかな～？」

「神同士でも喧嘩とかするのかね～？」

オレのちょっとした疑問に、宮さんも乗ってきた。

「もしも神を殺す事に成功した場合、焼いて食ったら旨いんスかね？？」

なぜ食べる、竜崎。

「え？　食うの？？」

宮さんもビックリだ。

「・・・で、何を根拠にその説が生まれるんスか？　おみくじ引く前に何を聞きたいのか思い浮かべるってやつっス」

「何だっけな？　ネットで見たんだっけかな？」

「マジっスか？　テレビよりは信用できるっス。　・・・ですって、宮さん」

「オウ！　引き直そう！！」

「そうっスね。引き直しますか」

宮さ～ん、竜崎～、オマエらの神はインターネットかぁ～～～？！

「やった、大吉だ！」

「オレも大吉っス」

「良かったね～。で、引く前に何を聞いたの？」

「神さま、いるならオレに大吉をひかせてみろ～～って」

「同じっス」

それ、趣旨違くねぇ～？

「宮さんお守り買ったんスか？　買ったんなら帰りましょ～」

オマエは何しに来たんだぁ～、おみくじ引きに来たのか竜崎！！

「売店の子がいないんだよね～。しょうがないからお参りでもしてくっか」

宮さん、宮さんのお参りって、ついでなの？　単なる買い物のついでなの～？

「さてさて、何をお参りしよ～かナ～」

な、何をお参りすんの、宮さん？　何をお願いしよ～かナ～なら分かるけど・・・。

お願いだからモノノケとかお参りしないでね～！

「そ～いえば、前に本で読んだんだけど、フツ～さ、どうか何々でありますよ～にとかって、自分のことお願いするじゃん。そこをさ、どうか神様が今年一年幸せでありますよ～にとかってお願いするとさ、倍になって返ってくるんだってさ・・・」

オレは取って置きの情報を2人に教えた。

ホントはこんな貴重な情報を、誰にも教えたくなかったんだけど、今日は特別だ！

だってさ、神様が金持ちになりますよ～にってお願いしたらさ、倍だよ、倍！

毎日続けてたら、いずれ大金持ちになっちゃうよ！！

「え～～～、そんなのもったいないっスよ」

「そ～～だよ亀ちゃん。せっかく賽銭箱に金入れるんだから、しっかり自分の事、お願いしなきゃ」

ま、オレもそんなにこだわりがあるワケじゃないし、常に実行してるワケじゃないんだが・・・。

「あっ、オレ小銭ないっス。宮さん貸して下さい」

「１００円玉しかねぇ～や。つり銭出てこねぇ～かなぁ～？」

つり銭かぁ～、そりゃ～画期的(かっきてき)だね。

「じゃ～、やっぱりお守り買ってからにしましょ～。そこでくずしてもらって下さい」

「でもね、いないのよ。さっきから売店の子探してんだけど」

・・・と、その時、筋向(すじむか)いの建物周辺で、千早(ちはや)を羽織って掃き掃除をしている巫女さんを発見。

「いましたよ、宮さん」

オレが指差した先には、とても見慣れた女性が・・・・・・・・・・？

出たよ、出たよ、出たよ～～～！

例によって、出ましたよ！！

そこには、まばゆいほど清純な巫女装束（しょうぞく）に身を包んだ、アイツの姿があった。

第１３３話　随神の道

白い小袖（こそで）に紅袴（くれないはかま）、草履（ぞうり）。

袖をつかみながら両手で箒（ほうき）を持ち、束ねた長い髪を揺らめかせ、風にそよぐ様に掃き掃除をしている、清楚（せいそ）な巫女装束に身を包んだ女性。

あれは、まさしく！

「こ、怖いっスね、何か・・・」

竜崎が生唾をゴクリと呑みながら囁（ささや）いた。

「こ、ここまで偶然が続くとね・・・」

宮さんも言葉を失っている。

もちろんオレも、言葉もない。

「この世に偶然はない。あるのは必然のみ」

後ろから聞こえた声に、オレたちの心臓が跳（は）ねた。

オレたちの後ろには、ニコやかに笑みを浮かべる目鼻立ちの良い３０代前後の男性が立っていた。

水色の袴を穿いて、神官用白衣に身を包んだこの男、どっかで・・・？？

「君たち、ユイ君の知り合いかい？」

「は、ま、まあ・・・」

「じゃ、ごゆっくり」

男性は軽やかな足取りで、威風堂々とその場を後にした。

オレたちは、掃き掃除をするユイの元へ向かった。

そ～いえばアイツ、親戚から、あるバイトを持ち掛けられてるって言ってたっけ。

バイトって、巫女のバイトかぁ～。

でも、巫女って、穢れなき女性しかできねぇ～はずじゃ？

ま、迷信だとは思うが、一応当事者に聞いてみるか。

「おい、ユイ！　オマエ、乙女・・・」

直後オレは、いつも以上に手痛い鉄拳を顔面に喰らった。

「何でいんのよ、アンタたち!!」

「それはコッチのセリフだ!!」

「そ〜っス！　ど〜していつも、オレらの先回りして現れるんスか?!　程があるっス」

「まぁ〜まぁ〜、亀ちゃんも竜ちゃんも、落ち着いて・・・」

さすがに宮さんからそんなセリフを頂(いただ)いては、オレたち2人が落ち着かないワケにはいかない。

「大人気(おとなげ)ない」

「面目(めんぼく)ないっス」

授与所でユイは、サービスだと言って、丁寧に桐箱に安産守を入れてくれた。

ユイは相変わらず気前が良い。

「親戚がここの神社やってんのよ。アタシは巫女さんとか、そんな大それたモンじゃなくて、ここの社務所(しゃむしょ)で助務(じょむ)を任されただけの、単なるバイトよ」

ショムだかジャムだか何を言ってるのかさっぱり分からんが、巫女さんじゃねぇ～って？

「じゃ～、巫女さんのコスチュームを身に纏(まと)って、神社でバイトをするユイってカンジでい～のか？　簡単に言うと、巫女さんのコスプレ？」

「ねぇ、竜崎～、宮さんと一緒にさ、この人、古神札納所(こしんさつおさめしょ)に捨ててきて。そう、そこ。後でゴミと一緒に燃やすから」

「なぁ～ユイ、オマエの親戚って、もしかしてあの人・・・？」

オレは先ほどの、水色の袴を穿いた男性を指差した。

「ウン。ココの神社の神主さんよ」

第１３４話　勘違いだらけのヒューマニズム

「神主～？　神主ってこう、何か長い帽子、平安時代の長い帽子みたいなの被ってて・・・」

オレのジェスチャーに対しユイは、「それは祈祷（きとう）の時だけ被るのよっ！」と、すぐにツッコミを入れた。

「祈祷？」

竜崎が『祈祷』という言葉に敏感に反応した。

「あ～、竜ちゃん宗教嫌いだからね」

「大っ嫌いっス」

竜崎が捻（ひね）くれ者の様相を呈した尖（とん）がり唇で言った。

「でも、宗教って言っても、神道（しんとう）（・・・・）はまた別だよ竜ちゃん」

宮さんがユイに気遣いながら言った。

「あっ、別に悪い意味で言ってんじゃないっスよ。ウチの親戚で、

たちの悪い宗教に引っ掛かって、身も心も財産も、何もかも奪われた人がいて。それをちょっと思い出しただけっス」

竜崎はユイをチラチラ気にしながら言ったが、当のユイは我関せず的に、無表情でボケている。

神道か・・・・・。

「宗教って色々あるけどさ、、結局信じる信じないとか超越した精神世界、心の世界の事だろ？　オレさ、人の数だけ色ってあると思うんだ。だからさ、オマエもオレの色になれとかさ、みんなこの色に統一しようぜとかじゃなくってさ、バラバラでい～と思うんだ」

オレの宗教論に、みんな耳を傾けだした。

「歴史を見つめるとさ、大概宗教をめぐって戦争やってんじゃん。自分の意見を押し付けるからだよね。だからさ、押し付けるんじゃなくってさ、認め合えばいいんじゃねぇ～かなって思うんだ。おっ、その色いいね、でもさ、あっちも綺麗だぜ、みたいな」

ユイは相変わらずボケてたが、竜崎と宮さんは、オレの宗教論に喝采の拍手をしてくれた。

ま、それが労いの拍手だとしても、嬉しいよね。

竜崎は主に、武士道精神を重んじるらしい。

稽古を通じて人格の完成を目指す『武道』、竜崎にピッタリな道だ。

・・・が、そんな『武士道』を説いた人物が、クリスチャンだったってのも滑稽な話だ。

宮さんは本人曰く『極道』。

・・・と言っても道を極めることを指し、決してヤクザな道を進みたいという意味ではないだろう・・・と、信じている。

宮さんにとってヤクザは、映画や舞台で魅せる、任侠的な存在として映っているのかもしれないが、オレにとってはヤクザは悪でしかない・・・。

オレの苦いトラウマが、あの時の事件を思い出すたび胸を締め付ける。

今はとても思い出したくない・・・。

・・・ま、それはさて置き、オレ的には宮さんは『柔道』でいいんじゃないかと思うんだけど。

柔の道、柔らかい心、素晴らしいと思うんだが。

腰を痛めたのが原因で柔道を捨て去り、それからグレて極道だなんて、あまりにいたたまれない！

悲惨魔道のこの世に救いはあるのか？！

ユイは、『神道（しんどう（・・・・））』心の道、和のこころ。
悪くないかもね。

オレは何だ？　血液型道ってトコロか？！
何かみんなのと比べると語呂（ごろ）が悪いや。
アレでいいだろアレ、『人道（じんどう）』、人の人たる道、人として守るべき道を説く・・・みたいな？

オレは帰り際、ユイにずっと気になってた事を聞いてみた。

「なぁ、ユイ、オマエの親戚っつ～人、あの神主さん、名前何つぅ～んだ？」

名前を聞けば、何か思い出せると思った。

「神野（かみの）だけど。それがど～かした？」

カミノ？　カミノ？？　・・・う～ん、ダメだ、思い出せん。
もっと、こう、女の子みたいな名前だったような・・・・？

「ど〜したの？」

宮さんがつぶらな瞳で、不思議そうにオレを見る。

「あ〜、何か、心の中で引っ掛かるモンがあって。何かすぐココまで来てるんですけど、ど〜しても思い出せないんです」

「思い出せないって事は、それほど大した事じゃないんじゃないかい？」

ムムム・・・、言われてみればそんな気もする。

「そ〜っス。重要な事なら忘れないし、すぐに思い出すはずっス」

だ・よ・ね！

オレたちはユイに別れを告げ、神社を後にした。

家に着いても、例の神主さんの事は、何が引っ掛かってるのか思い出せなかったが、他に重要な事柄を忘れていたのを思い出した。

オレら神社行ったのに、拝殿で参拝すんの忘れたよ！！

ま・いっか！！

第１３５話　１年勢の決起

朝、目覚めと同時に頭の中に文字が浮かんだ。

『ヒトミ』・・・。

ヒトミ？　ヒトミ・・・、ヒトミ、そうだ、ヒトミだぁ～！！

学校に着くなり、オレはユイに訊ねた。

「なぁ～、昨日神社で見た、オマエの親戚の人ってさ、ヒトミって名前じゃないか？　カミノヒトミ？！」

「はあ？」

ユイは眉をしかめた。

違った？

「あぁ～、誠（まこと）さんね？　確かに旧姓は人見（ひとみ）だったわ。今は婿（むこ）入りして神野（かみの）になってるけど」

なるほど～！　神野誠！！　オレは彼を、よ～く知ってる！！

なんたって、オレの命の恩人だからな・・・。

そう、あれは忘れもしない悲惨な中学時代。

あまりの苦痛な日々に耐え切れず、断崖の絶壁から飛び降り自殺を試みた瞬間、寸での所でオレを掴んで助けてくれたのが、彼。

「死んでも苦しみは終わらないよ」

そんな言葉に、オレは項垂(うなだ)れた。

さらに彼は、オレにメッセージをくれた。

「この世に意味のない事は起こらない。君が味わった孤独も、愛を知る為にあるんだよ。君の犯してきた過(あやま)ちの償(つぐな)いは、必ず近いうちに終わるから大丈夫。勇気を出して明日を生きてみな。それに、君をイジメる人たちにも、ちゃんと償いがあるんだよ。必ず彼らも過ちを償う事になる。だから彼らを恨まず、許す事をオススメするよ」

彼の言った言葉の意味は、当時は理解が出来なかった。

でも、今ならシックリくる。

オレをイジメてたヤツらも当時、それぞれがそれなりに不当な境遇にいた。

結局、みんな苦しんでたんだ。

「もし君が、これから人生に迷ったら、いつでも私を求めてきなさい。人に救いを求めるのは決して恥ずかしい事じゃないからね。私はいつでも、琵琶神社って所に居るから。私の名前は、人見（ひとみ）・・・」

そう、それであの時、女の子みたいな名前だなぁ～って思ったんだっけ。

そうだよ、確かに琵琶神社って言ってたよ。

・・・ユイの親戚かぁ～、世間は広いようで狭いなぁ～。

「ところでアンタ、誠さんにど～してこだわるのよ？」

「あっ、いや、別に・・・」

「ど～でもい～けど、アンタみたいな穢（けが）れたヤツに、神聖な土地を汚さないでもらいたいモンだわ」

ぐゥ～、もう神社に来るなって事か？

・・・だが、オレとしては、あの彼に、一度お礼を言っておきたいんだ。

今、オレがこうして日々を充実して生きていられるのも、彼のお陰だから・・・。

その日の放課後、たまたまオッキーとユイと3人で階段を下りてると・・・。

何だありゃ～?!

たくさんの見慣れない生徒が階段下に集まっている。

「1年生じゃない?　誰か待ってるようだけど・・・」

ユイが立ち止まって言った。

「オイ、あれ、柴じゃねぇ～か?」

柴義経を見つけたオッキーがオレの方を向きながら言った。

確かに柴がいる。

一応、1年のナンバー2と呼ばれてるだけあって、一番目立ってやがる。

真ん中で腕なんか組んじゃって、一丁前のヤンキー気取りだ。

さらに・・・・、朝露さんだ!

「ど～したの雫～?」

ユイも朝露さんを見つけて声を掛ける。

「ユイ先輩～、あの～、お話がありまして～」

柴を筆頭に、1年の男女総勢30人ほどが、オレたちに話があるという事で、急遽(きゅうきょ)第3公園に向かう事になった。

公園ではすでに、竜崎と宮さんの2人も待たせてあるという。

・・・何か、イヤ～な予感がするのは気のせいか？

「ホント～、スミマセ～ン。いきなりで～・・・」

朝露さんが申し訳なさそうに言う。

・・・全くだ、全くもってけしからん。

1年の分際で、学校のトップ3を公園に呼び出すとは・・・・・。

さてさて、話ってどんな話なんだ？　ま、1年たちにボコられるってオチはあるまい。

こっちには宮さんもいるんだし・・・。

公園に着くと、竜崎と宮さんがベンチに座っていた。

竜崎はポーカーフェイスだが、宮さんはだいぶ顔を引きつらせている。

今にも臨戦態勢な顔つきだけど、喧嘩はないと思うな～。

「話って言うのは、もう、お分かりだと思いますが、野牛との事です」

柴が語り出した。

「オレたちは、一体いつまで野牛に怯えて暮らさなければならないんですか？　町とか駅前とか歩いてても、野牛のヤツらは常にデカイ顔。オレたちはもう、我慢できないんです！」

ク、クレームだぁ～。

オレたちに対する、1年からのクレームだ。

「私は、野牛の女子に、アンタんトコの総番長って腰抜けなんだって～？　・・・って馬鹿にされましたっ！　総番長さんは、ホントに腰抜けなんですかっ？」

メガネを掛けた女の子が、宮さんに痛烈な意見を放った。

宮さんはあっけにとられている。

「野牛は結局、吉岡の介入を恐れて手を出してこないみたいですけど、そんなの時間の問題ですよ。現に吉岡に通ってるオレの友達が、この間、電車の中で野牛のヤツに絡まれたって言ってました。今までそんな事なかったって言ってましたよ」

ヒゲが濃い男子生徒が言った。

「オレたちは、いつでも戦う準備はできてますよ。上の人たちがやらなくても、オレたちみたいなヤツらが決起して、戦争が勃発するのは時間の問題です。総番長さんたちがやらないなら、オレらがやりますよ、いいんですか？」

柴が言い放った。

戦争・・・。

彼女や彼氏、妻や夫、子供、親、家族や友達、大好きな人まで殺され、根絶やしにされたら誰でも復讐心（ふくしゅうしん）を持つ。

そんな鬼と化した人たちが団結し、敵に挑む。

さらに争いが激化し、関係ない人まで巻き込まれ、やがては国と国との戦いに発展し、男たちは戦争に駆り出される。

人間、一人一人に家族と、愛と、命があったのに、アリ1匹分の命の重みもないのが戦争。

さらに、朝露さんがとんでもない事を語り出す。

「野牛のスケバンなんですけど～、粛清と称して～、自分の学校の生徒で逆らう人とか、言う事を聞かない人たちを、手当たり次第に罰してるそうです～。私の野牛の友達も、関係ないのに殴られたって言ってました～。この前の殴り込みの時の密告者を探してるって、野牛の友達が言ってました～」

その言葉には、スケバンミケコに怯える朝露さんや、彼女の友達たちの悲痛な叫びも含まれていた。

粛清？　密告者探し？　放っておいたら大量虐殺にまで発展するぞ？　独裁者か、アイツは？

かつて某国の独裁者は、ある人種を大量虐殺した。

子供から年寄りまで、腕に識別番号のイレズミを入れられ、自ら墓穴を掘らされたり、毒ガスや人体実験、餓死するまで監禁されたりして殺された数、およそ６００万人。

文字や数字にすると実感も何もないが、一人一人に人生のドラマがあったはずだ。

生き残りの科学者が、復讐の為に大国で核爆弾を作ったが、結局それはオレたちの国に落とされ、戦争は終結したっていう、悲しき過

去。

オレは、朝露さんの話を聞いて、そんな事を思い出した。

自分の学校のヤツらにまで手を出し始めた所を見ると、とうとうミケコのヤツも追い込まれてきたと見える。

・・・って、事は、確かにヤツらが暴れ出すのは時間の問題だな。

結局オレたちはもう、逃げられない所まできているんだ・・・。

「雫・・・・・」

ユイが感慨深く朝露さんを見つめている。

柴に触発されたのか、自分の意思なのかは分からないが、あんなにかたくなに野牛と揉めるのを拒んでいた朝露さんが、なぜここにきて野牛との戦争を煽る？

O型は他人の意見に振り回され易い傾向が強いが、柴や周りの1年勢が朝露さんを焚きつけたとは考えにくい。

間違いなく、朝露さん自らの決起だろう・・・。

それほどまでに切羽詰った状況でもないのに、朝露さんが決起したって事は、それ相当な理由があっての行動なのだろうか・・・・？

1年勢の本音をぶちまけられ、オレたちは言葉を失っていた。
そんな光景を目の当たりにし、オッキーはなぜか楽しそうだ。
コノヤロー、あとでぶっ飛ばしてやりてぇ～。

「みんな、本当に・・・・ゴメン。必ず近いうちにケジメつけっから。だから、もう少しだけ我慢しててくれ。必ず・・・・・」
その場は宮さんが頭を下げる事で何とか収まりを見せた。
宮さんは、1年勢に逆ギレする事もなく、やりきれない思いでいっぱいのくせに、そ～いう何もかも全部ひっくるめて頭を下げた。
自分が全部を背負い込む気なのか？

オレは戦争反対を胸に抱えて生きてるから、野牛との因縁はフェードアウト希望だった。
でも、いつまでもうやむやには出来ないみたいだ・・・。
とうとう、シロクロつける時がきたんだ。

第136話　7月2日

1年勢、柴、朝露さん、さらにはオッキーが帰った後、第3公園に大橋がやってきた。

吉岡も、このままでは野牛との戦争は避けられそうもない事を懸念し、大橋は、武蔵側が降伏し、野牛に手を引いてもらうしかないと判じた。

それには宮さんも、ユイも猛反対。

その後の宮さんと大橋の首脳会談と、オレ、竜崎、さらにユイを交えた5人の話し合いの結果、武蔵は兵隊のコマが少なく、野牛には戦争で勝てないと判断し、野牛にある提案をぶち上げる事にした。

「ソウマンではウチに勝ち目はねぇ。それに、大人数でウチに勝っても、野牛としてメリットは一つもねぇ～はず。ここはキッチリ、オレが長須とタイマンで勝負をつけてやる」

宮さんが、全てを背負って一人で戦う事を決意。

それに対しオレと竜崎も異議はない。

オレはむしろ大助かり。

そんな中、ユイは一言有り気だったが、黙っている所を見ると、どうやら宮さんに全てを託したようだ。

それまで宮さんと長須との接触は一切なく、双方の意見交換は大橋が仲介人として間に入っていたが、この提案も大橋が長須に電話で伝える。

後は、長須の返答を待つだけだった。

「それとも、そんな提案すら呑めねぇ～、野牛は腰抜けでもあるまい。ソウマンを希望するような、卑怯者でもねぇ～よな」

そんな宮さんの挑発まじりの言葉を代弁した大橋に対し、長須が・・・・！

『宮、出せコラ』

第3公園に、かつてない緊張が走った。

大橋からケータイを奪うように掴んだ宮さんが、ケータイを耳に当てた。

「オウ、長須！　やるのかやらねぇ～のか、ハッキリしろや」

と、とうとう、長須と宮さんが・・・！！

『のぞむところだコラ』

ぐおおおお、とうとう決定だぁ～～～！　ガンバレ宮さん、オレたち、武蔵を救って下さい！！

「こっちがぶち上げる条件は一つ！　オレが勝ったら、完全に手を引けや！！」

超、カッコイイゼ、宮さ～～～ん。

『分かった、呑んでやる。だがな、てめぇ～が負けたら、無条件降伏だ。分かったかコラ』

な、なに～～～？！

「無条件だろうが何だろうが呑んでやるぞコラ」

宮さんも、長須の『コラ』がうつった？　・・・っつ～か、無条件降伏呑むの～～～～？！

竜崎も大橋も、二の句が継げないでいる。

『上等だコラ。百歩譲ってオマエらの提案を呑んでやる。お望みどおりタイマンでやってやるよ。その代わり、全面戦争の場所、時はこっちが指定する。そして以前、ウチに乗り込んできた４人を必ず対戦者として出す事。それが条件だ。呑めねぇ～ならタイマンは撤回だ。容赦なくソウマンで武蔵を叩き潰す』

全面戦争？　４人を出せ？　何か対抗戦の図式なんですけどぉ～～～？！

「４人？　それは、女も含むって事か？」

『そうだ。元々、オマエらのトコの、ユイって女が引き金らしいじゃねぇ～か。だったら尚更引っ込ませるワケにはいかねぇ～よな？　何もオレは殺し合いをしようって言ってんじゃねぇ～んだよ。ちゃんとしたルールに基づいた完全決着を望んでるんだよ』

ユイも出せって？

「ウチからは、その４人を出せば、何人でもいいんだな？」

『あぁ、最悪４人でも構わんゼ。ぶっちゃけ弱小高校相手に、ウチも総出じゃカッコつかねぇ～モンな』

・・・長須のヤロ～、だんだん調子に乗ってきたぞ。

「宮さん、そろそろ電話切って」

竜崎も焦りを感じてきたようだ。

「覚えとけよ、クソが！！」

ブチッ

宮さんは力強く電話を切った。

「そんなに乱暴に扱うなよ、オレのケータイ」

大橋も宮さんの剣幕に押され、いつになく弱弱しい。

「クソッタレが」

宮さんは鼻息を荒くし、今にも蒸気機関車のような煙をあげて走り出しそうな、名状しがたい雰囲気だ。

そんな宮さんと長須の電話1本によるほんの2、3分の話し合いにより、7月2日本日、武蔵ＶＳ野牛の完全決着戦が正式決定したのだった。

7月5日、放課後。

オレとユイ、竜崎と宮さんの4人が第3公園に辿り着くと、すでに大橋がベンチで待ち受けていた。

野牛側より正式に出された書面を片手に、大橋はニヤリと笑った。

「しっかりオマエらの意見が通ったぞ。キッチリ4ＶＳ4だ」

ついに、『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』の詳細が決定。

武蔵ＶＳ野牛　全面戦争

時　７月１５日（日）　夜　８時３０分～

場所　野牛港　第３倉庫　特設ステージ

主催　株式会社　Ｋ　Ｈ　Ｊ

協力　釜桐町ホストクラブ連盟
　　野牛シュートボクシング協会

オレは、対戦カードを見て絶句した。

「う、嘘だろ？　なぜ、コイツが・・・・・」

武蔵ＶＳ野牛　全面戦争　対戦カード

第１試合

白鳥ユイ（武蔵２年　♀）　ＶＳ　日丸ミケコ（野牛３年　♀）

第２試合

竜崎光一（武蔵１年）　ＶＳ　リチャード（野牛１年）

第３試合（セミファイナル）

亀鶴ジオン（武蔵２年）　ＶＳ　芒みちる（野牛２年）

第４試合（メインイベント）

宮大地（武蔵３年）　ＶＳ　長須光雄（野牛３年）

レフェリー　大橋剛太（吉岡３年）

芒って何？　芒って！　みちるって言ったら、アイツしかいねぇ〜
じゃん！！

第１３７話　武蔵ＶＳ野牛　対戦カード発表

いきなり『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』などという書面を見せられてもピンとこない。

オレは他人事のように思えてならなかった・・・。

第１試合

白鳥ユイ（武蔵２年　♀）　ＶＳ　日丸ミケコ（野牛３年　♀）

「大丈夫か？　ユイ」

「願ったり叶ったりよ。私は絶対勝つから、アンタは自分の心配しなさいよ」

ユイは不敵に笑った。

コイツは大丈夫そうだな・・・。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／

第2試合

竜崎光一（武蔵1年）　VS　リチャード（野牛1年）

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／

「誰なんスか、リチャードって？　どうしてオレだけ外人なんスか？　皆、因縁あるヤツっぽいのに、オレだけ知らないヤツっス」

竜崎は、完全にあの日の記憶がないようだ。

BARカシオンでのテーブル投げ事件。

「アンタ、本気で言ってんの？　アンタのが一番因縁深そうじゃん。それにさ、アタシ思うんだけど、みんな戦争の引き金はアタシとミケコって言うけど、ホントはアンタとリチャードなんじゃないの～って、最近思うんだよね～」

ユイの言ってる事は、満更でもないような気がする。

「アイツって1年坊主だったのかぁ〜。てっきり大人かと思ってたぞ」

「宮さん、オレもですよ。外人って、年齢より老けて見えるんですね。オレはリチャードって、以前に武蔵に乗り込んで、野牛を退学したヤツかと思ってましたよ」

「あ〜、その2人と一緒にいたからね、あの時」

リチャードは強いぞ、がんばれ竜崎！

第3試合（セミファイナル）

亀鶴ジオン（武蔵2年）　VS　芒みちる（野牛2年）

「ど〜して芒が野牛2年の代表なんだよ、ふざけんなよ」

ちきしょ〜、もし芒とやるんなら、事実上、3度目の戦いだ。

1度目、リッキー乱入により無効試合。

2度目、芒の暴走と野牛の殴り込みにより、無効試合。

そして3度目の正直、これが完全決着戦ってワケか・・・。

「芒って、この間ウチを退学になったんだよね？　そんなヤツがすぐに転校なんて出来るモンなの？」

ユイの疑問はもっともだ。

「私立学校についてはね、懲戒退学処分を受けたとしても、公立学校に転入することが可能なんだよ」

オレたちの疑問に宮さんが答える。

「へ～。・・・だってさ、ジオン」

マジでかぁ～～～～?!

悪運の強いヤツめぇ～。

・・・って言うか、何と言う執念。

あのヤロ～、本気でオレを殺すつもりか?!

第４試合（メインイベント）

宮大地（武蔵３年）　ＶＳ　長須光雄（野牛３年）

「宮、正直言って、勝つ自信あるんか？」

大橋が心配そうに聞いた。

「うるせぇ～、オメェ～は黙って大人しく審判やってろ。オレに少しでもひいきしたらぶっ殺すかんな」

宮さん、たとえオレらが全勝できたとしても、宮さんが負けたら武蔵の負けには変わりないんだし、無条件降伏を呑まなきゃなんないんだから、絶対勝ってよねぇ～。

・・・って言うか、お願いします、勝って下さい！！

レフェリー　大橋剛太（吉岡３年）

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「今はこうしてオマエらの助っ人みたいな存在でいるが、この日ばかりは肩入れできんぞ。主催者が『ギャラクシー』絡みだ」

大橋がレフェリー、ウチとしては大変有り難い事だが、確かに当日は不公平な裁定は無理だろう。

オレたちのカンフル剤でしかないな、コイツは・・・。

「アタシにはひいきしてくれるんでしょ～ね？」

「無理言わないでよ、ユイちゃんさんさぁ～。ユイちゃんさんに味方したいのは山々だよ、そりゃ～。でもさ、立場的に難しいでしょ～。勘弁してよぉ～」

ユイちゃんさん・・・・・って、大橋、オマエはどんだけユイに弱ェ～んだよ！

しかし、ユイは誰にでも優位性（ゆういせい）を保つよね。

ユイだけに、優位・・・なんつって。

武蔵ＶＳ野牛　全面戦争

時　　７月１５日（日）　夜　８時３０分～

場所　　野牛港　第３倉庫　特設ステージ

主催　　株式会社　Ｋ　Ｈ　Ｊ

協力　　釜桐町ホストクラブ連盟
　　野牛シュートボクシング協会

「最終電車って何時？」

ユイが大橋に聞いた。

「確か、夜の１０時３０分とかだと思ったけど。当日は４試合しかないから、遅くても１０時までには終わるはずだよ。もし最終過ぎたら、オレが車で送ってってやるよ、家まで」

「だってさ、よかったね、みんな」

「いや、ユイちゃんさんだけ？」

「・・・冗談じゃない！」

ワ～オ、大橋、カワイソ～ウ。

「１０日後っスね」

「そんだけあれば、特訓できるな」

特訓？　おっ、宮さんやる気満々だな。

よし、オレも修行だ！

「野牛港、第３倉庫、特設ステージ？　何かの大会みたい」

「いいトコに気がついたね、ユイちゃんさん」

大橋、ユイちゃんさんって言いたいだけだろ？　・・・っつ～か、誰かにツッコンでもらいたかったんだけど、誰もツッコまないから少し寂しそうだよね？

「大橋、さっきギャラクシー絡みだって言ってたな。やっぱり長須のバックにゃ、ギャラクシーが控えてたのか？」

「心配すんな、宮。族はただの傍観者に過ぎん。人の喧嘩を面白が

って観戦する、単なるコウモリ的存在よ。主催者側の目的は金だ」

金？　ど～いう事だ？！

「主催の株式会社『ＫＨＪ』は、釜桐町にあるホストクラブを管轄（かんかつ）する会社で、釜桐町ホストクラブ連盟ってのは、その名の通り、沢山のホストクラブの事さ。要するにヤクザが運営するデカイ組織が協力してますよ～ってワケだ。野牛はＫＨＪにとっては、傘下（さんか）であるホストクラブの、さらにちっこい傘下でしかない」

何だかスケールがデカイな。

野牛がちっこいって？　そんなら、どんだけオレはちっぽけなんだ？

「学校同士の揉め事とか、そこら辺の喧嘩に割って入って大会を主催して、入場料を取るって魂胆だよ。たまにそうして資金を調達してるってワケさ」

出たよ、族とかヤクザとか・・・。

オレは関係ない。

オレは関係ない・・・・・。

「これは何っスか？　野牛シュートボクシング協会」

「いいトコ気付いたね、竜崎君。それはね、この大会のフェイク。警察を欺（あざむ）く為の、単なるペテンだよ」

やるなぁ～、株式会社ＫＨＪ。

悪い事するヤツっているモンだよねぇ～、しかも、うま～く捕まらなかったりしてさ。

「野牛港の第３倉庫は、プロレスとかよく来る会場として名高い場所でもあるんだよ。だから、特設ステージにはリングが設けられて、おそらく夕方頃にホントにシュートボクシングはやるんだよ。でも、そのメインイベントが終わると、選手や客が帰るんだよ、リングだけ残してな。その後、ぞろぞろと本番目当ての客が来るって算段だ」

お、恐ろしい・・・。

オレたちは、そんな大それた会場で、たくさんの野次馬の下、命懸けの喧嘩をしなきゃならねぇ～ってのか？

さらに、ルールの詳細は以下の通りだ。

武蔵ＶＳ野牛　全面戦争　ルール詳細

・時間無制限１本勝負（引き分け判定なし）。

・各選手、セコンドを必ず1名以上付ける事（無理なギブアップ拒否などによる怪我、死亡などを防ぐ為）。

・目潰し、頭突き、金的、急所への攻撃は不可。

・勝敗は、パンチ・キック等の打撃によりレフェリーが試合を止めるTKO（テクニカルノックアウト）、関節技や絞め技、もしくは打撃によるギブアップ（タップアウト）、他にセコンドが試合続行不可能と判断した場合、タオル投入によるTKO。

・いかなる武器の使用も不可。

・オープンフィンガーグローブ着用の事。

・マウスピース、ヘッドギアの装着有無は自由。

選手1名につきセコンド1名以上付けるって制度はオレも賛成だ。

自分の意思に関係なく試合を終了させられるのは癪（しゃく）に障（さわ）るが、この際致（いた）し方ない。

自分の命あってのこの世界、この世で一番大切なモンは、自分の命ですからね・・・。

ただ、余力を残してんのにタオル投入は勘弁願いたい。

・・・っつ～事で、オレは誰にセコンドを頼もう？　とにかく信頼できるヤツだな。

コイツになら命預けられます・・・くらいの人物。

・・・・・いねぇ～ぞ、オイ、オレにそんなヤツいねぇ～ぞ、オイ！！

武器の使用に関しては、「当たり前だろ」としか言えない。

もし『武器使用可』っつ～大会だったら、オレは出ねぇ～し！

百歩譲って出るんだったら、オレは左手にチェーンソー、右手に機関銃を装備して、背中に7つの武器を担いで出場するね。

「宮さん、今までこんな大会あるって知ってたっスか？」

「噂ではね。でも、オレにはさ、ホラ、気を使って誰もチケットなんか回さないよ」

「この大会のチケットは、試合にゆかりのある人たちにしか売られないんだよ。足がつかないようにだ。だから今回は、おそらく武蔵、野牛、そしてウチのヤンキー共にだけ、さばかれるだろうな」

なんてこった・・・・・。

さらに大橋が言う。

「ＫＨＪの世間への問いかけでもあるって話だ。戦争とかやって、最終的に命を落としたり、ヤクザの抗争にまで発展するような大事になるより、初めからこうやってルールがあったり、誰かが止めてくれたりする、限度がある喧嘩が出来る環境があれば、犠牲者も最小限に納まるだろ？ってワケだ」

単なる奇麗事のようにも聞こえるけど・・・・・。

「勧善懲悪ならぬ、勧悪懲悪のつもりか？」

宮さんが腕を組みながら言った。

「い～や、単なる悪っスね。オレはこんな大会に出て、喧嘩？　試合？　そんなの絶対反対だし、ギャラリーが来るなら尚更っス」

竜崎が宮さんに突っ掛かっている。

「・・・オ」

宮さんが何か言おうとしていたが、ユイが遮る。

「アタシだってホントはイヤだよ、こんなの。でも、１ＶＳ１っていうこっちの条件を呑む代わりに向こうが出した結果がコレなワケでしょ？　結局、アイツらの目的は、アタシらを大衆の面前で叩き潰したいだけなのよ。殴り込みがその典型的な例でしょ？　この条

件を弾いた所で、進展があるとでも？」

ユイが竜崎に問う。

「ゴメンな～、オレのせいで・・・」

なぜか宮さんが謝ってるぞ？！

「オレは出ないって言ってるワケじゃないっス。オレは・・・」

「アタシは・・・」

揉めてる、揉めてる・・・。

大橋はアタフタしちゃってるし。

と、他人事のようにヘラヘラしていると・・・。

「ジオンはどうなのよ？」

「ジオンさんはどう思ってるんスか？」

「亀ちゃんの意見も聞かせてよ」

なに～？　オレにフルのかよ～～～？！

「何？　何のこと？？」

「ジオンはこの大会について、ど～思ってんのよ？」

「ど～もこ～もねぇ～だろ。オレだってホントは喧嘩なんかイヤだけどさ、やるしかねぇ～んなら、アレコレ理由を考えてる場合じゃねぇ～かなぁ～って思うよ。早く家に帰って修行してぇ～なぁ～って。当日はさ、ヤツらの思惑を逆手にとってさ、大勢の前でコテンパンにしてやろ～ゼ！！」

そんな大口（おおくち）が叩けたのも、相変わらず他人事のような感覚だからだと思う。

そもそもそんな大会自体、超バカげてるし、常識的に有り得ない。

高校生がリングで喧嘩？　冗談にもほどがある。

だが、それを拒んだ所で、ユイが言うように進展があるのだろうか・・・？

恐さで逃げたら、そこで終わりだ。

ちょっとした優しさで、悪を許してしまったら、一体誰が悪を裁くのか？

歴史は、そんな優しさを繰り返し、今の世を、こんな不浄の世界にしちまったんじゃねぇ～のか？！

オレらが今裁かなきゃ、誰が悪を裁くんだよ！！！

野牛っつ～悪を！！

リングだろうがコロシアムだろうが、場所なんかどこでもい～んだよ。

とにかく、やるしかねぇ～だろ。

・・・でも、常識的に・・・・・・・・。

何度も頭を巡るのは、常識と非常識って言葉だった。

だが、そんなのも全部含めてオレは、冷静な判断が出来ないでいた。

冷静に事の運びを考えようとしても、大きな洪水のような波が襲ってきて、オレの思考が閉ざされるんだ。

その波ってのが、『恐怖』ってヤツだってのは、よ～く分かっている。

だからオレは、考えないようにした。

いつもの分析的、論理的思考を、取っ払った。

その為には感情も消去する必要があるが、この際仕方ない。

今日からオレは、バカになろう・・・。

「じゃあ、７月１５日の午前１０時、駅前集合ってことで」

宮さんが締めくくっている。

どうやらオレがジオンワールドに行ってる間に、さっきまでの揉め事が解決してたようだ。

何がどうなって竜崎が折れたのかは分からないが、どうやら大会に出るようだ。

ユイは元々一人で戦うつもりだったし、宮さんも全部を背負って一人で戦うつもりだったから、この常識外れの大会出場を百歩譲って許した気持ちは分からないでもない。

・・・が、竜崎が出場を許したのは意外だ。

もしかして、一番反対しそうなオレが出るって言ったからか？

本当の所は分からない。

オレは、みんなの気持ちを確かめたりしてる余裕なんてこれっぽっちもなかった。

・・・バカになるのに精一杯だったから。

そんなこんなで、オレたちはそれぞれの思いを胸に、一先ず解散した。

よ～し、さっそく家に帰ったら、猛特訓開始だっ！！

第１３８話　幾千もの哀しみの果てに

金曜日の放課後、朝露さんに声を掛けられた。

「ジオン先輩～、これから、付き合ってもらっていいですか～？
ちょっとだけご相談が～」

「あっ、別にいいよ」

付き合って、とかって聞くと一瞬ドキッとする。

朝露さんはＯ型で、オレもＯだから、最初に主導権争いさえ上手く行けば、末永く楽しいカップルとして付き合っていけるよな。

その点ウチらは先輩後輩の仲だから、オレが力強くリードしちゃえば簡単かも。

・・・って、相手は朝露さんだ！

妹の詩乃舞（しのぶ）は中３だから、朝露さんと１コしか違わない。

オレにとって朝露さんは、妹みたいな存在だ。

それにオレには意中の人がいるから、浮気？は、絶対ない。

・・・って、ちゃんと自分に言い聞かせておかないと、な。

「でも～、光一君や宮先輩と、放課後は一緒でしたっけ？」

「あのね、最近はちょっと野暮用で、みんなバラバラ」

・・・特訓中。

ひと気のない場所を選んで、オレは駅前のデパートの屋上へと向かい、隅っこのベンチに腰を掛けた。

「ここって～、いっつもカップルばっかりですよね～」

「いや、別に、そんな意味で来たんじゃ・・・、オレ、初めてだし、ここ」

「あっ、いや、私も～、別に、そんな、深い意味は、ないです～」

・・・・ヤバイ、気まずい。

何か話さねば・・・。

「「あっ・・・」」

出たよ、２人とも同時に切り出したよ。

「「・・・・・」」

出たよ、2人とも同時に黙ってるよ。
お互いに譲(ゆず)り合ってるんだろ、ど～せ。

「「先、どうぞ」」

ハイ、一緒～！！

朝露さんは頬を赤らめ、恥ずかしそうに下を向いている。
そんな朝露さんを見て、オレも照れ・・・・・てる場合かっ！！

オレはタバコに火をつけた。
冷静さを取り戻したオレは、さっそく本題に入る。

「あの～、高校生は、タバコを吸っては・・・」

「朝露さん、相談って何？」

「はいっ。じ、実はですね～、父親が帰って来たんです～」

「え？　マジで？！」

そうか、これで何となく、最近の朝露さんの理解し難(がた)い行動の謎が

解けたぞ。

メイドカフェではオレに野牛と揉めるなって言ってたくせに、しばらくして1年勢の決起に交じって戦争を煽ったり、何か様子が変だと思ってたんだ。

精神的に情緒不安定な理由は、家庭でのイザコザにあったんだ・・・・。

朝露さんは、父親に性的虐待を受けて育った。

父親は家出していて、もう何年も姿を現していなかったという・・・。

そんな父親が、なぜに今頃？

「会社をリストラされたからって、このままだとホームレスになるからって、母に泣きついてきて・・・」

朝露さんの父親こと、朝露（ながれ）流。

流は、2年前に家出した。

理由は、付き合ってた女と同居（単純に女の部屋に居候（いそうろう））するため。

流の愛人こと、星江（ほしえ）映見（えみ）。

映見は中3の時、テレクラで知り合った流と恋に落ちる。

2人は、映見が高校を卒業し、OLになって働き出したのをきっかけに、一緒に暮らし始めた。

流が課長として勤めていた会社に、彼のコネで入社した映見は、それから2年間事務の仕事に携(たずさ)わる。

だが、社内の男性とふとした事から恋に落ちてしまい、流にバレぬよう恋愛を続けたが、ついに婚約。

流は、約6年の愛人関係にピリオドを打たれたという。

映見の婚約相手は、社長の息子。

過去を一部始終、婚約相手に打ち明けた映見。

それを聞いて、父親に相談した息子。

社長は激怒。

流のリストラまで、時間を要しなかったのは言うまでもない・・・・。

「母は～、私に、ね～雫、お母さんたち、やり直した方がいいと思う?って聞いてくるんです～。私～、ど～答えていいのか分からなくて・・・・・」

朝露さんの母は、流の浮気を知りながら、2年間、籍を抜かなかった。

と、言う事は、恨みこそあるものの、いつかは帰ってくるかもしれないという気持ちがあったはずだ。

それが、「たとえ浮気をしても流が好き」という女心なのか、「子供のために父親が必要」と思う親心なのかは分からない。

朝露さんの母が百歩譲って、流を許したとして、朝露さんの気持ちはどうなるのだろうか？

それこそ親が子の事を思っているとは言えないんじゃないのか？

自分の事しか考えていない、自己中心的な女でしかないよな？

でも、それは朝露さんの母親が、性的虐待の事実を知っている場合の話だ。

朝露さんは、母親に話してるワケないよな。

話せるワケ、ないよな・・・・・。

「悲しみの消し方って知ってます～？　こうやってね～」

朝露さんは、ナイフで腕を切るジェスチャーをした。

リストカットってヤツか・・・？

よく見ると、朝露さんの腕には沢山の切り傷の跡があった。

「私～、まだ手首を切った事はないんです～。そこまで勇気が・・・・・」

「必要ないだろ、もう、そこまで自分を痛めつける必要ないだろ。心の傷を癒すために、体に傷を、痛みを与えて心の痛みを消そうと思っても、所詮そんな誤魔化(ごまか)しは気休めでしかない。傷と痛みを増やすだけの無駄な行為だ。心の傷を癒すには、しっかり心と向き合うしかないんだ」

「・・・ジオン先輩は、イジメられっ子だったって言ってましたけど～、私の痛みとは違うと思うんです。私の痛みは、私にしか分からない。それに、み～んな言うんですよ、リストカットなんて止めなさいって・・・。でも～、私の痛みを知らない人に言われても、説得力ないんですよね～」

朝露さんは、今まで見せた事がないほど冷めた目で遠くを見つめた。

まるで心のない、人形のような目で・・・・・。

「説得力、ないか・・・・・」

オレは自分の根性焼きを見られないように腕の角度を変え、朝露さんの視界にオレの過去が入らないようにした。

「あっ、ゴメンなさい。私～、何か変な事言いました～？　ほっ、本当にゴメンナサイ～～～」

突然我に返ったように、朝露さんは取り乱した。

どうやらリストカットの事は、無意識でオレに語っていたようだ。

ちょっとキツイかもしれないが、この問題はうやむやにしてはならない。

オレの言葉により、朝露さんを傷つけてしまうかもしれないが、これから一生癒えない傷を負うよりマシだ!!

「朝露さんは、また一緒に5人で暮らすのが夢なの？　それとも、またしばらく苦労が続くかもしれないけど、4人で暮らすのが夢なの？　自分に正直になりなよ。今度こそハッキリ自己主張しなきゃ、いつまでたっても呪縛から解き放たれないゼ」

「・・・・・・・・」

「朝露さんは、お父さんに甘えたいの？　それとも、お父さんから離れたいの？」

それから少しだけ沈黙が続いたが、朝露さんはニンマリ笑って大きく頷いた。

「私～、子供の頃から、アニメキャラにしか恋できなかったんです～。でも、もっと現実見なきゃダメですよね～」

「・・・ま、オレたちは現実にしか生きていないからね」

そんなオレの言葉でクスクス笑う朝露さん。

何かオカシイ事、言ったか？

「今日はありがとうございました～。俄然（がぜん）、勇気が湧（わ）いてきましたっ！！」

「負けんなよ、自分に」

デパートを出ると、満面の笑みで手を振った朝露さんは揺るぎない背中を向け、溢れる人ごみの中に消えていった。

勇気をもらったのはオレの方だよ、朝露さん。

・・・おっと、もうこんな時間、筋トレ筋トレ！

オレは走って家まで帰った。

第１３９話　笹の葉サラサラ

7月7日、土曜日、今日は午前中で授業が終わる。

今日と明日はみっちり秘密特訓だ。

オレの秘密特訓はハッキリ言ってスゴイ。

学校の帰りは家まで猛ダッシュ。

まず、それだけで汗だくヘロヘロになる。

シャワーを浴び、今度は庭で夕飯の時間までタイヤトレ。

タイヤトレとは、そこら辺に転がっていたタイヤを木にくくり付け、パンチ、キックを叩き込む、オレ流の打撃の特訓の事だ。

裏拳にエルボー、平手打ちや掌底（しょうてい）打ち、はたまたローキック、ハイキック、前蹴りに回し蹴り、踵（かかと）落としに膝（ひざ）蹴り、さらには連続攻撃に至るまで何でもＯＫだ。

さらに、走り込んでのタックルにも使えたりと、考え方によっては無限の広がりを見せるタイヤトレ。

夕飯後は部屋で腕立て、腹筋、ヒンズースクワット。

この3つを動けなくなるまでやるのだ。

「ジオン、今日、大事な話があるんだ。放課後付き合えよ」

いつになく真顔でオッキーが言う。

昨日の朝露さんに引き続き、今度はオマエか？　またもやオレに人生相談？　人の悩みに付き合ってやれるほど、心に余裕なんてホントはないんだけどな・・・。

コイツは朝露さんとは違って、アバウトでいいや。

めんどくせぇ～し第3公園辺りでサラッと片付けよう。

「じゃあ、帰りのホームルーム前に起こせよな」

オレはいつものように机に顔を伏せた。

「またかよ？　最近朝からずっと寝っぱなしだなぁ～、ジオン。起きるのは竹中とかリッキーの授業の時だけだもんな」

ちょっとでも心にスキを見せると、とにかく信じられないくらいのおぞましい恐怖が襲ってくるもんで、家では体を休ませる事なく動かし、一睡（いっすい）もしなかった。

その反動で、学校では爆睡した。

おそらく、隣にはユイ、斜め前には佐倉、そして前にはオッキーが

いるし、教室には沢山のクラスメイトたちがいるから、一人じゃないんだっていう、安心感みたいなもので眠れるのだろう。

放課後、第３公園に着くなり、オッキーは鞄からチケットを取り出した。

そっ、それはっ・・・『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』、幻のプレミアム、プラチナチケット！！

「ど、ど～しておめぇ～が持ってんだよ、オッキー！」

「１年の柴から買ったんだよ」

柴だと？！

「いくら？」

「１０００円」

・・・ったく。

「野牛に転校したんだってな、芒。ヤツとやるんだって？　ど～して今まで黙ってた？！」

だって・・・、ど～せ役に立たねぇ～し、足手まといだと思ったから・・・何てギャグは、今はとても言える雰囲気じゃないよな？
Ａ型のオッキーを傷つけるだけだ。

A型は表面は鋼鉄のハートを装ってるが、中身はガラスのハートだから・・・。

「巻き込みたくなかったんだよ」

・・・ま、そんなカンジだ。

「・・・水臭いったらありゃしないゼ、ジオン。セコンドには誰が付くんだよ、セコンドには」

「ど～してそんな事まで知ってんだよ」

「だから柴から聞いたんだよ」

「柴？　アイツがど～して・・・」

「柴はこの闇のイベントの経験者らしいゼ」

マジかよ?!

「選手としてではなく、ジムの仲間のセコンドとして参加したって言ってたゼ」

ジム？　アイツ、格闘技やってたのか・・・。

・・・・と、その時、噂をすれば何とやら、第3公園に柴義経が

現れた。

「ジオン先輩！　会いたかったですよ」

「オレは会いたくねぇ～よ」

そんなオレの皮肉をサラリと受け流したＡＢ型の柴は、すぐにオッキーの方に顔を向けた。

人のイヤミなどをいとも簡単にさばくのに長けているＡＢ。

それがクールなＡＢ型と言われる所以（ゆえん）でもある。

「オッキー先輩、チケットなんですけど、オレのレベルでは、もう入手不可能です。ホント、スンマセン」

「そうか、残念だゼ。でも、オレの分あるし、いいよ、気にすんな。しっかし、すっげ～人気らしいな」

「ハイ。昨日ウチの学校に入った分は、ほぼ1年が買い占めちゃいましたからね。3年の人とかキレてる人いましたモン」

ど～やら、オレの知らない所で、凄い事になってるようだ。

「２００人程のキャパって話だけど、チケット完売だから、当日は満員だぞ」

オッキーがオレを脅（おど）すように言った。

ちきしょ～、オレ、セミファイナルだぞ？　このプレッシャーにどう耐えりゃ～いいんだよ。

オレはまだしも、目立つのが嫌いな竜崎とか、ユイとか宮さんが、影でこんなになってるって聞いたら、一体ど～思うんだ？

・・・と、その時、宮さんが現れた。

「アレ？　みんなお揃いで、ど～したの？　亀ちゃん元気ィ～？　少し痩せたね？」

「今、例の大会の話をしてたんですよ。オレらの知らない所で、凄い事になってますよ」

「・・・だろうね。耳に入ってきてたよ、色々と」

オレは宮さんから柴へ向き直った。

「柴、オッキーがさっき言ってたんだが、オマエ、この大会の経験者なんだって？」

宮さんも案の定、口を窄めて驚きの表情だ。

「選手としてではなく、セコンドで、ですよ。去年、ウチの中学とヨソの中学とで揉めた時、ＫＨＪの大会での決着戦に持ち込まれたんです。結局ウチの学校が負けて、全員丸坊主にしてワビ入れましたけどね」

ＫＨＪ・・・、中坊の喧嘩にまで介入してんのかヨ。

「その時、オレがセコンドに付いた仲間の対戦相手が、今回竜崎のやるリチャードなんですよ」

そんな柴の言葉に、オレと宮さんは顔を見合わせた。

「それ、本当か？　じゃあ、ヤツは、リチャードは経験者ってか？」

宮さんが眉間にシワを寄せて柴に聞く。

「そうですね。ちょうど1年前位ですかね、アイツ、メチャクチャ強かったですよ」

「ジムに通って格闘技やってるヤツが素人に負けたって？　嘘だろ？！」

オレは思わず柴に食って掛かった。

「喧嘩って、格闘技やってるとか何々やってるとか、関係ないと思いますよ。むしろ、素人の方が、何をするか分からないっていう点で怖いような気がしますけど・・・」

「確かに柴ちゃんの言うように、喧嘩はやってみないと分からないよな。オレも昔、空手家と喧嘩した時、最初は勝てねぇ～って思ったんだよ。でも、結果はオレの完勝だったからね」

宮さんの言う通り、そ～なんだよね、喧嘩って。

つまり、勝負は時の運ってヤツだ。

・・・と、その時、噂をすれば影、竜崎が来た。

「あれま～？　みなさん勢揃いっスね。オイ、柴～、何だよ話って」

「コレ」

柴がチケットを掲げた。

それを見て宮さんが興奮しだした。

「すげぇ、ホントにチケット出てんだぁ～。でも、シュートボクシングのチケットだね、コレ。へぇ～」

そんな感心している宮さんに歩み寄るこの男！

「よぉ、宮～、待たせたかぁ～？」

吉岡の番長、大橋剛太だ！！

さらに・・・！

「何やってんのよ、アンタたち。相変わらずむさ苦しいわね」

「みなさんお揃いで～、こんにちは、です～」

ユイと朝露さんだ。

そして、それと同時に見覚えのある男まで・・・！！

「あ、ど、ど～～も。うわぁ～、凄いメンツが揃ってるねぇ～」

織川（おがわ）！　笹商の織川だ！！

織姫と彦星が出会う天の川。

短冊に願いを書き込み、笹の葉に飾る。

そんな日本の風習行事である七夕（たなばた）の今日、第３公園は、かつてないほどの熱気に包まれていた。

第１４０話　飛龍革命の彷彿

「織川～、ゴメンな、わざわざ来てもらって」

宮さんが織川に歩み寄る。

「アンタが噂の、笹商の番長、織川宏次朗（こうじろう）」

吉岡の番長、大橋剛太が唸った。

「番長だなんて、そんな大（だい）それたモンじゃないですから」

相変わらず織川は腰が低い。

なぜに第3公園に、武蔵、吉岡、笹城（ささき）のトップが？　さらに大会出場の４選手の他、関係ないオッキー、柴、朝露さんまで、メチャクチャな顔ぶれだ。

「あの時の決着、ついにつける時が来ましたね。ボクも一緒に戦いますよ、宮さんのセコンドとしてね」

織川がニッコリ微笑みながら、右手を宮さんの前に差し出した。

「お、織川・・・」

宮さんは涙ぐんでいる。

「何かあったのかな?」

オレのそんな呟きに、「実はっスね・・・」、竜崎が中学時代の宮さんたちの、ちょっとしたエピソードを教えてくれた。

かつてイジメられていた織川を助けた宮さんは、イジメっ子を粉砕。しかし、そのイジメっ子は自分らのバックとして、隣の中学のトップ、長須光雄を出してきた。

その時の喧嘩が発端で、学校をあげての大喧嘩に発展し、抗争は激しさを増した。

宮さんは仲村シンと共闘して長須と戦ったが、決着がつかぬまま高校に進学、いつの間にか宮さんと長須は協定を結ぶ仲になっていた。

それから宮さんと長須の間に大きな問題はなかったものの、かつての大喧嘩の原因が自分にあった事に負い目を感じていた織川が、今回の武蔵と野牛の全面戦争を聞きつけ、イチ早く宮さんのセコンドに名乗りをあげたしだいだ。

「でも、良かったっス。宮さん一匹狼だから、織川さんの存在がなかったら、当日セコンド不在だったっス」

そう言う自分も一匹狼だよね、竜崎。

でも、それを言ったら、そこのユイも、オ、オレもだよ！

その時、朝露さんが衝撃発言！

「ユイ先輩！　話っていうのは～、私も、ユイ先輩のセコンドに付きたいって事なんです～！！」

「ど、ど～してそれを？」

ユイの問いに、朝露さんが柴を指差して無言の返答。

柴が一斉に皆に睨まれた。

「い、一年は結構みんな知っちゃってますよ。今回の武蔵ＶＳ野牛の全面戦争は、半世紀に１度のビッグマッチって言われてますから」

半世紀に一度のビッグマッチだと？！

「そんなに人気があったら、先公とかにバレねぇ～のかヨ？！」

オレの疑問に柴が答える。

「その辺は大丈夫だと思いますよ。ＫＨＪの大会って、半端（はんぱ）なくセキュリティー高いですから」

「現に、吉岡に回ってきたチケットは、もう完売してるらし～ぞ。

チケットがないんじゃ～、疑いようもないし、チケット見せられてもシュートボクシングだしな。たとえどうにかチケットをＧＥＴした先公が当日足を運んだとしても、そこでは本物のシュートボクシングの大会が行われている。さらに、その先公が本物の時間の情報をも入手していたとしても、入り口で通せんぼだ。警察が来ても、戦車が来ても、ＫＨＪの抜け道はいくらでもある」

大橋も追随（ついずい）だ。

警察も捕まえられない悪の組織だと？　ど～なってんだよ、世の中。

でも、それが大人の世界ってヤツなのかな・・・・・。

「ウチの学校も、ソールドアウトしてるみたいっス」

竜崎は呆（あき）れたというような顔で言った。

「雫、コレは遊びじゃないの。ただの格闘技イベントでもないのよ！」

ユイが朝露さんに言った。

「お説教ですか？　遊びでも、格闘技イベントでもないんなら、尚更です。ユイ先輩は誰の為に命懸けで戦うんですか？　自分のためですか？　だったら私も・・・」

ユイと朝露さんが揉め出したと同時期、竜崎は柴と揉め出した。

そして、オレにも・・・。

「残念だけどジオン、そ～いうワケで、オマエのセコンドにはオレが・・・」

「オッキー、ドサクサに紛れて勝手に決めんな！　それにてめぇ～、チケット欲しがってたけど、誰か誘って行こうとしてたのか？」

「・・・まあ」

「誰だよ！！」

「・・・佐倉」

やっぱし！！

「ふざけんなよ、まだ佐倉には何も言ってねぇ～んだろぉ～な？！」

「言ってねぇ～よ。何ムキになってんだよ」

佐倉に無様な姿見せたくねぇ～からに決まってんだろ～が！

負けるの前提(ぜんてい)みてぇ～で後ろ向きな思考かもしれねぇ～けど、勝っても負けても、オレが喧嘩してる姿なんか佐倉には見せたくねぇ～んだよ！

人前でカッコつけて試合する余裕、オレにはねぇ～から！！

一方、柴の申し出を拒んでいる竜崎に、宮さんが説得に入った。

「オレはイヤっス」

「竜ちゃん、彼はリチャードに因縁があるんだし、ここは一先ず休戦して、彼と組むのをオススメするよ。そうすれば竜ちゃんの勝機がグッと増す気がするし」

「しょ～がないっスねぇ～。分かりましたよ・・・」

竜崎は、宮さんの『休戦』という言葉を聞いて、開き直ったようだ。

妙に素直だな～、竜崎。

大会出場を許諾した上に、柴と共闘するなんてな。

「竜崎」

「何スか？　ジオンさん」

「あん時の柴との喧嘩は完全勝利だったクセにさ、まだスッキリしてねぇ～のって、喧嘩の後、妙にフレンドリーな態度の柴がムカつくからなんだろ～？　けど、ココは柔軟な心を持って、柴と共闘するのをオススメするゼ」

オレは竜崎だけに聞こえるように言った。

「ジオンさんも知ってたみたいっスね。実はオレも知ってたっス。さらわれた・・・、の真相。もちろん宮さんには言ってないし、雫

にも口止めしてるっスけどね」

・・・・そ、そうなのか。

それで竜崎は、戦う意思を固めたのか・・・。

そ、それにしても朝露さん、真相はオレだけに語ってるんだと思ってたけど、意外と口軽いのかな？

ま、人の「ここだけの話」なんて所詮、そんなモンだと思うけど。

でも、朝露さんは、誰かに話すって事を懸命にしてたんだと思う。

人に話せば話すほど、自分を冷静に見つめる事ができるし、勇気にもつながる。

色んな人に相談する事は、ホントに大事だと思うよ。

一見、八方美人にも見えなくもないが、強く生きる為には必要な事なのかもしれない・・・。

「雫、ユイさんも言ってるんだし、諦(あきら)めろよ」

柴との揉め事を終えた竜崎が、朝露さんに標準を変えた。

「ウン、雫ちゃんの気持ちは分かるけど、ホント危険だから。何か

あってもオレら責任負えないよ」

宮さんも竜崎の後押しをする。

みんな、朝露さんをこれ以上危険な事に巻き込みたくない気持ちは一緒みたいだ。

柴や織川は自分の身は自分で守れるし、オッキーなんかはど～でもいいけど、朝露さんは・・・。

その時、朝露さんが、かつてないほどの鬼気迫(ききせま)る表情を見せた。

「私っ、自分に負けたくないっ！　コレ以上っ、負けるのは、イヤーーーーッ！！」

出せる限りの声で叫んだ朝露さんは、鞄から、おもむろに大きなハサミを取り出した。

そ、それを、ど、ど～するつもりだい？

それは～、家庭科の授業で使う、裁縫(さいほう)道具の、布切(ぬのきり)バサミだよね？

「雫・・・？」

ユイが止めるより先に、朝露さんは自分の長い髪を鷲掴(わしづか)みに束ねると・・・・・。

第１４１話　羨ましいなら成り上がれ

布切バサミでバッサリ切ろうとしている・・・が、上手く切れない？！

現場は一瞬、張り詰めた緊張感に包まれたが、すぐにユイ、竜崎、柴らが朝露さんの突飛（とっぴ）な行動を制止した。

それでも約２０ｃｍほどの長さの髪の毛が、バラバラっと宙を舞った。

「雫、アンタの気持ちは良く分かった。もう、何も言わない。アンタもアタシらと同志だったって事、良く分かったから。・・・・・みんな、異議ないわね？」

ユイがみんなを見渡すと、一同、頷いた。

もちろん、朝露さんの行動にたじろいでいたオレも、大きく頷く。

「みんな、ありがとう。私～、みんなに迷惑掛けないようにします。ユイ先輩、一緒に戦って下さい。ヨロシクお願いします」

朝露さんは、大粒の涙を瞳に浮かべながら、顔をほころばした。

「みんなそれぞれ大会に向けて修行してるみたいだけど、ジオン君、ちゃんと寝てるのかい？」

大橋がオレに聞いてきた。

「は、はあ。もちろんですよ」

何でオレが寝てねぇ～の知ってんだよ。

「武蔵の肩を持つワケじゃねぇ～けど、もしかしたらオマエら、イケるかもしれんぞ。野牛はまさに王者気取りだ。誰も特訓なんかしちゃいねぇ～し、オマエらを軽く見下してるよ。アイツらみんな、武蔵ってだけで、格下（かくした）に見てやがる」

武蔵の肩を持つワケじゃねぇ～って言ってるけど、ココにいる時点で十分肩持ってるよね？　あと、もしかしたらオマエらイケるかもって、もしかしたらって言った？　大橋も、ウチらの事、十分見下してるよね？　もしかしたら・・・の時点で、武蔵が勝てると思ってないよね？

「ど～して総番長の宮さんまでナメられてるんだ？　長須って、そんなに強いのか？」

柴が竜崎に聞いた。

「宮さん、ぶっちゃけ長須に勝てる自信あるんスか？　仲村シンはタイマンで無敗っていう伝説がありますが、その仲村シンより3倍強いって噂じゃないっスか。それは本当なんスか？」

オイオイ竜崎、宮さんを怒らすなよ・・・。

「ガッハッハッハ。痛いトコロを突いてくるねぇ～、竜ちゃんは。確かにね～、仲村はタイマンじゃ無敗なんだけどね～、１ＶＳ２で何度か負けてんだよね～、長須に」

へ？　１ＶＳ２？　もしや、宮さん仲村チーム？！

「でもそれは、ザコ共を蹴散らしてからだったからでしょ？　ダメージが残ってたんですよ」

織川が宮さんをフォローした。

「いや、長須のパワーはケタ違いだから」

そんなにヤバイの？　長須って、一体どんな怪物？！

「オレも長須の喧嘩見た事あるけど、パワーは半端ねぇ～よな。パワーボムとか平気でやるしな」

大橋だ。

ちなみにパワーボムとは、逆さまに相手を持ち上げて、地に後頭部を打ち当てる、非常に危険なプロレス技だ。

「１０人くらいで長須の中学に乗り込んで、向こうのヤツらコテンパンにするんだけど、最後の頃になると、いつも長須だけピンピン

してな、オレもシンも、その頃はすでにヘロヘロなんだけど、２ＶＳ１だったらイケると思ってやるんだよ。でも、ど～しても勝てね～の。２ＶＳ１で負けるって、カッコ悪いよな～」

宮さんが中学時代のぶっちゃけ話を語った。

長須に勝った事ないって？　しかも、２ＶＳ１で？　み、宮さん、長須戦、大丈夫なのかぁ～～～？！

リチャードも半端なく強いって話だし・・・。

ミケコも暴走族で、かなりアブネ～って噂だし、前回ユイが戦った上木とはワケが違うぞ？！

みんな、大丈夫かぁ～～～～？！！

その日の夜、強引なプッシュに負け、オレはオッキーの家に招かれた。

石田町では意外に有名な家電屋、沖田電気。

沖田家の玄関は、そこで寝れるほどの広さだし、シャンデリアや装飾品だらけで、いかにも金持ちを醸し出している家だ。

そんなイヤらしい沖田家の食卓にお邪魔したりなんかして、普段口にしないような、物珍しい夕飯に舌鼓（したづつみ）し、大理石の風呂にまでお世話になったりした。

・・・で？　コレ何？　オレ、沖田家のセレブな生活の密着取材とかしてる暇、ねぇ～んだけど。

「見せたい所があるんだよ」

風呂上り、オッキーに案内された部屋には、数々のトレーニングマシーンが揃っていた。

「ここ、オレとパパが良く使うジムなんだ」

その腹・・・、ホントに良く使ってんのかヨ？！

でも、マジすげぇ～、色んなマシーンが揃ってやがる。

しばしオレは、サンドバックや普段見たこともない運動器具で汗を流した。

「何かスポーツジムってカンジだな。でもさ、格闘に向けての練習っつ～より、ダイエットみてぇ～だな」

「ま、試合までこの部屋を好きに使っていいよ。明日は本格的なトコに連れてってやるよ。とりあえず、今日はど～する？　ウチで寝るか？」

「そ～だな、もうちょっとここで汗を流して・・・」

「オレは先に寝るぞ。じゃ～、ムリすんなよ、ジオン」

「ああ、サンキュ～」

次の日。

「オマエ、寝なかったろ?」

「ははは。ペダル漕ぎながら1時間くらい寝たぞ」

「・・・ったく、これから本格的な所に行くっつ〜のに」

オッキーに案内されたのは、駅前の真新しいビルに構えた「中川ジム」という、総合格闘技の道場だった。

中には沢山の練習生が汗を流し、黙々とトレーニングに励んでいる。

そんな中、見慣れた男が1人いた。

「柴!　そうか、ここが柴が通ってるっていうジムか」

近代的なマシーンが連なり、パソコン機器などで、練習生の健康状態などが管理されているという。

「今日は2時間ほど、ここの体験コースを予約したんだよ」

「マジかよ。・・・で、いくら?」

「心配すんな、オレが出すから」

「そりゃそ〜だけど、いくらなんだ?　何か高そうだぞ?」

「5千円だよ。2人で1万」

・・・マジ？　じゃ～、月謝を払ってる柴はいくら払ってんだ？！

・・・ったく、セレブなヤツらの金銭感覚は分からん。

「竜崎にも再三来いって言ってるんですけど、アイツ何照れてんだか・・・」

柴がブツクサ言っている。

竜崎は一人暮らしとかして苦労してっから、こんな煌(きら)びやかで贅沢なジムは好かねぇ～だろ～な。

宮さんとかもそうだけど、科学的な機材での特訓より、山とかで原始的な修行を積むってやり方がしっくり来るんじゃねぇ～のかな？

その後オレは、2時間ほど、格闘技の基礎のようなものを学んだ。

「ちょっとやるだけでも全然違うだろ？」

オッキーの言う通り、百聞は一見にしかずで、実際やってみないと分からないもんだ。

生まれて初めてリングってヤツに上がったのも功績だ。

当日、本番で初めて上がるのと、こうして一度でも経験があるのとでは月とスッポン。

「だいたい、こう打ってきたらこう避けるとか、実践、経験でしか学べない部分って沢山あるけど、どんなモンにも基礎ってあるもんだなって事が一番勉強になったよ」

「ジオンにそう言ってもらえると、来た甲斐があったなって思うよ」

「オマエには感謝してるよ、オッキー。それから柴、オレからも竜崎に言っといてやるよ。たまにはこ～いう所でやってみるのも、いい勉強になるってさ」

「よろしくお願いしますね。アイツ、何捻(ひね)くれてんだか。せっかくタダで教えてくれるって言ってんのに」

・・・ま、アイツの立場だったら、オレも拒みそうだけどさ。

帰り際、ふと自分の顔を鏡で見て、オレは驚いた。

「何ビックリしてんだよ。オマエ、今まで自分の顔見てなかったのか？」

そう・・・、オレは、自分と向き合うのすら避けていたのかもしれない。

ゲッソリと頬がこけ、目の下には真っ黒なクマが出来ていて、目は真っ赤に充血していた・・・・。

「オマエ、相当弱ってるぞ。それ以上寝不足が続いたら、思考能力

だけじゃなくて、身体能力も劣(おと)るぞ」

そんなオッキーの言葉に、オレはふと我に返った。

そうか・・・、オレは芒の幻影から逃れるために、わざと寝ないで脳力(のうりょく)を低下させていたのか！

オッキーと別れ、中川ジムの帰り道、オレは無意識で走っていた。

オレの得意な頭脳戦すら封じて、一体オレは何をしようというんだ？

体だって、もう限界はとっくに突破してるし、肉体的にも精神的にもボロボロじゃねぇ～か？

運良くあと一週間あるから、体は今から休ませる事は可能だけど、そしたら貴重な一週間、特訓が出来ねぇ～し、何よりまた、あの恐怖に苛(さいな)まれる。

くっそ～、ど～すればい～んだ？！

第１４２話　努力なくして天才はなし

無意識で走っていたオレは、いつの間にか琵琶神社の鳥居の前まで来ていた。

境内は依然として高潔な空気が漂い、けだるいオレの心は一気に引き締まる。

「何よ」

授与所で作業をする、巫女姿のユイが、ぶすくれた顔で言った。

普段とは打って変わり、高雅な雰囲気に包まれた様は、相変わらず気高い。

「いや、手を合わせに来ただけだ。神様にな」

「ホントに～？　単なる待ち合わせ場所とかに使ってないでしょ～ね～？！」

何を言ってるんだ、ユイは・・・・・って、あああああ～～～！！

「アレ？　ジオンさん」

「オウ？　亀ちゃん」

そこには、竜崎と宮さんの2人がいた。

「オレも、ついさっき、たまたま来た所っス」

「そう、たった今、偶然会ったんだよ」

導かれし者たち・・・ってか？　神よ、いるならオレたちに力を～～、なんてな。

「竜崎も宮さんも、みんな結局、考えてる事は一緒ってワケか・・・」

「そうっスね。困った時の・・・」

「神頼みってな。ガッハッハッハ」

潜在意識の中で何かに救いを求めていた気持ちが、無意識のうちにオレを動かし、神社に足を運ばせたのかもしれないな。

「ジオン、アンタ、ちゃんと寝なさいよ～」

授与所のユイが、オレの顔を睨みながら言った。

「目、真っ赤っスよ。だいぶ疲れてるっスね」

「そうだよ亀ちゃん。それに、腕も足もパンプアップされて筋肉パンパン。少し休ませないと傷めるよ」

「そうっス。マジで休んどかないと、当日ダウンしちゃうっスよ」

竜崎と宮さんも、オレに気遣いの言葉をくれた。

「オレさ、前にユイが言った言葉が妙に心に引っ掛かってさ・・・」

「何よ、アタシ、何かアンタに言ったっけ？」

「オレさ・・・、少しでも楽して良い人生を送りたいって常に思ってて・・・、耳を塞ぎたくなるような言葉だったんだけど、妙に説得力のある言葉に返す言葉が見つからなくってさ・・・、それ以降、ずっと、そんな生き方がしたいって思ってたから」

「・・・いつの話？　どんな言葉よ？」

「ユイが宮さんを見て言ったんだ。センスもあると思うけど、この世の天才って呼ばれてる人は、みんな影で努力してる・・・って。運がいいとか悪いとか、人はよく言うけれど、運がいい人なんていない。頑張った分だけ、努力した分だけ良い結果として返ってくるものだと思うから・・・って」

竜崎はそんな言葉を噛み締めるように尊敬の眼差しで聞き入り、片(かた)や宮さんはどこか誇らしげに鼻の下をのばしている。

「ま～たアンタはアタシの言葉に翻弄(ほんろう)されて～。ホント、単純極まりないＯ型よ、アンタは。アタシはあの時たまたまそ～言ったけど、この世に生まれ持った天才なんて、ゴロゴロいるかもよ？　ホラ、

アタシなんて良い例じゃない？」

ユイの強さは・・・、努力なしの、生まれ持ったモノだって言うのか？

・・・と、その時！

「ユイ君、ホントの事今言っておかないと、来週の計画が無くなっちゃうよ」

高貴で貴顕紳士なこの男は・・・！！

「ヒトミ・・・、じゃなかった、神野、誠さん」

「どこかでお会いしましたっけ？」

誠さんが澄ました顔でオレを見る。

「あ、あの～、オレ、中学の時、自殺・・・」

あっ、言っちゃった・・・・・、けど、仲間の前だし、まぁ～いいや。

「中学の時、イジメられてて、そんで、耐え切れなくて、断崖の絶壁から飛び降りようとしたんです。その時、オレの肩を掴んで助けてくれたのが・・・」

ユイも、竜崎も、宮さんも、黙ってオレの言葉に耳を傾けていた。

「覚えてないや、ははは」

「ずっと、あの時のお礼が言いたくて・・・。旧姓、ヒトミさんですよね？　その時、オレにヒトミって教えてくれました」

「ウン。旧姓は人見（ひとみ）だよ」

「・・・って事は、奥さんいるんですよね？　アレ？　ユイってどっちと血が繋がってるの？」

「あのね、ジオン。実はね・・・」

ユイは何か言いにくそうにしている。

「ははは、ボクは婿養子（むこようし）だから、ユイ君とは血が繋がってはいないね。妻には先立たれたんだよ・・・」

え？　お亡くなりに？　それは失敬（しっけい）・・・。

「・・・って事は、未亡人（みぼうじん）・・・の逆？　ちなみに逆って何て言うの」

「何言ってんのよジオン。昔、中国で夫が死ぬと妻が後を追う風習があってね、その名残（なごり）なのよ、未亡人って言葉は。だから逆もなにもないのよ。それよりアンタさ～、もっと勉強しときなさいよ～。その前にちゃんと寝なさいよ。授業中眠ってるからいつまで経っても頭が良くならないのよ」

ユイがフォローしてくれて、オレの失礼な発言の数々を上手にはぐらかしてくれた。

寝不足も加わり、これ以上余計なボケをかましたら、いい加減ユイに永久追放されそうだ。

オレは強引に話を以前に戻した。

「オレ、白鳥に憧れてたんだ。しれっとした顔でさ、エレガントに泳ぐ白鳥もさ、水面下では激しく一生懸命足を動かしてるんだよな。オレもさ、人に頑張ってる姿、あんまり見せたくねぇ～んだ。出来れば、常に強くありたい」

竜崎がオレをいつになく仰ぎ見る。

「オレは、みんなより断然弱いからさ、頑張って追いつかねぇ～と、みんな恥かくだろ？　先鋒、次鋒ってさ、凄い試合したのに、副将のオレがしょ～もない試合したら、大将の宮さんに申し訳ないし」

宮さんも、いつになく真剣な眼差しでオレを見る。

「・・・それに、怖くて恐くて、たまらねぇ～んだ」

ユイも感慨深くオレを見た。

「オレ、こんな根性焼きとかいっぱいあってさ、外見もヤンキー気取りで粋がってっけど、ホントは超ビビリ屋で臆病で、弱ぇ～人間なんだ」

言葉と一緒に涙も込み上げてきたが、懸命に堪えた。

「芒に勝てるワケねぇ～けど、逃げ場もねぇ～し、やるしかないだろ？　死ぬしかないだろ？　コレ言うと、おこがましいって思われるかもしれねぇ～けど、特攻隊ってさ、こんな気分だったのかな？って時々思うんだ。神風特攻隊ってさ・・・・・」

そう、まるで武蔵っていう学校背負って、野牛っていう大国に突っ込む気分なんだ。

当たって砕けるの知ってて・・・。

オレは、自分で何を言ってるのか分からないほど無意識に本音を語っていた。

恥ずかしさも何もかも脱ぎ捨てて、本当の自分を曝け出していた。

「・・・ジオン、そんなのみんな一緒だと思うよ」

「そ～っス。みんな、口に出さないだけで、プレッシャーと常に戦ってるんス。宮さんだって、こ～見えて内心いつもドキドキっスから。ねっ？」

「ガハハハハ。オレなんてホント負けらんねぇ～からな。だから、もし負けたら腹切る覚悟だよ」

「宮さん、ホントやりかねないよねぇ～」

ユイが心配げに言った。

「自決っスかぁ～？　止めるの大変そぉ～」

竜崎が宮さんを見て笑う。

「ガッハッハッハ。止めれるモンなら止めてみろ・・・って、負けるの前提だな？　・・・そんなワケだよ、亀ちゃん。みんな同じ気持ち」

「・・・・みんな、ホント、ごめん。当日はさ、ヤツらの思惑を逆手にとってさ、大勢の前でコテンパンにしてやろ～ゼ・・・なんて大口叩いておいてさ、今になってこんなネガティブじゃ、ホント不甲斐ないよね。・・・でも、何だかんだ言ってさ、これだけは諦めねぇ～から。オレ、当日までに、絶対強くなっから」

それがオレの本音だった。

そんなオレの心の叫び、魂の叫びが届いたのか、ユイが今までずっと隠してきた事を、ついに語り出した。

ユイの強さの秘密が今、まさに明かされる・・・・・。

第１４３話　ユイの秘密　－深沈（しんちん）たる静謐（せいひつ）－

そこは、静寂（せいじゃく）な時間が流れていた。

時が止まったと思わせるほど、心に平安と余裕が生まれ、精神世界の奥深くのしじまへと誘（いざな）われるような錯覚すら覚える。

「いざという時に人を助け、守れる人。でも、自分は助けられたり守ってもらう必要はなく、人に迷惑を掛けるような事もしない人になりたい。・・・そんな気持ちを抱いて、ユイ君はここで護身術を習い始めたんだよ。それがユイ君が中学3年生の時だから、そろそろ丸2年になるかな。丁度、ボクの女房が亡くなった頃だよ・・・」

誠さんは、ユイが居ない時にこっそり耳元で教えてくれた。

・・・そうか。

いくつかの点と点が結ばれた気がした。

オレが自殺しようとした断崖の絶壁・・・・・、あそこは墓地だった。

当時はどうしてこんな所に人が・・・？って思ってた。

最近では、どうして神主さんがあんな所にいたんだ?って思ってたけど、奥さんのお墓参りだったんだ・・・・・。

誠さんの奥さんが亡くなった時期、彼を支えたのはユイだったのか。

いざという時に人を助け、守れる人。

でも、自分は助けられたり守ってもらう必要はなく、人に迷惑を掛けるような事もしない人になりたい・・・。

中3の時、オレのイジメられてる姿を見て、アイツ・・・・・。

『カッコン』

風情(ふぜい)のある日本庭園の鹿威(ししおど)しの竹が石を叩く音が鳴り響き、砂紋(さもん)からは、まるでさざ波の音が聞こえてきそうな趣(おもむき)の中、ユイが抹茶(まっちゃ)を振舞ってくれた。

茶道具でシャカシャカと抹茶を作るユイ。

茶道の作法なんて全く縁(えん)のないオレは、そんなユイが別人のようにさえ感じた。

座敷に案内された時から、竜崎は正座、宮さんは胡坐(あぐら)をかいている。

オレも宮さんに倣って胡坐。

オレはそんな対照的な光景を滑稽に思ったが、お茶が出された時は流石に正座した。

理由は分からないが、正座をしなければいけないような雰囲気なのだ。

宮さんが足を崩したままなのは、あるこだわりがあるからだ。

『飾らないのが最高のおもてなし』、そんな言葉が掛け軸に書いてあった。

それを見て宮さん、随分と感銘を受けていたから、その影響なんだろ～な。

相変わらず胡坐で、さらに抹茶をガブガブ飲んでお替りなんかする宮さんが、ある意味頼もしくさえ感じたが、竜崎のようなキリリとした凛然な態度も美しく思えた。

「人間の命は、儚い。この瞬間が元気でも、数時間後には死ぬかもしれない。人は何時死ぬかは分からないからね。だから、大事な人に会う時は、もしかしたらこれが最後かもしれないという気持ちを抱き、誠心誠意を尽くすべき。それが茶道の心さ」

誠さんの言葉には、非常に重みがあった。

「茶道の美の本質は、形だけの飾りを捨てて、ギリギリの本質のみを追求する所に到達するんだ。人は知らず知らずに嘘で嘘を塗り固

め、本当の自分を見失って生きている。つまり、そんな全ての偽りを捨てて、丸裸で心を尽くすというのが、茶道での最高のおもてなしなんだよ」

「てへへ。・・・って事は、アタシのおもてなしは、全然なってないね」

そう言ってユイは、周りを指差しながら自分の事を語り出した。

「ここがアタシがやってる合気道の道場なの」

神社の境内にある合気道の道場。

『天照大御神』の掛け軸と、優雅な日本庭園が、そこが神社の中だという事を忘れさせるほどの佇まいを見せ、自然と肩に力が入る。

神野流古武術。

合気道の護身術を基本とし、自然に身を任せるというのが礎にあるようだ。

基本的に己からの攻撃はなく、敵の攻撃を利用、すなわち力の反動を上手く使い攻撃するという、いわゆる自爆を誘うのが真髄らしい。

技の稽古を通して、自然宇宙との和合、調和を促し、さらには世界平和への貢献など、万有愛護が主な理念だという。

合理的な体の運用により、相手を傷つけずに、小よく大を制することが可能。

精神性が重視なもんで、その時の精神状態、心の境地がもっとも技に現れるという。

無駄な力を使わず、効率良く相手を制する・・・、まさに面倒くさがりのB型のユイにピッタリな技だ。

「さっきは自分が天才みたいに言っちゃってたけど、アタシも白鳥(はくちょう)ってことよ」

「白鳥(しらとり)だけにな」

オレたちは緊張が解(ほぐ)れたのか、みんな砕けるように笑った。

「来週の土曜日さ、みんな、ここに泊まらない？」

ユイがこれまた斬新な提案を持ち掛けた。

「と、言うか、泊まって下さい。実はユイ君、もうすでに来週の為に、懸命にお料理の練習を・・・」

「誠さん、それは内緒！！」

「ゴメン、つい・・・」

「・・・ったく、もう！　そ～いうワケよ！！　べ、別にムリして来なくっていいけどさ・・・」

ユイの頬っぺたが大きく膨れ上がった。

さっき誠さんが言ってた、「来週の計画が無くなっちゃうよ」ってのは、このことだったのか。

「いや～、嬉しいな～、こんな素敵な所にお邪魔させてもらえるなんて。しかも、一泊でしょ？　そんじょそこらの旅館なんかより、断然くつろげるし、良い骨休みになるよね」

宮さんがすかさず義理立てするように庇護した。

「そうっスね。１４日の土曜日、ここでお世話になって、十分、体と心を休ませてから、１５日の試合に挑むってやり方、最高っスね」

竜崎も同時に援助。

「じゃ～ユイ、誠さん、来週の土曜日お世話になります。と・こ・ろ・で・・・、コレは？」

オレは指で円を作った。

「ば～か、アタシも誠さんも金なんかとるワケないじゃない。この誠さんはね～、アタシから合気道の月謝すら取らないのよ？　信じられる？　毎週毎週通ってるのに。その上、社務の仕事させてくれてさ、バイト代までくれるのよ」

「だって、ボクたち親戚同士だよ？」

「・・・でも」

誠さんはユイに攻めたてられている。

誠さんは、奥さんの面影（おもかげ）をユイに感じて、嬉しいんだよ、きっと・・・。

だから、出来るだけ、そばに居てやれよ・・・って、オレは心の中で呟いた。

「ジオン君、竜崎君、宮君、そしてユイ君。ボクで良ければ力になるよ。じゃあ、来週の土曜日、お待ちしているよ。次の日の格闘技の試合に向けての最後の修行？　休養？　ま、お好みで・・・」

誠さんは、オレたちが格闘技の大会に出ると思ってる。

これがホントは喧嘩だって知ったら、はたしてその優しさはあるのだろうか？

何か、みっちり説教されそうだ・・・。

オレは、ここに来る前まで、とてつもないプレッシャーと恐怖に苛（さいな）まれ、もう少しでダメになる所だった。

でも、今は違う。

心の奥底から、沸々と精気が湧いてくる。

もしかしたら『恐怖』を克服できるかもしれない？　そんな期待に胸が高鳴った。

第１４４話　アニミズム

オレたちはそれぞれの思いを胸に、１５日の『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』へ向けてラストスパートをかけていた。

オッキーとは腹を割って語り合い、ちょっとした以心伝心ならイケるほどに仲を深めた。

芒戦での名セコンドとして、大いに期待している。

一方、竜崎は一度だけ中川ジムへ足を運んだという。

そこで、関節技を仕入れたそうだ。

何も意地を張らずに毎日通えばいいのに・・・と、思ったりもしたが、オレも同じ立場で、長山に「オレのジムに来いよ」と言われても、素直に「はい、喜んで」とは言えない。

そんな竜崎の気持ちを察したオレは、「竜崎、柴は放(ほ)っとけ。オマエは孤高(ここう)の竜が似合ってるよ」なんて温かい言葉を掛けてやった。

竜崎はニヤリと微笑んで黙って頷いた。

ユイは学校ではいつものように優等生を演じていたが、放課後は真

っ直ぐ琵琶神社に向かい、精神修行に精を出してるようだ。

誠さんの下で修行を積んだら、通常の１日が１０日、いや、１００日にも値するんじゃないかと思うほど、精密で奥が深い時を味わえる。

ユイが少し羨(うらや)ましく思えたが、常にそればっかりも退屈かも・・・なんて思ったりもした。

宮さんはというと、織川とスルベシター・シタローンのボッキー並の、マンツーマンのトレーニングを行っているという。

２人で黙々と街をランニングする姿が容易に想像できた。

織川はアマチュアボクシングのジュニア、ライトフライ級の選手って事もあり、今回宮さんは、打撃を中心に特訓に励んでいる。

それが勝敗にどう影響するのかは、神のみぞ知るってヤツだ。

その日の放課後、オレは家に着くなり荷物をまとめ、さっそく神社に向かった。

引き続き、しつこく襲ってくる『恐怖』は厄介でならない。

フンギャ～～～！　あっち行けって言ってんだろぉ～～～～！！

・・・と、心の中でたまに叫ぶが、目に見えない芒の幻影が、いつも遠くから歩いてくるのだ。

真っ暗くて黒い空間の奥の奥から、そいつはやってくる。

タバコを銜えて、しかめっ面で、ブロック塀を片手に・・・・・。

『パン　パン』

お賽銭の金すらなく、賽銭箱には何も入れる事ができなかったが、

「いつか金持ちになるんで、そしたら千円とか壱万円とか入れますんで・・・」みたいに心の中で呟きながら、「どうか、この恐怖を祓いたまえ～」と、お願いした。

思い出したように、「神様が明日も笑顔でありますように」なんて付け加えたりして。

「早いね～。ユイ君は、きっと夜になると思うよ」

誠さんだ。

「誠さん。さっき、そこの貼り紙読んだんですけど、誠さんって、霊能者だったんですか？　人生相談とかやってるんですね～」

「あぁ～、そう、アレね。建前は霊能者。そう言ってると、客が来るし」

うわ～、正直だな、この人。

「やっぱり、世の中、コレ？」

オレは指で円を作った。

「ホントはね、お金なんか取りたくないんだけどさ、神社のお賽銭や年末年始の収入だけに頼ってたら生きていけないんだよね。だからさ、心を鬼にして、人生相談で商売をしてるってワケ」

どこまで素直にぶっちゃけるんだ？　オレをそんなに信用しちゃっていいの？　影で暴露しちゃうかもしれないんだぞ？　ここの神社では、金儲けのために人生相談やってま～すって。

「誠さんって、特別な人なんですね～。もしかして、神様の化身なんじゃないんですか？」

オレは意地悪く、鎌をかけてみた。

どう出る？　天狗になって鼻を伸ばすか？　それともあれこれ洗脳を開始して、オレを勧誘するか？

「ははは、冗談はやめてよ。霊能力なんて、本当は誰にでもあるんだよ。ジオン君も知っての通り、ウチの道場の静寂に身を委ねてると、第六感のようなものが研ぎ澄まされていくカンジがしなかったかい？」

「・・・しましたね」

「環境だよね。人の心は、環境により変化するんだよ。だからね、常に環境に適応できるよう、自然に身を任せて生きる事が必要なんだよね」

「オレも、そう思います」

「山に篭って1年も修行したら、誰でも人の心を読めるようになるよ。本来人間は、意思の疎通が容易に出来る力が備わってるんだよ。ボクはただ、人よりその力を研ぎ澄ませただけのことさ。この現代の喧騒の中で、常に心の眼を研ぎ澄ますのは逆に容易ではないよ。だからこそ、その見返りとしてお金を頂戴するんだけどね。いいわけかな？　ははは」

この人、頭良いかも、・・・って言うか、とことん本音しか言わない正直者だ。

人を騙すくらいなら、喜んで騙されようタイプ！

オレと同じタイプだ。

「誠さんって、血液型O型でしょ？」

「凄いね、良く分かったね」

「勘ですよ、勘」

ポジティブだし、明るくて素直で温かいもん、これぞ理想的なO型の最終形態だよね。

「オレも、何か視てもらっていいですか？」

「もちろん」

「無料(ただ)？」

「ははは、もちろん」

明日の試合結果に決まってるよな、やっぱり・・・。

「明日、負けるよ。ＴＫＯ、テクニカルノックアウトってヤツかな？　他の仲間たちの結果も知りたい？」

・・・・まだ聞いてねぇ～のに、先に答えから言いやがった。

マジで何者？！

「な、なんか、四方八方から見つめられてるみたいで、怖いんですけど・・・」

「ははは、ゴメンゴメン。ほんのジャブのつもりだったんだけど」

「メッチャ、カウンター喰らいましたよ。もういいです」

モノホンだよ、この人。

せっかくだから、一つだけ究極の質問をしてみよう。

「人の未来って決まってるんですか？」

「いいや、君次第だよ」

・・・・はあ？　じゃあ、今の会話って成立しないじゃん？

「矛盾してないですか？　オレは明日、負けるんですよね？　それは、オレの未来が視えたって事ですよね？　でも、人の未来って決まってないんですよね？　じゃあ、誠さんは嘘つきって事じゃないんですか？」

「ボクが視たのは、視た時点での君の未来。人の未来は刻一刻と変化するんだよ。何か一つの小さなきっかけが、人生を大きく左右させたりもする」

そうか、謎が解けたぞ。

俗に言う霊能者って人が、過去をメチャメチャ当てる理由。

精神科医のユングやフロイトも、易は当たるって言ってたらしいし、誠さんの話も統合して整理すると、人間にはそもそも人の心を読む力があるんだって言える。

過去は人間が辿った道だから足跡がついてる。

その足跡を見ればその人の過去が読み取れるワケだ。

こんな靴だったかい？とか、ここで躓（つまづ）いたよね？とか、この辺疲れてなかった？歩幅の間隔狭いよ、とか。

でも、これから先の道には足跡はない。

つまり、修行を積んだ霊能者であれば、過去を１００％完璧に当てる事は可能だが、未来は決められていないから、どんな霊能者でも、完璧に未来を当てる事は不可能ということになる。

誠さんは、オレの辿ってきた道と足跡から未来を分析して導き出したんだ。

そろそろ疲れてるだろうから、この辺で倒れるよ、とか、これだけしっかり歩いて来れたんだし、これからも大丈夫、とか。

ただ、それだけ。

つまり、予測でしかない・・・。

霊能者はとにかく当たる。

でも、当たるのは当たり前。

それは、霊能者の言葉を信じるから。

未来は決められていないんだ！

霊能者を疑うとか疑わないとかではなく、あくまで参考に・・・くらいの柔軟さがないと、世の中の悪い宗教にドップリ漬かって痛い目に遭うのかもしれない。

みんながみんな、誠さんのように善良な人ではない。

誰もが持ってる力なら、尚更注意しないと、善良な仮面を被って人を騙す輩に狙われかねない。

そういうヤツは、人の弱みに付け込むのが上手いから。

藁をも掴むほどの精神状態の時って、自分を見失ってるから、優しい言葉を掛けてくるヤツや、自分を助けてくれそうなヤツをとことん信じてしまう。

そんな時、多額の金を持ってたら・・・、カモだ!!

問題は、良い宗教もちゃんとあるって事。

見極めは簡単なんだよな、本当は。

良い宗教って、押し付けないから。

出入り自由だから、会員とか、会費とかないし。

信じるも信じないも、勝手にどうぞ〜みたいな。

オレは、誠さんが言ったように、人は変化する生き物だと思う。

この世に絶対普遍のものはないように、人の心も常に変化する。

・・・って事は、その時その宗教を信じてても、急に別の宗教を信じてみたくなるかもしれない。

だったら最初から信じる信じない抜きに、何でも受け入れて噛み砕いて消化するくらいの余裕がほしい。

あっ、それもいいけど、こっちもいいね、みたいに。

否定はせず、肯定のみってヤツだ。

それに、そんな宗教を作った人も、所詮、同じ人間なんだし。

そんな事を考えていたら、いつの間にか中庭の日本庭園で、竜崎が一人黙々と木刀を振っていた。

「いつ来た～？　全然気付かなかったゼ」

「３０分くらい前っスよ。ここでずっと素振りしてたっス。そ～いうジオンさんも、いつからそこにいたんスか～？」

「はあ？　ずっと前からいたよオレは」

「ジオン君、しばらく自問自答の世界に入ってたみたいだね。でも、あの竜崎君は、剣道の素質あるよね。すでに架空のイメージで作り上げた相手と、剣での会話をしているよ」

「アイツ、剣道やってたって言ってましたよ」

「やっぱり。あの肘の閉め方は素人じゃないなって思ってたんだよ

ね」

・・・と、その時、後ろに気配を感じて振り向くと！

「出来たっ！」

宮さんが隅っこの机で書道をやっている。

文字を書き終え、筆を硯（すずり）に置いた所だった。

「み、宮さん、い、いつの間に?!」

「３０分くらい前かな？　ずっとここで書いてたよ。亀ちゃんはいつからいたの?」

「１時間くらい前からかな・・・?」

へ～～～、３人とも、凄い集中力だったってワケか～。

オレはジオンワールドへ、竜崎は剣道へ、宮さんは書道へ集中する事により、お互いがお互いの存在に気付く事もなく、気配すら消してたってか。

丁度その時、道場にユイが現れた。

「みんな揃ったみたいね。もうすぐ夕食の支度するから。雫、アレ忘れたから買ってきてくんない?」

「アレって何ですか？　アレって」

あれ？　何で朝露さんが・・・？　・・・って、アレ～～～？！

一週間見ないうちに、物凄く変わったんですけど～～～～！！

ホントにホントに、朝露、雫？！

そこに居た朝露さんは、服装も髪型も以前の面影は全くなく、一言で言えばボーイッシュに変化している。

新しく生まれ変わった、朝露雫がそこにいた。

第１４５話　超余裕

『成功（せいこう）』

「つまり、目標達成だよ。明日、オレは立派な功績を残すぞっていう、意気込みでもあるよな」

そんな宮さんの書は、天照大御神の掛け軸の隣に貼られている。

「すんばらしい、実にすんばらしい。まさに書聖（しょせい）、宮さんによる心画（しんが）だ」

オレは、一見、子供の落書きのような作品を見て、有りのまま答えた。

書聖っていうのは、書道の優れた人の事で褒め言葉でもあり、心画というのは、書は個人の精神の表現であり心の画であるという意味だ。

ハッキリ言えば、Ｂ型の宮さんへの褒め殺しだ。

Ｂ型は褒められるとドンドン強くなる。

だからオレは明日まで、ユイと宮さんには褒め言葉しか与えないようにしようと思っている。

「う〜ん、あの掛け軸が勿体(もったい)ない。せっかくこの道場を照らすような、立派な掛け軸なのに、その隣にショボイのがあると、妙に景観(けいかん)悪化するっス」

竜崎の指摘に、宮さんは眉毛をハの字にした。

・・・ま、人の意見は様々なんでね。

ちなみに今のオレだったら、『足跡』って書くね。

過去は後戻りできない道。

時には他人(ひと)の道を見て、羨(うらや)ましがったり嫉妬したりするけれど、自分が選んだ道をただ、ひたすら歩む。

先人が作った足跡を、頼りに、参考に、ひたすら歩く。

自分が歩んできた道は一つだし、これから歩む道も一つしかない。

一つしかないオレの足跡。

そんなオレの足跡を、誰かが辿ってくれるような、そんな道を歩んでいきたい。

恐れずに、しっかり前を向いて歩いていきたい。

人生という名の道を歩くオレたちの、未来は決まってないのだから・・・。

「お待たせ～」

私服に着替えたユイと、すっかりイメチェンしてしまった朝露さんが、出来立ての夕飯を持ってきた。

広い座敷の中央に置かれた長テーブルに、次々と和食が並べられる。

『カッコン』

庭園の鹿威し（ししおどし）の音が鳴り響き、月明かりに照らされた白い砂、虫の声。

時計がないから時間が分からないが、まだ6時頃だと思われる。

ここに来てから時間の流れが物凄く遅い。

アインシュタイン曰く、時間という概念は人間が勝手に作り出した幻想に過ぎないという。

まさにここの時間は、普段の喧騒に満ちた時間とは差があり過ぎる気がした。

選び抜かれた旬の食材を目の前にし、オレたちは言葉もない。

普段一人暮らしに慣れてるため、ロクなモノを口にしてない竜崎と

宮さんは、もっと言葉を失っている。

もちろん誠さんも、だ。

数十種類の小鉢に焼き魚、一粒一粒が綺麗な米と、豆腐とワカメの味噌汁。

宮さんはビールがないのが残念そうだ。

それに、ここに来てからタバコは吸っていない。

が、それを我慢してもお釣りが来るくらいの、優しい空間がそこにはあった。

「ユイ、多分、この味は一生忘れない」

「何よ、大袈裟なんだから」

「おこがましいかもしんないけど、赤紙の召集命令が来て、明日戦地に出向く人の気分って、こんなカンジなのかな～って・・・」

「また始まった。自分で自分がバカだと思うんなら、最初からバカな事言わないの！」

ユイに怒られた。

「ははははは」「ガッハッハッハ」「はっはっはっはっは」

みんなには笑われるし。

やがて食事も終わり、布団を敷いて寝る準備に取り掛かった。

「まだ8時ですね～。ここって時間の流れ、超遅くないですか～？」

朝露さんがケータイを見ながら言った。

「ねぇ、朝露さん。やっぱり、あの時髪を切った行為は、過去の自分にケジメをつける意味で？」

オレは周りに人が居ないのを見計らい、朝露さんに気になっていた事を聞いた。

「あっ、はい、あの時は、ど～してもユイさんのセコンドに付きたくて必死でしたから。アレは無意識での行為です。あの時はちゃんと切れなくて・・・。でも、あの後に、髪をちゃんとカットしようと決めたんです。過去と決別しようって決めたんです。実はですね、あの後、父親、来ました」

な、何～～？！　やっぱり来たってか？　・・・で？！

「・・・・ハッキリ言ってやりました。もう、2度と来ないでって。凄く、凄く、凄く恐かったです。けど、最初で最後だと自分に言い聞かせて、ハッキリ言ってやりました」

朝露さんの瞳に、薄っすら涙が浮かんだ。

「後は、明日のスケバンミケコをユイ先輩がやっつけたら、何もかも終わりです。新しい私の人生が、スタートするんです。・・・きっと、大丈夫ですよね？　ユイ先輩、勝ってくれますよね。もし、負けちゃったら私・・・」

「言霊（ことだま）って、信じる？　言葉の魂。オレはね、信じてるんだよ。ダメだダメだ言ってると、ホントにダメになっちゃうんだ。でも、大丈夫、大丈夫って言い聞かせてると、結局大丈夫だったりするし、粋（いき）がって余裕、余裕なんて言ってると、ホントに余裕になったりする」

朝露さんは、穏（おだ）やかな表情でオレを見つめた。

「でも、人は無意識でネガティブな事をついつい言っちゃうよね？　ダメかも・・・って。そん時は、後からやっぱり大丈夫、きっと大丈夫、絶対大丈夫って口に出して言うんだ。そうする事によって相殺され、さらにプラスになり、結果的に大丈夫が勝るから」

「ユイ先輩は、勝ちます」

「そう、もう1回」

「ユイ先輩は、絶対勝ちます。勝つに決まってます。余裕で勝っちゃいます。超、超、超、超、超余裕で大勝利！　光一君も、ジオン先輩も、もちろん宮先輩も、み〜んな勝っちゃいます。絶対、絶対、絶対勝ちます！！」

「あはははははははは。もう大丈夫だ、そんだけ言えば、必ず勝てるよ。はははははは」

「何2人して笑ってんのよ。楽しそうだこと」

ユイが枕を抱えてやってきた。

その後ろから、竜崎と宮さんが布団を抱えてやってくる。

「明日はさ～、この調子で、リラックスして行こうゼ」

「「「賛成！！」」」

オレの提案に、みんな賛成してくれた。

「アタシも思ってたんだけどさ～、サッカーとかで、日本って大和魂を背負ってガチガチになってさ～、一致団結スクラム組んで挑むじゃん。見てる方は白熱するし興奮するけどさ、大概負けるんだよね～。でもさ～、ゲラゲラ笑いながら、まとまりがなかったりして、和気藹々（あいあい）とやってるヨーロッパとかのチームって、妙に強かったりするんだよね」

ユイの説は理にかなってる気がする。

ガチガチ緊張状態より、リラックス状態の方が、勝負事では有利な気がする。

オレたちはこの法則を、『ガチユルの法則』、と名付けた。

もう少しだ、もう少しで『恐怖』を克服できそうな気がするんだ。

「そうそう、誠さんってね、この辺じゃ超有名な霊能者なのよ～。何でもズバズバ当てちゃうの。ホント凄いんだから。後でさ～、みんなで視(み)てもらわない～？」

おっ？　ユイのヤツ、ノって来たね～。

「私、時々自分を見失うんです～。もしかしたら～、憑依(ひょうい)体質ってヤツかも～」

オイオイオイオイ、冗談じゃないぞオイオイオイオイオイ。

朝露さん、何、ぶっちゃけてんの？　今、夏だよ、夏。

何？　怪談？　ね～、怪談ってヤツ？！

もしかして、これから誠さんの除霊(じょれい)でも始まんの？　それとも本格的に浄霊(じょうれい)？！

朝露さん、この畳の上で苦しそうにのたうち回るの？

「オレはハッキリ言って、厳しいっスからね」

竜崎、何かやる気満々だぞ？　戦うのか、誠さんと、戦う気なのか

？！

「オレ、前から霊能者に聞きたい事あったんだよね～」

「おっ、何すか、宮さん、何すか？」

「どうして人を殺しちゃいけないんだろ～？」

究極だよね、それ、究極な質問だよね。

それ答えるのに、一晩掛からない？　誠さん、タジタジにならない？！

「やあ、そろそろ寝るのかい？」

キターーーー！！

どれどれ、誠さんのお手並み拝見と行きますか！！

第１４６話　ＶＳ霊能者

誠さんに向かい合うように、オレたち５人は布団の上に座った。

「どうしたんだい？　何か座談会でも?!」

「誠さん、アタシたちを視て下さ～い。もちろん大変だろ～から、一人一つだけ質問するカタチを取りま～す」

ユイの提案を予測していたのか、瞬時に観念したのか、誠さんはやれやれという感じで座った。

「誰から行く?」

ユイが一番楽しそうだ。

よっぽど誠さんの霊視をオレたちに披露させたいみたいだ。

残念ながら、彼の霊視は一足先に体験させてもらってるんだ。

彼はホンモノの霊能者だよ。

でも、聞きたい事ってだいたい将来の事、未来の事だよなぁ～。

残念な事に、未来を聞いても、意味ないんだなぁ～コレが・・・。

参考にする分にはいいけどねぇ～。

「前もって言っておくけど、真実なんて人の数だけ存在するからね。ボクの言葉はあくまで参考程度にとどめて頂戴ね」

さっそく隙がないよ、この人。

オレにそんなに尊敬されたいのか？　誠さ～～～ん！！

「ほんじゃ、オレから」

おっ、宮さんが手を上げたぞ。

「宮君は～、随分と苦労してきてるよね～。腰？　背骨？　かなり痛めたね」

「・・・凄ぇ」

さっそくジャブ喰らってるよ、宮さん。

「S字カーブに曲がったね、一回。そこまで回復したのは奇跡だね」

「そ～なんですよ。マジ、あの時はヤバかった」

「・・・で？　何が聞きたいの？」

オオ、今からスタートか。

「ど～して、人を殺しちゃいけないんですかねぇ～？　法律とか、出来れば宗教とか哲学抜きで、教えてもらいたいモンすね～」

さ～、どう出る？　その質問に答えられれば、相当な霊能者だぞ！！

「まず最初に、人間が生まれるまでには、それはそれは数々の苦労、苦難があるワケですよ。信じられないくらいの神業（かみわざ）で、人間はこの世に誕生するワケです。受精するまでに、とか、母親がお腹を痛めて、なんてのは、その中のほんの一粒の苦労に過ぎません。興味がおありでしたら、人間が誕生するまでの進行のプロセスを、医学や自然科学を交えて勉強してみて下さい。地球が宇宙に存在する確率と同じ、いや、それ以上の天文学的数値の奇跡ですから。では、ど～して人は生きてるのか、そこから語るね」

ほう・・・。

「人は、大目的を達成する為に生まれてきます。その目的に向かって生きてるワケです。その目的とは一人一人違くて、もちろん人の数だけ目的の数もあります。自分が生まれてきた目的、意味、訳は、必ず分かる時が来ます。遅かれ早かれ、誰でも。生まれてすぐの人もいれば、死ぬ直前の人もいますがね。私の視る限り、目的に気付くのは結構死ぬ直前って人が多いですねぇ～」

大目的達成の為、人は生きている・・・？

「大目的、もちろん天寿（てんじゅ）を全（まっと）うする事もその中に含まれますが、例えば、分かり易く言うと、誰々と結婚して子供を産む事だったり、

育てる事だったり。中には事業を成功させるのが目的の人もいるし、潰すのが目的の人もいるかもしれません。そもそも、病気や事故に遭うのが目的である場合もあります。それは千差万別であり、それはそれは様々な目的があるのです。・・・つまり、死ぬ直前の人は、自分の生まれた目的に気付きつつ、さらには同意の上で死ぬことになるのです。人は誰でも大目的の達成の為に生まれてくるワケですから、それをこっちの勝手な理由で絶ってしまうのは、失礼極まりない行為なワケです」

なるほど・・・。

「じゃあ、オレの大目的って何でしょうか？」

「大きな目的はボクには分かりませんが、今の目的は明日の試合に勝つためでしょうね。宮君が今を生きてる目的は、明日の試合に勝つため・・・。こんなカンジでよろしいでしょうか？」

「・・・・・・・・はい。ありがとうございました」

オオ、あの宮さんが納得したぞ！

やっぱホンモノだぁ～～～！！

オオ？　宮さんは甘いっス的なその眼は、竜崎！！

宮さんの仇を討とうってか？　はたして竜崎は、誠さんを破る事が出来るのか？！

「ちなみに、どの角度から見ても、こいつは悪人だろ～っていう人がいるとして、ど～してその悪人を殺しちゃいけないの？って思うでしょうが、理由はこうです。人を殺すのが目的で生まれてきた人は皆無ですし、殺される為死ぬ為に生まれてくる人はいないと断言します。生きる為に人は生まれてきます。例えば大量殺人犯がいるとします。その悪人は大目的に気付くどころか、小さな目的すら見失ってて、生き方を生きる途中で間違ってしまっただけです。なので、それに周りが気付いたら、正してあげる事が正解ですね。どんな人でも本来は、その人にはその人なりの大目的があって生きているのです。ですから、こっちにどんな理由があるにせよ、人を殺す事は間違った行為なのですよ、竜崎君」

オオ？　いきなり誠さんがいったぁ～～～！

先制攻撃だぁ～～～！！

「神って何スか？」

オオ？！　竜崎が、さらなる究極質問をぶちかましたぞ～～～！！

「神道では、八百万（やおろず）の神々が・・・」

「誠さんの本音で語って下さい」

竜崎、強ぇ～！

「物質、かたちあるものは、必ず破壊されます。でも、人の考え方や思いは無くならない。この考えは、仏教では色即是空、空即是色

ともいいます。すなわち、人間も物質であるから滅び行くワケです。しかし、頭で考えうるものは、人から人へ受け継がれますから、無くならないのです。ですから、かたちあるもの、支配者として君臨する神はいないと思いますが、人が頭の中で想像しうる、幻想の神はいくらでも存在しますし、受け継がれもします。でも、所詮その人の想像物でしかないので、それを全人類の神なる存在に当てはめるのは間違っています」

ふむ、ふむ、ふむ・・・。

「宇宙全体が神、つまり、我々も神の一部であると、ボクは定義しています。故(ゆえ)に、質問の答えは、竜崎君が思い描く神はいない・・・ですが、それでは竜崎君は納得しないでしょうから、竜崎君のお望み通り、ボクの思い描く神として質問の答えに代えさせていただきました」

・・・さ～、ど～する、竜崎?!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

長～い、長い沈黙の後、竜崎はオレの顔を見てニヤリと笑った。

「オレの先手先手で先読みして、一気に王手っスわ。この人、達人っス。オレは、神イコール統治者としての神を思い描いてたんで、そいつが否定されては反論の余地はないっス。・・・ジオンさん、後は任せたっス」

え?

バトンタッチ?!

くっそぉ〜、あの竜崎を一発で納得させるとは・・・。

よ〜〜〜〜し、オレも究極の究極な質問だぁ〜〜〜〜!

「どうして自殺はいけないんでしょう?」

オレは誠さんに、もっとも聞きたかった事を訊(たず)ねた。

さぁ〜、オレが納得する答えを!!

「死者の声が聞こえます。苦しい、苦しいって言ってくるんですね〜、自殺者は」

お、脅(おど)しか? 嘘をついたら閻魔(えんま)様に舌抜かれる的な子供だましには乗らんぞオレは!

「死んでも苦しみが終わるワケではないから・・・。こんな答えじゃ納得できません?」

オレは大きく頷いた。

「ジオン君が生まれる前には、この世でバトンを握り締めて走ってた走者がいました。その走者が、ジオン君にバトンを受け渡したのです。今はジオン君が走者となり、この世を懸命に走っています。

ジオン君がゴールに辿り着くと、そこにはバトンを待っている仲間がいるのです。つまり、この世の生死の仕組みはリレーみたいなモンでしょうか？　それも、４、５人どころじゃなく、幾多にも連なる鎖なんです。それをジオン君の勝手な行為で絶ち切るのは、みんなに失礼極まりないですよね？」

「死んだら天国地獄、そんな話がしたいんじゃないんですよ。自殺が社会全体に、ある種の強迫観念を植え付ける行為だからとか、法律がとか、時代や歴史がとか、悲しむ人がいるとか、そんな人生論や感情論や屁理屈を聞きたいワケでもないんです。はたまた次元の話とか宇宙の話とか幻想的な話とか精神論じゃなく・・・」

「ジオン君だけじゃなく、全ての人が納得できる一言が欲しいワケだね」

「・・・・はい、その通りです。今現在、この世に生きてる全ての人が、一言で納得できるような回答を下さい。ど～して自殺はいけないんですか？」

「あなたが死んだ瞬間、あなたの世界が消えるからです。故に、それをあなたは望んでいないから、この世界が存在しているのです。こんなカンジでど～でしょうか？」

「・・・・・・・・・」

「反論はありますか？　なければボク個人の考えに戻りますね。人は大目的の達成の為に生きているので、自殺した時点でその目的を放棄した事になるのです。すなわち、生まれ変わってやり直すか、はたまた目的を諦めるかしかありません。どっちにしろ、ボクたちの計り知れない苦痛と労費が生じるはずです。感覚としては、世界

記録的なドミノを並べ終え、さて、全人類に披露するぞ～って時にバタバタバタ・・・みたいなモンでしょうか。それを並べてる途中で人に倒されるのが殺人、並べてる途中で自分で倒すのが自殺、見事並べ終えて披露するのが大目的。全部は並べてないけれども、時間が来てしまい、仕方なく倒し終わったのが大目的の一つでもある天寿の全う。全てを並べ終えて披露しつつ、見事に倒し終えるのが大往生。それを拝見した全人類の総称が神とでも言いましょうか。大目的の達成、つまり、披露するには疲労を伴うんですよ」

お見事・・・って言うか、この人スゲエ！！

「恐れ入りました・・・」

オレは深々と頭を下げた。

もしそれが真実ではなかったとしても、誠心誠意を込めてオレたちと対峙してくれた誠さんの心意気、真剣さ、温かさ、情熱をオレは認めたい。

パチ　パチ　パチ　パチ　パチ

拍手が巻き起こった。

第１４７話　恋のキューピットになりたい

宮さん、竜崎、そしてオレの究極な質問を悉く(ことごとく)クリアーしてきた誠さん。

次なる挑戦者は、悩み多き、朝露さんだ。

一体どんな質問をするのだろ～か？　まさかホントに除霊して下さいなんて言うんじゃ・・・？

「もしアレだったら、後で個別に聞くよ？」

「は、はい。出来れば、そんなカンジでお願いします～」

誠さんからの提案により、朝露さんは個人的に質問？　いや、おそらく相談になるだろうな。

カウンセリングに・・・。

きっと、あの事を聞くんだと思う。

朝露さんが、幼少から受けていた・・・・・。

少なからず、朝露さんが陰で抱えている、深刻な悩みがある事を知

ったみんなは、さっきまでの楽しかった雰囲気から一転、大人しく黙り込んでしまった。

そんな空気をいち早く脱してくれたのがユイだった。

「はいはいはいはい～、誠さん、雫のは後でやるとして～、最後はアタシの聞いて～」

「よしっ、ユイ、凄いのぶちかませ！　誠さんをやっつけろ！！」

オレもユイに助太刀だ。

「誠さんと戦ってたんスか？　だったらもっと、本気で反論するんだった・・・」

「大丈夫だよ竜ちゃん、オレたちの敵（かたき）はユイちゃんが討つから」

「君たち、ボクを倒すためにこの座談会開いたの～？　勘弁してよ～～～」

誠さんも、たじたじだ。

劣勢（れっせい）な誠さんに一気に攻め込むユイ。

「アタシ、好きな人がいて、その人に近々告白しようと思ってるんですけど、上手くいく？」

・・・・・・・・◎☆♀△※★▽○♂×～～～！！

こ、心の、あ、頭の整理が出来ない。

・・・と、その時、『喧嘩は冷静さを欠いたら負け』という言葉が、オレの頭上に輝いた。

オレは、どんな状況でも冷静さを失ってはいけない・・・、これは、芒戦の予行演習。

そう自分に言い聞かせながら、オレは徐々に冷静さを取り戻した。

他のヤツらもあっけにとられてるが、まず最初にオレは、自分の耳を疑った。

マジ？　今、ユイのヤツ、好きな人がいるって言った？　さらに、告白しようと思ってるって？　しかも近々？！

ここはまず、冷静に先行きを見守るしかない。

「う〜〜〜ん、それは、今日一番の難題だねぇ〜。ちょっと、時間をくれるかい？」

「あっ、だったらいいです。オシマイ、おしまい〜〜〜！！」

・・・え？　聞きたい〜〜〜！！

「誠さん、視てやって下さい。ユイのヤツ、上手くいくんでしょうか？　・・・っつ～か、誰？　誰が好きなの？！」

オレはとっさに誠さんとユイの間に割って入った。

「お、教えるかっ！！　誰が教えるか」

B型のユイが壁をつくった。

破壊してやる！

「オレが知ってるヤツ？　2年？　それとも3年？！　まさか1年？　他校生か？？　もしや大人？　そうか、ジェシーか？　ジェシーなのか？！・・・」

「だから～、ウルサイ。もう、終わり～～～～！！」

こうなるとテコでも動かない頑固者のB。

「誠さ～～～ん」

「ゴメン、分からないや。ははは」

誠さんでも視えないモノあるのかよ？　さては、何かを察して黙ってるだけだな？！

「じゃ～ヒントだけでも。オレが知ってるヤツですか？」

誠さんに粘るオレ。

「ジオン、アンタもしつこいわね、いい加減にしてよ」

ユイは本気で怒ってきた。

「わ、分かったよ。・・・ったく、だったら最初っから人が喜びそうな事、口に出すなっつ～んだよ」

「何よそれ。人の心の内を覗(のぞ)いて喜ぶだなんて、サイッテ～、変態、むっつりスケベ、下品、不潔、エッチヤロー、チョベリバ～、嫌らしいったらありゃしない」

く、くそぉ～、お、思いつく限りの罵声(ばせい)を・・・。

中でも、チョベリバ～ってのが、何かムカつく。

死語を組み込む辺りがナウいゼ・・・。

「人が下手(したて)に出りゃ調子こきやがって。オマエだってな～、強情で意地っ張りで、へそ曲がりでわがままで、分からず屋できかんぼうで・・・」

「せっかく今まで楽しく過ごしてきたんだから、喧嘩はやめて下さい～」

朝露さんがオレたちの間に割って入った。

「大人げないっス、２人とも」

「ユイちゃんもその辺でやめときなよ。亀ちゃんもムキにならずに」

竜崎と宮さんに制止され、オレたちは引き離された。

結局オレたちは口を聞かないまま、お互い一番離れた所に布団を敷いた。

一時席を外した朝露さんは、庭園で誠さんと話をしていた。

・・・残念ながら、夏の風物詩、霊能者による除霊・・・なんかはなかったみたいだ。

『カッコン』

寝る前、トイレに行こうと廊下を歩いてると、縁側で一人、庭園を眺める誠さんに呼び止められた。

「ジオン君、君は、ど～して不良なんかやってるの？」

まるで、オレが不良の役を演じてるみたいな言い方だなぁ～。

「さ～、何となくは掴(つか)めて来てるんですが、まだハッキリとは言え

ないです」

「ボクが思うに君は、不良に成るべくして成ったんじゃないかな？
君はある意味、ヤンキー界の救世主だよ」

「救世主？　・・・んな、大袈裟な～」

ま、そ～言われて嬉しくない事もないけどね。

トイレから帰ってくると、さっきまで誠さんがいた所には誰もいなかった。

代わりに、中庭の大きな石に座って月を見上げるユイがいた。

「ユイ・・・、さっきはゴメン」

「アタシも・・・、大人げなかったね」

B型との喧嘩は尾を引かない。

こっちが先に謝れば・・・の、話だけどね。

「誠さんって、メッチャ良い人だよなぁ～」

「・・・・ねぇ、ジオン。さっきの事だけどさ、アタシの好きな人」

出たよ、B型、人の話、聞かねぇ～のな。

「アンタの知らない人だから」

知らない人・・・？

つまり、それはジェシーでもなく・・・、オレでもないって事ね。

何だ、残念だな～、オレじゃないのか・・・・・・・・・・って、
もしもユイが好きな人がオレだったら、そりゃ～困るさ。

困るよ、困る！！

だから・・・、オレの知らない人で正解っ！！

「ふ～～～ん」

「・・・それだけ」

「・・・あっそ」

アレ？　何か、オレ、冷たい？　嫉妬してるみたいか？！

じゃ～、ぶっちゃけて言おう、嫉妬してるさ、意外に大層嫉妬してるさ。

別にユイに対して、佐倉に抱いてるような好きとかそ～いう感情は全くないけど、何か嫉妬してるよね。

多分、幼い頃からずっと近い存在だったし、感覚的にはアレかも。

おこがましいけど、娘をくれてやる親父みたいな心境？　大袈裟か？　じゃ、なかったら、姉が嫁に行く時の弟の心境？！

フン、やっぱり、素直に・・・、そのまんまでいいよ。

・・・幼馴染みに彼氏ができそ～な心境だよ、ただ、それだけだよ。

これは正直にユイに話すべきだろうか？　オレが今現在抱いてる心境を、素直に語るべきだろうか？

でも、もし話す事によってユイがオレに気を使うような事があったら、せっかくユイに芽生えた恋という感情を摘んでしまうようなことにもなるかもしれない。

B型は人情深くて意地っ張りだから、オレが素直にやきもち焼いてるなんて言ったら、それこそ「冗談よ。アタシに好きな人なんているワケないじゃん」みたいになりかねない。

そしたらオレは、単なる害虫でしかない。

恋という綺麗な花を食す害虫だ。

どうせなら、オレは花から花へ花粉を運ぶ、ミツバチになりたい。

恋のキューピットになりたい。

害虫はイヤだ～～～！！

「オレの力になれる事って、何かないのか？　オレで良ければ、何でも力になるよ。・・・ユイ、何でも言ってくれ」

「・・・・・ウン。お願いだから」

「・・・お願いだから？」

「アタシの恋の邪魔しないよ～に、金輪際（こんりんざい）、アタシの事は放（ほ）っといて頂戴（ちょうだい）！！」

「はい」

・・・・・・・・・・だ、そうだ。

第１４８話　サムライソウル

『チュン　チュン　チュン　チュン』

小鳥の囀（さえず）りで目が覚めた。

早朝、一番に早起きしたつもりだったが、一足先に竜崎が素振りをやっている。

「朝の空気って最高だよな、超清々（すがすが）しいゼ」

「だいぶ安らげたし、今日はかなりいいコンディションっスよ。ここに泊まれて良かったっス」

「オレもだ」

「朝食できたよ～。宮さん起きろ～～～！！」

「宮先輩～、起きて下さ～～～い」

ユイも朝露さんも、とっくに早起きしてたのね？　お見逸（みそ）れしました。

これぞ和食という絶品の数々と、食事後のお茶。

オーガニックな食材と最高級なおもてなしで、大感動の朝食後、後片付けや掃除をしてる時、朝露さんがオレに声を掛けてきた。

小声で、「昨夜、誠さんと話をした時なんですけど・・・」と、オレが少々気になってた事を教えてくれた。

何と、朝露さんは一言も語らず、誠さんが一方的にメッセージを伝えただけだったという。

一つは、「君のお父さん、ホームレスになるよ。でも、心配はいらない。それが彼の宿命（さだめ）だから」という、何とも複雑怪奇なメッセージと、もう一つは、「突き放すのも愛」という深いメッセージ。

どっちにしても、誠さんは朝露さんのトラウマや、今現在の悩みを全てを見透かしたとしか思えない。

改めて誠さんの霊視の底力を感じた。

朝露さんは、その2つのメッセージで、自分がしたことは間違いじゃなかった事に気付き、愛という言葉で安心も出来たという。

朝露さんは優しいので、父が少し不憫（ふびん）だと思う気持ちもあったようだが、心配いらないという言葉と、宿命という言葉で吹っ切れる事もできて、とにもかくにも救われたようだ。

さらに朝露さんは、誠さんに依存してしまわぬよう、「これから先、辛いことがあったら、私、自分の力で乗り越えれますか？」と質問したそうだ。

返ってきた答えは、「もちろん。だって、どんな辛い事も乗り越えてきた君が、これから先、どんな辛い事も乗り越えられないワケがないよね」という単純且つ、ユニークな回答だったらしい。

朝露さんが、驚異的な誠さんの霊視に依存したくないと思った時点で、もう、朝露さんは大丈夫だとオレは思った。

そんな朝露さんを、見習いたいとオレは思う。

臆病で、優しすぎて、恐がりで、経験がなかったから分からなくて・・・、そんな自分の弱さが過ちを生んだ事に後悔してるなら、何も卑屈（ひくつ）になる事はない。

嫌なら嫌、ＮＯならＮＯと、これから言える勇気を学んだんだから、むしろ過ちを誇りに思ってもいい。

それに、辱（はずかし）めは、受けた側より与えた方が、病（や）む。

オレは自分の経験から、切にそう思う・・・・・。

誠さんにたっぷりお礼を述べた後、オレたちは一先ず準備の為に自宅へ帰った。

待ち合わせは石田駅に午後7時だ。

以前だったらもっと早く会場入りして、精神を落ち着けて・・・ってな段取りだったが、今のオレたちには精神的余裕すらある。

それに、これはオレたちの挑発、というより意思表示だ。

オマエらのように、オレたちは戦いを楽しみにしているワケでもないし・・・、でも、ちゃんと時間内だから文句はないだろ？・・・・・みたいな。

あれ？　挑発っぽい、コレ？　ま、それも含めて、『会場入りは、試合開始ギリギリ前』、それがオレたちのヤツらへのメッセージ。

オレは家に着くなり、用意していたブリーチで、髪の毛の脱色を開始した。

朝から昼過ぎまで、脱色を繰り返し、オレの髪は竜崎をも凌(しの)ぐ、まっ金、金だ。

さすがに5本目ともなると、頭が割れるくらいに頭皮がヒリヒリした。

最後にアッシュで染め毛し、オレの頭は銀髪(ぎんぱつ)へと姿を変えた。

『ピンポーン』

オッキーか？　時間にウルサイA型のこと、十分予想はしてたけど、早すぎるゼ、アイツ。

「何だよオマエのその頭。目立ち過ぎねぇ～か？」

「いいんだよ」

オレは威嚇(いかく)の為に染めたんじゃねぇ～。

出来るだけ昔の面影を消す為に染めたんだ。

万が一、中学の時の、会いたくねぇ～ヤツとかが居ても、極力気付かれねぇ～ように。

誠さんの所とは大違いで、時間の流れは残酷なほど早かった。

今は、ジェットコースターに乗って、カタカタと頂上付近に向かっている時のような気分だ。

もう逃げられないんだ。

加速するジェットコースターに、身を委(ゆだ)ねて、下(くだ)り落ちるしかない。

いつかは終わるんなら、『恐怖』すら楽しんでやる・・・か。

オレはいつの間にか、『恐怖』を克服していた。

午後7時、石田駅のホームは、信じられない光景だった。

まるで修学旅行並の人ごみは、ほとんど、いや、全てが武蔵の1年

だ。

幼さの残る顔を見れば一目瞭然。

さすがに制服のヤツはいない。

男子だけじゃなく、女子も多い。

確か、ゆかりのあるヤンキー共にしかチケットって売られないはずじゃ？

それに、２００人ほどのキャパシティしかないって言ってたよな？

ウチの生徒だけで半分埋まるんじゃねぇ～のか？　しかも全員一年。

「ジオン、気合入ってるわね～」

ユイがオレの頭を見て笑った。

動き易さを重視したのか、ユイは長袖の黒いジャージに短パン。

虎の刺繍（ししゅう）が入ったジャージで気合を入れたのかと思いきや、短パンの下は白黒ボーダーオーバーニー。

威嚇（いかく）と魅惑（みわく）？

そんなアンバランスなギャップがユイらしいと思った。

「絶対、勝ちます」

朝露さんも、ユイとお揃いのジャージだ。

すっかりボーイッシュに様変わりした朝露さんは、龍の刺繍が入ったジャージ、長パン。

「完全に吹っ切れたみたいだね」

「ハイ」

そこには、かつての朝露さんの面影はない。

女戦士と女守護兵の後ろから、竜崎と柴が現れた。

「ジオンさん、凄いっスね、その頭」

「そ～言う竜崎も、凄くね？」

竜崎は、オレが銀髪に染める前の、あの、まっ金、金で登場した。

「竜崎、かなり落ち着いてるんで、余裕ですよ、余裕」

柴が竜崎を高揚（こうよう）させるように言った。

竜崎と柴が並んで歩いている。

ついこの間までは絶対見られなかった光景だ。

ライバル同士の後ろからは、宮さんと織川が現れた。

「気合入ってるねぇ～、亀ちゃん」

「そ～いう宮さんこそ」

宮さんは、頭をいつも以上に短く丸めてサングラスを掛け、一見ヤクザにも見えなくないカッコウで登場。

隣の織川は見るからにその舎弟だ。

「ほんじゃ～、いっちょ、やったるかぁ～」

宮さんの掛け声で、ホームにいる大勢の生徒が大歓声をあげた。

みんな、仲間だ！

電車の中は、オレたちのせいで満席状態だった。

試合前の緊張や感傷（かんしょう）に浸（ひた）る暇もなく、オレたちは敵地、野牛駅に到着。

オレとユイ、竜崎と宮さんの４人の後ろを、オッキー、朝露さん、柴に織川が歩く。

その後ろに、約１００人もの武蔵勢。

柴の話によると、後ろの1年は全員、オレたちの応援のために来ているという。

オレたちの知らない所で、柴や朝露さんが、オレたちの武勇伝を語っていたのだ。

いつのまにかオレたちは、1年のカリスマ的、英雄になっているようだ。

港に向かう一本道は、オレたちに埋め尽くされた。

ちらほらうろついている野牛の生徒は、皆、血相を変えて逃げ出す。

いざ、尋常(じんじょう)に・・・、勝負だ野牛!!

第１４９話　ＫＨＪのボス登場

午後８時２５分、オレたちは作戦通り、ギリギリの会場入りを果たした。

野牛港の第３倉庫の中は、すでに熱気に溢れている。

会場に入ると、野牛、吉岡の生徒と思われる、いわゆる大会の客たちは、一斉にブーイングだ。

「待たせるな～」という野次に対し、待たせた覚えはないし、オマエらが勝手に待ってたんだろ？と思った。

会場にはリングを囲むように東西南北にイスが並べられているが、正面の入り口側を除いて満席。

立ち見客も大勢いる。

「普通試合直前に来るか～？　野牛勢はカンカンだぞ！　敵を怒らせてど～すんだよ」

予想通り大橋は、オレらが来るなりイチャモンをつけてきた。

「どうしてケータイに出ない？」と宮さんは責められていたが、「ゴメンゴメン、ケータイ家に忘れちゃってな～、緊張してんだわ」と、言い訳をしていた。

電車の中で、「ウゼ～」と怒鳴ってケータイの電源を切っていた宮さんをオレは知っているが、ここはあえて何も言うまい。

武蔵の生徒たちは、入り口側の空席部分に座り出した。

会場は２００人程度のキャパなんて言われていたが、武蔵が１００人と見積もってザッと計算する限り、オレが見た感じ３００人以上はいると思われる。

武蔵を除いて、会場の客は、ほぼ全部が野牛の生徒らしい。

吉岡に回ったチケットは、ほんのわずか・・・と、大橋が残念そうに言っていた。

オレたちは、大橋に案内され、リング最前列に並べられたイスに腰掛けた。

ユイ、オレ、竜崎、宮さんという並びで座り、オレたちの前、リングの周りには、オッキー、朝露さん、柴、織川のセコンド勢が、片膝を着いてしゃがみながら陣取る。

リングを挟んで、正面向かい側の野牛側には、すでにミケコらがイスに座って睨みをきかしている。

尖ったサングラスにカラスマスク、そして特攻服に身を包んでいるミケコ。

リング周りにいる、野牛側のセコンド勢と思われるヤツらの中に、タカノブを発見した。

『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』時に、堂々と敵のセコンドにつくタカノブ。

オレたちへの、かなりの挑発行為に思えたが、今のオレはタカノブなんぞに構ってるヒマはない。

執拗（しつよう）にオレを睨む、芒の刺すような視線を感じたからだ。

あの時と変わらぬ態様（たいよう）で、オレを睨みつける芒。

オレは目の前でキョロキョロするオッキーの背中で芒の視線を遮（さえぎ）り、これ以上芒と目を合わせないようにしようと思った。

これ以上睨み合ってしまっては、せっかくの冷静さを失ってしまう。

・・・それにしても目の前のオッキーの顔ったらない。

オッキーを見てるだけで、ユイも竜崎も宮さんも緊張が解（ほぐ）れるに違いないと思わせるほどの、挙動不審な動きと、目の泳ぎっぷりは、オレを存分に笑わせてくれた。

芒の隣には、フードを被った黒人がいる。

その男が頭に被っているのはフード付きの大きなタオルで、屋外ライブや夏フェスなんかで良く見受けられるファッションタオルだ。

そいつがリチャードだと分かるまでそれほど時間を要しなかったが、フードで口元しか見えず、表情は分からない。

リチャードのセコンドには、ＢＡＲカシオンにいたあの２人が付くようだ。

宮さんに因縁をつけていた、野牛退学組だ。

あっちの一方的な遺恨なのだが、竜崎ＶＳリチャードの試合からは、妙に危険なニオイを感じる。

さらに、ミケコの隣には、異彩を放つ不気味なオーラの大男が腕を組んで座っている。

猪（いのしし）のような顔のその男に、ちょこちょこと話し掛ける顔立ちの良い男。

その２人が、長須と仲村だというのは、誰に聞かずとも分かった。

とにかく、その２人の放つ存在感は、全然別格（べっかく）なのだ。

左斜め向かいのブロックは、ほんの少しだが、吉岡勢のかたまりがある。

野牛のイカツイ連中に押されるように小さくなっている。

右斜め向かいのブロックも、野牛勢が大半なのだが、最前列だけは違った。

スーツ姿の男たちが座っている。

会場には、武蔵、野牛の沢山のヤンキーたちが集い、これでもかっていうほどのアブナイ空気だってのに、それをも凌駕（りょうが）する、とんでもない危険なニオイのする男たちが、右斜め向かいのリング最前列に腰掛けていた。

その中でも、ぶっちぎりで際立った、おぞましく強烈なオーラを放つ男に目がいった。

そいつの周りには、やはり度肝を抜かれるような、やばそうなヤツがゴロゴロいるのだが、その男の放つ阿修羅のようなオーラには敵わない。

大橋が一言、「あれがＫＨＪのボスだよ」と教えてくれた。

その男はホスト系の格好で、サングラスをかけ、長身で痩せ型の短髪。

高そうなスーツにゴージャスなネクタイと金銀のアクセサリー。

腕に光る、ロレックス。

遠くからだったが、オレはそいつのコブシが妙に気になった。

ボロボロで、傷だらけのコブシが・・・。

さらに目を引くのが、毒々しい顔面のタトゥー。
鉄条網風の鋭いイバラが、額から顎にかけて、顔の右端に彫られている。
オレはそれ以上、斜め向かいを見ないようにした。

「ユイちゃんさん、早く、このマウスピースとヘッドギアと、グローブ付けて」
大橋が親切丁寧にユイに手渡す。
「コレはいらな〜い」
ユイがヘッドギアを嫌がったが、「ダメですよ〜。頭は守って下さい」と、朝露さんがユイを叱った。
しかし、いち早くリングインしてこっちを見下すミケコを見た途端、ユイはヘッドギアを投げ捨てて立ち上がった。

ミケコはサングラスとカラスマスクを投げ捨て、臨戦態勢をとると、甲高い声で叫んだ。
「オラ、さっさと上がってこいよメスブタ〜。血祭りにあげてやんよ」
ミケコが客を煽るように手をたたく。

その度に会場のボルテージは上昇し、熱狂的な興奮のるつぼと化した。

「やっちまえ～」「ぶっ殺せ～」「殺せ殺せ殺せ殺せ～」「野牛～」「武蔵～」「ミケコ～」「ユイ～」

沢山の罵声やエールが飛び交う中、ついにユイが席を離れ、会場は割れんばかりの歓声に包まれた。

武蔵側の、リングサイドのセコンド陣営には、朝露さんの他、いつの間にか数名の女子が陣取っている。

朝露さんの友達や、最近ユイを崇拝（すうはい）している後輩たちだと思われる。

オッキーが邪魔者扱いされてる様を見て、オレは少々笑わせてもらった。

一方野牛側の、リングサイドのセコンド陣営には、特攻服に身を包んだ女たちが４人、陣取る。

例のミケコの手下共だ。

もちろんその中に、朝露さんの髪の毛を掴んで振り回した、ピンクの女もいる。

ついにユイがリングに上がった。

すでにリングでユイを待ち構えていたミケコと向かい合い、相当な睨み合いを展開している。

身長で勝るミケコがユイを見下し、下から見上げるように睨み返すユイ。

特攻服で戦うことからも、それ相当のミケコの覚悟と気合が窺えるが、表情を見る限り、ユイをナメてかかっているのは明白だ。

ただ、会場の空気や仲間たちの興奮に若干呑まれてるようで、自分の力を示すかのような、無駄なアピールがやたら多い。

O型は比較的冷静に全体を捉える事ができ、よっぽどじゃないと取り乱さないし、ミケコからは大きな余裕を感じる。

ただ、対峙する相手に睨まれたり、挑発されたらとことん付き合うのもO型。

2人のヤバイオーラがこっちにもビンビン伝わり、オレの腕には鳥肌が立った。

隣の竜崎は、会場入りした時から一言も発さない。

冷静に全体を見据えているようだ。

宮さんも同じく、不屈の不動心が見てとれる。

ユイは執拗に挑発してくるミケコに最初は合わせてしまったものの、

すぐに飽きたのか、いつの間にかミケコから視線を外し、大橋とリング上でグローブをはめながら会話をしている。

一方、睨み合いを征し、勝ち誇るかのように大袈裟なアピールで会場を沸き立たせるミケコ。

オープンフィンガーグローブを装着し終えたユイは、マウスピースをリング下に投げ捨てた。

ミケコも、マウスピースは着けていないようだ。

2人がもう1度対峙し、大橋がもう1度2人をチェックする。

沢山の文字が刺繍された特攻服に身を包んだ、一見美人にも見えなくもないミケコ。

片や、黒いジャージに短パン、白黒ボーダーオーバーニーで、男子を魅了するような可愛さ溢れるユイ。

時代を逆行させ、現代に甦ったようなレディース暴走族のヘッド、日丸ミケコと対峙するのは、現代を代表するような普通の女の子の雰囲気を醸し出す白鳥ユイ。

一見、遠くからではユイの形勢不利感は否めない。

だが、オレには全くミケコに気後れしていないのが分かる。

あの目を見れば、一目瞭然だ。

数々の修羅場を潜り抜けてきた自信を漂わせるような、肩で風切る強圧的な態度のミケコに対し、普段と変わらぬ飄々（ひょうひょう）とした惚（とぼ）け面（づら）。

圧倒されそうな会場とリング、観客の数と興奮、そして敵の背負い込んだ覚悟と気迫、そんなものに一切呑み込まれず、堂々と対峙しているユイの姿が凛々（りり）しくも思えた。

嫌悪感や不快感を一切見せず、冷静さを保つユイ。

この間までこの会場で一番、誰よりもミケコにムカついてたくせに・・・・。

大橋が右手を縦に振り、ついにユイＶＳミケコの戦いの火蓋が切って訪れた。

第１５０話　ユイＶＳミケコ

『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』の引き金とも言われる、ユイＶＳミケコの裏メインがついに始まった。

ミケコの特攻服の背中には、日の丸が刺繍（ししゅう）されている。

特攻服に身を包み、日の丸を背負ったミケコが、この試合にどれほどの思い入れで挑んだのかは分からないが、いつでも私は命張ってんだよっていう意味合いが、コスチュームに含まれてるんじゃないかとオレは思った。

かつて日本は大国を特攻で震撼させた。

一方、ユイの黒いジャージの背中には、虎が刺繍されている。

それにどんな意味が含まれてるのかは分からない（オレの予想では、９９％意味はない）。

ジャージの短パンの下は、白と黒のボーダーのニーハイ。

男の視線を釘付けするような魅惑のコスチュームで、会場の野牛共のイカレた頭を刺激してど～すんだよ？　ミケコに対する挑発か？！

・・・っつ～か、普通に普段着なんだろ～な。

常にナチュラルなB型と、常に全力で生きるバイタリティー溢れるO型。

そんな対照的な2人の血液型による人間性が、両者の服装、外見からも見てとれる。

大橋が試合開始を告げてから数十秒、ユイとミケコは間をおいて、お互いの出方を探っている。

その間、ユイはしっかりミケコの動きを見据えている。

探り合いに痺(しび)れを切らし、先に攻撃を仕掛けたのはミケコだった。

不用意に向かい合った状態で蹴りを放つミケコ。

挑発か？　威嚇(いかく)のつもりか？

特攻服の重みのせいか、だいぶスローな蹴りだ。

見下しすぎ！

それがド素人相手なら見事にハイキックが決まるのかもしれないが、ユイには通用しねぇ～ぞ？！

案の定、ガッシリとミケコのハイキックを掴んだユイは、そのまま鮮やかに当て身投げへと持っていった。

見事なほど高速で綺麗な円を描き、宙を舞うミケコは、一回転してリングに叩き落された。

その際、完璧にミケコを掴み、しっかりと受け身をとらせている。

絶妙のタイミングでブリリアントな返し技を披露したユイ。

あの時の上木戦と同じ光景だ。

敵を倒すというより懲(こ)らしめると表現するのが相応(ふさわ)しい美技。

これが、人を見下し威張り散らし、仲間や手下やバックに頼りきって、のぼせ上がった喧嘩をしてきた者と、コツコツと努力を積み重ね、黙々と鍛錬を続けてきた者との差だ!!

「ウオオオオオオオオオオ」

会場は一気にどよめきが起こった。

傍観者、第三者、ネットワールドの名無しみてぇ〜なヤツらこそ、ドキッとするくらい正直で、ちゃっかり真実を見抜いてたりするモンだ。

ホンモノとニセモノの違いは、ニュートラルな立場だからこそ良く見える。

現にこいつら、野牛も含め、バカ正直にユイを高く評価してやがる。

「ドタドタドタドタ」

ストンピングの嵐に、オレの口元も少し歪む。

会場の歓喜の声に合わせるように、オッキーは飛び跳ねそうなくらいノリノリだ。

大差を見せつけ、沸きに沸くハイテンションな会場やリングサイドのセコンド陣とは裏腹に、タオルを握り締めた朝露さんは、真剣な眼差しを変える事無く、しっかりとリング上を見つめている。

もちろんオレの隣の竜崎と宮さんも、リング上を黙然（もくぜん）と見守り、会場の熱狂的興奮に動じる事はない。

その時、左なな め向かいの吉岡勢の中に、上木を発見した。

メイドカフェにいた、吉岡の女2人も一緒だ。

上木たちは、心配そうにリング上のミケコを見つめている。

倒れたミケコは、ユイのオーバーニーのように、目を白黒させて驚いている。

激高（げっこう）するかと思いきや、弱々しい表情を見せるミケコ。

あまりに突然だったので、ビックリしたのか？　それともあまりの

力の差を見せつけられ、恐怖を感じているのか？　どっちにしろ、ミケコが今まで戦ったヤツの中には、ユイのようなヤツがいなかったのだろう。

リング下のミケコのセコンドの４人は、ミケコが倒れた瞬間から大橋に何やら文句をつけていたが、話し合いでは折り合いがつかず、とうとうロープを跨(また)いでリングの中に入ってきた。

それには会場のボルテージが一気に上昇。

真夏の会場は、灼熱の熱気に包まれた。

次々と特攻服のセコンド陣がリングに乱入し、審判の大橋に食って掛かった。

さらにユイにも詰め寄るミケコの手下たち。

その瞬間、とんでもない事が起きた！

あ、朝露さんが・・・・・！！

第１５１話　意地っ張りなユイ

な、何と～～～、あ、朝露さんがリングに上がった～～～！！

ウチらの後ろの武蔵勢は、割れんばかりの大歓声だ。

朝露さんの後を追うように、セコンドについていた１年の女子たちも、次々とリングに上がる。

会場は大声援、リング上は大騒乱だ。

朝露さんは、ピンクの女と揉めている。

大橋一人の力では、この騒乱は止められそうにない。

今にもセコンド同士の乱闘が起こりそうだ。

このままじゃ、会場の客同士の乱闘にまで発展しかねないぞ。

現にリングには、物も投げられ出した。

と、その時、右斜め向かいのＫＨＪの主催者である、例のグラサンのボスが、側近に何やら指示を出しているのが視界に入った。

直後、側近のスーツの男が、もう１人のホストと思われる男を引き

連れて、リングのエプロンサイドに駆け上がった。

彼らのコワモテのオーラにビビッたのか、ミケコの手下たちはパラパラとリング下に戻っていった。

それを見て、朝露さんたちも身を引いた。

大騒ぎだった会場が一瞬静まり返ったが、スーツの男たちが席に戻ると、またさっきまでの空気を取り戻した。

ミケコは態勢を整え直し、大橋のファイティングポーズの要求に対し、こんなモンでくたばるもんかってなカンジで、眉間にシワを寄せて、両腕の握りこぶしを胸元まで上げる。

大橋が手を縦に振り、試合が再開された。

ユイは相変わらず冷静だ。

リング上でセコンド同士が入り乱れて大騒乱になったにもかかわらず、終始とぼけた表情で、我関せずのスタイルを貫いた。

片やミケコは、試合前のナメ腐った表情から一転、真顔で余裕のない表情だ。

O型がここまでの状況に陥った要因は一つ、やはり最初に軽侮（けいぶ）しすぎたんだ。

いざ、自分の思い描いていた展開ではなく、先が読めない展開になった事により、冷静さを失うどころか、取り乱してしまう結果となったのだ。

長山もそうだったが、O型は自分の範疇を越えると、一気に怯む傾向が強いようだ。

俗にネガティブと言われるA型なんかは、O型とは対照的だ。

常に最悪の状況を想定するA型は、最初は感情の起伏が激しいが、追い詰められるほど冷静に、頑固になっていく。

AB型の感情の起伏は終始、大きく乱れ、誰にも予想不可能だ。

ただ、そんな感情すら己でコントロールしてしまうABは、オレが一番敵に回したくない相手。

表情や外見でABの心を読むのは超困難なのだ。

そんな中、B型は終始、冷静さを保つ。

挑発されたり、馬鹿にされればされるほど、一時的にムキにはなるが、徐々にそんな自分にすら白けるのがB型。

オレ的に見ると、最初からミケコはユイの冷静さに拍車をかけ、墓穴を掘っていたように見える。

喧嘩は冷静さを欠いたら負ける。

ミケコは高慢で優越意識が元々強そうだし、極端に絶望に陥ったのが、意気消沈の原因と思われる。

そんなミケコは、慎重にユイとの間合いを詰め始めた。

リング中央でデンと構えるユイの周りを、ウロウロとうろつく蝿（はえ）のように、グルグルと回るミケコ。

ユイの隙（すき）を見付けたのか、チャンスと見たのか、オレから見る分に、またしても不用意な行動に出たミケコ。

今度は右ストレートだ。

決して遅くはないパンチなのだが、あまりにも策のない攻撃だ。

オレの予想通り、ユイはいとも簡単にパンチを払いのけると、すぐさま無警戒なミケコの隙だらけな左腕を掴み、クルリと後ろに回り込んだ。

そして、掴んだ腕を捻（ひね）りながら締め上げる。

ハンターたちが襲ってきた時見せた、ユイの護身術だ。

会場は、またしても激しいストンピングと歓呼の声が飛び交う。

ユイの返し技が炸裂したと同時に、またもやミケコの手下たちがリング上になだれ込む。

勢い良くリングに駆け込み、ユイにアタックしてミケコを救出するセコンド陣。

すぐに朝露さんたちもリングに駆け上がり、リング上はさっきと同じく大騒乱だ。

会場は沸きまくった。

「キリがないっスね」

竜崎が溜息交じりでぼやいた。

先ほどのように、またしてもスーツの男がリングのエプロンサイドに駆け上がり、大橋と何やら話をしている。

ミケコの手下たちが、そんな2人に割って入り、スーツの男に何やら相談のようなカタチで話し掛けている。

「オッキー！」

オレは状況を知りたく、とりあえず現場に一番近いオッキーを呼んだ。

「オッキー、リング上でみんな揉めてるけど、何がど～したの？」

「さあ・・・」

そんなに間近にいるのに知らねぇ～のかよっ！！

その時、柴がオレたちのもとへやって来た。

「ユイさんの返し技に対してのクレームですよ。変な技を使って卑怯だ、反則だ、正々堂々とやれ・・・だ、そうです」

正々堂々とやれだと？　どっちがだ！

リング上でミケコの手下たちに相談されたスーツの男は、呆れ顔でリングを下り、ＫＨＪのボスに耳打ちするが、ボスは首を横に振る。

主催者側にユイの返し技のクレームを付けたが、聞き入ってもらえなかったってワケか？　当然だよな。

それにしてもミケコ側、随分取り乱してるぞ?！　ま、ミケコらが戦争の引き金な以上、ヘタに負けられないし、沢山の学校の生徒に見られてる以上、無様な姿は見せられねぇ～もんな。

リング上では、大橋とユイが何やら話をしている。

やがて騒乱も落ち着き、セコンド陣が次々とリング下に戻ってきた。

どうやら話し合い?が終わったようだ。

朝露さんからリング上の情報を得た柴が、オレたちのもとへ寄る。

「どうやらユイさんが、無謀（むぼう）な条件を呑（の）んだそうです」

はあ？　無謀な条件？！

「どんな」

「返し技禁止だそうです」

第１５２話　ポニーテール守株（しゅしゅ）

返し技禁止だとぉ～～～?!

ど～すんだよ、ユイ!

基本的に己(おのれ)からの攻撃はなく、敵の攻撃を利用、すなわち力の反動を上手く使い攻撃するという、いわゆる自爆を誘うのが神野流古武術の真髄(しんずい)だろ～～～?!

それを禁止されたら、目隠しして東大の受験に挑めって言われてるよ～なモンだ!!

いくら何でも、そこまで乱暴な条件呑むか～、普通!!

これだからB型は、ホント、ドンキーホーテ的で向こうみずで命知らずで・・・・・。

リング上ではミケコがオープンフィンガーグローブを外し、リング下に投げ捨てた。

基本的にグローブ着用は義務だが、外す事も可能。

しかし、それはパンチを繰り出す事が出来ないという事を意味する。

それを見たユイも、朝露さんを呼びつけ、グローブを外してもらっている。

マ、マネすんの？　それ外したら、パンチ打てないよ？　何考えてんだ～、ユイは！！

ミケコはリング下のセコンド陣にアドバイスをもらっている。

その間グローブを外したユイは、髪をポニーテールに結い上げた。

朝露さんに結った髪のバランス、角度などを微調整してもらっている。

余裕しか感じないのは、オレの気のせいか？

一方、ミケコは手下の一人に張り手をさせ、自ら気合いを入れ直した。

この図式、アレじゃね？　ガチユルじゃね？

お互いもう一度向かい合い、またしても大橋の合図により、中断していた試合が再開された。

会場は大歓声の渦。

先に攻撃を仕掛けたのは、またしてもミケコだ。

大きく振りかざした右手を、ユイの顔面めがけて放った。

「パチーーーーーーン」

大きな音で、一瞬で会場は音を失った。

いくらでも避けれるはずのミケコの大振りの平手打ちを、ユイは正面から受けた。

な、なぜ避けない？　完全に避けれたはずだぞ、ユイ！！

次の瞬間、「パッチーーーーーーン」、またまた大きな音で会場は、さらなる静けさに包まれる。

今度はユイの強烈な張り手が、ミケコの頬を強打した。

左足を少し後退させたものの、踏ん張るミケコは、歯を食いしばってユイを睨んだ。

「パチーーーーーーン」

ミケコのお返しのビンタで、今度はユイの足が少しふらつく。

「パッチーーーーーーーーーン」

ユイの反撃で、ミケコがよろめいた。

リング上の異様な光景に、会場は凍りついたように静寂に包まれていたが、次第に声援が増していく。

「ユイー」、「ミケコ～」、「ユイ～」、「ミケコー」

２人の名前を叫ぶ声が、いくつか会場内に響いた。

リング上からは、平手打ちによる強烈な音。

徐々に会場は、リング上の打ち合いの音を消してしまうほどの大歓声に包まれた。

お互いに１０発ほど張り手を出した頃、両手を使う打ち合いになり、会場は益々ヒートアップした。

「ドタドタドタドタ」

ストンピングの嵐だ。

朝露さんをはじめ、セコンド陣のエール、野牛側のセコンド陣も、壮絶な２人のシバキ合いに声を張り上げる。

左斜め向かいの吉岡勢も、上木も、大きな声で叫んでいる。

感情をむき出したミケコは、ユイの髪の毛を掴んで、片側固定式ビンタを放った。

そのお返しとばかりに、ユイはサンドイッチビンタで反撃だ。

ちなみにサンドイッチビンタとは、両手で両側の頬をはさむように叩く荒業(あらわざ)で、たまにリッキーが体罰として使うビンタだ。

両頬を手で挟まれる様が恥ずかしく、サンドイッチビンタは女子の間で恐れられてる羞恥罰(しゅうち)だ。

そんな屈辱的なビンタを喰らったミケコは、今度はユイの頬をつねりながらビンタを放った。

さらなる屈辱的ビンタの応酬は過激さを増すばかりだ。

会場は沸き上がる一方だが、オレは痛々しくて見てられない。

そんな中、さっきのサンドイッチビンタで返すユイ。

気に入ったのか、それ？

2度目のサンドイッチビンタに激怒したミケコが、ついに暴挙に出た。

グローブなしのパンチは反則なのだが、激怒したミケコは何をするか分からない。

オレが恐れていた事が起こった。

第１５３話　口づけ

とうとうミケコがコブシを握った。

くるぞ、パンチがくるぞ、ユイ！

やぶれかぶれのパンチがくるぞ！！

今、パンチを喰らったら、一発アウトだ！

会場からは、悲鳴にも似た声も上がる。

朝露さんは、覚悟したように目をつむり、いつでも試合を止めれるようにタオルを投げ入れられる態勢をとった。

・・・今の朝露さん、辛いだろうな。

でも、それも勇気だ。

負けを認めるのも、立派な勇気だ。

ユイの血を見るくらいなら、オレが先頭きってこの試合を止めてやるよ、ちっきしょ～！

ミケコは弓を引くように、思い切り振りかぶる。

ナックルアローを狙うミケコに、ユイの眼光が光った・・・・・。

ミケコから視線を外す事のなかったユイは、ミケコの弓引きストレートを弾いてビンタを放った。

会場は、地割れが走るほどの大歓声に満ちた。

間髪入れず、ミケコは蹴りを放つが、それもユイに弾かれ平手打ちを喰らう。

「うおーーーーっ」

大声で叫んだミケコは、力いっぱい張り手を放つと、それを歯を食いしばってユイが受けた。

平手打ちだけは受け止め、それ以外の攻撃を弾くユイ。

強情なB型・・・、頑固な意地っ張りめ。

・・・ったく、何たる心意気だ。

だが、そんな肉体を駆使した消耗戦は長くは続かない。

あと数発で決着はつく。

どっちが意地を見せるか、紙一重の差で決まるはずだ・・・。

ミケコが右手でユイの左頬を叩けば、ユイが右手でミケコの左頬を叩き、ミケコが左手でユイの右頬を叩けば、今度はユイが左手でミケコの右頬を叩く。

交互に打ち合う両者は、すでに立っているのが限界なほど、腰にきていた。

そんな2人の全てを込めた一発一発も、あと残りわずかで勝負は決まる。

会場は止む事がない大歓声だ。

これほどの壮絶な打ち合いを、一体誰が想像しただろうか、誰もが興奮を抑えきれない。

『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』の裏メイン、白鳥ユイＶＳ日丸ミケコの頂上決戦も、ついにクライマックスを迎えた。

全身の力を右手に集めるかの如く、小刻みに腕を震わせるミケコが、真っ赤な血だらけの口を大きく開き、渾身の力を込めて叫ぶ。

「ユイーーーーーッ！！」

その叫び声と共に、迫真に満ちた激烈な張り手が炸裂した。

力の限りを尽くしたミケコの会心の一撃を、両足で踏ん張り、耐え抜いたユイ。

「ミケコーーーーーッ!!」

ユイが叫んだ。

その瞬間、ユイのポニーテールが大きく揺れた。

ユイの極限の集中力で放たれた強烈な張り手がミケコをとらえる。

会場の大歓声が、一瞬にして無音と化した。

勢いで吹き飛んだミケコは、うつ伏せに倒れ落ちる。

マットに接吻(せっぷん)をしたミケコは、ピクリとも動かない・・・・・・・・・・。

会場は静寂に包まれた。

ミケコの手下たちが心配そうに固唾を呑む中、大橋がミケコの元に駆け寄り、片膝(かたひざ)をついて声を掛ける。

マットにうつ伏せなまま動けないでいるミケコが何やら大橋の耳に呟(つぶや)く。

大きく頷いた大橋は立ち上がると、会場全体に顔を向け、両手を大きく何度かクロスさせ、試合終了の合図をした。

水を打ったように静まり返っていた場内が、一斉に沸き上がった。

誰も罵声（ばせい）を浴びせる者はいない。

会場全体が死力を尽くして闘い抜いた両者を称えるように、惜しみない声援と拍手を送った。

リングに上がった両者セコンド陣は、お互いにユイとミケコの動向を見守った。

片膝をつき、マットを悔しそうに見つめるミケコ。

一方、氷水で冷やしたタオルを真っ赤な頬に当て、朝露さんに口の中の切れた箇所などを見てもらうユイ。

手下たちの差し伸べた手を払いのけ、自力で立ち上がったミケコに、会場からは大ミケココールだ。

そんな中、ミケコはユイの元にゆっくりと近づく。

朝露さんをはじめ、武蔵のセコンド陣は、ミケコを警戒してユイの前に立ちふさがったが、そんな防護壁を払いのけ、ユイはミケコと向かい合った。

全力を尽くした2人が相対（あいたい）する。

誰もが固唾を呑んで見守る中、ミケコの口から、とんでもない言葉が飛び出した。

第１５４話　第一試合、一先ずシャンシャン

「ありがとな」

ミケコの口から、そんな言葉が飛び出したのだ。

さらに、右手を差し伸べるミケコ。

ユイは間髪入れず、その手を握ると、ミケコの肩を叩いた。

崩れるようにミケコはユイの胸に顔を埋(うず)めた。

どうやら、溢れる涙を隠しているようだ。

だが、いつまでも隠し切れず、肩をヒクつかせるミケコ。

そんなミケコにユイは何か声を掛けている。

微笑(ほほえ)ましい光景に、会場からは惜しみない拍手。

死力を尽くして闘い抜いた2人を、野牛も武蔵も吉岡も、誰もが認めた瞬間だった。

ユイから離れたミケコは、今度は野牛のセコンドたちと抱き合った。

ミケコにつられるように涙を流すミケコの手下たち。

ミケコの手下の４人は、朝露さんたち武蔵のセコンド陣に詰め寄ると、手を差し出した。

朝露さんも、仲間の１年の女子たちも、野牛の握手を拒むどころか、快く握手にこたえる。

野牛とは修復不可能なほど泥沼状態だったのに、今ではピンクの女と朝露さんが抱き合っている。

ピンクの女が朝露さんに耳打ちし、朝露さんも何かを返す。

お互いの清々（すがすが）しい顔を見る限り、今までの遺恨（いこん）に終止符が打たれたのだろう。

やがてミケコたちがリングから下りると、リングの片隅で、ユイに朝露さんが泣きついていた。

今までの緊張が一気に解（ほど）けたのだろう。

良く頑張った、朝露さん。

朝露さんも、立派に戦い抜いたんだ。

ありがとう、朝露さん。

以前は勇気を欲しがってた朝露さんだけど、今日はオレが君から勇

気をもらったよ。

長かった髪をバッサリ切って、この試合に全てを賭けた覚悟、自分に負けない強さ、その誇り高き心、君の勇戦（ゆうせん）、しかと見届けたよ・・・・。

鼻水を垂らしながら泣きじゃくる朝露さんと、依然として惚（とぼ）けた表情でリングから下りてくるユイ。

「ジオン先輩～、わたし～」

朝露さんが、リングから下りてくるなり、すぐにオレたちのもとへ駆けて来た。

「朝露さん、ありがとう。良く頑張った、おめでとう！！」

「先輩～～～～！！」

ひと目もはばからずオレに抱きつく朝露さん。

オイオイ、朝露さ～ん、オレはど～すればい～んだい？　困ったナ～～～ハハハ・・・・・という、嬉しい悲鳴も束の間、朝露さんはすぐに「光一く～～～ん」と、隣の竜崎に泣きついた。

次の瞬間、ユイが目の前に現れた。

冷えたタオルで押さえてるものの、赤く染まった頬が痛々しい。

「ユイ、やったな」

「ウン」

「痛いだろ？」

「当然よ」

「おめでとう」

「アンタも頑張ってね」

「サンキュ・・・」

朝露さんが、「宮先輩～！」と、宮さんに抱きついた頃、ユイと竜崎が向かい合った。

「おめでとうございます。さすがっスね。まさかあんな展開になるとは、予想できなかったっス。全てシナリオ通りっスか？」

「アタシが計算するわけないじゃん。偶然よ、偶然」

「余力は残したんスか？　見る限り余裕勝ちっぽかったっスけど」

「ぶっちゃけ、いっぱいいっぱいヨ、ギリギリ、ホント紙一重。もう一発向こうに入れられてたら、完璧アタシが倒れてたよ」

「ほう」

「頑張ってね、次」

そんなユイの最後の一言には、全ての思いが込められてるような気がした。

重みのあるエールに、黙って頷く竜崎。

「ユイちゃ～ん、お疲れ～、イエ～イ」

ユイは宮さんとハイタッチだ。

そんな喜びに溢れる中、竜崎の目は一点を捉えていた。

瞳に映るのは、リングを挟んで向かい側、真正面のフードの男、リチャード。

明るい会場の雰囲気を、一気に凍りつかせそうな危険なニオイがするのは気のせいか？

ユイＶＳミケコのような、終わり良ければ・・・のムードは期待できそうもない。

第１５５話　竜崎ＶＳリチャード

次なる試合第２試合は、武蔵１年代表、竜崎光一ＶＳ野牛１年代表、リチャード。

この２人の初顔合わせは忘れもしないユイの元バイト先のＢＡＲカシオン。

誤飲してしまったアルコールで記憶をなくした竜崎が、ふざけてテーブルを投げようとした際、撥ねたケチャップがリチャードの服に付着し、彼をキレさせたのが遺恨の始まりだ。

ユイ曰く、この２人が戦争のホントの引き金。

リチャードが竜崎に対し抱く怒りの感情とは裏腹に、竜崎はリチャードの記憶が全くないという、何とも複雑なリチャードの一方的な遺恨マッチだ。

いち早くリングに上がったリチャードは、セコンドの野牛退学組の２人に、被っていたフード付きタオルを投げ渡した。

会場からはどよめきが起こる。

さすがのオレもリチャードの容姿の変化には一驚（いっきょう）を喫（きっ）した。

スキンヘッドだ！

以前はバンダナの上に野球帽を被っていたが、髪の毛があったのは覚えている。

オレは何となく、リチャードのこの試合に賭ける意気込みのようなものを感じた。

今までフードで容姿を隠していたのは、その頭が恥ずかしかったから？　それとも会場が沸くのを見越した目立とう精神？

いや・・・、違う？

それはリチャードの眼光を見た時にハッキリと分かった。

リチャードは、今までわざと自分の視界を遮っていたんだ。

竜崎を見ないようにするために！

竜崎の顔を見てしまうと・・・、キレるから！！

リング上から竜崎を見下ろしたリチャードは、目玉が飛び出すほどに瞼（まぶた）を大きく見開き、目を血走らせて執拗（しつよう）に挑発する。

「ヘイ、ジャポン、カモーン」

リチャードはアフリカ系アメリカ人。

アフリカ系アメリカ人とは、かつてアフリカから奴隷貿易によってアメリカに連れてこられた黒人奴隷の呼称なのだが、今はもう、人種差別など遠い昔の話だ。

むしろ、そんな歴史を背負い込み、自分の先祖を誇るかのように、リチャードは自ら国籍をアピールするかのように挑発を繰り返している。

リチャードが口走る「ジャポン」とは、「ＪＡＰＡＮ」というスペルを「ＪＡＰＯＮ」に置き換えての挑発だと思われるが、それが単なる間違いなのかワザとなのか分からないが、オレは何となく後者なのでは？と思った。

オレは人種差別なんてクソ喰らえだと思ってるから、別にリチャードが日本をどう捉えようが構わないが、黒人って体つきからして、男と女が違うように、体の構造が日本人とは何か異なるような気がする。

ハッキリ言って、強そうなんだ。

だからオレは切に思う。

暴力反対！

強い人は、弱い人をいたわって下さ～～～い！！

・・・なんてオレの心の叫びはコイツらには届かないんだろ～な。

「竜崎、挑発に乗るなヨ」

「もちろんっス」

ま、竜崎は大丈夫だろう。

「そんでは、先陣切ってくるっスわ」

その言葉からは、前回の試合で一区切りされ、こっからが本当の武蔵ＶＳ野牛が始まるんだという、竜崎の思いが感じられた。

リチャードはロープ越しに身を乗り出し、人差し指をクイクイと曲げ、早く上がって来いと言わんばかりに竜崎を挑発する。

竜崎がやれやれ的な顔をするやいなや、「〇△☆♂〆・・・（※あまりに酷い為、省略）」と罵声を浴びせるリチャード。

さらに、「〇ァック、ユー」と中指を立てる始末。

竜崎は相変わらずポーカーフェースでオレと宮さんに、「ほんじゃ、行って来るっス」と言って立ち上がった。

ユイＶＳミケコの感動的な試合後からザワついていた会場が、竜崎がリングに向かった途端、一気にブーイングに変わった。

さらに、調子に乗った野牛勢の中の一人が、竜崎に向けてペットボトルを投げつけた。

これにはオレの後ろの武蔵勢がカンカンである。

会場の客同士も一触即発のムードだ。

物をぶつけられたにもかかわらず、竜崎はシラを切るようにリングへ向かう。

しかし、ロープ越しに身を乗り出すリチャードが邪魔で、竜崎はリングに上がれないでいる。

そんなリチャードに対し、武蔵勢のバッシング。

武蔵と野牛が互いに批判、非難をするため、会場はブーイングの嵐である。

狂ったように挑発を繰り返すリチャードを羽交い絞めにした大橋が、リング中央まで強引に移動させた。

大橋のお陰でやっとリングインする竜崎。

すぐに大橋から離れたリチャードは、竜崎に詰め寄ると、食い入るようにガンをつける。

しかし竜崎は、自分のコーナーまですぐに避難。

柴がすぐに竜崎のもとに駆けつけ、リチャードを牽制（けんせい）。

野牛退学組も、さすがにプッツン状態のリチャードを懸念（けねん）し、リチャードをコーナーに押さえつけた。

リチャードは逆上して目をギラギラとさせ、その場で挑発と罵声を繰り返す。

そ知らぬふりで落ち着き払う竜崎と、目を見開き、狂気に満ちた形相で挑発を繰り返すリチャード。

そんな対照的な2人の戦いに胸を躍らせるかのように、会場は一気にスパーク。

いよいよ、荒れ模様の試合が始まる！

第１５６話　秒殺

柴が竜崎の耳元でアドバイスを送る。

こんな光景は微塵たりとも予想できなかった。

友好的な柴とは対照的に、柴のアプローチを拒み続けてきた竜崎が、今はこうして同じコーナーポストに立っている。

Ｏ型とＡＢ型、たとえ普段はいがみ合ってても、いざ共闘したらベストパートナーになりうる組み合わせだ。

ＡＢ型は基本的に頭脳派なので、的確なアドバイスを送れるはずだし、常に冷静沈着な竜崎は、それを分析し処理できる。

セコンドの柴が頭脳になり、戦う竜崎が身体。

まさに理想的なタッグだ。

一方、リチャードのセコンド陣は野牛退学組の２人。

かつて宮さん襲撃のために武蔵に乗り込んだが、リッキーら生徒指導らに取り押さえられ、宮さんと戦わずして自主退学させられた経緯がある。

オレが思うに、ホントに宮さんに憎悪があっての襲撃なら、退学後にさらに怨恨が増し、とっくに宮さんに復讐をしてそうなんだが、ＢＡＲカシオンでのやり取りを見る限り、実際にあの２人の考量で襲撃が行われたのか、はなはだ疑問だ。

だが、今はもう、あの時とは状況がまるっきり違う。

すっかりリチャードの気迫や野牛の権勢に押され、今やバリバリむき出しの対決姿勢だ。

そんな２人の気炎を逆輸入して、リチャードはますますヒートアップしている。

おそらく必要以上に武蔵の悪口を聞かされ、さらに野牛の狂信思想なんかを吹き込まれ、今の狂気に満ちた形相で挑発を繰り返すリチャードに至るのだろう。

で、なければ服にケチャップを付けられたくらいであそこまでキレはしまい。

しかもクリーニング代まで貰って。

だが、オレの予想ではリチャードはＡ型。

Ａ型ってのは、喧嘩になるとすぐキレる。

最初にキレてキレてキレまくって後から物凄く冷静になるのがＡ型だ。

逆にＯ型は最初は冷静だが、ある一線を越えてキレるともうダメだ。

我を失う。

なので、竜崎には十分注意してもらいたい。

光があれば影があるのが人間。

あそこまで冷静な竜崎がキレたら、おそらく手がつけられなくなる。

リング上で対峙する竜崎とリチャード。

大橋がお互いのチェックを済ませると、会場はほとばしるような熱気に溢れ、大いに沸き立つ。

いよいよ竜崎ＶＳリチャード、待ったなし。

大橋が右手を振り上げ、試合が開始された瞬間、またしてもペットボトルが飛んできて、それが竜崎に当たった。

竜崎が飛んできた方向をチラ見した瞬間、間髪入れずリチャードの回し蹴りが炸裂！

あの時と同じ回し蹴りだ。

リング中央からコーナーポスト周辺まで大きく吹き飛んだ竜崎が、そのまま大の字で倒れた。

高速で飛んできたリチャードは、倒れて無防備な竜崎に馬乗りにな

ると、左右のこぶしを顔面に叩き込んだ。

光速の雨霰（あられ）、顔面パンチの乱れ打ちである。

大橋がすぐに試合を止めた。

リチャードの秒殺？　会場は武蔵側の悲鳴とブーイング、野牛側の喜びの大歓声、真っ二つに割れた。

試合開始前のアクシデントからの先制攻撃・・・・・。

こんなのアリか？！

第157話　中川コンツェルン

竜崎のKO負け?に対して、リングに駆け上がって抗議する柴。

竜崎はすぐに起き上がりピンピンしているが、あっさりとリングから下りた。

「秒殺っスか?　負けちゃいました」

竜崎がオレと宮さんに笑顔で軽く頭を下げた。

マジかよ?　みんな納得いってねぇ~ぞ?!　まぁ、竜崎は最初からこんな大会も乗り気じゃなかったし、勝ち負けなんてど~でもいいんだろうが・・・・・。

となりの宮さんが怒ることもなく平然としているのが非常に不気味だ。

柴だけじゃなく、リチャードも納得がいってないようだ。

あれだけパンチを喰らって全くケロリとしている竜崎を見て、リチャードも黙っていられない。

セコンドの野牛退学組と共に大橋に再戦を要求している。

「再戦だ再戦！」「何やってんだ～！」「あんなモンで納得できるか～！」「再戦やれよ～！！」

会場からも再戦を希望する声が上がる。

困り果てた大橋が、主催者側のＫＨＪ方面を見ると、ボスが冷笑を浮かべながら一言。

「やらせろよ」

口の動きでそう言っているのが分かった。

大橋は大きく頷くと、リング上のセコンド陣を下ろし、竜崎を呼び込んだ。

「え～～～～っ？！　再戦っスかぁ～～～～？」

渋々リングに上がる竜崎。

会場側は大騒ぎ。

武蔵勢は大竜崎コールである。

女子からのエールが主なのだが、入学当時、竜崎とバトルを繰り広げたヤンキーたちからも、今ではすっかり1年のトップと認められ、絶大なる支持を得ている。

さらに学校一モテる男との称号を得ているが、本人は女子に興味を

示さない上に、トップである事も認めず、目立つ事を嫌がるので、そんな姿勢がカリスマ性に拍車をかけてしまい、竜崎が嫌がれば嫌がるほど人気が上昇するという悪循環で、瞬く間に学園内での人気ナンバー1を独走中なのだ。

そんな黄色い声援を受ける竜崎に対し、ヘビのように睨みをきかすリチャード。

スキンヘッドにして気合いを入れた所を見る限り、今回の戦いへの意気込みは大層なものなのだろう。

先ほどのような消化不良試合は決して望まないという気持ちが窺(うかが)える。

今にも試合を終わらせて早々と引き揚(あ)げたい竜崎と、とことんいたぶって逃がすもんかという執念深そうなリチャード。

まさにガチユル対決。

大橋が腕を縦に振り、再戦が始まった。

オレだけではなく、みんな警戒していた物の投げ入れは今回はなかった。

さすがに今度やったら、投げたヤツは会場中の反感を買うだろう。

リング上ではまたしてもリチャードの先制攻撃で始まった。

ＢＡＲカシオンで竜崎を数メートル吹き飛ばし、さっきもまた、リング中央からコーナーポストまで竜崎を吹っ飛ばしたリチャードの回し蹴り。

全く同じ回し蹴りが竜崎に放たれた。

それを両腕をクロスしてガッチリとブロックする竜崎。

先ほど以上に勢いのあるリチャードの回し蹴りがモロに当たったはずだが、微動だにしない竜崎。

・・・へ？　ガードしただけでそんなにも違うの?!

会場もオレと同じ気持ちらしく、一瞬静まり返った後、徐々にザワつき出した。

確かな手応えがあったはずだが、吹き飛ぶどころかその場で音無しの構えの竜崎を見て、リチャードがあっけにとられている。

その隙を突き、竜崎がとっさに反撃に出た。

リチャードを水面蹴りで転ばすと、そのまま足を掴んで膝(ひざ)十字固めにもっていった。

関節技が出たっ!!

「中川ジム」で竜崎が学んだ関節技。

にわか仕込みだったが、さすがに呑み込みが早い竜崎は、実践でこうしてしっかり使用している。

膝十字固めとは、柔道や軍隊などでも用いられる腕ひしぎ十字固めと同じ要領で、足に極(きさ)める関節技で、相手の膝が曲がるはずのない方向に折れ曲がる形になる為、相手のダメージは計り知れない。

竜崎にとってはほんの実験のつもりかもしれないが、喰らってるリチャードは痛みでのた打ち回っている。

そして、ついに・・・！！

第１５８話　ぬるま湯的状況拒否

大きなリアクションでマットを叩くリチャード。

ギブアップだ！！

リチャードのタップ後、大橋はすぐに試合を止め、関節技を解いた。

会場はどよめきから一斉に大歓声に包まれる。

ホッと肩を撫で下ろす竜崎。

柴もすぐにリングに駆け上がって竜崎を称える。

・・・・が、起き上がったリチャードとセコンドの野牛退学組が、またしても大橋に食って掛かっている。

「また再戦要求だよアイツ。自分はギブアップしてないってさ。あんなにオーバーアクションでタップしてたくせにな」

オッキーがオレのそばで愚痴を溢した。

オレたちだけじゃなく、会場中が、リチャードの苦し紛れのいいわけを批判しているようだ。

会場からのリチャードに対する文句や怒号がそれを物語っている。

野牛側からすれば竜崎は敵でしかないが、味方の未練（みれん）がましさを見て、純粋にリチャードを非難していると見える。

先ほどの竜崎の潔（いさぎよ）さを見たので尚更リチャードの往生際の悪さが目立つのかもしれない。

会場の目は、思った以上にシビアだ。

誰の目からもリチャードがギブったのは明らかだが、本人が降参を認めてないならしょ～がない。

試合的には今ので終了しても構わないが、このままじゃ～リチャード側は納得しねぇ～だろ～し、遺恨が深まるだけだ。

さぁ～、ど～する大橋。

大橋はまたしてもＫＨＪ側に指示を仰ぐ。

ＫＨＪのボスは、今度は眉間にシワを寄せ、呆れ顔で一言。

口の動きから「やれ」と言ったのが容易に見て取れた。

竜崎は、やれやれと言いたげな表情で臨戦態勢をとる。

グローブとマウスピースをはめ直しながら首を回し、膝の屈伸の後、

コーナーポストを掴みながらアキレス腱を伸ばす。

本格的に気合いを入れ直した竜崎の目は、しっかりリチャードを捉えている。

竜崎がいよいよやる気になった。

会場はますますヒートアップ。

そんな会場の雰囲気に呑まれる事もなく、竜崎は横にステップを踏んで身体を慣らす。

大橋の合図と共に、2度目の再戦が始まった。

見るからに足を引きずり痛々しいリチャードだが、弱みを見せまいと必死に竜崎にパンチを出してくる。

それを巧(たく)みに避(よ)けながら反撃のパンチを繰り出す竜崎。

「流石(さすが)ね、竜崎」

ユイがリング上を見つめながら席に着いた。

朝露さんをはじめ、ユイについたセコンドたちもリングサイドに戻ってきた。

「もう大丈夫なのか？　顔」

「ウン。別に口の中はそんなに切ってないし、腫れも治まった」

タオルで押さえた頬の下は、まだほんのり赤かったが、致命傷はなかったようだ。

あれだけ壮絶な打ち合いをしたもんで心配したが、無事でなによりだ。

リング上の竜崎は、リチャードの攻撃を全て回避し、的確に反撃に転じている。

「見てジオン。あ～やってさ、所々で横にステップを踏んでリチャードにパンチを出させるでしょ。でも、あれトラップ。フェイントでカウンターを狙ってるのよ竜崎は」

「へ～～～～」

「ホラ、全部しっかり当たってるでしょ。よっぽど度胸がないと、あんなカウンターは出来ないよねぇ～」

なるほど～。

相手のパンチが恐くない、打たれ強さに自信がある竜崎ならではのカウンター攻撃ってワケか。

確かに普通、突進してくる敵にカウンターを狙うことは出来たとしても、自ら接近してカウンターを狙うって、なかなか出来ないよな・

・・・・。

「パカン」

そんな竜崎のカウンター攻撃の乱れ打ちの中、ついに強烈なパンチがリチャードをとらえた。

先ほどの足のダメージも加わり、力なくその場に崩れ落ちるリチャード。

普通なら今の時点でＫＯ勝ちだろうが、大橋はまだ試合を止めない。

オイオイ大橋、気持ちは分かるけど大丈夫か？　今、一瞬、白目(しろめ)向いたぞリチャード。

倒れたリチャードの足を掴むと、竜崎は踵(かかと)を捻(ひね)り上げ、ヒールホールドにもっていった。

ヒールホールドとは、相手の踵を捻って膝を決める為、こらえ過ぎるとじん帯が切れる事もある危険な関節技だ。

リチャードのヤツ、ムリして我慢し過ぎなきゃいいが・・・。

そんなオレの心配をヨソに、リチャードは大絶叫と共にマットをバンバン叩いてタップをした。

大橋がギブアップの確認をとると、リチャードは何度も大きく頷く。

野牛退学組のタオル投入を待たずして、大橋は試合を止めた。

会場は大歓声、竜崎の完全勝利だ！！

・・・と、思われたが、またしてもリチャードが大橋に抗議。

野牛退学組も食って掛かる。

流石にこれに対し竜崎が、リチャード、野牛退学組に文句をつけた。

それに対しキレる野牛退学組。

丸刈りの男が竜崎に掴みかかる。

救出に入った柴はセミロングの男と揉め出し、リング上は乱闘状態。

会場は一気に沸き返る。

「・・・ったく、何やってんのよ、大橋～！！」

そんなユイの文句が聞こえたのか？　大橋はセミロングの男を抱えてマットに叩きつけた。

何て怪力なんだ、大橋・・・。

さらに丸刈りの男をリング下に蹴散らした大橋は、またしてもＫＨＪのボスに指示を仰ぐ。

オマエはＫＨＪのボスの犬か？！

ＫＨＪのボスは「死ぬまでやらせろ」と、耳を穿(ほじ)りながら面倒くさそうに言った。

周りのヤツらも含め、リング上の選手の事などお構いなし、自分らが楽しめればそれで良いといったような雰囲気だ。

そんな光景を見て、宮さんは相変わらず無口で、ただただ状況を見守る。

かくして、またしても再戦、３度目の再戦が始まった。

第１５９話　質実剛健

もう、完全に結果は見えている。

あのヨロヨロのリチャードを見る限り、竜崎に勝つのは不可能だ。

会場の誰もが感じているはずだ。

最初から竜崎とリチャードには、大きな力の差があった事を。

いくらやる気が残っていても、体があれでは・・・・・。

足を引きずり痛々しいリチャードに対し竜崎は、とどめとばかりにローリングソバットを放った。

それは、超絶技巧（ちょうぜつぎこう）による、見る者を魅了（みりょう）するほどの後ろ回し蹴りだった。

見事なまでの速度と回転で放たれたソバットで、リチャードは大きく吹き飛んだ。

今までのリチャードの回し蹴りに対するお返しとばかりの、説得力のある決めワザに、会場は竜崎の完全勝利を称えるような拍手と歓声を惜しみなく送った。

ユイＶＳミケコの時もそうだったが、会場の野牛勢も、自分の学校に偏った応援ではなく、中立な立場で試合を観ている。

野牛の長須もミケコもトップに君臨しているものの、絶対的な統率力はないようだ。

会場の野牛勢も、ネットワールドやテレビの世界を観賞するような感覚で、自分らはただの無関係な非当事者だとしか思ってないんだろうな。

それ故に、純粋に竜崎の堅実な姿勢を評価してくれてるんだと思う。

しばらくダウンしていたリチャードだったが、ゆっくり上半身を上げると、リチャードは「Ｎｅｖｅｒ　Ｇｉｖｅ　Ｕｐ!!」と叫んだ。

執念だ。

気持ちは分かるが、諦めろ、リチャード。

結果はもう見えている。

誰の目からも明らかだ!

しつこくギブアップを認めないリチャードに竜崎は、立てるなら立ってこい、相手になってやると言わんばかりに臨戦態勢だ。

さらに、指をクイクイと曲げ、まるで今までのリチャードの再三にわたる挑発の返礼とばかりに、クールに挑発した。

会場の目からも竜崎は、涼気で、もの堅いイメージがあったのだろう。

アルカイックな微笑みを浮かべる竜崎に、会場は大いに沸いた。

さらに、ここまでくると滑稽なほど一本気に見えるリチャードに対しても、会場からは歓呼の声が上がった。

いつしかリチャードコールも沸き上がる。

しかし、座り込んだまま、一向に起き上がる気配のないリチャード。

セコンドの野牛退学組も、「立て、リチャード」と叫び、大橋も、「どうしたリチャード、立て！　戦う気があるなら起き上がって、ここに立て！！」と指示を出すが、足を伸ばして座り込むリチャードは、その場から動く気配がない。

「どうした？　立て、リチャード」というセコンド陣に対しリチャードは、「動けないんだよ！！！」と、強弁。

ギブアップは拒否、でも、動けない。

・・・こ、子供か？　ただのわがままなガキじゃねぇ～か！

お母さ～ん、子供を甘やかしちゃダメだよ～。

ダメなものはダメだろ。

竜崎は何を決心したのか、柴にタオル投入の指示を出した。

「しつこいから自分が身を引くんじゃない？　面倒だから、それが早いかもね」

ユイも呆れたご様子だ。

しょ～がないな。

こっちが負けてやるか、リチャードの執念に・・・。

中学時代、ジム仲間の同級生が、ＫＨＪの大会でリチャードと戦って敗れた。

完敗を喫したかつての仲間の弔い合戦とも言うべき、柴のセコンドとしての戦い。

柴的にも、かつての強敵が落ちる所まで落ち、あれほどの憐れな姿を見せ付けられては、もう、満足度も１２０％を越えたはずだ。

柴がタオルを投げようとした瞬間、それを見ていた野牛退学組が、

柴より先にタオルをリング上に投げ入れた。

会場は一瞬、静寂に包まれ、時が止まった。

目を丸くした大橋が、念のために野牛退学組に確認をとると、丸刈りの男は手をクロスさせた。

セミロングの男も下向き加減で首を横に振る。

大橋が、今度こそ終了だと言わんばかりに、大きく両手をクロスさせ、試合終了を告げる。

会場は一気に大歓声とストンピングの嵐に包まれた。

無様な勝利を飾るより、素直な負けを認めたリチャード側。

今度こそ竜崎の完全勝利だ!!

何とかプライドだけは保ち、自力で立ち上がったリチャードは、よろめきながらセコンド陣に、「自分はギブアップしていない!」とアピールしている。

A型リチャードの極端な意地っ張りを見せ付けた試合だった。

O型特有の、キレるにあたる一線を、越える事無く冷静さを保った竜崎の圧勝。

会場からは、いつまでも意地を張り続けるリチャードに対し、労いの言葉も飛んだ。

「よくやった、リチャード」「オマエ、負けてねぇ～から安心しろって」「リチャード、もっと堂々としろよ。オマエ負けてねぇ～よ」

そんな言葉で落ち着きを取り戻したリチャードは、足元をヒョコつかせながら竜崎のもとに近寄ると、「リターンマッチだ、リューザキ」などと威勢を張った。

そんなリチャードの言葉を完全無視した竜崎は、リチャードの手をつかむと軽く肩を叩いた。

一見すると試合を終えて握手し、お互いの健闘を称え合う、微笑ましい光景に見えなくもないが、オレの目は欺けない。

竜崎が、めんどくさいリチャードとの遺恨に、一方的にケリをつけた瞬間だ。

竜崎は、尚もリチャードに再戦を要求されていたようだが、それを無視して両手を上げ、応援してくれた武蔵勢に勝利をアピールした。

さらに、リチャードを称えるような仕草で、武蔵勢に礼賛を所望。

武蔵側の、リチャードに対する称賛の声や拍手喝采に押され、リチャードも諦めざるを得ない。

流石、竜崎！　締め括りが上手い。

リチャードは退学組に肩を抱かれ、慰められながらリングを下りた。

一時は半永久的にこの2人の遺恨は消えないかと思われたが、1度も挑発に乗る事なく最後まで冷静さを貫いた竜崎によって完全に遺恨は絶たれ、危険なムードに包まれていた第2試合も無事終了した。

長須のセコンドに付いている仲村シンが、好奇の目で竜崎を見送る姿が印象的だった。

・・・・次は、いよいよ・・・、オレの出番か。

覚悟はしてたけど、思ってた以上に来るな～、重圧。

吐き気すら通り越す緊張もそうだけど、後ろの武蔵勢から感じる期待と、野牛勢から感じる敵意はかなり重い。

先陣切ってリングに上がったユイもそうだけど、物をぶつけられたりしても平然とリングに上がった竜崎なんかも、尊敬に値するぞコレは。

みんな度胸あるよな、マジで。

この瞬間、いつかは来るって思ってたけど、想像以上に早かったな。

願いが叶うなら、せめて昨夜くらいまで時間を戻して欲しい。

もう少しだけ、のんびりさせて・・・・・。

第１６０話　ジオンＶＳ芒

会場全体を見渡すと、まるで観客全員がオレを見て笑ってるように見える。

どうせオマエら、オレが負けるって思ってんだろ？

武蔵が２勝しちゃってるから、後がない野牛がこっから押し返してくるって思ってんだろ？

霊能者の誠さんも言ってたしな、オレのＴＫＯ、テクニカルノックアウトだって・・・・。

「ジオンさん、落ち着いて下さいね」と、竜崎が一言。

嘘だろ？　オレはこんなに落ち着いてるゾ？　冷静だゾ！

「ジオン、大丈夫よ」と、ユイが言う。

大丈夫？　負けても大丈夫って意味か？　オレの後ろには宮さんが控えてるし、すでに２勝してるから大丈夫だって意味か？！

・・・・って、んなワケねぇ～よな。

ヤッベ～～～、オレ、ネガティブになってるよ、マジで。

超ポジティブはどこ行った?!

前向き、プラス思考はオレの専売特許・・・。

冷静冷静冷静、落ち着いてる落ち着いてる落ち着いてる、オレは強い強い強い、超ラッキー超ラッキー超超ラッキー、超超超ラッキー超ラッキー、余裕余裕余裕、超余裕、超超余裕、超余裕・・・・・。

未来は決められちゃいねぇーっ!

オレが創るんだぁーっ!!

うっしゃ～～～～!!!

おしっ、ポジティブ、冷静、余裕。

もう、大丈夫。

「ほんじゃ～、行ってくるゼ」

気楽にね。

宮さんの方を見ると、宮さんは無言で小さく頷(うなず)いた。

席を立つと、会場からは物凄いブーイング。

・・・いや、待て、後ろからはオレを支援するエールもちゃんと聞こえる。

そうそう、オレの味方はちゃんといる、大丈夫だ。

ケセラセラ。

リングサイドのセコンド陣がオレに声を掛けてくる。

朝露さん、その友達、柴、織川、そしてオッキー。

リングに上がるとオッキーも後ろからついて来る。

さっきから何かブツブツ言ってるが、何を言ってるのかサッパリだ。

目の前には大橋、そして、芒(すすき)みちる。

芒サイドには、リング下にセコンドとして、あのタカノブがいる。

『武蔵ＶＳ野牛　全面戦争』、いくらセコンドに指定はないと言っても、武蔵のクセに野牛につくか、フツ～。

それより1ヶ月前まで武蔵にいた芒を、長須はよくもまぁ～、野牛の2年代表にしたモンだ。

「ジオン君、あらためて君の勇気を称えるよ。たった4人でこんな大国、野牛に挑むなんてな。もうすでに君らはその点で野牛に勝(まさ)ってる。勝ち負けは抜きにして、オレは君らを支持するよ」

審判の大橋は、オレに慰労(いろう)の言葉を吐いた。

勝ち負けは抜きにして何だと、大橋。

オレが負けるって思ってんのか？

・・・そうだよな、さっきも思ったけど、この会場の全員がオレが負けるって思ってんだろ、どうせ。

ウチがすでに2勝してるし、野牛には後がねぇ～モンな。

長須も腸煮(はらわた)えくり返ってるだろうし。

ど～いうつもりで長須はこの芒を副将として出したのかは分かんねぇ～が、芒の喧嘩の強さを見込んで出したのは間違いねぇ～だろ～な。

それに大橋、何だって？　たった4人で、だと？　オレたちはなぁ～、いつも1人で戦って生きてんだよ。

ユイも、竜崎も、宮さんも！

オレたちは傍から見たら、いつもつるんでるように見えるかもしんねぇ～けど、オレら４人はそれぞれ自立してんだよ、ちゃんと。

お互いに信頼してっけど、頼りきってねぇ～し、それに甘えちゃいねぇ～んだよ。

苦しい時は、仲間だから助けてくれる・・・な～んて気持ちは更々ねぇ～し。

現にオレが苦しんでても、アイツら、そ～簡単に助けちゃくれねぇ～よ。

腕組んで黙って見守るだけだろ～な、きっと。

コイツら野牛とか、世界の傍観者共みてぇ～に、いつも徒党を組んで集団にならねぇ～と何も出来ねぇ～連中と、オレたち４人を一緒にすんな！

「ジオン、ヘッドギア、いらねぇ～よな？」

オッキー、オレがそいつを装着しねぇ～って事くらい、言わなくても通じねぇ～か？　いちいち確認すんじゃねぇ～よ。

オープンフィンガーグローブをはめ終えると、オレはマウスピースを着けた。

芒は絶対オレの顔面にパンチを打ってくる。

歯は折りたくねぇ～。

うえっ、不味(まず)いな、コレ、息苦しいし、ゴム臭ぇ～。

・・・けど、我慢するしかねぇ～よな。

一方、芒もマウスピースをはめ、オレを見て不敵に笑った。

ワオ、不気味な顔だ！

オレも牽制(けんせい)のつもりで笑ってみたが、丁度リング下のタカノブと会話をしてて、芒がこっちを見てない時だった。

ちょっと恥ずかしくなって後ろを見た時、武蔵勢の真ん中ほどの列を歩く、7人組を見つけた。

そいつらは1年に席を譲ってもらっている。

頭なんぞをペコペコ下げているが、やってる行為はタダの割り込みだろ、長山義廣(よしひろ)とその子分！！

第１６１話　Ｏ型は最初は冷静だが、ある一線を越えるともうダメ

てめぇ～らは、何しに来た、このヤロ～！

さてはオレを笑いに来たな？　オレの無様な姿を見て、また笑いに来たんだろ～？！

ちきしょ～～～め！！

そんな長山たちに挨拶をする柴。

そうか、アイツら仲間だったんだよな。

オレとした事が、今までそんな事忘れて、敵の味方と仲良くお喋りしちまってたゼ。

柴・・・、アイツにも気を付けねぇ～とな。

ヘタな事言って、それが長山の耳にでも入ったら、またメンドクセ～事になりかねない。

オレは長山を見て上木を思い出し、吉岡勢の席に視線を移した。

隣の女と楽しそうに会話をしている上木。

フン、どうせオレを見て笑うんだろ？　オメ～も。

その時、上木と目が合ってしまった。

目を輝かせ、笑顔で興味深そうにオレを見つめる上木。

チキショ～、いいよな、観客は。

オレはすぐに向き直った。

吉岡勢の真向かいの最前列は、禍々（まがまが）しいオーラに包まれている。

ＫＨＪ、この大会の主催者たちだ。

スーツ姿のイカツイ男たちの真ん中で、一番目立つホストが、ボスと言われる男だ。

イスに腰掛け、前屈（かが）みでオレの事を直視している。

サングラス越しだが、鋭い眼光がオレを捉えているのが容易に分かる。

ヤッベ～よ、オレの事、見てるよアイツ、ヤッベ～よマジで。

オレはもう、そっちを見ないように心に決めた。

「ジオン、目が泳いでるぞ。もっとリラックスしろ。深呼吸だ。鼻から大きく息を吸って・・・」

目が泳いでるだとぉ～？　コイツにだけは言われたくなかった・・・。

そうか、会場全体の様子を気にしてるから、周りからはそう見えんのか・・・。

サンキュ～、オッキー。

何か大事なモンを見落としてたよ。

そうだよな、オレの相手は芒一人だ。

オレには芒以外、見てる余裕はねぇ～モンな。

大橋のチェックを終えた芒は、オレに挑発してくるでもなく、リング下のタカノブと会話をしている。

「ジオン君、オレはぶっちゃけ君らの加勢は出来ないけど、心の中で応援はしている。極力試合は止めたくないが、君の命にかかわるような危険を感じたら、すぐに止めるからな」

「分かってますよ。大橋さんは自分のレフェリングに集中して下さい。・・・・っつ～より、アイツ見てて下さいよ。アイツ、何か

反則しそ～だし」

「準備はいいか？　お互い正々堂々、試合後はノーサイドだ。レディー、ＧＯ！！」

大橋が腕を縦に振り、ついにオレたちの試合が始まった。

試合っつ～か、喧嘩な、喧嘩。

会場は割れんばかりの大歓声。

これがリングの上の興奮か・・・。

否(いや)が応にも全力、いや、１２０％以上の力が沸いてくるな、こりゃ～。

オレは試しに武蔵勢に向かってコブシをかざしてみた。

「ワァァァァァァァァァァァァ」

大歓声だ。

こ、これは、スゲェ～！！

・・・と、その時、無表情でオレを見つめるユイ、竜崎、宮さんの３人が視界に入った。

と、取り乱す所だったゼ。

アブネ～、リングには魔物が棲んでるゾ！！

こんな調子じゃ、すぐに意識が飛んじまう。

れいせ・・・・・！　・・・・・・・・・っ！！

あまりにもオレは無用心だった。

芒にスキを見せてしまったオレは、簡単につかまってしまった。

首に腕を回され、しっかりロックされている。

芒の全体重をかけられ、オレの視界は床だけになった。

こ、このままだと、ヘッドロック１発であの世行きだ・・・。

時折芒の腕が喉元に食い込み、窒息しそうになる。

芒はオレの意識が落ちるのを狙っているのだろうが、そうは行くか！！

・・・つっても、抜け出す方法が分からねぇ～。

「ジオン、動け、動けーーー！！」

そんなオッキーの叫び声が聞こえてくるが、動けねぇ～んだよ、ちっとも。

巻きついた蛇のように、芒の腕はガッチリとオレの首を締め付け離さない。

このままだとオレの体力が削られる。

いや、その前に大橋に試合を止められる。

もしオレが負けて再戦の要求をしたら、オレはリチャードのように要求を聞いてもらえるのだろ～か？

・・・っつ～か、アイツの失態を見てしまった以上、そんな無様な姿、大勢に見せたくねぇ～な。

だったら堂々とリングを下りて・・・、ユイたちの顔、まともに見れねぇ～よ。

くそぉ～、どっちにしても何とかしねぇ～と、早急に、だ！！

ふと、オレは芒の腰に手を回してみた。

こ、この体勢、このままオレが後ろに反り返ったら、バックドロップじゃね？　プロレス技のバックドロップってヤツじゃね？　チャンスじゃね？

「うおおおおおおーっ」

オレは渾身の力で芒を持ち上げ、後ろにぶっこ抜いた。

火事場のクソ力～～～っ！！

ズドォーーーン

見事、芒にバックドロップが決まった。

やれば出来る、どんなモンだ！

これで少しは時間が稼げ・・・・・？

も、もう芒、立ってるし！　全然、効いてねぇ～し！！

ニヤリと不気味に笑ったかと思いきや、芒はマウスピースを外した。

「久しぶりだなぁ～、亀鶴～。オレだよ、芒みちるだよ」

芒はなぜか自己紹介をしている。

「はんがんがお」

・・・「何なんだよ」って言ったつもりだったが、上手く喋れなかった。

芒が耳に手を当てオレをおちょくる。

「アンだって〜？」

B型の芒、ここで言い返しても調子に乗るだけだ。

無視だ、無視。

B型は無視されるのが一番堪えるからな。

「そもそもオメェーが素直にカンパの金よこさねぇ〜からこ〜いう事になるんじゃねぇ〜か。オレだってこんな事、ホントはしたかねぇ〜んだよ」

よく言うゼ。

「あの時は途中で野牛の殴り込み、なんつ〜ジャマが入っちまってな、不本意ながら武蔵クビになっちまったけど、何かウチのオヤジが頼んでくれてよ〜、簡単に転校できちまったってワケだ」

オマエは簡単でも、オマエのオヤジさんは頭下げたんじゃねぇ〜のか？　ドラ息子が。

「転校早々暴れてやったら、番長の長須に気に入られてな。丁度武蔵と揉めてるってんで、二つ返事で協力してやってるってワケだ。長須からオメェーの名前を聞いた時には涙が出たゼ。嬉しくってな」

涙の使い所、間違ってねぇ〜か？　オマエのオヤジさんが野牛に頭下げてくれた事への感謝の涙に使えよ、オレの方には回さなくていい〜からよ。

「芒〜、いつまで遊んでんだ？　そんなザコ、一気にやっちまえ」

タカノブが言った。

ザコ？　雑魚（ざこ）って言った？　今、ザコって言った？

確か以前、芒も言ってたよね、ザコって。

あの時はテルの事をザコって言ってたよね？　コイツらはザコから金巻き上げてんの？　ね？！

弱者から金巻き上げて、プライド巻き上げて、今度は何奪うんだ？！

・・・・っつ〜〜〜〜〜〜〜〜か、テルがザコ？？？？？

だったらオレは何？！

ザコのフンか？　やっぱりウンコか？　金魚の糞（ふん）か？！

ムッカつく！

超ムカつくヤロー共だ！！

その時、会場から野次が飛んだ。

「芒〜、早くやっちめぇ〜」「何やってんだ〜、芒〜！」「殺せ芒〜！！」

芒を急かすような野次が飛び交う。

早く・・・？　何？　コ・ロ・セ・・・・・？　はあ？　殺せ？？

オレはマウスピースを投げ捨てた。

第１６２話　テルとタカノブ

「ジオン何やってんだぁーーー！　落ち着けーーー！！　客にキレるなーーー！！」

オッキーが叫ぶ。

「オレはいたって冷静だ！！」

「嘘だ、ジオン絶対キレてるって！　今、客に何か言おうとしてたろ！！」

「キレてねぇ～って！！」

ちきしょ～オッキーめ、後でぶん殴ってやる。

「ハハハハハ」「アイツ、セコンドと喧嘩してるゾ」「バーカ」

会場からは失笑が聞こえる。

芒は会場とタカノブに急かされ、ますますやる気を失っているようだ。

アマノジャクのＢ型、こうなると意地でも言う事を聞かない。

「あん時は悪かったな～。オレもつい、カッとなっちまってな」

ブロック塀でオレを殴った事か？　心にもねぇ～のに謝ったフリすんじゃねぇ～よ。

「あん時の野牛の２人はさ、今でもオレに根を持ってるよ。今日も応援に来てくんねぇ～し。その点、亀鶴、オマエはいいヤツだな。こ～してまたオレに会いに来てくれたモンな。逃げずによォ。その度胸買うよォ～オレは。ヒャハハハハ」

楽しそうだな、オレに相手にされて、さぞ楽しそうだな。

「芒、もう、かまうな！　早くやっちまえ」

再度タカノブが芒に言った。

「はいはい、そ～いうワケだ。残念だが、そろそろオメェーには死んでもらうわ。オメェーんトコの大将、口うるさくて堪らんからナ。正義感強ぇ～から、この人」

芒は親指でタカノブを指差す。

オメェーんトコの大将？　武蔵の大将が誰だって？　正義感強ぇ～タカノブだって？　アァ？　確かにＡＢ型は正義感強ぇ～だろ～よ。

そっちからしたらオレらが悪に見えるかもな。

だが、ちょっと待て！！

「誰が大将だって？　ウチの大将は総番長、宮大地だぞ、コラ！！」

「アァ～ン？　それは3年だろ？　オレは2年の事、言ったんだよ。オメェーらんトコの大将はタカノブだろ、バカ」

「はあ？　1年の時はテルが大将だ！　2年になってからは・・・・、まだ決まってねぇ～だろ！！」

「バカかオメェーは。1年の最初っからタカノブが大将だろ～が。・・・テルだぁ～？　・・・・んなザコ、大将にした覚えはねえっつ～の」

「・・・・・・」

「なあ、タカノブ～、テルって知ってる？」

「テル？　何だ、それ」

タカノブは首を傾げた。

「あっ、思い出したぞ。アレじゃね？　何か、カンパをスゲェー拒否ってたから、じゃ～オメェーのクラス皆殺しにするぞってオレが言ったら、妙に素直になったヤツ。あまりにカワイソ～だから、タカノブがトップの称号譲ってやるって言った事あったろ」

「あ～、そんな事もあったかもな」

タカノブがぶっきら棒に言った。

「テル！　なんちゃって大将だよ、ヒャハハハハ。ど～～れ、そろそろ、やっか」

芒がマウスピースをはめた。

瞬間、オレの右コブシが芒の顔面を捉えた。

そのままの勢いで、オレは芒が倒れるまで右コブシを振り落とした。

「ウオォォォォォッ！！」

野牛側のコーナーに倒れた芒に馬乗りになったオレは、有りっ丈の力でパンチを放つ。

高速の左右の機関銃に、最初は成す術（すべ）がなかった芒だったが、なりふり構わず放ったオレのガトリングが顔面に数発入ったものの、両手でガードされてからは逃げられるのは時間の問題だった。

リング下に転げ落ちる芒。

芒の眉間からは血がしたたり落ちていた。

「ちっきしょ～、ぶっ殺してやる！！」

芒がキレた。

会場は芒の流血で、女子たちの悲鳴も加わり大興奮だ。

芒の流血をタオルで拭きながら、オレを下から睨みつけるタカノブ。

タカの目の様な鋭い眼光がギラリと光る。

だ・か・ら・・・・・、何？

怖かねぇ～んだよ！！

「何だテメェ～コノヤロォ～！　何ガン飛ばしてんだコラ！　オラ、2人まとめてやってやるよ！！　上がってこいよオラ！！」

オレは両手でタカノブを招き入れるジェスチャーをした。

「ジオ～～～～ン！　セコンドにまで喧嘩売ってんじゃねぇ～って！　ジオ～～～～～ン！！」

オッキーが下でウルサイ。

「ジオ～～～～～ン！！」

「ウルセ～オッキー！　これはオレの喧嘩だ！！」

『プチン』

そんな音がオッキーの頭の辺りから聞こえた気がした。

オッキーは凄い速度でリングに駆け上がると、エプロンサイドをツカツカと歩き、ロープを跨(また)いでリングにまで上がってきた。

メガネのレンズが照明で光り、どんな表情なのか読み取れない。

オッキーの目が見えた瞬間、オレの視界は客席に飛んだ。

1発、2発・・・、強烈な痛みを頬に感じる。

「目を覚ませ、ジオン」

オッキーに2発ものビンタを喰らい、オレは何とか正気を取り戻した。

「ゴメンな、オッキー。サンキュ～、もう大丈夫だ」

「ホントかよ？　何か、目が変だぞ、ジオン」

「ウルセ～、早く下りろよ」

オッキーはブツブツ言いながらリングを下りた。

・・・ちょっと取り乱しちまったゼ。

リング下を見ると、芒がウロウロしていた。

「大橋！　・・・さん！！　アイツ、武器探してる。武器持ったら絶対リングに上げないで下さいよっ」

オレは大橋に忠告した。

冷静に。

オレの挑発を受けたタカノブは、ザコには構ってられないと言わんばかりに、知らん顔してオレから目を逸らしている。

・・・ムカつく。

「オラ、上がって来いよタカノブ。今、オマエら2人まとめてやってやっから、早く上がって来いよ、オラ」

オレは、いたって冷静に、ゆっくりな口調でタカノブに言った。

マジでそれが本音だ。

オレは冷静だ。

神経も細胞も意識も研ぎ澄まされて、今なら的確に相手の動きが見て取れるし、先も読める気がする。

今ならタカノブにも余裕で勝てそうなんだ。

今がチャンスだ、このクソヤロォーをぶっ潰す、チャンスなんだ。

そんなオレに対して、まるで悪を前にした一般人のような顔つきで、
タカノブは溜息をつきながら再びソッポを向いた。

正義のヒーロー気取りか？

悪の親玉め！！

黒幕はオマエだろ、タカノブ！！

ちっきしょ～～～っ！！！

第１６３話　勇気１００倍

・・・そう、オレは分かってた。

最初から分かってたんだ。

この武蔵と野牛の戦争の発端が何であるかを・・・。

朝露さんとミケコたちなんかじゃない。

ユイとミケコでもない。

竜崎とリチャードでもない。

ましてや宮さんと長須のコミュニケーション不足や、過去の因縁でもない。

そんなの単なる理由の後付。

根本はオレなんだ。

オレが長山に盾(たて)突いたからだ。

それであの時、カラオケ裏で喧嘩になって、たまたま居合わせたユ

イと上木が揉め、それが引き金になった。

だから、元々はオレに原因があるんだ。

原因・・・、つまり、カンパを拒否した事。

・・・っつ～事は、そのカンパを回したヤツが犯人なんだよ！！

確かテルも言ってたな・・・、ギャラクシーが怪しいって。

タカノブ、コイツは昔っからギャラクシーの一員だっつ～噂じゃねぇ～か。

点と点が繋(つな)がったよ、今。

・・・っつ～か、最初っから知ってたよ。

ただ、怖ぇ～から知らねぇ～フリしてただけだ。

タカノブ！　てめぇ～が全ての黒幕だ、コラァーーーッ！！

・・・・と、その時、案の定、何かを持った芒がリングに上がってきた。

箒(ほうき)？　真っ二つに折った箒の木の方を持って、不敵な笑みでリング

に上がる芒。

そ、その木で叩かれるのも嫌だが、そ、その折れた方のギザギザで引っかかれたり、刺されたりしたら危ねぇ～って！　目とかに突き刺さったりする可能性あるって！　危ねぇ～って、マジで！！

「大橋っ！　・・・さ～～～～ん！！」

オレが叫ぶと同時に、大橋は、「ふざけんな芒っ！！」と怒鳴りながら凄い勢いで芒から武器を奪うと、それをタカノブ目掛けて投げつけた。

「セコンド、ちゃんと仲間を見てろっ！　今度武器持たせたら反則で追放するぞ！！」

大橋に激怒されたタカノブは、その場で軽く頭を下げた。

つ、強ぇ～、大橋。

そんな大橋は、オレの味方だ！！

その時、ふと、武蔵勢の長山が視界に入った。

歓声に紛(まぎ)れてもちろん声は聞こえないが、明らかに長山は言っていた。

口の動きで何て言ってるのか分かった。

その言葉は、この状況で見れば、どう見たって、どう考えたってオレへの・・・・・。

明らかに長山は、「か・め・つ・る」と言っていた。

必死に。

しかも、長山の手下達も・・・。

耳を澄ませば確かに聞こえてくる、いくつか（・）のオレの名前。

いや、いくつも（・）だ。

「かめつる」「かめつる」と、オレの知らない所で、密かに亀鶴コールが起きていた。

この、いくつもの亀鶴コールの、１００人分に値する、たった一人のエール。

いや、それ以上のエールだゼ、長山！！

そうだよな、オマエ、芒に頭割られたって・・・・・、包帯巻いてたしな。

オマエの願いは、アイツがぶっ倒れる所を見る事だろ？

オレを笑いに来たついでに、ほんの少し、そいつに期待してんだろ？

長山ァーーーーッ！

ついでにオマエの仇も討ってやっからよ！！

そこで、よ～～～く見とけ！！！

長山のエールで俄然、力が湧いてきたオレは、大橋にイチャモンをつけている芒の背後に回ると、そのまま左腕を芒の首に回し、ロックした。

隙だらけなんだよ、バーカ。

芒だけに、スキだらけ・・・、なんちって。

芒の首を、力の限り締め上げる。

苦悶の表情の芒が目に浮かぶ。

手をバタつかせ、窒息に苦しんでいる芒に、大橋がギブアップの確認をとる。

会場は大興奮に覆われた。

リング中央で、ガッチリとスタンディングの裸絞が決まっている。

逃げるのは不可能。

なぜなら、オレが逃がすはずがないから。

このスリーパーホールドが解(ほど)かれる時は、芒が落ちた時か、死んだ時だ。

ど～した芒、早くギブアップしねぇ～と、マジで死んじまうぞ？

オレは絶対放さないからな。

落ちたフリも効かねぇ～ぞ！

は、早くしねぇ～と、マジで死ぬぞ・・・、芒っ！！

タカノブがタオルを握り締め、それを投げるか投げまいか葛藤(かっとう)している。

何してる、タカノブ、早くそいつを投げろ！　コイツを見殺しにする気か？！

オレは左腕で芒の首を締め上げ、右腕でロックしている。

右コブシは浮いているのだ。

そんな浮いている右コブシに両手をやる芒。

そのまま芒は、ゆっくりとオレの右手を開いた。

オープンフィンガーグローブから出ているオレの5本の指。

そのうちの人差し指と中指、薬指、小指をあらぬ方向に曲げる芒。

小指は自然に弾かれて、元の定位置に戻ったが、残りの3本は、それ以上曲げた事のない領域に達した。

『バキ　バキ　ボキ　ボキ』

鈍い音が鳴り響いた・・・・・・・・・。

第１６４話　命の重みに変わりはねぇ～んだよ！！

とっさに大橋がオレたちに突進。

体当たりでオレは態勢を崩し、そのままコーナーポストに背を当てた。

一方、芒はバッタリとマットにうつ伏せで倒れ落ち、すぐにタカノブが駆けつける。

オレは自分の手を見て思わず笑ってしまった。

はっはっはっは、メッチャ折れてんじゃん。

オレの人差し指と中指と薬指は、あらぬ方向に折れ曲がっている。

痛みはあるにはあるが、気になるほどではない。

・・・っつ～か、普通だったら即救急車モンだろ～が、今は病院なんて行ってる余裕ねぇ～し、世の中のアスリート達はみんな、この程度気にせず競技するだろ？　気合いだよ気合い。

しっかし、グネグネでキモチ悪いゼ。

・・・・でも、右手で良かった。

左が無事ならギターが弾ける。

困るのは字を書く時とか箸を持つ時くらいだろ？　どうせ勉強しねぇ～し、たまにはスプーンやフォークでメシ食うのも悪くねぇ～や。

「ジ、ジオン、オ、オマエ、もしかして・・・」

エプロンサイドに駆け上がったオッキーが、血相を変えてロープを跨いだ。

「はぁはぁ」と息を荒くして、オドオドとオレの右手を見る。

その瞬間、顔を急速に青くさせたオッキーは、バッタリとマットに仰向けで倒れてしまった。

・・・ったくコイツは相変わらず小心者だな～・・・。

オレはすぐに柴をリングに上げ、オッキーをリング下に戻すよう指示。

「ジオン君！」

大橋がオレの右手を見て絶句した。

「大橋さん、オレは今、オープンフィンガーグローブをつけてるから、近くで見ねぇ～と誰もこの事実に気付かねぇ～。知ってんのは

大橋さんとオッキーと芒だけだ。頼む、一生のお願いだ。試合を止めないでほしい。・・・っつ～か、止めたら一生アンタを恨む。オレは最後までコイツとやりてぇ～んだ。今日、ここでケリをつけてぇ～んだ。次はねぇ～んだ。頼む、大橋・・・さん」

オレの曲がりくねった指を見て気絶したオッキーは、朝露さんらにリング下で介抱されている。

大橋は首を横に振り、オレの求めを斥(しりぞ)けた。

「ダメだ。最初にも言った通り、オレは中立。オマエの気持ちは分かる。だが、ダメなモンはダメだ。オレはその手を見て、試合続行は出来ねえ」

「大橋さん、この怪我はすぐ治る。だけど・・・」

「タダの怪我じゃねえだろ！　思いっきり指、折ってる。しかも3本だ。オレにはオマエがどうしてそんなに冷静でいられるのか理解できねえ！　普通、指なんて折れたら激痛でのた打ち回るし、口も聞けねえ。戦意も喪失する。そんな逆に折れ曲がった指を見たら、尚更だ」

「・・・だから、普通じゃないんですって。心は体と違って、治んないんですよ。ダイヤモンドと一緒で、心って磨いていくモンでしょ？　傷ついて傷ついて、輝くモンですよね？　されが、デカイ衝撃で欠けちまったら、一生欠けたまんまなんですよ。見てくれの悪い～、欠けたダイヤモンドなんですよ」

「ジオン君、ダイヤモンドは、そう簡単に欠け・・・」

「だから簡単じゃねぇ〜んだ！　オレは命賭けてんだよ！！　分かるか、この違い？　欠けと、賭け、だっ！！」

オレは頭に血が上り、大橋に声を張り上げていた。

「・・・わ、分かった。だが、今度何かあったら止めるぞ、容赦なく」

「サンキュー、大橋さん」

ふぅ〜、鈍(にぶ)い頭で助かった。

今度何かあったらだと？　何もねぇ〜よ、もう。

だって、このとんでもねぇ〜骨折のお陰でオレ、超冷静になれたモン。

オレとした事が今まで、少々・・・、いや、とんでもなく取り乱してた。

だが、もう大丈夫だ。

オレの頭脳がやっと起動した。

今までオレの頭上の空には、雨雲が一面を覆ってたけど、そいつがパーッと消えてった。

すっかり空は綺麗なブルー一色、雲一つない。

やっと、オレの頭は急激に冴えてきたゼ。

B型に拒まれた場合、こっちがいくら頼んでも無駄。

どんどんテコでも動かなくなる。

だが、1つだけ突破口がある。

それは、本気の情熱だ。

元々人情深いB型、ガチで灼熱の魂でぶつかってこられたら、さすがのアマノジャクも吹っ飛ぶ。

こっちの意気込みに意気込みで返すのがB型だ。

そんなB型の大橋は突破。

あとは、このクソヤローだ。

B型、芒!

オレとガチで勝負だ!!

芒の意識があるのを確認したタカノブは、大橋に睨まれる前にリングを下りた。

片膝をついた芒は、リング下のタカノブの掛け声に笑顔で応えている。

「オラ、立て芒。オマエの最初のヘッドロックのお返しをしただけだ。苦しかったか？　オレも苦しかったぞ。これで少しは人の痛みが分かったか！！」

芒は、ワセリンで止血された眉間の傷口を指で触りながら、ゆっくりと立ち上がった。

オレの情熱を肌で、あるいは魂で感じたのか、今まで手加減するような目でオレを見ていた芒は、急に目の色を変えた。

「人の痛みだと？　フン、ザコはちょっと痛めつけると、すぐほざく。痛ぇ～か？　手」

フン、気遣ってるつもりか？　それともおちょくってんのか？

「あぁ～、痛ぇ～かもしんねぇ～けど、今は痛がってる暇ねぇ～し。後でゆっくり痛みと付き合ってやるよ」

そんなオレの言葉に、芒がとんでもない一言を吐いた。

「そんな痛みはいずれ癒えるだろ～よ。だがな、心の痛みは消えね

ぇ～んだよ」

オイ、それ、どっかで聞いた事あるセリフだよ、オイ。

・・・っつ～か、それ、今オレが言ってたセリフだよね？　聞いてたよね、それ。

B型は、気になったら即、物真似する傾向大って言ってもさ、いくら何でもストレート過ぎね？

「心の痛み？　へ～、オマエにも痛みが分かるとは、驚きだ」

オレは本音をぶちかました。

こっからは、計算高く理屈で行く気はねぇ～。

とことん腹の底から真意を披瀝（ひれき）してやる！！

「所詮、オメェーには分かんねぇ～だろうな。オレは在日っつ～だけで、周りから偏見の目で・・・」

「在日？　何それ？　オレ、知らねぇ～モン、そんなの！」

「アァ～？」

「分かんねぇ～けど、差別されたって事か？！」

「そ～だよ。オマエにオレの痛みが分かっかよ」

正直、分かんねぇ～よ。

朝露さんじゃねぇ～が、己の気持ちは、己にしか分からねぇ～モンなのかもな。

ただ、これだけは分かるよ。

屈辱ってヤツが、どんなに苦しいかって事くらいは、こんなオレでも百も承知だ。

自国を守る為に戦地に赴き、空腹と極限の疲労に耐え忍び、階級の違いで自分より年下の者に扱き使われ苛められ、病気と殺戮の恐怖に怯え、幾多もの戦線を掻い潜って生き延びたが、戦犯で刑務所に入れられ、出所と同時に突然の人種差別により、泣きじゃくる我が子と、唇を噛み締める妻や両親、はたまた自分の墓穴を掘らされ、家族が目の前で撃ち殺される様を見せられた挙句、最終的に自分も撃ち殺された父親の屈辱。

・・・と、リストラの影に怯え、正社員との給料の差の悔しさと、非正規社員への扱いに耐え忍んだ挙句、正社員に自分が今までやってきた仕事を教えて異動させられた末、結局異動先で仕事を失った父親の屈辱は、大小の違いがあれど、同じ屈辱には違いない。

そんな経験、オレにはないが、それがどんな痛みかは、容易に想像がつく。

芒は自分が差別される事により、屈辱を感じたんだろ？　だったらオレにだって屈辱の経験はある。

中学の頃、イジメっていう屈辱を受けていた。

だからってそれを主張するつもりはない。

人間、人の生き方参考にしても、比較して生きるモンじゃねぇ～だろ？

世の中数え切れないほどの屈辱ってモンがあるが、どれこれも心が傷つくことには変わりがねぇ～だろ！！

傷つくくらいだったら、心が磨かれるって思えばい～けど、心がぶっ壊れちまったらど～すんだよ？　誰が責任とってくれんだよ？

これ以上、犠牲者を増やすなよ、世界！！

「男、女、ニューハーフ、性同一性障害？　障害者だろうが健常者だろうが、病気だろうが健康だろうが、それが何？　それで誰かに迷惑かけた？　私立、公立、中卒、高卒、大卒、中退？　正社員、非正規社員、フリーター、ニート、日当たり労働者？　時給が低かろうが職が何であろうが、富裕層だろうが貧困だろうが関係ねぇ～だろ！　肌の色、国、生まれた土地や、目の色、髪の色、血、そんなモンの違いが何だっつ～んだよ！！　体の大きさ、顔、家、両親、国、金持ち、貧乏、生まれた時からみんな同じ境遇なんてヤツはい

ねぇ～んだ。双子だって何らかの差別があるだろ？　いや、双子なんて兄弟差別の良い例かもな。・・・要するに、差別なんて当たり前だっつ～事だよ。いちいち目くじら立てんじゃねぇ～よ！！」

「何だと？！」

「差別されてるヤツが悪いって言ってんじゃねぇ～！　人それぞれ違いがあって当たり前だろ？！　みんな認め合って共存するしか救いはねぇ～んだ！　それが出来ねぇ～ヤツらがクソなんだよ！！自分だけ良ければそれでいい？　困ってるヤツや救いを求めてるヤツがいたら、手を差し伸べてやれよ。自力で上がってこいって？上から目線でふざけんじゃねぇ～よ！　何もしてねぇ～のに口だけでモノを言うんじゃねぇ～よ！！　近づくな？　触るな？　かかわるな？　あ～、自分はあんなんじゃなくて良かった？　ふざけんじゃねぇ～よ！！」

「オ、オメェ～に、何が・・・」

「イジメられっ子って扱いも、ヤンキーっつ～扱いも、差別って言ったら差別になるだろ～が。キリねぇ～んだよ！」

「オメェーに何が分かんだよ」

「オマエこそオレの何が分かんだよ！！」

「・・・・・」

「部落差別もイジメも集団シカトも、差別のエスカレートした結果

だろ？　団結された差別だろ？　無くすしか、無くす方法はねぇ～んだよ。一人一人が、地球環境に気を配るエコのように、注意するしかねぇ～んだよ。みんなもやってっからオレもっていう気持ちがクズなんだよ。ど～してみんな仲良く助け合っていけねぇ～んだ？！」

資本主義だか何だか知らねぇ～が、いつまで日本は腐ってんだよ！

いつになったら、くだらねぇ～差別が無くなるんだよ！！

日本は戦争に負けて、何を学んだんだ？　大国にへつらう事を覚えたのか？！

大切なモンを忘れんなよ・・・。

「命の重みに変わりはねぇ～んだよ！！」

第１６５話　若者たちよ・・・、血と汗と、涙を流せ

「バーーーカ、奇麗事いくら言ったって、無駄なんだよ」

芒が長い舌を出しながら言った。

「だからって暴力で分からせるってか？　サイテーだな」

「ウルセ～、ザコが！　だったら一生、ガンジーやってろ！！」

バコッ

芒の右コブシがオレの鼻っ柱に激突した。

鼻から生ぬるいものが滴(したた)る。

すぐに血の味を感じた。

オレは有(あ)りっ丈(たけ)の力を込めて、芒の顔面へお返しのパンチを放った。

天井を見上げた芒は、鼻と眉間の間にシワを寄せ、大きく口を開いた。

「暴力はサイテーなんじゃねぇ〜のかよ?」

芒がさっきのオレの言葉に反論しながら、オレの頬を殴る。

「時と場合によるんだよっ!!」

オレのアッパーカットでよろめく芒。

「チンタラやってんじゃねぇ〜よ!」「第1試合みてぇ〜なスポ根見せんなヨ、コラ!」「殺し合え、早く!!」

そんな罵声が飛び交う。

「へへっ、見ろよ、アイツら。オレらがいくらほざいた所で世界は変わらねぇ〜。そんなクソヤロォー共はぶっ殺すしか救いがねぇ〜だろ? 皆殺しに出来るもんならしてやりてぇ〜よ。この腐った世の中、皆殺しにしてぇ〜〜〜よ。ヒャハハハハ」

芒が長い舌を出しながら、会場を見回して言った。

オレらがいくらほざいた所で世界は変わらねぇ〜だと? やってもいねぇ〜のに結果出すんじゃねぇ〜よ。

「キサマらに・・・・、キサマらに・・・・・・、差別された人間の、苦しみ、痛みが・・・、分かるか、コラァーーーーーーッ！！！」

オレは全身全霊、満身の力を振り絞って叫んだ。

リング中央で叫ぶオレの姿は、さぞ異様なものに違いない。

だが、叫ばずにはいられなかった。

もちろん芒を庇(かば)ったものではない。

オレの心の底からの叫びだ。

この叫びの対象は、もちろん会場だけじゃない、オレたちの世界全てだ！

芒は呆然とオレを見ている。

会場も静けさに包まれた。

「・・・・バカだな、オメェー。相当イカレてるゼ」

芒に言われたらオレも終わりだ。

「・・・・だな。はっはっはっは」

オレは思わず吹き出してしまった。

「ヒャッハッハッハ」

芒もたまらず笑い出す。

「オラ、また野次られる前に、続きだ続き。続きみちる」

「ヒャッハッハッハ、オメェ～おもしれ～な！」

芒は笑いながら戦闘スタイルをとる。

今までオレたちだけの世界に入ってこれなかった大橋が、リング中央で右腕を縦に振った。

こっからが本番ってワケか？　勝負だ、芒っ！！

棒立ちでニタニタと笑う芒に、オレはジリジリと間合いを詰めた。

作戦か？　スキだらけだぞ、コイツ。

オレが大きく振りかざしたパンチを放つと、芒はそれを待ってましたとばかりに大きく避けてから突っ込んできた。

高速頭突きを胸に喰らい、息を詰まらせているオレに、芒は尚も頭突きを狙う構えを見せた。

「芒っ！　頭突きは反則だぞ！！」

大橋の忠告を完全無視し、芒が突進してくる。

今から避けても間に合わないし、ガードしても身体を痛めるだけだ。

攻撃が最大の防御！！

ゴンッ

鈍い大きな音が響いた。

星が飛んだ。

冗談抜きで星のマークがオレの頭上を、地球を回る月のように回転した。

芒の石頭と、オレのチョーパンのぶつかり合いだ。

ゴンッ

さらにもう1発。

さすがにクラクラする。

これ以上は危険だ・・・、と思ったが・・・。

ゴン

B型の意地っ張りは無限。

オレが引くしかない。

オレは自然に身をゆだね、バッタリその場に倒れた。

全くオレと同じ行動をとる芒。

しばし、オレと芒は天井を見つめた。

回る～、回る、照明が回る・・・、大橋も回る。

飛び回る星を払いのけながら、オレはゆっくり起き上がった。

芒もゆっくり起き上がり、ヨロヨロと笑いながら前蹴りを放った。

・・・今度は急所か？　それは、ヤバイ！

目には目を・・・とかって反撃する前に、それ喰らったら1発でオレ、終わる。

とっさに膝を上げると、芒の急所攻撃を運良くガード出来た。

・・・と、思った矢先、今度はチョキ?!

急所攻撃をガードされた芒は、今度は目潰し攻撃を狙ってくる。

しつこいB型、とことん反則にこだわる気だ。

ちきしょ〜、自暴自棄になりやがって。

オレは芒の目潰し攻撃を払いのけると、クルリと円を描いて芒の後ろに回り込んだ。

見よう見真似だが、やれば出来るもんだな、ユイの技。

・・・あっ、ユイは腕を掴んで捻りながら回るんだっけ？　全然ダメじゃん、オレ。

でも、スキだらけだゼ、ススキだけに!!

オレは芒を、今回2度目の裸絞(はだかじめ)にとらえた。

今回もまた、リング中央で見事に決まる。

さっきは頸(けい)動脈を絞め付けるスリーパーホールドだったけど、今度は気管を絞める、チョークだ!!

芒はとっさにオレの右コブシを掴んで握った。

またもや指を折ろうとするが・・・。

・・・・残念だったな、もう、折るモンがねぇ～よ！！

芒は力なく手を落とす。

まるで軟体動物のようにグニャリと力が抜ける芒。

オレが手を放すのと、大橋が試合を止めたのは、ほぼ同時だった。

それと同時にタカノブもタオルを投入していたようで、うつ伏せに倒れた芒の背中には、タオルがのっていた。

世界中の、どんだけ優れた霊能者や易者や予知能力者、または科学力を駆使した万能コンピューターでも、オレの未来だけは当てられない。

もちろん自分でも予測不可能。

・・・でも、これだけは言える。

未来は自分で創るもの・・・・・・。

第１６６話　タカノブのうすら笑い

会場は割れんばかりの大歓声と拍手。

長山も手下たちも、上木までもがオレに拍手をくれる。

涙ぐむ朝露さんとその仲間、さらには、どこの馬の骨とも知れぬ野牛の生徒たちまでもが、オレに拍手をくれた。

大橋の、試合が終わればノーサイド・・・、そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

理由はよく分かんねぇ～けど、全力でぶつかり合ったオレと芒に対して、みんなちょっとは感動してくれたようだ。

・・・っつ～か、オレ、勝った？　勝ったの？　芒に勝ったのーー？！

イ～～～～ッ、ヤッホーーーーーイ！！

ついついニヤケてしまったが、勝てたからって調子に乗って喜んではいけない。

中学の時、受験で、希望してた公立の高校に落ちた時、胴上げとか

したり、飛び跳ねて喜んでたヤツとかいたけど、そんな光景がオレには居た堪れなかった。

喜ぶのが悪いとは言わないが、中には悔しい思いをしている人がいるって事を忘れないでほしい。

ちなみに結果発表の帰り道、チャリで無意識で走ってたら、車に撥ねられたっけ。

あの晩聞いた、ヤンジェラ・ヤキの『15の私へ』、良い歌だったナ・・・・。

大歓声の中、長山たちは席を立ち、7人は帰っていった。

アイツら、オレの試合だけ見に来たのか・・・。

「オッキーさん大丈夫なんですけど、一応外で休ませてますんで」

柴か、オマエ、意外といいヤツだな。

AB型だし、優しいんだよな、純粋に。

ただ、いかんせん目立ちたがりで流行に乗りやすいから、軽そうに見えるんだよな。

そんな時、リング上で芒を介助するタカノブと目が合った。

ＡＢ型のタカノブ・・・、根は、ホントは・・・・・。

ニタ～～～～～リ

タカノブはオレの目を凝視しながら、口元を不気味に歪めた。

三日月のような、人を蔑(さげす)むような目と口。

驚愕(きょうがく)するほど不気味なその顔が、オレの瞼(まぶた)の裏に焼き付く。

自力で起き上がれない芒の肩を抱き、タカノブは芒と共にリングを下りた。

アレ？　握手とか、何かお互い声掛けとか、ないの？　アレ～？

せ、せめてセコンド同士の握手とかさぁ～・・・・・って、行っちゃったよ。

ユイも竜崎もめでたく終わったのに、オレだけ消化不良だよ。

リング下に下りたオレは、急に自分がちっぽけに感じた。

トラックの原理か？

トラックの運転手は、大きな車両に身を守られてる上に、常に高い

所から眺めてる為、態度までデカくなってしまい、一般の車両をつい見下してしまう。

その原理だ。

タカノブがヘタにリングに上がって来れない事や、自分のバックに仲間や沢山の応援団がいる事をいいことに、オレは無意識で態度がデカくなり、あんな挑発行為に及んだんだ。

何か、沢山タカノブを挑発してたような気がする・・・。

オレ、「何ガン飛ばしてんだコラ！　上がってこいよ!!」みたいな事言ってなかった？　やばくね？　帰り、オレ、やばくね？

「お疲れ！」

ユイが笑顔で迎えてくれた。

「大丈夫っスか？　あ～～～あ、救急車、呼びます？」

竜崎に右手を掴まれた。

「ジオン、すぐに病院行った方がいいわよ、コレ」

ユイがオレの歪(いびつ)な指を見て、痛そうな顔で言った。

コイツらの目を欺(あざむ)く事は不可能だったみたいだ・・・。

「必ず行くから、少しだけ休ませて・・・」

オレは口うるさい2人を振り払い、強引に席に着いた。

横を見ると、宮さんが遥か彼方を見つめるような目で、リングを見据えていた。

「宮さん・・・・・・」

・・・と、名前を呼んだものの、その後の言葉が続かない。

「・・・・・・・・・・」

宮さんは、満身創痍（まんしんそうい）のオレを見て、少しだけ微笑むと、小さく頷いた。

言葉はいらない。

語らずとも、お互いに一瞬で全てを分かり合えた。

男と男、目を見ただけで語り合える時がある。

それが、まさに今だった。

宮大地という一人の人間と、亀鶴詩音という一人の人間の間には、今は言葉は必要なかった。

宮さんの背負った、あまりにもデカイ重圧は、オレたちの思いを遥かに凌(しの)ぐ。

第１６７話　猪突猛進

天王山、宮大地ＶＳ長須光雄。

今まで武蔵の３勝、とりあえず全勝でここまできたが、この武蔵の総番長ＶＳ野牛の番長の対決が全ての勝敗を左右する。

この試合に勝った方が、事実上、戦争の勝者となるのだ。

宮さんが負けた場合、無条件降伏という、とんでもないペナルティ付き。

しかも、勝つか負けるか全く予測不可能だ。

現に宮さんは、中学時代、仲村シンと２人で挑んだにもかかわらず、長須に１度も勝った事がなかったという。

戦争の発端が何であれ、全ての清算試合となる。

勝てば天国負ければ地獄だ。

絶対に負けられない男、宮大地がついに立ち上がった。

思えば、さっきより顎髭（あごひげ）が伸びている。

アドレナリンってヤツか？　おそらくオレたちの試合を見て、ホルモンの分泌が促されたのだろう。

ここに来るまであんなに短かった坊主頭も、今では随分と毛が生えているし、心なしか髪が逆立っているように見える。

会場はとてつもないストンピングの嵐と、今までにない大歓声。

当然だが、今日1番の盛り上がりだ。

一方、野牛側からは、やはりあの男が立ち上がった。

オレの予想通り、あの猪が長須、そして、あの正義の味方のようなイケメン男がバイソンソルジャーこと、仲村シンだ。

勇ましくリングに向かう宮さんに、しっかりと織川が付いた。

長須には仲村がピッタリ付いている。

野牛の番長、長須光雄。

野牛のナンバー2、仲村シン。

笹商のトップ、織川宏次朗。

吉岡の番長、大橋剛太。

そして、武蔵の番長であり、この辺の学校の総番長でもある、宮大地。

リング上に、時代を席巻（せっけん）する5人が集った。

しっかりとグローブをはめ、マウスピースを装着する宮さんと長須。

吹き荒れる嵐の中心に、威儀（いぎ）らしく立つ大橋が、静かに構える宮さんと長須、両雄のボディチェックを終わらせた。

やがて沸きに沸いていた会場は徐々に静かになった。

小賢（こざか）しい言葉や小競り合いは不用。

そんな空気を会場中の誰もが感じているに違いない。

向かい合う巨大戦艦。

よく見ると、長須の方が宮さんより一回り大きいようだが、宮さんのオーラが体格差を全く気にさせない。

改めて宮さんのとてつもないオーラに感服するが、長須の発するオーラも半端ない。

お互いに漂う風格は、まさに王者のたたずまいだ。

それでいて、大日如来の化身とも言われる、不動明王を髣髴させるような、宮さんの危険な眼光。

一方の長須の、人を刺すような睨みも、イエスと相対するサタンの化身、蛇を連想させ、大衆を容易に畏怖させる凄みがある。

ユイＶＳミケコ、竜崎ＶＳリチャードの２試合は、ミケコとリチャードがガチで、ユイと竜崎がユルという図式だったが、オレＶＳ芒の１戦はガチユルではあるものの、法則通りではなかった。

ガチユルの法則は、ユル、つまり、ある程度気を抜いてリラックスしてた方が勝つという法則なのだが、オレと芒の試合は、どちらかと言うと芒がユルでオレがガチだった。

つまり、勝敗の行方に法則はない・・・・って事だ。

おおむね、宮さんＶＳ長須の試合はガチガチ対決ってトコロか。

隣のユイも竜崎も、固唾を呑んで見守る。

リングサイドのセコンド陣も、誰一人として動こうとしない。

まるで蛇に睨まれた蛙のように、会場全体が２人に呑まれていた。

時間は待ってはくれない。

時よ止まれ、と言うオレの願いも空しく、心の準備も何もないまま、
大橋が右腕を縦に振って、ついに試合が始まった。

第１６８話　４５秒

試合開始の合図と同時にパンチを繰り出す両雄！

会場は一気に沸いた。

メガトン級の重量級パンチの雨あられ。

お互いに一歩もひく事なく、左右のパンチを乱れ打つ。

ガードはない、真っ向からの打ち合いだ。

これには会場中、大興奮だ。

「宮さーーーん」

たまらず隣のユイも金切り声をあげる。

リング上は激しいぶつかり合いで、お互いのパンチが炸裂するたび、まるで爆発が起こっているかのようだ。

幾度となく爆発が起こり、風圧でオレたちまで風を感じる。

さらにはビリビリと肌に電気のようなものまで走る感覚に、2人の相当なレベルとパワーを感じた。

次元を超えるほどの熱い戦慄（せんりつ）と、雷に打たれたような電撃が全身を駆け抜ける。

この双璧（そうへき）をタイマンで戦わせるとは、何たる天の悪戯（いたずら）か・・・！

肉弾戦はほぼ互角。

だが、このメガトン級のパンチをお互い食らい続けては、そんなに長くは戦えないのでは・・・？

そんな思いが脳裏をかすめる。

ノーガードでの壮絶な応酬。

今までの終わりなき暴力の連鎖にピリオドを、この、無意味な仁義なき戦いにけりをつけるため、2強が死力を尽くしている。

・・・・言葉もない。

血しぶきが舞い、灼熱の夜に赤い霧雨（きりさめ）が降った。

オレンジ色の何かが宙を舞ったのは、それから間もなくの事だった。

それが、仲村シンがリング上に投げ入れたタオルだと認識するまで、一体どれだけの時間を要しただろうか。

長いようで短いようで、リングの上でぶつかり合う二人の様は、試合開始から時の流れがスローだった。

一瞬たりとも逃したくないという思いがそうさせたのだろうか？

人は、思わぬ事故の瞬間など、まるで脳裏に映像を焼き付けるかのように、目の前の出来事が突然スローに映る事がある。

そんな緩やかなスローモーションで、オレの世界は動いていた。

もちろん現実では、宮さんと長須の二人は、高速で打ち合っていたのだが・・・。

息をのむ会場。

一瞬で静まり返る。

時が止まった。

静寂（せいじゃく）の中、マットに、タオルと共にゆっくりと沈む不沈艦。

宮さんの豪腕右拳をこめかみに食らった長須が、白目を向いて腰から砕けた。

バッタリとうつ伏せに倒れ込む長須。

必殺技のパワーボムを出す間もないほどの、メガトンパンチの打ち合いの末、長須はマットに手痛い口づけをした。

実に４５秒。

まさに短期決戦だった。

大橋が試合終了の合図を出すと、会場は割れんばかりの大歓声に包まれた。

・・・・へ？　勝ったの？？　み、宮さんが、勝ったの～～～～～？！

戦争に、大国に勝った！　武蔵が野牛に、勝った～～～～～！！

うおおおおおお！！！

「ワアアアアアアアアア！！」

武蔵勢も大興奮だ。

誰がこんな展開を予想できただろうか？

「窮鼠（きゅうそ）、猫を噛む」とはよく言ったもので、読んで字の如く、「窮」とは物事のギリギリの事を示す。

どんな状況でも、どんな弱小でも、普段どんな弱っちい心でも、死に物狂いでぶち当たりゃ～、やって出来ないことはない。

見ろよ、野牛勢・・・。

オレらはやってのけたぞ。

４戦４勝、全勝で野牛を降したぞ。

これが、白鳥ユイ、竜崎光一、亀鶴ジオン、宮大地の結束力だぁ～～～！！！

オレはいち早くリングに駆け上がった。

ユイと竜崎もリングに上がる。

織川と抱き合う宮さんの目からは、涙がこぼれていた。

大、宮コールだ。

さらに、自力で起き上がった長須に対し、長須コールも沸き上がる。

両雄がガッチリ握手を交わした！！

これには会場も歓喜の嵐だ。

試合が終わればノーサイド・・・。

もしかしたら、シナリオ通りなのかもしれない。

この大会の目的は、喧嘩の仲直りの為の舞台を提供すること・・・。

そう考えたら、ただの傍観者だと思っていたＫＨＪのヤツらが少しだけいいヤツらに見えた。

あのホスト連中、相変わらず見てくれは超悪いけど。

「宮さん、おめでとうっス。もしかして、泣いてるんスか？」

この期に及んで意地悪な竜崎だ。

「あ、コレ？　汗だよ汗」

「当然よね」

ユイに笑われ、照れ笑いする宮さん。

「宮先輩〜！！」

朝露さんや、１年の女子たちに囲まれる宮さん。

「亀ちゃん、病院行こっ」

この期に及んでオレの心配だ。

心優しい宮さんに、感謝せざるを得ない。

これは、夢じゃない！

宮さんは、長須に勝ったんだ！

宮さん最強伝説の到来だ！！

仲村シンともガッチリ握手する宮さん。

さらに、長須が宮さんの肩を叩くと、３人が称え合うように抱き合った。

オォォォ！！　ついに平和が訪れる。

こんなに嬉しい日は初めてだ。

第１６９話　最強伝説

「ジオンさん、この人が仲村さんっス」

「はじめまして、仲村シンです」

竜崎が仲村シンを紹介してくれた。

「あっ、どうも、亀鶴ジオンって言います。血液型、Ａ型ですか？」

オレはドサクサに紛れて仲村に血液型を聞いた。

ほぼ無意識。

人の血液型を聞くのが癖（くせ）になってるようだ。

「オレ？　良く分かったね」

分かるさ。

ついでに長須の血液型も聞いとくか。

今はチャンスだ。

みんなハイテンションだし初対面だし、気兼ねなく教えてくれる・・

・？　いや、待て。

オレの予想では長須はＢ型。

根拠はないが、顔で、何となくＢ型と判断した。

もしホントにＢだったら、拒まれた挙句、オレの第１印象が悪くなる可能性が高い。

そのまま悪い印象を引きずられたら今後に支障をきたしそうだ。

ここは無難に仲村に聞いておこう。

長須のセコンドに付くほどの間柄、血液型くらい把握しているだろう。

「長須さんって、何型なんでしょう？」

「長須？　Ｏ型だよ、確か」

何だ、Ｏ型か。

ふ～～～ん。

「長須、結局の所、オマエが一番怒ってた原因は何だったんだ？」

宮さんが長須と重要な会話をしている。

オレは耳を澄ました。

「・・・スマン、宮。ホント、スマン、許してくれ。女の前で、カッコつけたかった・・・、それだけだ」

なにぃ〜〜〜〜?!

長須の口から衝撃発言!!

女の前でカッコつけたかった?　それだけで戦争してたの?!

宮さんが言葉もなく苦笑いしていると、長須がまたしてもとんでもない発言をした。

「女ってのは、ウチのスケバンだ。2ヶ月ほど前から付き合ってる」

なにぃ〜〜〜〜?　スケバン?　ミケコか?　ミケコなのか?!

長須の女って、日丸ミケコ?!

カラオケで、長山が上木のケータイを見て、「クァ〜ッ、ぶっさいくだなぁ〜〜」って言ってたのって、長須の事だったのか!

確かに長須、ぶっさいくだ!!

「オマエんトコのユイって女には迷惑掛けた。事情はだいたい聞いてた。こっちの誤解が始まりだったって事もな」

「・・・・・」

宮さんは黙って長須の言葉を聞いている。

今の長須の言葉には、嘘偽りは感じられない。

「オマエにぶっ倒されて、何か妙に気持ちが良いぜ。今日は、ホント気持ち良い負けだ。アリガトな、宮。今までズルズルと、意地張っちまって悪かった。ホントは謝りたかったんだが、野牛っつ～看板背負ってる手前、なかなかそうも・・・」

「もういいよ、長須。オレの方も悪かった」

「宮、オマエが謝んなよ・・・」

宮さんと長須は、お互いに本音で語り合っている。

オレなんかが入る余地はないようだ。

男と男の戦いには、ホントは最初から言葉はいらないのかもしれない。

でも、そこに女が絡んだりすると、こじれちまったりする。

長須も、ミケコが絡んでたせいで、本来の男気を見失っていたのか

も。

情が入った時、はじめて人は動くのかもしれない。

でも、そこに私利私欲がまじった時、大事なモンを見失う。

長須も認めた通り、この戦争で悪いのは自分らだって分かってたようだ。

うちらを正当化するつもりじゃないけど、やっぱり、野牛が悪で、武蔵は正義だったんだ。

この世に善も悪もない？　悪は栄えた例（ためし）がない？　それは勝ち残った方が正義だから？

オレはどれも違うだろって言い切るさ。

見る観点で、それが正義にもなるし悪にもなるって？

それは、屁理屈ってヤツさ。

悪が自分を正当化させる為の逃げ口実だ。

悪はいくら善を装っても偽善でしかない。

悪は悪だろ！

正義は初めから正義だ！

勝っても負けても正義は正義だ！！

ヒーローだって負ける時は負ける。

今の世の中は、正義が負け過ぎてるんだ・・・・・。

オレは死ぬまで正義を貫く！　何度(やぶ)敗れたって這い上がってやるよ。

必ず悪を根絶やしにしてやる！

オレと一緒に悪と戦うヤツは、ついて来い！！

オレはそいつらの為に、命を張る！！！

勇(ゆう)を鼓(こ)しながら、オレは興奮冷めやまぬリングを下りた。

・・・・おっとイカン、こっちはＫＨＪ、デンジャーゾーンだ。

そそくさとその場を立ち去ろうとした矢先、とんでもない光景を目の当たりにした。

何と織川が、あの厳(いか)ついボスと話をしているのだ。

なぜ?!

織川は長山より長身なＫＨＪのボスと握手を交わしている。

あのボス・・・・・、もしかしてボクシングファン？　思えばあの顔面タトゥー、あの超有名なボクサー、マイク・タインソと同じ模様で同じ場所だ。

・・・な～んだ、ただの織川のファンサービスか～。

織川って、意外と有名なんだな。

・・・と、その時。

「ジッ・オーーーーーーン!!」

オッキーだ。

「生きてたのか、オッキー」

「ジオン、いつものオマエに戻ったな」

「やっぱ、イっちゃってたか?」

「瞳孔（どうこう）、かなり開いてたぞ。あんな恐いジオン見たの初めてだ」

瞳孔?

そうか、芒が大きく見えたり小さく見えたり、左右に瞬間移動するような、おかしい瞬間が多々あったのは、オレの瞳孔が開いてたのか。

竜崎の試合くらいまでは、ちゃ～んと冷静さを保ててたんだけどね～。

「そんな事よりオッキー、気絶してたけど大丈夫なのか？　失神って、神を失うって書くんだぞ?！　そ～と～ヤバくね？　一緒に病院行こうゼ」

「オレは平気だけど、ジオン、オマエ、指が・・・」

「見るなよ、また倒れるぞ。あのな～、1度でも気絶したら、必ず医者に行かねぇ～とダメなんだぞ。頭は心臓と同じで大事な所なんだから」

「・・・何だよ、いつものジオンらしくねぇ～な。いつもだったら自然治癒がど～とか・・・」

「バカ。いつもじゃねぇ～んだよ、今は!!」

「わ、分かったよ」

こうしてオレは、沸き上がる会場を、オッキーと共に後にした。

結局警察なんかも来なかったし、終わってみれば平和な大会だった。

野牛駅に着くなり救急車を呼んだオレたちは、「釣りしてたら高波が来て、逃げる時にテトラポットで2人とも転んで・・・」という、オーソドックスな理由をつけて搬送された。

丁度石田町まで搬送され、電車で帰る手間が省けた。

運ばれた病院は、大学医学部付属病院。

オレが芒にブロック塀で殴られた時に、救急車で搬送された病院だ。

オッキーは検査の結果、全くの正常。

オレは奇跡的に全治2ヶ月で済んだ。

レントゲンの結果、人差し指と中指の脱臼、薬指の骨折だそうだ。

ここまでの変形で、靭帯が完全に切れたり、はく離骨折している事もなく、脱臼骨折すら回避できたのは、非常に稀(まれ)なケースらしい。

もっとも、最先端の病院に来れたのも不幸中の幸いな上、もうしばらく病院に来るのが遅れたりしたら、相当やばかったらしい。

オレの右手はギブスでガチガチに固定され、包帯でグルグル巻きにされた。

当分喧嘩は出来そうにない。

・・・・っつ〜か、もう喧嘩、ヤダ。

第１７０話　リスペクト

一晩中、実に一晩、右手の痛みに苛(さいな)まれた。

興奮が冷めるのに比例して痛くなる右手の疼(うず)きが、まさか、これほど大きいとは思わなかった。

オレは一睡も出来ぬまま朝を迎え、耐え切れずに午前中病院に行ったが、痛み止めの錠剤を貰っただけで帰された。

学校に着くと、いきなりオッキーにキレられた。

「銀髪、ど～して戻したんだよ」

はあ？　何だよ、昨日はオレの頭見て文句言ってたクセによ～。

コイツは一瞬の美学っつ～モンを知らねぇ～のか？！

「昔、中学の入学式に銀髪で登校したら先公に切られたんだよ。あん時の二の舞は御免だ」

オレが銀髪から黒髪に戻した理由を嘘偽りなく語るとオッキーが、

「嘘つくなよ。どこの世界に銀髪で入学式に行くヤツがいるんだよ？　しかも中学の入学式だろ？　ちょい前まで小６だぞ？　有り得ねぇー！！」と、ほざく。

どんだけ平和な環境で育ったんだよ、コイツは。

それでも不良なのか？　ま、所詮、オッキーの不良は自称だけどな。

誰もオッキーがヤンキーだなんて認めてねぇ～から・・・。

「痛々しいわね、その右手」

隣の席のユイがオレのギブスを指差して言った。

「ま～な。今は痛み止めで抑えてっけど、昨夜はキツかったゼ。でも、オマエ、マジ良かったな、顔、腫れなくて。ところで、リッキーたちにはバレてないっぽい？　昨日の事」

「今何もないんだから、大丈夫じゃない？　でも、もしバレたら宮さん退学だよね？　・・・って言うか、アタシらもアブナイか」

そんなオレたちの心配は無用だったようで、リッキーたちはもうすぐ訪れる学園祭の準備や、夏休み後に訪れる、高校生活のビッグイベント、修学旅行の準備で忙しそうだった。

修学旅行は2年の時にしかない、一週間の旅行で、オレたちの行き先は二転三転したものの、どうやら定番の京都、奈良に決定したらしい。

昼休み、売店で朝露さんに会った。

「ジオン先輩〜！」

相変わらず元気がいい。

「何か、新しい時代が始まったっていうカンジがしません？　みんな興奮がまだ冷めないみたいで、今日も朝から昨日のの話で持ちきりですよ。もちろん会場に足を踏み入れた人たちだけでですけどね。その辺はみんなシビアみたいで、ちゃんと場をわきまえて盛り上がってるカンジです」

そんな気はするよ。

今の時代、核家族とか個人主義なんてのが主流だし、みんな賢く保守的に生きてるから、しっかり自分の身を守る術（すべ）を身に付けてるんだ。

人目を気にしながら盛り上がれるテクニックを持ってるし、タブーはタブーとしてしっかり避ける。

隠語（いんご）やサインなんかを使い分けて会話したり、なかなか器用なんだよな、みんな。

それに感じるんだよね、みんなの目線。

明らかに今までと違うんだよ。

まるでオレたちを崇拝（すうはい）してるかのような、心地良い視線って言うの？　尊敬の眼差しって言うの？　何か、感じるんだよね。

「もう朝露さんは、色んな意味で大丈夫そうだね。目を見りゃ分かるよ。活き活きしてる」

「はい、ありがとうございます。学園祭、私たちのクラスは喫茶店をやるんですけど、ぜひ遊びに来て下さいね～。それじゃ～、失礼します」

「じゃ・・・」

喫茶店？　そうか、オレはてっきり朝露さんって竜崎と同じクラスなのかと思ってたけど、違うのね。

竜崎のトコは確か、水族館だっけかな？　吹奏楽部がど～とか、熱帯雨林がど～たらこ～たら言ってたっけ・・・・・。

ジャングルでも作るんだっけか？

放課後、竜崎と宮さんが校門付近で声を掛けてきた。

「結局、昨日の事は教師たちにはバレなかったみたいっスね。ま、バレてたら宮さん退学っスけどね」

「オウよ。そしたら即、先公共を血祭りよ」

宮さんならマジでやりかねないゼ。

「ところで竜崎のクラス、学園祭の出し物って何だっけ？」

「一応、出し物の名称は熱帯魚博覧会っス」

そうそう熱帯魚だ。

水槽だ、水槽。

誰だ、吹奏楽部とか熱帯雨林だとか言ってたの！・・・って、オレかっ！！

「ちなみにウチらは金魚すくいですけど、宮さんらは確か・・・」

「屋台だよ。オレの特製焼きそば。もちろんタダでおごるから来てよね」

「いやいや、タダじゃなくても行きますよ、もちろん」

いよいよ来週だよ、学園祭。

学園祭といえば、目玉はライブだ。

去年のライブを盛り上げたユイが、今年も出場するかもしれないとの噂が1年を中心に流れてるらしい。

昨日のミケコ戦を見ちまった1年共にとっちゃ～、ユイのライブ出場は切なる願望だろうな。

1年の女子から妙に慕われてるユイは、何とファンクラブなんかが

あるって噂だし。

あと、去年のライブが録音された音源は、誰かがＣＤ化して、口コミで販売されてるらしい。

その他、折り良くビデオカメラで録画してたヤツもいたみたいで、その映像は、ＤＶＤ化されてプレミアモノっつ～話だ。

ユイが言うには、去年はたまたま3年の先輩たちに誘われて出ただけで、元々バンド組んでたワケじゃないし、それに、今はもう、去年楽器を弾いてくれたメンバーは、みんな卒業していないから、今年のライブに出る理由はない、とのことだった。

学園祭ライブにユイが出場するの、実はオレも意外と期待してたんだけど、一番身近なオレが見る分に今回は有り得ないだろうな。

そんな学園祭ライブに、最近デビューしたてのヴィジュアル系ロックバンドも特別出演するらしい。

そいつらは何と、ウチの卒業生だって話だが、どこまでホントなのか分からない。

ま、オレには関係ないし、そんな事はど～でもい～が・・・・・。

そんなこんなで無事、武蔵ＶＳ野牛の全面戦争終了後の学校は問題なく終了。

思えば、長山たちだけじゃなく、貴船とタカノブの2人ともすれ違ったが、向こうはこっちに目線を合わす事もなかった。

竜崎や宮さんが隣にいたわけでもなく、オレ一人で歩いてたにもかかわらず、だ。

思いっきりオレの存在に向こうは気付いてるはずなのに、だ。

これは、カンパの件も無事解決し、さらにはタカノブとの遺恨も生まれなかったと判断して良いのでは?

タカノブと揉める＝貴船も出てきて、その後、芋づる式で中学の時のヤツらが登場して・・・みたいな最悪のシナリオも、オレの単なる被害妄想でしかないと判断して良いのでは?

・・・ま、ここは慎重に潜り抜けたい所だな。

どこでどう、中学の時のヤツらと絡むか分からんからな。

今、オレがもっとも恐れるのは、あの忌まわしき過去の再来。

思い出したくもない、生きるのが辛かった残酷な日々・・・・・。

これからは、長山たちも含め、貴船やタカノブと目を合わすのは避けて、極力近づかないようにしよう。

その日の晩、今の今まで心の片隅で、ずっとうやむやにしていた事を修復すべく、オレは勇気を振り絞ってテルへ電話をした。

あの日から、ずっと気になってた。

芒に校舎裏に呼び出された日、テルとの電話をオレが一方的に切った時から・・・。

いつもなら、確実にテルから抗議の電話があったはずだが、あの時電源を切ったせいもあってか、テルから電話が来ることはなかった。

もちろんオレの方から切ったのだから、あっちからしたら、「何で電話を切られたオレが、気を使ってオマエに電話をしなきゃなんねぇ～んだよ」ってのが本音だろう。

でも、オレはテルからの電話を期待してたんだ。

いつもアイツはオレには特に温厚だったし、何でも大目に見てくれたから。

でもでも、今回のテルは容赦なくオレを見限った。

タマゴから孵った雛が、初めて見たものを親と思うみたいなモンで、もしかしたらオレは、中学という凄惨な地獄から生還し、高校という新世界に突入した日に初めて対峙したテルと分かり合えたのをきっかけに、アイツを自分の親のような、１００％頼りきった目で見てたのかもしれない。

それくらいオレはテルに甘え、もたれかかってよりかかり、喧嘩の仲直りすらテル任せだったんだ。

だから、そんなテルに見切りをつけられたと思ったら、妙に心が空しくなった。

何度考えてもオレが悪いし、出来ることなら謝りたい。

でも、オレはアイツとは仲間でもありライバル同士でもあり、同レベルで同等なんだ。

そこんトコは誰が何と言おうが曲げる気はない。

上も下もないし、そう考えると謝る義理もない。

・・・だが、しかし、今、このチャンスを逃したら、もう後がないような気もする。

昨日の興奮冷めやまぬ今が好機・・・。

これを逃したら、お互い意地を張ったりして、このまま縁が切れてしまう。

今まで、そうやって友達を失くしてきた。

親友っていう、当たり前にあるものでいて、当たり前じゃないような気のする、かけがえのない存在を失いたくない・・・・・。

芒をぶっ潰したっていう朗報も交え、どさくさと勢いにまかせて・・・・、いや、昨日の大会の事は黙っていよう。

カンパの件は、これからは禁句だ。

もう、過ぎた事を穿(ほじく)り返すのはよそう・・・。

「もしもし、テル？　オレ、ジオン」

『オ～、ど～した？　元気か？』

テルの声は相変わらずで、オレは躊躇(ためら)う事なく笑顔になれた。

常にオレの先を行き、オレより一回(ひとまわ)り広い心を持つコイツを、オレは敬慕(けいぼ)する。

第１７１話　テルにＴＥＬ

前にテルが、オレの為に曲を作るって言ってたんだが、どうやらその曲が完成したらしい。

生憎、作詞担当のオレは、野牛と揉めたりしててそれどころじゃなかったし、すっかりそんな事忘れていたが、思えばあの時、そんな話をしてたっけ。

あれは確か、テルへのエールを、オレが熱く語った日だった・・・・・・・。

「よく聞けよ、テル。夢ってさ、見るモンじゃなくて、叶えるモンなんだ」

『見るものじゃなく、叶えるもの・・・か』

「必ず叶うのが、夢だ。遅かれ早かれ、必ず叶う。その志が弱いか強いかの違い。諦めるか、諦めないかの違い。運命は自分で切り開くもので、自ずから切り開かれるものではない。だから、待ってても青い鳥は飛んでこない。自分で思い描くもの、それが運命であり、自分の未来だと、オレは思う・・・・・」

『すげぇ～な、ジオン。何か、ゾクゾクするぞ』

「例えば、ネガティブな未来を想像し、毎日、先が見えないって怯えてたとしよう。すると、確実に真っ暗な明日がやってくる。夢は必ず叶うんだ。どうせ描くなら、ポジティブな明るい未来を描こうゼ・・・」

『ポジティブな未来・・・か』

「目的地ってあるか？　みんな、目的地を定めてないんだ。だから未来が、先行きが不安なんだよ。東京に行きたいって願ったから、オマエは東京に行けたよな？　バス時間、電車の時間、はたまたどこの駅でどこのホームでってさ。人生も同じだよな。行き先が分からない電車に乗ったら、不安にならない人はいないよ。ミュージシャンっていう、しっかりした目的地を定めろよ。そしたら、後は勝手に電車はススミダス」

『ジオン・・・・オマエ凄いな。哲学者になれるぞ。作詞家ってのもアリかもな。ジオンの話聞いて、目が覚めたよ。オレ、必ず、ミュージシャンになっからよ。オレが作った歌引っさげて、オマエがいるうちに、必ず学校でライブやってやるよ!!』

「叶うよ、絶対。オレが保障する。だって、それはオレの夢でもあるからな・・・」

『ありがとう、ジオン・・・』

「あたぼーよ」

『なぁ、ジオン、オマエには、自分の夢はねぇ～のかよ』

「あ、あるよ・・・」

『言ってみろよ。人にさんざん言わせておいて、自分は言わないってのはナシだゼ』

「スキな、女がいる」

『クラスにか？』

「そうだ」

『オレが知ってるヤツか？』

「・・・・・・・・・ああ」

『そうか。言いにくかったら、言わなくてい～よ。オマエの夢だ。誰にも否定されたくないって気持ちはよく分かる。そのコに、告白するのか？』

「・・・・・・」

『諦めんなよ。オレも諦めねぇ～から、オマエも諦めんなよ！！』

「ああ。当然だ」

『自信はあるのか？』

「余裕！！」

『ふっ・・・。頑張れよ、ジオン。そうだ、オマエのそのコに対する今の気持ちを紙に書いて、オレの所に送れ。曲作って売り込むから。オレとオマエの合作だ。売れたら作詞料、ガッポリ入るぞぉ～！！』

「ははは。金なんかいらねぇ～けど、オマエと合作ってのはアリだな。気が向いたら送ってみるわ」

『待ってるゾ！！　じゃ～な、元気でな、ジオン』

「オマエもな、テル・・・」

・・・・・確かに気が向いたら送るって言ったけど、まさかこんなに早くに曲が完成するとは思っていなかった。

テルは早急に歌詞を送れなんて言うけれど、そう簡単に出来っこない。

「テル、せっかくオマエが曲作ったんだから、そのままノリで作詞もやっちゃえよ。そんでソロで学園祭ライブに出ればい～だろ」

『学園祭？　だからその日はバイトが入ってるから無理だって言ってんだろ』

話によるとテルは最近、楽器屋でバイトを始めたらしいが、オレら

の夏休みに合わせてバイトを休み、1週間の予定でこっちに帰郷(ききょう)するらしい。

2、3日前買った中古のバイクを愉しむ趣旨も含め、高速を使わずにゆっくり来るそうだ。

こっちに滞在する1週間のうち、オレの家に2、3泊し、残りはオッキーの家に泊まる計画だ。

実家に顔くらい出せって言ってやったが、成功するまで親に顔向け出来ねぇ～だのとカッコつけやがる。

「夏休みじゃなく、学園祭の日来いよ。久々にみんなに会いてぇ～だろ？　みんなテルなら大歓迎だし、オレの仲間の竜崎や宮さんにもテルを紹介したいしさ。うちの出し物、今年金魚すくいなんだよ。だから目玉が欲し～んだ。テル、マジで来いよ、学園祭」

面白くなってきたぞ！　もしテルが来れるなら、ウチのクラスのヤツらにとって、去年の餓龍氏並のサプライズだ！！

第172話　ラストメッセージ

「みんなに会えるのって、その日しかねぇ～し、ライブにテルが出たら超盛り上がるって！」

『じゃ～、楽器出来るヤツ集めとけ。ギターはジオンに任せるし、ベースとヴォーカルはオレがやる。ドラムはオッキーがやりゃ～い～か？』

「凄ぇ～ぞ、それ！　もう、夢が叶うってか？！　思えばオレら、1年の頃からバンドやんの夢だったモンな」

『・・・・・・・・バーカ、冗談だよ』

「・・・っざけんなよ！　期待させといて冗談はねぇ～だろテル！！」

『バカ、ベース弾きながら歌うのって大変なんだぞ！』

「どうして」

『重いから』

「そんなの理由になるか！」

『耳かっぽじって良く聞け！　あのな～、ぶっつけ本番で演奏が出来るほど、オレの曲はチャラじゃねぇ～んだよっ！！』

「・・・・・・・わ、悪ぃ～、つい、夢が広がっちまって」

『秋だっけ？　確か、秋にもライブあるだろ？！』

「確か、軽音楽部が主催するミニライブだよな」

『それに出ようゼ』

「マジか？」

『ああ、マジだ。夏休み、オッキーの家でみっちり教えてやっから、それから秋までたっぷり練習すれば、本番の前日に音合わせして、何とかイケると思うんだ』

あっと言う間にビジョンが出来上がった。

流石、本家Ｏ型、行動派のテルだ。

オッキーの家には機材やら楽器やらしっかりそろってるし、作詞も作曲も音合わせも問題なく出来る。

さらに・・・。

『ジオン、オマエにギターやるよ。オマエ前から欲しがってたギブソン』

「へ？　なぜに」

『バイト先の先輩から貰ったんだよ』

「作曲で使えよ」

『オレは元々ベースが基本だし、ギターはアコースティック持ってるから路上ライブではそいつがあれば他はいらねぇ～んだ。曲は主にＰＣで作るしな』

「凄ぇ～、凄ぇ～よテル。オマエ、マジ凄ぇ～よ！！」

オレは中学1年の時、親にダダをこねてギターを買ってもらった。

オレの場合、ミュージック番組なんかで見るロックバンドに憧れて、ギターをただ弾いてみたいと思ったのが購入のきっかけだったが、テルは違った。

テルは、オレの家にあったストラトを、オレの見よう見まねで弾き鳴らして、自分で出した音に感激し、バンドをやるぞ、となってベースを購入したのだ。

しかし、オレが鼻をほじってる間に、テルはメキメキと上達してしまい、いつしか技術面で大差。

さらにテルは、作詞作曲まで手掛けるようになり、上京して本格的にミュージシャンを目指すまでに飛躍してしまったのだ。

要するに、きっかけはオレでもあるのだが、今ではもう、雲の上の

存在だ。

嫉妬はあるが、それ以上に尊敬の念が勝る。

そんなテルの方から、お遊びではあるものの、オレたちとバンドを組みたいと言ってくるなんて、こんな有り難い話はない。

やるからには猛特訓でも何でもして、何としてもテルに恥をかかせないようにしなければならない。

「テル、どうして今回の曲、作詞しねぇ～んだ？　オマエ得意だろ、背中痒くなる、クサ～イの書くの。ホラ、オマエの上京の理由の一つ、愛の唄を歌うってやつ？　子供の頃からの夢なんだろ？　せっかくなんだからコテコテの愛の唄でも歌えよ」

『愛を軽々しく使いたくない。オレは今、愛に変わる言葉を探してる』

「はあ？」

『巷では愛が乱用され過ぎてる。つまり、愛という言葉を業界の輩は使い過ぎなんだ。事務所の儲けの為、ミュージシャンたちの私利私欲の為に、売れ線の唄を歌うのは当然の摂理なんだろうけど、お陰で今の若者たちは、みんな愛の深さも知らねぇ～し、愛の本当の意味も分かっちゃいねぇ～クセに、易々と愛を語りやがる。愛っていうのは、与えるものでも与えられるものでもないような気がするし、上手く言えねぇ～けど、軽々しく使いたくねぇ～んだよ、オレは』

プロじゃねぇ～のに、立派なプロ意識持ってやがる。

こ～いうヤツが大物にならなきゃ、世の中嘘だ！

愛・・・・・。

そんな言葉の意味なんて、考えた事もなかった。

恋より深い意味、程度にしか思ってなかった。

思えば愛って、何なんだ？

「テル、オマエはどうしてミュージシャンになろうと思ったんだ？　地位か名誉か名声か？　誰かに認められたかったのか？　それとも、金か？！」

『オレが欲しいのは金じゃない。・・・・愛なんだ』

「オレも世の中金じゃないとは思いたいが、そうも言ってらんねぇ～だろ。結局、金が人生を左右するんじゃねぇ～のかなぁ～って、たまに思うんだけど。ぶっちゃけ、そうは思わねぇ～か？」

『金のために働くヤツはクソだ。金のために夢を追い掛けるヤツは、もっとクソだと思ってる』

「そんなセリフを吐けたらカッコイイとは思うけどさ、現実問題、常識的にもさ、大人になったらせっせと働いて金を稼がないと生き

ていけねぇ～し・・・」

『だからって金のために一生、生きるのか？　仕事って、自分がやりたいモンを見つけて働くモンなんじゃねぇ～の？　そうじゃなきゃ毎日辛くね～？　サラリーマンとかって、同じ職場でも人によって報酬が違うんだろ？　だったら尚更、金の為に生きてたら辛くね～？　報酬が人により違うのは、人は金の為に生まれてきたワケじゃねぇ～っつ～証拠だろ。もし金がこの世の全てなら、どうして金を握り締めて生まれてこねぇ～んだ？』

「返す言葉ねぇ～な・・・」

『人ってよ～、いつ死ぬか分かんねぇ～だろ？　急性何たらって病名付けたりするけどよ、急性って何だよ、急性って。いつ死ぬか分かんねぇ～のに、死ぬ時握り締めてねぇ～モンに命削って、面白ぇ～のか？』

「でもよ～テル。オマエ言ってる事、間違ってねぇ～けど、みんなこう言うと思うゼ。・・・・尖(とが)ってて、世間知らずの青二才だってな・・・、はははは」

『欲しいのは将来の保障か？　安定か？　そんなモンどこの世界にあんだよ？　そんなの求めて生きてたら、一生成功出来ねぇ～ぞ。いつか、やってやる？　いつかって、いつだよ？　やるなら後にも先にも今しかねぇ～だろ！　命が大事？　そんな生易しい生き方してっから、みんな死んだ目してんだよ！　成功してるヤツはみんな、命懸けで生きてんだよ。全部失う覚悟で生きてんだよ。最初から最後までな』

「ムチャクチャやる気があっても、何をしていいのか分かんねぇ～

ヤツはどうすりゃい～んだ？」

『自分がワクワクする事って何だ？　楽しい事って何だ？　そんなの自分にしか分かんねぇ～だろ。カッコつけてねぇ～で、自分に嘘付くのやめて、素直になりゃ～そのうち気付くんじゃねぇ～の？　あとは自分だけの道を見つけたら、ひたすら歩くだけだ。そんで、時には虎視眈々（こしたんたん）とチャンスを狙い、時には激しく猪突猛進（ちょとつもうしん）だ』

「テル、やっぱオマエ、凄ぇ～ゼ」

『ははは、前回はオマエにやられたから、今回はお返しだ。ジオン、忘れんなよ、オレらは日本人の年収の１０倍のダイヤモンドなんかより、貴重で大事なモンを持ってるんだ』

「貴重で・・・、大事なモン？」

『そうだ、それがハートってヤツだ。情熱でコイツを真っ赤に燃やすんだ。そいつをオレは愛と呼ぶ』

「テル・・・・・」

『少なくとも、オレらが持ってるそいつを、今の気持ちを、いつまでも失くしたくねぇ～よな、どんなに年をとっても』

「・・・・・失くすモンか」

『オマエらの学園祭の次の日か？　夏休みの初日になるのかな？　おそらく夜までには着くとは思うんだ。着いたらケータイに電話す

るゼ』

「バイクで来るんだろ？　気を付けろよな」

『じゃ～な・・・』

「ああ・・・・・」

これが、テルと交わした最後の言葉だった。

第172話　ラストメッセージ（後書き）

第1章　おわり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9920i/

ギリギリ爆発　－血液型マニュアル男のヤンキー伝記－

2011年7月8日19時13分発行